琉球大学学術リポジトリ

清代福州柔遠駅における文人交流：康熙年間、陳元輔を起点として

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2020-05-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Ji, Longfei
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002012354

序章

第一節　研究意義と方法

明の洪武帝5年（1372）に琉球は正式に中国の藩属となり積極的に中華文化を受容している。渡唐する使節や留学生にとって、中国知識人との交流において詩を吟詠することを教養として身につけることが必須となっていた。中国には「独学而無友即孤陋而寡聞（独学にして友無ければ、則ち孤陋にして寡聞なり）」という諺がある。文学を修業する官生や勤学生においても、中国の知識人に認めてもらうには、或いは文人としての素養を高めたければ、数多くのレベルの高い漢詩を作り、現地知識人との交流を深める必要があった。明清時代中国において琉球文人は留学生である官生、勤学が主であった。琉球王国は洪武25年（1392）から中国へ留学生を派遣し始めて同治7年（1868）まで約500年の間に96名の官生を遣わしている。官生はいわゆる中山王府によって公的な機関を通して派遣した中国の承認を受けた国費留学生である。明代において官生を南京国子監、清代においては北京の国子監に就学させた。官生は留学中、費用、宿舎、衣服、医療などをすべて中国政府が負担した。ただ負担しているのみならず中華帝国が藩属を懐柔する心を示すために手厚い待遇を与えた。中国に正規留学生として認められた官生に関する資料は多い。概ねに挙げれば『歴代宝案』、『球陽』、『中山世譜』、『那覇市史家譜資料』、『明実録』、『南雍志』、『清実録』、『清代中国琉球関係档案選編（1－7）』、『琉球入学見聞録』、『琉球入太学始末』などがある。琉球官生の漢詩研究においては上里賢一の先行研究が傑出している[1]。

官生に対してもう一つ形式の留学生である「勤学」が多く派遣されている。官生と異なって、勤学は福州柔遠駅を拠点として儒学、中国古典文学を学ぶのみならず、医術、暦法、風水、書画、音楽、戯曲、冊封礼儀、制糖、制茶なども学んでいる。勤学は進貢の際に4名、接貢の際に8名を選抜して福州に派遣されていることから、ほぼ毎年、4名か8名の勤学生が福州に来ることになる。勤学の人数は膨大である。その膨大の人数の中から琉球王国に貢献をした人才も輩出していた。従来の歴史文献資料では、勤学が福州で留学期間にどのような学習生活を過ごしたのか、地元の知識人とどのように交流していたかよくわかっていない。数年間の留学生活は家譜資料にも往々にして簡略に「為読書習禮事（読書習礼の事の為）」と概括されている。

琉球人が福州留学していた際の資料として、歴史関係文献資料の残存情況と比較すると、文学資料の保存状況は比較的よい情況にあるといってもいいだろう。程順則によって編纂された『中山詩文集』は、康熙年間の琉球人の漢詩文選集として知られているが、その中には琉球人の詩文を収録するのみならず、中国側の知識人の詩文も多く収録されている。特に福建文人の詩文が大きな割合を占めており、その中でも、康熙年間の勤学の師匠であった陳元輔が際立っている。『中山詩文集』には彼の詩一首、序文、跋文合計6篇を収録しており、他の資料にもまた「程大母恭人傳」[2]「徵詩送別引」[3]「指南廣義序」[4]などの琉球人に関わる文章が見られる。

---

[1] 上里賢一「琉球官生の漢詩」『第二回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県立図書館、1995年3月、「琉球官生毛世輝の漢詩について」『第五届中琉歴史関係学術会議論文集』福建教育出版社、1996年7月、「孫衣言と琉球官生」『第六届中琉歴史関係学術研討会』中国第一歴史档案館、2000年3月、「詩文から見る林世功の行動と精神」『日本東洋文化論集』第6号、琉球大学法文学部、2000年3月。

[2]『名護親方程順則資料集・１・人物・伝記編』名護市史叢書11、2005年、121頁。

[3]『那覇市史』資料編第一巻六「家譜資料二」、那覇市企画部市史編集室、1980年、556頁。

[4]程順則輯『指南廣義序』（『伝世漢文琉球文献輯稿』第1輯 第22册収録、鷺江出版社、 2012、433頁）

その他にも、陳元輔の作品として『枕山楼詩集』、『枕山楼文集』、『枕山楼課児詩話』、『枕山楼茶略』が後世に伝わっている。勤学師匠の資料の中で、陳元輔のものは最も豊富に残されているといってもいいだろう。陳元輔の『枕山楼詩集』は、121 題 179 首の詩を収録しており、その中に琉球人に関わる詩作が 27 題 38 首含まれている。また『枕山楼文集』の 16 篇の文章には、琉球人に関する文章が 5 篇ある。以上のことから、福州において陳元輔が琉球人と深い関わりを有していたことが理解できよう。

『中山詩文集』の序文の一つは王登瀛によって著わされている。王登瀛もまた康熙年間における勤学の師匠の一人である。彼の著した『柳軒詩草』には詩が 32 首収録されているが、その中の 16 首は琉球人に関わる詩作である。後に、王登瀛も蔡文溥の『四本堂詩文集』に序文を寄せている。この二人以外にも、『中山詩文集』、『枕山楼詩集』、『柳軒詩草』をみると、林潭、竺天植といった人物等が柔遠駅（福州琉球館）に頻繁に出入りし琉球人と交流があったことが分かる。林潭は程順則とも親しい関係にあったと思われる。程順則は陳元輔の『枕山楼詩集』を刊行するにあたり、林潭に序文を書くように依頼している。林潭の『晩香園梅詩』もまた程順則によって残された作品の一つである。竺天植もまた勤学の師匠の一人である。『中山詩文集』には、彼が登場する詩が二点収録されている。勤学の周新命は福州留学期に竺天植に師事している。周新命の『翠雲楼詩箋』、程氏本『六論衍義』にも竺天植の序文が残されており、この四人は康熙年間に柔遠駅に出入りし琉球人との交流が深かった人物であることがわかる。

これらの文学資料の中には、琉球・中国の知識人の交流、そして詩の唱和を記すものが多くある。上里賢一氏は琉球、中国の文人の唱和に関する漢詩の重要さについて「厳密な意味での琉球漢詩文の範疇には入れにくいが、中国から渡来した冊封使やその従客、日本本土からやってきた学者や詩人たちの作品も琉球漢詩を分析し、その全体像を描くうえでは貴重な資料である[1]」と述べている。要するにこれらの漢詩作品は単にそれ独自の文学的価値ばかりでなく、琉球漢詩の全体象を把握するうえで重要な価値を備えていると言える。

従来の琉球漢詩については、琉球王国時代に琉球人が古文体をもって詠んだ詩歌として定義できよう[2]。現在、見られる琉球漢詩はほとんど清代に作られたものである。本論稿では筆者は定義を広げ、琉球人に限らず、中国人、ベトナム人、朝鮮人を含めて琉球の情景、琉球の人物に関わる漢詩は全て琉球漢詩の範疇に含めたい。私たちは、そうした広がりをもつ琉球漢詩を通して様々な歴史の諸相を見極めることができる。

琉球漢詩については、その作者を中心に考えると以下の四つに区分することができよう。

一、琉球官生の漢詩

二、琉球勤学人の漢詩

三、明、清の中国知識人、冊封使節の琉球に関わる漢詩

四、琉球国内の文人（官生・勤学人以外）の漢詩

本論稿で取り扱う人物は、康熙年間、琉球と中国の交流の舞台で活躍していた人々である。その中から琉球官生の代表蔡文溥、琉球勤学の代表程順則、中国知識人の代表陳元輔、王登瀛、琉球国内の文人代表蔡鐸、蔡応瑞などを中心に取りあげた。これらの人物の中心にいたのが陳元輔である。康熙年間に福州柔遠駅を舞台に中国と琉球の文人同士の交流が展開していく。彼らの交流の実態を見れば

---

[1] 『日本文学史』第 15 巻「琉球・沖縄の文学」、岩波書店、1996 年 5 月、130 頁。

[2] 黄裔「琉球漢詩七探」（『第 17 回中琉歴史関係国際学術会議論文集』、福建師範大学閩台研究センター、2017 年 11 月）。

上にあげた四つの琉球漢詩の分野に全部触れるとことができる。陳元輔については、清代福州の人物で程順則などの琉球勤学人の師匠であることは知られているが、上述したように、歴史文献史料が限られ、先行研究において陳元輔の人生履歴に関してはほとんど研究がなされていない。しかし、陳元輔に関わる文学資料を通じて、陳元輔の軌跡を描くことは可能である。本稿では、そうした文学資料を駆使して、『清史稿』、『福建通志』などを含む中国の地方志、清代歴史筆記資料に関する資料も参考にしながら彼の生涯を検討することにする。これまでの先行研究[1]を踏まえ、陳元輔の作品についても考察してみたい。

陳元輔の略歴を明らかにしたうえで、『枕山樓詩集』、『枕山樓文集』、『中山詩文集』、『柔遠驛草』を通して、中国琉球の文人同士の交流の様子を窺うことで、当時、勤学として福州に滞在した琉球人と中国人との交流の一側面について明らかにしていきたい。さらに陳元輔の弟子であり知己である程順則との関係を含む琉球友人との交流、及び程順則の中国における交遊関係などを見てみる。また福州で琉球人と密接に交遊した中国人は、陳元輔の他に竺天植、林潭らがいる。陳元輔と程順則を中心にしつつ、この二人と周辺の人々をも視野に入れて、琉球人と福州人の交流の諸相を解明することにする。

第二節　清初期（順治、康熙）福州における文人交流の背景について

第一項　歴史背景

1644 年は中国では天地がひっくり返るような変化が起こった。3 月 19 日、李自成の農民軍は北京を攻め落とし、崇禎帝は紫禁城の煤山で自縊した[2]。5 月 3 日、山海関総兵呉三桂は清の摂政王多爾袞軍を北京に引き入れて[3]、清朝を迎えた。清は北京を都として定めたが同時に長江以南の南京では、5 月 15 日、福王朱由崧が皇帝位に即いて弘光と号した[4]。弘光以後、相ついで隆武、魯王、永暦及び鄭氏集団などの政権が中国の東南地域に樹立された。史上、この時期（1644-1661）を「南明」と称する。南明は天下の半分にも及ばない土地を支配しているにすぎなかったにもかかわらず、琉球は依然として中国の正朝とみなしていた。弘光、隆武の時期において南明政権は琉球に使節を遣わして、敕諭を下賜した。順治 3 年（1646）9 月、清の征南大将軍博洛が福州を攻め落として、隆武政権は崩れた。この時、琉球世子尚賢は唐王の即位を慶賀するために使者などを遣わしており、まだ 50 人余の琉球人が福州に在留していた。王舅毛允泰、長使金思議などは明の天運はすでに尽きたことを知り、博洛に従って北京に行って清に投降しようとした[5]。順治 4 年（1647）7 月、琉球王舅一行は北京に到着した。順治帝は「格外優恤、賜宴、賜袍、賜靴」をし、さらに礼部からは敕書が下賜された。敕

---

[1] 上里賢一の「陳元輔の漢詩と琉球―『枕山楼詩集』を中心にして―」『歴代宝案研究』第 10 号沖縄教育委員会、1999 年 3 月、「王登瀛『柔遠駅草』と琉球」『第六回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄教育委員会、2002 年 10 月、平良妙子の「来琉冊封使の旅程と作品―清代の詩文を中心に」『琉球アジア文化研究』第 14 号琉球アジア研究会、2004 年 11 月、童宏民の博論「冊封使徐葆光の眼光―『奉使琉球詩』の分析を中心に」（琉球大学 2014）などがある。ここ数年、中国の研究者も琉球漢詩に注目し、これに関連する研究成果を出している。夏敏の『明清中国与琉球文学関係考』（2017）、修士論文において劉畅「琉球漢詩史略」（上海師範大学 2016）、任燕涛「琉球詩録研究」（中国海洋大学 2015）などである。

[2] 張廷玉等纂『明史』巻 309 列伝第 197 第 28 冊、中華書局、1974 年、7965 頁。

[3] 同上書、7967 頁。

[4] 張廷玉等纂『明史』巻 120 列伝第 8 第 12 冊、中華書局、1974 年、3651 頁。

[5] 蔡鐸等編『中山世譜』巻 8（伊波普猷編『琉球史料叢書』収録、東京美術出版、1972 年、116 頁、117 頁）

書には「朕撫定中原、視天下為一家。念爾琉球自古以來、世世臣事中國、遣使朝貢、業有往例。今故遣人敕諭爾國、若能順天循理、可將故明所給封誥印敕、遣使送來京、朕照舊例封錫（朕中原を撫定し、天下を視て一家と為す。念うに爾琉球は古自り以來、世世中國に臣事し、使を遣わして朝貢して、業に往例有り。今故に人を遣わして爾の國を敕諭す。若し能く天に順い理循えば、故明の給する所の封誥印敕を將って、使を遣わして送りて來京すれば、朕舊例に照して封錫すべし）」と記されていた[1]。また、通事謝必振を招撫史に任命して一緒に順治帝の敕諭を琉球に告げた。これは琉球側の初めての清朝廷との接触である。清が南明の勢力を追い払うにつれて、琉球・福州間の船の往来は穏やかになった。清朝との接触も徐々に緊密になってきた。順治 10 年 2 月、王舅馬宗毅の慶賀使団は中国に進貢し表文を呈上する以外に、明から賜った敕書や印を清廷に返納している。順治 11 年 7 月 1 日、順治帝は琉球尚質を中山王に冊封する詔書と「鍍金駝鈕銀印」を琉球に下賜した。これは琉球が正式に清の藩属となったことの象徴である。政府間の交渉は整然と進められた。

一方、福州に滞在する琉球の知識人と福州の文人との接触、いわゆる文人交流はどうだったのだろうか。当時、文人同士の間では、贈答唱和などの文学的な交流活動がみられる。この活動は個人的な交際の上で文学の切磋琢磨を伴うもので、さらに友情、相手への敬意を深めるという特徴がある。漢詩は文人交流から生み出される最も重要な産物である。

明代において、中国と琉球の文人交流は、明代の冊封使録に断片的な記録があるだけであり、琉球側の資料は極めて少ない。中国側の記録からもまったくその姿は見えてこない。清に入ってその状況はかなり改善されており、冊封使節、及びその従客は、資料が多く残されている。また清代民間の知識人の詩集、琉球側の詩集も豊富である。冊封使及びその従客については、周煌の『海山存稿』、王楫の『観海集』、林麟焻『星槎草』、『中山竹枝詞』、徐葆光の『奉使琉球詩』、王文治の『海天遊草』、趙文楷の『槎上存稿』、李鼎元の『師竹斎詩集』、齊鯤の『東瀛游草』などがある。民間では陳元輔の『枕山楼詩集』、王登瀛の『柔遠駅草』、琉球側の『中山詩文集』、蔡文溥の『四本堂詩文集』などがある。これらの詩集は『国家図書館蔵琉球資料三編』に収録されている。上里賢一氏によると、13 世紀中葉から 15 世紀にかけての時期、琉球において漢学が起こったという[2]。その時の漢学が琉球で一体どのように展開していったのかは資料的制約からよくわからないが、清初に至って漢学は突如として隆盛しており、漢学発展の頂点に至ったと筆者は考えている。もし、頂点となる時期と低調な時期の間に明らかな境界を定めるとしたら、筆者は陳元輔が琉球人の師となる年を選択したい。すなわち康熙 23 年（1684）である。民間の中国琉球文人交流において、康熙 23 年を境界としてこれより前は非常に低調であった。康熙 23 年以前に、琉球文人と中国文人との交流に関する資料はすくないがまったくないとは言えない。

清が天下を取った初めの頃、中国の南方では明の宗室の南明政権が清と対抗していた。福建地域はまさしく清と対抗する中心地域となっていた。「嘉定三屠」、「揚州十日」のある残酷な抗清戦争があった江南地域は、福建をはじめとする中国の東南地域より早くに安定して生産活動が回復している。福建省では康熙 2 年まで金門、厦門を占有している鄭氏との戦争が続いていた。戦争に天災が加わり、福建省の米価は康熙 5 年まで激しく騰貴していた。康熙 12 年には、三藩の乱が勃発して中国の東南は戦場となっている。そして、台湾の鄭氏勢力を平定するために福建は再び戦場の前線となっている。以下の表は福建省における大きな政治事件、戦争、天災、米価などの情報を纏めたものである。陳元輔はどういった社会環境の中に生まれて成長していたか、林潭、竺天植、王逸などの明の遺民は明清

[1]『清実録聖祖仁皇帝実録』巻 32 第 4 冊、中華書局出版社、1985 年 、262 頁。
[2]『日本文学史』第 15 巻「琉球・沖縄文学」、岩波書店、1996 年、121 頁。

交代の時期にどんな状況下で、どのような境遇にあったのかを明らかにしたい。

清初福建大事年表（1644－1674）

年号	大事件
順治元年（1644）	5 月 21 日、北京は陥落し崇禎帝の殉国の消息が福州に伝わった[1]。
順治二年（1645）	6 月南京の陥落、弘光政権が潰れた情報が福建に伝わった。閏六月、唐王は福建に入り、当月 27 日皇帝位に即いて隆武と改めた[2]。
順治三年（1646）	8 月、鄭芝龍は仙霞關を開き、清に投降する。8 月 18 日隆武帝は汀州にて殺された[3]。9 月 18 日、福州は陥落し清兵入城。剃髪令が下った[4]。 同年、朱由榔は広東省の肇慶で監国を称し、11 月皇帝位に即いて永暦と改めた[5]。
順治四年（1647）	正月、清代、初代の福建巡撫張存仁が赴任して来た。3 月、沿海の住民を信じられないとの理由で張存仁の令で海口鎮等を屠殺する。三月、四月、五月大雨が続き、福州で洪水が起こって全省で不作になる[6]。 永安、徳化、建陽、南安、将楽、大田、沙県、順昌、永春、尤溪で農民軍が県城を攻め落とした[7]。（榕城紀聞によると「義師起、八郡同日發。福州城中約舉火相應、至期燒鰲峰狀元亭。時天色已亮、遂潰于金雞山」とある）福州城では起義があったようである[8]。 福州で飢饉があって人が相い食う。米価は小斗で 6 銭となる（つまり一石 5 両）[9]。
順治 5 年（1648）	二月、南明の鄭彩、王祁は軍を率いて 3 か月続けて福州を包囲していた。5 月、失敗して退却した[10]。 戊子の兵火で柔遠駅は大きな破壊を受けた[11]。 疫病がはやって福州城内、城外の住民の半分が死亡する（城外雖未乏實、死大過半、與城中等）。米価は一斗七錢（つまり一石 7 両）[12]。 農民軍は漳平、惠安、寧洋、安溪、龍岩、平和を攻め落とした[13]。

[1] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編、『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、3 頁）
[2]同上書、4 頁）
[3]清・徐鼎『小腆紀年』巻 13、中華書局、1957 年 5 月、492 頁。
[4] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編、『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、5 頁）
[5] 張廷玉等纂『明史』巻 120 列伝第 8 第 12 冊、中華書局、1974 年、3653 頁。
[6] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、6 頁）
[7] 朱維幹『福建史稿』、福建教育出版社、1986 年 3 月、307 頁。
[8]海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、6 頁）
[9] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、7 頁）
[10]朱維幹『福建史稿』、福建教育出版社、1986 年 3 月、304 頁。
[11]沖縄県立図書館史料編集室『校訂本歴代宝案』第一冊、那覇教育委員会、ひるぎ社、1992 年 1 月、464 頁。
[12] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、7 頁、8 頁）
[13] 朱維幹『福建史稿』、福建教育出版社、1986 年 3 月、308 頁。

順治 6 年（1649）	福州の包囲を解かれ、米価が少し下がった[1]。
順治 7 年（1650）	
順治 8 年（1651）	鄭成功軍は澄海県を占領して漳州府城を包囲している[2]。
順治 9 年（1652）	福建總督陳錦は数万兵馬を率いて鄭成功軍と角尾所で交戦して敗北した[3]。
順治 10 年（1653）	6 月固山額真・金礪は満州兵を率いて澄海で交戦して敗北した[4]。
順治 11 年（1654）	3 月、莆田県で飢饉があって城内半分死亡。冬、鄭氏軍、漳州、仙遊を包囲して漳州城を略奪する[5]。
順治 12 年（1655）	5 月、福州、興化、漳州、泉州では飢饉があった。福州城に毎日数千の難民が来ている。10 月純親王世子濟度は満州兵三万に福州の南門、水部、東門の郊外で駐屯して民家を巻き上げることが多く、その後は軍を率いて金門、厦門あたりで交戦してまた敗北した[6]。（この年陳元輔は生まれた）
順治 13 年（1656）	7 月 18 日、鄭氏は閩安鎮で敗れて 19 日、鼓山、東北あたりの村を略奪し鼓山から閩安鎮のあたりは大破壊された[7]。
順治 14 年（1657）	固山郎名賽は福州に駐屯に来て多く民家を徴発し満州営を作った。八旗兵の一人当たりに月米 70 斗、銀 10 両を徴発して民の負担は大変であった[8]。
順治 15 年（1658）	
順治 16 年（1659）	6 月、鄭氏軍が南京に至る消息が福州に伝わった。福州城で戒厳をする。8 月鄭成功軍の南京攻略が失敗した。清軍は厦門攻略をする予定をたてた[9]。 福州府は戦備のため予め三年分の兵糧を徴発する。また一両銀で 600 斤の糧食を強いて買うなど百姓が苦しんで妻や子供を売ったりする[10]。
順治 17 年（1660）	5 月清軍は鄭氏軍に敗北した。
順治 18 年（1661）	7 月、靖南王耿繼茂は福州に来て多く人夫、牛馬、船を徴発する。民家を壊して王府を建てる。王府の建設はおよそ三年続いていた。靖南王が福州に移ったから米一斗 8 分、肉一斤 7 分、油一斤半 1 銭 1 分。物価はすべて数倍になって、船、人夫を徴発された。靖南王がすべての商売を独占しているからである「自靖南王兵至后、米一斗銀八分、肉一斤七分、油一斤半一錢一分、百色貨物皆倍貴、船取盡、買賣做盡、人夫用盡故也」[11]。 福建、広東、浙江、江蘇の沿海の住民を内陸 30 里に遷させる令を下した[12]。蒲

[1] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、8 頁。
[2] 同上書、8 頁。
[3] 朱維幹『福建史稿』、福建教育出版社、1986 年 3 月、333 頁。
[4]同上書、334 頁。
[5] 陳鴻、陳邦賢『清初莆変小乗』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版 1980 年 8 月、76 頁）
[6] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、9 頁、10 頁）朱維幹『福建史稿』福建教育出版社、1986 年 3 月、334 頁。
[7]同上書、10 頁。
[8]同上書、11 頁。
[9]同上書、12 頁。
[10] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、13 頁）
[11] 同上書、19 頁、20 頁、26 頁。
[12] 海外散人『榕城記聞』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年

	田では内陸 20 里へ遷させて境界を越えた者を殺した[1]。 12 月、鄭成功は軍を率いて台湾を回復した[2]。
康熙元年（1662）	6 月 22 日鄭成功が逝去した[3]。
康熙 2 年（1663）	10 月、耿繼茂、李率泰、馬得功、軍を率いて厦門を攻略し、鄭経は敗北して台湾に移った[4]。
康熙 3 年（1664）	春、干害に 6 月 7 月洪水が加わった。米価一石一両。8 月 2 日、福州城で火災が起こって靖南王府及び周囲 20 里の民家を焼失した。また人夫を徴用して数十万銀を費やしてさらに豪華な王府を再建した。8 月 5 日漳州、泉州で水災氾濫[5]。
康熙 4 年（1665）	
康熙 5 年（1666）	豊作年、長泰県で米価一斗 20 文、康熙 6 年にも大豊作年、糧食が十年食べれるようになった[6]。
康熙 6 年（1667）	仙遊県で豊作年、秋の穀物一両銀で 8 石を買える[7]。
康熙 13 年（1674）	3 月 15 日福州、耿精忠が清に反逆し、百姓に辮髪を切って明の服装に回復するという令が下った[8]。

1645 年、豫親王多鐸は長江を渡り、5 月 15 日、弘光は南京より逃亡して銭謙益が開門して投降した。よって南明弘光政権は潰れ、6 月、鎮江総兵鄭鴻逵は唐王朱聿健を奉じて福州で皇帝位に即いて元号を隆武とした。福建は明末清初における抗清戦争の主なる戦場となっている。清が中国の天下を取ってから康熙 23 年まで約 40 年間、東南地域において断続的に戦争が続いていた。順治二年から王朝交替の戦争は、福建省が主戦場となってきた。順治 3 年、鄭芝龍は清に投降し、博洛は清軍を率いてほぼ不戦で福州府、興化、泉州、漳州などの府を攻め落とした。しかし、鄭芝龍に従わずに鄭成功は軍を率いて金門島、厦門を基地として抗清闘争を継続した。一方、江西省の南明軍勢力も福建省に挺進し、清の「剃髪易服」などの高圧政策によって農民の武装蜂起を引き起こした。唐王朱聿健の後、朱由榔は肇慶で帝を称して、南明勢力は朱由榔を主君と奉じて清と戦っていた。

本論稿で取り上げる「王逸」、「林潭」、「竺天植」など、琉球人の師匠あるいは琉球人と関係の深い人物は、明代に生まれて青年の時、明清交替の大動乱、大変革を経て生き残った人々である。陳元輔、王登瀛らはこの乱世の中で勉学しながら成長していった。

長年の戦争によって福建省の農業生産は大きく破壊されており、直接に福建の米価に影響を与えていた。米価は供給関係にもかかわっている。福州府への米の供給について鄭光策の『閩領政要』にて以下ように述べられている。

---

8 月、22 頁）

[1] 陳鴻、陳邦賢『清初莆変小乗』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版 1980 年 8 月、80 頁）

[2] 朱維幹『福建史稿』、福建教育出版社、1986 年 3 月、375 頁。

[3] 同上書、375 頁。

[4] 陳鴻、陳邦賢『清初莆変小乗』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版、1980 年 8 月、82 頁）

[5]同上書、82 頁。

[6] 乾隆『長泰県志』巻 12「雑志」、 成文出版社、1968 年 3 月、208 頁。

[7] 乾隆『仙遊県志』巻 52「摭遺志」、巴蜀出版社、2000 年 10 月、637 頁。

[8] 陳鴻、陳邦賢『清初莆変小乗』（中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録、中華書局出版 1980 年 8 月、90 頁）

福州府屬閩侯二邑、為會城首縣、居民稠集。歲産米谷亦只敷本地一季食用、惟賴上游客販接濟。故南台河下米船、三日不到、則米價必然驟漲。閩清、永福二縣、米谷稍多、水路亦通、尚可運出發賣。古田、長樂、連江、羅源四縣、只敷本地食用。屏南居大山之中、雖多米谷、但不能運出福清土壤、浮鬆多沙子、有一半種番薯以資食用[1]。（福州府に属する閩県、侯官県は福州府の大県で人口稠密である。年に収穫した糧食は地元の需要をぎりぎり満たすものでしかなく、上流から運んできた糧食に頼っている。それで南台江の糧食の商船が三日経ってもこなければ、米価が直ぐ上がる。閩清、永福県の米の産量が少し多ければ、水路を通じて販売する余裕がある。古田、長楽、連江、羅源の四県はその糧食の産量が地元の需要をちょうど満たすものでしかない。南屏山は山地が多く、糧食が多いが運出できない。福清の土地は沙が多いので糧食の半分が芋である）

この資料により、福州府域内で生産している糧食はぎりぎり地元の需要を満たすだけのものであったことがわかる。福州の米供給は閩清、永福、南屏は自給できるし販売する余裕がある。他の県全部ではぎりぎり地元の需要を満たすものでしかない。天災、戦争があれば河や海を通して、豊富な江南地域からの米の輸入ができないことに加えて、飢饉への対応力が非常に弱い。順治年間、戦争、天災、悪政などによって農業生産、商売の発展は妨げられて米価はずっと騰貴していた。特に戦争多発の順治 4 年、5 年に米価は毎石 5 両ひいては 6 両以上にまでなった。康熙二年（1663）、三年（1664）において戦争が少なくなったが米価の騰貴の問題はまだ深刻であった。それを引き起こした要因は「禁海遷界」の政策である。すなわち、順治 18 年―康熙元年、鄭氏集団に対する圧制する対策の一つとして、沿海の百姓を内陸に 30 里遷らせて航海を厳禁した。その結果として大量の土地が荒廃して、さらに外省から米を運んでくる海路も封鎖された。

騰貴した米価は琉球に対してどんな影響を与えていたかのだろう。勤学の派遣は直接的にこの影響を受けていると考えられる。以下に分析してみる。

このような険悪な環境の中で、必要な進貢以外に、勤学を遣わすことに対して琉球側は慎重に考えていたのではないだろうか。留学先は、安定した学習環境が備わってはいないし、米価の騰貴は必然的に留学費用が高くなる。やっと康熙元年（1662）に、北伐に失敗した鄭成功は台湾に退いて、康熙二年には、金門、厦門の拠点が失われて福建境内ではほかの抗清勢力がほぼ平定された。安定した政治環境は康熙二年、周国俊、蔡彬、曽夔（当時、名は永泰）が学文習礼の事のために閩に赴くことに必要な条件を提供している。しかし注目すべきところは、『久米家譜資料』によると、三人が閩に行く時、王府は各人ごとに銀 32 両を与え、さらに米 6 斛（石）も賜ったようである[2]。周国俊、蔡彬、曽夔はもっぱら福州で学文習礼をするだけでなく、北京に行くグループに組み込まれた。北京に進貢任務を持っている使節は福州に着いた後、北京に行くまでに 3 か月の日時があるが、福州の詩人たちとの交流は非常にすくない。詩文から見ると、ほとんどの使節たちは、北京から戻った後に余裕をもって交流したり、師匠について学習したりしている。それからすると、この 3 か月間は勉強することは不可能であると考えられる。つまり、周国俊だけ福州で、少なくとも 13 か月学習する時間を得ていたが、曽夔、蔡彬は 6 か月ぐらいしか学習していない。わざわざ国内から一人あたり 6 石の米を持って行かされたのは、当時の福州の米価の騰貴と関わっているのだろう。それに、北京に行く時、20

[1] 鄭光策『閩政領要』（清・孫爾修陳寿祺纂准道光『福建通志』巻 52 収録、華文書局、1969 年 10 月、1065 頁）
[2] 「蔡氏家譜（一世　蔡崇）」蔡彬の条、「周姓家譜（一世　周文郁）」周国俊の条、「曽姓家譜（五世　曽志美）」曽夔の条（那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第一巻 6 収録、那覇市役所、1980 年 3 月、161 頁、380 頁、391 頁）

両の公費を与えられている。つまり、蔡彬、曽夔の半年の学費は 33 両で、それは多すぎるのではないだろうか。ちなみに康熙年間、正七品知県の年俸は 45 両、米 22 石と言われるが衙門のすべての消費が知県の俸禄に頼っている。そこで 33 両銀と 6 石の米を与えていたのは、非常に手厚い待遇と言えそうである。しかし、太平の時代なら十分余裕があったはずだが、物価、米価が騰貴している福州では 33 両と米 6 斛は必要である。特に戦乱の時代、米はなによりも重要なハードカレンシーである。

福建省では清初の動乱と天災などが頻発しており、康熙 5 年以後、ようやく福建社会は安定してきた。安定した社会環境を得て、農業生産は徐々に回復していく。それに自然の災害も少なくなってきたので、福建の各地域では豊作になっている。米価は一石で五銭以下になって、その後、二十年あまりこのような低い米価が続いていた[1]。低い米価は福建省の社会環境が安定してきて大動乱の傷跡が回復してきていることが反映されている。安定した社会環境の中で、琉球側が勤学という留学生を派遣することができるようになった。しかし、『久米家譜資料』を見ると康熙 2 年に遣わした 3 名の勤学人のあと、康熙 17 年まで琉球側は福州に勤学を派遣することを抑えている傾向が見える。この間、康熙 5 年に鄭職良が遣わされた記録しか見えない。もちろん、事実上はこれだけではないと思われるが、勤学派遣をおさえている傾向は確実である。康熙 2 年の派遣はただの試みで、三人の派遣に大きなコストを払ってしまった。また、康熙 3 年には、天災が頻発し、米価もまだ騰貴しており、いつになれば正常になるのか見えない状況などを考慮し、その後の勤学派遣を慎重に観察しているのではないだろうか。その後、康熙 12 年に勃発した三藩の乱もあり、少し勤学派遣を遅延させたのだろう。康熙 15 年靖南王の投降により福建省は清朝廷の支配に戻った。三藩の乱の平定後の形勢が明らかになってから、琉球側は勤学の派遣を復活させている。言い換えれば勤学人を中心とする琉球文人と中国文人との文人交流がやっと実践できるようになった。

康熙 2 年に琉球から遣わされた蔡彬、周国俊、曽夔らが福州に留学する時、一人ごと 33 両の銀、6 石の米を一緒に持って行ったことを紹介したが、彼らは福州で福州の先生に名、字、号を求めている。その先生が彼らに送った贈言が各々の家譜に記録されている。

この件を検討する前に清初福州において沸き立った「鄧譔学変」について述べなければならない。なぜかというと「鄧譔学変」の関わる人物は、同時に琉球との関係もあるからである。以下の内容は、陳怡山の『海濱外史』[2]によってまとめた。

康熙元年（1662）二月、福州の庠生（秀才）鄧譔は挙人陳殿邦からの借金を長期間にわたって返還しなかったため、陳殿邦の兄陳忠陛（陳忠陛は塩商である）は塩運使衙門に訴えている。また、早く鄧譔に借金を返還させるために陳氏（邦殿）は塩運使王志佐に賄賂を贈っている。王志佐は鄧譔をたちまち逮捕して役所で鄧譔を問わず、先に笞杖三十の刑罰を課した。鄧譔は「私は生員なので打たれることはありません」と主張した。王志佐は「生員を打つことはできないが、君は塩商だから打つことができる」と述べている。鄧譔は「私は塩商ではありません」と言っている。王志佐は「陳忠陛は塩の売買の金を君に貸したから君は絶対に塩商だと言っている」と言う。そして、ついに鄧譔に三十笞杖を執行した（科挙試験に合格した読書人はある一定の特権を持っている。たとえ、科挙のランクが最低レベルの秀才でさえも税金免除、肉刑免除などの特権がある。秀才にもし罪を問い、刑罰を加えるならば、省の学政は秀才の身分を剥奪しなければならない。いきなり秀才に肉刑を加えてはいけない）。これは大層な騒ぎとなった。福州周辺の府県学の学生が数百人、先賢神位を抱いて動き回って抗議している。一時、騒乱になって塩運使衙門を破壊したりもした。3 月 20 日、左布政使、右布

[1] 陳支平「清代前期福建的非正常米価」（『中国社会経済史研究』、厦門大学歴史研究所、1988 年第 3 期、20 頁）
[2] 清・陳怡山『海濱外史』（四川大学図書館編『中国野史集成』第 49 冊、巴蜀書社 2000 年 1 月、113 頁、116 頁）

政使、按察使、提学道、糧道の衙門は福州府学明倫堂で合同審理を行った。しかし、陳邦殿はすでに官員たちに賄賂を贈っていた。抗議デモに参加した諸生から主犯数人に枷を加えて、また鄧譔を問責せず笞杖二十を加えようとした。鄧譔はその辱に堪えられずに、予め用意していた刃物で自殺した。すると傍観の人及び事件に関わる諸生一万あまりを制御できなくなり、彼らが官員を殴って大騒ぎとなった。諸生たちは鄧譔の遺体を文廟のひさしの下に置いて慟哭している。後に、官員を殴り騒乱を引き起こした罪で諸生「林芬、林晟、黄國璧、鄭鰲毓、劉元蔚、陳章、陳謨、張星、高岩、林秋來、潘琦、劉新輝、林肇震、盧灼、陳元鉉、鄭有祚、陳祚霖」の合計 17 名が罪に問われている。当時、監察御史範平は実情を知り、諸生たちに同情して、皇帝に実情をもって陳情したことから、17 名の諸生は訓誡だけの懲罰となった。しかし、まだ 17 名は拘禁されたままであった。11 月福建学政陸密菴は諸生たちに課す試験を行ったが諸生は試験をボイコットしている。11 月 3 日、閩浙総督李率泰は 17 名の諸生の秀才身分を褫奪して総督府衙門で 17 名の諸生に一人ごと笞杖四十を加えた後、釈放した。この時、林肇震、張星は受刑の際に死亡した。他に大怪我を負って鄭鰲毓は康熙二年二月に病死、林芬は康熙二年 6 月に病死、林晟は康熙 6 年に風寒で死去した。残っている 11 名は七十あまりあるいは八十歳で逝去した。「鄧譔学変」を起こした責任で王志佐は罷免された。

以上の「鄧譔学変」は清代の初めの「凌辱斯文（知識人への肉刑）」によって引き起こされた読書人の反抗事件である。満州貴族は中国を統治し始めて、特に南方が安定していない時期、士人階層を篭絡する必要があったことから「鄧譔学変」を処置する際に諸生に対して寛容的であった。しかし、雍正、乾隆の時期には、読書人の反抗事件を処置する時は、圧倒的に読書人を残酷に鎮圧している[1]。

こういった福州における歴史背景の中で、「鄧譔学変」の余波がまだ残る康熙 2 年、琉球国王は周国俊、曽夔、蔡彬に読書習礼の命令を出して、謝恩紫金大夫金正春に従って 11 月 14 日福州へ出航させた。福州にいる間に蔡彬及びその子蔡炳、曽夔の父曽志美は福州の林晟に字号を贈ってもらった。その「古閩林晟所贈字號説」という贈言は各々の家譜に載っている。蔡彬と蔡炳の贈言は康熙 4 年正月に作られた。曽志美への贈言は康熙 4 年の 5 月に作られたものである。これらの増言の作者はまさに前文で述べた「鄧譔学変」の 17 名の諸生の一人林晟である。『海濱外史』の「学変紀事」は林晟について次のように述べている。

> 林晟最崛強、受棍時無啾嘰之聲即羯奴亦嘖嘖稱矮秀才不置、至庚戌年冒寒而死。[2]（林晟は最も意志が強く、受刑する際に叫ぶことが全くない。卑しい人でも秀才を讃えている。庚戌年、風寒に罹って病死した）

「鄧譔学変」に巻き込まれた林晟は、受刑する際に全く声を発することがなかったという。林晟は身分は低いが非常に気骨がある人物であることがわかる。康熙戊戌（6）年に風寒に罹って病死した。「鄧譔学変」のもう一人関係者で盧灼という人物は、『中山詩文集』の「雪堂燕遊草序」に出てくる。盧灼先生は陳元輔が若い頃に交流した友人である。『竹間十日話』によれば「盧灼は蕡仲で侯官県の庠生で剛直である。「鄧譔学変」の累が及んで拘禁された。「鄧譔学変」が落ち着いた後、盧灼は科挙を辞め、武夷山で隠遁生活を送った。

林晟に関しては「曽氏家譜」の「康熙乙巳蒲月朔日古閩林晟所贈字號説」では曽夔との知り合う経

---

[1] 王学深「凌辱斯文與清代生員群体反抗―以罷考為中心」（『清史研究』、中国人民大学清史研究所、2016 年 2 月、20 頁）

[2] 清・陳怡山『海濱外史』（四川大学図書館編『中国野史集成』第 49 冊、巴蜀書社、2000 年 1 月、115 頁）

緯について以下のように述べている。

> 曾君諱志美職居正議大夫令郎與予徒崇卿相善、在三山燕間之際轍歩予齋頭、閲其丰標誠可畏愛。因述君諱向予問號。[1]（曾君は諱は志美、官は正議大夫の位に居り、その子は私の弟子崇卿と仲良くしている。福州にいる時、偶々私の書斎にやってきた。曾永泰（初名）は敬服に値する人物であった。そして、私に父の諱を告げ号を求めた）

康熙 4 年、曾夔は 20 歳で林晟の弟子の「崇卿」と交友関係にあり、福州にいる際に崇卿を通して林晟と知り合った。曾夔は歩いて林晟の書斎を訪れていた。初めて曾夔を見て「豊標誠可畏愛」と評価している。林晟との面会において曾夔は父のための雅号を林晟に求めた。林晟は曾夔の父に号を作成した以外、蔡彬に字と号を贈り、彬の長男炳に本名、字、号を贈った。『久米家譜資料』の中で中国の師匠から琉球人に字や雅号を作って贈られた事例は、ほかにも梁成楫、曾夔の家譜資料に見える。琉球人が福州や北京の先生に字、号を求める事例は 6 件確認できる。この 6 件の事例は康熙 4 年―康熙 32 年の間である。

人物	時期	名	字	号
蔡彬	康熙 4 年正月（当時 23 歳）			適菴（林晟贈）
蔡炳	康熙 4 年正月（8 歳）	炳（林晟贈）	子星（林晟贈）	拱極（林晟贈）
曾志美	康熙 4 年 5 月（59 歳）			在中（林晟贈）
曾夔	康熙 27 年（43 歳）			虞臣（陳元輔贈）
	康熙 32 年 5 月（48 歳）	夔（鄭昂贈）		
梁成楫	康熙 27 年（20 歳）		得遠（国子監博士陸徳元贈）	

中国では 1949 年を境にして、中国の知識人で字や号を作る慣習が徐々に消えている。これ以前、中国人は本名以外、字、号ともに呼び方が機能していた。

久米村は設立されて以来、琉球国でずっと漢学の中心であった。ところが、16 世紀後半、琉球の進貢貿易が衰退するにつれてその進貢貿易の主役を担う久米村は衰微しつつあった。萬暦 7 年(1579)冊封副使謝杰の来琉時に記した『琉球録撮要補遺』の中で「三十六姓今所存者僅七姓[2]」とある。夏子陽が琉球に来た時には、久米村には蔡鄭林程梁金の六姓だけしか残っていなかった[3]。「久米村日記」[4]では、明末ごろ、久米村にはわずか 30 人しか残っていないとある。当然、久米村の漢学は久米村ともに衰微していく。その結果としては琉球国内において漢語を話せて漢文に堪能な人才が不足するという問題が出てくる。また、新たな中国王朝である清との進貢関係を結び始めており、朝貢貿易、外

[1] 「曽姓家譜（五世　曽志美）」（那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第一巻 6 収録、那覇市役所、1980 年 3 月、390 頁）
[2] 謝傑『琉球録撮要補遺』（『台湾文献叢刊』第 287 種、台湾銀行経済研究室印刷、1972 年、270 頁）
[3] 夏子陽『使琉球録』（『台湾文献叢刊』第 287 種、台湾銀行経済研究室印刷、1972 年、260 頁）
[4] 眞境名安興『沖縄教育史要』（『眞境名安興全集』第 2 巻収録、琉球新報社、1993 年 2 月、346 頁）

交往来などに相応しい人材を育てるのは一年二年でできるものではない。科挙を通って統治階層になる中国の官員は本質的に文人である。琉球の役人たちは中国の官員と接触する際に名や号を告げる。名や号は中国官員に与える最初の印象となる。よって名をつけることは非常に大事である。経典を紐解いて良い意味で雅やかな言葉であることと親が子に対する希望あるいは自分自身に対する希望を合わせて名を作る。つまり名をつけることは簡単なことではない。

蔡彬、蔡炳、曽志美はわざわざ福州で知識人に名前、字、雅号などを求めた。特に、蔡彬はもともと自分で作るべき長男の本名を林晟に求めた。わずか8歳の長男の字、雅号を求めたのは、少し繰り上げがすぎるかとも思われる。少なくともまだ久米村の現実に自信がもてなかったことの反映であろう。またこれは、久米村の人材が少ない一側面を反映している。久米村の職能の復興はまだまだ低調で、もっと時間を費やす必要があった。「廟学紀略」[1]によると、久米村の学問は中国の大儒者を雇って生徒を教えることで始まった毛国鼎、曽得魯、張五官、楊明州という四名の先生である。明末清初に当たって琉球との関わりで活躍していたのは楊明州である。楊明州が師として働いている時期は、久米村における漢学が衰微から復興への転換点だといえる。楊明州の弟子には漢詩に優れ、政治に貢献する人物が輩出している。蔡鐸、鄭弘良、周国俊、王可法、鄭永安などである[2]。つまり、久米村では漢学の復興策がとられていたのである。その起点としては康熙20年ごろ、福州に留学している蔡肇功が『寒窓紀事』を作ったことであると考えられる。その時点から康熙26年ごろに梁邦基の詩集、梁津の勤学期間の詩集（『閩遊草』）、康熙27年に曽夔の『執圭堂詩草』、康熙28年に蔡鐸の『観光堂詩草』、康熙33年に周新命の『翠雲楼詩草』、康熙37年に程順則の『雪堂燕遊草』、などが相次いで刊行された。そして、孫鋐の第三版の『皇清詩選』に25名の琉球詩人の詩作が収録されている。康熙60年ごろには琉球国の漢詩集大成である『中山詩文集』が出来上がった。蔡文溥の『四本堂詩文集』もほぼ同年に出来上がった。伊波普猷は「官生騒動について」の中で「蔡程時代は久米村の全盛時代であって、また琉球の全盛時代であった。語を換えて言えば、この時代の琉球は久米村の琉球であった[3]」と記している。要するに康熙年間、全盛の久米村の琉球では、その漢文学の全盛を迎えていた。その漢文学の全盛の背景には冊封使の渡来や官生や勤学など留学生の派遣など、中国との活発な交流があった。

第二項　文壇背景

康熙年間、福州において琉球の使節、存留役人、勤学人と親しく交流があった福州の文人たちは、多くが歴史に沈んだままであったが、王逸、竺天植、陳元輔、林潭、王登瀛などについては今でも知られている。その五名の教師のなかで竺天植は最も早く琉球人と接触し琉球人を教えている。王逸、林潭、竺天植は明の遺民といえるが、陳元輔、王登瀛は順治年間に生まれた人物で明清交替の激動の時代の中に育った。陳元輔、王登瀛がどのような社会環境に身を置いていたのかについては上述した。ここでは、彼らがどのような文学的な背景を有していたのかを紹介する。

清代前期の詩人趙翼は「題元遺山集」の中で「国家不幸詩家幸、賦到滄桑句便工[4]」と言っている。国の動乱の時代は、詩人にとって詩の黄金時代時である（国家不幸詩家幸）。時代の激しい変遷、動乱、変革が詩人を刺激して、亡国の衰え、民族の危機、個人の命運が激しく衝突する中で詩人の潜在

---

[1] 上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998年4月、267頁。
[2] 池宮正治・小渡清孝・田名真之『久米村―歴史と人物』、ひるぎ社、1993年3月、177頁。
[3] 伊波普猷『古琉球』、郷土研究社、1922年第三版、244頁。
[4] 清・趙翼『甌北詩鈔』、商務印書館、1936年1月、332頁。

的な創造力が呼び起こされた。明清交替の時代はまさにこのような時代である。顧炎武は『日知錄・正始』の中で「易姓改號謂之亡国。仁義充塞、爾至于率獸相食、人將相食、謂之亡天下」[1]と記している。王朝の皇帝を換えることが亡国と言える。邪説、謬論が流行って野獣を率いて人を食うほどの悪政で百姓を虐待し、残酷な環境で百姓が生きられず相い食うというようなになるにいたると、これは亡天下といえる。明清の交替は「剃髪易服」の令で漢民族の冠服文化を強制的に換えることとなり、漢民族にとっては文化の絶滅の時期である。清は漢民族を殺し、清の悪政の中で実際に人が相い食むところにまで至った。福建省ではこの「亡天下」の環境が最も長く続いていた。

それで福建省では他の省より多くの遺民詩人が現れている。遺民詩人は宋元交替時期と明清交替の時期に、異民族の統治に反抗しあるいは異民族への政権に仕えず隠遁した詩人のことである。この詩人たちは故国に対する思い、庶民への哀れみ、異民族政権への反抗などの感情を詩に注ぎ、その詩は慷慨悲涼な特徴で非常に強い震撼力がある。全国範囲では顧炎武、屈大均、呉嘉紀、銭澄之などがいる[2]。福建省では福清林古度、蒲田余懐、侯官許友、孫学嫁、閩県徐延壽、葉矯然などがいる[3]。遺民詩人は清の初期に最も早く福建文壇に登場している。福建詩学に対する影響は清初の福建詩壇において明末の遺風が濃いことである。

陳元輔の詩学観点については、彼の『枕山楼課児詩話』を通して窺うことができる。陳元輔は漢詩を作る要領を 49 則にしている。その 49 則から詩学の観点をまとめると以下の三点に整理できる。その三点とは「宗唐」、「温柔敦厚」、「竟陵の影」である。「宗唐」とは、唐詩を正統と奉じて唐詩を詩の手本として学習して詩を作ることである。「温柔敦厚」は伝統儒学詩学の趣旨である。いわゆる、平穏で柔和な姿勢で純朴な心を用いて人を感動させて教化し、詩の格調は偏らなくて水ように穏やかであるという詩学観である。「竟陵の影」は陳元輔が明末竟陵詩派の影響を受けていたことを言う。竟陵派は「孤深幽峭」の学説を提唱する。いわゆる古人の長所に見習うと同時に詩人の自身の創造を強調し、個性、個人感情を表す時にも哲理、寓意を兼ねて詩の流暢軽快さと深い思想を求めるという詩学観である。この三点はまさに陳元輔の成長している時代の文学背景を反映している。清初の福建詩壇の状況を知るためには、明代からの詩風の変遷を述べなければならない。明代福建の詩の創作においてキーワードの一つを探せば、それは「復古」である。明洪武、永楽年間の「閩中十子」から、中期の隆慶、万暦年間の鄭善夫、傅汝舟などの詩人、及び明末の謝肇淛、徐熥、曹学佺を代表とする晋安詩派まで「復古」を鼓吹していた[4]。いわゆる復古とは古体詩は必ず漢魏に学び、近体詩は必ず唐詩をまねて作るというものである。明末の晋安詩派はまた更に詩の範囲を縮小して詩を作るのに唐詩のみを強調している。要するに福建詩壇には従来より「宗唐」の伝統がある。清初、唐詩と宋詩の争いがあった。つまり、唐詩、宋詩のどちらが詩の頂点で、どちらに従うべきかという問題である。陳元輔はあきらかに唐詩側に立っている。これは福建の従来の「宗唐」の伝統から影響を受けている。「宗唐」の一つの側面は「尊杜」である。陳元輔は例外なく杜甫の詩を推奨している。尊杜の気風は清初詩壇の大多数の知識人のコンセンサスである。銭謙益は前明礼部尚書であったが。清に投降して清廷の礼部侍郎として仕えた。清初、銭謙益は文壇盟主の地位に当てられており、清初の詩壇を左右する影響力を持っていた。銭謙益は自ら杜詩を学び、そして杜甫の詩を学ぶことを強く提唱している。清の詩人は「尊杜」の意識を普遍的に持っている。朱彝尊、王士禛、黄生、宋犖（らく）などの名家は杜詩の

[1] 清・顧炎武『日知録』巻十三「正始」（『景印文淵閣全書・子部』第 858 冊収録、台湾商務印書館、2008 年 12 月、683 頁）
[2] 呉可文「遺民詩与清初福建詩風的嬗変」（『丟草孬朶』2016 年第 2 期、228 頁）
[3] 呉可文「遺民詩与清初福建詩風的嬗変」（『丟草孬朶』2016 年第 2 期、229 頁）
[4] 呉可文「遺民詩与清初福建詩風的嬗変」（『丟草孬朶』2016 年第 2 期、232 頁）

評注を著している[1]。要するに杜詩を学ぶ傾向は清初からすでにあって、銭謙益など名家の提唱がこの勢いを助長していた。なぜ、清初において杜詩を学ぶ傾向があったか。杜甫が生きていた時代、唐は極盛から安史の乱の大動乱の時代に陥り、その後どんどん衰退していく。杜甫は亡国の恨み、個人の運命への哀しみ、百姓への憐憫を詩に表現している。明末清初の大動乱を経た文人たちは、杜甫のこの境地に深く共感している。陳元輔が生まれた頃は社会が激しく変化している。二十歳前、三藩の乱を経て動乱の苦痛、命を失うほうどの環境から生き残ってきた。これは明清交替期の文人と一緒である。また杜甫の詩は乱世中の苦痛を反映しているが統治者を激しく非難することなく、忠君愛国の趣旨を堅持している。これはまさに伝統詩学の「温柔敦厚、哀而不傷、怨而不怒」の趣旨である。清初の動乱が終わって、社会は平和に向かっていく。清廷は平和盛世の雰囲気を営造する必要がある。つまり清の統治者はまた自己の統治にふさわしい文教政策を探した。伝統詩学の「温柔敦厚」は、まさに新たな統治者に合している。順治 6 年の進士施閏章は「温柔敦厚」の格調を実践する先駆者である。彼をはじめとして、王士禛の「神韻説」を経て「温柔敦厚」の格調が本格的に詩壇の主流となっている。康熙帝自身、詩学に関する著作の『御選唐詩』の中で「孔子曰温柔敦厚詩教也。是編所取雖風格不一、爾皆以温柔敦厚為宗。其憂思感憤、纖巧之作、雖工不錄。使覽者宣志達情、以范于和平。蓋亦用古人以正聲感人之意（孔子曰く、温柔敦厚は詩の教なりと。是の編取る所、風格ならずと雖も、爾るに皆溫柔敦厚を以て宗と為す。其れ憂思感憤、織巧の作は、工なりと雖も錄せず。覽者をして志を宜しくし情を達せしめ、以て和平に范せんとす。蓋し亦た古人用いる。正聲を以て人を感せしむる意なり）」[2]と述べている。最高統治者の康熙帝でも「温柔敦厚」の格調を提唱している。当然、皇帝の述べる「温柔敦厚」は統治を安定させる効果に着目していると考えられる。陳元輔が詩を学び自分なりの詩学観を獲得した時期は、まさに「温柔敦厚」の詩風が文壇にも朝廷にも充満している時期である。

「竟陵の影」とは、陳元輔の詩が明末の竟陵詩派の影響を受けているということである。清初は竟陵詩に対して高い評価はないが、明末に盛んであった流派である。銭謙益は竟陵詩に対して大体に否定の見方を持ち、『列朝詩集小伝』では客観的に「數年之後、所譔古今詩歸盛行于世、承學之士家置一編、奉之如尼丘之刪定（數年の後、所謂古今の詩世に盛行し承學の士は家に一編を置き、之を奉ずること尼丘の刪定の如し）」[3]と述べている。要するに竟陵体が登場したらすぐに大歓迎され、学者はみんな必ず鍾譚の著作を持つというほど流行ったというのである。その影響は清初期に及んでいる。沈德潛の『清詩別裁集』の中では「国初沿明季余習（中略）太僕謂鈡譚之風、流毒天下[4]（国初は明季の余習に沿い＜中略＞太僕の謂う鈡譚風、天下に流毒す）」と述べている。かつ、竟陵学派の鼻祖鈡惺は福建提督学政に任じられていて、直接に竟陵詩が影響を与えている。陳元輔は竟陵詩の鐘惺、譚元春に非常に敬服し、若い時、湖北省を遊歴した時にわざわざ鐘惺譚元春祠堂を拝謁に行っている。

歴史背景として清初期、福建の反抗勢力を消滅するために百姓を榨取するが、一方的に悪政が続ければ清は 267 年の国運を享有できるはずがない。それで清は威勢政策を行いながら懐柔政策もともに行っている。順治、康熙年間に三回ぐらい福建省の税金を免除している。清軍が百姓を略奪する問題に対しては厳しく処理し、海禁、遷界の政策を緩和するなどの政策を実施する。僅かに数十万人の満州人は数千万人の漢民族を統治するために、漢人の士人階層、広くいえば漢人の読書人を篭絡しなけ

[1] 呉瓊「明末清初的文学嬗變」、上海師範大学古代文学専攻博士論文、2012 年 3 月、273 頁。
[2] 清・玄燁『御選唐詩』（『景印文淵閣全書・集部』第 1446 冊収録、台湾商務印書館、2008 年 12 月、1 頁）
[3] 清・銭謙益『列朝詩集小伝』、上海古籍出版社 、2008 年、572 頁。
[4] 清・沈德潛『清詩別裁集』、中華書局、1975 年 11 月、123 頁。

ればならない。文教政策において、「剃髪易服」「文字獄」などの高圧政策がある一方で、最も広く漢文人を帰服させるのに役立ったのは主に科挙政策、尊孔興学、典籍編纂という三方面の政策である。

1 科挙政策

科挙政策では清朝の建国二年目（順治 2 年）にすぐ郷試を行って、3 年には会試を行った。科挙試験を浄化するために順治 14 年の順天郷試と江南郷試、康熙 50 年の江南郷試においてカンニング、汚職について厳しく取り締まり、多くの高官が処刑された[1]。福建では順治 8 年郷試が行われた。期日通りに郷試を開催できなければ必ず期日を改めた。戦争が頻繁にあったが、福建省の郷試は中断されることはなかった。

2 尊孔興学

尊孔では清代の制度で「順治二年、直省府州縣釋奠於先師之禮、毎歳春秋仲月上丁日釋奠、以地方正印官主祭[2]」と規定されている。清朝は天下を取ってすぐ孔子を祭祀して尊孔の政策を定めた。順治 9 年、順治帝は文廟で自ら孔子を祭祀している。康熙 8 年、康熙帝は文廟で孔子を祭り、康熙 23 年山東曲阜に行って孔子を祭った。『清聖祖実録』、『幸魯盛典』ではこの二回の釈奠について詳しく記載している。

> 丁丑上幸太學。前期一日，于宮中致齋。是日、上具禮服乘輦（中略）降輦由大成中門步進先師位前。行二跪六叩頭禮、親釋奠畢、駕幸彝倫堂、滿漢祭酒以次講易經、司業講書經。四品以下翰林官及五經博士、各執事官、學官、監生序立。講畢、宣製曰聖人之道、如日中天、講究服膺。爾師生其免之。宣畢。上還宮[3]。（丁丑、皇帯は国子監を視察する。前日、皇帯は宮中にて斎戒する。当日、皇帯は礼服を着て輦に乗る。大成殿の中門より先師位牌まで徒歩で進む。二跪六叩頭の礼を行う。自ら釋奠をした後、彝倫堂に行く。満漢の祭酒は順番で易経を講ずる。司業は書経を講ずる。四品以下の翰林及五経博士、各執事官、学官、監生は位階により列を成す。講学を終えると、聖人之道を宣制す。宣し終えて皇帯は紫禁城に戻る）
>
> 九月二十四日発自京師、既登泰山還自江南。十一月十八日乙卯遂幸闕里謁先師祀事。先是群臣議禮謂陳設儀仗、迎神送神用兩跪六叩禮、讀祝文畢行三叩禮。皇上以先師冠古今所以尊禮之者猶有未至遂、特行九叩禮[4]。（九月二十四日、京城より出発する。泰山に登って江南より戻る途中、十一月十八日に孔子の故郷を視察し孔子を祭祀する。まず先に群臣は礼を議するに、迎神送神の時兩跪六叩の礼をし、祝文を読んだ後三叩の礼をすると謂う。皇帯は古今の第一師匠孔子に尊敬の意を表し尽くしていないとして、九叩の礼をおこなった）

以上の資料で特に注意を惹かれるには祭祀前日、康熙帝は斎戒し、祭祀の当日、文廟の大成殿中門から歩いて孔子の位牌まで行って「二跪六叩頭」の礼をしていた。康熙 23 年山東曲阜で孔子を祭祀する際に、群臣は最初「二跪六叩頭」の礼を行うことを提案するが、康熙帝は皇帯の身分をもって孔子を祭る時最高の「三跪九叩首」の礼をしていた。漢代から漢民族は孔子を尊敬し、儒学を漢文化の中核とすることが二千年程続いていた。皇帯の身分をもって孔子に「三跪九叩」の礼をしたのは康熙帝が初めてである。康熙帝の行為は非常に漢人大臣を感動させた。清朝は皇帯から身をもって範を示

---

[1] 劉海峰、李兵『中国科挙史』、上海東方出版センター、2004 年、353 頁―394 頁。
[2] 『皇朝通典』巻 48（『景印文淵閣四庫全書』史部 400 政書類第 642 冊收錄、台灣商務印書館 、642－653 頁）
[3] 『清実録聖祖仁皇帝実録』巻 28、中華書局、1985 年 9 月、392 頁、393 頁。
[4] 清・孔毓圻等撰『幸魯盛典』巻 31 第 7 冊、広雅書局（光緒 25 年）1899 年、24 頁。

して確実に尊孔の政策を執行したのである。

また、順治朝には前代の書院 61 か所を修繕して改めて 45 か所の書院を建立した。康熙朝には、さらに前代の書院 248 か所を修繕して改めて 537 か所の書院を建立した[1]。

3 漢籍の整理、編纂

国の力で大規模的に漢籍を整理、編纂するのは清代の文教政策の一つ特色である。正式の科挙試験以外に、康熙 18 年と、乾隆元年に博学宏詞という試験を行って多くの人材を抜擢した。人材を蓄えたうえで、清代の大規模な漢籍整理と編纂事業を進めた。康熙朝に『明史』、『古今図書集成』、『全唐詩』、『佩文韻府』、乾隆朝に『四庫全書』が編纂された。大規模の典籍を編纂、整理するために大量の知識人を採用することは一部の読書人の就職の問題を解決した。清廷が漢人の文化を十分に尊重して重視する姿勢を漢人の読書人に示すことで、漢人読書人を篭絡し、政治を安定させる効果もあった。

本章では、明清交替の時期、王逸、竺天植、林潭、陳元輔、王登瀛が琉球文人と接触する前の福州の歴史と文学界の背景を紹介し、王逸、竺天植、林潭らが生きた福州はどのような歴史的環境にあったかについて述べた。また、彼らの後の時代に生まれ育った陳元輔、王登瀛はどのような文学環境で学習して成長していたかを明らかにした。次章以降は、交流と詩の唱和を中心に琉球文人と中国文人の交わりの具体的な姿を詩文の分析を通して明らかにしたい。

[1] 白新良『中国古代書院発展史』、天津大学出版社、1995 年 5 月、124 頁―141 頁。

第一章　康熙年間、琉球勤学人の師匠について

本章において康熙年間、琉球人との関係が親密であった福州の教師陳元輔、王登瀛、竺天植、林潭について、彼らの人生の履歴を解明して四名の教師の関係を論述したい。この章は本論稿の基礎を成すものである。この四名の教師がどのような人物であるかを明らかにし、さらに第二章でこうした教師と琉球の学生らがどのような交流を展開していたのか明らかにすることで、様々な歴史の瞬間を見ることができる。特に陳元輔は、この四名の教師の中で最も重要な人物である。福州の一般文人としての陳元輔については、日本に残される彼の著作、書画を通して多くを窺い知ることができる。彼は、琉球人の師匠として多くの琉球勤学人を教育している。琉球王国時代の大学者である程順則もその中の一人である。陳元輔は、中国琉球交流史を検討する上で避けることのできない重要な人物である。彼の人生履歴を解明すれば彼に関連する『中山詩文集』、『枕山楼詩集』、『枕山楼文集』などの資料の中に残されている謎を少しずつ解くことができる。

第一節　陳元輔に関わる資料の紹介
―『枕山楼文集』、『枕山楼詩集』、『枕山楼課児詩話』、『晩香園梅詩』、『柔遠駅草』、『中山詩文集』―

管見の限り、陳元輔が何らかの形で関わっている、あるいは彼の足跡を知る手がかりとなる資料には以下のものがある。

①『枕山楼文集』：陳元輔の散文集
②『枕山楼詩集』：陳元輔の詩集
③『枕山楼課児詩話』：陳元輔の作詩指南書
④林潭『晩香園梅詩』：陳元輔の序文
⑤王登瀛『柔遠駅草』：陳元輔に関する詩文
⑥『中山詩文集』：陳元輔に関わる詩と文章

上述した 6 件の資料以外に、他に散見できるのは「程大恭人伝」（陳元輔が記した程順則の母の伝）、「徴詩別引」（『程氏家譜』に見える文）、「指南広義序」、『枕山楼茶略』（陳元輔の茶に関する著作）といった資料がある。『枕山楼詩集』、『枕山楼課児詩話』、『晩香園梅詩』、『中山詩文集』、『指南広義』の初版は程順則など琉球人が出資して福州で刊刻されたものである。当時は、福建の民間出版業が盛んな時期であった。福建の出版業は五代時期に誕生し宋代に至るまで徐々に繁栄し、明代にその全盛期を迎える。福建省は紙の材料とする竹が豊富で、版木の材料である梨の木も閩北に多くあった。かつ、福建省内の発達した水路は版木、紙の材料の運輸に適している。豊富な原材料、便利な運輸条件を生かし、福建で刊刻した書籍は全国に流通し、その数量は全国一である。福建では書籍の購入、書籍を出版する価額も江南地域、北京よりずいぶん安かった。琉球人は福州で安く書籍を出版し、購入できる原因もここにあった。しかし一方、福建版の書籍は質が悪く版木が朽ちやすいという悪評もある。『晩香園梅詩』、『枕山楼課児詩話』の版木はもともと柔遠駅に保存されていたが、後に版木が朽ちたことから重版されている。本来、宋代から明代まで福建の民間出版業の中心は閩北にある建陽であったが、清に至って、その中心が福州、泉州に移っている[1]。

[1] 李艶華「歴史文化視野中的福建坊刻本」福建師範大学中国古典文献学修士論文、2005 年 4 月。

上記の史料の中で、陳元輔の生涯を知る最も重要な資料は『枕山楼文集』である。該著について、以下説明することにする。

1『枕山楼文集』

『枕山楼文集』(以下『文集』と略称)の初版本は、康熙 31 年(1692)に福州で自費出版されている。『文集』は、楊昌任と王化純による序文 2 篇と、陳元輔の散文 15 篇、詩 5 首を掲載している。まず序文の著者であるが、楊昌任がどのような人物であるのか詳しい経歴はわからない。だが楊序等の断片的な記述から、彼は陳元輔と姻戚関係にあったことが分かる。王化純は 2 篇目の序文の執筆者である。『乾隆本福州府志』によれば王化純は康熙年間、閩県学の貢生であった。つまり、王化純は国子監に入ったことがある人物である。その学歴は挙人に挙げられたことに相当する。しかし陳元輔とどのような関係があったのかはよく分からない。『文集』には「與周太學書」、「蔡述亭傳」「僻耽集序」が収録されており、これらの文章から陳元輔に関する情報が得られる。さらに『文集』には陳元輔が程順則を憶う詩 5 首が掲載されている。林潭はこの 5 首に注を付けている。以下は『文集』の一覧表である。

『枕山樓文集』一覧表

番号	題目	作者	相關人物	作成時期
1	序	序楊昌任		康熙 31 年 1692
2	序	王化純		同上
3	閩游草序	陳元輔	梁津（得済）	
4	上覚内閣啓	陳元輔	張雲翼	康熙 26 年 1687
5	與周太学書	陳元輔	周太學	康熙 15 年 1683
6	蔡述亭伝	陳元輔	蔡廛カ（述亭）	康熙 29 年 1690
7	乾灘草堂記	陳元輔	林成璉	康熙 23 年 1684
8	蔡聲亭詩序	陳元輔	蔡鐸（声亭）	康熙 29 年 1690
9	汪照鄰画冊序	陳元輔		
10	中山自了伝	陳元輔	自了（城間清豊）	
11	謝莆陽太守惠荔枝小啓	陳元輔	莆陽太守	
12	癖耽集序	陳元輔	竺天植	康熙 23 年 1684
13	雪堂韻林雑組詩序	陳元輔	程順則	
14	題姚道衍伝後	陳元輔	姚道衍	
15	跋漢宮春色畫冊	陳元輔		
16	林子秀詩序	陳元輔	林子秀	
17	哭三叔文	陳元輔		
18	江樓秋日懐中山程寵文文五首序	林潭	程順則	康熙 31 年 1692
19	江樓秋日懐中山程寵文五首注釈	林潭	程順則、陳元輔	康熙 31 年 1692

2『枕山楼詩集』

『枕山楼詩集』(以下『詩集』と略称）は、陳元輔の詩集であり、初版は康熙 30 年(1691)に福州で出版されている。これは『文集』と異なり自費出版ではなく、程順則が帰国前に出資して出版したも

のである。鄭宗圭と林潭が序文を寄せており、陳元輔の漢詩 121 題、179 首を収録する。康熙 12 年(1673)から康熙 30 年(1691)までの約 18 年の間の作品を収めている。『詩集』は作成時期を「軍幕の時期」、「湖北の遊歴期」、「勤学の師匠期」の三つに区分することができる。

「軍幕の時期」の作品は康熙 12 年(1673)の三藩の乱勃発後、康熙 21 年までの 11 首がそれにあたる。「湖北の遊歴期」の作品は康熙 22 年(1683)の冬、湖北省を数ケ月をかけて歴遊した時期のもので、27 首を数える。康熙 23 年以降の「勤学の師匠期」の作品は詩集の四分の三を占める。『詩集』はおおむね年代に従って若い時期から晩年の詩という順序に沿って収録されている。しかし、厳密に年代順になっているわけではなく、晩年（康熙 30 年＜1691＞）の作品」であるが、『詩集』の前半部分に掲載されているのもある。本論稿では「勤学の師匠期」の作品を中心に取り扱う。

序文の著者の一人である鄭宗圭は、『烏程県志』によれば、字は圭甫、号は瞻亭、福建省閩県の人で、明の万暦 34 年（1606）に生まれ、崇禎壬午十五年（1648）に挙人となり、清の康熙元年（1662 年）に浙江烏程県の知県に任じられている[1]。『福建通志』には「沉酣經史、著有讀史卮言十卷、山園堂集、續讀史數篇[2]。(經史に沉酣し、著作に『讀史卮言』十卷、『山園堂集』、『續讀史』の數篇有り。)」という記載がある。ここから鄭宗圭は歴史、経典の読解に優れていたことが分かる。鄭宗圭は康熙 40 年（1701 年）に 95 歳で逝去している。『福州府志』にも彼に関する記載があるが、彼と陳元輔との関係はよく分かっていない。

第二篇の序文の作者は林潭である。林潭は琉球人の師匠ではないが、彼もまた琉球人との関係が深かった。林潭は特に程順則と交友が深く、『中山詩文集』に林潭が程順則に贈った詩が収録されている。また、陳元輔の作品集を出版する前に、程順則が林潭に序文を寄せるように依頼している。林潭の『晩香園梅詩』も程順則によって康熙 60 年（1721）に福州で刊行され、後に人に知られるようになる。『詩集』には、林潭にかかわる詩が 6 題 7 首[3]収録されている。陳元輔の友人の中で最も多い数である。二人は互いに漢詩集に序文を寄せたり、詩作に詳しく解釈や評をつけることがあった。そうしたことからも、林潭と陳元輔の交友の親密さが窺える。

以下『枕山楼詩集』一覧表である。

注：軍幕前：康熙 12 年～康熙 15 年

軍幕時期：康熙 15 年 10 月～康熙 21 年

遊歴時期：康熙 22 年冬～康熙 23 年

師匠時期：康熙 23 年冬～康熙 30 年

琉球詩人に関わる作品は番号を□で囲む

番号	題目	詩型	時期	内容	場所
	鄭宗圭序				
	林潭序				
1	寶劍行	楽府体	軍幕前	言志	福州
2	登鼓山男崩峰	排律	軍幕前	風景	福州鼓山男崩峰

[1] 「鄭宗圭、號瞻亭、福建閩縣人、壬午舉人、(康熙)元年任」羅愫、杭世駿修『烏程縣志』卷 4 乾隆 11 年刊（台湾成文出版社編集『中國方志叢書』、華中地方、第 596 號収録、台湾成文出版社、1966 年、 272 頁）

[2]「鄭宗圭、字圭甫、閩縣人、崇禎壬午舉人。國朝為烏程令。沉酣經史、著有『讀史卮言十卷』、『山園堂集』、『續讀史』數篇。年九十五卒。」謝道承修纂『福建通志』卷 68、乾隆 2 年刊（上海書店出版社編『中国地方府県志集成・湖北府県志輯』第 47 冊収録、上海書店出版社、2000 年 10 月、618 頁）

[3]7 首の詩は以下の通り。「竹醉日同元聲叔訪林二恥于晩香園」、「郢中懐林二恥」、「瓊川夜坐有懐林二恥歸隱峽江曾子浴參軍長溪」、「林二恥避亂入城過枕山樓話舊 二首」、「訂九日同林二恥登石鼓山不果」「秋夜枕山樓懐林二恥」（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年＜1692＞刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894）

3	釣龍臺懷古	七言律詩	軍幕前	懐古	福州南台山
4	九日登凌霄臺	七言律詩	軍幕時期	詠懐	福州烏石山
5	病馬（九首）	七言律詩	軍幕時期	軍中の生活	
6	鶯	七言絶句	軍幕時期	詠物	
7	燕	七言絶句	軍幕時期	詠物	
8	猿	七言絶句	軍幕時期	詠物	
9	寄潘暉明	七言律詩	軍幕時期	贈答	
10	游白云寺	七言律詩		遊覧	福州白雲寺
11	無題（三首）	七言絶句	軍幕前	風景	
12	南昌寄家書	七言絶句	遊歴時期	家書	南昌
13	豫章送顔儀懐之陳總戎署中	七言律詩	遊歴時期	贈答	豫章郡（江西南昌）
14	懐張士升	七言律詩		懐人	
15	懐林子秀	七言律詩	遊歴時期	懐人	
16	題王氏草堂	七言律詩		贈答	福州
17	過芝山別徑訪慧源上人	七言絶句		訪友人	福州芝山
18	曉雨渡新道	七言絶句		風景	福州
19	尋梅塢故址	五言律詩		游覧	福州
20	竹醉日同元聲叔訪林二恥於晩香園	七言律詩		記事	福州
21	楓葉	七言律詩		詠物	呉江（江西繞州鄱陽湖縣）
22	病宿義溪	七言律詩	軍幕時期	記行	義溪（福州府城東南七十里）
23	軍中雑詩（四首）	七言律詩	軍幕時期	記事	
24	有感	七言律詩	軍幕時期	詠懐	
25	莫春李乾生招飲越日乾生有建州之行	五言律詩		贈答	福州
26	送金西玉參軍涵江	七言律詩	軍幕前	贈答	福州
27	送高子厚明府移居桂湖	七言律詩		贈答	福州
28	丹陽曉行	七言律詩	遊歴期間	記行	湖北
29	寧陽署中感事	七言律詩	遊歴期間	詠懐	寧陽（黄連鎮）
30	安仁溪曉發	五言律詩	遊歴期間	記行	閩清縣東橋鎮安仁溪
31	烏石清泉亭	七言絶句	遊歴期間	游覧	江西德安縣
32	郢中寄懐林二恥	七言律詩	遊歴期間	懐人	郢中（湖北荊門）
33	仙棗亭呂祖睡像	七言絶句	遊歴期間	遊覧	湖北武漢黄鶴樓仙棗亭
34	滴露菴訪璽直大師	七言律詩	遊歴期間	記事	湖北竟陵
35	贈沔水別駕陸士佩	七言律詩	遊歴期間	贈答	湖北
36	陸士佩署中觀劇	七言絶句	遊歴期間	記事	湖北
37	題酒家姫扇并引	七言律詩	遊歴期間	贈答	湖北
38	景陵謁鍾伯敬潭友夏兩先生祠	七言律詩	遊歴期間	游覧	湖北竟陵縣（今天門市）
39	玉山明府鄒弘景先生招飲怡閣	七言律詩	遊歴期間	記事	湖北安陸府
40	壽鄒弘景先生	七言律詩	遊歴期間	贈答	湖北安陸府
41	鄒西豐詔飲	七言律詩	遊歴期間	記事	湖北安陸府

42	鄒對臣招飲	七言律詩	遊歴期間	記事	湖北安陸府
43	雪夜讀杜詩	七言律詩	游歴期間	記事	湖北
44	楚中即事（五首）	七言絶句	遊歴期間	詠懐	湖北
45	楚江思春（五首）	七言絶句	遊歴期間	詠懐	湖北
46	乾灘留別璽直上人還閩	七言絶句	遊歴期間	贈別	湖北竟陵
47	送林子秀之建州	七言律詩	遊歴から福州に戻る	贈別	福州
48	安兵部得男索詩	七言律詩	遊歴から福州に戻る	贈答	福州
49	送魏牧公入貢	七言律詩	師匠時期	贈別	福州
50	送曾虞臣入貢	七言律詩	師匠時期	贈別	福州
51	贈梁得濟	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
52	曾子浴歸自長溪與予同過瓊河古驛訪梁得聲夜話并索其新詩讀之	七言律詩	師匠時期	記事	福州
54	上巳仝梁本寧得聲得濟陳魯水金浩然游烏石山觀朱夫子石室清隱石刻	七言律詩	師匠時期	記事	福州
55	題鄭克敘小影	七言律詩	師匠時期	題詩	福州
56	秋夜望中樓懐梁本寧	七言律詩	師匠時期	懐人	福州
57	秋夜望中樓懐梁得濟	七言律詩	師匠時期	懐人	福州
58	送蔡聲亭入貢	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
59	十二夜蔡文敏竹樓坐月遲竺天植不至	七言律詩	師匠時期	記事	福州
60	冬夜同王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字	七言律詩	師匠時期	記事	福州
61	雨夜留宿蔡幀菴山樓同竺天植詩話	七言律詩	師匠時期	記事	福州
62	送林介人之景陵署中省親	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
63	懐曾子浴參軍長溪	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
64	題畫	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
65	喜叔志三入泮	七言律詩	師匠時期	記事	福州
66	秋夜望中樓懐梁得濟	七言律詩	師匠時期	懐人	福州
67	春日留飲周熙臣山樓	七言律詩	師匠時期	記事	福州
68	春杪瓊川阻雨因過蔡聲亭山樓茶話	七言律詩	師匠時期	記事	福州
69	望中樓餞春（二首）	七言律詩	師匠時期	記事	福州
70	家逸甫移居城東	七言律詩	師匠時期	記事	福州
71	題畫	七言律詩	師匠時期		福州
72	送林介人重游竟陵	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
73	十六夜南樓醉月	七言律詩	師匠時期	風景	福州
74	秋日郊行	七言律詩	師匠時期	記事	福州
75	秋夜尋僧不遇	七言律詩	師匠時期	記事	福州
76	秋江雨泛同雪堂諸子	七言律詩	師匠時期	記事	福州
77	烏石山尋蟠桃塢石刻	七言律詩	師匠時期	游覽	福州
78	吾兄詩酒繼陶君為中山程	七言律詩	師匠時期	記事	福州

	寵文賦				
79	江樓雨夜集飲越日蔡文敏歸中山	七言律詩	師匠時期	記事	福州
80	夏杪同諸子雪堂夜飲得秋字	七言律詩	師匠時期	記事	福州
81	喜同王孔錫盧若采夜集程寵文雪堂話月分得七陽	七言律詩	師匠時期	記事	福州
82	秋日驛樓寄懷成均諸子	七言律詩	師匠時期	懷人	福州
83	懷蘆若采	七言律詩	師匠時期	記懷	福州
84	送僧重登方丈	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
85	過仙塔	七言律詩	師匠時期	懷古	福州
86	驛樓題壁	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
87	過花封舊宅	七言律詩	師匠時期	記事	福州
88	和程寵文壺川尋牛田休隱居韻	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
89	寄懷戴冕卿參軍台灣（二首）	七言律詩	師匠時期	懷人	福州
90	立秋	七言律詩	師匠時期	感懷	福州
91	瓊川南樓夜坐有懷林二恥歸隱峽江曾子浴參軍長溪	七言律詩	師匠時期	懷人	福州
92	題瓊川南樓	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
93	鳳坂訪高以嘉不遇	七言律詩	師匠時期	記事	福州
94	道山尋孫子長先生讀書處	七言律詩	師匠時期	游覽	福州
95	南樓晚眺	七言律詩	師匠時期	風景	福州
96	秋日同竺天植郊行自新橋至鳳坂留飲高以純山堂	七言律詩	師匠時期	記事	福州
97	瓊川九日	七言律詩	師匠時期	詠懷	福州
98	夜宴程氏雪堂	七言律詩	師匠時期	記事	福州
99	晚秋（二首）	七言律詩	師匠時期	風景	福州
100	登釣龍臺觀陸帥守全閩第一江山石刻	七言律詩	師匠時期	記事	福州
101	過鳳坂留飲高以嘉山齊	七言律詩	師匠時期	記事	福州
102	留別潛園主人	七言律詩	師匠時期	贈答	福州
103	過高以純山齊得讀葉際恭重九後一日同鄭惟宗游鶴巢作次韻卻寄	七言律詩	師匠時期	記事	福州
104	鰲峰雜感（十首）	七言律詩	師匠時期	詠懷	福州
105	秋懷（十首）	七言律詩	師匠時期	詠懷	福州
106	林二恥避亂入城過枕山樓話舊（二首）	七言律詩	師匠時期	記事	福州
107	李乾生過訪	七言律詩	師匠時期	記事	福州
108	訂九日同林二恥登石鼓不果	七言律詩	師匠時期	記事	福州
109	峽江夜泊	七言律詩	師匠時期	記事	福州
110	冬杪讌集程寵文雪堂喜同方德祖鳳恭良蔡紹斎夜話	七言律詩	師匠時期	記事	福州
111	元夕宴集程寵文立雪堂分得歡字	七言律詩	師匠時期	記事	福州

112	秋日江樓遠眺	七言律詩	師匠時期	風景	福州
113	元夕同程寵文盧若采留飲蔡紹斎江樓	七言律詩	師匠時期	記事	福州
114	題程寵文立雪堂（二首）	七言絶句	師匠時期	贈答	福州
115	春夜留飲溫森山江樓看月	七言絶句	師匠時期	記事	福州
116	金錦江席上喜談杜詩	七言絶句	師匠時期	記事	福州
117	秋夜枕山樓懐林二恥	排律	師匠時期	懐人	福州
118	涌泉亭曉望	七言律詩	師匠時期	風景	福州
119	家逸甫移居芝山	七言律詩	師匠時期	記事	福州
120	弔山花有引	七言律詩	師匠時期	詠物	福州
121	送程寵文歸中山（十首）	七言律詩	師匠時期	贈答	福州

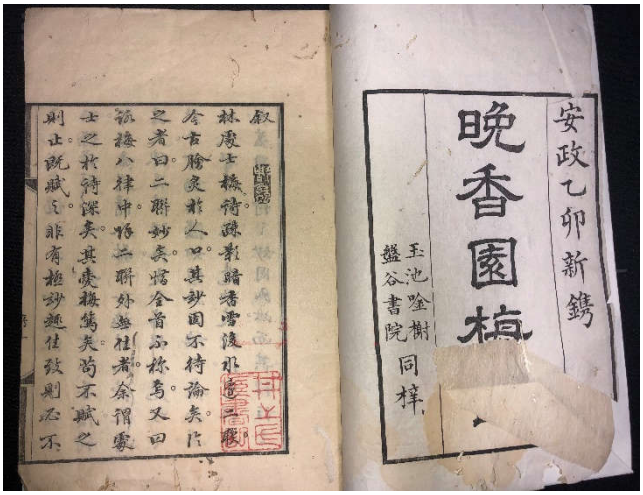
３『枕山楼課児詩話』

書の題目から見る限り、この本は子息に詩を教えるテキストである。程順則は康熙 37 年（1698）に、この本に出会い、同年、程順則と同僚楊丹厳および毛允和・鄭克文・陳楚水・蔡天水など琉球勤学人が共同で資金を出して福州で出版している。初出版の版本に福州儒学司訓である戴翼が序を寄せ、程順則は跋文を寄せている。後に柔遠駅に収められている旧木版が朽ちたため雍正 3 年（1725）に曽暦が資金を出して重刻して再出版している。重版の際に、曽歴が跋文を加えている。曽歴は康熙 41 年（1702）に小船通事として福州に来た時、初めて『枕山楼課児詩話』を入手し、康熙 47 年（1708）に進貢副使として福州に来た際に、陳元輔は自らそれを用いて曽歴を指導している。陳元輔は康熙 37 年（1698）以降、漢詩創作を勤学人に教える際、自らの著作を用いて勤学人に漢詩創作の指導をしていたと考えられる。この本は漢詩創作のための初心者に向けた入門書である。詩の平仄法を記し、作詩の規則 49 則を載せている。現存しているテキストのうち、最も早い刊刻版は国立公文書館に所蔵されている雍正3年福州刻本である。これが本論稿で取り扱う版本である。程順則は康熙52年(1713)の江戸立ちの時、その刊刻本を薩摩や江戸の友人に送った。これより『枕山楼課児詩話』は日本に伝播することとなった。江戸立ちの 25 年後、京都の書商は『枕山楼課児詩話』を得て奥田三角に序文を乞うて出版した。[1]日本で初めて刊刻する前はおそらく手書きの写本の形式で流布していたと考えられる。後に、英華堂は大窪詩佛に再校を求めて重印した。横関剛校、亀谷行序の明治 14 年 12 月大阪墨香居北尾禹三郎の刊本もある[2]。

４『晩香園梅詩』

この詩集には、篇首に陳元輔の序文、編尾に王登瀛の跋文と林潭の六首の梅詩が収録されており、その六首詩に陳元輔が注釈をつけいる。詩集のほとんどを陳元輔が記述しているが、該著は陳元輔と林潭の共著とみなしていいだろう。陳元輔の序文に「康熙戊午仲冬」とあることから、この詩集は康熙 17 年（1678）以後に成立したものであることが分かる。康熙 60 年、程順則は福州で資金を出して重刻した。国立国会図書館に林潭の『晩香園梅詩』が所蔵されている版本は、長沢規矩也の解題によって安政 2 年（1855）に玉池唫榭、盤古書院から共同出版されたことがわかる。[3]現在日本で見られる『晩香園梅詩』はほとんどこの版本である。（筆者は一冊所蔵しており下図を参照されたい）

[1] 古典研究会『和刻本漢籍隨筆集』第 20 輯、汲古書院、1978 年 3 月、3 頁。
[2] 古典研究会『和刻本漢籍隨筆集』第 20 輯の題解、汲古書院、1978 年 3 月。
[3] 古典研究会『和刻本漢詩集成・補篇』第 18 輯、汲古書院、1977 年 3 月、11 頁。



5『柔遠駅草』

『柔遠驛草』は、琉球勤学人のもう一人の教師であった王登瀛の詩集である。現存している詩集は『柔遠驛草』と『柳軒詩草』の二つの詩集が合冊になっているものである。『柔遠驛草』は林潭の序文に「康熙甲戌歳小春」と記されていることから、詩集が康熙 33 年（1694）に成立したことが分かる。『柔遠驛草』は主に柔遠駅周辺の風景や琉球人とのふれ合いを描いている。『柔遠駅草』は楼東十景の 10 首、楼西十景の 10 首を掲載しており、計 20 首の詩が収録されている。

『柳軒詩草』には琉球人に関わる詩が多く、それらの作品は康熙 33 年（1694）、34 年（1695）に作られたものが多数を占める。『柳軒詩草』は康熙 20 年代と、康熙 33 年、34 年の詩作によって構成されている。筆者が一首ずつ詩を作った年代を推測してみると、『柳軒詩草』は年代順に沿って詩が並べられている傾向がある。詩集の最後の詩が康熙 34 年の年末に作られていることから、詩集は康熙 34 年（1695）末あるいは康熙 35 年（1696）前後に成立したと推定できる。

「四本堂詩文集序」に、「癸酉槐黄歸自廬嶽，因受刖為諸及門所留設鐸于瓊河柔遠驛樓，日與諸子談經染翰（癸酉＜1693＞の科挙試験時、私は廬山から帰った。郷試に失敗し友人や門生を留めて柔遠駅で教え、毎日、諸君と四書五経を討論したり詩を作ったりしていた）」という記述があることから、康熙 32 年（1693）の秋、王登瀛は癸酉科郷試を受験し終えて勤学の師匠を始めている。『柔遠駅草』の王登瀛の序文には「歳甲戌，余別業其樓。風晨月夕，得與金浩然、周熙臣、程素文、鄭克文諸子憑眺江山。東則有湧泉石槁諸勝，西則有蓮峰雙塔諸奇（康熙甲戌年、私は柔遠駅で、朝夕、金浩然・周熙臣・程素文・鄭克文らと江山を眺めた。楼の東に「湧泉石槁」などの名勝があり、楼の西に「蓮峰雙塔」などの名勝がある。）」と書かれている。王登瀛の『柔遠駅草』は 32 題 40 首の詩を収録している。その内 16 首は琉球人に関わる詩である。この詩集から、王登瀛が柔遠駅で泊まって金浩然、周熙臣、程素文、鄭克文などの勤学と詩を詠んだり、柔遠駅近くの景色を鑑賞したり、また景勝の地を訪れたりしていたことが知れる。たまに、酒を携えて柔遠駅の勤学らを訪ねて夜遅くまで飲み、詩文を作ったりすることもあった。『柔遠駅草』は、柔遠駅における琉球人と清の詩人の交流の実体を知る貴重な詩集の一つである。

康熙 60 年（1721）、王登瀛は程順則の依頼により『晩香園梅詩』に跋文、『中山詩文集』に序文を寄せている。王登瀛は陳元輔より長生きしており、雍正 3 年（1725）まで柔遠駅で師匠として活躍していたことが資料から確認できる

王登瀛の『柔遠駅草』には陳元輔に関わる詩が 4 題 9 首[1]収録されている。一方、陳元輔の『枕山楼詩集』には王登瀛に関わる詩が僅か一首[2]のみである。『枕山楼詩集』は康熙 30 年（1691）に成立したものであるが、この前に王登瀛は中国各地を歴遊しており、福州にいなかった。王登瀛は勤学の教師になる前、すでに陳元輔との関係で柔遠駅に出入りしており、王登瀛の『柔遠駅草』は、康熙 30 年（1691）以降の作品が半分以上占め、上述したように陳元輔に関わる詩が多い。これは康熙 32 年（1693）から王登瀛が琉球人の教師を務め陳元輔との交流が深いことを示している。

6『中山詩文集』

『中山詩文集』は、陳元輔と交流の深かった程順則が編纂した康熙年間の琉球文人の作品集の総集である。琉球人の漢詩総集といえるが中には陳元輔が記した序文・抜文 6 篇及び排律 1 首があり、その他に琉球人が作った陳元輔に関わる詩 4 首[3]が収録されている。他に福州、北京の 42 名の詩人の詩や文章が収録されている。康熙年間の中国、琉球文人交流の様子を知るのに貴重な資料と言えよう。王登瀛の序文によれば、『中山詩文集』は康熙 60 年に成立して正式に福州で出版されたのは雍正 3 年である。琉球詩人の作品集は曽益の『執圭堂詩草』、蔡鐸の『観光堂詩草』、程順則の『雪堂燕遊草』、『雪堂雑組』、周新命の『翠雲楼詩箋』、程摶万『焚余稿』、福州文人たちの贈言詩集である『雪堂贈言』などである。

『中山詩文集』の篇首に鄭晃、王登瀛、任五倫の序を収録しおり、篇尾に任上喆の跋文がある。先行研究において『中山詩文集』の序文跋文の作者について紹介されてないので筆者は収集した資料に基づいてこれらの作者を紹介したい。鄭晃が『中山詩文集』を読むことを得るのは彼の甥子任鐸が康熙 58 年の琉球国王冊封に付随して琉球から「中山詩文若干」を持ち帰ったからである。そして「中山詩文集」を読んだ後退職した鄭晃は序文を書いた。鄭晃については『隕西県志』、『広東通志』の中に資料が残っている。

> 鄭晃福建福州人甲戌進士為隕縣令、署隕西兩次。凡所做申飭、禁諭、序記、圖解皆切風土人情、名華胥外集。後昇部曾廣東學政[4]。（鄭晃は福州人で、甲戌年に進士となり、隕県令を授けられて、かつ任期を一回延ばした。およそ申飭、禁諭、序記、図解を作る時はすべて地元の慣習、実情に応じている。『華胥外集』によって名を揚げた。後に部の職に昇任し、広東学政を兼任した）
>
> 鄭晃字二瞻福建瞻長樂人康熙甲戌進士。五十三年以禮部郎中任廣東學政。勤於校閲每至夜分不寐。一字一句必親加評騭。寸長必錄以人才難得不忍棄也。居以六經根底為言。謂士不通經雖工詞藻不過吟風弄月而已。於身心性命之學無裨也。論者是之[5]。（鄭晃は字は二瞻、福建長楽の人で、康熙甲戌年の進士である。康熙 53 年、礼部の郎中をもって広東学政に任じられている。校閲に勤め

[1]9 首は以下の通り。「冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻二首」「同林二恥陳昌其張庶咸宴集仁山樓」「送陳昌其之溫陵張元俟幕」「春仲喜林二恥竺天植陳昌其集仁山堂話舊」（清・陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年（1691）刻本国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894）

[2] 1 首は以下の通り。「冬夜同王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字」（清・陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年（1691）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894）

[3] 4 首は以下の通り。「留別陳昌其夫子」、「寄懐陳昌其夫子」「都門秋日寄懐閩中竺天植陳昌其兩夫子」、「戊寅元夕陳昌其夫子設鐸雪堂紀喜」（上里賢一 『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月）

[4] 清・程光第等纂『同治隕西縣志』（『中國地方志集成・湖北府縣志輯』第 62 冊、上海書店出版社 2006 年 10 月、150 頁）

[5] 清・阮元修、陳昌齊修『道光廣東通志』卷 256（『續修四庫全書』674 史部・地理類、上海古籍出版社、2002 年、353 頁）

てよく夜遅くまで寝ずに、一字、一句までに詳しく批評を付け加えた。人材を得るのが難しいと思いながら少々長所があればその人を採用した。生活中、必ず儒家の準則に沿っていた。士人は儒家の経典が分からなければ詩に巧みであるとしてもただ風雅ぶっているだけで、身心、生命に有利でないとよく言った。人々はこれを正しいとした）

この資料によれば、鄭晃は福州人で[1]、字は二瞻で、康熙 33 年進士に合格し、湖北隕西県令を任ぜられている。在任中業績が際立っていたことから隕西県令の任期を一度伸ばし、その後、康熙 53 年礼部郎中（正五品）に昇任し、広東省学政を兼任している。広東省学政の在任中には、真摯に人才を多く抜擢した。儒家の教えに基づいて自分の日常行動を制約していた。要するに官員として成績顕著で、声望が高い人物である。『閩侯県志』によると、鄭晃の著作は『狴犴晨鐘』、『粤東文誥』、『華胥内外集二卷』、『拜石山房近草詩集一卷』、『偶筆詩集二卷』、『無悶堂詩集四十卷』、『秋心集一卷』がある。詩人としての著作も豊富だといえる。

任五倫は雍正 3 年に福建布政使司照磨に任じられている。任五倫は序文で「余為館監得與諸大夫交[2]」と述べている。つまり、任五倫が任じられている照磨とは、柔遠駅を管理し、直接に琉球使節と接触する役職である。それで琉球からの使節を介して『中山詩文集』を読むことができた。琉球使節は任五倫に序文を要求している。任五倫については『昌黎県志』の中に資料が残っている。

任五倫字徽菴康熙庚辰科進士。渾厚和平不矜崖岸。宰湖北漢陽甫下車、剔宿弊革火耗斥墨吏賑民灾善政幾不勝數。公暇猶箋經註史與及門講論不輟。德政見江漢仁聲集。著有徽五真稿[3]。（任五倫は字は徽菴、康熙庚辰科の進士である。人となりが純朴敦厚で親しみやすい人物であった。湖北漢陽を治めた時、地元の長く存在している弊害を取り除き、汚職の吏を訓戒し、災害を治理し、民を救済するなどの善政が数え切れなかった。任公は暇な時、経史を研究し、弟子と討論することが絶えなかった。その徳政は『江漢仁聲集』から見られる。著作は『徽五真稿』がある）

以上の資料を見ると任五倫は、字は徽菴、人となりは純朴敦厚で親しみやすい人物であったらしい。康熙 39 年（1700）進士に合格し、湖北漢陽令を授けられた。就任して直ぐ地元の弊害を取り除き、汚職の吏を訓戒し、民の災害を救済するなど善政が数え切れない。その善政は『江漢仁声集』に記録されている。公務の暇に経典、史書を研究して地元の士人みなに尊敬されているという。

王登瀛については第一章第三節で詳しく論述する。

第二節　陳元輔の経歴について

清代、琉球王国からは多くの「勤学」と呼ばれる留学生が派遣されているが、従来の歴史文献資料では、勤学が福州で留学期間にどうような学習生活を過ごしたのか、よくわかっていない。家譜資料にも往々にして「為読書習礼事（読書習礼の事の為）」とのみ記しているだけである。また福州留学中に、どのような人物に師事していたのかも、ほとんど知られていない。その中で、陳元輔は幸運な

---

[1] 『隕西県志』の中では鄭晃は福州人と記し、『広東通志』の中では長楽人と記している。『長楽県志』には鄭晃に関する資料はない。『閩侯県志』の中に鄭晃に関する記述があることから鄭晃は福州人と理解したほうがいい。

[2] 上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、56 頁。

[3] 陶宗奇纂『民國昌黎県志』巻 8（『中國地方志集成・河北府縣志輯』第 20 冊、上海書店出版社、2006 年 10 月、343 頁）

一人であるといえる。少なくとも彼の名前は後人に知られており、彼の詩文を後人が読むこともできる。彼の弟子の一人は琉球王国時代において大儒学者である程順則である。陳元輔の著作は中国ではほとんど知られず、日本においてその存在が確認されている。彼の著作は四種で計 21 点の版本が刊行されている（本節末の「陳元輔著作保存状況表」参照されたい）。また、彼は書家としても知られていた。『妙跡図録・漢画部』[1]に陳元輔の草書の書作が収録されており、それには高い評価[2]がなされている。『妙跡図録・漢画部』では陳元輔について、以下の様に紹介している。

> 陳元輔字昌其、閩中人、候補縣丞。康熙己巳使琉球、有枕山樓集、中山詩文集、昌其又有枕山樓詩話能得詩中三味矣。（陳元輔、字は昌其、閩中の人、県丞に補う。康熙己巳琉球に使する。枕山楼集、中山詩文集、又枕山楼詩話があり、能く詩の中で三味（奥義）を得る）

『妙跡図録・漢画部』の陳元輔に関わる記載[3]は『民国閩侯県志』より詳しい。しかし、その中の「康熙己巳（1689）使琉球」という記録は誤伝である。この書は明治 42 年（1909）に出版されているが、陳元輔の『枕山楼集』、『枕山楼詩話』、『中山詩文集』の中の詩文や彼の書は日本ではかなり知られていた[4]。「陳元輔の偽筆ご鰻の食損じ」には、明治 4 年（1871）、西郷隆盛が薩州における某氏所蔵の陳元輔の詩巻を愛し、神田橋（かんたはし）外の藩邸で常に離さず臨書していたことが記されている。また、『妙跡図録』に著作として「中山詩文集あり」と記しているが、『中山詩文集』は陳元輔の著作ではない。『中山詩文集』には彼の詩一首・序文・伝記・跋文合計６篇[5]が収録されており、他にもまた「程大母恭人伝」[6]「徵詩送別引」[7]「指南広義序」などの琉球人に関わる文章が見られる。

勤学師匠の中で作品が残り、このように日本でも知られている人物は陳元輔以外にいない。しかし、陳元輔の生涯についてはほとんど知られていない。陳元輔は布衣（官職に就いてない知識人）であることから、歴史文献資料から陳元輔の生涯を描き出すことには限界がある。

先行研究において陳元輔に関わる研究は、上里賢一の「陳元輔の漢詩と琉球―『枕山楼詩集』を中心にして」[8]が嚆矢であろう。その中で、上里は陳元輔の作品集である『枕山楼詩集』を取り上げ、陳元輔と弟子の程順則との関係、そして『枕山楼詩集』に収録された琉球人に関わる詩に解釈をつけて紹介している。

陳元輔については、清代福州の人物で程順則などの琉球勤学人の師匠であることは知られているが、上述したように、歴史文献史料が限られ、先行研究において陳元輔の人生履歴に関してはほとんど研究がなされていない。しかし、陳元輔に関わる文学資料を通じて、陳元輔の人生軌跡を描くことは可

---

[1] 神木猶之助編『妙跡図録・漢画部』、林平次郎、1909 年 7 月。

[2] 「此幅展之只見雄豪之態，諦觀之覺字與心應腕與筆酬，跌宕有顛素之趣。」（神木猶之助編『妙跡図録・漢画部』林平次郎、1909 年 7 月、253 頁）

[3]「枕山楼集陳元輔順治間布衣」欧陽英修、陳衍纂『民国閩侯県志』1933 年本（『中国地方志集成・福建府縣志集』第 2 冊収録、上海書店出版社、2000 年 10 月、619 頁）

[4] 通俗教育委員会編「通俗教育志の巻」（『逸話文庫』の「通俗教育志の巻」、大倉書店、1911 年、219 頁）

[5] 6 篇は以下の通り。「執圭堂詩草跋」、「観光堂詩草序」、「雪堂紀栄詩跋」、「雪堂燕游草序」、「中山自了伝」、「程仲扶焚余稿序」（上里賢一 校訂『中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月）。

[6]名護市史編纂室編『名護親方程順則資料集・１・人物・伝記編』、名護市教育委員会出版、2005 年 3 月、121 頁。

[7]那覇市企画部市史編集室『那覇市史』資料編第 1 巻 6「家譜資料二」（下）、那覇市企画部市史編集室発行、1980 年 3 月、556 頁。

[8]上里賢一「陳元輔の漢詩と琉球―『枕山楼詩集』を中心にして」（財団法人沖縄県文化振興会、公文書館管理部資料編集室編集『歴代宝案研究』第 10 号、沖縄県教育委員会発行、1999 年 3 月、47 頁―69 頁）。

能である。『中山詩文集』に「晉安陳元輔」[1]の記載があることから、陳元輔の出身地は晋安（現福州市晋安区）であることが分かる。以下、『枕山楼詩集』（「林潭序」）『枕山楼課児詩話』（「戴翼序」）、「曾歴跋文」）、『枕山楼文集』（「與周太學書」）、『晩香園梅詩』（「王登瀛跋文」）に基づき、陳元輔の経歴（生涯）について考察してみたい。

第一項　陳元輔の生年と幼少期

まず、陳元輔の生年についてであるが、『詩集』の林潭の序文に、「自余庚戌得交昌其，其時年方束髪（康熙庚戌年に私は昌其と知遇を得て、その時昌其は「束髪」の年になったばかりであった）」と記されている。「庚戌」は康熙 9 年（1670）である。「束髪」は古代、漢民族の男子が成童（15 歳）に達して髪を頭の上に結ぶことをいう（清になって辮髪を強要され「束髪」の慣習を禁じている）。15 歳-20 歳の間も「束髪」と称するが、「時年方束髪(その時、年齢は束髪したばかりであった)」という記述から、陳元輔が当時 15 歳になったばかりであることを確認できる。そこから逆算すると、陳元輔は清の順治 12 年（1655）に誕生したと推定される。

「癖耽集序」によれば康熙 23 年の時点で陳元輔はすでに竺天植と 20 年[2]ぐらい知り合っている。逆算すると康熙 3 年（1664）、陳元輔は 9 歳の頃に、当時 27 歳の竺天植[3]と知遇を得ていることになる。陳元輔は幼少時から文才が際立っていた。康熙 4 年（1665）の秋、10 歳の陳元輔は年齢の近い曽子浴と交遊を始めている。後に曽子浴は陳元輔に連れられて柔遠駅に至り、琉球人と交流した人物である。康熙年間、福州において、曽子浴のほうが陳元輔より名が知られていた。『竹間十日話』[4]には、康熙年間、蔣衡、張鉉、曾孫瀾、陳潤、陳登禧、黄元埈、蕭楚、鍾元聲、曾沂、林侗、林鼎復、鄭秉憲十二人の詩が世に知られ、当時彼らを「十二生」と称していたことが記されている。その中の曽沂は曽子浴のことである。曽子浴は曽士甲（『閩詩伝初集』の編纂者）の弟、候官の布衣で『潜園集』の著作がある。曽子浴は全国各地を遊歴し福州に長期定住することがなかった。陳元輔が曽子浴のために作った 4 首の中の 3 首は「曽子浴を憶う」、あるいは「曽子浴を見送る」という内容であった。

康熙 9 年(1670)、陳元輔はもう一人の琉球に関わる重要な人物である林潭と出会う。林潭は明末の諸生（秀才：清において「府学」「県学」の試験を通った人は「進学員」となり、秀才と称された）であり、陳元輔との年齢差は 30 歳ほどあったと思われる。陳元輔と林潭の交遊は「忘年交(年齢差をも越える関係)」とされ、林潭の『詩集』序文には少年時代の陳元輔に関して以下の記述が見られる。

（陳元輔）慎交游、愛顰笑、嘯讀一室、風雨寒暑弗輟。余間披其帷、相與較論售事業。覘其胸中眼中，若在峨眉天半矣。而月夕花辰時、借吟詠寄興清新雋永、恍如月立空山水流殘夜、無一點沉埃氣。（＜陳元輔は＞人とのつきあいは慎重で、顔に表情があらわれず、声をあげて詩書を読み耽り、雨の日も、風の日も、夏も冬もやめることはなかった。私はたまに陳元輔の部屋の帷帳（いちょう）を開けて中に入って、世事（せじ）について語り合うことがあった。彼の胸中や彼の眼中を覗くと、まるで彼

---

[1] 「庚午花朝晉安陳元輔昌其題於瓊河之絳桃樹下」（上里賢一 『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、 108 頁）

[2]「予與鏡筠交二十年」「癖耽集序」（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵漢 10894、58 頁）

[3]竺天植は康熙年間において琉球人と深く交流した人物である。程順則、周新命などが竺天植の下で学習した。康熙二十三年（1684）『六諭衍義』を程順則に贈り、それを程順則が福州で復刻刊行し、後に日本でも普及した。

[4] 郭柏蒼輯『竹間十日話』、福州地方志編纂委員会整理、2001 年 7 月、10 頁。

の思いが峨嵋山上の天空にでもあるようであった。月や花を愛でる時には、詩に思いを寄せ、清新な詩句は奥ゆかしく、まるで空山の間に月が上り、川が静かに流れる様子を眺めるように、俗世にまみれたところが一点もない。）

少年時代の陳元輔は、子供には似つかわしくない落ち着きと、勤勉さを備えている。まだ若いけど志向と眼光も高かったようである。

第二項　科挙の受験について

林潭との交友を始めた二年後の康熙 11 年(1672)、壬子科郷試が行われた。この年、17 歳の陳元輔は郷試を受験したものと考えられる。しかし、陳元輔はこれに落第し、落胆して客との面会を謝絶するほどであったという[1]。親友の竺天植でさえも会うことが少なくなった。

その後、三藩の乱の影響で、福州府では郷試[2]が九年間実施されず、陳元輔は、郷試を受験する機会を失ってしまう。『枕山楼文集』の中の「與周太學書」に以下の記述がある。

嗟夫 博學宏詞之聘、曠典難逢、鄉舉里選之條、古風已渺 （ああ、博學宏詞(科挙)の選抜の大典には逢いがたく、典郷舉里選(郷試)の規定の古風は已に遙か遠くに去っていったようである。）

これは、郷試を受験できずに、立身出世の道が閉ざされたことを嘆く傷心した気持ちを読んだものである。実際、乾隆『福州府志・選挙』の挙人の条には、康熙 14 年（1675)、康熙 17 年（1678）の挙人名簿が空白となっており、この間は科挙が行われていなかったことが分かる。

また、『枕山楼文集』「癖耽集序」には、次のような記述がある。

丙辰烽火燭天,羽書旁午。余因鎩羽藝林,慨然慕棄繻生定遠侯之為人。遂投筆仗, 劍浪賦從戎。（丙辰の烽火は天にともり、羽書が頻繁にやりとりされた。私は、藝林に鎩羽したことで、慨然として官途を棄てて、定遠侯の人となる。かくて筆を投げ、劍をもって浪賦し従軍した。）

「丙辰」は康熙 15 年（1676）のことで、この年は三藩の乱が全国的に広がり、反乱軍がちょうど勢いのあった時期にあたる。また、「鎩羽藝林」は科挙に失敗する意味であり、この句から康熙 15 年（1676）には戦火が全国に蔓延して、陳元輔は科挙に失敗した後、科挙をあきらめて従軍したことが分かる。この時、受験した可能性のある郷試は、康熙 9（1670）年と 11 年（1672）のいずれかであると考えられる。

仮に彼が康熙 9 年の庚戌科の郷試を受けたとすれば、当時の陳元輔の年齢はわずか 15 歳ということになる。15 歳の年齢は通常では『大学』を勉強し始めたところで、康熙 9 年の庚戌科の郷試を受験した可能性は薄い。

よって彼が受験に失敗したのは、康熙 11 年（1672）の壬午科の郷試であると推察される。その後、康熙 19 年（1680）に福州で郷試が開かれているが、これに陳元輔が受験したかは不明である。とも

---

[1] 「余方攻舉子業、杜門謝客。與鏡筠見甚疎丙辰烽火燭天羽書旁午余因鎩羽藝林」「癖耽集序」（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、57 頁)。

[2] 「郷試」は十二支の子、午、卯、酉の年に合わせて当年の八月に行われていた。郷試の合格者は「挙人」となって翌年の春北京で会試に参加することができる。郷試に参加する資格を得るために秀才にならなければならなかった。

かく陳元輔は科挙の挙人の資格を得ることはなかった。

第三項　軍幕の時期について

陳元輔が軍幕に入る直接的な原因は三藩の乱が勃発していることである。三藩の乱とは康熙 12 年から康熙 20 年まで（1673－1681）中国西南から東南、甘粛、陝西にかけて起こった軍事反乱である。前明の清に投降した将軍呉三桂、尚可喜、耿継茂は清の建国に軍功が高かったので、順治帝は呉三桂を平西王に封じ、尚可喜を平南王に封じ、耿継茂を靖南王に封じた。呉三桂は雲南に駐屯し、尚可喜、耿継茂は広州に駐屯した。順治 18 年、耿継茂は福州に遷された。康熙 12 年の春、康熙帝はこの三つの藩王を廃止する聖旨を下した。呉三桂は同年の 11 月に雲南巡撫朱国治を殺し、反乱が起こった。康熙 12 年の時点で、靖南王位はすでに耿継茂の孫耿精忠に伝わっていた。康熙 13 年 3 月、耿精忠は范承謨を拘禁し、反乱を起こした。康熙 15 年、尚可喜の息子尚之信は父を拘禁し、呉三桂の反乱に応じて広州で反乱を起こした。呉三桂軍は雲南、四川、貴州、湖南を占領し、広東は尚之信に占有され、福建では耿精忠、台湾では鄭経が勢力を保っていた。また、広西省で孫延齢が反乱に応えた。一時期、戦火は清の半分を席巻する。しかし、康熙 15 年から康熙 17 年の二年間のうちに、耿精忠、尚之信は清に帰順して、陝西省の王輔臣が清に敗れて天下の趨勢は清朝に向かっていた。康熙 20 年（1681）、清軍が雲南省城を破り、世孫呉世璠が自殺して三藩の乱が終わったが、福建では台湾鄭氏との戦いが続いていた。康熙 22 年 8 月鄭克塽が投降してすべての反乱がやっと平定された。

次に、「與周太學書」と『枕山楼課児詩話』の戴翼の序文の記述に基づき、陳元輔の従軍期について考えたい。まず「與周太學書」には以下の記述がある。

> 前聞寧海元戎拔擢多人、閣下恩臺求賢若渴所以擊楫渡江拜于馬首。（先に、寧海元戎、多くの人を抜擢して、閣下はまた才能のある者を求めていると聞いたことから、私は江を渡って軍門に拝して従軍した）

文中の「寧海元戎」は、寧海の軍隊を意味する。『清史稿・聖祖本紀』の十五年条に「寧海將軍貝子傅拉塔卒于軍中[1]（寧海将軍貝子付拉塔は軍中にて死去す。）」とあり、「寧海」とは「寧海将軍」を指している。「寧海将軍」は「傅拉塔（福拉塔）」と呼ばれ、爵位は「貝子」[2]にあたり、皇帝の宗室である。耿精忠が反逆した後、康熙帝は康親王を奉命大将軍に任命し、寧海将軍・傅拉塔と共に耿精忠を鎮圧するよう命じる。『閩中紀略』によって康熙 15 年 8 月 21 日から康親王傑書は仙霞関、浦城、建寧、延平の戦いで連勝し、耿精忠は 9 月 18 日に投降した。耿精忠は原職に採用され爵位を回復させられる。10 月 5 日、康親王は福州府に至った。[3]同年冬、寧海将軍傅拉塔は疫病で死去している。

また『枕山楼課児詩話』の戴翼の序文には以下のようにある。

> 元戎喇公延之、帷幄中以軍功敘錄、提軍張公徵聘入幕以國士待之。（元戎の喇公がこれを延べ、野営で軍功を記録し、提軍・張公が招聘し國士としてこれを待つ）

この記述によって陳元輔が「元戎の喇公」に採用され、寧海軍に従ったことが分かる。しかし、「與

---

[1] 趙爾巽撰『清史稿』巻 6 第 02 冊、中華書局出版社、1986 年 10 月、194 頁。
[2] 清の十二等爵位の第四級。
[3] 清・皋虞鄰『閩難記』（『叢書集成續編』第 280 冊收錄、新文丰出版公司、1989 年 7 月、371 頁）

周太學書」の記述と、『枕山楼課児詩話』序文における、寧海将軍の名前には齟齬があり、前者では「傅拉塔」となっているが、後者では「喇公」となっており、両者は一致しない。

『清史稿・列伝・喇哈達』によると、もとの寧海将軍である傅拉塔が亡くなった後、後任に喇哈達をあて、寧海将軍としている。よって「喇公」は「喇哈達」[1]であることが分かる。この役職の交替は、陳元輔の従軍時期に行われたため、「與周太學書」の記述と『枕山楼課児詩話』序文の記述は矛盾しない。それで、丙辰康熙 15 年（1676 年)、陳元輔は喇哈達に採用されて軍幕僚となったことが分かる。

では、なぜ陳元輔は従軍したのであろうか。康熙 11 年（1672 年)、科挙に失敗した陳元輔は意気消沈する。『詩集』の「林潭序」によると「昌其癸丑（康熙 12 年 1673 年）以後，詩多感愴牢騒，猶之少陵在曲江夔府諸作，一字一涙無非以遇與心違，懐才莫展耳」（昌其は癸丑以後、詩の多くがたましいを失ったようで落ち着かず、まるで少陵の曲江夔府に在っての諸作のごとく、一字一涙するようで、遇するもの心と違い、才を懐いていても、それを発揮することができないでいる）とある。康熙 13 年と 14 年、林潭は福州の第一山（烏石山）で学問を修めていたため、近隣の陳元輔と親しく交流することができたようであるが、この時期、林潭によると[2]、陳元輔はある時は梧桐の下で琴を弾き、ある時は山に登り、川を渡って友達と宴を開き、ある時は書物を焼いて、硯を砕いて号泣することもあったという。この時期、陳元輔は傷心し気持ちの浮き沈みが激しい状態にあった。つまり、科挙試験の失敗は陳元輔に精神的に大きな影響を与えたことがうかがえる。

さらに康熙 15 年（1676)、戦争が激しく続き、陳元輔の周りの友人はみんな官府に入って公務に従事していた。陳元輔はただ友人の赴任を祝うために詩文を作って贈るだけであったという[3]。科挙の失敗の後、自身も功績を立てることを切に望んでおり、友人の影響も重なり、寧海将軍への従軍を募る知らせを聞きつけ、応募するに至った[4]。この時、陳元輔は 21 歳であった。

第四項　三藩の乱後の足跡

ここでは「與周太學書」と「癖耽集序」に基づき、陳元輔の三藩の乱後の足跡について考察する。康熙 15 年から康熙 21 年にかけての 7 年間、陳元輔は従軍といっても武器を持って戦うのではなく、陳元輔は寧海将軍喇哈達の幕職として文書を扱う仕事に従事していたと考えられる。康熙 16～19 年、寧海将軍は軍隊を率いて福建省内の反乱を平定している。康熙 21 年に、満州軍撤収の命が出て喇哈達は北京に帰っている。その後、陳元輔は康熙 22 年（1683）に遊歴に出ている。

康熙 22 年（1683）の冬、陳元輔は湖北省への旅に出かけた。彼は福州、閩清、龍岩州、南昌、九江、武昌、仙桃、天門を経て湖北省帰州の丹陽に至るまでの約 1500 キロメートルの道程を歩き、その行程で 27 首の詩を作っている。そのうち、陳元輔は天門県で 8 首の詩を作っていることから、天門県での滞在は長かったものと考えられる。もともと、陳元輔は湖北の遊歴が終わってから北京に行くつもりであったが、旅費不足で福州に戻ることを余儀なくされた。ゆえに、陳元輔は湖北の帰州ま

---

[1]喇哈達については、『清史稿・列伝』巻 254 に詳しい。

[2]「有時見其涉江陟嶺、作平原十日歡矣。有時見其焚書碎硯慟哭青山矣、有時見其痛飲讀楚辭」（「林潭序」清・陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年（1691）刻本　国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、8 頁。）

[3]「同時、諸君子悉膺民社、而予祗賦詩送人做郡也（同時、諸君子はみな地方の役所に働いている。私はといえば、彼らが赴任する祝いのために、ただ詩を作って送っているのみ)」「癖耽集序」（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、57 頁）

[4]「前聞寧海元戎拔擢多人、閣下恩臺求賢若渴、所以擊楫渡江拜于馬首（前、寧海将軍の軍隊に何名か抜擢すると聞いた。閣下は人材を求めているということなので、私は舟で江を渡って閣下に軍門で拝した。)」「與周太学書」（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、22 頁）

で進んでいたが、天門に引き返し、天門でしばらく滞在し、その後福州に戻っている。福州から湖北までの 3000 キロの往復の道のりに約一年かけたと推測される。陳元輔はこの間、景勝の地を巡り、湖北の文人とも交遊している。陳元輔は天門県で福州同郷の林成璉の家に寄寓していた。林成璉[1]は琉球人とも関係がある人物である。『中山詩文集』に林成璉が程順則に贈った詩が収録されている。陳元輔が湖北に行った時、林成璉は天門県の乾灘市で巡検使の職についていた。天門県で陳元輔は鍾惺と譚元春[2]の祠堂を拝謁し、天門県の有名な文人である鄒山[3]父子、沔陽州判の陸琬[4]とかなり親しく交流している。

第五項　琉球人の師匠としての陳元輔

陳元輔が程順則との知遇を得たのは、康熙 23 年（1684）の冬に竺天植を通じてであろうと考えられる。程順則は、その年に進貢使節として福州から北京へ行っているが[5]、上京直前に竺天植の門をたたき面識を得ている。陳元輔もまたその年に、湖北省から福州に戻っており、ちょうど竺天植から『癖耽集』の序文を書くよう依頼されている。こうした状況から、おそらく竺天植を介して陳元輔は程順則を紹介されたと思われる。この年から、陳元輔は正式に琉球の勤学人の師匠を務めている。陳元輔は 29 歳、程順則は 22 歳であった。康熙 26 年（1687）程順則は帰国するまで陳元輔に約三年間師事している。陳元輔は後に、梁得済、梁得声、陳魯水、金浩然、周新命、蔡肇功などの教師となっている。

陳元輔は琉球人の教師を務めている間の康熙 27 年（1688）に、一時教師の職を辞し、泉州の「提軍張公」[6]の幕府に入っている。「張公」とは泉州に駐屯する福建陸路提督軍門張雲翼であろう。陳元輔が泉州に向かう際、王登瀛は「送陳昌其之溫陵張元矦幕」という詩を贈っている。この詩題から張元矦の身分を確認することができる。唐以前、泉州地域は「温陵」と呼ばれていた。周代において諸侯の長が「元侯」と呼ばれていたが、後に「元矦」は省レベルの地方の大官僚を指すようになる。つまり、陳元輔は泉州の張姓の大官僚の幕に入ったことがわかる。『枕山楼課児詩話』の戴翼の序に「提軍張公徴聘入幕以國士待之」とあり、陳元輔を雇った張公は泉州の提軍であったことが分かる。乾隆『泉州府志』によると、省レベルの武職に福建陸路提督軍門という職名がある。「福建陸路提督軍門」（以下提軍と）の略語がまさに「提軍」である。「提軍」は武職の従一品であり、張公はさらに「元矦」という位にある大官僚であった。「提軍」に就いた張姓の人は「張雲翼」「張起雲」の二人のみである。「張起雲」[7]は雍正年 9 年（1731）に「提軍」に就いていることから、この人は陳元輔を雇った張公ではない。「張雲翼」は康熙 25 年（1686）、「提軍」を授けられている。おそらく張雲翼が張公であろう。この人はただの武将ではなく文人士大夫で、詩酒で文を論じ、さらに囲碁をやりながら詩を

---

[1]『乾隆天門縣志』によって林成璉康熙 21 年（1682）天門県乾灘巡検に任じた。
[2]明末の竟陵詩派の代表人物。
[3]鄒山については『玉山県志』巻 7 に「字鴻景、號禹封景陵人康熙元年九月任玉山縣令」とある。（李實福『乾隆玉山県志』（故宮博物院編『故宮珍本叢刊・江西府県志輯』、海南出版社、2001 年 4 月、50 頁）
[4]光緒『沔陽州志』には，陸琬について名は琬、錢塘人で，康熙 19 年（1680）に沔陽州判に任じられたことが記されている。（鍾廷瑞修『沔陽州志』、上海書店出版社編『中国地方府県志集成・湖北府県志輯』第 47 冊、上海書店出版社、2000 年 10 月、84 頁）。
[5] この時に同行したのは康熙二十一年から福州に滞留していた琉球人・鄭克叙であることが、〔寄懐長史鄭克敘〕（上里賢一校訂『中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、211 頁）から窺える。
[6]提軍張公は『柔遠駅草』の「送陳昌其之溫陵張元庚幕」の詩題にも現れる。（清・王登瀛『柔遠駅草』康熙 33 年（1693）序刊本、国立公文書館内閣文庫蔵、漢書類 10895 號、26 頁）
[7]懐蔭布修、郭賡武・黄任纂乾隆『泉州府志』巻 32・「名宦四」（『中国地方府県志集成・福建府県志輯』第 22 冊収録、上海書店出版社、2000 年 10 月、120 頁）

作ることもあったようで、『式古堂詩文集』が後世に伝わっている。「儒将（学者の風格のある将軍のこと）」であり、「武将」でもある張雲翼が文人である陳元輔を重視して雇ったものと思われる。

一方、張雲翼『式古堂集』の「鼓山記」[1]によると、張雲翼は康熙 26 年（1687）の九月に公務のために福州に行っている。どういったきっかけで陳元輔は張雲翼と知遇を得たのかは知れないが、陳元輔も自ら「自薦書」[2]を書いて張雲翼に提出している。そうしたことからも、陳元輔が康熙 27 年（1688）に泉州の張雲翼の幕に行ったことが確定できる。一方、康熙 27 年（1688）、程順則は一回目の中国派遣を終え帰国しているが、陳元輔も張雲翼の幕で長くは勤めず、康熙 28 年（1689）の春以前に福州に戻っている。大官僚とも知遇を得、幕での経歴を有する陳元輔は一般の福州の文人ではない。陳元輔は官途において立身出世をすることはなかったが、後に「候補縣丞」を授けられている。この「候補縣丞」は実務をともなわない職、名誉称号に相当する。陳元輔が記した程順則の母の伝記である「程大母恭人傳」の署名も「吏部候補縣丞」である。

第六項　陳元輔の家と家族について

ここでは『枕山楼文集』の序文に基づき、陳元輔の家と家族について考察したい。

『枕山楼文集』に収録されている「哭三叔文」に以下の内容を記している。

> 躋身廟堂、領城社、名登策府者、遠不具論、即近而雙山季山公、兩擢巍科同膺顯宦、卓卓表功列于一時。（朝廷に登りつめて、城を治めて、国の史書に載り、遠い時代の人物が具さには論ぜず、近い時代は双山、季山が科挙に合格して要職に居り、光り輝いた功績を建てた）

これによれば陳元輔の門中のうち、先祖の二人は科挙に合格したようである。いわゆる、陳元輔は「書香門第」の出身である。「雙山」、「季山」は陳元輔の先祖であるが、この二人を知れば陳元輔の出身の門第がもっと深く理解できる。これが理解できれば、なぜ科挙に失敗した陳元輔が若くて今後チャンスがまたあるのに意気消沈していたか推測できる。一つの原因は陳元輔の家がかつて二人の科挙合格者を出した名門であって陳元輔は先祖の栄光を再現させたい理想を持っている。「躋身廟堂、領城社、名登策府者」は陳元輔の先祖、「雙山公」「季山公」が、朝廷の中央の高官に任じられて、地元では文壇のリーダと認められて、名を天子に知られている人物であることを言う。「雙山」「季山」がいったい誰か、提供してくれる手がかりも僅に二文字である。「雙山」「季山」は字か、号かわからない。『枕山楼詩集』の「喜叔志三入泮」の自注で「先大夫雙山公曾官楚藩（先大夫、雙山公曾て楚藩に官す）」と述べている。陳雙山はかつて湖北、湖南省のあたりの官に任じられている。なぜ陳元輔は遊歴の時湖北省に行きたかったのか。それは、先祖がかつて働いているところを見にいきたいという欲求があったからであろう。この二点の手がかりを用いて調べると、『万暦福州府志』の中に陳元珂という人物の履歴に注目した。彼の職暦については以下の通りである。

> 陳元珂、字仲聲、歴兩京戸部郎中、金華知府、浙江副使、湖廣參政。[3]（陳元珂、字は仲声、両京戸部郎中、金華知府、浙江副使、湖広参政に歴任した。）

---

[1]「丁卯秋九月余自泉至福州郡、公務畢因出東門為鼓山之游」清・張雲翼『式古堂集』（『清代詩文集彙編』編纂委員会編『清代詩文集彙編』第 176 冊、上海古籍出版社、2010 年 12 月、671 頁）。

[2]　自薦書は以下の通り。「上覺内閣啓」（『枕山楼文集』第四篇）（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1892）刻本国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894）

[3] 佚名『萬暦福州府志』巻 17（『日本藏中國罕見地方志叢刊』収録、書目文獻出版社、1990 年 2 月、171 頁）

以上の資料の「湖廣參政」は「先大夫雙山公曾官楚藩」と一致している。また『烏石山志』にあるこの「陳元珂」の伝記がある。その内容は次の通り。

陳元珂,字仲聲、閩清人、嘉靖乙未進士、以戸部郎謫判德慶州、遷南雄府同知、視郡篆、擒妖賊陳永富、楊天慶等。擢金華知府、政尚嚴明、重風教、一郡稱治。昇寧紹兵備道、建狼牙營、筑余姚城。佐督府胡宗憲討倭賊于海上、余黨攻舟山、督府檄元珂監軍大破之。晉湖廣參政、尋罷。元珂少壯、居閩山下、退居時、適福州三衛卒變。元珂偕侍郎懷安馬森出諭之、衛卒隨定。元珂因自少至老居閩山、烏石山、因自號其集為『雙山集』。著有『三山詩選』及『居婺文錄』四卷（中略）按：晉安風雅元珂著有『陳参藩集』六卷。[1]（陳元珂、字は仲声、閩清の人、嘉靖乙未進士である。戸部郎中を以て徳慶州判に左遷された。南雄府同知に転職させられ、郡の公務を務める時、悪人陳永富、楊天慶等を捕らえる。金華知府に昇任して厳しく施政し、文教を重んじ、郡を安定させた。寧紹兵道に昇任して、狼牙営を建て、余姚城を築いた。督府胡宗憲を補佐して海で倭寇を討伐した。残党が舟山を攻撃するが、陳元珂が軍を率いて倭寇を破った。湖広参政に昇任するが暫くして罷免された。元珂は若い時、閩山に住んで、退官後、福州の三衛兵士の兵変に会った。元珂、侍郎懷安、馬森とともに兵士たちを勧誘して兵士が安定した。元珂は若い時、閩山に住んで、年寄の時に烏石山に住んでいるので自らその詩集を『双山集』とした。『三山詩選』、『居婺文錄』四巻、注：『晋安風雅』の中に元珂の『陳参藩集』があると記している）

この資料に見える『雙山集』は、「雙山公」の名と一致している。陳元珂はすなわち陳元輔の先祖の「雙山公」である。また陳元珂は文官となった時地元の治安を安定させて風教を重んじていた。さらに武官の履歴もある。「寧紹兵備」に任じられている時、倭寇を破る功績を建てた。退官した後、福州に戻って福州の軍事変乱と遇ったが陳元珂は自分の声望を用いて兵士を勧誘して、兵士を安定させた。文人としても著作が多い。陳元輔が若くして軍幕に身を投じたもの、先祖がすでに手本を示していたのである。もう一人の「季山公」について有用な手がかりとなる資料が見当たらない。

そして陳元輔の家族についてであるが、子供が二人いたようである。陳元輔は楊昌任、戴翼の二人と姻戚関係を結んでいる。戴翼は福州府学の「儒学教諭（教諭は、清の府学、県学の教員のこと）」であった。陳元輔の子供の中の一人は、陳文雄である。『中山詩文集』には陳文雄の詩が収録されており、『枕山楼課児詩話』に彼の跋文が収録されている。

康熙 37 年（1698）、陳元輔が程順則に贈った贈言詩の署名は「候補縣丞[2]」で、前述したように「程大母恭人傳」の署名も「吏部候補縣丞」とある。科挙に失敗した陳元輔自身は長く官途につくことはなかったが、康熙 37 年（1698）或いはそれ以前に候補縣丞といった官職についていたことが知れる。

第七項　陳元輔の没年

ここでは『晩香園梅詩』の王登瀛の跋文と『枕山楼課児詩話』における曽歴の跋文から陳元輔の没年について考証する。

康熙 47 年（1708）、陳元輔は程順則の夭折した子程搏萬の詩集である『焚余稿』に序文を寄せている。これは陳元輔の最後の作品とみられる。康熙 47 年（1708）以後は、彼の作品の存在が確認でき

[1] 清・郭柏蒼纂『烏石山志』、福州市地方志編纂委員会、2001 年 7 月、209 頁。
[2] 上里賢一　『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、232 頁。

ないことから、彼が亡くなったのは康熙 48 年（1709）以降と思われる。

では、48 年以降いつ亡くなったのであろうか。それは『晩香園梅詩』の王登瀛の跋文、『枕山楼課児詩話』の曽歴の跋文を通して推測できる。『晩香園梅詩』の王登瀛の跋文は康熙 60 年（1721）に書かれたものであるが、このなかに「是以人亡簡斷、噫今昌其亦已逝矣（ここに人死亡し音信も途絶える。ああ昌其（陳元輔の字）もまた逝く）」と記されているから、康熙 60 年（1721）の時点で陳元輔が亡くなっていたことが知られる。よって彼の死去は康熙 48 年（1709）以降、康熙 60 年（1721）以前と推察される。

曽歴の跋文には陳元輔について、「無奈久炙方殷、歸期相迫、返棹滄波言旋。故國唯與有志者、遠奉津梁于萬里而已。未幾傳聞先生巫陽有招、玉樓成賦。痛哲人之已逝」と記されている。ここから曽歴が帰国後、ほどなくして陳元輔が亡くなった消息を得ていたことが分かる。曽歴が帰国したのは康熙 48 年 6 月 30 日である。曽歴に陳元輔死亡の消息をもたらしたのは、その後派遣された進貢船での帰国者らであったであろう。康熙 49 年、福州に行く進貢船が二隻あった。この二隻の船が帰国したのは康熙 50 年である。つまり、曽歴が陳元輔死亡の消息を得たのは康熙 50 年のことである。とすると、陳元輔が亡くなったのは、曽歴が帰国した康熙 48 年から進貢船が福州を出港した康熙 50 年の間だということになる。康熙 48 年（1709）であれば 54 歳、康熙 49 年（1710）であれば 55 歳、康熙 50 年（1711）であれば 56 歳にして、陳元輔はこの世を去ったということになる。

しかし、陳元輔の没年にさらに接近する根拠がある。康熙 51 年、程順則は琉球の掌翰使として薩摩を経由して江戸に行った。江戸立ちの時、薩摩の詩人相良玉山と出会って相手から『梅花百詠』を得た。後、康熙 52 年、程順則は琉球に帰って『梅花百詠』を福州に郵送して王登瀛に序文を求めた。ここでなぜ、関係の最もよい師匠陳元輔に序文を求めなかったか。一番適切な理由はその時、陳元輔はすでになくなったことである。おそらく、康熙 51 年（1712）に程順則が江戸立ちに行く前、すでに程順則は師匠の逝去を知っていたのであろう。

第八項　小結

陳元輔は清の順治 12 年（1655）に福州で生まれ、読書人の家で成長している。先祖には科挙に合格して状元を得た人物もおり、年少の頃から文才に優れていた。9 歳にして 27 歳の竺天植、15 歳で林潭と知遇を得ている。康熙 11 年（1672）、17 歳の時、科挙の郷試を受験して落第し、意気消沈した青年時代を過ごしている。康熙 12 年（1673）、呉三桂が乱を起こし、康熙 15 年（1676）に至って三藩の乱が全面的に勃発すると、福州府の科挙が中断され、康熙 19 年（1680）に至るまで陳元輔は科挙を受験する機会を失っている。

康熙 15 年（1676）、陳元輔は福州に駐屯する寧海将軍喇哈達の幕に入り、彼の従軍期が始まった。以降、康熙 21 年（1682）、寧海将軍の満州軍団が撤収して北京に戻るまで陳元輔は寧海将軍の幕で務めていた。その後康熙 22 年（1684）の冬、陳元輔は湖北の遊歴に発った。

康熙 23 年（1684）の冬、福州に帰り、ちょうど北京から福州に戻った程順則と出会っている。陳元輔が程順則との知遇を得たのは、康熙 23 年の冬に柔遠駅で教師を務めていた竺天植を介してであった。陳元輔が琉球勤学の師匠となる契機を作ったのも竺天植であったと考えて良い。その後、陳元輔と琉球人との本格的な交流が始まる。程順則以外に、周新命、梁得声、梁得済などの琉球勤学人が陳元輔に師事している。以降、陳元輔が亡くなるまで琉球勤学人との交流は絶えることはなかった。

陳元輔の詩集『枕山楼詩集』の初版は、康熙 30 年(1691)に福州で出版されているが、これは程順則が帰国前に出資して出版したものである。そこに二人の交流の深さを見ることができよう。程順則

は帰国後、琉球王国を代表する儒学者となる人物である。勤学として柔遠駅滞在中、陳元輔から大きな薫陶をうけたことはいうまでもない。陳元輔自身は科挙に失敗し、挙人の資格を得ることなく、官吏として立身出世をすることはなかったが、康熙 37 年（1698）頃に候補縣丞といった官職についていたことが確認できる。

本稿では、陳元輔『枕山楼詩集』『枕山楼文集』『枕山楼課児詩話』、王登瀛『柔遠駅草』『柳軒詩草』及び程順則が編纂した『中山詩文集』などの文学資料を手がかりに陳元輔の人物像及びその生涯を描き出してみた。彼の著作は中国ではほとんど確認されていないが、日本においてその存在が知られ、彼の著作が四種で計二十一点の版本を確認できること、また彼は書家としても知られ、『妙跡図録・漢画部』に陳元輔の草書の書作が収録され、高い評価を受けていることにも注目したい。日本で知られるようになったのは、言うまでもなく程順則をはじめとする福州でその門下生として学んだ琉球勤学人の功績である。最後に陳元輔の著作の日本での保存状況をまとめる。

陳元輔著作保存状況表

著作名	出版社	著作基本介紹	所藏圖書館
1 枕山樓課兒詩話	桂雲堂本店豊住伊兵衛 桂雲堂分店豊住謹治郎 桂雲堂支店豊住幾之助	目首及び序の書名：枕山樓詩話 見返し及び題簽の書名：枕山樓拾玉詩話 見返しに「皇都書肆 英華堂壽梓」とあり 文政元年序皇都英華堂刊の後印 四周単辺有界 6 行 13 字、無魚尾 訓点付 和装	大阪府立中之島図書館 NII 書誌 ID(NCID) BB17404650
2 枕山樓課兒詩話	英華堂　文政 1（1818）序		関西大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA74604053
3 枕山楼詩話	横関剛蔵編輯 北尾禹三郎，1881.12 書名は巻頭による 発売：石川治兵衛		関西大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA74643623
4 枕山楼詩話	横關剛校 北尾禹三郎，1881	奥付に「明治十四年十二月廿六日出版御届 同年廿七日刻成出版」とあり 康熙綴 印記：「幽香書屋藏書印」「安井」	仏教大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BB01820215

5 枕山楼課児詩話	雍正三年刻本		内閣文庫
6 枕山楼詩話			国会図書館 NII 書誌 ID(NCID) 000000517784
7 枕山楼課児詩話			東京尊経閣文庫
8 枕山楼課児詩話		抄本	静嘉堂文庫
9 枕山楼課児詩話	元文四年（1739）京都 河南四良右衛門刊本		九州大学図書館
10 枕山楼課児詩話	明治 18 年（1885） 市 川光範注写本		東京都立圖書館特別買 上文庫
11 枕山楼拾玉詩話	皇都書鋪 英華堂壽梓	奥田士亨元文四年序あり	和刻本漢籍随筆集 20 収録 汲古書院
12 茶略	林喜兵衛，文化 2 [1805]	外題・版心題：茶略 内題：枕山楼茶略 印記：「益田瑞鶴草堂 襲蔵」「読杜艸堂」	九州大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BB22278555
13 枕山楼茶略	[(日本)田癡點] 布袋庵，1870	題簽の書名：茶畧 木版 和装 印記：「主一所蔵」	関西大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA72578666
14 枕山楼茶略	清廬，文化 2.9[1805][刊]	目録の書名：茶畧 刊記に「清廬藏」とあり 印記：「柳二印室」， 「柳外園藏書印」	関西大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA82350642
15 晩香園梅詩(林潭と陳元輔合著以下同)		康熙 17［1678］序あり 左右双辺有界，内 匡郭：18.3×12.3cm， 黒口双魚尾，半葉 9 行 17 字 印記：「神原家圖書記」 (墨印)ほか 2 印	香川大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BB11567834
16 晩香園梅詩	盤谷書院 ： 玉池唫榭， 安政 1[1854][刊]		関西大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA72773388

17 晩香園梅詩	積翠堂，享保 10[1725]	封面に「洛陽積翠堂壽梓」とあり 巻末に「京城書肆岡本半七板行」とあり	関西大学図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA76734898
18 晩香園梅詩	岡本半七，享保乙巳 [1725]	明治より前に刊行された漢籍につき記述対象資料毎に書誌作成 刻本 刊記に「京城書肆岡本半七板行」とあり 封面に「洛陽積翠堂壽梓」とあり 四周単辺無界 8 行 20 字 内匡廓：18.3×11.2cm 白口単魚尾 訓点送仮名付 印記：「膽山堂圖書記」	筑波大学附属図書館中央図書館 NII 書誌 ID(NCID) BA61653249
19 晩香園梅詩	（日本）林瑜増評 晩晴閣，天保 4［1833］	封面裏に「天保癸巳晩晴閣梓」とあり 版心下部に「晩晴閣藏」とあり 左右双辺有界 8 行 18 字，内匡郭：11.9×8.8cm 無魚尾 和装，帙入 印記：「播州林田河野絢夫」ほか 1 印 訓点あり	京都大学付属図書館 NII 書誌 ID(NCID) BB17696997
20 枕山楼詩集 21 枕山楼文集	康熙三十一年序刊	印記：「蒹葭堂藏書」「昌平坂学問所」 「文化甲子」	国立公文書館内閣文庫
22 その他の文章、漢詩は『中山詩文集』、『那覇市史家譜資料久米系』、『指南広義』に散見			

第三節　陳元輔の詩学観の初歩的な分析

以上、陳元輔の人生の履歴を描き出してみた。しかし、そこからは全面的な彼の詩学観はわからない。どうして陳元輔の詩学観を理解しなければならないか。それは康熙年間、琉球人の文学の師として活躍していて、多くの琉球勤学人を教えたり、琉球の文人と交流したりしているからである。彼の大弟子程順則は琉球国内だけでなく、当時の日本で声望が高く、優れた漢学の素養により名を揚げていた。特に、程順則はほぼ二十歳代のほとんどの期間、福州の陳元輔の下で勉強していた。したがって程順則の漢詩、文章に言うまでもなく大きな影響を与えたと考えられる。そして、程順則を通して間接的に陳元輔の影響が『中山詩文集』に伝わっている。または陳元輔は康熙年間、『中山詩文集』に収録される前の琉球漢詩の諸作品の整理と校正する作業を実施していた。『中山詩文集』に収録されている琉球人の作品には陳元輔の詩学観が反映されていると言える。陳元輔の詩学観を分析し理解することは、彼に師事した学生らの詩を理解する上でも重要であると思われる。陳元輔の詩学観は『枕山楼課児詩話』で集中的に表わされている。しかし、どのように表現されているか、琉球漢詩にどのように影響を与えたかについては、『枕山楼詩集』、『中山詩文集』の全体を分析し、その内容を把握しなければならないので、それだけで大きな課題になってしまう。これは今後の検討課題としておきたい。本節では陳元輔の詩学の初歩的な理解を目的とし、『枕山楼課児詩話』を中心にして陳元輔の詩学観の概略を論述するにとどめたい。

第一項　明代詩壇の概況

陳元輔の青少年時代は明清交替の時期で、清代文学の流派、学説などはまだ形成されておらず、陳元輔は明代の文学思想の影響を大きく受けて成長していたと思われる。それで明代の詩学の脈絡を簡単に見ておく必要がある。『枕山楼課児詩話』を分析する時にも理解しやすくなる。以下の表は明代の詩壇の主要な流派である

明代前期詩壇（1465－1487 洪武―成化[1]）			
流派	代表的人物	詩論と特徴	弊害
元末明初詩人	高啓	高啓は元末明初の詩人中の第一人者といえる。彼の詩は筆致が自由奔放である。詩作に元末明初の動乱にも注目する。六朝、唐、宋の詩どれもうまく模倣できる。盛年時に死亡したので独自の詩論は形成しなかった。	
	劉基	元末時期の作品は沈鬱でもの寂しく詩の文学価値が高い。明に入っての作品の質が下がったといわれる。	
茶陵詩派	李東陽	詩の音律を重視し、格調は台閣体と	

[1]陳洪、張峰屹編『中国古代文学史』北京大学出版社 2011 年 9 月、238 頁。

		似ており、唐代の詩を推奨して、特に李白、杜甫、王昌齢、孟浩然に傾注している。	
台閣体 明永楽成化年間（1403－1487）	楊士奇 楊榮 楊溥	台閣体の詩は皇帝の功績、太平盛世を詠い上げている。応制の内容が多い。典雅、穏やかな格調を求める。	作品は独創性、個性がなく、形式が固定化し千人一面である。台閣体の体裁の一つ性理詩は単なる理学を述べるもので文学の色彩と美感が乏しい。

↓

明代中期詩壇（1488-1572 弘治―隆慶[1]）			
流派	代表人物	詩論と特徴	弊害
復古派	前七子李夢陽、何景明、徐禎卿、辺貢など 後七子李攀龍、王世禎、謝榛など	古体詩は漢、魏の詩に傾注している。近体詩は盛唐の作品だに傾注している。個人情緒を述べ表すことを重視し、詩の形式、平仄、押韻などに非常にこだわる。 後七子は前七子より盛唐詩の特徴があり、風格、表現の手法を模倣する。	復古派は作詩で多くを盛唐に従うべきと提唱し、詩の創作の発展が停頓するに至っている。詩に独創性がなく千人一面となっていて、ひいては他人の詩作を剽窃する悪質の気風が漂う。
呉中派	唐寅	詩の芸術表現は自由、洒脱で復古派の格式にこだわらず民歌、口語を詩歌の創作に用いる。詩の格調は明快で人口に膾炙している。	

↓

明代晩期詩壇（1573－1644 万暦―明亡[2]）			
流派	代表人物	詩論と特徴	弊害
公安派	公安三袁の袁宗道 袁宏道 袁中道	公安派の中核は「独抒性霊、不拘一格」にある。復古派観点を打破して詩人の独創性、個性を重視して詩人の真実の感想、感情を自由に表す。唐詩に定見もなく模倣することに反対する。	公安派は個性、独特性を強調する。その影響で詩の典雅、荘重の特質が失われ、詩の格調は低下、俚俗となったという。
竟陵派	鍾惺 譚元春	公安派の学説によって引き起こされた詩の格調の低下、俚俗を修正するのに竟陵派は「孤深幽峭」の学説を提唱する。	

以上が、明代の詩壇において登場していた比較的に影響力がある詩派である。その中で影響力が最も強かったのは明代中期の復古派と明代晩期の竟陵派である。これに関して銭鐘書は「後世の学者が

[1]陳洪、張峰屹編『中国古代文学史』北京大学出版社 2011 年 9 月、241 頁。
[2]陳洪、張峰屹編『中国古代文学史』北京大学出版社 2011 年 9 月、185 頁。

明詩を討論するたびに公安派、竟陵派、前後七子の詩がお互いに優劣を競うと言っているが、明清交替時の詩論に目を通すと、明代、実は竟陵と七子詩が競争するのみである。公安派は全く他の両派と比べものにならない[1]」と指摘している。銭鐘書の指摘通り、明中期の復古派と明晩期に登場した竟陵派とが、明亡まで明代詩壇を左右している。復古派は台閣体の無気力な詩に対して「古必漢魏近必盛唐」という詩学観を提唱している。つまり、復古派は古体詩は漢魏の作品を見習い、近体詩は盛唐詩を見習うという詩論である。特に復古派は盛唐詩を推奨して個人の創造に反対する。盛唐詩の格律、形式、体裁などが真に迫ることを強調する。結局、明代中期の詩壇は千人一面で、無気力な局面になり、さらに剽窃の悪質の気風が流行るに至った。詩歌の発展は停頓の境地に陥った。その後、公安三袁は復古派の弊害に対して「独抒性靈、不拘格套」の学説を提唱する。「独抒性靈」は感情的に胸の内を打ち明け、俚俗な言葉を使ってもよいという。それによって公安詩は活発で清新であり、独特な趣がある。「不拘格套」は復古派がひたすら唐詩の模倣によって、詩が千人一面となった弊害に陥ったのに対して、古人の詩に模倣するより詩人の個性、独特な創造を強調する。しかし、公安詩論の限界は、明代詩壇に俚俗、軽薄の詩風が流行してしまったことにある。古典詩歌の典雅、荘重、純厚の美感は失われてしまっている。これも明万暦年間に竟陵派が登場する直接の要因でもある。公安派の弊害を修正するために鍾惺、譚元春は二人の評論を含む『詩帰』を編輯した。彼らが提唱した学説はすぐに明代の詩壇に流行って、竟陵派の詩論として受け入れられた。清初の銭謙益は竟陵の詩論を「孤深幽峭」とまとめている。竟陵の詩論は公安派、復古派の弊害に対して、古人の長所に見習うと同時に、詩人の自身の創造を強調し、個性、個人感情を表す時にも哲理、寓意を兼ねて詩の流暢軽快と深い思想を求めている。

全体からいうと中国文学において、明代の文学は通俗文学の小説、戯曲文学の方面に大きな成果を残している。古典四大名著は、その中の三部が明代に誕生した。古今第一奇小説と称される『金瓶梅』も明代に作られた。しかし、エリート文学を標榜する古典詩は全体に衰退している状態であった。

第二項　陳元輔詩の変化

陳元輔の詩学について見れば、明代のある一派（例えば竟陵派）の学説を支持して変わらなかったというわけではない。『枕山楼詩集』の林潭の序文に彼の詩学の変化について概括している。この内容は陳元輔の詩学において歩んだ軌跡だと言えよう。

> 蓋昌其詩凡三變矣。自余庚戌得交昌其、時方束髪、慎交游、愛顰笑、嘯讀一室風雨、寒暑弗輟。余間披其帷。相與較論售世事。業覘其胸中眼中若在峨嵋天半矣。而月夕花辰時、借吟詠寄興。清新雋永、恍若月立空山、水流殘夜、無一點塵埃氣。此昌其少年時詩也[2]（蓋し昌其の詩の風格は三回変わった。私は康熙庚戌年に昌其と友の契りを結んだ時、昌其は束髪の年になったばかりだった。交遊に非常に慎ましくて眉をしかめたり笑ったり感情が豊富な人だった。大きい声で詩書を読んで夏でも冬でもやめない。私はある時陳昌其の室の帷帳を開いて中に入って昌其と世事について論じたことがある。昌其の考えていること目に映っているものを覗くと、昌其の志は峨嵋山上の半空にあるようであった。皎潔な月が空に登って花が咲く時には詩を詠唱し、そこに志

[1]原文、后世論明詩毎以公安竟陵前後七子為鼎力驂靳。余瀏覧明清之交詩家、則竟陵派與七子體兩大爭雄。公安無足比數。（銭鐘書『談芸録』（訂補本）中華書局 1993 年　418 頁）

[2] 陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年刊本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、6 頁。

を寄せる。清新な俗気がない詩句は意味が深くてまるで月が空山の間に立って、山下の川が静かに流れていくようである。それが昌其少年時の詩である。）

「其胸中眼中若在峨眉天半」は少年の時の志向、見識も同年齢の子供より高いと言っている。彼の詩について林潭は「清新雋永、月立空山、水流殘夜、無塵埃氣」と評価している。一連の四字熟語をも用いて、少年の陳元輔の詩は世の中の苦難を経験せず、俗世の埃に汚染されてなく、純潔、水のように透き通っていると述べている。陳元輔は自ら少年時の詩について以下のように述べている。

余羈貫作八股時、即耽於詩、往往讀製義至子夜、稍倦轍歩于庭、仰見殘月墜西明河萬里、乃取近代諸詩、爾朗吟之間至達旦不寐者。及拈題分韻得一尖新艶麗句毎手舞足蹈、至讀唐詩竟茫然不解為何物。如是者數年。[1]（少年時の私は夜中まで八股文を練習して疲れたと感じたら庭の中を散歩して明月が西に沈んでいくのをみたり、万里の銀河を見たりし、近代詩人の詩集を手に取って読んでいた。読めば読むほど興奮して徹夜し眠れず、自分も詩を作ってみた。ユニークで目が覚めるように美しい詩句ができたら躍り上がって喜んでいた。その時の私は唐詩とはなんなのかまったく知らず、読んでも何を言いたいか理解できなかった。こういう風な時代が数年間続いていた。）

陳元輔の自述の中の「近体詩」は言うまでもなく明代の詩を指す。林潭は少年陳元輔の模倣して作った近代詩は「尖新艶麗」であると、その才能を認めている。これらの特徴は、明代公安詩の特徴と一致している。要するに、陳元輔は最初、明代公安派の詩の影響を受けていると思われる。復古派の詩が盛唐の詩を推奨して一途に盛唐の詩を全面的に模仿して詩人の自己創造力を軽視したところ、結局、明中期の詩は全然個性がないものになり、ひいては剽窃の気風となってしまっていた。公安詩は復古派の弊害を修正するために、一種の新しい詩学観を提唱し、誕生してすぐ一時期主流となっていた。公安派の詩は「独抒性靈、不拘格套」とまとめられている。公安詩は清清な直想を重んじて、自己の精神すなわち「性靈」の発露による自由な個性的な表現を主張する。公安詩は詩の格調において軽快、随意を求めて、詩の格式に苦心してユニークでみたことがない詩句を作る。これはすなわち陳元輔が自述したように「尖新艶麗」の風格である。

例えば、袁宏道の「漸漸詩戯題壁上」の「明月漸漸高、青山漸漸青。花枝漸漸紅、春色漸漸虧。祿食漸漸多、牙齒漸漸稀。姫妾漸漸廣、顔色漸漸衰」のようなものが公安派の詩である。確かにこのような詩を読むと新鮮でまた分かりやすい。公安詩は俚俗で内容が浅薄になってしまっていたが、公安詩はまさに少年で社会経験少ない陳元輔に一番相応しい詩であったのであろう。少年陳元輔にとって内容の浅い公安の詩は理解できても、より内容の深い初、盛、中、晩唐詩を読んで全く理解できないのは当然だろう。しかし、陳元輔は唐詩に詩の極意を見い出し、詩の学習の正統に戻っていく。陳元輔は以下のように自述している。

口誦心維、始咋舌爾歎其意味深遠、非近代之人所敢望其肩背。讀之數年覺得別有天地、非尋常蹊徑於是如夢初醒、遂焚香拜服于地，願終身讀之不厭也[2]（読んで暗記して、初めて唐詩の意味深

[1] 陳元輔著蘭汀先生訓點『枕山楼課児詩話』1818 年皇都書鋪英華堂（和刻本漢籍隨筆集第 20 集汲古書院 1978 年 3 月 26 頁）
[2] 同上 26 頁。

さを感じて驚いて、近代の詩人と全然比べられないと感じた。数年間唐詩を読んで別天地を発見して夢から目覚めたようである。それで全身全霊から敬服して一生飽きることなく、唐詩を読んで勉強したい）

陳元輔は唐詩を読んで暗記して成長するにつれて唐詩に対する理解が徐々に深くなった。ますます唐詩の深さは近代詩人の作品が全く比肩できないと感じていく。それで夢から覚めたように唐詩を一途に勉強し始めた。詩の勉強をするのに正道を見つけたといってもよい。ここで陳元輔の詩の格調は二回目の転換を迎えている。

二回目の変化について林潭は以下のように述べている。

甲寅乙卯予學第一山下。與昌其居亦近、交益密、攻苦磨礪益力。彼此隱衷益可相告語。廼此日之昌其大非昔日之昌其矣。有時見其携琴抱史坐梧桐樹下矣。有時見其觸緒興懷翰墨淋漓滿人間矣。有時見其涉江陟嶺作平原十日歡矣。有時見其焚書碎硯慟哭青山矣。有時見其痛飲讀楚辭、不則按劍咏盧炤隣悲道窮詞、江淹恨徐文長疲驢破帽詩矣。孤懷幽緒不一悉於詩而發之。故昌其癸丑以後詩多感愴牢騷。猶之少陵在曲江夔府諸作、一字一淚者無非以遇與心違懷才莫展耳[1]。（康熙の甲寅年と乙卯年、私は第一山の近くで学習していた。昌其の住む所に近くて昌其との交流はますます頻繁になって勉強もさらに励んだ。二人の苦衷はお互いに告げられた。この時の昌其は昔の昌其ではない、大きな変化があった。ある時には昌其は琴を持って梧桐の下に座って史書を読んでいた。ある時には感想を引き起こして文章を作っていた。有る時には江を渡って山に登り何日間も飲み続けた。有る時には昌其は書を燃やして硯を砕いて慟哭していた。ある時には酒を飲みながら楚辞を読んでいた。さもなくんば剣を持って盧炤隣の哀しい詩を読んだり、江淹の「恨賦」を読んだり、或いは徐文長の「疲盧破帽の詩」を読んでいた。孤独、哀しい思いのすべてを詩に注ぎ表現した。癸丑以後の詩は悲しみや不満が多い。杜甫が曲江夔府にいた時のように作品に哀しい気持ちが溢れている。なぜならこの時期杜甫の一字一涙は心と違って才能を抱きながらそれを伸ばすことのできない悩みを表現している）

康熙 13 年、14 年（1681、1682）の二年、林潭は福州に来て陳元輔の家の近くに住んでいたので頻りに往来している。その当時、林潭が見た陳元輔は以前の少年の時と大きく変わっていた。陳元輔は一人で梧桐の下で史書を読んだり、琴を弾いたりしていた。ある時は、突然奮起して筆を振るってさっと詩を書く。またある時には、山に登り河を渡って友人を訪問して連日にわたって酒を痛飲する。ある時には、書籍を焼きはらって、硯を投げ壊して一人で慟哭している。ある時には、酒を痛飲しながら、悲愁の『楚辞』、盧照鄰の「悲道窮詞」、江淹の「恨賦」、徐文長の「疲驢破帽」の詩を読んでいる。陳元輔の孤独の心と断ち切れない連綿とした悲しい情緒は、詩に漏らすだけでなく日常の行為を通しても発散する。それで康熙 12 年以後の陳元輔の詩は痛ましくて怨みが多く、かつ杜甫の曲江、夔府の諸作と似て悔しい思いが溢れているのは、不遇であって才能を発揮する場所がないからにほかならない。

陳元輔は屈原の「楚辞」、盧照隣の「悲道窮詞」、江淹の「恨賦」、徐文長の「疲驢破帽詩」を読ん

[1] 陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年刊本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、8 頁 9 頁。

でいる。どうして陳元輔は彼らの作品を読むか。「悲道窮詞」は盧照隣の「五悲賦」を指す。「疲驢破帽詩」は明の詩人徐渭の「恭謁孝陵正韻」を指す。「楚辞」、「五悲賦」、「恨賦」、「恭謁孝陵正韻」の内容はどれも自らの悲惨な遭遇を憐れんだもので、格調は慷慨悲涼である。また、各詩人の境遇から見ると屈原は忠誠なのに楚の懐王に放逐されて結局河に身を投じて自殺した。盧照隣は王勃、楊炯、駱賓王と並立して初唐四傑と称される著名な詩人である。しかし、貧困で若い時、ハンセン病に罹ってこの病気に苦しめられて河に身を投じて自殺した。江淹は人生が悲惨だとは全く言えず、逆に人生の成功者と言える。ただ彼の詩賦は六朝の時代の綺麗、退廃な詩風の中に雄健、慷慨の詩風をもって独自の旗印を掲げている。明代の詩人徐渭は文学、戯曲、書画、軍事のどの方面においても大家と称することができる。しかし科挙に合格せず、七年間の監獄の災を経験して、晩年になって精神的な病を罹い、困窮した境遇の下で一生を終えた。

前述したように、陳元輔は康熙 11 年に科挙に受からなかった。その後、康熙 12 年に呉三桂が雲南で造反して、康熙 13 年には福州に駐屯する靖南王耿精忠が呉三桂に呼応して反乱を起こした。広州の平南王尚可喜、桂林の孫延齢も清に反逆した。一時期、清の半壁は戦火に取り込まれた。この時、陳元輔は二つの問題に直面する。耿精忠は清廷に反逆した後、福州の読書人を多く採用した。陳元輔が耿精忠の応募に応えるか応えないか、これが一つの問題である。清の順治 3 年から康熙 2 年まで天災、戦火の被害を受けた福建の百姓は、やっと十年程の平和安定の環境を得ていたが、耿精忠の造反によって福建はまた激しい戦場に陥る。社会の動乱があって科挙が行われず、読書人として立身出世の道が断絶したことは、陳元輔が直面したもう一つの問題である。陳元輔は思い悩み日常の行為も大きく変化していった。行為で情緒を漏らす以外に、文人は詩に不満、悔しい思いを発散するものである。陳元輔が前述した四名の詩人の作品を読むのは、自己の境遇から連想して強烈な共鳴を覚えるからである。それでこの時の陳元輔の詩の格調は、痛ましくて怨みが多くなるのは自然である

陳元輔の詩の格調の三回目の変化について、林潭は以下のように述べている。

> 丙辰深秋、余扁舟南還、旅食玉山、不才多病與昌其又成風馬牛、迄今十年有餘。而昌其或磨盾草檄、浪賦從戎或匹馬孤舟遠尋知己。閲歴久而識膽深、識膽深而性情摯。向之怫悒無聊忽啼忽笑者。今皆韜鋒斂穎。坐春風中、讀其近作、顥顥噩噩欝而善、愁婉而多風。[1]（丙辰の秋、私は船で南還して玉山県に泊まった。私は多病なので昌其と十年間会えずにいた。昌其は軍に入って幕職を勤めたり或いは馬や船に乗って遠くのところへ友人を尋ねて行ったりしていた。彼には閲歴が多くなり、胆力が付き、あわせて識見が深まり気質も真摯なものになっていった。昔は鬱々として気が塞ぎ、つれづれに忽ち啼いて忽ち笑ったりしていた。今は落ち着いて含蓄、荘重をもった陳昌其となった。昌其の近作を読んでいると、詩には質朴が込もっているようである。内容が婉曲で純朴である。）

康熙 15 年、林潭は玉山に行った。陳元輔と別れて十年あまり会っていなかった。「磨盾草檄、浪賦從戎」は、陳元輔が軍幕に入って働くことを指す。「匹馬孤舟遠尋知己」は、康熙 22 年の冬に福州より湖北省にまで遊歴に行ったことを指す。この十年間を経て陳元輔は胆力がつき。同時に識見を広め、性格がより真摯なものとなっている。林潭はこの時の陳元輔の詩に対して「顥顥噩噩、欝而善、愁婉而多風」と評価している。この評価は陳元輔の詩学が成熟したことを示している。「顥顥噩噩」は眼

[1] 陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年刊本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894、9 頁。

立つけど質朴であるということである。「欝而善」は満ちあふれている様子である。「愁婉而多風」は悲しみ嘆くけれども婉曲的に表して風致も含むことである。簡単に言うと、林潭は陳元輔の詩が『詩経』を継承して儒家の詩学の境地に達していると評価している。これは非常に高い評価である。林潭は陳元輔の友人及び先輩として少年時、青年時の詩を厳しく評価していることは、実は中年の時の陳元輔の詩を際立たせるためである。

第三項　陳元輔の詩論

続いて陳元輔の自身なりの詩学のまとめといえる『枕山楼課児詩話』を合わせて陳元輔の詩学を分析したい。

陳元輔の『枕山楼課児詩話』に関しては、中国でも日本でも未だ専門的な研究がなされておらず、中国の蔣寅は彼の著作の『清詩話考』で『枕山楼課児詩話』について以下のように紹介している。以下、筆者は蔣寅の観点を起点として陳元輔の詩学を分析する。

> 然則詩話當撰于康熙三十年至康熙三十五年之間。本書專為初學入門爾述、共四十九則。（中略）雖大體為老生常談故亦有體會獨至處（中略）書中頗稱道鈡惺之説，知其詩學有本自竟陵處。時中原以錢謙益抨擊鈡、譚、談詩者羞言竟陵。陳氏舉鈡惺之説爾稱道之、有以見閩地論詩尚存明末遺風、與中原尚容有不同也[1]（この詩話は康熙 30 から康熙 35 年の間に著されたはずのものである。この本は詩の初心者のために作られている。全書で 49 則ある。大体の内容は老書生のありふれた話だが自分なりの体験が盛られている。書の中でよく鈡惺の学説を推賞していることから、陳元輔の詩論が竟陵の影響を受けたことが分かる。当時、錢謙益など竟陵の学説を強く批判して詩を語る人の多くが竟陵を恥じていた。陳元輔は鈡惺のその学説を推賞しており、福建における詩論は中原と異なって明末の遺風があるとみられる。）

これによれば、陳元輔の詩学は竟陵派の学説を受けているといえよう。竟陵派の学説が主流に批判されて、学者たちが竟陵の詩論を軽視するにもかかわらず、陳元輔は竟陵派の学説に傾注しており、福建での詩論がまだ明末の遺風が残っていると蔣寅は指摘している。『枕山楼課児詩話』の中の 49 則の論述に 2 か所陳元輔が直接に竟陵派の学説を引用しているところがある。蔡鐸の『観光堂詩草』序文で、陳元輔は竟陵派の鈡惺を高く評価し敬服の意を表している。しかし、陳元輔の詩論は単に竟陵派の学説を全部受け入れているわけではない。明清交替の時期に漢人知識人は明滅亡に対する反省を促している。学術方面に対する反省は明代の文人士大夫が「空談心性、不務實學（無駄な話ばかりで実学を務めず）」といった思想の方面に流れ、王陽明、李贄が正統の儒学を転覆させ、これもまた明滅亡の要因の一つになったとも考えられていた。儒学の「経世実用」、「躬行実践」の伝統に戻ることは、清初学者の共通認識である。陳元輔はただ明代、竟陵派の学説を受け入れるのみならず、公安派の学説も若い時に陳元輔に影響を与えている。知識人が明滅亡の反省を促す環境の下で、陳元輔は公安派の学説、竟陵派の学説に自分なりの反省も加えている。清初の文壇の主流の知識人は、全面的に明代の詩論を厳しく批判している。明代の詩論を受け入れながら清代詩学発展の動向に従って詩を習うことは陳元輔詩論の著しい特徴である。

---

[1] 蔣寅『清詩話考』中華書局 2005 年 1 月 286 頁、287 頁。

陳元輔の詩論が清初の文壇主流の認識と異なる理由は、清初の福建省の特別な社会環境によってもたらされたものと考えられる。長期にわたって福建省は動乱の歴史的環境の下にあり、文壇の主流の文学思潮から受けた影響が弱く、かつ清初の福建の文壇では大量の遺民詩人が主要な位置を占めており、明末の遺風が濃い状況にあった。

清初、明亡の反省の気風の中で銭謙益、黄宗羲などは、積極的に宋代の詩歌を持ち上げる。一方、明代の「宗唐」の気風を清初でも継承している。そうした中、清初の詩壇において「宗唐」と「宗宋」の観点が形成される、両派において唐詩、宋詩のどれに従うべきか、どれが詩の正統かといった問題が激しく論争され、唐詩と宋詩の争いという局面を迎える。唐詩、宋詩の争いの環境で陳元輔は断固として唐詩の陣営に立っている。『枕山楼課児詩話』（法唐の則）には、宋詩に対して以下のような記述がある。

> 唯盛唐文質彬彬、不腰不野、深得三百篇遺意。宋詩多頭巾氣味道學語、悉難入選落此窠臼則病入膏肓矣。故余謂初學不可不讀唐詩[1]。（ただ盛唐の詩が文質と外見ともに深く詩経の趣旨を備えている。宋詩は道家の学説が多く詩経の趣旨に相応しくない。それで私はよく初心者は唐詩を読まないといけないと強調している。）

陳元輔は盛唐の詩を推奨しており、『詩経』の教えにふさわしいと述べている。この点は明代中期の復古派の「古必漢魏、近必盛唐」の観点と同じである。一方、陳元輔は初唐、晩唐の詩、漢魏、六朝の詩も習うべき範囲に入れている。宋詩については、道教の影響があり、読書人の古臭い慣習に塗れているとして推奨していない。陳元輔は詩の初心者は、唐詩を手本として学習すれば、誤った道に入らないと指摘している。

「宗唐」の観点は、『枕山楼課児詩話』の「体格」、「穏貼」、「気魄」、「法唐」、「読唐」、「尊杜」の則に集中的に表されている。詩の格調の方面については、陳元輔は唐詩の高渾さ、静穆さを求めており、詩の創作方面については、賈島、孟郊のように一字、一句を細かく推敲する態度を要求している。「読唐」の則において、陳元輔は唐詩を読む時には必ず尊敬の心を持ち、多く遊歴して見識を広め、詩の境地を広げるのがよいと述べている。

「宗唐」を基調とする陳元輔の詩論において、陳元輔が明代の復古派、公安派、竟陵派の観点を継承しつつ、また反省している点を窺い知ることができる。上述したように、少年の陳元輔は最初に公安派の詩と接触している。陳元輔は徐々に唐詩との接触が多くなり、唐詩を学ばなかったことにとても悔しい思いを示すようになる。そうした中、公安派の影響から離れ、竟陵派の詩論を受け入れていった。これが、陳元輔が竟陵派の詩論を受けた内的要因はこうした点に現れている。しかし、竟陵派の学説に対しても陳元輔の自分なりの思考がある。例えば「虚実」の則において、竟陵派は詩の中に虚字を使うことを薦めるが、陳元輔は詩の中では実字を使った方が、景物が紙から躍りだすかのように生き生きと描けると思っている。明の復古派が単純に唐詩の形を模倣することに対して、陳元輔は批判的で、「神髄」の則で以下のように述べている。

> 讀唐詩當得其神髄仿其体裁、優遊漸漸漬久而始有獲、若徒在字句上求肖去唐遠矣。鈡伯敬批明詩

[1] 陳元輔著蘭汀先生訓點『枕山楼課児詩話』1818 年皇都書鋪英華堂（和刻本漢籍隨筆集第 20 集汲古書院 1978 年 3 月 26 頁）

曰妙在无一字不似盛唐、即不妙在無一字不似盛唐。至哉言呼[1]。（唐詩を勉強する時にその神髄、体裁を深く理解したうえでやっと得られるものである。単なる形式の方面において一途にまねるのは、唐詩と遠く離れてしまう。鍾伯敬は明代の詩人は懸命に唐詩を模倣しているが、一字も似ずと言わざるを得ない批判している。）

陳元輔は一面的に唐詩を模倣して詩を作ることに反対していないが、ただ唐詩の形式をまねるだけでなく、唐詩を全面的に理解する必要があると述べている。「神髄」の則で陳元輔が鍾惺の論述を引用していることは、陳元輔が竟陵派の詩論を受け入れていたことを表している。「詠物」則において陳元輔は、明確に竟陵派の観点を受け入れることを表明している。

「剽窃」則において、復古派の剽窃の弊害について以下のように述べている。

詩人不知呕出心肝几許才得一二好句以垂不朽、有人竟摘全句入自己的詩中、是可忍也孰不可忍也[2]。（詩人はどれほどか頑張ってやっと一句、二句の良い詩を得られるのである。ある人が敢えて他の詩人の詩句を自分のものとすることは、ほんとに許せない。）

陳元輔は剽窃の行為を極度に怨み嫌っており、清初にはまだ剽窃の現象があったものとみられる。蒋寅は清初、明代の詩風に対する批評は主に「模擬作風」、「門戸之見」、「應酬習氣」という三つの点に集中していると述べている[3]。その中の「應酬習氣」は、明代の文人士大夫は詩を社会交際の道具として使っているということである。詩の贈答は確かに文人の間の友情を深める作用がある。しかし、明代の文人は詩の交際機能を濫用している。例えば、名人、官僚は自分あるいは両親の誕生日に広く祝い詩文を募集する。相手が知り合いかどうか問わず、このような祝いの詩文を集めて詩集を作る。こうした交際するために作った詩文はうわべだけの真意が漂っている。この気風に対して陳元輔は送別詩を作るのには必ず本当の感情をこめるか、さもなければ送別の詩を作らない方が良いと述べている

陳元輔は明代公安派、竟陵派の学説を受けながら長所を取り入れ短所を補っている。最終的に清代詩学の発展の趨勢に従って、儒家の「温柔敦厚、中正平和」の詩学観に戻る。これは『枕山楼課児詩話』に読み取れる陳元輔詩学の中核である。特に「哀怨」、「忌諱」の各則においては、儒家の詩学観を示している。「温柔敦厚、中正平和」という詩学観について、陳元輔は平穏で柔和な姿勢で純朴な心を用いて人を感動させて教化し、詩の格調は偏らず静かに流れる水ように穏やかでなければならないと述べている。この詩学観は明清の交替のもたらした動乱から太平盛世に戻る必然の結果といえよう。

第四節　陳元輔の福州の友人

第一項　竺天植

[1] 陳元輔著蘭汀先生訓點『枕山楼課児詩話』1818 年皇都書鋪英華堂（和刻本漢籍隨筆集第 20 集汲古書院 1978 年 3 月 21 頁）
[2] 陳元輔著蘭汀先生訓點『枕山楼課児詩話』1818 年皇都書鋪英華堂（和刻本漢籍隨筆集第 20 集汲古書院 1978 年 3 月 25 頁）
[3] 蒋寅、「清初詩壇対明代詩学的反思」、『文学遺産』2006 年第 2 号収録、109 頁。

竺天植、字は鏡筠である。程氏本『六諭衍義』[1]の竺天植の序文に「康熙四十七年初夏、廣陵七十一叟竺天植鏡筠書於瓊河古驛（康熙四十七年初夏、廣陵七十一叟竺天植鏡筠瓊河古驛に書す）」とあり、ここから康熙 47 年（1708 年）時点で竺天植が 71 歳で、江蘇の広陵（楊州）の人であることがわかる。つまり逆算すると竺天植は崇禎 10 年（1637）に誕生したことになる。陳元輔の『癖耽集』の序[2]によって、竺天植の本籍は揚州であるが、閩（福建）で官職に就いた父にしたがって福州に来たことが分かる。地方志には竺姓の官吏について、二つの記録[3]がある。その一人の竺應元は江都の人、万暦年間、福州で典史[4]に任じられていた。万暦年間（1573—1620）と崇禎 10 年（1637）とでは 17 年の開きがあるが、「江都揚州府に属す」とあることから、「竺應元」が竺天植の父である可能性が高い。仮に竺應元が竺天植の父でなくても、地方志にはそれ以外には竺姓の官吏の記述がなく、一般に記録がない官吏は、身分的に位階は低いことから、少なくとも高級官吏ではなかったことが推察できる。

では、竺天植と琉球人との交遊はいつごろ、どのように始まったのだろうか。『六諭衍義』の竺天植の序文には「余氈坐瓊江幾四十載，今且皤然一叟矣（余瓊江に氈坐して幾ど四十載、今且に皤然として一叟なり）」という記述があり、この康熙 6 年（1667）時点では、三十歳前後に竺天植は科挙をあきらめ私塾の講師を務めていたことが分かる。その後、三藩の乱が起こり、外の世界が混乱しても竺天植は従前の如く生徒を教えていたと思われる。「瓊江」が柔遠駅の近くにあるため、「氈坐瓊江」という記述から、竺天植は主に柔遠駅で琉球人を教えていたことが知れる。康熙 6 年（1667）から康熙 16 年（1677）にかけての十年間は、琉球の勤学の福州への派遣が中断していたが、進貢使節の派遣は継続していたため、おそらく竺天植は柔遠駅で琉球の渡唐役人を教えていたと思われる。程順則は康熙二十二年（1683）十二月五日に福州に到着後、すぐに竺天植の師門に拝し、師事することになった。他に『中山詩文集』所収の「翠雲楼詩箋序」によって、周新命もまた竺天植の門下で康熙 28 年（1689）～康熙 30 年（1691）まで三年間学習していたことがわかる。康熙 47 年（1708）、程順則は 71 歳の竺天植に『六諭衍義』に序文を著すように依頼している。その後の竺天植の動向を知りうる資料がないため、竺天植がいつ逝去したのかは確認できない。

ここで、まず陳元輔と竺天植の関係について整理しておきたい。まず二人が知り合った時期であるが、陳元輔の『癖耽集』の「序」の記述が手がかりとなる。『癖耽集』とは、康熙 23 年（1684）、竺天植が 47 歳の時に作った詩集である。現在、『癖耽集』は佚書となっている。この『癖耽集』の「序」には「余髫年[5]にして之と交わりて、 其の幽潛靜穆、蘭空谷に生ずるが如きを見る，菊疎籬に傲る之の為に心を折る」、また「亦以て予鏡筠と交わること二十年」と記述されているので、ここから陳元輔と竺天植は幼い頃から交遊があり、『癖耽集』の執筆時にはすでにその交友は二十年に及んでいたことが分かる。康熙 23 年（1684）、陳元輔は湖北の旅を終え、福州に戻り竺天植を訪ねている。その時竺天植は半生の心血である『癖耽集』を陳元輔に見せ序文の執筆を依頼している。『癖耽集』の「序」は康熙 23 年（1684）に書かれたものと思われ、陳元輔が三十歳の時のものである。陳元輔は「序」で「余髫年與之交[6]（余髫年にして之と交わる）」と記していることから幼少期にすでに知り合っていたことがわかる。康熙 23 年（1684）は、また陳元輔の人生の転換期と言える。程順則は北京から福

---

[1]『六諭衍義』、清范鋐著。程順則らの江戸上りの時、薩摩藩より徳川吉宗に献上される。室鳩巣が幕府の命令で『六諭衍義』を和文に訳し、『六諭衍義大意』が成立した。それがのちに日本で寺子屋の教科書として普及している。

[2] 「余友竺子鏡筠廣陵巨姓，隨父官閩中，因家焉」「癖耽集序」は陳元輔の『枕山楼文集』に収録されている

[3] 『乾隆福州府志』巻 29 には「左參議竺淵，奉化人，正統年間任」。万歴本『福州府志』には「典史[3]竺應元，江都人，萬歴年間任」と記されている。

[4] 典史、県の監獄を管理する官吏、品級は与えられていない。

[5]髫年、幼い頃

[6] 「癖耽集序」:「于髫年與之交，見其幽潛靜穆如蘭生空谷菊傲疎籬，為之心折」『枕山楼文集』第 12 編目の文章。（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894）

州に戻った康熙 23 年（1684）末、竺天植から陳元輔に師匠をかえることになった。一方、同年（1684）、福州に滞在していた勤学は程順則の他に鄭士綸、梁津、林謙、程順則、金浩然、陳魯水などがいる。これは康熙 17 年、18 年の勤学と比べると、倍の数字である。この年、勤学が急増したため、師匠の人数が足りないという問題が生じていた。この時、陳元輔はすでに年齢的にも能力的にも師匠として十分な資質を備えていたことから、先に勤学の師匠の職にあった竺天植が陳元輔を勤学の師匠に推薦したのであろう。

陳元輔の『枕山楼詩集』に竺天植との交流を示す詩が一首収録されている。この詩を紹介し、陳元輔と竺天植の交遊の一端を窺うことにする。

雨夜留宿蔡禎菴山樓同竺天植詩話　　**雨夜蔡幀菴の山樓に留宿し竺天植と同に詩話す**

頻年彈鋏負生平	頻年彈鋏　生平に負（そむ）く
榻下江樓百感并	榻を江樓に下し百感を并ぶ
四壁嵐光沉劍氣	四壁嵐光　劍氣を沉め
一溪漁火濕潮聲	一溪の漁火　潮聲に濕う
鐘催宿鳥深林夢	鐘は宿鳥深林の夢を催す
草帶王孫舊日情	草は王孫舊日の情を帶ぶ
中夜與君談往事	中夜君と往事を談じ
蕭蕭風雨暗孤檠	蕭蕭たる風雨　暗き孤檠（けい）

【七言律詩】
【平水敬韻】

【通釈】

長年、高官の下で寄食して平生の理想をうらぎってきた。柔遠駅を訪ね、いろいろな感慨が湧き起こった。部屋の壁に書かれてある詩作には優れた文才が現れており、漁船の灯の光が連なって潮の音にさらさらとした空気が潤う。寺の鐘の音は鳥が巣に帰るのを促すようである。草原を見ると「王孫遠游」のことを思い出す。夜中、君（竺天植）と昔の事を振り返る。しとしとふる風雨に灯も暗い。

題目から見ると、陳元輔は雨の日に帰れなくてそのまま柔遠駅で一晩泊まって、蔡禎菴の室で竺天植と互いに詩を送って話し合ったことが分かる。また竺天植も、その日の夜、柔遠駅で泊まった。「春杪瓊川阻雨因過蔡聲亭山樓」という作品にも陳元輔は大雨のため数日間柔遠駅で泊まったことが記されている。

【分析】

「頻年彈鋏負生平、榻下江樓百感并」

「彈鋏」は剣の鞘をたたくという意味で、この語は『戦国策・齊策四』に記載されている故事[1]か

[1]斉国では馮諼という人が窮乏し暮らしていけない。門客になれるように孟嘗君の処に行った。孟嘗君が馮諼に君の趣味は何かと聞くと、馮諼は趣味なしと答えた。また「君は何の能力を持つか」と聞かれて「何の能力もない」と答えた。孟嘗君は笑って馮諼を受け入れた。しかし、孟嘗君の臣下は彼を見下げて劣等な食物をあたえた。ある日、馮諼は柱に寄りかかって鞘を叩きながら、「長鋏は帰ろう帰ろうここでは魚がない」と歌った。臣下はこのことを孟嘗君に告げた。孟嘗君は魚を食べさせるようにと言いつけた。またある日馮諼は、「長鋏は帰ろう帰ろう出かける時馬車がないと」歌った。孟嘗君はこれを知った後馬車に乗らせた。または馮諼は「長鋏は帰ろう帰ろう家を建てない」と歌った。臣下はみな馮諼を嫌がって彼が欲張っていると思った。孟嘗君は「馮には親がいるのか」と聞いた。「母親がいる」と答えた。そして、孟嘗君は人を遣わして食べ物を馮諼の母に送った。これから、二度と馮諼は歌わなかった。（『戦國・策齊策四』より要約した）。

ら出たものである。後に、「彈鋏」は窮困で偉い人の下で食客となることを指すようになった。陳元輔の経歴を見ると、彼は寧海将軍の幕僚として約七年務めており、後に福建提督張雲翼に招聘されているが、張雲翼の下ではむしろ食客の色が濃い。陳元輔は馮諼の事例を引用して自分がもともと高遠な抱負を持っていたのに、今は困窮して長年、高官の下で寄食しかできないと嘆いている。しかし、陳元輔に才能がなければ高官に雇われることはない。

「榻下」は長椅子を下ろすことで、転じて賓客を迎えることである。陳元輔、竺天植は訪客として来たという。「百感并」は陳元輔と竺天植は以前の経歴、境遇をお互いに打ち明けて多く思いが湧き出てきたことを意味する。

「四壁嵐光沉劍氣、一溪漁火濕潮聲」

「嵐光」は山の靄が放つ、日光の反射である。「劍氣」は人の素晴らしい才能を言う。「四壁嵐光」は部屋の四壁に詩文が書かれてあることを言う。それらの詩文から作者の優れた才能を見てとれる。柔遠駅の中に「題壁」という行為があって、おそらく陳元輔、竺天植、林潭及び他の福州知識人は柔遠駅で壁に題した詩を常にみていたのであろう。「題壁詩」は人を警醒したり、哲学の道理を述べたり、感想を言うなどの特徴がある。師匠は生徒に対する希望、警醒などを寄せていたのではないだろうか。

「一溪漁火」は瓊河に漁船が連なる光景を描いている。「濕潮聲」は雨が降っているので湿気が高くて波の音もじめじめと感じているのであろう。空は暗くなって漁をしている人が点灯し始めている光景を映している。

「鐘催宿鳥深林夢、草帶王孫舊日情」

寺の鐘音が鳥を森に戻って寝ることを促す。夜になったばかりで、空は暗くなったことを表す。

「楚辭招隱士」に「王孫游兮不歸、春草生兮萋萋。」という句がある。王孫は旅に行ってまだ帰ってこない、草がすでに盛んに茂っているという意味である。転じて人に離別の情を思い出させる景色を指す。「王孫」は相手に対する尊称である。陳元輔は茂っている草原を見て旅に出ている友人を思い出している。

「中夜與君談往事、蕭蕭風雨暗孤檠」

「中夜」は深夜のことである。陳元輔と竺天植は夜中までお互いに昔の事を語り合う。陳元輔にとってもちろん幕職の経歴は一生、誇るに値するが、科挙の失敗も竺天植と共通の話題になっていたにちがいない。詩の基調は失意の中にある二人の心境の表出である。

「蕭蕭風雨」はざわざわとする風雨である。「暗孤檠」は暗い灯である。なぜ灯が暗いと言うかといえば灯油がもうすぐ燃え尽きるからである。陳元輔は竺天植と夜中まで互いに昔の事を打ち明けている。陳元輔の先祖は功名を得て官吏となった。竺天植の父も官吏であった。二人は先祖の栄光に浸(ひた)りながらも、自らは平凡な一生を過ごすしかない。その落胆した気持ちが詩から感じとれる。

第二項　林潭

林潭の経歴はわずかに『長樂六里志』に言及されているのみである。林潭の字は二恥、長楽県の高詳里の人であり、明末の「秀才」であった。明が滅びた後、科挙をあきらめて家族を伴って「大象山」で隠遁生活を送っていた。そのとき、土匪(どひ)の「大疤掌」が乱を起こし、林潭を除く一家全員が誘拐されるという事件が発生している。誘拐された彼の妻・陳氏は美人であったが、土匪におもねることなく、賊軍に反抗し、結局殺されている。林潭はその後、決して再婚しないと誓い、文殊寺に寄寓して人生を終える意を決している[1]。この記述からわかるように林潭の人生は決して幸福であったとは言

[1]林潭字二恥、高詳里黄石人。崇禎末諸生。明亡、棄舉子業、攜家隱大象山。草寇大疤掌作亂、盡室被擄。妻陳氏、有

えない。「大疤掌」を首領とする土匪団体は崇禎 3 年（1630）から大象山のあたりを根拠地として周辺の村々を略奪していた。清順治 10 年（1653）、大疤掌が敗北するまで、乱は二十三年間続いた。大疤掌の後にもまた陳杏杏、蕭成元、包齒山などの盗賊が大象山を占領して乱を起こしている。明清交替時期、長楽の大象山、峽江のあたりは土匪が多く危険な地であった。さらに康熙 15 年（1676）に、全面的に三藩の乱が勃発し、この間、林潭は人生における最もつらい不幸な経験に遭遇している。まさに隠遁したくても安心して暮らすことができない時代であった。

林潭は琉球人の師匠ではなく、漢詩作品から直接林潭と琉球人との交流を知ることはできないが、彼もまた琉球人との関係が深かった。林潭は特に程順則と交友が深く、康熙 30 年（1691）に陳元輔の作品集を出版する前に、程順則が林潭に序文を寄せるように依頼している。『中山詩文集』には、林潭の程順則への贈別詞一首が収録されている。程順則が帰国するの際に際して、陳元輔が作った程寵文（順則）を憶う詩五首に、林潭は解釈と批評を付している。林潭の『晩香園梅詩』も、また程順則によって康熙 60 年（1721）に福州で刊行され、後人に知られるようになる。晩年の林潭については、長楽に戻って大象山の文殊寺に寄寓していたことが『長楽六里志』に記されている。

陳元輔と林潭の交流は、康熙 9 年（1670）、陳元輔の十五歳ごろに始まっている。林潭は明末の「諸生」で竺天植とほぼ同世代である。陳元輔と林潭の年齢差は二十歳ほどあったと思われる。林潭は隠遁しており、福州府城で定住することがなく、たまに福州府城にやって来る程度であった。康熙 13（1674）、14 年（1675）の二年間、林潭は福州の烏石山のあたりの書院にいたため、この間に林潭と陳元輔は交遊し、お互いの胸中を打ち明け合う間柄になった。その後、康熙 15 年（1676）の秋、林潭は南に帰って玉山で仮住した後、峽江で隠遁生活を送った。峽江は長楽県内の川である。その後の十年あまり林潭と陳元輔は相（あい）まみえることはなかった。実はその十年の間、康熙 20 年（1681）に林潭は戦火を避けるために、いったん福州城に入って陳元輔の家に寄寓している。『枕山楼詩集』に林潭にかかわる詩が六題七首[1]ある。二人は互いに漢詩集に序文を寄せたり、詩作に詳しく解釈をつけたりすることがあった。このことから見ると陳元輔と林潭の交流も頻繁であった。七首の中から「竹醉日同元聲叔訪林二恥于晩香園」「林二恥避亂入城過枕山樓夜話 二首」「訂九日同林二恥登石鼓山不果」を取り上げ、二人の交遊を見ていきたい。この三首以外の詩[2]は、すべて林潭を憶う内容はあるが、陳元輔との交流を直接反映しているものではない。

【20】

竹醉日同元聲叔訪林二恥于晩香園　　**竹醉の日、元聲叔と同に林二恥を晩香園に訪ぬ**

天馬峰前處士居　　天馬峰の前　處士の居なり
短笻不到十年餘　　短笻（たんきょう）到らず　十年餘
辟人門巷尚栽柳　　辟人（へきじん）の門巷尚ほ柳を載（はぐく）み
餉客田園盡種蔬　　餉客（しょうきゃく）の田園盡く蔬（そ）を種う
兩峽横江金鎖水　　兩峽江に横たわる金鎖水
孤山讀史鐵函書　　孤山史を讀む鐵函書（てつかんしょ）

殊色、不受辱、罵賊寸磔死。潭誓不再娶、寄居文殊寺僧房、以終其身、自號二恥者、恥不忠不孝也。著二恥齋集。（李永選撰『長楽六里志』、福建省地図出版社、1989 年 3 月第一版、134 頁）

[1]「竹醉日同元聲叔訪林二恥于晩香園」、「郢中懐林二恥」、「瓊川夜坐有懐林二恥歸隱峽江曾子浴參軍長溪」、「林二恥避亂入城過枕山樓話舊 二首」、「訂九日同林二恥登石鼓山不果」「秋夜枕山樓懐林二恥」

[2]「秋夜枕山樓懐林二恥」、「郢中懐林二恥」、「瓊川南樓夜坐有懐林二恥歸隱峽江曾子浴參軍長溪」

相過對酒風清夜　　相い過りて對酒す風の清き夜
竹醉鹵[1]窓月上初　　竹醉鹵窓夜月初めて上る
【七言律詩】
【平水魚韻】

【通釈】
天馬峰の前には隠者の住んでいるところがある。ここに十年あまり来なかった。君子だけが往来する道に柳を植えている。客を款待するために畑にはことごとく野菜が植えてある。両側の山は川を挟んで河水は金鎖のようである。孤山で史書を読む経歴を記して鉄箱に保存する。林潭の家に寄ってすがすがしい夜にともに酒を飲む。竹は揺れて西の窓口に明月が昇ったばかり。
【分析】
まず題目を見てみる。竹醉日は旧暦五月十三日である。この日は竹を植える日である。五月十三日に陳元輔と叔父である陳元声とともに林潭を訪ねて行ったことが分かる。晩香園は林潭の庭園の号である。陳元聲については陳元輔の叔父である以外詳しいことは分からない。『中山詩文集』には陳元声の作品が収録されている。署名の処で「陳鏞、元聲、太学」と書かれている。よって陳元声は本名が陳鏞、字は元声で太学生であることが分かる。
〈首聯〉
「天馬峰前處士居、短筇不到十年余」
「天馬峰」の具体的な場所は分らない。しかし、林潭が長楽県の大象山で隠遁していたことが分るから、おそらく大象山のことであろう。この句は林潭の住所が天馬峰のあたりにあったことを示している。
「短筇」は短い杖である。郊外、山奥に行く時持って行くもので詩の中で林潭の居所を訪問することを指す。「短筇不到十年余」は陳元輔が十年間あまり林潭の居所に行かなかったことを表す。
〈頷聯〉
「辟人門巷尚栽柳、餉客田園盡種蔬」
「辟人門巷」は道に外れた人間を避けるために設けられた壁や門である。つまり、君子、徳が高い人しか林潭と交遊できないことを言う。「栽柳」は陶淵明が家の前に五つの柳を植えたことにちなんで林潭も柳を植えた。家の近くに柳を植えることは隠者であることを表す。
「餉客」は賓客を款待することである。林潭は賓客を款待するために畑に野菜を植えていた。林潭と陳元輔、竺天植らは同じ知識人である。しかし陳元輔たちは師匠等の職に携わっているが林潭はどのような仕事をして暮らしていたか良く分からない。この句からすると、実は林潭が野菜を植えて賓客を款待するわけではなく、しかも陳元輔たちのように親しい友人もめったに訪ねてこないことから、野菜を植えていたというのは、貧しい素朴な生活を意味しているのかもしれない。
〈頸聯〉
「兩峽横江金鎖水、孤山讀史鐵函書」
「兩峽横江金鎖水」はこの句は峽江の地勢を描いている。両側の山は川を挟んで金鎖のような河水

[1]同「西」

が流れており、林潭が俗世と切り離されていることを言う。

「孤山」は宋の林逋が西湖の孤山で鶴を息子とみなし、梅を妻と見なして隠遁していたところである。ここでは林潭が大象山で隠逸生活を過ごすことを指す。「鐵函書」は宋人鄭肖思が、自分の作品集である『心史』を鉄の箱に入れて密封した後箱を蘇州承天寺の井戸に沈めた故事を言う。365 年後明崇禎 11 年、蘇州の干害で井戸の水が枯れたのでやっと人に見つけられた。[1]鐵函書は書物をきちんと保存して後世に伝へること。ここは隠者である林潭が、節操が固く経歴を記して後世に伝えていることを言う。

『心史』は一般的な作品集ではない。作者の鄭肖思は異民族の政権に対する恨みを込めて文集に寄せ、かつ元の皇帝、ラマ教の僧侶が祭祀のために生きている人を犠牲として殺すことも記している。このような書物は明らかに少数民族政権にとって好ましくない。宋元の交替と明清の交替は、同じように異民族勢力が漢民族の王朝に取って替わった背景があり、そのような背景を持つこの本は「反清」の人々に推奨されていた。そのため清朝初期において『心史』は禁書となっていた。陳元輔は順治年間に生まれており、それは明が滅びて十二年後のことであり、反清意識は強くないはずである。しかし、林潭は明の「遺民」である。林潭の伝記に「明亡、棄舉子業、攜家隠大象山」という言葉がる。明が滅亡した後、林潭は科挙をやめて一家を連れて大象山に隠遁した。清の臣民になりたくない、清の官僚になりたくないという思いがあったのだろう。これは無言の反抗ではないだろうか。林潭はこの『心史』を読んだことがあるかもしない。林潭が反清の意識があるかどうか明確ではないが明を懐かしむ気持ちがあると考られる。

〈尾聯〉

「相過對酒風清夜、竹醉鹵窓月上初」

「相過對酒」は林潭の居所に寄って酒を飲むことである。「風清夜」は風がすがすがしい夜のことである。陳元輔、陳元声、林潭はすがすがしい夜に一緒に酒を飲みながら愉快に話し合った。そのような場面を描いた。

「竹醉」は竹が風に揺れている様子が酔っぱらった人のように見えることを言う。「鹵窓月初上」は月が西から登ったばかりである。

林二恥避亂入城過枕山樓話舊

其一

峽江戎馬滯行舟
愛客樓中久未游
兩地風霜經五夏
半簾花雨夢三秋
驚心荒草將安往
隨意深山可暫留
握手與君頻悵望
江天滿目一沙鷗

【七言律詩】

【平水尤韻】

林二恥亂を避けて城に入り枕山樓に過ぎりて舊を話す

其の一

峽(きょう)江の戎馬　行舟滯(とどこお)り
愛客の樓中久しく未だ游ばず
兩地の風霜　五夏を經て
半簾の花雨　三秋を夢む
驚心荒草將に安(いず)くにか往かんとす
隨意の深山暫く留まるべし
手を握りて君と頻りに悵望す
江天滿目　一沙鷗(さおう)なり

[1] 清・計六奇『明季北略』巻 14、中華書局、1984 年 6 月、251 頁。

【通釈】

峽江では戦乱が多くて往来の船を塞ぎ、親友は私の家に長い間来ていない。二人が別れ五年が経ち、夢の中では、三年が過ぎたようであるが、目覚めると一夜の風雨を経て簾に花びらが附いていた。目の前には、あちこち枯れた草が茂って、どこに行こうというのか。気が合えば辺鄙な山奥でも住める。君と一緒にふさぎこむ気持で遠くを眺めている。江天を見下ろすと一羽のカモメが中洲に棲んでいる。

【分析】

「愛客樓中久未游、兩地風霜經五夏」

林潭にとって陳元輔が親しい友人であるから「愛客」は林潭の称である。「久未游」から見ると、林潭は長い間陳元輔を訪ねて来なかったことが分かる。

「兩地」は陳元輔が福州に居り、林潭は「峽江」で隠遁していることを指す。「經五夏」は五年間を過ごしたことを意味する。つまり、二人が別れて五年間が過ぎている。この作品の作られた時間が明らかにできる。康熙十五年、林潭は陳元輔と別れている。その五年後は康熙二十年（1681）である。

「半簾花雨夢三秋、驚心荒草將安住」

「半簾花雨」は風雨に吹かれて花が簾にくっついていること言う。「夢三秋」は夢の中で三年が過ぎたことを意味する。要するに一夜の風雨で花びらが散らばって目覚めると夢では三年間が経ったかのようである。この句は五年の時間をあっという間に過ごしたことを表している。

「驚心荒草」は晩秋の枯れ草が広げている様子に驚き、戦後の衰えた景色を形容する。見わたす限りの荒野、どこも落ちぶれた様子で茫然としてどこに行けばよいのか分からない気持ちを表している。

「隨意深山可暫留」において、「隨意」はきの向くままにするとの意味である。心にかなえば山でも暫く住める。戦乱の続く世の中では、一般的に人はどうすればいいのか知らない。しかし、林潭は心のおもむくまま山の中でも暮らせる。この句で林潭は乱に身を置いても落ち着いていることを言っている。同時に陳元輔は林潭に対する敬意を表している。

「握手與君頻悵望、江天蒲目一沙鷗」

「握手」は手を携えて面会すること指す。「悵望」は失意のうちに眺めるの意である。二人は一緒に峽江方面を眺めていて気持ちが複雑である。

杜甫の詩「旅夜書懷」の句である「飄飄何所似、天地一沙鷗[1]」で表しているムードと感情は本詩の尾聯と似ている。天地の間に一羽のカモメが棲んでいる。前句では二人、未来の自分の進路にたいする不安な気持ちで遠くを眺めている。その時眼前に広がる川と空の間に、自由に遊ぶカモメが見える。その瞬間に詩の基調が、ふさぎ込む状態から良いほうに転換していく。

其二	其の二
孤客荒村盡黍禾	孤客荒村　盡く黍禾（しょか）なり
近攜一履肯相過	近く一履を攜（たずさ）えて相過（よぎ）るを肯んず
訪予何以年來少	予を訪ぬること何ぞん以て年來少し
愛爾偏於別後多	爾を愛すること偏（ひとえ）に別後多し
文酒亂山頻坎坷	文酒[2]亂山[3]　頻に坎坷なり
館池衰柳易蹉跎	館池衰柳　蹉跎し易すし
干戈滿地煙波穩	干戈滿地　煙波穩かに

[1]范允何編『杜甫詩選』、經緯書局、1954 年、138 頁。

[2]「文酒」は酒を飲みながら詩を作ること。

[3]「亂山」は北宋詩人、曽鞏の作品である。

江上還須覓志和　　江上還た須らく志和を覓むべし

【七言律詩】

【平水箇韻】

【通釈】

客が村に来て、農作物も成熟しているが刈り取る人が見えない。簡単な旅装でもいい、訪ねてもらえないか。最近、私の処へ来るものが少ないのはどうしてか。君と別れた後、さらに君との友情が深くなる。酒を飲みながら詩を賦する曾鞏は一生不遇であった。校書郎である白楽天は官途が不順であった。戦闘後、兵器が散らかっているが、川は穏やかに流れている。江で隠遁すれば張志和を探す。

【分析】

「孤客荒村盡黍禾、近攜一履肯相過」

「孤客」は一人旅の人である。「黍禾」はキビとアワで広く穀物などの農作物を言う。この句では一人の旅の人が荒れた村に来て目の前に作物が茂っているが収穫する人が見えないという風景を描いている。村の人がみんな避難し逃げたことを言う。

「攜一履」は靴一足を携えて来たということで簡単な旅装を言う。「相過」は陳元輔を訪ねて来ることを言う。この句で陳元輔が林潭に簡単な旅装でも十分で私が招待するから訪ねてもらえるかと伝えたい気持ちを詠んでいる。陳元輔はいつも林潭の来訪を期待している。このことから二人は親しい友人であることがわかる。

「訪予何以來年少、愛爾偏宜別後多」

陳元輔は林潭になぜ最近私を訪ねることがすくないのかと聞いた。陳元輔は林潭のあまりこないことに憾みがあると感じさせる。不安定な世の中を嘆いている。

「愛爾」は林潭に対する友情である。この句で別れている間に陳元輔は林潭に対する友情がひとえに深くなると言う

「文酒亂山頻坎坷、館池衰柳易蹉跎」

「文酒」は酒を飲みながら詩を作ることである。「亂山」は北宋詩人、曽鞏[1]の作品である。曾鞏は唐宋八大家の一人である。曾鞏の官途について、『宋史』で「徒亳滄三州。鞏負才名，久外徒，世頗謂偃蹇不偶」と評している。曾鞏は相当文才と政治能力を持つのにいつも辺鄙な地域で官に就いて一生不遇であったという。

「衰柳」は唐、白楽天の作品である「題雨中衰柳」である。「易」は掛詞であり、白居易を指す。「蹉跎」は失意のさまである。唐代、昭文館、史館、集賢院[2]という機構を設けて白楽天に校書郎を授けていた。ここの「館池」は白楽天の働く場所を指すと考える。

「頸聯」において「亂山」「衰柳」との作品名を用いて各々の作者を表し、かつ「亂山」「衰柳」は字面の意味からも当時の戦乱の状況を反映している。「坎坷」「蹉跎」をもって歴史上の曾鞏、白楽天は優れた人材であるが不遇な一生であったことを描き出している。歴史上の人物の不遇にかかわらせて陳元輔は自分と林潭の境遇を照らし合わせている

「干戈滿地煙波穩、江上還須覓志和」

「干戈」とは盾と矛で転じて戦争を言う。「干戈滿地」は矛、盾などの武器が地に散らかっている場面を言う。戦争が激しかったことを言う。「煙波」はもやもやとした江面である。戦争が激しく続

---

[1] 曾鞏：宋、建昌南豐の人。字は子固。謚は文定。少くして警敏・筆を援れば直ち文を成す。歐陽修一見して奇とす。嘉佑の進士。齊・襄・洪・福・明・亳・滄諸州の知を歴、所在奇績多く、後、中書舍人に拜せられる。元豐六年卒す。年六十五。世に南豐先生という。唐宋八家の一人。著に元豐類稿がある。(『宋史』巻 319、中華書局 1975 年より要約した)

[2]その三館は国家図書館、国史を修める役割である。

いているが川は依然として悠然と穏やかに流れている。

「志和」は唐代の詩人張志和を指す。張志和の字は子同である。三歳の時、本を読み、六歳の時文章を作り、しかもただ本を一回読むと覚えたという。後に官は左金吾衛大將軍に至った。上元二年（762)、妻が逝去した後、湖州城西の西塞山で漁民として隠遁した。号を「煙波釣徒」という。[1]張志和は強盛を誇った唐が衰退する時期を経て乱世の中で隠遁し始めた。陳元輔も戦争の残酷な経験をしており、流れている川を見たときに唐代の張志和を思い出した。その裏には乱世を避け、犠牲になった妻を思い、峡江に隠棲している林潭の生き方が重なっている。「江上海須覓志和」は張志和にまねて隠遁する意を表している。

この二つの詩を通して、林潭は乱を避けるために福州城に入り、陳元輔を頼っていたことがわかる。若い時、一族を匪賊に殺され、朝代交替の戦乱の中で何とか生き延びてきた。またさらに三藩の乱に遭遇し福州城に入り陳元輔に頼っている。林潭は人生の様々な不幸を堅忍し、乱世を生き延びていることについて、陳元輔は同情と共に畏敬（いけい）の意を示している。陳元輔にとって人生の中で最も消沈していた時期である康熙十一年（1672）～康熙十五年（1676）の間に、林潭は福州に遊学している。陳元輔にとって林潭は親友であると同時に、人生における師であったといってもいい。

【108】

訂九日同林二恥登石鼓不果　　九日林二恥と同に石鼓に登らんと訂するも果さず

簾幕風高雁影廻	簾幕風高く雁の影廻る
絳囊香氣襲青苔	絳囊の香氣青苔を襲う
臨岐未攝登山屐	岐に臨みて登山の屐を攝らず
對景空懷作賦才	景に対いて空く懷く作賦の才
曲徑寒帖催葉落	曲徑寒帖　落葉を催し
深秋黃菊帶霜開	深秋黃菊　霜を帶びて開く
如何載酒芭蕉下	如何せん酒を載す芭蕉の下
不見伊人戴笠來	伊の人笠を戴き來るを見ず

【七言律詩】

【平水灰韻】

【通釈】

題目：九日に林二恥と石鼓山に登ることを約束したが実現できなかった。

簾は風に高く拂われて雁が空に飛び回っている姿が見える。赤い果実が成熟した香りは青い苔に触れる。山を登る時、「謝公屐」を履かなかった。景色に対して賦を作れる才能が有っても作る意欲がない。曲がりくねった隠逸者の家への道に寒くて木の葉も次々と落ちる。晩秋、菊の花ビラに霜が付いている。どうしたらいいのか、私が酒を載して芭蕉の下で待っているのに君が（林潭）笠を着けて来る姿が見えない。

【分析】

題目から九日に陳元輔は林潭に一緒に石鼓山に登山しようと約束したが、実現しなったことが分か

[1]元・辛文房著 、傅璇琮編『唐才子傳校箋』第 1 冊巻 3、中華書局、2000 年、687 頁。

る。

〈首聯〉

「簾幕風高雁影廻、絳囊香氣襲青苔」

「簾幕風高」は建物の入り口、窓口にかかっている簾が風に高く飛ばされるということである。「雁影廻」は雁が空に回っている姿が見えることを言う。

「絳囊」は草木の赤い果実を指す。果実は成熟した香りが濃くて青い苔を覆っている。

首聯における雁、果実（絳囊）などは秋の季節であることを表している。かつ、九日に登山しに行くというから、この九日は九月初九日、重陽節であることが分かる。重陽節には高い処に登り菊の花見をして茱萸を頭に挿すなどの慣習がある。王維の作品である「九月九憶山東兄弟」は「重陽節」についての名作で、「獨在異郷為異客、毎逢佳節倍思親」という句がよく知られている。

〈頷聯〉

「臨岐未攝登山履、對景空懐作賦才」

「臨岐」は高低のある山道を踏むことを言う。つまり、登山の事である。「登山屐」は南朝宋の詩人謝霊運が登山する時、歯があるゲタを履いていたことを言う。山に登る際にゲタの前歯を卸し降りる時には後歯を卸す。陳元輔は一人で景色に対して賦を作る才能を持っても作詩の意欲がない。なぜなら、もともと林潭と重陽節に石鼓山に一緒に登る予定だったが、できなかったため落ち込んでいた。

〈頸聯〉

「曲徑寒帖催葉落、深秋黄菊帶霜開」

「曲徑」は曲がっている道である。詩の中では、林潭の家への道を指す。東晋の王義之は寒い日に友人を思い出して手紙を書いて送った。この手紙が後の「十七帖」の一つになって「積雪凝寒帖」[1]として知られている。手紙に王義之は「君と二十六年間会わなかった。たまに手紙の往来があるが懐かしい思いを抑えきれない。最近の手紙二通を読むとただ心中に感慨や惆悵を増やすだけである。今日のような寒さは、この五十年間になかっただろう。君もいつも通りに元気だろうか。来年の夏と秋の間によければ君の手紙をいただきたい。歳月がまだ長い。どうかよろしく」との内容を書いた。つまり、この「寒帖」はこうした友人に送る手紙を指す。また、寒帖が寒い日に書かれたため天気が寒いことも共に言う。天気が寒くなって木の葉がさらに速く落ちるようになった。これが物寂しい景色を描いて寂しい心境を一層表す。「帶霜開」は霜が付いたまま菊が咲いていることを言う。ここから確かに晩秋になったことが理解できる。

〈尾聯〉

「如何載酒芭蕉下、不見伊人戴笠來」

また、重陽節に「菊の酒」を飲む慣習がある。

尾聯では、陳元輔がわざわざ酒を準備して芭蕉の下で待っていた。しかし林潭は現れず残念な気持ちが感じられる。

[1]「計與足下別廿六年、于今雖時書問、不解闊懐。省足下先後二書、但增嘆慨。頃積雪凝寒、五十年中所無。想頃如常、冀來夏秋間、或復得足下問耳。比者悠悠、如何可言。」（清・嚴可均輯『全上古三代秦漢三國六朝文』巻 22、商務印書館 1999 年 10 月 210 頁）

第三項　王登瀛

以下、勤学の師匠であった王登瀛について、林潭『柔遠駅草』、『晩香園梅詩』の王登瀛の跋文、『四本堂詩文集』の王登瀛の序文などから、その経歴を考察することにする。ちなみに史書や地方史には、王登瀛に関する記述は、管見の限りみられない。

まず『晩香園梅詩』の王登瀛の跋文と『柔遠駅草』の林潭の序文から、王登瀛の生年について考察してみたい。王跋には「（林潭）獨與予昌其二人交善，花晨月夕杯酒唱和者幾五十年」と記されている。この跋文は康熙六十年（1721）に書かれているので、この時点で林潭と王登瀛の交遊は五十年を経過していることになる。ということは、康熙 10 年（1671）頃には二人はすでに知遇を得ていたことになる。康熙 10 年、王登瀛は何歳であったのであろうか。

『柔遠駅草』の林潭の序文には以下のようにある。

> 予（林潭）自少與邦光先生以文章意氣相期。其介弟邦菴時尚未舞勺、見其雙眸炯炯精神全大於身心、私異之。嗣是南轅北轍不相聚首者數十寒暑、而王子伯仲琴劍四方所在名士大夫爭相倒屣恐。（私（林潭）は若い時、王邦光（王登瀛の兄）と文詞において意気投合した。彼の弟邦菴（王登瀛）はその時十三歳にもなっていなかったが、邦菴の目がきらきらとしており、生気が心身にみなぎっているのをみて、その非凡さを感じた。その後、遠く距離を隔て会えなくなってから数十の季節を数えた。兄弟二人が国中を遊歴し、どこでも彼らは土地の名士や士大夫に大いに歓迎されていた。）

上記から、王登瀛は少なくとも舞勺の年齢（12 歳ぐらい）には、林潭に出会っていたことが分かる。これが二人の初対面の時の記述であると考えていい。林潭は親しい友人について語る時その初対面の印象を書き記すことが多く、事実、陳元輔の詩集の序文にも、陳元輔と初めて対面した時の印象を述べている。

要するに康熙 10 年（1671）に王登瀛が 12 歳の時、林潭と会っていることから、さかのぼること十二年前の、順治十七年（1660 年）に誕生したことになる。とすると陳元輔との年齢差は六、七歳ぐらいであったことが分かる。程順則との年齢差は三、四歳である。

資料には王登瀛と彼の兄は四方に遊歴して広く各地域の知識人と交遊していると記されている。要するに福州に長期定住していなかったのである。

その遊歴に関しては『四本堂詩文集』の序文の中に以下の資料がある。

> 余曩者浪跡天涯、泛三巴之江、入五羊之城、登黃鶴樓、渡白馬津。南馳北竄、僕僕于風塵者幾二十年。（余曩に天涯に浪迹し、三巴の江に泛かび、五羊の城に入る。黄鶴楼に登り白馬津を渡る。南に馳せ北に竄し、風塵に僕僕すること二十年に幾し）

これによると王登瀛はかつて、中国の各地を放浪し、三巴（四川）の川を船で遊覧し、五羊の城（広州）に入り、また黄鶴樓（湖北に在る）にも登り、白馬津（河南に在る）さえも渡った。北に南に巡覧し、二十年の間、さしたる功績もなく旅をした。だがこのことで王登瀛は多くの知見を得、経験も豊富で知識人としての視野も確実に広がっていた。

『四本堂詩文集』の中に、「癸酉槐黃歸自廬嶽、因受刖為諸及門所留設絳于瓊河柔遠驛樓、日與諸子談經染翰（癸酉槐黄廬嶽より歸り、刖を受くるに因り諸の門に及ぶ所の為に絳を瓊河柔遠驛樓に留め設け日び諸子と經を談じ翰を染む）」という記述があることから康熙 32 年（1693）の秋、王登瀛は

癸酉科郷試を受験し終えて勤学の師匠を始めている。康熙 27 年（1688）は、王登瀛が福州に泊まって琉球人と頻繁に接触する時期である。程順則、蔡応瑞、金溥などの友人とはこの年に知り合った。

後に康熙 60 年（1721）、王登瀛は程順則の依頼により『晩香園梅詩』に跋文を、『中山詩文集』に序文を寄せている。竺天植、林潭、陳元輔より王登瀛は長生きしており、雍正 3 年（1725）に至っても柔遠駅で師匠として活躍していたことが資料で確認できる

王登瀛の『柔遠駅草』には陳元輔に関わる詩が 4 題 9 首[1]収録されている。一方、陳元輔の『枕山楼詩集』には王登瀛に関わる詩が僅か一首[2]しかない。『枕山楼詩集』は康熙 30 年（1691）に成立したものであるが、この前に王登瀛は中国各地を歴遊しており、福州を留守にしていた。王登瀛は勤学の師匠になる前、すでに陳元輔との関係で柔遠駅に出入りしており、王登瀛の『柔遠駅草』は、康熙 30 年（1691）以降の作品が半分以上を占め、上述したように陳元輔に関わる詩が多い。これは康熙三十二年（1693）から王登瀛が琉球人の師匠を務め、以来、陳元輔との交流が増加したことによるものとみていい。

以下、「送陳昌其之溫陵張元俟幕」を紹介し、陳元輔と王登瀛の交流の一端をみてみたい。

送陳昌其之溫陵張元俟幕　　陳昌其温陵の張元俟の幕に之くを送る

驪歌未唱淚沾襟	驪歌未だ唱わざるに涙襟(えり)を沾(うるお)す
別緒難禁強自吟	別緒禁(たえ)え難く強いて自ら吟ず
愧我脂車游已倦	我脂車の游に已に倦むを愧じ
為君折柳意還深	君の為に柳を折る意い還(また)深し
文章須得驚人語	文章須らく人を驚かす語を得るべし
筆墨無嫌買賦金	筆墨嫌(いと)うこと無し　買賦金
千古馬周天下士	千古の馬周　天下の士
此行自必有知音	此の行自(おの)ずから必ず知音有るべし

【七言律詩】

【平水浸韻】

【通釈】

別れの歌をまだ歌わないのに涙が襟を濡らす。別れの気持ちを抑え難くて強いて自ら詩を吟じる。私は遊歴に飽きることを恥じる。君の為に柳を折って送る意はまた深い。文章は人を驚かす言葉である必要がある。文人は買賦金を嫌うことがない。天下を治める千古の馬周ように、今度の旅には必ず知己に出会うであろう。

【分析】

詩の題目から、陳元輔が温陵の張元俟の幕職として出向く際に、王登瀛が贈った贈答詩であることが分かる。まず、「温陵」という地名であるが、清代の知識人が地名などを述べる時、当時の行政地域名を使わず、秦漢時代の古地名を使うことがよくあった。例えば、陳元輔は福州の人なのに「晋安」

[1]「冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻二首」「同林二恥陳昌其張庶咸宴集仁山樓」「送陳昌其之溫陵張元俟幕」「春仲喜林二恥竺天植陳昌其集仁山堂話舊」

[2]「冬夜同王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字」

の人と自称する。竺天植は楊州の出身なのに「広陵」の人と自称する。彼らの本当の出身地は古地名に遡らないと分からない。唐以前、泉州地域は「温陵」と呼ばれていた。「張元侯幕」について見てみよう。「元侯」は周代において諸侯の長が「元侯」と呼ばれるが、後に省レベルの地方の大官僚を指す。題目から陳元輔は泉州の張という大官僚の幕職に入ったことがわかる。『枕山楼課児詩話』の戴翼の序に「提軍張公徴聘入幕以國士待之」とあり、陳元輔を雇った張公は泉州の提軍であったことが分かる。乾隆『泉州府志』を調べると、省レベルの武職に福建陸路提督軍門という職名がある。「福建陸路提督軍門」（以下提軍と）の略語がまさに「提軍」である。「提軍」は武職の従一品であり、張公はさらに「元侯」というレベルの大官僚である。当時、「提軍」に就いた張姓の人は「張雲翼」「張起雲」だけである。「張起雲」[1]は雍正年九年（1731）に「提軍」に就いていることから、この人はここでいう張公ではない。「張雲翼」[2]の字は又南、康熙二十五年（1686）に「提軍」を授けられたとある。おそらくこの張雲翼が張公であろう。この人はただの武将ではなく文人士大夫で、詩酒で文を論じ、さらに囲碁をやりながら詩を作ることもあったようで、『式古堂詩文集』が後世に伝わっている。「儒将[3]」であり、「武将」でもある張雲翼が文人である陳元輔を重視して雇ってもおかしくない。陳元輔の泉州行は張雲翼（張公）からの人選であった可能性もある。一方、張雲翼の『式古堂集』の「鼓山記[4]」によると、張雲翼は康熙二十六年（1687）の九月に公務のために福州に行っている。どういったきっかけで陳元輔は張雲翼と知遇を得たのかは分からないが、陳元輔も自ら自薦書[5]を書いて張雲翼に提出している。陳元輔は康熙二十七年（1688）に泉州の張雲翼の幕職についたことが確定できることから、この詩は康熙二十七年（1688）に作ったものと考えてよいだろう。康熙二十七年（1688）、程順則が一回目の留学が終わって帰国した後に、陳元輔は張雲翼の幕職についたことになる。しかし、張雲翼の幕職を長く勤めず、康熙二十八年（1689）の春以前に福州に戻っている。こうした経歴を有する陳元輔は、一般の福州の文人ではない。大官僚と知遇を得た経歴を通して陳元輔は一定の人脈を得ており、後に「候補縣丞」[6]を授けられている。

「驪歌未唱涙沾襟、別緒難禁強自吟」

「驪歌」は別れの歌である。「襟」は衣服を着た時に首の前で交差する部分である。別れの歌をまだ歌ってないが涙を抑えられず襟を濡らした。涙に襟を濡らすという表現が二人の深い友誼を示している。

「別緒」は別れる気持ちである。王登瀛は当時友人である陳元輔との別れる寂しい気持ちを抑えられなくて強いて心を落ち着かせようと詩を吟じる。陳元輔が福州から遠くない泉州に行くだけでそれほどの別離の情を表すのは大げさであると思われる。しかし、王登瀛は長年、福州におらず陳元輔と会うチャンスも少なかった。さらに康熙二十七年に福州に戻ったばかりの王登瀛がまた陳元輔と別れ

---

[1]『乾隆泉州府志』巻 32「名宦四」（『中国地方志集成・福建府縣志集』、上海書店出版社、2000 年、120 頁）

[2]張云翼、字又南、關中人。初為大理寺卿、以父抒西陲功、襲封侯爵。康熙二十五年授福建陸路提督。至則戢部伍、恤閭閻、謹斥堠、詰奸宄、萑苻屏息、兵民晏如。暇則与士大夫樽酒論文、敲棋賦詩。辛未夏旱、祈祷莫応、云翼乃命建壇于東岳祠、蔬食致斎、為文告之、复步祷于烈日中。于是雷作雲同、傾盆如注、益以霢霂数日、高下均沾、歳以丰稔。泉民争頌其功。又念岳山冢累累、貧民无埋葬之区、捐資購地以為義冢、民咸德之。所着有『式古堂詩文集』（『乾隆泉州府志』巻 32「名宦志」＜『中国地方志集成・福建府縣志集』収録＞上海書店出版社、2000 年、119 頁）

[3]学者のような風格のある将軍

[4]「丁卯秋九月余自泉至福州郡、公務畢因出東門為鼓山之游」清・張雲翼『式古堂集』（清代詩文集彙編第 176 冊　上海古籍出版社　2010 年 12 月）

[5]『枕山楼文集』第四篇の文章「上覺内閣啓」（清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1691）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894）

[6]後補縣丞、実務がない職、名誉称号に相当する。陳元輔が記した程順則の母の伝記である「程大母恭人傳」の署名は「吏部侯補縣丞」である。

ることになった。このような事情を思えば詩中の言葉の表現が誇張ではないことが理解できる。
「愧我脂車游已倦、為君折柳意還深」
「脂車」は油脂で馬車の心棒を潤滑(じゅんかつ)にすることである。転じて遠い旅に出ることである。この句で王登瀛は遠出に飽きたと言っている。康熙三十二年の秋に王登瀛は科挙の試験から戻って、やっと落ち着いて柔遠駅で師匠をし始めた。王登瀛が康熙三十二年癸酉郷試を受験した場所は江西の九江府である[1]。王登瀛は籍を九江府に寄せて受験している。
「柳」と「留」の発音が似ているから「柳」を送るのは友人を留めたい意である。この句は王登瀛が陳元輔に名残惜しくて別れたくない意を表す。
「文章須得驚人語、筆墨無嫌買賦金」
「驚人語」は杜甫の詩句「為人性癖耽佳句，語不驚人死不休」から出たものである。文章を書けば人を驚かす言葉があるべきである。それは知識人として文を作る時、持つべき態度であるという。
「買賦金」[2]は漢の皇后陳阿嬌が武帝の寵愛を失った後、百金で司馬相如に賦を作ることを頼んだ典故である。この賦を武帝に見せた後陳皇后が改めて武帝の寵愛を得た。転じて、文章が美しくて価値も高いことを意味するようなる。「筆墨無嫌買賦金」は優れた作文、作詩能力は富になる手段であるといっても過言ではないと言い切っている。
「千古馬周天下士、此行自必有知音」
「馬周」は唐初の宰相である。官途の始めごろ、馬周はただ地位の低い役員である。馬周は自分が役不足だと思っていた。それで元の職を辞めて首都長安で常何の食客になった。常何の代わりに当時の政治についての文章を書くチャンスを得て、それが唐太宗に知られて仕えた。馬周は天下を治める才能を持つ人材である。紀元 645 年馬周は中書令を授けられた。[3]馬周の典故を使って陳元輔が今回幕職に入った後、きっととんとん拍子に出世するであろうことを隠喩している。
王登瀛は陳元輔に今回の旅で知己と会えるという希望を寄せている。陳元輔は康熙十五年の寧海将軍の幕職に入り、康熙二十七年、張雲翼の軍幕に入ったことからみると、陳元輔は功名を求める心をずっと持っていたといえるだろう。

次の組詩は珍しく陳元輔、林潭、竺天植、王登瀛が集合して一緒に交流していたことを反映している。『枕山楼詩集』には陳元輔、林潭、竺天植、陳元輔、王登瀛が集会したことに関わる詩がない。康熙 30 年以前、四人が一緒に福州にいる機会は少なかった。康熙 32 年（1693）、康熙 33 年（1694）前後、林潭、竺天植、陳元輔、王登瀛はみんな福州にいた。
詩の題目から、春の半ばごろ林潭、竺天植、陳元輔の三人は王登瀛の仁山堂で集まって思い出を語り合ったことが分かる。詩の其の三の自注で王登瀛は仁山堂で学んだと言っている。仁山堂は『同林二恥陳昌其張庶咸宴集仁山堂』にも現れる。仁山堂は、おそらく当時の福州の書院であろう。

春仲喜林二恥竺天植陳昌其集仁山堂話舊　春の仲、林二耻、竺天植、陳昌其仁山堂に集まり舊を話

---

[1]「癸酉懐黄歸自廬獄、因受刖為諸及門所留、設鐸於瓊河柔遠驛樓」蔡文溥『四本堂集』、榕樹書林出版影印版刊行、2003 年 9 月、12 頁。
[2]司馬長卿（相如）「長門賦・序」：孝武皇帝陳皇后時得幸，頗妒。別在長門宮，愁悶悲思。聞蜀郡成都司馬相如天下工為文，奉黄金百斤為相如文君取酒，因于解悲愁之辞。而相如為文以悟主上，陳皇后复得親幸（蕭統譔、李善注『文選』巻 16、＜『景印文淵閣四庫全書』第 1329 冊収録＞、台灣商務印書館、1976 年、 271 頁）
[3] 『新唐書』巻 98 の「馬周伝」中華書局 1975 年より要約した。

すを喜ぶ

【分析】

其一	其の一
繞梁燕子語方新	繞梁(じょうりょう)の燕子　語方に新し
花事繽紛過半春	花の事繽紛として　半春を過ぐ
喜有仁山能愛客	仁山能く客を愛する有るを喜ぶ
一樽招我兩三人	一樽我の兩三人を招く

【平水真韻】

「繞梁燕子語方新、花事繽紛過半春」

「繞梁燕子」は部屋の梁(はり)を回る燕である。春、燕は民家の梁やひさしの下に巣を築くことがあるから「繞梁燕子」は春の季節を示す。「語方新」は新しい鳴き声である。誕生したばかりのひなは巣で鳴いていることを言う。燕が巣を築いてから、ひな鳥を生むまで春の半ばを過ぎた。一句目、燕とひな鳥の鳴き声で春の半ばを示す。

「繽紛」はいろいろな色彩が入り乱れている様子である。「花事繽紛」は花がさかんに咲いている様子である。要するに春の一番華やかな時期が来て春の半分も過ぎてしまった。

「喜有仁山能愛客、一樽招我兩三人」

「仁山」は書院である「仁山堂」のことである。「仁山能愛客」は書院の方が友達の来訪を許してくれたと理解する。書院ではいきなり訪ねていくことができないため、友達の来訪を許してもらったことに喜んでいる。

「一樽」は宴席のことを指す。「両三人」は竺天植、林潭、陳元輔の三人を指す。

其二	其の二
樓高百尺傍春山	樓の高きこと百尺春山の傍ら
流水浮雲一榻間	流水浮雲　一榻の間
不憶桃花歴亂後	憶わず桃花歴亂(れきらん)の後
青青柳眼又開顔	青青たる柳眼又開顔す

【平水刪韻】

「樓高百尺傍春山、流水浮雲一榻間」

「傍春山」からみるとこの書院は山の近くにあるか、もしくは山の上に在る。「流水」は山から流れている泉である。詩人は椅子に座って窓外の景色を描いている。

「不憶桃花歴亂後、青青柳眼又開顔」

「桃花歴亂」は唐の賈至の詩「春至」の「桃花歴亂李花香（桃花歴乱李花香る）」という句から出たものである。「歴乱」は花の咲き乱れる様子である。その句は桃花が咲き誇った後、すももの花が香り始めたことを言う。

「柳眼」は柳の葉が芽生(めば)えたばかりの様子である。青々とする柳の葉が芽生えてまるで笑っている顔のようである

其三	其の三

懶性尤宜水竹居	懶性尤(らんせいもっと)も水竹居に宜し
喜君過我柳陰初（予講業仁山堂）	君我の柳陰を初めて過るを喜ぶ　（予業を仁山堂に講ず）
捲簾縱有山常在	簾(すだれ)を捲き縱い山常に在る有らんや
盡是春光感慨餘	盡く是れ春光感慨余る

【平水魚韻】

「懶性尤宜水竹居、喜君過我柳陰初」

「懶性」は、王登瀛は自己が怠惰な性格であることを言う。この句では王登瀛は自分が怠惰なので泉、竹居に隠居して住んだほうがよい言っている。

「柳陰」は柳下の蔭であり、詩文では休憩、遊ぶ処を指す。この句では陳元輔が王登瀛の住処を訪ねてくることを言っている。ちなみに王登瀛の書斎は柳軒という。

「捲簾縱有山常在、盡是春光感慨余」

「捲簾」は簾を巻くことである。王登瀛の部屋からは簾を巻いて外の山を見ることができる。「盡是春光感慨余」は春の景色が目に溢れ見ている者の感懐を引き起こすこと。

其四	其の四
閒雲寂寂鎖柴扉	閒雲寂寂として柴扉を鎖す
暮雨朝霞事事非	暮雨朝霞　事事非ず
最是不堪春半後	最も是れ堪えず春半の後
空余明月照花飛	空く残す明月飛花を照すを

【平水微韻】

「閒雲寂寂鎖柴扉、暮雨朝霞事事非」

「閒雲」はゆったりと浮かんでいる雲である。寂寂はひっそりとして静かな様子である。「柴扉」は枯れた枝で作った扉である。「閒雲寂寂鎖柴扉」は朝の煙は薪の扉をめぐってまるで扉を閉ざしているかのようであることを言う。粗末な住居を指す。

「暮雨朝霞」は朝焼けを見たら、夕方に雨が降るという諺である。「暮雨朝霞事事非」は短い一日中の天気の変化も大きい、長い人生では変化がさらに多くなるという意味を含んでいるのであろう。詩題の中に「話旧」と言う言葉がある。おそらくこれは元の陳元輔の詩の中に自分の人生を感嘆する内容があったのだろうと思われる。

「最是不堪春半後、空余明月照花飛」は春の半分を過ぎった後、耐えられないのは明月が花の散るのを照らすことである。要するに中春に過ぎた後、春色が徐々に衰えていくことを表す。

其五	其の五
百囀流鶯柳外聞	百囀(ひゃくてん)の流鶯　柳外に聞く
山花山草落紛紛	山花山草落ちて紛紛たり
燈前酌酒君憐我	燈前酒を酌み君我を憐れむ
月下敲詩我愛君	月下に詩を敲いて我君を愛す

【平水文韻】

「百囀流鶯柳外聞、山花山草落紛紛」

「百囀」は鳥などが玉をころがすように鳴くことである。「流鶯」は鳴き声が滑らかで抑揚である鶯を指す。「山花山草落紛紛」は山の花や草がちらちらと散っている。

「燈前酌酒君憐我、月下敲詩我愛君」

「酌酒」は酒を注ぐという意味である。「燈前酌酒君憐我」は灯の下で陳元輔は王登瀛に酒を注いであげたのであろう。「敲詩」は詩や文章の字句を取捨して、何度も練り上げることである。唐の賈島が自作の詩「僧推月下門」の推を敲にするかどうかで苦心した故事による。「月下敲詩我愛君」は夜に王登瀛は陳元輔の付和詩を真剣に作っていた。全体は以前王登瀛、陳元輔と交遊していた様子を描いている。

以上の五首は陳元輔の詩に和するために作られている。この五首詩は一気に作ったわけではない。詩の内容から、一日の違う時間帯を示していることが分かる。一首目の詩は春の半ばごろ昼に陳元輔らが王登瀛を訪ねて来たことを紹介する。二首目は仁山堂の近くの景色を描いている。三首目は王登瀛の当時の気持ちを述べている。四首目は夜の景色を描いている。五首目は月の下で詩をやりとりしたことを述べている。

続いて林潭に唱和する二首の詩を見て見よう

【分析】

其六	其の六
隔江山色半晴陰	江を隔て山色半ば晴陰なり
柳底鶯聲和客吟	柳底の鶯聲　客の吟に和す
但得春光常在眼	但だ春光を得て常に眼に在り
床頭何必看黄金	床頭何ぞ必ずしも黄金を看ん

【平水侵韻】

「隔江山色半晴陰、柳底鶯殼和客吟」

「山色半陰晴」は山色が半分暗くて半分明るく雨が止んだばかりの景色を描出している。

「柳底鶯聲」は鶯の声が柳の下から伝わって来る。「柳底鶯聲和客吟」において鶯は仁山堂で林潭の吟詠に付和するみたいに鳴いていることを言う。

「但得春光常在眼、床頭何必看黄金」

「春光」は春の景色である。唐代詩人張籍の作品「行路難」に「君不見床頭黄金盡、壯士無顔色（君見ずや床頭黄金尽き、壮士顔色無きを）」との句がある。この句は立派な男としてもお金がない時は困窮するという意味である。四句目、張籍の詩句を踏まえてできたものである。いつも明媚な春光を見られればお金に困っても大丈夫だと言っている。なぜ林潭に付和する詩で「黄金」を言うのか、おそらく林潭はいつもお金の問題に困っていたからであろう。確かに、林潭は隠逸者の名で地方志に記録されているが土匪に家を略奪されて寺院に寄寓したこともあり、林潭が窮困していたことは事実である。

其七	其の七
去年花下一逢君	去年花の下に一たび君と逢う
一別經年嘆不羣	一たび別れ經年(けいねん)不羣(ふぐん)を嘆く
今日花香君又至	今日花香り君又至る
離情愁緒莫相聞	離情愁緒　相聞く莫かれ

【平水文韻】

「去年花下一逢君、一別經年嘆不羣」

この句は林潭が去年の花が咲いている時福州に来て、王登瀛と逢ったことを表している。「一別經年」は去年別れて、一年経ったということを言っている。林潭は梅花を好んだ人物である。おそらく二人、去年の春一緒に梅花を鑑賞したのだろう。「不羣」は孤高のさまである。

「今日花香君又至、離情愁緒莫相聞」において、今年の春、花が咲いている時期、林潭はまたやって来た。林潭は当時の隠逸者として著名になった人物である。最初、長楽県の峽江に隠遁するが後に文殊寺に寄寓して暮らした。つまり、林潭は陳元輔、王登瀛、竺天植らと頻りに会えるわけではない。

「離情別緒」は別れの悲しみである。「離情愁緒莫相聞」において林潭といつも会えるわけではないけれども、現在一緒に楽しく語りあっているから離別や思念などの話題は出さないと言っている。

第四項　小結

以上紹介した陳元輔を中心とする四名は、共に康熙年間に福州柔遠駅で活躍していた閩人で、陳元輔と同じく竺天植、王登瀛は勤学の師匠となった人物である。林潭は勤学の師匠ではないが、陳元輔との関係で琉球人と接触し親しく交流した経歴をもつ。陳元輔、竺天植、王登瀛、林潭以外に琉球人との交友の確認ができる福州知識人には、曽子浴、王孔錫、陳元声、盧若采などがいる。当時、勤学の師匠以外にも、柔遠駅にはまたこうした福州の知識人（文人）らが集っていた。当然、彼らも勤学師匠と何らかの関係があったからこそ、柔遠駅（福州琉球館）に出入りし琉球人と接触できたという点に留意しなければならない。勤学の師匠はこうした知識人の中から選抜されていたと考えていいだろう。つまり、ただ知識があれば琉球人の師匠になれた訳ではなく、師匠への選任には推薦が必要であり、そこにはそうした人的つながりが大きく作用していたと考えられる。陳元輔を例にとれば、3人のうちまず竺天植が師匠となり、その推薦で、陳元輔は師匠になり、その後陳元輔の関係で王登瀛が師匠として推挙されたものと考えられる。

一方、竺天植、陳元輔、王登瀛らは柔遠駅で師匠に就いた際、いずれも年齢が三十歳以上になっていた。『論語』の為政篇に「三十而立」とあり、中国では男性は三十歳に至って、社会に対する責任、認識、大人としての良識、情緒、感情面で成熟する時期を迎えると考えられていた。柔遠駅では勤学人の師匠を選任する際、知識、経験以外に、そうした年齢といった要素も考慮して人選し、慎重に勤学に対する教学をおこなっていたことが窺える。

第二章　陳元輔、王登瀛と琉球の弟子及び友人

本章では陳元輔、王登瀛は琉球の弟子、友人との文人交流をめぐって論述したい。陳元輔は一生のうちで、多くの琉球人と接触したが、その中でも梁氏の四名（梁津、梁鏞、梁邦基、梁成楫）、蔡鐸、蔡肇功、程順則に関わる漢詩を分析して重点的に検討する。『枕山楼詩集』、『中山詩文集』以外、他に『琉球資料漢文編』に収録されている陳元輔の琉球人への書簡、程順則の福州人への書簡を用いる。王登瀛の琉球人との文人交流に関しては『柔遠駅草』を通して分析していきたい。

第一節　康熙年間福州柔遠駅における琉球文人について

福州に滞在していた琉球文人について定義すれば文学修業をする勤学と漢詩文ができる他の勤学を中心に、漢語に通じ漢詩も作れる存留通事などの役人、琉球官生を含めた人たちである。当然、文学修業をする勤学は琉球文人中の主体である。文学に専念する勤学は福州の教師に師事して師でもあり友人でもあるという関係を持ちながら教師を通して広く福州の文人と交流していた。深澤秋人によれば、時期的な特徴としては康熙年間の勤学事例が全体の半数を占めている[1]。つまり、康熙年間の琉球勤学と中国文人との交流は、清代の中琉文人交流において代表的な性質を備えているといえよう。

勤学人は福州で文学修業、技術修業などの目的を持ち福州に留学しているが、琉球文人のもう一つの形式は進貢の使節である。いつから勤学が派遣されたのかについては先行研究においては多く康熙22年（1683）、程順則が勤学の事の為に謝恩使紫金大夫王明佐に随って閩に赴いて四年留学した事例を挙げている。勤学という言葉ができた基準に基づけば、確かに康熙22年は勤学の開始である。しかし事実上、康熙2年、蔡彬、周国俊、曽永泰は「学文習礼」のため、尚質の冊封に対する謝恩使節金正春に随行して福州に遣わされている。しかし、学文習礼の傍ら進貢使節団に取り込まれて北京に行っている。この時福州に行った周国俊は『球陽』尚質王20年条では「存留官」と見える。そのため、深澤秋人氏は康熙2年の周国俊を勤学人の初発とすることには慎重であるべきであろうと指摘している。[2]一方、陳元輔の『枕山楼文集』に「蔡述亭傳」という文章がある。この文章の中の蔡述亭（蔡廛カ、これに関しては本章第三節で説明）という琉球人は1610年前、蔡堅に随行して福州で師に従って学習し、地元の文人と交流して僅か数年に足らずで実務に熟練し典籍に通じ、蔡堅の推薦より久米籍に編入されたと言っている。1610 年前後は明万暦年間でまた薩摩侵入の前後である。要するに福州に留学することは清代特有なものではなく万暦年間にすでにあったと言える。光緒元年（1875）最後に勤学生が福州に行った後、勤学の姿が消えた。

康熙帝は61年間在位しており、『久米家譜資料』によると、康熙年間で勤学人として確実に福州に赴いて学習した人物は54人確認できる。康熙年間の勤学人の人数は、実際はもっと多いだろう。（詳しくは「康熙年間勤学人表」[3]を参照されたい）。この54人の勤学人の目的を見ると、康熙5年（1666）、鄭職良は中国礼儀を習う為にとあり、康熙18年（1679）、蔡応瑞は地理を習うこと、康熙27年（1688）、

---

[1] 深澤秋人『近世琉球中国交流史の研究』、榕樹書林、2011年9月、170頁。

[2] 深澤秋人「清代における琉球使節の再検討―渡唐役人としての勤学人を中心に」（中国第一歴史档案館、中琉歴史関係学術研討会『第六回中琉球歴史関係研討会文集』、2000年10月、250頁）

[3]付録1

魏士哲は補唇術を習うこと、康熙 50 年（1711）、鄭儀は相法（人相を見る）を習うこと、康熙 56 年（1717）、紅士顯は地理を習うなど様々であるが、ほとんどの勤学人は、読書習礼とだけ記されている。

康熙 2 年（1663）6 月、蔡彬、周国俊、曽永泰（名を夔に変えた）三人は読書習礼の為に福州に赴いた[1]。これは、清代における、勤学人派遣の始まりだと言える。その後康熙 5 年、鄭職良は中国の礼儀を習うために福州に赴いて一年間滞在している。康熙 6 年から康熙 16 年までは、『那覇市史・家譜資料・久米系』における勤学人派遣の記録は空白である。この間、三藩の乱が始まり、康熙 15 年に靖南王耿精忠が投降して平穏を取り戻しつつあった。しかし、台湾の鄭氏勢力は三藩の乱の機会を利用してまた福建省を混乱に陥れた。康熙 17 年、蔡灼、蔡肇功が福州に遣わされたが、その後また、連続三年間勤学人の派遣が中断している。康熙 2 年から康熙 21 年まで勤学人の派遣は不安定であった。康熙 21 年以後は、ほぼ毎年、勤学人を派遣している。なぜ、康熙 6 年から康熙 16 年の 11 年間に勤学派遣が中断していたのか。琉球尚質王は康熙 7 年 11 月 17 日に薨去した。また、康熙 12 年、中国で勃発した三藩の乱があるなど、琉球も中国も不安定であった。勤学人派遣の中断はこれが理由であろう。特に康熙 12 年から康熙 22 年までの三藩の乱は、中国の東南沿海地域、中部、南部で反乱を引き起こしていたことから、当時の中国は非常に危険であった。清政府は福建の耿精忠勢力を康熙 15 年に平定したが、台湾の鄭氏勢力が機会に乗じて福建沿海を騒がしていた。康熙 22 年、台湾鄭氏を消滅したことによって東南沿海にやっと安定が戻った。康熙 22 年まで中国は社会環境が不安定であったことから、琉球側は勤学の派遣をかなり慎重に考えていたのであろう。（清初中国及び福建の社会背景に関しては序章の第二節ですでに詳しく論述している。参照されたい。）

康熙年間の勤学人は、福州で最も短いもので 1 年滞在しており、最大滞在期間は 7 年である。大多数は三年から四年滞在していた。勤学人の滞在年限が正式に定められるのは、資料で確認できるのは、『球陽』尚敬王十九年の条[2]（雍正九年）の記録である。

康熙帝は 61 年間在位していた。61 年間、琉球は 85 回、進貢船及び接貢船を遣わした。[3]管見の限りで『那覇市史・家譜資料・久米系』を見ると康熙年間に 54 名の勤学人が福州に行っている。実はこの人数よりはるかに多いと思われるのだが、現存資料には限りがあり完全に確認することは難しい。『枕山楼詩集』中に陳元輔と出会った琉球人が 13 名出てくる。『柳軒詩草』に登場している琉球人は 15 名いる。『枕山楼詩集』に登場している琉球人と重なる人物がいるが、それを差し引くと、この二つの資料から陳元輔、王登瀛と交流した琉球人は 26 名いることが確認できる。琉球人の師匠として陳元輔は様々な身分の琉球人と出会っている。勤学人以外に、琉球からの高位の使者と親しく交流したこともある。

康熙 23 年（1684）に、陳元輔は竺天植を介して程順則との知遇を得て琉球人との交遊が始まる。以下、陳元輔、王登瀛と交流のあった琉球人をまとめてみる。

以下の表は陳元輔、王登瀛との交流があった琉球人の一覧表である。この表を通して康熙 31 年ま

[1]那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6「久米系」、那覇市役所、1980 年 3 月 39 頁、262 頁、380 頁を参照されたい

[2]鄭秉哲蔡宏謨など『球陽』原文編　球陽研究会編　角川書店　1978 年 3 月発行 300 頁

[3]「清代渡唐人員表」よりまとめ（謝必振・朱徳蘭・赤嶺守編『中国と琉球人の移動を探る―明清時代を中心としたデータの構築と研究』、彩流社、2013 年 3 月、230 頁）

で、陳元輔、王登瀛とどんな身分の琉球人とが、いつ、どういう交流があったのかうかがえる。

共計 29 人

『枕山樓詩集』琉球人一覧表

名前	作品集	身份	在清期間	詩集中の作品名	内容	那覇市史家譜資料の出典
魏応伯（牧公）		進貢正使	1687 年 10 月 1 ～ 1689 年 5 月	送魏牧公入貢	送別	『那覇市史』資料編第 1 巻 7「家譜資料三」首里系 179 頁、180 頁
曾夔（虞臣）	『執圭堂詩草』	進貢副使	1687 年 10 月 ～ 1689 年 5 月	送曾虞臣入貢	送別	『那覇市史』資料編第 1 巻 6「家譜資料二」久米系 390 頁
梁津	『閩游草』佚	勤学人	1682 年～1688 年 5 月	贈梁得濟、秋夜望中樓懷梁得濟（其一）、秋夜望中樓懷梁得濟（其二）	贈答	同上 813 頁
梁鏞		勤学人	1685 年～1690 年 6 月	曾子浴歸自長溪與予同過瓊河古驛訪梁得聲夜話并索其新詩讀之、冬夜同王孔錫王邦菴梁得聲山樓夜話分得溪字	訪友	同上 768 頁
梁邦基	『梁本寧詩草』佚	接貢存留通事	1685 年 11 月 24 日～1688 年 5 月 27	上巳仝梁本寧得聲得濟陳魯水金浩然游烏石山觀朱夫子石室清隱石刻、秋夜望中樓懷梁本寧、	春遊懐友	同上 780 頁
陳其洙		勤学人	1684 年 12 月 ～ 1689 年 5 月	上巳仝梁本寧得聲得濟陳魯水金浩然游烏石山觀朱夫子石室清隱石刻	春遊	同上 460 頁
金溥		勤学人	1684 年～1690 年 6 月	同上	春遊	同上 77 頁
鄭士綸		勤学人	1682 年 -1685 年 7 月	題鄭克敘小影	贈答	同上 670 頁
蔡鐸（聲	『観光堂詩	進貢	1688 年 11	①送蔡聲亭入貢、②春杪	① 贈	同上 934 頁

亭)	草』	副使	月～1690年5月	瓊川阻雨因過蔡聲亭山樓茶話	答、②訪友	
蔡文敏				十二夜蔡文敏竹樓坐月遲竺天植不至	訪友	未詳
蔡幀菴				雨夜留宿蔡幀菴山樓同竺天植詩話	訪友	未詳
周新命（熙熙）		勤学人	1688年～1695年	春日留飲周熙臣山樓	訪友	同上381頁
程順則（寵文）	『雪堂燕游草』、『雪堂雜組詩』	①勤学人 ②存留通事	①1683年11月～1687年5月 ②1689年11月～1691年6月	①秋江雨泛同雪堂諸子、②吾兄詩酒繼陶君為中山程寵文賦、夏杪同諸子雪堂飲得秋字、	遊覽 ①贈答 ②宴飲	同上545頁
蔡肇功（紹齋）	『寒窗紀事』	存留通事	1690年11月～？	①元夕同程寵文廬若采留飲蔡紹齋江樓 ②冬杪讌集程寵文雪堂喜同方德祖鳳恭良蔡紹齋夜話	①宴飲 ②集會	同上932頁
方德祖				同上	集会	未詳
鳳恭良				同上	集会	未詳

以下の表は『柳軒詩草』に登場している琉球人の一覧表である。王登瀛の作品集に登場しているがこれらの琉球人も陳元輔との交流があったと考えている。

『柳軒詩草』の琉球人一覧表

人物	作品集	身份	在清期間	詩集中の作品名	内容	那覇市史家譜資料の出典
梁得聲		勤学人	1685年～1690年6月	冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻二首 懷梁得聲	附和	
陳魯水		存留通事	1692年～1694年5月	①同竺天植陳元聲集飲驛樓陳魯水以紙屏索詩併書兼讀陳元聲	①唱和 ②送別 ③悼念	

				題屏詩句即席走筆賦和 ②送陳魯水 ③遙輓陳魯水		
鄭克敘		都通事	1692 年 12 月～1694 年 5 月	送鄭克敘歸中山	送別	
周新命（熙臣）	『翠雲樓詩箋』	勤学人	1688 年～1695 年	①春幕集飲周熙臣翠雲樓 ②送周熙臣	①集会 ②送別	
蔡天水（文漢）			1696 年～？	立秋後二日集蔡天水山樓坐雨得青字	集会	未詳
程素文（順性）		勤学人	1691 年～1696 年 6 月	同程素文毛子狲鄭克文陳楚水紅爾吉驛樓分賦 送程素文鄭克文入都	集会	『那覇市史』資料編第 1 巻 6「家譜資料二」久米系 559
毛子狲（士豊）		勤学人	1692 年～1697 年 5 月	同上	集会	同上 710 頁
鄭克文				同上	集会	未詳
陳楚水（其湘）		勤学人	1692 年～1697 年 5 月	同上	集会	同上 469 頁
紅爾吉（永祚）		勤学人	1693 年～1699 年 7 月	同上	集会	同上 205 頁
蔡応瑞（祚菴）		接貢存留通事	1695 年 11 月～1696 年 6 月	送蔡祚菴入貢	送別	同上 301 頁
梁得剡（成楫）		都通事	1694 年 11 月—1696 年 6 月	送梁得剡入貢	送別	同上 790 頁
金浩然		存留通事	1694 年 2 月～1695 年 6 月	送金浩然歸中山	送別	
麻舜玉				送麻舜玉	送別	未詳
程順則	『雪堂燕游草』、『雪堂雑組』	進貢北京大通事	1696 年 11 月～1698 年 6 月	寄程寵文	懐人	

『枕山楼課児詩話』『四本堂詩文集』からは陳元輔は蔡文溥、曽歴と交流があったことが分かる。

名前	作品集或いは作品名	身份	在清期間	詩集中の作品名	内容	那覇市史家譜資料の出典
蔡文溥	『四本堂詩文	存留	1687 年 10	①和陳昌其先生	①唱和	303 頁

（天章）	集』	通事	月～1689 年 6 月	驛樓夜話原韻 ②喜恥光上人同陳昌其王邦菴兩先生過柔遠驛樓侍月用恥光原韻	②唱和	
曾　歴（信）	『枕山楼課詩話』の跋文	小船都通事	1708 年 11 月～1709 年 6 月			同上 395 頁

陳元輔、王登瀛と交流のあった人物の身分は、進貢正使、進貢副使、接貢存留通事、存留通事、小船都通事、官生、勤学などである。その中で勤学が最も多い。勤学は福州に修学目的で来ており、王府によって 7 年の修学が認められており、長期にわたって陳元輔に師事していたものと考えられる。そのため、陳元輔、王登瀛と勤学人との交流を示す作品は最も福州における中琉文人交流の諸相を反映している。

第二節　陳元輔と梁氏、蔡氏の交遊

『枕山楼詩集』の中で程順則以外では、梁氏の梁津、梁鏞、梁邦基、梁成楫、蔡氏の蔡肇功、蔡鐸と親しく交流があったことが分かる。本節においては、陳元輔と梁氏、蔡氏との交流を詩文の分析で見てみる。

第一項　梁氏（梁津、梁鏞、梁邦基、梁成楫）

梁氏の四名は「呉江梁氏大宗八世梁応才」の家系に属する。梁邦基は梁鏞、梁津、梁成楫の叔父である。梁鏞の三名は兄弟である。彼らの父である梁邦翰は梁邦基と兄弟関係である。『琉球資料・漢文編』[1]には陳元輔が梁鏞、梁津、梁成楫に送った書簡 3 通が収録されている。『枕山楼詩集』には梁邦基、梁津、梁得声に関わる詩が 6 首収録されている。梁邦基に関わる詩は「秋夜望中樓懐梁本寧」である。梁津に関わる詩は「秋夜望中樓懐梁得濟」の二首、「贈梁得済」である。梁鏞に関わる詩は「冬夜同王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字」、「曾子浴歸自長溪與予同過瓊河古驛訪梁得聲夜話並索其新詩讀之」であるが、これらは他の節で分析するので本節では取り扱わない。

陳元輔が梁邦基に送った手紙と詩を通して交流の様子と背景を見ていく。まず、この三通の手紙の書かれた背景を紹介する。三通の手紙は主に以下の三点について述べている。

① 梁得声（鏞）、梁得剡（成楫）、梁得済（津）に長い間会っていないので、懐かしむ気持ちを表現している。

② 梁得声（鏞）、梁得剡（成楫）、梁得済（津）から香典を送ってもらったことに感謝の意を示している。

③ 梁鏞、梁成楫、梁津にご機嫌を伺う挨拶と共に『枕山楼詩文集』を同封している。

康熙 36 年 6 月、梁得声は帰国した後、陳元輔の父が逝去した消息を梁本寧、梁成楫、梁津（得声）を含む琉球友人に告げている。同年、11 月 17 日金溥（浩然）は福州に来て、その時梁得声、梁本寧、

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9、那覇市役所、1988 年。

梁成楫及びほかの琉球友人からの香典を陳元輔に手渡した。康熙 37 年、陳元輔は感謝を表すためにこの三通の手紙を書き、それは同年の琉球に帰る船で梁得声、梁本寧、梁成楫に届けられた。当時、程順則は進貢都通事として北京に向かっていた。続いて手紙の具体的な内容を分析していく。

1．梁津（得済）

梁津（1665－1701）の字は得済で、康熙 21 年 11 月に勤学として正議大夫鄭永安に随行して福州に来ている。福州で七年間滞在して康熙 27 年 5 月 28 日に帰国した。帰国後、講解師を一年間勤め、康熙 36 年に接貢存留通事に任命されたが、病気で行けなかった。その後、梁津は『中山世譜』の編集、進貢、接貢の文書を作成する仕事に就いた。若くして 37 歳で去世するまで二度と福州に行くことはなかった[1]。陳元輔との交遊が始まったのは康熙 23 年の冬、すなわち程順則の師になってからと考えていいだろう。

與梁得濟書

舊冬貢船至、滿擬門下必揚帆前來、可慰數年饑渴乃至不果、甚悵。先君子棄不孝爾逝五内崩裂、馳訃寄聞情也禮也。反叨厚奠、歿存均感矣。樓下人藥資費寄來貳兩已於前船至收、明足仭門下留心謝謝。所苦人隔中外地阻波濤、不能繼見、蒹葭白露豈能盡我想望之私哉。唯願為國愛身時加珍攝以慰鄙懷、附來枕山樓二集詩聊供噴飯、便為問訊起居並諒蕪函、諸唯心照不既。[2]

〈読み下し〉

梁得済に與うるの書

舊冬、接貢船至る。滿りに擬う。門下必ず帆を揚げて前來し、數年の饑渴を慰むべし、と。乃ちに果さざるに至れば甚だ悵く。先君子は不孝を棄てて逝きたれば、五内崩裂せんとす。訃を馳せて聞を寄せるは情なり、禮なり。反って厚奠を叨くすれば歿存均しく感じ樓下の人より藥資もて寄せ來る貳兩は已に前船に於て收むるに至る。明かに門下の留心せらるるを仭するに足る。謝謝。苦しむ所は人中外に隔てられ、地波濤に阻まれ、繼見する能わざることなり。蒹葭にして白露なれば、豈に能く我が想望の私を盡くせんや。唯願うらくは國の為に身を愛しみ、時に珍攝を加て以て鄙懷を慰められんことを。枕山樓二集詩を附來し、聊か噴飯に供す。便わち為に起居を問訊す。併びに蕪函を諒し、諸て唯だ心照せられよ。既さず。

【分析】

「舊冬貢船至…甚悵」で、陳元輔は梁得済が旧冬の接貢船に乗ってくると思っていたが結局、来れなくて、落胆したことを言っている。『梁姓家譜（十世梁津)』によると康熙 36 年 2 月に梁得済（津）は接貢存留通事に任命さたが、出発の時に病気で行けなかった。陳元輔は梁得済が存留通事に任命されたことをすでに知っていたことが分かる。もし、梁得済が正式に任命された後、この消息が貢船で福州に伝わってくるとしたら、同じく康熙 36 年の 11 月に福州に向かう船なので陳元輔が事前に知っているはずがない。おそらく、康熙 35 年の 11 月の貢船で梁得済が来年福州に来れるかもしれないという消息を陳元輔に伝えたと推測していいだろう。

「先君子棄不孝」は陳元輔の父が逝去したことを示している。「樓下人藥資費寄來二兩」は梁得済が陳元輔に薬代として銀二両を郵送してあげたことを言っている。陳元輔の号は枕山楼であることから、「楼下人」はおそらく陳元輔の自称である。「藥資費」は陳元輔の健康状況がよくないことを意味

[1] 那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6「久米系」、1980 年 3 月 814 頁

[2]那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9 那覇市役所 1988 年 10 月 404 頁

している。陳元輔の詩の中に「惟餘藥物與書囊、移到芝山舊草堂[1]」という句がある。自分（陳元輔）は清貧であり、家に残っているものは薬と書物だけで、それが芝山の旧草堂に移されると言っている。陳元輔は健康状況がよくなく長期的に薬を服用する必要があることが窺える。

『枕山楼詩集』、『枕山楼文集』の中では梁得済に関わる内容が梁氏の中で一番多く、詩が 3 首、文が一篇ある。実際、詩を分析すると二人の親しい関係が見えてくる。梁氏との交流の中で陳元輔と梁得済との関係が最も親しいといえよう。以下、陳元輔が作った詩を通して二人の関係を見ていく。

第一首の詩は『枕山楼詩集』の第 51 番目の詩である。

【５１】

贈梁得濟　　梁得濟に贈る

負笈乘槎過海門　　笈を負い槎に乗りて海門を過ぐ
五年聲氣在中原　　五年の聲氣中原に在り
雲山夜繞三秋夢　　雲山の夜　繞る三千秋の夢
辭賦香銷六代魂　　辞賦の香　銷す六代の魂
愛客陳藩常下榻　　愛客の陳蕃常に榻を下ろし
讀書董子不窺園　　讀書の董子園を窺わず
異時若上平淮雅　　異時若し平淮雅を上れば
好以文章報國恩　　好く文章を以て国恩に報いん

【詩型】七言律詩
【押韻】平声元韻

【通釈】

梁君は詩書を携えて海を渡って福州にやってくる。既に福州で五年間の学習生活を過ごし、君の文名は揚がっている。この九月の夜中に君はまだ霧靄が瀰漫する高い駅楼で学んでいる。君が書いた詩賦は六朝の詩人にも負けない。客を敬して常に陳蕃榻を用意している。園を窺わない董子と同じようにまじめに学問を追求している。今後若し国王の功績を記す文章を書くチャンスを得れば正に君は文才をもって国恩に報いるだろう。

【分析】

題目から見るとこの詩は陳元輔から梁得済への贈答詩である。

〈首聯〉

「負笈乘槎過海門、五年聲氣在中原」

「笈」とは書物などを入る箱である。「海門」とは福州の閩江の河口部の五虎門である。五虎門は虎のように見える五つの岩石である。琉球の船が海から閩江に入る或いは閩江より海に入る時、必ず通過する所である。梁得済は「読書習礼」の為に康熙 21 年に福州に行って七年間滞在していた。

「五年」とは梁得済が福州で過ごした五年のこと、「聲氣」とは文章の声韻と気勢のことである。ここでいう文章とは梁得済が書いたものでる。「中原」は中国のことである。この句では梁得済が五年間の福州での留学生活を過したことを示している。この詩は康熙 26 年に作られている。

[1]「家逸父移居芝山」陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年（1691）刻本、国立公文書館内閣文庫、漢 10894。

〈頷聯〉

「雲山夜繞三秋夢、辭賦香銷六代魂」

「雲山」は雲に接するほど高い山である。ここでは梁得済が住んでいる所が静かであることを言っている。「一秋」は三か月のことである。「三秋」とすると九月のことでる。「雲山夜繞三秋夢」はこの九月の深夜を指す。

「辭賦香」とは梁津が作った詩文を指す。「六代」は中国南方の南京を都としていた王朝で呉、晉、宋、齊、梁、陳があった。およそ三国時代から魏晋南北朝にかけて三百六十年間続いていた。「辭賦香銷六代魂」は梁津が作った詩賦が六朝時代の詩人たちの作品と比べても劣らないと言っている。

〈頸聯〉

「愛客陳蕃常下榻、讀書董子不窺園」

「愛客」とは賓客を敬する意味である。陳蕃[1]は後漢の人で豫章郡太守に任じられている時、賓客を接待することをほとんどせず、ただ徐稚来訪する時に榻を用意しており、徐稚が帰った後には陳蕃はまた榻を片付けたという故事である。[2]「常下榻」は常に懸け置いてある椅子をおろすという意味である。この句では、梁得声を陳蕃に準えていて陳蕃のように一榻（椅子）を用意する。つまり、陳元輔は梁得声のもとによく来るからこの「榻」を常におろしているのだということである。二人の交わりが非常に親密であることを言っている。

「董子不窺園」は「董仲舒[3]」が博士に任じられている時、すだれを下してその中で弟子たちに教えて三年間、庭を窺うことがなかったという故事を述べている。後世、学問に専心していることを意味する。この典故を引用した意図は梁得済も「董子」ように全身全力で学問を追求していたことを表す。

〈尾聯〉

「異時若上平淮雅、好以文章報國恩」

「異時」とは今後の意味である。「平淮雅」は唐代の柳宗元の作品である「献平淮夷雅表」「平淮夷二篇并序」[4]のことである。この詩は少数民族の反乱を平定したことを記して皇帝の武功を賛美するものである。この句中の「平淮雅」は柳宗元の「献平淮夷雅表」という作品を指している。この作品に対して、韓愈の「元和圣德詩[5]」がある。この詩では韓愈が朝廷の一年間の重要なできごとを古樂府の形で述べていて皇帝の功徳を讃えている。宋、周必大の「答胡仲威」の詩に、「元和頌圣雅平淮、韓柳文章付後來。聯璧照人今粲者、斷金定契古誰哉[6]」がある。この句から見ると、晩唐以降の文人はよく「元和圣德詩」と「奉平淮夷雅表皇武命丞相度董師集大功」を比較している。尾聯では陳元輔は梁得済によく勉強して、将来その才能知識を以て国恩に報いてほしいという希望を寄せている。

---

[1]陳蕃、後漢、平輿の人。字は仲舉。官は樂安太守・太尉。桓帝崩じ、竇太后朝に臨むや、太傅となる。封は高陽候。后の父、竇武と力を戮せて政を輔け、名賢を徴用す。人となり方峻で惡をにくむ。漢末の士風、之に因って氣節を尚うに至る。武と、宦官曹節・王甫等を誅せんことを謀り、事、漏れて殺された。(『後漢書』巻 66「陳王列傳」　中華書局出版社、2005 年より要約した)

[2] 南朝宋・范曄『後漢書』巻 53、中華書局、1965 年 5 月、1746 頁。

[3] 董子、董仲舒、漢、廣川の人。少くして公羊春秋を治め、景帝の時、博士となり、帷を下し講授し、三年園を窺わず。武帝の時、賢良を以て天人三策を奉対し江都相となる。中ごろ廢せられて中大夫となり、災異を言うを以て獄に下さる。後、西王の相となり、病により赦されて歸り、年老いて家に終る。(『漢書』巻 56「董仲舒傳」、中華書局出版社、1965 年より要約した)

[4]唐・柳宗元『柳宗元全集』上册、上海中央書店、1936 年 1 月 、1 頁、2 頁。

[5]唐・韓愈『韓昌黎集』第 1 册、 商務印書館、1933 年 2 月、7 頁。

[6]呂留良、呉之振、呉自牧選、李宣龔校『宋詩鈔』第 14 册、商務印書館、1934 年 1 月、1513 頁。

第二首の詩は『枕山楼詩集』の第 57 番目である。

【57】

秋夜望中樓懐梁得濟　　秋の夜望中樓にて梁得濟を懐う

古驛蕭條四壁空　　古驛蕭條として四壁空しく
傷心謂北與江東　　傷心す渭北と江東と
一天霜月懐人夜　　一天の霜月人を懐うの夜
半榻秋山落葉風　　半榻の秋山落葉の風
鴻雁不來消息遠　　鴻雁來らず消息(そく)遠く
蒹葭中斷夢魂通　　蒹葭中斷し夢魂通ず
故園歸去如相憶　　故園に歸り去り如(も)し相い憶わば
回首琴臺曲未終　　回首し琴臺の曲未だ終わらず

【詩型】七言律詩

【押韻】平声東韻

【通釈】

柔遠駅は物寂しく、梁君の部屋の中は何もなく空である。悲しいことは私と梁君がそれぞれ天の一方ずつにいることである。空は寒々しい月が浮かび人を懐かしむ夜に、立てかけた椅子にある秋の山の落ち葉が風に飛ばされている。雁は来なければ、友人の消息も来ない。梁君と会えないが夢で魂は通じている。故郷に帰った梁得済が福州でのことをあい追憶すれば、奏でている琴曲はまだ終わらずにいる。

【分析】

詩の題目から見るとこの詩は陳元輔が望中楼で梁得済[1]を憶うため作った作品である。望中楼については「秋夜望中楼懐梁本宁」にて望中楼が柔遠駅中の建物だと述べている。梁得済は康熙 21 年、読書習礼の為に正議大夫鄭永安に随って福州に赴いて七年間滞在していた。そして康熙 27 年 5 月に帰国した。おそらくこの詩は梁得済が帰国した後の秋に作られている。

〈首聯〉

「古驛蕭條四壁空、傷心渭北與江東」

「古驛」とは柔遠駅のことである。柔遠駅は、琉球から中国に渡った人たちすべてがまず荷物や貢物を下した場所である。琉球からの役人、留学生たちの福州での根拠地であり、また陳元輔と琉球人の重要な交流をする場所であった。柔遠駅は福州城水部門外から七里の所にあって近くを「瓊河」という川が流れている。「瓊河」は王登瀛の『柔遠駅草』にて「楼東十景」の一つとして詠まれている。「古驛蕭條四壁空」は非常に物寂しい光景であるが、実はそれは陳元輔の心境である。梁得済はすでに琉球に帰り、その後、梁得済は再び中国に戻ってはこなかった。陳元輔は康熙 23 年（1684）冬、湖北から戻ってきた。同じ時期に、程順則、鄭克叙は北京から福州に戻ってきた。つまり、康熙 23 年の冬は、陳元輔が程順則、鄭克叙、梁得済と知り合った最も早い時間である。

---

[1] 梁得済、『梁姓家譜（十世梁津)』十世都通事漢今改名曰津，名嘉地親雲上童名虎千代字得濟康熙四年乙巳六月十一日生康熙四十年辛巳十一月二十三日卒享年三十七葬于兼久墓傳家於琴也
康熙二十一年壬戌十一月初六日、因接封之便請乞王命為讀書習禮事、隨正議大夫鄭永安東恩納親雲上赴閩滞留七年、乃康熙二十七年戊辰五月二十八日歸國。(『那覇市史家譜資料二』下、「梁姓家譜（十世梁津)」813 頁、814 頁）

「渭北與江東」は最初の用例は杜甫の「春日懐李白」の「渭北春天樹、江東日暮雲[1]」である。「渭北」は渭水の北である。「江東」は長江下流の江南地域である。「渭北與江東」とは遠く離れている意味する。つまりこの句は陳元輔と梁得済が遠く離れていることを指す。

〈頷聯〉

「一天霜月懐人夜、半榻秋山落葉風」

「霜月」は霜のように皎潔な月である。またその月は秋夜の寒さを反映している。「半榻」とは立て掛けていた椅子である。友人がいないから椅子を立て掛けてあるのである。「落葉風」は風が吹き葉が落ちる情景をいっている。「霜月」「半榻」「秋山」、「落葉風」との景物を合わせて寂寥な画面を描いている。

〈頚聯〉

「鴻雁不來消息遠、蒹葭中斷夢魂通」

「鴻雁」とは「鴻雁傳書」のことである。『漢書』の「李廣蘇建傳」では「鴻雁傳書」について以下の故事を紹介している。蘇武が匈奴に十年間拘禁されている間に、匈奴は漢武帝に蘇武が死んだとウソついた。蘇武と一緒に匈奴に行った常惠は漢の使者に事実を密告した。そして漢の使者は、漢の皇帝が上林苑で雁をしとめたところ雁の足に手紙が結ばれており、手紙には蘇武がいずれかの所で牧羊していると書いてあったという話を匈奴の単于に告げた。匈奴の単于は蘇武を解放せざるを得なかった[2]。この典故から「鴻雁」は遠方の音信を言う。手紙を伝える雁はこないから、友人の消息は届かないと言っている。

「蒹葭」は初生のアシである。『詩経』の「蒹葭」篇では蒹葭を用いて人に対する思いを表す。「蒹葭中斷」は陳元輔が友人と別れて天の一方ずつにいることを言う。「夢魂通」は二人が遠く離れても夢で魂が通じあっていると言っている。

〈尾聯〉

「故園歸去如相憶、回首琴臺曲未終」

尾聯では梁得済が琉球に帰った後、福州でのことを思い起こせば、奏でている琴曲はまだ終わらずにいる。言外の意味は琴を弾き続けているが聞いてくれる人がもういないということである。

第三首の詩は『枕山楼詩集』第 66 番目である。

【６６】

秋夜望中樓懐梁得濟　　秋夜望中楼に梁得濟を懐う

重過山樓半榻懸　　重ねて山楼を過れば半榻を縣かり
誰知秋思落江邊　　誰か知らん秋思江邊に落つるを
蒹葭舊是懐人草　　蒹葭舊(もと)より是れ懐人の草なり
楊柳誰能繫客船　　楊柳(ようりょう)誰が能く客船を繫ぐ
異地難同天際月　　異地同にし難し天際の月
愁心空遶海門烟　　愁心空しく繞る海門の烟

[1] 仇兆鰲註『杜少陵集詳註』巻 2 、商務印書館、1934 年 、30 頁。

[2]原文「數月、招帝即位。數年、匈奴與漢和親。漢求武等、匈奴詭言武死。後漢使復至匈奴、常惠請其守者與俱、得夜見漢使、具自陳道。教使者謂單于、言天子射上林中、得雁、足有系帛書、言武等在某澤中。使者大喜、如惠語以讓單于。單于視左右而驚、謝漢使曰：武等實在。」(『漢書』巻 54「李廣蘇建傳・蘇建子武」、中華書局出版社、1964 年 11 月、2468 頁)

無情最是衡陽雁　　無情なるは是れ最も衡陽の雁
不見音書又一年　　音書を見ず又一年
【詩型】七言律詩
【押韻】平声先韻

【通釈】
題目：秋の夜望中楼で梁得済を懐かしむ
改めて山楼に訪れて故人もおらず、椅子がかかったままである（客用の椅子がしまわれたまま）。このさび寂しい秋に私は瓊河に来て友人に対する思い出を懐かしんだ。蒹葭はもとより人を懐かしむ草であり、楊柳の枝があっても、客船を繋いでとめることができない。友人とそれぞれ天の一方ずつにいるので二度と逢うことが難しくなった。五虎門に空しく霧が漂っている。最も無情なるものは衡陽雁である。友人からの書信が途絶え、さらに一年になる。
【分析】
この詩は梁得済を憶う作品の二首目である。
〈首聯〉
「重過山樓半榻懸、誰知秋思落江邊」
「重過」は再び訪れることである。陳元輔は二度柔遠駅を訪れたと言っている。梁得済が帰国後、その秋、陳元輔は二度柔遠駅を訪れて梁得済を憶う詩を二首作っている。梁得済は帰国後、再び福州に来ることがなかった。他に陳元輔と交遊した琉球人は、学習を終えて何年後にか他の身分をもって福州に戻ることがある。例えば、程順則、陳魯水、鄭克叙、金浩然、曽益、梁本寧、梁得声などである。
秋は人を憶う季節であるから「秋思」は人に対する思いである。「秋思落江邊」は再び陳元輔が江邊の柔遠駅を訪れ梁得済と交遊したことを思い出したことを指す。
〈頷聯〉
「蒹葭舊詩懷人草、楊柳誰能繫客船」
「蒹葭」は『詩経』中の篇名である。「蒹葭」は初生の蘆である。詩経の蒹葭篇に蘆は人を憶う象徴としており、遠方の友人や恋人に思いを寄せる意がある。
「楊柳」は古人が送別する際に相手に送ったものである。「柳」と「留」の発音が似ているので「柳」で「留」の意を表したといわれている。『三輔黄圖』巻 6 に柳に関して次のように述べている。

「霸橋在長安東、跨水為橋、漢人送客至此橋、折柳贈別[1]（霸橋が長安城の東に在る。川を横たわって橋となって漢の人は客をここまで送って柳を折って送る。）」

送別する際に柳枝を送ることは漢の時代にすでにあったことである。陳元輔は柳を見て梁得済を留まらせたいと思うが、梁得済がすでに帰ってしまったと嘆いている。
〈頸聯〉
「異地難同天際月、愁心空繞海門煙」
「異地」は陳元輔が梁得済と分かれることを言っている。それで、陳元輔は梁得済と一緒に同じ処

[1] 逸名『三輔黄圖附補遺』巻 6（王雲五編『叢書集成初編』収録、商務印書館、1936 年、49 頁）

で空の月を見ることができなくなる。

「海門煙」は海峡の煙である。夜、梁得済の船は閩江より海に入って徐々に見えなくなって海上には煙や靄が残っているだけである。

〈尾聯〉

「無情最是衡陽雁、不見音書又一年」

「衡陽雁」は衡山の南に回雁峰があり、雁は此の峰より南に下らず、春を待って北に歸るという故事がある。「回雁峰」より南にある福州には雁が行かない。雁は音信の使者と思われているから梁得済の手紙が福州まで届かないことを言っている。それで陳元輔は最も無情なものが衡陽雁だと嘆いている。

最後、陳元輔は梁得済を待ち、また一年が過ぎても梁得済の音信は来ない。梁得済は琉球に帰った後二度と福州に戻らなかった。この点を考えると、陳元輔の悲しさが実感できる。

2. 梁鏞（得声）

梁鏞については第一章、第五節、第二項にて詳しく紹介したのでここで贅言しない。梁鏞はほぼ二年ごとに一回という頻繁さで福州を四回往来していた。梁鏞は陳元輔と頻繁に接触できたと思われるが、二人の詩のやりとりが逆にすくない。この二人の交流について手紙を通してみていく。

與梁得聲書

憶丙子丁丑兩年下榻驛樓、荷門下敬禮有加情摯義盡、抵年渭樹江雲未嘗不夢寐以之、舊冬接貢船至、接金浩然代門下寄來厚儀一封、已收矣。盛情何無已也、謝謝。詩稿已改正、奉璧可查入、順附枕山樓詩二集聊供噴飯、冬溟朱夏炎暑蒸人、唯願為國愛身、善加珍攝以慰鄙懷、便為問起居、並諒荒函諸唯心照、未嘗欲言。[1]

〈読み下し〉

梁得声に與うるの書

憶えば、丙子丁丑の兩年、榻を驛樓に下し、門下敬禮加うるありて、情摯く意盡くすを荷くす抵年渭樹江雲に抵たり、未だ嘗て夢寐にも之を以てせざるにあらず。舊冬、接貢船に至り、金浩然より門下に代りて寄せ來る厚儀一封に接し、已に收入せり。盛情何とも已むなし。謝謝。詩稿は已に正しく改めて璧を奉じて察入すべし。順いて枕山樓詩二集を附し、聊か噴飯に供す。東溟の朱夏は炎暑にして人を蒸す。唯願うらくは國の為に身を愛しみ、善く珍攝を加えて以て鄙懷を慰められんことを。便わち為に起居を問訊す。併びに荒函を諒し、諸て唯だ心照せられよ。未だ言わんと欲するを既さず。

〈分析〉

この文章は陳元輔の梁得声への手紙である。文の冒頭にある「丙子丁丑両年」は康熙 35 年、康熙 36 年である。この二年間、梁得声は存留通事として福州柔遠駅に勤めていた。この二年間において、梁得声は国王の命令を奉じて「学識博古」を学んでいた。注目すべきところは梁得声が留学するために王世子尚純より銀 30 両を賜給されたことである。まずは「学識博古」とは何なのか。博古家という言葉があって、これは古い物を収蔵したり、鑑定したりする者を指す。梁得声は福州で骨董品の鑑賞に関する知識を学んでいたのかもしれない。

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9、那覇市役所、 1988 年 10 月、404 頁。

「丙子、丁丑両年、下榻驛樓、荷門下敬禮有加情摯義盡」を通して、陳元輔が康熙 35 年、康熙 36 年に柔遠駅で教えている際に梁得声に対して情をもって礼遇していたことがわかる。陳元輔は梁得声との詩文の往来は決して多くなかったが、二人の関係はかなり密接なものであった。梁得声は康熙 24 年 11 月―康熙 29 年 6 月の間、福州で勤学として留学していた。帰国後暫くして、康熙 30 年 11 月―康熙 32 年 6 月の間、存留通事として福州柔遠駅に勤め、また二年後、康熙 34 年（1695）11 月―康熙 36 年（1697）の 6 ヶ月の間、存留通事として福州に滞在していた。さらに、康熙 39 年 11 月都通事として福州に来ている。梁得声は 4 回、約二年ごとに一回中国を訪れている。陳元輔の琉球の友人の中では頻繁に中国を訪れた一人である。つまり、陳元輔はほぼ二年に一回、梁得声と会うことができたのである。

続いて「舊冬接貢船至、金浩然代門下寄來厚儀一封，已收矣」を通して、去年の冬、梁得声の礼物は金浩然を通して陳元輔に手渡されたことが分かる。金浩然は康熙 36 年 11 月 17 日に接貢存留通事として福州に来ていたことから、「舊冬接貢船至」は康熙 36 年の接貢を指す。梁得声は同年の 6 月に琉球に帰っているが、帰国前、陳元輔は父の死亡を帰国する梁得声を通して琉球の友人に告げたのではないかと推定している。梁成楫、梁得済への手紙に「馳訃寄聞情也禮也」といった言葉があるのは、梁得声が手紙で陳元輔の父が逝去したことを伝えたということではないだろうか。それは、梁得声が帰国前に、陳元輔の父が逝去した消息を知っていたからであろう。梁得済、梁成楫、梁得声、梁本寧に送った手紙は康熙 37 年に書いたものと推定される。

「詩稿已改正、奉璧可査入」を通して、陳元輔は梁得声の詩稿を訂正した後、その詩稿を返信とともに梁得声に送っていたことがわかる。また、梁得声にも詩稿があったことが分かる。しかし、その詩稿は現存せず、『中山詩文集』に一首のみ梁得声の詩が収録されている[1]。

3．梁成楫[2]（得剡）

梁成楫の字は得剡また得遠で、清代に琉球から訪れた初めての官生の一人である。進貢正使魏応伯、福州曽夔に随行して康熙 26 年 10 月 1 日福州に到着し、康熙 27 年 5 月 25 日に北京に向かっている。陳元輔が梁成楫、蔡文溥、阮維新と初めての接触したのは、康熙 26 年 10 月 1－康熙 27 年 5 月 25 の間である。梁成楫は官生として留学を終え康熙 31 年 6 月に琉球に帰った。梁成楫との詩の交流が『枕山楼詩話』の中にはないが、手紙を通して二人の関係を見てみる。

與梁得剡書

人隔中外地阻波濤、一天兩地繼見殊難。欲求曩日瓊水泛遊時、一燈半榻朝、夕相親又何可得為。兼葭白露為溯回者久之、愛我如門下諒彼此有同情也。先君子棄世苫塊之次寄訃報聞、此情也禮也。反叨門下並令叔令兄、及門諸子遙賜厚奠、足見師生情重歿存均感、奠儀一封乃存留金浩然交與一一收明、煩門下持其札轉謝諸君、不及別東、乞一一道意尤囑、東溟朱夏炎感迫人、萬祈珍攝、為國愛身以慰鄙懷、附來枕山樓二集詩乞察入、便為問訊起居並諒荒函不宣。[3]

〈読み下し〉

梁得剡に與うる書

人は中外に隔てられ、地は波濤に阻まれて、一天にして兩地なれば、繼見すること殊に難し。曩日、

[1]上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、130 頁。
[2]前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、668 頁。
[3]那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9、那覇市役所　1988 年 10 月、404 頁。

瓊水にて泛遊せし時の如く、一燈半榻朝夕相い親しまんと慾求するも何ぞん得べけんや。蒹葭にして白露たれば、溯回を為す者これを久しくするも、我を愛すること門下の如く、諒に彼此同情あるなり。先君子は世を棄てたれば、苫塊の次より訃を寄せ聞を報ずるは、此れ情なり、禮なり。反って叨くも門下の如く、併びに令叔令兄及び門諸君子より遙かに厚奠を賜る。師生の情重きを見るに足り、歿存均しく感じたり。奠儀の一封乃ち存留の金浩然より交與したれば一一收明せり。煩わくば門下その禮を持し諸君に轉謝せられよ。別東に及ばす。一一意を道うに尤も嘱せんことを乞う。東溟朱夏は炎感人に迫る。萬て珍攝して國の為に身を愛しみ、以て鄙懐を慰めんことを祈る。枕山樓二集詩を附來すれば察入せんことを乞う。便ち為に起居を問訊す。併びに荒函を諒されよ。不宣。

〈分析〉

「欲求曩日瓊水泛遊」はかつて梁得剡（成楫）は福州にいる時、陳元輔と交遊していたことを言っている。梁得剡は康熙 26 年 10 月に福州に着いて、康熙 27 年 5 月まで福州にいた。この間に陳元輔は梁成楫と交遊している。国士監の学業を終えて福州を経由して琉球に帰るまでまた福州で 6 か月の間滞在していた。この間も陳元輔は梁成楫と交遊してる。その後、梁得剡は都通事に任命されて、康熙 33 年 11 月―康熙 35 年 6 月の間、中国で二回目の滞在をしている。

「師生情重歿存均感」は、梁成楫が陳元輔と師弟の関係にあったことを示している。梁成楫は官生として福州に来て北京の国子監に入学する前に半年ぐらいの時間の余裕があった。厳しい国子監の学習を迎えるために予め福州で暫く陳元輔に師事していたかもしれない。

「門下並令叔令兄、及門諸子遙賜厚奠」は梁得剡以外に、彼の叔父、兄及び琉球の弟子らが香典を送ってきたことを言っている。「令叔」「令兄」とは梁本寧、梁得声である。

4. 梁邦基（本寧）

梁邦基（1650－1703）の号は本寧で、梁津、梁鏞、梁成楫の叔父である。『中山詩文集』の中に彼の詩作一首が収録されている。

この詩は『枕山楼詩集』の第 56 番目である。

【５６】

秋夜望中樓懐梁本寧	**秋の夜望中楼にて梁本寧を懐う**
寂寂江樓獨閉門	寂寂（せきせき）たる江樓獨り門を閉（と）ざし
驚心荒草暗銷魂	驚心荒草　暗（あん）に魂を銷（け）す
浮雲隔水秋聞雁	浮雲隔水秋雁を聞き
殘月空山夜聽猿	殘月空山夜猿を聽く
作賦有誰悲宋玉	賦を作るも誰か宋玉を悲むもの有らん
相思何忍負王孫	相い思う何んぞ王孫を負うを忍びんや
今宵莫漫愁岐路	今宵漫だ岐路を愁（うれ）うる莫れ
不盡離情寄酒樽	盡せざる離情酒樽に寄す

【詩型】七言律詩

【押韻】平声元韻

【通釈】

題目：秋の夜、望中楼に梁本寧を思う

江楼は静かに孤高を保ち、門も閉ざされている。心を驚かせる荒れた草は暗然として気持ちを悲し

くさせる。浮き雲が川を隔てて、秋の雁の鳴き声を聴き、夜も更けて残月が人気のない山にかかり、猿の鳴き声が聞こえてくる。賦を作る際に誰もが宋玉を悲しみ、互いに思う時に王孫のことを思ってしまう。今夜、ただ我々が別れたことを憂うことをしないでおこう。尽きない離愁は、この酒樽に托そう。

【分析】

題目から、陳元輔は秋の夜、望中楼で梁本寧[1]を憶ってこの詩を作ったことが分かる。梁本寧（邦基）は一生のうち三回中国に渡っている。

一回目は、康熙 19 年（1680）3 月小船通事として 11 月に耳目官毛起龍、正議大夫梁邦翰に従って 12 月 4 日福建に到着した。福州柔遠駅で一年間滞留して翌年康熙 21 年 5 月、公務を終えて帰国している。二回目は、康熙 24（1685）年 4 月、存留通事となって同年の 11 月那覇より出航したが順風に恵まれず翌年康熙 22 年 3 月に至って福州に到着した。康熙 27 年 5 月に公務を終えて帰国している。

三回目は、康熙 37 年（1698）2 月、正議大夫となって耳目官毛龍図とともに 11 月 22 日那覇より出航し 26 日福州に到着した。翌年康熙 38 年入京しすべての公務を終えて康熙 39 年（1699）5 月 17 日に帰国している。

一回目の時、陳元輔はまだ琉球人の師匠になってないためこの時期、梁本寧と逢うのは不可能である。それに詩集のすべての詩は康熙 30 年より前の作品であると思われることから、この詩は梁本寧が二回目に帰国した後の作品であろう。つまり、この詩は梁本寧が帰国後暫くして、つまり同年（康熙 26）の秋に作られたものと考えてもよいであろう。「梁本寧詩序」では梁本寧の二回目の福州にいる期間の行動を簡略に紹介している内容がある。

梁子本寧以陪貳來貢從余遊、好讀書、古雅有致。尤耽于詩、凡登眺所及、轍流連竟日、題咏不忍去。[2]（梁本寧が進貢使節の随行として来て私に従って交遊する。本を嗜み、雅やかで古風を持つ人物である。特に詩に耽っており、登った山、眺めた風景、すべてに詩を作って記して、徘徊して離れたくない風情であった）

梁本寧は福州における滞留期間の一年あまり陳元輔に師事していたようである（從余遊）。梁本寧は読書を好み、特に詩を作ることに耽っており、風景のいい場所でよく恋しく離れられたくない様相であったという

陳元輔は、梁本寧は琉球国内ですでに詩の名望を揚げているという。（梁子以詩名也）。梁本寧は存留期間に詩作に耽っているので詩の作品が少なくないはずであるが、陳元輔は「その詩の多くは奇怪

---

[1]梁本寧、九世正議大夫邦基。内間親雲上，童名真蒲戸，號本寧。順治七年庚寅十二月初七日生，康熙四十二年癸未二月二十八日卒享，年五十四，葬于兼久墓傳家於鼎也。
康熙十九年庚申三月二十四日，奉使為小船通事隨耳目官毛見龍識名親雲上，安依正議大夫梁邦翰國吉親雲上等，於本年十一月十五日開那霸港，至本年十二月初四日到閩，次年五月間公事已畢。兩船摘發先回，次于怡山院候風，不知何如竟順風。無奈滞留一年，至於壬戌年五月二十八日等貢使京回，於本年六月初三日一齊回國。
康熙二十四年乙丑四月初五日，奉使為接貢存留通事，同使者向氏名嘉地云上朝記等，於本年十一月二十四日在那霸開洋。阻風于久米山，至次年二月内得有順風，即開本山至三月間到閩地。于戊辰五月二十四日公事已妥至本月二十七日回國。
康熙三十七年戊寅二月初二日，奉使為進貢正議大夫，同而耳目官毛龍圖野里親雲上，安常本年十一月二十二日那霸開洋，本月二十六日到閩，次年赴京蒙賜宴二次（中略）。凡公事已竣，康熙三十九年庚辰五月十七日回國。
『那覇市史家譜資料二』下「梁氏家譜（九世梁邦基）」那覇市企画部市史編集室、1980 年 3 月、780 頁。
[2]「梁本寧詩序」陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1962）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894。

な様相を呈している（但其詩多光怪離奇）[1]」と評価している。陳元輔はその詩の作品から純朴典雅なものだけを選択し、刊刻している。梁本寧にも詩集があったということである。しかし、その詩集は現存せず、一首の詩だけが『中山詩文集』に収録されている[2]。

〈首聯〉

「寂寂江樓獨閉門、驚心荒草暗銷魂」

「寂寂」は静かでもの寂しいさまである。「獨」とは「また」の意味である。江楼はすでに物寂しくなったうえでまた門を閉ざしてある。「獨」という字の詩的表現効果は非常に高妙である。景色を描いているが、実は陳元輔の心境を反映している。陳元輔が梁本寧と付き合ったのは一年間である。ただ一年間で陳元輔と梁本寧の師弟感情は深くまるまでに至った。

「驚心荒草暗銷魂」を作る時、王登瀛は杜甫の詩句である「感時花濺涙、恨別鳥驚心[3]」と似ている修辞法を運用している。杜甫は感傷した時、花を見ても涙が出る。別れる時、鳥が飛び過ぎてもこころを驚かすと詠んだ。この句も同様な詩的表現効果がある。荒れた草を看ては心を驚かせて一人で悲しんでいる。「銷魂」は魂が消えるの意味である。甚だしい驚きや悲しみ等のために、魂が身体から遊離、あるいは消滅したように感じさせる心の状態を言う。

〈頷聯〉

「浮雲隔水秋聞雁、殘月空山夜聽猿」

「浮雲隔水」は浮雲の影が河を隔てた景色である。夜、雲が月光を遮って川に映り河面のある所が黒く染まる。まるで雲が川を切ったようである。「聞雁」とは雁の鳴き声が聞こえるとの意味である。「残月空山」は西に沈んでいる月が人気のない山にかかっている様である。残月はずいぶん遅い時間であることを示す。猿の鳴き声が聞こえてきていっそう悲しくなる。

〈頚聯〉

「做賦有誰悲宋玉、相思何忍負王孫」

「宋玉」[4]は戦国時代の詩人である。彼は屈原の弟子であった。彼の作品は言葉が巧麗にして漢魏六朝の風気を開くと言える。「楚辞・九辯」に宋玉が秋を悲しむ名句である「悲哉！秋之為氣也。蕭瑟兮，草木搖落而變哀[5]」がある。ここでは、陳元輔と一緒に秋を悲しんで宋玉の悲秋の句を味わう人がすでにいないことを言っている。「相思何忍負王孫」において、「王孫」は『楚辞』の「招隠士」の「王孫游兮不歸、春草生兮萋萋[6]」に由来するものである。王孫が出遊して帰らず春の草が茂っている。陳元輔は以前のことを振り返る時、梁本寧ことを忘れるのは忍びないと思っているのである。

〈尾聯〉

「今宵莫漫愁岐路、不盡離情寄酒樽」

「漫」とは「だけ」の意味である。「岐路」とは違う道である。陳元輔が梁本寧と違う所にいることを指す。今夜は、ただ梁本寧と別れることを悲しまないで、尽きない離情を酒に託して飲もうと言っている。

---

[1] 同上

[2] 上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、129 頁。

[3] 仇兆鰲註『杜少陵集詳註』巻 4、商務印書館、1934 年、35 頁。

[4]戰國、楚国鄢の人。屈原の弟子。官は楚の大夫。屈原が放逐せられたことを憫み、九辯を作って之を悲しみ、又、招魂を作る。又、風賦・高唐賦・神女賦・登徒子賦・好色賦の作があり、詞態巧麗にして、漢魏六朝の風氣を開くという。

[5] 劉向編『楚辭』巻 8（王雲五編『叢書集成初編』收錄、商務印書館、1936 年、91 頁）

[6] 金开誠選註『楚辞選注』、北京出版社、1980 年 5 月、176 頁。

第二項　蔡氏（蔡鐸、蔡肇功）

『枕山楼詩集』の中で蔡鐸に関わる詩として「送蔡聲亭入貢」、「春杪瓊川阻雨因過蔡聲亭山樓茶話」がある。蔡鐸の『観光堂詩草』の中の陳元輔に関わる詩は「重游西湖有懐陳昌其先生即用其送別韻」である。『琉球資料漢文編』の中に陳元輔の蔡鐸への書簡が一通収録されている。この書簡を分析して陳元輔と『皇清詩選』の琉球人漢詩の入選、『中山詩文集』の編纂との関係を明らかにするこができる。その際、蔡鐸と陳元輔の交遊関係が非常に重要である。

1　蔡鐸

蔡鐸は字声亭、官は紫金大夫を以て法司品銜を加えるところに至った。もう一つの身分は近世琉球の大政治家蔡温の父である。近世琉球において『歴代宝案』を改訂し、『中山世譜』を編纂するなど歴史家としても功績が残っている。蔡鐸は康熙 27 年の進貢任務を担い中国に一度だけ渡っているが、陳元輔との詩のやり取りが 3 回あり、また手紙もお互いに送りあっている。蔡鐸は紫金大夫を務めながら久米村で子弟たちを教えている。康熙 27 年 11 月―康熙 29 年 5 月の進貢期間、進貢道程中の見たこと、考えたこと、経験したことを詩にして『観光堂詩草』を作った。全集は七律詩が合計 30 首ある。順治元年に生まれた蔡鐸は陳元輔より 12 歳ぐらい年上である。陳元輔は蔡鐸を自分の先輩と扱って書簡では蔡鐸を老先生と称している。本項では、第一首「送蔡聲亭入貢」、第二首「重游西湖有懐陳昌其先生即用其送別韻」、第三首「春杪瓊川阻雨因過蔡聲亭山樓茶話」という順に蔡鐸との詩文を分析して二人の交流を見ていきたい

【５８】

送蔡聲亭入貢	**蔡聲亭の入貢するを送る**
曾聞黄絹舊中郎	曽て聞く黄絹（こうけん）の舊中郎
此日分符入帝郷	此の日符を分けて帝郷に入る
航海帆飛仙客棹	航海して帆飛ぶ仙客（せんきゃく）の棹
登朝袖惹御爐香	登朝袖惹く御爐の香
公餘常誦詩三百	公の餘り常に誦す詩三百
望重偏宜使四方	望重く偏（ひとえ）に宜し四方の使い
握手未幾愁判袂	手を握り未だ幾ばくならずして判袂を愁え
一樽梅雨斷人腸	一樽の梅雨人の腸を斷つ

【詩型】七言律詩

【押韻】平水陽韻

【通釈】

題目：蔡聲亭の入貢するのを送る。

かつて蔡邕のような優秀な人がいると聞いた。今日、符節を持って入京しようとする。海をすばやく渡る時仙人の船に乗ってくるようである。朝堂では皇帝に謁見する時、袖に香炉の香りを纏わせるだろう。蔡公は公務の余りにいつも詩三百を読んでいる。声望がありよく使者として四方に遣わされる。会ってから間もなく蔡公と別れてしまった。この梅雨の季節に一杯別離の酒を飲んでさらに悲しくなってきた。

【分析】

この詩は陳元輔の『枕山楼詩集』の第 58 番目に収録されている。題目から、この詩は蔡声亭（鐸）

[1]が北京へ出発する際に陳元輔が送った作品であることが分かる。康熙 27 年 3 月 3 日、蔡声亭（鐸）は進貢の事の為に正議大夫として、11 月に耳目官毛起龍と共に福州に来た。康熙 28 年、5 月に福州に出発して 9 月 2 日に北京に到着している。この詩は康熙 28 年の 5 月前後に作られたものである。

〈首聯〉

「曾聞黄絹舊郎中、此日分符入帝郷」

「黄絹舊郎中」は蔡邕[2]という人物に関わっている。蔡邕は後漢年間の人で、博学にして詩賦、音楽、天文、数学を好んでいた。彼がかつて、邯鄲淳の作った曹娥の碑文を褒めた謎の詞で「黄絹幼婦外孫齏臼」との文を曹娥碑の背に刻した。後に楊修[3]はこの謎を解いた[4]。この謎は「絶妙好辭」（絶妙な素晴らしい言葉）との意味であった。陳元輔はこの典故を引いて蔡声亭の才能を褒めている。「曾聞」は蔡声亭が福州に来る前、陳元輔が琉球人との交流を通して、蔡声亭の賢さを聞いたということを示す。「送虞臣入貢」にも「曾聞三十六湾前、一葉仙槎泛海天」とあり、陳元輔は自由に柔遠駅に出入りする特権があり、琉球についてかなり詳しい情報を知り得ていたことが分かる。

〈頚聯〉

「航海帆飛仙客掉、登朝袖惹御爐香」

「分符」とは割り符である。この句では蔡声亭が今回北京に行く目的であることを示している。「帝郷」は北京のことである。「航海」は、使者たちが琉球から海を越えて福州にやってくることを言っている。また航海の途中、帆が十分に張られていて朝貢船が飛ぶように進んでいることを言う。「登堂」「御爐香」は皇帝に謁見することを指す。陳元輔は蔡声亭が皇帝に謁見する場面を想像している。

〈頷聯〉

「公餘常誦詩三百、望重偏宜使四方」

「公餘」とは公務がない時のことである。「詩三百」とは『詩経』のことである。この句では蔡声亭が公務がない時に勉強を忘れず詩書を手放さないことを表す。「望重」とは「徳高望重」の略語である。蔡声亭の徳が高くて声望もあるという意味である。蔡声亭が「徳高望重」な人だからこそ使者とするのに最も適切な人選であるという意味も含まれる。

〈尾聯〉

「握手未幾愁判袂、一樽梅雨斷人腸」

「握手」は、古人が会う時或いは別れる時、互いに手を握って親しみを表すことである。「未幾」とはまもなくの意味である。「判袂」とは別れるとの意味である。この句は陳元輔が蔡声亭と別れるのが忍びない気持ちを表している。「一樽梅雨」はおそらく、陳元輔が離別の酒を飲む際に、梅雨が降り始めて雨が酒杯に混ざっているという意味であろう。蔡声亭が五月に北京行く時は、まだ梅雨の

---

[1]蔡聲亭、十世諱鐸紫金大夫加陞法司品銜。志多伯親方童名思德字天將號聲亭順治元年甲申十二月初八日寅時生。康熙二十七年戊辰三月十三日為進貢事 奉使為正議大夫十一月同耳目官毛起龍福地親雲上盛命赴閩次年五月福建起身九月初二到京（中略）十五日京師起身次年庚午二月初一日到福州五月二十二日五虎門開洋六月初八日歸國。（那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6 県史編纂資料（抜粋）、那覇市役所、1980 年 3 月、933 頁、934 頁）

[2]蔡邕（よう）、後漢、圉の人。字は伯喈。性、至孝。少くして博學、辭章數術天文を好み、音律を操るに妙、善く琴を鼓す。官は議郎。封は高陽侯。嘉平中、楊賜と六經文字を奏定し、自ら書して碑に刻し、太學門外に立つ。後、左中郎將を授けらる。（『後漢書』巻 60「蔡邕列伝」、中華書局、1965 年より要約した）

[3]楊修、後漢、弘農の人。彪の子。字は德祖。建安中、孝廉を舉げられ、郎中を拜命す。尋いで曹操の主簿と。能く隱語を解したが、後、操に忌まれて誣殺せらる。（『三国志』巻 90「魏書・任成陳蕭王傳」中華書局、2005 年より要約した）

[4]黄絹は色絲、即ち絶という字。幼婦は少女、即ち妙という字。外孫は女の子、即ち好という字。齏臼は辛味の食物の容器、即ち辛を受けるもの、受辛は辭で、即ち辭に同じ。よって此の八字は絶妙好辭の四字となる。

時期である。「一樽梅雨」とは、陳元輔が蔡声亭を送る日が梅雨の時期であったことが分かる。

【21】

重游西湖有懐陳昌其先生即用其送別韻	重ねて西湖に遊び、陳昌其先生を憶う有りて、即して其の送別韻を用いる
重來湖上憶江郎、	重ねて西湖に来たりて江郎を憶う
錯認榕城是故郷。	錯りて榕城を認む是れ故郷なりと
天竺鶯聲疑喚友、	天竺の鶯（うぐいす）の聲疑って友を喚ぶ
離亭詩句尚留香。	離亭の詩句尚お香りを留む
梅花古調琴三弄、	梅花の古調　琴三弄
芳草伊人水一方。	芳草の伊人　水一方
極目錢塘孤棹曲、	極目す錢塘孤棹の曲
江流好似九迴腸。	江流好く九迴腸に似たり

【詩型】七言律詩

【押韻】平水陽員

【通釈】

題目：再び西湖を遊覧する際に陳昌其先生を思って即してその送別韻を用いる。

再び西湖にやって来て陳昌其先生のことを思った。友人がいる福州を故郷と見なしている。西湖の近くの天竺山から鶯の鳴き声がして朋友を呼んでいるようである。陳昌其が離亭で私に送った詩はまだ香っている。梅花三弄の曲を弾いている。高潔な友人は遠くの所にいる。錢塘江に独り泛んでいる漁船を眺めている。錢塘江が曲がっているのは「九迴腸」に似ている

【分析】

この詩は蔡鐸の『観光堂詩草』の第 21 番目に収録されている。詩題にある「重遊西湖」からこの詩は蔡鐸（声亭）再び西湖を遊覧した時に作ったことがわかる。この「重遊」は蔡鐸が北京より福州に帰る道中でまた杭州を通過して西湖を遊覧したことを意味する。蔡鐸は西湖を遊覧する時、陳元輔を思っていた。そして陳元輔の送別詩（送蔡聲亭入貢）の韻脚を元の順番のままに用いてこの詩を作った。「送蔡聲亭入貢」の押韻の「郷」「香」「方」「腸」の順に詩を作っている。その際、蔡鐸は必ず「郷」「香」「方」「腸」の順で詩を作らないといけない。これはほかの詩人の詩に唱和する技法の一つである。これ以外にまた「用韻」「依韻」がある。「用韻」とは相手の詩作の韻をそのまま使うが順番を一致させる必要がない。「依韻」とは相手の詩の韻と同じ韻部の韻を使うことである。「次韻」は和詩の技法として最も難しいものである。蔡鐸の漢詩の才能の高さが窺える。

〈首聯〉

「重來湖上憶江郎、錯認榕城是故郷」

「重来湖上」は蔡鐸が福州に帰る途中、再び西湖を遊覧していたことを言う。北京に赴く途中初めて西湖を遊覧して蔡鐸は「遊西湖二首」を作った。「江郎」は陳元輔を指す。「江郎」はまた南朝梁の江淹を指す。江淹は若い時、才気があって晩年になると才能が衰退していたという「江淹才尽」の典故がある。しかしここでは、蔡鐸はこの意味を取るわけではなく、閩江の近くに住んでいる陳元輔に意を向けている。「榕城」は福州のことである。首聯では蔡鐸は福州にいる時陳元輔と親しく交流があったからこそ異郷にいることを忘れたということを言っている。

〈頷聯〉

「天竺鶯聲疑喚友、離亭詩句尚留香」

「天竺」は西湖の付近に天竺山があり、この「天竺」は天竺山を指す。蔡鐸は西湖の天竺山に登って、鶯の友を呼んでいるような鳴き声を聞いて福州の陳元輔を思い出した。「離亭詩句」は陳元輔の「送蔡聲亭入貢」を指す。「尚留香」は陳元輔の贈詩がまだ墨の香がしているという意味である。墨がまだ香るというのは陳元輔の贈詩が素晴らしいことを表している。

〈頚聯〉

「梅花古調琴三弄、芳草伊人水一方」

「梅花古調」は「梅花三弄」の古曲である。晋代の桓尹と王子猷はお互いに名前を知っているが会ったことがない。一日、二人は道で偶然に出会って馬車を止まらせ、仲睦まじく話し合った。王子猷は桓尹に「貴方は笛に長けていると聞いた」と言った。すると、桓尹は笛を出して「梅花三弄」を奏でた。[1]桓尹と王子猷は道で偶然に出会い初対面であったにも関わらず、古くからの知り合いのように意気投合している。成語には「傾蓋之交」がある。これは桓尹と王子猷のこの典故を指す。要するに、蔡鐸はこの典故を引用して陳元輔と自分が初対面なのにもかかわらず、長く付き合っている古い友人のようであることを表している。この典故を用いるのにはよく中国典籍を知らなければできない。蔡鐸の漢学の修養の深さもうかがえる。「芳草伊人水一方」は「詩経・蒹葭」の「蒹葭蒼蒼、白露為霜、所謂伊人、在水一方[2]」を踏まえて作っている。その意味はアシが白く茂っており、露が白い霜になって、私の心中のあの人は河の傍にいるようであるということである。この句を引用するのは陳元輔と会いたいが今別れて叶うことができないことを表している。

〈尾聯〉

「極目錢塘孤棹曲、江流好似九迴腸」

「極目」はできる限り遠望することである。「錢塘」は杭州の錢塘江である。蔡鐸は高い山の上から遠方の錢塘江を眺めていたことを示している。「九回腸」は錢塘江が曲がりくねっている様子を言っている。今、詩人蔡鐸の心情がこの銭塘江ように屈折していると言いたいのである。

詩の全体から見て、蔡鐸は船を漕いで西湖を遊覧しているわけでなく、西湖の近くの山に登って西湖の全景を眺めていたことがわかる

【６８】

春杪瓊川阻雨因過蔡聲亭山樓茶話　　春杪瓊川雨に阻まれ因りて蔡聲亭の山楼を過り茶話す

芳草萋萋古驛門	芳草萋萋たり古驛の門
連朝風雨客銷魂	連朝風雨客魂を銷す
一江烟遶遲歸棹	一江烟遶り歸棹を遲らせ
萬樹雲深失遠村	萬樹雲深くして遠村を失う
最喜孤窓逢陸羽	最も喜ぶ孤窓に陸羽に逢うを
敢言十日在平原	敢えて言わんや十日平原に在ると
高吟不為蕭條改	高吟為にせず蕭條を改めるを
好以新詩細共論	好く新詩を以て細かに共に論ぜん

【詩型】七言律詩

[1]明・朱権『臞仙神奇妙譜』中巻（『續修四庫全書』1092 子部・芸術類、上海古籍出版社、1995 年、196 頁、197 頁）
[2]清・方玉潤撰『詩経原始』、中華書局、1986 年 2 月、 273 頁。

【押韻】平水元韻

【通釈】
題目：春の末に瓊河で雨に阻まれてそれて蔡声亭の山楼で茶話する
　柔遠駅門前の芳草(ほうそう)は盛んに茂っている。連日の風雨が客に哀愁を感じさせる。川が靄にかこまれて帰りの船を遅らせ、多くの緑が深く、遠くの村が見えなくなっている。最も喜ばせるのは孤窓で一緒にお茶を飲む人に逢うことである。敢えて言う、十日の平原の宴会であってもそうした楽しさはない。高らかに詩を吟じ、新詩を共に論じたものである。

【分析】
　この詩は『枕山楼詩集』の第 68 番目の詩である。題目から、陳元輔は風雨に阻まれたため蔡声亭の部屋でお茶を飲みながら話し合ったことが分かる。この詩はそうした情景を記している。康熙 27 年、11 月に蔡声亭が進貢正議大夫として福州に来た。康熙 28 年 5 月に福州より北京に赴き九月に到着している。公務が終わって 10 月 15 日に北京を出発して、年（康熙二十九年）2 月初一日福州に着き、5 月 22 日、五虎門より出帆して琉球に帰った。陳元輔が蔡声亭と会えた期間は、康熙 27 年 11 月～康熙 28 年 5 月と康熙 29 年の 2 月～5 月である。この詩はいつ作られたのであろうか。詩を読むとこの詩の基調はゆったりと穏やかであることから、蔡鐸らは進貢任務を終えて福州に戻って公務がそんなに忙しくはない時の作と思われる。それにこの詩は「送蔡聲亭入貢」の後に篇列している。この詩は康熙 29 年の 3 月に作られたと考えてもいいだろう。
　〈首聯〉
「芳草萋萋古驛門、連朝風雨客銷魂」
　「芳草萋萋」は草木が盛んに茂っているさまである。この言葉は春末の時期を示している。この詩は康熙二十九年 3 月ごろに作られたものと思われる。また、唐代詩人、崔顥の「黄鶴楼」の中に「晴川歴歴漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲[1]」の名句がある。黄鶴楼の上からの眺めで漢陽の晴川閣の青々とする木がはっきりと見え、さらに草が茂っている鸚鵡洲も見える。陳元輔の「芳草萋萋古驛門」はまさにこの句に基づいている。
　「連朝風雨」は連日の雨の意味である。この雨は数日間続いていることが分かる。「銷魂」はきわめて悲しいことである。陳元輔は柔遠駅を訪ねて来たから、ここの「客」とは陳元輔の自称である。「客銷魂」連日の雨に阻まれて柔遠駅に数日間に泊まって帰れなくて困っていたことを表している。
〈頷聯〉
「一江煙繞遅歸棹、萬樹云深失遠村」
　「一江煙繞」は瓊河がもやもやとして煙に包まれたように見えることを言う。「遅歸棹」は靄が濃くて船がゆっくり進んでいることを言う。「失遠村」は遠い村が見えないことを言う。この句は雨が降り続きもやもやとして船を遅らせ、村が見えなくなっている景色を描いている。景色をそのままを描いて詩人自身の感情を注いでない。詩では「銷魂」と言っているが、実は「蕭條」な景色の影響を受けず、ゆったりとした気持ちでこの詩は作られている。
〈頚聯〉
「最喜孤窗逢陸羽、敢言十日在平原」

[1]孟浩然の「黄鶴樓」（蘅塘退士選『唐詩三百首』、世界書局、1936 年 11 月、71 頁）

「陸羽」は茶道の開祖であり、「茶経」を著した。「逢陸羽」は陸羽と逢うわけではなく、蔡声亭が陳元輔をお茶に招待してくれたことを指し、さらに蔡声亭が作ったお茶が芳香であることを言っている。「孤窗」とは二人はおそらく窓口に向かって雨景を見ながら茶話をしているのであろう。ちなみに陳元輔はお茶に関する著作の『枕山楼茶略』があることから、茶に関してもよく知っているはずである。

「十日在平原」は戦国時期、秦の昭王と平原君が十日間続いた宴会を開いたこと言い、後に友人らのために数日連続の宴会を開くことを指す。この句では、「平原十日」の典故と蔡声亭からのお茶招待とを対比させて、連日の宴会を開く必要がなくて簡単なお茶でもその友人の情誼を十分に表せると言っている。この聯から詩の基調は喜びへと転換する。

〈尾聯〉

「高吟不為蕭條改、好以新詩細共論」

「高吟」は大きい声で漢詩を吟詠することを指す。陳元輔、蔡声亭たちは、少し蕭条な景色に影響されることはなく、かえって興味津々に詩を吟詠して新しい詩について論議したことを言う。

『那覇市史・琉球資料漢文編』（以下『漢文編』）資料篇第 1 巻 9 には、以下の陳元輔が蔡鐸に送った手紙が収録されている。

与蔡声亭書

別來許久星霜屢易、爾老先生深情渥愛真令人寤寐弗諼也。兼葭白露何足以盡我思慕哉。今者老先生晉秩崇階為冠裳中模楷。丈夫遭時遇主正在此日、弟深為手額。唯是聖天子泰運方亨、大江南北人文蔚起一時稱盛。近翰林劉公至閩徵詩以彰天朝雅化、弟為寵文言已將老先生觀光堂詩、曾大夫執圭堂詩、併寵文燕遊草、送閲劉公。大加稱賞以為殊域有詩如此足見聖化之所及者遠也、且問監生三子何以無詩、弟答以有稿未刻。今欲將貴國詩人每人精選十余首或七八首集成一部、顔曰中山詩選、鳩資授梓以備采風者所收。弟忝在西席十有余年、亦甚樂有是舉也。老先生為詞壇領袖知有同心、乞以此意與貴國能詩諸君子言之、貢艘至將藏稿書寄前來、以便參訂彙梓。一以光聖朝同文之化、一以昭貴國文教之隆、且以推廣老先生振作之德、併以鼓吹後生俾知向學、亦千載一時之隆事也。爾老先生創始之功、應不朽矣。所有未盡之言已囑寵文代為面陳、應否可行析再與商之、統候賜示。滄波萬里、繼見殊難、唯願為國愛身、時加珍攝。是知己之所望耳。順貢圖章二方新刻詩集一冊呈政、並此附訊請安。未既欲言、希為心照、臨楮瞻注。[1]

読み下し

蔡聲亭に與うるの書

別來、許り久しく、星霜屢易るも、老先生の深情渥愛は真に人を寤寐も諼るなからしむるなり。兼葭にして白露たれば何ぞ以て我が思慕を盡くすに足らんや。今や老先生は秩を晉め階を崇め、冠裳中の模楷と為る。丈夫、時に遭い主に遇うは正に此の日に在り。弟、深く手もて額するを為す。唯是れ聖天子の泰運方亨も大江の南北は人文蔚起し、一時に盛を稱す。近ごろ翰林の劉公閩に至り、詩を徵して以て天朝の雅化を彰（あきら）かにす。弟、寵文の為に言い、已に老先生の觀光堂詩、曾大夫の執圭堂詩、併せて寵文の燕遊草を將て送りて劉公に閲せしむるに、大いに稱賞を加え、以て殊域に

[1]那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9、那覇市役所　1988 年 10 月、405 頁。

詩あること此の如ければ聖化の及ぶ所の者遠きを見るに足ると為すなり。且つ監生三子は何を以てか詩なきを問う。弟、答うるに稿あるも未だ刻せざるを以てす。今意に、貴國の詩人毎人精選せる十余首或は七八首を將て一部を集成、顔して中山詩選と曰い、貲を鳩め梓を授けて以て採風者の收むる所に備えんと欲す。弟、忝(かたじけな)くも西席に在ること十有余年にして、また甚だ是の擧あるを樂しむなり。老先生は詞壇の領袖たれば心を同じくすることを知る。乞うらくは、此の意を以て貴國の詩を能くするの諸君子とこれを言わんことを。貢艘至れば藏稿を將て書き寄りて前來せしめ、以て參訂彙梓す。一は以て聖朝の同文の化を光し、一は以て貴國の文教の隆を昭かにするに便ならしめ、且つ以て老先生振作の德を推し廣め、併びに以て後生を鼓吹して學に向かうを知らしむれば、また千載一時の盛事なり。爾して老先生創始の功應に朽ちざるべし。有る所未だ盡くさざるの言は已に寵文に囑して代りて面陳を為さしむ。應に行うべきや否やは、再び與に商するを祈る。統て示を賜るを候つ。滄波萬里にして繼見殊に難し。唯願うらくは、國の為に身を愛しみ、時に珍攝を加えられんことを。是れ知己の厚く望む所のみ。順じて圖章二方、新刻詩集一冊を貢すれば呈政せられよ。並びに此に附訊して請安す。未だ言わんと欲すを既さず。希わくは心照を為さんことを。楮に臨んで瞻註す。

〈分析〉

手紙の初めはまず蔡鐸に対しての深い思念を言っている。「別来許久星霜屢易」という文は蔡鐸（声亭）とずいぶん前に出会っていたことを表している。康熙 27 年 11 月、蔡鐸は正議大夫として福州に来て、康熙 29 年 5 月 22 に出航して帰国した。この間、康熙 28 年 5 月から康熙 29 年 2 月までに蔡鐸は北京への旅に出てまた福州に戻っている。蔡鐸と陳元輔は 8 か月の交遊期間があった。しかし、蔡鐸は帰国した後、二度と進貢使節として福州に来ることがなかった。この書簡の中で陳元輔は蔡鐸に挨拶する以外に、蔡鐸に『中山詩選』の編集のために琉球国内の漢詩作品を集めるようと提案している。『中山詩選』を編集するきっかけは劉姓の翰林が清朝の文化隆盛を示すために福建に来て詩を採集したことによる。その際に、陳元輔は曽夔（益）の『執圭堂詩草』、蔡鐸の『観光堂詩草』、程順則の『雪堂燕遊草』を劉翰林に見せている。劉翰林は高く評価すると同時に、官生の三名（蔡文溥ら）の詩がなぜないのかと尋ねている。陳元輔は彼らには詩集があるがまだ刊刻されてないと答えている。劉翰林に見せた曽夔、蔡鐸、程順則らの詩集は刊刻本であった。

本文に「弟忝在西席十有余年」とあることから、手紙を書いた時、陳元輔は琉球人の塾師となってから十年あまりであることがわかる。また陳元輔は康熙 23 年から琉球人の師を務め始めている。この文は康熙 37 年―康熙 43 年前の間に書かれたものであろう。より具体的な時期は本文の中に明らかな根拠がないためよく分からない。

程順則は康熙 36 年 12 月 26 日福州に着いて、37 年 6 月初 7 日に帰国船に乗って帰っている。北京より福州に帰って帰国するまで、福州で 130 日間滞在していた。この期間に『燕遊草』を刊刻するのに十分な時間を得ている。早ければ、康熙 37 年に陳元輔の手元に刊刻本の『雪堂燕遊草』を提供できたはずである。劉翰林がちょうど福州に居り、陳元輔は程、曽、蔡の詩集を劉翰林に見せた後、『中山詩選』の編集を起案している。程順則が福州にいる間に陳元輔は蔡鐸への手紙で『中山詩選』刊行の着想を蔡鐸に提案している。書簡の中に陳元輔が書簡に語り得なかったことを程順則に言い渡して、蔡鐸に伝言するよう頼んでいる[1]（所有未盡之言已囑寵文代為面陳）。陳元輔が劉翰林に蔡、程、曽の詩を見せた時、程順則は福州にいたことが推測できる。そうした経緯から、この書簡は康熙 37 年に

[1] 「所有未盡之言已囑寵文代為面陳、應否可行析再與商之」那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9 、那覇市役所、1988 年 10 月、405 頁。

書かれたものと判断していいだろう。程順則は帰国した後、陳元輔の手紙を蔡鐸に渡して琉球国内の漢詩を採集する作業を始めている。

陳元輔の提案によって琉球人の漢詩選集である『中山詩選』を編集する事業が始まっている。『中山詩選』の前に『寒窓記事』、『執圭堂詩草』、『観光堂詩集』、『閩遊草』などがすでにあるが、これらの詩集は単なる個人の詩集である。『中山詩選』のような琉球漢詩を総括する性質の詩集は、おそらくこれが初めてあろう。『中山詩選』を編集することは、陳元輔が琉球の漢詩発展のために起案した文学的貢献といえよう。後の『皇清詩選』への琉球人の漢詩の入選は、『中山詩文集』の編集と緊密な関係があると考えられる。

『皇清詩選』は『皇清詩盛集初編』とも言い、清代孫鋐[1]によって編集されたものである。『皇清詩選』の冒頭の汪琬の序文は康熙 27 年（1688）孟冬（10 月）に書かれている。よって『皇清詩選』は康熙 27 年 10 月以降に刊刻されていることが分かる。現在、最も早い刊刻版は康熙 29 年（1690）の鳳嘯軒[2]の刻本である。初版の『皇清詩選』は琉球人の詩が収録されてない。「盛集初編刻略」ではいかのように述べている。

> 聖朝文教覃敷殊方異域咸知謳頌、側聞朝鮮、日本諸國多有詩歌傳播爾竟無從考索。（中略）尚容補輯以揚聖化[3]。（聖朝の文教は広く伝播して外国にも知られて讃えられている。朝鮮、日本の諸国にも詩歌があると聞いているが、入手する方法がない。（中略）外国の詩を編集刊行して皇帝の聖化を宣揚する）

孫鋐は日本、朝鮮、琉球などの国の漢詩作品があると知っていたが、その入手が難しく、『皇清詩選』の初編に外国詩人の詩を収録してない。また孫鋐は海外の漢詩を収集して、後に『皇清詩選』を補うと言っている。康熙 44 年（1705）、康熙帝は第五回目の江南巡視を行った。康熙帝は松江府に巡幸した際に、孫鋐は康熙帝に『皇清詩選』を進呈している。これは第二版の『皇清詩選』（第二版の題目は『進呈御覧皇清詩盛初編』）である。この版本にもまだ琉球人の詩は収録されてない。以下の資料は、琉球人の漢詩が『皇清詩選』に入選された経緯を述べている。

> 康熙四十八年八月初十日琉球國正議大夫毛文哲、都通事陳其相姑蘇郵亭寄詩啓[4]。（康熙 48 年 8 月 10 日琉球国正議大夫毛文哲、都通事陳其湘、蘇州の駅亭で詩を送る手紙）

> （前略）聖主柔遠之恩即蛟島蟻封能無願學。惟慚荒服莫窺甲觀之藏得誦初編。（中略）謹彙東洋近刻寄呈大雅品題收之選中如鄧林之采柔木附於卷末[5]。（聖明な皇帝の懐柔遠人の恩徳を受け、たとえ海島、山原に住む人でも能なきとはいえ学問を慕う。ただ恥ずべきことではあるが、辺鄙な地域における私は書籍が少なく、やっと「洛阳紙貴」のような初編を得て喜んでいる。詩集を先生に郵送してその中からいくつか選んで初編に収録していただければ幸いです）

---

[1]鋐字は思九、康熙年間貢生、江陰華亭人である。(『景印四庫全書總目』巻 194 集部第 47、台湾商務印書館、1983 年 6 月、 5-198 頁)
[2]中国人民大学図書館所蔵
[3]上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、352 頁。
[4]上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年 4 月、355 頁。
[5]同上、355 頁

今乙丑歳其陪臣毛文哲陳其湘乗入貢之便由江蘇藩署郵寄學紀一編、中山詩六帙[1]。（今年、使節の毛文哲、陳其湘は来貢の便を得て、江蘇の駅亭から『学紀』一篇、中山詩六帖を郵送した）

康熙 48 年（1709）8 月に正議大夫毛文哲、都通事陳其湘は進貢の便をもって蘇州で『学紀』（すなわち「廟学紀略」）『中山詩』を孫鋐に郵送した。この『中山詩』は刊刻されたものであった。この『中山詩』が、まさに陳元輔が編集された『中山詩選』ではないだろうか。毛文哲、陳其湘らの琉球士大夫は『皇清詩選』を事前に読んで孫鋐が海外の漢詩を網羅しようということを知っていたことから、数年前にできた『中山詩選』を孫鋐に郵送して入選してほしいと願いでたのであろう。なぜ、琉球側はこのように積極的に琉球詩人の漢詩を孫鋐に送って編入させようと要望したのだろうか。以下の理由があると考えられる。

まずは、康熙 48 年（1709）の時点では、『皇清詩選』は康熙帝に進呈されており、御覧に呈された詩集として康熙帝に称えられていたはずである。これには康熙帝の御制詩が収録されている。つまり、本来民間人によって編集した詩集であるが、濃い官方の色に染まっている。当時において『皇清詩選』の文学的地位は高く、絶大な影響力をもっていたであろう。一方、『皇清詩選』を編輯する目的は康熙帝の英明の統治の下で文教繁栄、盛世太平を宣揚し皇帝の功徳を讃えることである。琉球人の漢詩をこのような詩集に収録してもらいたいと希望するのは、琉球国の教化された文化教育の広がりを宗主国である中国に伝えようとする配慮があってのことであろう。

康熙 48 年 8 月 16 日前後、孫鋐は『中山詩』を受け取った後、『中山詩』から琉球人の漢詩を選択して『皇清詩選』に付け加え、さらに安南、朝鮮の漢詩と合わせて最終版の『皇清詩選』を完成させている。程順則は康熙 59 年、江南を経由する際に琉球人の詩が収録されている『皇清詩選』を数十部購入して持ち帰っている。『皇清詩選』に収録されている琉球人の漢詩は、そのほとんどが『中山詩文集』にも収録されている。『中山詩文集』の前身は『中山詩六帙』であろう。もっと遡れば陳元輔の動議によって編集し始めた『中山詩選』は『中山詩六帙』の前身であろう。蔡鐸、程順則は陳元輔の起案に従って、琉球国内で漢詩を採録して船で陳元輔に送った。陳元輔はそれらからえり抜いて『中山詩文集』の原形である『中山詩選』を成した。

陳元輔は『中山詩文集』編纂の創始者といってもよいであろう。『中山詩文集』は程順則が実際に編集したことは間違いないが、陳元輔が発起したという功績を無視することはできない。陳元輔は実際の『中山詩文集』の編集者の一人といえよう。前期には蔡鐸、程順則は琉球国内で詩作を採集作業して、後期には陳元輔は集まった詩稿を編輯、校訂、刊刻などの仕事をする。そして『中山詩選』ができた後、毛文哲は『中山詩六帖』（『中山詩選』）を孫鋐に送って『皇清詩選』への入選を促したと考えてよい。

2　蔡肇功

蔡肇功の号は紹斎、官は紫金大夫に至った。「県史編纂史料・那覇の部（抜萃）」では蔡肇功は康熙 17 年（1678）6 月、暦法を学ぶために王命を奉じて福州に赴き、薛一白に師事していた。そして康熙 20 年（1681）6 月には帰国している。福州には 4 年ぐらい滞在していた。[2]蔡肇功は暦法を学ぶことによって琉球に大清時憲暦を導入した。また、留学する間に暦法だけを学んでいたわけではなく、任尹という福州人に師事し詩を習ったようで『寒窓記事』という詩集がある。現存の『寒窓記事』は蔡

[1]　同上、360 頁
[2]那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6 県史編纂資料（抜粋）1980 年 3 月　932 頁

肇功の子孫蔡大鼎が同治 9 年（1870）に福州で再刊したものである。詩集には留学時期の詩と琉球、薩摩で作った詩を合わせて合計 35 首の詩が収録されている。詩集に人物名がほぼ出てこないので福州で誰と交流したかは判断できない。蔡肇功は一生のうち 4 回福州に行ったことがある。二度目は、康熙 29 年、存留通事として福州に行っている。次の二首の詩は蔡肇功が福州での存留期間に陳元輔と交流していたことを反映したものである。「冬杪讌集程寵文雪堂同方徳祖鳳恭良蔡紹斎夜話」は康熙 29 年（1690）12 月ごろに作られたものであり、「元夕同程寵文盧若采留飲蔡紹斎江樓」は康熙 30 年（1691）正月 15 日に作られたものである。蔡肇功に関わる詩を作った以外、陳元輔は蔡肇功の祖先である蔡述亭（蔡廛カ）の事績を聞いて蔡述亭伝を著わしている。「蔡述亭伝」は『枕山楼文集』に収録されている。

【111】

冬杪讌集程寵文雪堂同方徳祖鳳恭良蔡紹斎夜話	冬杪程寵文の雪堂に讌集し方徳祖鳳恭良蔡紹斎と同に 夜話す
年年下榻古瓊河	年年下榻す古瓊河
此夜相逢喜更多	此の夜相い逢いて喜び更に多し
肝膽故人重握手	肝膽の故人重ねて手を握り
風流新貴共高歌（蔡紹斎奉使至閩初謀面）	風流の新貴共に高歌す（蔡紹斎使を奉じて閩に至り初めて謀面す）
草堂猶帶河南雪	草堂猶ほ帶ぶがごとし河南の雪
狂士空餘下邳波	狂士空く餘す下邳の波
豈有雄談驚四座	豈に雄談四座を驚かすこと有らんや
感君青盻愧如何	君の青盻に感じて愧を如何んせん

【詩型】七言律詩

【押韻】平声歌韻

【通釈】

題目：冬の末、酒宴を開き、程寵文の雪堂で方徳祖、鳳恭良、蔡紹蔡と夜に語りあう。

毎年、柔遠駅に来て榻を下ろして多くの琉球人と出会ってきた。今夜は友人と逢って喜びは更に増している。昔、私と深く交わる友人と再び会うことができた。そしてさらに高雅な人と共に詩を詠唱することもできた。外は寒いが、雪堂では師弟共に文学を論議して、昔の「程門立雪」の遺風が見える。狂士は塵埃と化し、下邳の近くの河水は滔々としている。私は同席のみんなを驚かせる言論もないのに、君子たちにこんなに推奨されて恥ずかしくてたまらない

【分析】

題目から見ると冬の末、程順則の室で宴を開き、琉球から来た方徳祖、鳳恭良、蔡紹斎とともに夜を徹して話し合った。方徳祖、鳳恭良という人物については、くわしいことは分からない。当時柔遠駅に勤めていた琉球の渡唐役人であろう。『寒窓記事』の蔡大鼎の序文[1]によると蔡紹斎は蔡肇功のことである。蔡肇功について『那覇市史家譜譜資料久米系』では詳細は知り得ないが、『歴代宝案』、『那

[1] 蔡肇功『寒窗紀事』（傳世漢文琉球文獻輯稿第一輯第 23 冊收錄、鷺江出版社、2012 年 1 月、581 頁）

覇市史家譜譜資料久米系に基づいて作った『清代渡唐人員表』[1]によると、蔡肇功は康熙 29 年、存留通事として福州にいた。同行していた都通事鄭職良の資料[2]によると、康熙 29 年（1690）11 月 17 日に那覇より出航していることから、福州に着いたのは順調であれば四、五日後のことだと思われる。この詩は、蔡肇功らが福州に着いて暫くした後、初めて対面した時に作られたと考えられる。陳元輔は蔡肇功と初めての面会の後、康熙 30 年（1691）の正月 15 日の夜、程順則、盧若采とともに蔡肇功と柔遠駅で宴に参席していた。陳元輔は「元夕同程寵文盧若采留飲蔡紹斎江樓」を記している。

『枕山楼文集』の「蔡述亭伝」によると蔡肇功は蔡述亭の曾孫である。蔡述亭はかつて紫金大夫蔡堅に随って福州に留学した。その後、進貢の為に北京に行って帰る途中風霜に苦しめられて亡くなり、福州で埋葬されている。

陳元輔の「蔡述亭伝」に蔡述亭について以下のように述べている。

> 公少時生于海外、見聞孤陋慨然有觀光上國之志。一日從紫金大夫蔡公監來閩授業於師、揣摩刻苦手不釋卷、復結交當世知名士、以資其問。雖不數年通經博雅、練達時務。蔡公堅奇其人、薦于王。王器重之、寵以爵賜第於唐榮居焉。蔡氏之人入唐榮自公始[3]。（蔡述亭は少年の時に見聞が少なく上国してその国ぶりを観たいという憧れを持っていた。紫金大夫蔡堅に従って閩に来て師に師事する機会に恵まれ、刻苦して書籍を手放さず学習に励み、また当時の名士と交遊して色々と問い学問を磨いた。数年にならずして五経に通じ実務にも長けるようになっている。蔡堅は彼を国王に推薦した。国王は彼を重用して爵位を与えて久米村籍を授けている。蔡氏が久米村に入るのは蔡述亭が嚆矢という。）

蔡堅の国王への推薦によって、蔡述亭は爵位を授けられ唐栄（久米村）に転入しているが、これが蔡氏の唐栄（久米村）転入の始まりとしている。中山王府は久米村の凋落に対して久米村を強化する対策を行い、首里、那覇、ひいては薩摩人まで久米村の籍に入れている。1610 年（薩摩侵入の翌年）、那覇の人である蔡廛（てん）が「よく華語に通じ、礼数を知る」として蔡堅によって国王に推薦され久米村籍に転入された[4]。蔡廛の久米村籍への転入後、康熙 9 年（1670）までに周国盛、孫自昌、曽志美、程泰祚、魏士哲、林茂豊、李栄生などの人物が久米村籍に転入している[5]。蔡姓で久米村に編入されるのは蔡廛だけである。陳元輔の「蔡氏之人入唐榮自公始」と合わせて考えると蔡廛はすなわち蔡述亭であると考えられる。また、久米家譜の「県史編纂資料・那覇の部（拔萃）」において、蔡廛の条で「元祖具志堅親雲上廛」と、蔡肇功の条で「四代祖湖城親方肇功」と記している。「元祖」、「四代祖」からすると蔡廛は蔡肇功の曽祖父である。蔡述亭伝の「公之曾孫紹斎（肇功）」からも蔡述亭が蔡紹斎の曽祖父であることが分かる。両者一致しており、蔡述亭はすなわち蔡廛であることが分かる。

〈首聯〉

「年年下榻古瓊河、今夜相逢喜更多」

「下榻」は壁にかけた榻を下して賓客を迎えることである。「古瓊河」は柔遠駅を指す。「年年下榻古瓊河」は毎年、柔遠駅は榻を下して琉球からの賓客を迎えるということである。つまり陳元輔は頻

---

[1] 謝必振・朱徳蘭・赤嶺守編『中国と琉球人の移動を探る・明清時代を中心としたデータ構築と研究』、彩流社、 2013 年 3 月、207 頁。

[2] 那覇市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 10 月、577 頁。

[3]「蔡述亭伝」陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894。

[4] 田名真之「近世久米村の成立と展開」（『新琉球史・近世篇上』、琉球新報社、1989 年、212 頁）

[5] 賴正維『福州與琉球』、福建人民出版社、2018 年 12 月、209 頁。

繁に柔遠駅に出入りしているとみられる。「相逢」は出会いのことである。
〈頷聯〉
「肝膽故人重握手、風流新貴共高歌」
「肝膽」は肝と胆のように密接であるという喩えである。「肝膽故人」は親密な友人のことを言っている。「握手」は手を繋ぐの意味で、転じて出会うことである。この句は再び親密な友人と会ったことを喜んでいる。この「肝膽故人」とは程順則だと理解してもよいだろう。康熙 28 年に程順則は存留通として再び福州に来ていた。
「風流」は人の品格、風格などが非凡なさまである。「新貴」は最近昇進した高官のことである。陳の自注で「蔡紹斎奉使至閩初謀面」からすると「新貴」は蔡肇功のことを指す。進貢使節に随行して福州にやって来ることは、もともと光栄なことである。頷聯は今夜、喜ばしいことが多い理由を述べている。一年前の知己である程順則と再び交遊できて、今夜また新しくやって来た蔡肇功と知り合い、共に詩を吟咏することができて、喜ばしいことであるとしている。
〈頸聯〉
「草堂猶帶河南雪、狂士空餘下邳波」
「河南雪」は程門立雪という典故である（「河南雪」については 212 頁「喜同王孔錫盧若采夜集程寵文雪堂話月分得七陽」で詳しく説明する。参照されたい。）。夜、外は寒いが室内ではみんな烈々として学問を討論している。まるで昔の「程門立雪」のようだと言っている。新しくやって来た蔡紹斎はおそらく「夜話」をきっかけにいろいろなことを陳元輔に聞いたであろう。蔡紹斎が学問を聞く様子は宋の楊時、程頤を伺うことと一緒である。それが「河南雪」の本義である。
「下邳波」は「張良納履」[1]の典故を指す。張良は下邳城でゆったりと歩いて橋を通っている際、ある服がぼろぼろの老人とあって、老人は靴を橋の下に投げた。張良に「橋を降りて靴を取れ」と言った。張良ががまんして靴を取ってきてさらに老人の足にはかせた。後に老人は彼に「太公兵法」を授けた。この典故から転じて恭（うやうや）しく学問を教えてもらうことを指す。
〈尾聯〉
「豈有雄談驚四座、感君青眄愧如何」
「雄談」は寓意が深い話である。「驚四座」は満座の人々を驚かせることである。「青眄」は重視することである。「愧如何」は恥ずかしくてたまらないという意味である。この句では陳元輔が謙虚に自分の知識が浅いのに諸君子にいろいろと尋ねられ恐縮する様を記している。

【114】

元夕同程寵文盧若采留飲蔡紹斎江樓　　**元夕程寵文盧若采と同に蔡紹斎の江樓に留飲す**

春寒入夜擁重裘　　春寒夜に入り重裘（ちょうきょう）を擁（よう）す
野外霜威折酒籌　　野外霜威にして酒籌を折る
一帶江村連遠岫　　一帶の江村遠岫に連なり
萬家燈火映層樓　　萬家の燈火層樓に映ず
開箋如對中郎絹　　箋を開けば中郎絹に對するが如く
倚檻疑登范蠡舟　　檻に倚れば范蠡舟に登るかと疑う

[1]漢・司馬遷『史記』巻 55「留侯世家」、中華書局、1963 年 10 月、705 頁。

安得樽前紅雪在　　安くんぞ樽前紅雪在るを得て
玉簫金管按梁州　　玉簫金管梁州を按ぜん
【詩型】七言律詩
【押韻】平声尤韻

【通釈】
夜に入って春寒を防ぐ為に厚い皮衣を着た。外は寒くみな酒が進んでいる。閩江に沿った村は、遠くの峰まで延びている。家家の灯火が高楼に映っている。箋（詩稿）を開いて読むと中郎の絹を目の前にしているようで、欄干に寄りかかって瓊河の遠方を眺めれば范蠡の船に乗っているかのようだ。我々は酒を飲みながらどれほどの梅花を見て、簫と笛で梁州の曲を奏でるのを聞いたことか。

【分析】
題目から、正月十五日の夜、程順則、陳元輔、盧若采らは蔡紹斎の江楼に留まって宴席を設けていたことが分かる。盧若采は琉球人と交流したことのある福州文人であると思われるが、これ以外の資料がない。
〈首聯〉
「春寒入夜擁重裘、野外霜威折酒籌」
「重裘」は二重の皮衣である。「酒籌」は飲み干した杯の数を数える道具であり、あるいは酒令などに用いる。一般的に、「酒籌」は細薄い札の形をしている。「折」は損をするという意味である。そうすると「折(shé)酒籌」は酒籌の数が少なくなっているという意味である。要するに杯数を数える酒筹は少なくなるのは、寒くてみなの酒が進む結果である。首聯では「擁重裘」「折酒筹」でこの夜が如何に寒いのかを表している。
〈頷聯〉
「一帯江村連遠岫、萬家燈火映層樓」
この句で江に沿ってくねって曲がる村落が縄のように遠い山まで伸びている景色を描いている。正月十五夜は新年の初満月の夜であるから、明るくて遠いところの山までも見える。この句は月の字を使ってないが、字句の間で月の明るさをうまく表現できている。
「萬家燈火」は正月の十五夜はランタンの節なので、柔遠駅の付近では至る所にランタンが飾られていることを言っている
〈頸聯〉
「開箋如對中郎絹、倚欄疑登范蠡舟」
「開箋」は詩稿を開くことである。「中郎絹」は後漢の蔡邕が邯鄲で曹娥碑文を読んだ後「黄絹幼婦外孫齏臼」という字謎を石碑の裏に刻んだという典故を指す。後に楊修はこの字謎を読み解いて「絶妙好辭」と評している（58 頁「送蔡聲亭入貢」に参照）。「中郎絹」はみなが作った詩が巧妙だと言っている。
「范蠡舟」は戦国時代に、越王勾踐の宰相范蠡が呉王夫差に復讐して霸業を創立した後、宰相を辞任して金銀財宝を持って船を浮かべ五湖に隠遁したとの故事である。范蠡は伝説の美人西施を携えて隠遁したとの伝説もある。詩には陳元輔らが酒を飲みながら即興で作詩することを描いており、楽しくてまるで范蠡の舟にて遊ぶかのようであると言っている。
〈尾聯〉

「安得樽前紅雪在、玉簫金管按涼州」

「紅雪」は梅花である。腊梅は一年中で最も早く開くから春の使者とも呼ばれている。「玉簫金管」は管楽器を指す。「按涼州」は涼州曲に従って管楽器を奏でることである。涼州曲はもともと西涼州の曲で唐開元年間、宮廷に導入された。尾聯では今夜の宴でみな酒を飲みながら梅花を鑑賞するだけでなく、音楽も奏でて楽しくてたまらないことを言っている。

第三項　小結

陳元輔は琉球勤学人の師匠を務め始めてから逝去するまでの 30 年間に多くの琉球人と接触し教えていた。周知の如く、陳元輔と程順則との師弟関係は、中国、琉球交流史において一つの美談となっている。当然、陳元輔と親しく交流したのは程順則だけではない。もともと福州で琉球文人と福州文人との交流に関する資料は少なく、かつ『枕山楼詩集』は康熙 30 年までの作品だけを収録している。そのため、康熙 30 年以後の陳元輔と琉球文人との交流を反映している資料はさらに少ない。陳元輔の父は康熙 36 年前後に死亡したので梁邦基、梁津、梁鏞、梁成楫らはその消息を聞いて、琉球から香典を送った。梁邦基、梁津、梁鏞らには詩集があって陳元輔は彼らの詩集を校閲している。梁津は勤学の時期、程順則と同じく陳元輔の下で学んでいた。梁津は留学を終えて帰国した後、健康に問題があり進貢使節として再び福州に行くことはなかった。陳元輔はずっとそれを残念に思っていた。『枕山楼詩集』の中に梁津に関わる詩は 3 首ある。その中の二首は梁津の帰国後、陳元輔の彼に対する思念を表している。蔡鐸は進貢副使として康熙 28 年に福建に来て初めて陳元輔と知り合った。二人は短い期間に頻繁に交流していた。蔡鐸が北京に行く前に陳元輔は送別詩を贈っている。また蔡鐸は進貢のため北京への道程中、陳元輔を憶う律詩を作っている。康熙 37 年の陳元輔の蔡鐸への書簡の中で、陳元輔は琉球国の詩を採取して自らが校正、修訂をした後に福州で出版しようと提案している。この動きは、琉球人の漢詩が『皇清詩選』に収録されること及び程順則が『中山詩文集』を編纂することに影響を加えている。陳元輔は予め琉球人の詩を採集してかつ陳元輔が校訂と修正をした。こういった前期の仕事があるからこそ毛文哲は有り合わせの「琉球詩六帖」を孫鋐に提出できたのである。琉球の漢詩を孫鋐の『皇清詩選』に収録させる意義は、琉球国が宗主の中国に自分が小さく辺鄙な国であるにもかかわらず積極的に皇帝の教化を受けて、文化が繁盛していることを示すことにある。その後、程順則は『中山詩文集』を編纂する際に、それを底本として参考にしたのであろう。その他に陳元輔は蔡肇功の曽祖父蔡廛のために伝記を書いて後世に残している。

第三節　陳元輔と程順則の交遊

程順則[1]がどんな人物かについて、その歴史の位置付けは多く、先行研究として真栄田義見の『名護親方程順則評伝』、眞境名安興の「教育と道徳を固めた程順則」、上里賢一の「程順則の父と子―程順則の情愛と苦悩」などがある。それについては本節で贅言しない。琉球王国時代、程順則は第一の

[1] 程順則，七世隆勳紫金大夫加銜法司正卿諱順則。名護親方童名思武太，字寵文號念菴行一。康熙二年癸卯十月二十八日亥時生，雍正十二年甲寅十二月初八日戌時卒，享年七十二。康熙二十二年癸亥九月十九，日為勤學事隨謝恩紫金大夫王明佐國場親方，十一月二十四日那霸開船十二月初五日到福州，甲子春赴京其冬回閩，留四載丁卯年五月初十日歸國。康熙二十八年己巳五月初十日奉 使為接貢存留通事，仝都通事毛文善奥間通事親雲上，十一月初二日開船赴閩，留驛三載。此時建立土地祠并崇報祠有記詳之。辛未年六月十七日歸國，順則在閩捐資二十五金購得十七史全部共計一千五百九十二卷歸獻孔子廟。（那霸市企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料編第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、545 頁）

儒学者として位置付けられており、徳が高く名護聖人と称されている。久米村出身といわれているが、久米村を強化する政策によって彼の父程泰祚は久米村に籍を移している。血縁からみると程順則は純粋な久米村人ではない。康熙 13 年、12 歳時若秀才となって康熙 15 年 14 歳の時に元服し、秀才に挙げられた。13 歳の時、父程泰祚は進貢の途中、海賊と戦って負傷しながらも国の使命を果たしたが、その後、ついに苦労に堪えず病没した。[1]母鐘氏は辛酸をなめながら程順則と程順性を扶養し、父の遺作を読ませるなどして教育も重視している。[2]程順則は幼い時久米村の儒者鄭弘良に師事して漢学の啓蒙を受けた。[3]鄭弘良に教わった程順則はかなり漢学の基礎を固めたと考えられる。さもなければ陳元輔に師事する際に師匠に「程子天資穎異、器宇深沉、與之言悉心領神會[4]」と高くほめられなかったであろう。天資が高い程順則は、良好の基礎と勤勉な学習態度によって陳元輔に好印象を与えた。さらに陳元輔に師事する時「極備隆禮[5]（礼数を極めて尽くす）」としている。一体どういう風に「極備隆禮」したのか、詩文の分析を通して説明することにする。

程順則は陳元輔に師事していた福州の留学について、『総理唐栄司程公伝』の中で「癸亥歳遊抵閩（中略）固受學于福州鴻儒陳元輔先生之門[6]」と述べている。『琉球の五偉人』の「教育と道徳をかためた程順則」のなかで陳元輔と程順則の交遊について「天和三年（一六八三）十一月、程順則が二十才のとき、中国に留学することを思い立ち、福州の有名な学者、陳元輔の門にはいって四年のあいだ学問にはげんだ。そして貞享四年（一六八七）五月に、学業をおえて帰国した（中略）元禄二年（一六八九）五月（中略）ふたたび福建省に渡航し、福建に三年間滞在して学問の研究に没頭し、元禄四年六月に帰国した」[7]と述べている。先達たちの論著に例外なく陳元輔と程順則の長く深い交遊が簡略に述べられている。程順則が聖人になる道に多く影響を加えた陳元輔と程順則との交遊はもっと明らかにする必要がある。程順則は 1683 年 11 月―1691 年 6 月の間、7 年ほど福州に滞在しており、陳元輔に師事し勉学に励んでいた。程順則の 20 代はほぼ福州で過ごして陳元輔と師弟でありながら知己である関係を固めた。陳元輔は軍幕期を終えて康熙 22 年の冬に遊歴に出て、同年 11 月に程順則は勤学として福州に来たが、二人はお互いに出会いの機会を逸していた。陳元輔はまだ遊歴の途中にいる時、康熙 23 年 3 月、程順則は朝京グループに組み込まれて北京に旅立っている。同年の冬、程順則は福州に戻ってきて、遊歴から戻った陳元輔と初めて出会った。康熙 26 年 6 月に帰国するまで勤学時期の程順則は陳元輔と二年八か月ぐらい交遊していた。程順則は帰国した二年後、康熙 28 年 11 月に存留通事として再び福州にやってきて、また陳元輔に従って学問に没頭しなら陳元輔と親しく交遊していた。康熙 30 年 6 月まで、渡唐役人としての滞留期間に程順則は陳元輔と実際に一年七か月ぐらい交流していた。勤学期と存留期合わせて二人は福州で四年三か月の間交遊していた。康熙 30 年に出版された『枕山楼詩集』のなかに程順則に関わる詩は 25 首あり、康熙 31 年に出版された『枕山楼文集』にもまた「秋日江樓懐程寵文」など五首がある。『中山詩文集』には程順則によって作ら

---

[1] 「程氏家譜（六世程泰祚）」（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料編第 1 巻 6 、那覇市役所、1980 年 10 月、544 頁）

[2] 陳元輔『程大母恭人伝』(『名護親方程順則資料集 1－人物・伝記編―』収録、名護市教育委員会、2005 年 3 月、121 頁）

[3] 鄭章観『総理唐栄司程公伝』(『名護親方程順則資料集 1－人物・伝記編―』収録、名護市教育委員会、 2005 年 3 月、116 頁）

[4]「程氏家譜（六世程泰祚）」（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料編第 1 巻 6 、那覇市役所、1980 年 10 月、556 頁）

[5] 同上

[6] 鄭章観『総理唐栄司程公伝』(『名護親方程順則資料集 1－人物・伝記編―』収録、名護市教育委員会、2005 年 3 月、117 頁）

[7] 眞境名安興『眞境名安興全集』第 4 巻、琉球新報社、1993 年 2 月、58 頁。

れた陳元輔に関わる詩が４首ある。師弟二人の詩は数多いことからも二人の親密さが窺える。程順則は一生のうち五回、中国に渡っている。第五目は、陳元輔がすでに逝去していたので二人が交流した記録はないが、第三回、第四回については二人の交流を示す記録がある。第三回目の時、陳元輔は程順則の『雪堂燕遊草』のために序文を作って帰る際に長い排律詩を送っている。第四回目には、陳元輔は程順則の『指南広義』、夭折した子搏萬の『焚余稿』のために序文を記している。程順則は、康熙 30 年、出資して『枕山楼詩集』を出版し、さらに康熙 37 年に程順則と同僚及び勤学の五名が共同出資して『枕山楼課児詩話』を出版している。後に江戸立ちの掌翰使として薩摩、江戸に渡った際に、陳元輔の著作を伝播させて陳元輔の名が日本に広がっている。程順則が編纂した『中山詩文集』のなかに陳元輔に関わる詩が 5 首ある。陳元輔と程順則の交流の概略を述べたうえで二人の往来した作品を通して、詩に吐露されている陳元輔と程順則が交流する際の細部をつかんで、二人の師弟であり知己でもある関係を見ていきたい。以下の詩は各自の詩集の中の順序に沿って並べている。

第一項　『枕山楼詩集、文集』中の作品を通して

【８８】
和程寵文壺川尋牛田休隠居韻
程寵文の壷川の牛田休の隠居を尋ぬ韻に和す

其一　　其の一
欲隠壺川便乞休　　壺川に隠れんと欲し便ち休を乞う
相親喜有水中鷗　　相い親しむ水中の鷗有るを喜ぶ
門開古洞桃花在　　門は古洞に開き　桃花在り
客到孤山鶴徑幽　　客孤山に到れば　鶴徑幽なり
緑野堂前棲鳳竹　　緑野堂前棲鳳の竹
青蓑江上釣魚舟　　青蓑江上　釣魚の舟
挂冠當日歸來後　　冠を挂け當日歸來の後
萬磴松聲一夜秋　　萬磴の松聲一夜の秋
【詩型】七言律詩
【押韻】平声尤韻

【通釈】
其の一
　壷川に隠居したいために休職を求めた。自然に親しんでおり、川の中洲に水鳥がいることを喜んでいる。隠逸者の家は古洞に向いて開き、周りに桃花が咲いている。隠者を訪ねた客は孤山にやって来る。途中、道が静かである。緑野堂の前には鳳尾竹が植えられている。青色の蓑を着ている隠者は、船に乗って江の上で釣りをしている。辞職して隠居した人は帰った後、隠者が歩く道では両側の松葉ずれの音が響き、秋の一夜の間に来たと感じさせた。

【分析】
　詩の題目から、陳元輔が程順則の「隠逸」詩に唱和するためにこの二首の詩を作ったことが分かる。

程順則は琉球にいる時、壺川で牛田休の隠居を探すことを記す詩を作った。この詩の原文がみられないので内容についてわからない。しかし、陳元輔の付和詩を通じて元の程順則の詩の内容を窺い知ることができる。

〈首聯〉

「欲隠壺川便乞休、相親喜有水中鷗」

「壺川」は地名である。「乞休」は程順則が辞職することを指す。福州柔遠駅では辞職することが不可能である。ここの「壺川」は琉球にある地名である。那覇には壺川という村がある。程順則は勤学を終えた後、琉球にいる間に「壺川尋牛田休隠居」という詩を作っている。程順則がこの詩を作った時、琉球で官職に就いていた。この句は程順則が壺川のあたりで隠遁したいから国王に休みを乞うたと言っている。

「相親」は自然に親しむことである。程順則は壺川に来て水鳥が棲んでいるのを見て喜んでいる。

杜甫の詩「江村」の中に「自来自去堂上燕、相親相近水中鷗[1]」という句がある。杜甫はこの詩において村でのんびりしている生活を描いて愉快な心情を表している。まさに程順則の壺川で隠遁してのんびりする生活を求める心情と一緒である。「相親喜有水中鷗」の典故はおそらく杜甫のその詩であろう。

〈頷聯〉

「門開古洞桃花開、客到孤山鶴徑幽」

「古洞」は、晋の時代、武陵の漁民はある日、山下の洞窟を通りすぎると桃源郷に入っている。その洞のことを指す。その洞は桃源郷の入り口である。入り口[2]の周りに桃の花が多く咲いている。「門開古洞」を用いて隠逸者の家が桃源郷のようなところに建てられたということを表している。

「孤山」は杭州西湖に浮かぶ島である。「鶴徑」は宋代の林逋が孤山で隠遁して梅を妻として鶴を息子として隠遁生活を送ることを指す。「林逋」は北宋初めの隠逸者であり、杭州錢塘の人である。若い時に父を失い、勉強に励み、栄誉や利益を求めず、貧困に動じなかった。長江下流域を遊歴した後、杭州に戻って西湖の孤山で庵を結び、二十年間、街に出ることはなかった。一生、仕官せず、梅を愛し、鶴を飼っていたため、「梅妻鶴子」と称された[3]。

頷聯では「古洞」、「孤山」、「鶴径」の典故を引用して、程順則はその牛田休の隠者の隠遁した場所を尋ねてきたということを述べている。

〈頸聯〉

「緑野堂前棲鳳竹、青蓑江上釣魚舟」

中唐の時代、宦官が権力を一手に握って皇帝が実権を失っていた。裴度は世を治める意がなくなって東都の集賢里で別荘を建てて「緑野堂」と称した。裴度は農夫の服を着て暇をつぶしたり、白楽天、劉禹錫とともに文章を書いたり、酒をのんだり徹夜で遊んで人世の事を問わなかったという。「緑野堂」はいわゆる隠逸者の住宅である。

「青蓑」は青い蓑である。唐代、柳宗元の詩「孤舟蓑笠翁，獨釣寒江雪」[4]で描いた画面に似てい

---

[1] 范允何編『杜甫詩選』、經緯書局、1954 年、83 頁。

[2] 晋太元中、武陵人捕漁為業。縁溪行、忘路之遠近。忽逢桃花林、挾岸数百步、中无雑樹、芳草鮮美、落英繽紛、漁人甚异之。复前行、欲窮其林。林尽水源、便得一山、山有小口、仿佛若有光。」陶淵明「桃花源記」(『陶淵明集』、上海商務印書館、1927 年 7 月、44 頁)

[3] 元・脱脱等撰『宋史』第 38 冊巻 457「隠逸上」、中華書局出版社 、1977 年 11 月、13432 頁。

[4] 柳宗元「江雪」、千山鳥飛絶，万徑人蹤滅。獨釣寒江雪，孤舟蓑笠翁 」(曹寅編『全唐詩』巻 352、中華書局出版社、1979 年 8 月、3948 頁)

る。青い蓑を羽織っている隠者は小舟に乗って江で魚を釣る。頚聯では程順則は辞職して隠遁生活を送ろうとすることを言っている。

〈尾聯〉

「挂冠當日歸來後、萬磴松聲一夜秋」

「掛冠」「歸來」は官職を辞めて隠遁することである。前漢末、王莽が摂政をしていた時、彼の息子王宇が諫めるが王莽に殺された。逢萌は友人と会う時、「三綱」[1]がもう消滅ししており、この不幸なことは他の人に波及(はきゅう)するかもしれないと言った。「掛冠」とは、すなわち衣冠を解いて東都の城門に掛け、一族を遼東に引っ越しさせたことを言う。詩の中の「挂冠」は単なる程順則が辞職したことを言っている。

「萬磴」は一萬級の石階段である。転じて隠者の歩く道である。「松聲」は道の両側の松の音である。松の摩擦で起こった音は秋の風が落葉を飛ばす音と似ているので、「一夜秋」はそのことを言っている。この句は程順則が辞職した後、帰る道の松は両側に立ってガサガサという音を立てて敬意を表しているようであるということを言いたいのである。

其二	其の二
誰能馬上告歸休	誰か能く馬上に歸休を告ぐ
羨爾忘機狎野鷗	爾を羨やむに忘機して野鷗を狎れるを
兩鬢曾因王事白	兩鬢曾て王事に因りて白し
數家俱傍丈人幽	數家俱に丈人に傍りて幽なり
門前初種陶潛柳	門前初めて種う陶潛の柳
溪口時搖范蠡舟	溪口時に搖(こ)らす范蠡の舟
結屋深林無歷日	屋を深林に結びて歷日無く
閒看花草記春秋	閒(しず)かに花草を看て春秋を記す

【詩型】七言律詩

【押韻】平声尤韻

【通釈】

誰か馬の上で辞職しようと告げる。君は俗世の事を忘れて超然としている。私はとても羨ましい。程君の両鬢は国王の仕事の為に白くなった。近くの人家はみんな程君の徳行の薫陶を受け、自ら礼を守っている。門前に初めて陶淵明の柳を植える。時には川に船を漕いで范蠡の遊びをする。家は奥深い静かな森に建っており人との付き合うのを断って時間も分からなくなった。ゆったりとして花草の栄枯によって年を知る

【分析】

〈首聯〉

「誰能馬上告歸休、羨爾忘機狎野鷗」

「馬上」は官僚が在職中であることを指す。孟郊は進士に合格した後著名な「春風得意馬蹄急、一日看尽長安花[2]」句を作った。それで「馬上」はさらに事業が順風満帆でとんとん拍子に出世していることを指す。「歸休」は官職を辞任して隠遁することを指す。この句で在任の時、最も華やかな時

[1] 三綱、君臣・父子・夫婦の道

[2]「登科後」唐・孟郊『孟東野詩集』巻 3（『景印文淵閣四庫全書』第 1078 冊収録、台灣商務印書館、1976 年 6 月、 332 頁）

期に決然と引退するこが誰もできるものではないと言っている。ちなみに、程順則は勤学を終えて帰国後、康熙 26 年 12 月―康熙 28 年 5 月の間、講解師を務めていた。

「忘機」は名利に淡泊で思案を用いないことである。この言葉はもともと「望機翁」を指す。『荘子・外篇・天地』にこのような故事が記録されている。孔子の学生である子貢は楚国から晋国に帰る時、漢陰という処である老人が畑で甕を持って行きつ戻りつして野菜に水をやっているのを見た。そして、子貢は老人に機械を利用して水を運んで野菜に水をやることが効率的にさらに良いと提案した。老人はちょっと顔に怒りが現れて子貢に「機械を利用すると機械の構造を分らないといけない、構造を分るために思案しないといけない、思案すると純粋な心を失い、純粋な心がないと精神が不安定になる、安定した精神がない人が宇宙の原理を理解できない。わしは機械を使うことを知らないわけじゃない、使いたくないだけだ」[1]と言った。

「狎野鷗」について孟浩然の詩の中に「邑有弦歌宰、翔鸞狎野鷗[2]」という句がある。孟浩然の原意は県の長官が礼楽で県の百姓を教化して太平の世の中に吉祥な鳥が飛び回ってゆったりと水鳥を馴らしているというものである。陳元輔はそのゆったりと水鳥を馴らす意を取っている。

この句で程順則は世の中の名や利益を忘れてカモメを馴らしゆったりとする生活に対して、陳元輔は羨ましいという思いを表している。

〈頷聯〉

「兩鬢層因王事白、數家俱傍丈人幽」

「兩鬢」は頭の両側の鬢髪を指す。「王事」は程順則が国王の命令を奉じて福州で勤学人、琉球国内での役職、存留通事を務めたなどのことを指す。この句は程順則が琉球国王の使命を尽くすために鬢髪も白くなったことを言っている。「丈人」は徳望が高い長老である。つまり、頷聯では程順則が国王に忠節を尽くし、職責を果たし、程氏門弟は徳望が高いということを言っている。

〈頸聯〉

「門前初種植陶潛柳、溪口時搖范蠡舟」

「陶潛柳」は陶淵明が家の前に五つの柳を植えたとのことを指す[3]。「范蠡舟」は范蠡が五湖に船の遊びをすることを指す（94 頁「元夕同程寵文盧若采留飲蔡紹斎江樓」に詳しい）。この句は陶淵明も范蠡も隠逸者の代表人物で程順則は彼らのように格調が高い生活を過ごすということを言っている。

〈尾聯〉

「結屋深林無歴日、閑看花草記春秋」

「結屋深林」は森林の奥で家を建てることである。「無歴日」は森林の奥に隠遁するから外の世界は何年なのか分からないとの意味である。「無歴日」について唐代の太上隠者に「山中無暦日、寒盡不知年[4]」という句がある。ここで陳元輔は太上隠者の詩句に触れて程順則の超然としている態度を表している。「閑看」はゆったりと見る。最後の句で若し歳月を知りたければただ時間がある時に花や草の栄枯によって判断できる。なんとゆったりとした生活で時間さも忘れて構わない、特に「閑看」は落ち着きはらっている趣旨をうまく表現できている。

【99】

夜宴程氏雪堂　　夜程氏の雪堂に宴す

---

[1] 王先謙注『莊子集解』巻 4、務印書館、1933 年 7 月、69 頁。

[2] 孟浩然『孟浩然詩』（王雲五、朱經農主編『學生國學叢書』、商務印書館、1948 年 7 月、69 頁）

[3] 禄欽立校注『陶淵明集』、中華書局出版社、1979 年 5 月、175 頁。

[4]『御定全唐詩』巻 784 収録（『景印文淵閣四庫全書』集部第 1430 冊、台灣商務印書館、1976 年 7 月、604 頁）

旅邸如年静　　旅邸　年静かなるが如し
秋風一雪堂　　秋風　一雪堂
星河高碧漢　　星河（せいか）　碧漢高く
楊柳帯青觴　　楊柳　青觴を帯ぶ
座上冰壺潔　　座上　冰壺潔（きよ）く
城頭玉漏長　　城頭　玉漏長し
葡萄香未散　　葡萄　香り未だ散せず
深喜飲西涼　　深く喜び　西涼を飲す
【詩型】五言律詩
【押韻】平声陽韻

【通釈】
題目：夜程氏雪堂で宴会をする
　客が住む宿舎はいつものように静かである。秋風に吹かれている雪堂で集まった。銀河は高い空に掛かり、柳の枝と青い酒杯がある。宴席に着している賓客はみんな純朴な人物である。鼓楼漏刻が表している時間はまだまだ早い。葡萄の香りまだ散ってない。また葡萄酒をいっぱい飲むことができて喜ばしい。
【分析】
　題目から見るとこの詩は夜程順則の雪堂で宴席を開いたことを記したものである。
〈首聯〉
「旅邸如年静、秋風一雪堂」
　「旅邸」は琉球館内（柔遠駅）の程順則の部屋である。程順則の部屋はいつものようにしずかである。ということは、程順則は静けさを好んで一途に学問を研究することを言いたい。「秋風」は秋に宴会を開くことを示している。
〈頷聯〉
「星河高碧漢、楊柳帯青觴」
「星河」は銀河のことである。「碧漢」は青い空である。「星河」と「碧漢」はその夜が清朗であることを表す。「楊柳」という言葉はよく「辺塞詩」や「送別詩」に使われる。楊柳の枝を離別する際に友人に贈る。「青觴」は青い杯である。柳の枝と酒は送別することを代表するものである。この宴は誰かの送別会であるかもしれない。
〈頸聯〉
「座上冰壺潔、城頭玉漏長」
　「冰壺」は「一片冰心在玉壺」の省略である。王昌齢の「芙蓉楼送辛漸」では「洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺[1]」という句がある。王昌齢は詩の中に自分が初心を忘れず、ずっと高い節操を持つことを表している。つまり、席に座っている賓客はみんな人柄が高く、純朴な人物であることを言っている。「玉漏」は玉で飾った水時計のことである。ここの漏刻はほんとに玉で飾るわけではない。玉漏は「漏刻」の美称である。「城頭」は城壁の上である。一般に城壁の上に「鐘鼓楼」を建てて城

[1]『御定全唐詩』巻 143 収録（『景印文淵閣四庫全書』集部第 1422 冊、台灣商務印書館、1976 年 7 月、318 頁）

内の百姓に時間を知らせ、警報を出すことに役に立つ。「漏刻長」はまだまだ時間があるということを言っている。
〈尾聯〉
「葡萄香未干、深喜飲西涼」
　葡萄は8月9月に収穫するのでこの葡萄の香りがまだ残っていることはまた秋の季節を示している。「西涼」は地名である涼州を指す[1]。唐、王翰の「涼州詞」に「葡萄美酒夜光杯、欲抱琵琶馬上催[2]」から「西涼」が転じて葡萄酒を指す。

【115】
題程寵文立雪堂　　程寵文の立雪堂に題す

海東道統接南來　　海東道統南に接して來たる
羨爾家聲雪裏開　　爾の家聲雪裏に開くを羨む
旅邸友人披氅至　　旅邸に友人氅（しょう）を披きて至り
深深三尺擁江隈　　深深たる三尺江隈（こうい）を擁く
【詩型】七言絶句
【押韻】平声灰韻

【通釈】
題目：程寵文の立雪堂に題する
　儒教教化を福建より琉球に伝来した。君の家の声望は雪に咲いている梅のように清らかで私はとても羨ましい。友人の私（陳元輔）はオーバーを着て程君の宿舎にやって来た。江辺では雪が三尺ほど積もっている。
【分析】
　題目から見るとこの詩は陳元輔が程順則の書斎で題した作品である。一般的に題詩は物事に引き起こした感想、或いはある人に寄せる希望などの内容を述べる。陳元輔はこの詩を程寵文の為に題した。書斎の壁に詩を書くもしくは書いた詩を表装して壁に掛けるのである。
　第一句目、「海東」は一般的に日本を指すのがこの詩では琉球を指す。「道統」は宋代の儒者がはじめて唱えたものである。この詩では中華文化、制度、儒家礼儀などを汎称する。「接南來」は琉球の中華文化、制度、礼儀が南にある福州を通して伝わって行ったことを言う。
　第二句目、「家聲」は家の名誉である。「雪里開」は梅花のことである。程順則の家の声望は梅のように清らか、高潔であると言っている。
　第三句目、「旅邸」は柔遠駅である。「氅」はオーバーのことである。「友人」は陳元輔のことでる。この句は陳元輔が厚いコートを着て程順則を訪ねて来たということを言っている。
　第四句目、「三尺」は「程門立雪」[3]の典故を指す。四句目は程門立雪の典故を踏まえて江辺の雪が三尺積もっていることを言っている。福建ではそれほどの大雪は降らない。ここでは陳元輔が天気が

[1]西涼、漢代、武帝の時、西涼州を置く。陝西省武威縣にある
[2]王翰 梁州詞、「葡萄美酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回。」（曹寅編『全唐詩』巻 156、中華書局出版社、1979 年 8 月、1605 頁）
[3]元・脱脱等撰『宋史・道學二』第 36 冊巻 428、中華書局出版社、1977 年 11 月、12738 頁。

いくら寒いにもかかわらず程順則を訪ねて来て、程順則が先生（陳元輔）に恭しく学問を聞いていることを言う。師匠として、陳元輔は責任を果たしてちゃんと程順則を教えて、弟子として、程順則は師匠を尊敬し、かつ勉学に励んでいることを表している。

「送程寵文歸中山」は康熙 30 年、間もなく程順則が存留通事の使命を果たして琉球に帰る前、陳元輔は一気に送別の詩 10 首を作って程順則に贈っている。それだけでなくまた同年の秋に「江樓秋日懐中山程寵文」の 5 首を作って詩に程順則に対する思いを託した。林潭はその 5 首の詩に詳しく注をつけている。この十首の詩と林潭の注が康熙 31 年に出版した『枕山楼文集』に収録されている。詩の数だけから見ても陳元輔は程順則と持った友誼の深さを伺える。陳元輔はどれほどの程順則との友情を実感できるように一首ずつ詳しく分析してみる。

送程寵文歸中山（十首）	**程寵文の中山に歸るを送る（十首）**
其一	其の一
迢迢驛路草含煙	迢迢（じょうじょう）たる驛路　草煙を含む
一曲驪歌唱可憐	一曲の驪歌唱すること憐れむべし
行仗虚懸雲霧裏	行仗虚しく懸（か）く雲霧の裏
使星高出斗牛邊	使星高く出ず斗牛の邊
門開五虎如飛棹	門は五虎に開き飛棹の如く
劍化雙龍欲上天	劍は雙龍に化して天に上らんと欲す
執手豈同兒女別	手を執（と）れば豈に兒女の別れと同じからん
莫言無涙落君前	言う莫れ涙の君の前に落つる無しと

【詩型】七言律詩
【押韻】平水先韻

【通釈】
題目：程寵文が中山に帰るのに贈る
　柔遠駅前の道は曲がりくねって前方に伸びている。朝の霧が漂って道のそばの草の中に見えつ隠れつしている。一曲の別れの歌を名残惜しく歌っている。霧の中に整えられた荷物が見えたり見えなかったりしている。使星は斗星、牛星の分野から離れていく。五虎門より海に入る船は飛ぶように速く離れる。手を互いに握ればこの離別はどうして婦女の別れと同じであることがあろうか。君の前に涙を出すなと言わないでくれ。
【分析】
其の一
〈首聯〉
　「迢迢驛路草含煙、一曲驪歌唱可憐」
　「迢迢」は道がはるか遠いさまである。「驛路」は柔遠駅付近の道を指す。「草含煙」は朝の薄い霧が草の間にまつわるさまである。この句で朝、出発前、友達ともうすぐ別れる時柔遠駅の物寂しい環境を描いた。

「驪歌」[1]は離別の歌である。ここでは友人に贈る贈別詩である。贈別詩で名残惜しい意を相手に伝えている。

〈頷聯〉

「行仗虚懸雲霧里、使星高出斗牛邊」

「行仗」は物、器具などである。「行仗虚懸雲霧里」は荷物が朝の霧の中に見えたり見えなかったりしている様である。おそらく帰国するので個人の荷物あるいは貨物などを柔遠駅から運び出して船へ搬入していると考えられる。陳元輔は朝柔遠駅に来る時、見ていたのだろう。つまり、程順則らは帰国する数日前、荷物を先に進貢船に搬入し、最後に人員たちが河口萬寿橋から船に乗って出航するとみられる。

「使星」は使者の称である。後漢の李部(こう)は使星が益州に移動する天象を通して朝廷が使者二人を派遣していることを知った[2]。ここの使星は程順則を指す。「斗牛」は北斗星と牽(けん)牛星を指す。『讀史方輿紀要・福建一』に「天文牛、斗分野[3]」によって詩の中の「斗牛」はすなわち福建を指す。まとめると、程順則はまもなく帰ることは先に天象に反映している。

〈頸聯〉

「門開五虎如飛棹、劍化雙龍欲上天」

「門開五虎」は閩江の河口部の五虎門である。「飛棹」は飛ぶように走っている船である。船が五虎門に向かって走っていることを言っている。

「雙龍」に関して『晋書・列伝第六』に龍泉、太阿という剣のことを記している。雷煥は豫章郡丰城で龍泉、太阿を見つけてその中の一つを張華に送った。張華はその剣を細かく見て龍泉、太阿は霊力を持つものなのでついに合体すると言っている。張華が殺された後、彼の剣が行方不明となった。雷煥がなくなって彼の子雷華は延平津を通過した時、身につけている剣が自ら河に飛び込んだ。人を遣わして河の中を探したが剣が見つからない。すると、二匹の龍がぐるぐる曲がりくねて体に紋章があるのが見えた。つまり別れている龍泉、太阿がついに合体した。[4]要するに、この典故を用いて、程順則、陳元輔が別れるがついに再会することがあるということを言っている。

〈尾聯〉

「執手豈同兒女別、莫言無涙落君前」

「執手」は手を携えるとの意味である。「執手」は相手と別れたくなくて残ってもらいたい気持ちを表す。「兒女別」は若い男女の別れを指す。陳元輔は程順則との別れが若い男女の別れと違って知己や君子間の別れである。いわゆる「君子之交淡若水[5]（君子間の交わりが水のように純粋)」、まさに陳元輔と程順則の交わりである。それで詩の中で「無涙落君前」と言っている。

其二　　其の二

---

[1] 驪歌、告別の歌、もと逸詩の篇名。『漢書・王式傳』「謂歌吹諸生曰：歌驪駒（注）服虔曰：逸詩篇名也，見大載禮客欲去歌之。文穎曰：其辭云，驪駒在門，僕夫具存。驪駒在路，僕夫整駕。」（班固『漢書』第 11 册卷 88、中華書局出版社、1986 年 10 月、3610 頁）

[2] 「二君發京師時、寧知朝廷遣二使耶、二人問、何以知之、部云、有二使星向益州分野故知之耳。」（范曄『後漢書・李部傳』第 10 册卷 82、中華書局出版社、1986 年 10 月、2718 頁）

[3] 顧祖禹『讀史方輿紀要』卷 95、中華書局出版社、1957 年 4 月、3963 頁。

[4] 房玄齡『晉書』第 4 册卷 36、中華書局出版社 、1974 年 11 月、1067 頁。

[5] 王先謙注『莊子集解・山木』巻 5、商務印書館、1933 年 7 月、16 頁。

江樓夜夜共論文　江樓夜夜共に文を論ず
何以逢君又別君　何を以て君に逢いて又君と別る
海外名山傳馬齒　海外名山馬齒を傳え
閩中孤劍老龍紋　閩中孤劍龍紋に老ゆ
汪倫情似桃花水　汪倫の情似る桃花の水
李白愁看紫暮雲　李白愁いて看る紫の暮雲
從此陽關三唱後　此より陽關三唱の後
天風亂剪鶴無歸　天風亂れ剪(た)ち鶴歸る無し
【詩型】七言律詩
【押韻】平水文韻

【通釈】
駅楼で常に夜に私と程君一緒に文章などについて討論する。なぜ程君と逢ったばかりなのに又、程君と別れるか？海外には馬歯山という名山があると聞いている。福建に在る僕は独りぼっちで衰えている。汪倫が李白を見送る友情は桃花潭より深いという故事がある。李白は友人を思う時憂いに夕方の雲を見る。これから陽関曲を三唱した後互いに別れる。風が乱れ吹いて鶴も帰って来ない。
【分析】
〈首聯〉
「江樓夜夜共論文、何以逢君又別君」
「江楼」は柔遠駅のことである。「夜夜」は毎晩との意味である。この句では陳元輔が常に夜遅くまで二人で詩文を切磋琢磨(せっさたくま)することを言っている。陳元輔、王登瀛、さらに彼らの友人は一晩や数日連続で柔遠駅に宿泊して琉球の文人に教えたり交流したりしていた。
「君」は程順則を指す。この句はなぜ君と会ってまた別れるのかという意味である。康熙 22 年 11 月―康熙 26 年 5 月の間に程順則は勤学として福州に留学して陳元輔に師事していた。康熙 28 年 11 月 2 日、程順則は存留通事として二回目に福州に行っている。存留が満期になって康熙 30 年 6 月 17 日に帰国するから陳元輔と別れないといけない。これが「逢君又別君」の言っていることである。
〈頷聯〉
「海外名山傳馬齒、閩中孤劍老龍紋」
「馬齒」は琉球の慶良間島である。慶良間諸島を用いて琉球国を指している。「閩中」は福建のことである。「孤劍老龍紋」は張華伝に記さている龍泉剣、太阿剣の典故を言っている。もともとの双剣が一つになっったように、陳元輔は自分をその剣一つに準えて再び程順則と会いたいという希望を言っている。
〈頸聯〉
「汪倫情似桃花水、李白愁看紫暮云」
「汪倫」という人物は、字は文渙(かん)、一に字は鳳林。歙(きゅう)州黟(い)県の人である。唐開元間、涇縣令に任じられる。清代『随園詩話』の記載によると、唐天寶年間、涇県の郷紳(きょうしん)汪倫が当時の大詩人李白が涇県で遊歴していることを聞いた。それで汪倫は李白に手紙で「先生好游乎、此地有十里桃花。先生好飲乎、此地有萬家酒店（先生は遊覧が好きですか、この場所には十里の桃花があります。先生は飲むのが好きですか、ここで一万家の酒店があります)」を書いて送った。李白は桃の花、酒を嗜むので喜んで招待に応じた。李白は着いた時、汪倫に「十里の桃の花はどこか、一万軒の酒屋はどこか」

と聞いた。汪倫はここでは十里の桃花潭があり、ここの酒屋の店主(てんしゅ)が萬という名字であると答えた。李白はこの話を聞いて大笑した。李白は帰る日に船に登る時、岸辺から歌声が伝わって来る。なるほど汪倫は村民と一緒に李白を送りに来た。李白をこの厚い情誼に感動して「贈汪倫」を即時に作った。[1]この句では汪倫が李白を送る典故を引いて陳元輔と程順則の友情の深さを表す。

「紫暮云」は紫の夕焼けである。李白[2]の送別詩から「紫云」という言葉を用いた。例えば「登黄山凌臺送族弟溧陽尉濟充泛舟赴華陰」[3]、「自代内贈」[4]などである。

〈尾聯〉

「從此陽關三唱後、天風亂剪鶴無歸」

「陽關」は曲調の名、渭城曲の別名である。唐代詩人王維の「送元二使西安」に「勧君更進一杯酒、西出陽關無故人[5]」との名句がある。「陽關曲」もまたこの詩に基づいて作られた。「陽關三唱」は王維の詩を三回歌うことであるが陳元輔が送別の歌を何回歌っても程順則を残してもらいたい気持ちを言い切れないことを表している。

「天風亂剪」は風が乱れ吹いている意味である。特に「剪」という字は風の無情を表している。風が乱れに吹いて鶴が帰れない。「鶴無歸」は陳元輔がいつまた程順則と会えるのか自分にもわからないという心境を表した。

其三	其の三
去年一榻下江城	去年一榻江城に下ろす
此日離亭送汝行	此の日亭を離れ汝の行くを送る
今古魂銷唯有別	今古魂を銷するは唯だ別れ有るのみ
西南風好浪無聲	西南風好く浪聲(こえ)無し
海邦歸去祇看日	海邦歸り去り祇だ日を看る
水驛由來不計程	水驛由來程を計らず
所信君恩與臣節	信じる所君恩と臣節なり
能令萬里片帆輕	能く萬里をして片帆輕くせしむ

【詩型】七言律詩

【押韻】平水庚韻

【通釈】

去年一緒に江城で遊んでいたが今日は離亭で君の帰るのを送る。昔でも現在でも離別はいつも人を悲しませる。西南風が穏やかで波が静かである。君は帰国する時太陽の方向に向かって行けば祖国に着ける。琉球国から中国までの海路がどれほど遠いか測れない。君主の恩徳と使者の忠節に頼んで万里の道程に天気が晴れ、波が静かにして順調に海を乗り越えることができるだろう。

---

[1]唐時汪倫者、涇川豪士也、聞李白將至、修書迎之、詭云：先生好游乎。此地有十里桃花。先生好飲乎。此地有萬家酒店。李欣然至。乃告云：桃花者、潭水名也、并無桃花。萬家者、店主人姓萬也、并無萬家酒店。李大笑。款留數日、贈名馬八匹、官錦十端、爾親送之。李白感其意、作「桃花潭」絶句一首。」（ 清・袁枚著、郭紹虞、羅根澤主編『隨園詩話』補遺卷六、人民文學出版社、1982 年、715 頁）

[2] 李白、唐、蜀の昌明の人。漢の將軍李廣の後裔が蜀に移り住んだ後という。字は太白。號は酒仙翁。青蓮鄉に生れ青蓮居士と號す。天才英特なれども縱横の術を好む。

[3]「鸞乃鳳之族、翺翔紫雲霓」（曹寅等撰『全唐詩』卷 177、中華書局出版社、1979 年 8 月、1811 頁）

[4]「曲度入紫云、啼無眼中人」（曹寅等撰『全唐詩』卷 184、中華書局出版社、1979 年 8 月、1884 頁）

[5]『御定全唐詩』卷 128（『景印文淵閣四庫全書』集部第 1424 冊、台灣商務印書館、1976 年 7、218 頁）

【分析】
〈首聯〉
「去年一榻下江城、今日離亭送汝行」
「江城」は閩江に臨んでいる福州を指す。「榻下」は椅子を下して賓客を迎える意味である。この句で陳元輔は去年一緒に福州で交流していたことを追憶する。「離亭」は古代、城外の道で建てらた亭である。古人は友人を送る時、離亭で別れる。去年、一緒に遊んでいたがあっという間に離別の時になった。この句では陳元輔は程順則との付き合う時間はまだ足りないと感嘆している
〈頷聯〉
「古今銷魂唯有別、西南風好浪無聲」
「古今」は昔でも今でもの意味である。「銷魂」は魂が肉体から離れることできわめて悲しいことの喩えである。昔でも今でもきわめて悲しいことは離別のみである。
「西南」は琉球に帰る時の順風である。「風好浪無聲」は程順則が帰る道は風が穏やかで波が静かであることを言う。陳元輔はこの句で程順則が順調に帰るように祈ることを表している。
〈頸聯〉
「海邦歸去只看日、水驛由來不計程」
「海邦」は琉球国を指す。「海邦歸去只看日」は琉球が東海に在るから帰る時、太陽の方向に向かえば着けるという意味である。
「水驛」は琉球から福州までの海路を指す。「不計程」は距離を測れないことである。この句は琉球から福州までの路程が遠くて測れないことを言っている。
〈尾聯〉
「所信君恩與臣節、能令萬里片帆輕」
「君恩」は皇帝や国王の恩恵を指す。「臣節」は臣下の皇帝や国王に対する忠誠である。最後に皇帝の恩恵、臣下の忠誠で天神の加護(かご)を得られて程順則がきっと安全に帰国できると言っている。明代でも清代でも琉球人は中国に行く為に常に命の代価を払う。それで陳元輔が再三順調に帰れるように詩の中で祈っている。

其四	其の四
杳渺蒼溟一望賒	杳渺たる蒼溟一望賒し
東歸全仗指南車	東歸するに全て指南車に仗(たよ)る
樽前難盡兩人話	樽前盡し難し兩人の話
天上虛浮五月槎	天上虛しく浮かぶ五月の槎
澤國榴開紅似錦	澤國榴(ざくろ)開き紅きこと錦(にしき)に似る
海門浪靜白如沙	海門浪靜かなり白きこと沙の如し
當年風送滕王閣	當年風送る滕王閣
咫尺知君已到家	咫尺(しせき)君已に家に到るを知る

【詩型】七言律詩
【押韻】平水麻韻

【通釈】
遥かで青々としている海は見通すことができない。帰国するのはすべて指南車に頼る。別れる前の

宴席上では話が尽きることない。窓の外、弦月は空に高くかかってまるで天河に泊まっている船ようである。五月、福建で石榴(ざくろ)の花が咲いている。連ねる赤い石榴花は錦みたい。五虎門の波が静かで湧き起きる波は白くてまるで砂のようである。昔、王勃が滕王閣で友人を見送りするために千古名篇を書いたことを思うかと、程君はすでに無事に家に帰った。

【分析】

〈首聯〉

「杳渺蒼溟一望賒、東歸全仗指南車」

「杳渺」ははるかに遠くてかすかな様である。「蒼溟」は青々とした海である。「一望賒」は眺めて遠いという意味である。

「東歸」は東にある琉球に帰ることを指す。「指南車」は方角を指し示す機械を設けた車である。車の上に木雕の人形を置き、其の手が常に南方を指さす様に作ったものである。

〈頷聯〉

「樽前難盡兩人話、天上虛浮五月槎」

「樽」は酒を入れる容器である。酒を飲みながら普段はいつも語りきれない話があるけれども今日は離別の酒を飲んで二人はなかなか語り尽きない。

「槎」は木材などを並べて水に浮かべるものである。転じて船のことを指す。空に五月の船が浮かんでいるということは、船みたいな弦月が空に浮かんでいることである。頷聯では夜に二人が送別の酒を飲んで逆になかなか話が尽きない、外では弦月が静かにかかっている場面を描いている。

〈頸聯〉

「澤國榴開紅似錦、海門浪靜白如沙」

「澤國」は水浸しになったところである。五月、福州では梅雨の時期であるから「澤國」という。また五月の福州では石榴の花が満開して、その様は赤い錦に似ている。「海門」は五虎門である。「白如沙」は波が白くて砂のようである。要するに現在の福州では梅雨の時期だけれども五虎門のあたりには波が静かである。無事に帰れると言いたい。

〈尾聯〉

「當年風送滕王閣、咫尺知君已到家」

「滕王閣」は江西省南昌にある。唐代永徽四年（653）太宗李世民の弟李元嬰によって建てられた。後高宗の時、洪州都督は滕王閣を建って直した後、滕王閣で宴会を開いていた。王勃はちょうど洪州を通過するのでこの宴会に参加した。その宴会で作った「秋日登洪府滕王閣餞別序」という駢文は千古の名篇になった。特に「落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色」という句は代表的な名句である。「咫尺」は時間的に短いことである。要するに陳元輔が王勃の「滕王閣序」を思うと程順則らはすでに無事に帰ったことを言っている。

其五	其の五
無數南船下急湍	無數の南船急湍を下(くだ)る
好乘溪漲出閩安	好く溪漲(ちょう)に乗りて閩安を出づ
飛帆斜捲千尋浪	飛帆斜(ほんなな)めに捲く千尋の浪
微雨陰添五月寒	微雨陰(かげ)に添う五月の寒
島嶼蒼茫天際落	島嶼(とうしょ)蒼茫として天際に落ち
魚龍出沒水中看	魚龍出沒(しゅつぼつ)し水中に看ゆ

我曾投筆過滄海　　我曾て筆を投(とう)じて滄海を過り
始識乾坤有大觀　　始めて識る乾坤(けんこん)に大觀有るを
【詩型】七言律詩
【押韻】平水寒韻

【通釈】
数えきれない南に行く船は激流に乗って瓊河の干潮を利用して急いで閩安鎮に行く。船は波を踏みながら進んでいる。小雨が降って空が曇って五月の空はひんやりとしている。島は天の果てにあるからはっきりみえない。魚は水中に出たり隠れたりしている。私は嘗て科挙を辞めて天下を周遊していた。初めて天下の大きさを感じて大自然の立派な眺めがあることを知るようになった。
【分析】
〈首聯〉
「無數南船下急湍、好乘溪漲出閩安」
「無數」は数え切れないほどの数である。「南船」は南に行く船である。「急湍」は川の流れの速い場所である。朝の瓊河のたくさんの船が引き潮を利用して急いで出航する繁忙な景色を描いた。
「溪漲」は潮の流れが速いことである。「閩安」は閩安鎮である。「閩安巡検司」の所在地である。閩安鎮は出入する船舶をチェックし搭載貨物の検査や乗組員の点検をする検問所と言える。琉球の進貢船は帰る際に閩安鎮ですべての手続きを完了してから琉球に帰ることができる。
〈頷聯〉
「飛帆斜捲千尋浪、微雨陰添五月寒」
「飛帆」は帆が風に吹かれて膨らんでいるさまである。船が強い風に乗って速く航行していることを表した。「斜捲」は船が逆風に向かって進む時、帆と船体が一定の角度となることを言う。
「微雨」はこぬか雨である。実際に陰陽歴の五月はまさしく梅雨時期で熱くないし寒くもなく。この「五月寒」は天気の寒さというより友人との別れによってその寒さを感じたのであろう。
〈頸聯〉
「島嶼蒼茫天際落、魚龍出沒水中看」
「島嶼」は琉球国を指す。この句は琉球国が天の果てに在ると言って琉球国の遠さを強調する。
「魚龍」は海にある各種の動物を指す。つまり、琉球に帰る時、いろいろ珍しい魚を見られる。琉球がいっそう辺鄙なところにあることを強調している。
〈尾聯〉
「我曾投筆過滄海、始識乾坤有大觀」
「投筆」は筆を投げ捨てること、転じて学問をやめる喩えである。陳元輔にとって学問をやめるわけではなく、科挙をやめることである。陳元輔は確かに康熙 15 年に寧海将軍の幕に入って康熙 21 年まで働いていた。「滄海」は北海にある仙人の住む島である。「過滄海」は転じて、陳元輔の歴遊の経験を指す。
「乾坤」は天下の間であり、転じて世界のことである。「大観」は雄大な眺めである。陳元輔は康熙 22 年の冬から福建、江西、湖北に歴遊した。この歴遊をきっかけに陳元輔は視野を広げた。

其六　　其の六
十載風霜獨爾知　　十載の風霜獨だ爾のみを知る

河梁分手使人悲　　河梁手を分(わか)ち人をして悲しましむ
郷關寂寞多魂夢　　郷關寂寞として魂夢(むゆめ)多く
天地淒涼有別離　　天地淒涼(さいりょう)として別離有り
樓上明月談劍夜　　樓上明月劍を談ずるの夜
海東日出到家時　　海東日出(にしゅつ)家に到る時
隴頭驛使如相問　　隴頭驛使如し相い問わば
好折梅花寄一枝　　好く梅花を折って一支を寄せん
【詩型】七言律詩
【押韻】平水支韻

【通釈】
私の十年間の境遇は君だけが分かる。しかし間もなく河梁で君と別れなければならない。これを思えば悲しまずにいられない。故郷と離れていることが当然悲しいことであるがこの世に最も悲しいのは友人との離別のことである。明月が出る夜に駅楼で自分の軍幕時期、戦争の話について語りあった。海の東、太陽が昇る時君も家に帰る時になる。琉球からの使者が若し僕と訪ねてきたら私は梅花を折って君に送ろう。
【分析】
〈首聯〉
「十載風霜獨爾知、河梁分手使人悲」
「十載」は十年のことである。「風霜」は年月の変遷のことを指す。経験したことを指すが主に困難なこと、苦しいことを指す。「十年風霜」は十年の間に経験した困難なことを指す。この十年間はどういう時の十年を指すのか？康熙十一年（1672）陳元輔は科挙に失敗して非常に落ち込んでいた。他の人との交流を断って一人家に居て出てこない。また康熙 12 年に三藩の乱が勃発してさらに陳元輔は自分の運命が浮草のように翻っているように思った。康熙 15 年（1676）陳元輔は従軍して康熙 21 年まで軍隊の仕事を務めた。康熙 11 年から康熙 21 年（1672－1682）まで十年間の時間を渡った。また福州では康熙 12 年三藩の乱が勃発し、朝廷は耿精忠に対する討伐、台湾鄭氏と朝廷の対抗などの戦争があった。康熙 23 年に台湾鄭氏を消滅するまで福建はずっと戦争の前線であった。この十年間は陳元輔にとって特別に印象深くて忘れられない時期である。十年間の苦しい思い出を程順則だけに告げることから二人の親しさが窺える。
「河梁」は送別の場所を指す。古人には「攜手上河梁、遊子暮何之[1]」との句がある。
〈頷聯〉
「郷關寂寞多魂夢、天地淒涼有別離」
「郷關寂寞」は故郷から離れて寂しいこと言う。「多魂夢」は故郷と離れて悲しくてよく夢の中で故郷を見ることを言う。「淒涼」は寂しくひっそりとしているさまである。天地の間、寂しくて悲しいことが別離のことである。
頸聯において陳元輔は郷愁と別離の情を用いて対比して、天地の間でみんなは「郷愁」が最も悲し

[1] 蕭統譔、李善注『文選』巻 29（『景印文淵閣四庫全書』第 1329 冊、台灣商務印書館、1976 年、509 頁）

いと言うが私は「別離の情」が最も悲しいであると思うことを表している

〈頸聯〉

「樓上明月談劍夜、海東日出到家時」

「談劍」は軍隊のことを話すことである。この句は明月がかかっている夜に駅楼で陳元輔が程順則に軍幕期のことを話したことを表している。軍幕期は辛い思いをしたが、陳元輔にとってまた誇りで栄光の時期である。

海の東に太陽が昇る時、程順則が琉球に帰る時であることを言う。頸聯において昨日夜にまだ一緒にいろいろと話し合ったが、夜が明ければ君は帰船に乗らなければならないということを表している。

〈尾聯〉

「隴頭驛使如相問、好折梅花寄一枝」

「隴頭」は隴山のほとりで辺塞を言っている。「隴頭驛使」は辺塞から来た使者である。琉球使者は陳元輔に何かを伝えたい時、陳元輔は梅花ひとつを程順則に送る。梅花は長寿、富裕、健康、よい徳などの意義を含んでいるため陳元輔が「梅花」を送って旅の安全とその先の幸福を祈る。

其七	其の七
奉使曾推洛下豪	使を奉じて曾て推む洛下の豪
兩年相對讀離騷	兩年相い對して離騷を讀む
情如潭水深千尺	情潭水の如く深さ千尺
髪散江關感二毛	髪江關に散じ二毛を感ず
絶島烟消星漢近	絶島の烟消ゆるに星漢に近く
好風帆挂海天高	好風に帆を挂け海天高し
他時憶汝連床話	他時汝と床を連ねて話(かた)るを憶う
為檢箱中舊綈袍(程子於予有解衣之雅)	為に檢す箱中の舊綈袍(ていほう)(程子予に衣を解くの雅有り)

【詩型】七言律詩

【押韻】平水豪韻

【通釈】

名門出身の程君は薦められて琉球の使者としてやってきた。私と二年間共に楚辞を勉強していた。私たちの友情は桃花潭のように深い。閩江邊に髪が風に乱れていつのまにか程君は三十歳になった。辺鄙な島で人煙も少ないけど銀河に近い。好い風に乗じて海天の間に漫遊する。衣裳箪笥を整える時、君が送った衣服を見つけて以前一緒に床を並べて親しく話しあった思い出を思い出した。

【分析】

〈首聯〉

「奉使曾推洛下豪、兩年相對讀離騷」

「洛下豪」は洛陽の名門である。洛陽は後漢、西晋の首都であった。特に、後漢末期、西晋の初期、洛陽の豪族は贅沢な生活を過ごすことを誇っていた。この句では使を奉じてやって来た程順則が久米村の名門の子弟であることを言っている。

「两年相對」とは陳元輔が程順則と二年間交流したことを指す。程順則は康熙 28 年 11 月初二日福

州に赴いて康熙 30 年 6 月 17 日帰国するまで福州で 19 か月滞在した。「離騒」は楚の屈原の作品であり、楚辞の代表作である。この句は程順則が陳元輔に従って『楚辞』について学んだことを言っている。

〈頷聯〉

「情如潭水深千尺、髪散江關感二毛」

「潭水」は桃花潭を指す。「深千尺」は李白の詩である「贈汪倫」に「桃花潭水深千尺」との句を踏まえたものである。（李白と汪倫の典故は「Ｐ102 送程寵文帰中山」其の二で参照）

柔遠駅が福州城の水関門外にあるためここの「江關」は柔遠駅を指す。「二毛」[1]は三十あまりの年齢を指す。程順則は二回目に福州に来た時 26 歳であり、帰国する時は 28 歳である。しかし、古人は数え年を使うから帰国する時、程順則は当時の数え方で 29 歳である。この句で陳元輔は程君が初対面の時、二十歳の若者だったがいつの間にか、まもなく三十歳になるという感嘆を述べている。もう一つの意味は、程順則は国のために謹んで責任を果たして 30 歳になっていないのに白髪が生えてきた。

〈頸聯〉

「絶島煙消星漢近、好風掛帆海天高」

「絶島」は海にある孤島である。琉球国は大陸と遠く離れていることから絶島は琉球国を指す。「煙消」は炊事（すいじ）の煙が消えるということで転じて人気がないという意味である。「星漢」は天の川である。この句は琉球国が辺鄙な処に在り、人が少なく銀河に近いということを言っている。陳元輔はただ琉球ことを中国から遠いことを強調して、程順則が王様の使命を尽くすためにいくら辛くても諦めないことを強調した。

「好風」は順風である「海天高」は波が静かで天気が晴れることを言う。この句は天程順則が道中無事に帰ることを祈っている。

〈尾聯〉

「他時憶汝連床話、為撿箱中舊綈袍」

「連床話」は同じベッドに座って話し合うことを指す。転じて二人の関係が非常に親しいことを表す。陳元輔の自注の「解衣」は意気に感じて、自分が着いている服を脱いで与え、自分の食べ物を恵（めぐ）むことで、人を大いに重んじて手厚く遇することである。現在においても仲の良い仲間に自分の服を贈ることがある。「解衣雅」は、陳元輔と程順則との関係が親しいもう一つの例である。

其八	其の八
牙籤猶插講堂東	牙籤猶ほ插すがごとし講堂の東
剪燭談經夜未終	燭を剪り經を談じ夜未だ終らず
吾道尚留三尺雪	吾道尚ほ留む三尺の雪
仙舟旋挂一帆風	仙舟旋り掛く一帆の風
漢邊萬里歸張翰	漢邊萬里張翰に歸す
帳裏頻年愧馬融	帳裏頻年馬融に愧ず

[1] 晋の潘岳の「秋興賦序」に「余春秋三十有二、始見二毛」（蕭統譔、李善注『文選』巻 13＜『景印文淵閣四庫全書』第 1329 冊収録、台灣商務印書館、1976 年、1329-223 頁＞）

日暖好看蜃吐氣　　日暖くして好く看る蜃氣を吐くを
空中棲鷗跨長虹　　空中の棲鷗長虹に跨(またが)る
【詩型】七言律詩
【押韻】平水東韻

【通釈】
書の題箋は講堂の東に置いたままであるのに、蝋燭の芯を切りながら経書を語り合って夜明けで語り合う。講堂前の道に厚く雪がまだ積もっているのに、程君は船の帆を揚げて帰ろうとする。程君は張翰ように故郷の食べ物が恋しいから、中国と万里と離れている琉球に帰るでしょう。師匠とする私は君に馬融のように教えられなくて恥ずかしいと思う。天気が晴れて温かくて蜃気楼が見える。一つの虹が高い空に横断している。カモメがこの虹の橋の傍を飛び過ぎる。
【分析】
〈首聯〉
「牙籤猶插講堂東、剪燭談經夜未終」
「牙籤」は象牙(ぞうげ)でできた図書の標題を書くための札である。この句は書籍が以前のまま講堂の東に置いてあることを言う。
「剪燭」は蝋燭の灯心の燃えた部分を切るとの意味である。「談經」は儒教経典を討論することである。この句は二人が夜の遅くまで儒家経典を討論することを表す。
〈頷聯〉
「吾道尚留三尺雪、仙舟旋挂一帆風」
「吾道」は陳元輔の家前の道である。「三尺雪」は「程門立雪」のことを指す。宋代の楊時は洛陽で程頤(い)を訪ねたところ、ちょうどうその時程頤(い)は居眠りしているところであり、楊時と游酢は先生を邪魔しないで恭しく門外で立って待っていた。程頤先生が気付いた時門外の積雪が一尺積もっている。「三尺雪」は学問を求めるために虚心に教えを請うことを指す。頷聯では陳元輔の家への道に雪が積もっているが常にやって来る程順則がもう帰らいといけないということを言っている。
〈頸聯〉
「漢邊萬里歸張翰、帳里頻年愧馬融」
「漢邊萬里」は琉球から中国まで萬里離れていることを指す。張翰は、晉代の呉郡の人で字は季鷹。文を能くし、江東の歩兵と號した。齊王冏に仕え、官は東曹掾となった。ある日、秋風に遭って呉中の鱸魚膾、菰菜を思い、遂に官を辭し駕を命じて歸った。[1]「張翰」を言っているが実は程順則が故郷を恋しく思っているため万里を惜しまず帰国することを言っている。
「馬融」は馬融帳のことを指す。後漢の馬融は字は季長で、後漢の大儒者である。涿郡の盧植、北海の鄭玄は馬融の弟子である。彼は生徒を教えるところで赤い紗の幕を下ろす。[2]転じて生徒を教えることを指す。この句で陳元輔は程順則師匠として知識不足で馬融に面目がないと思っている。これ

[1] 唐・房玄齡『晉書』巻 92、中華書局出版社、1974 年 11 月、2384 頁。
[2] 融才高博洽、為世通儒、教养諸生、常有千数。涿郡盧植、北海鄭玄、皆其徒也。（中略）常坐高堂、施絳紗帳、前授生徒、后列女楽、弟子以次相伝、鮮有入其室者。　（范曄『后漢書』巻 60 上〈馬融列伝上〉、中華書局出版社、1986 年 10 月）

は陳元輔がへりくだる表現である。
〈尾聯〉
「日暖好看蜃吐氣、空中棲鷗跨長虹」
「蜃吐氣」は蜃気楼である。密度の異なる大気の中で光が屈折し、地上や水上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見えたりする現象。古人は蜃が気を吐いて楼閣を描くと考えたことから蜃気楼と呼ばれる。「日暖」は太陽が温かく晴れている様である。
この句は空中のカモメが虹を飛び越える場面を描いた。この場面は程順則が清国の辺境を乗り越え、安全に琉球に帰ることを象徴すると考えられる。尾聯の「日暖」「蜃吐氣」「棲鷗」「長虹」を通して高遠の境地をうまく表現できた。

其九　　其の九
枕山詩草委泥沙　　枕山詩草泥沙に委(ゆだ)ぬ
獨檢焚餘授梨棗（程子捐眥為余刻詩）獨だ焚餘を檢し梨棗を授(さず)ける（程子眥を捐てて余の為に詩を刻む）
喜有蟄吟傳異日　　喜ぶは蟄(しつ)吟の異日に傳わる有り
愁將驪唱補新題　　愁うるは将に驪唱して新題を補わんとす
王通事業存房杜　　王通の事業房杜に存し
晉室風流寄阮籍　　晉室の風流阮籍に寄る
歸去東溟詞賦重　　東溟歸り去れば詞賦を重んじ
雪堂今好繼瀼西　　雪堂今好く瀼西を継がん
【七言律詩】
【平水皓韻】

【通釈】
（君がいなければ）『枕山楼詩集』は泥や沙にうずもれるままになっていただろう。君は私の拙劣な詩稿を校正して出版してくれる（程子は金を出して私の為に詩集を出版する）。私の平凡な詩作が後世に伝えられることは喜ばしいが、憂いのために君のために送別の詩を作ることだ。王通の弟子は房玄齢、杜如晦がいる。晋の時代、詩文気風を率いる人物として阮籍を挙げる。雪堂は杜甫の後継ぎになれるように、多くの詩書を琉球に持ち帰った。
【分析】
〈首聯〉
「枕山詩草委泥沙、獨檢焚餘授梨棗」
「枕山詩草」は陳元輔の作品詩集である『枕山楼詩集』を指す。「委泥沙」は土砂にゆだねることである。転じて、『枕山楼詩集』をただ枕元輔が収めて後世に伝わらなくなることを言う。
「焚餘」は取り分けて残した作品を指す。「梨棗」は古代、印刷の木版が梨、棗の木を使うから転じて出版することを指す。陳元輔の自注によると、程順則が資金を出して『枕山楼詩集』を出版したことがわかる。
〈頷聯〉

「喜有蟄吟傳異日、愁將驪歌補新題」

「蟄吟」は出世してない時の詩作である。「異日」は後日のことである。この句で陳元輔の作品を後世に伝わらせることができ、喜ばしいと言っている。

「驪歌」は別れる時の歌である。この句は離別の詩に新しい題をつけることを言う。前句は喜ばしいことを言い、本句は憂いのことを言う。この二つの句が対比することで著しく別れる悲しみを表している。

〈頚聯〉

「王通事業存房杜、晉室風流寄阮籍」

「王通」は隋の学者で、龍門の人で門人が文中子と謚した。房玄齢、杜如晦に道を授けた。「房杜」は唐の房玄齢と杜如晦である。二人は唐の名相。如晦は斷に長じ、玄齢は謀を善くした。故に後世、良宰相の意で用いられる。この句は隋の大学者である王通の弟子が唐の良宰相になったことを言う。

「風流」はこだわりやとらわれがなく、自由であかぬけているさまである。「阮籍」は三国の魏と晋交替の時代に生活している詩人である。政治紛乱の時代において、阮籍は酒を嗜み、荒唐な行為をして司馬氏と対抗していた。阮籍は詠懐詩に長けており、正始詩の代表詩人である。

〈尾聯〉

「歸去東溟詞賦重、雪堂今好瀼西」

「東溟」は東の海であり、琉球国を指す。「詞賦重」は、程順則が琉球に帰国時に多くの詩書典籍を持ち帰ったことを指す。

「瀼西」は四川省、奉節の瀼水の西岸である。唐の杜甫が夔州に居る時瀼水の西岸に住んだ。「瀼西寒望」に「瞿塘春慾至、定卜瀼西居」との句がある。この句で程順則がたくさんの書籍を持ち帰って学問を励み続けて杜甫の後継ぎになることを希望している。

其十	其の十
眾流歸海望無邊	眾流海に歸し望み邊無し
送爾登舟意惝然	爾の登舟するを送れば意惝然たり
黯淡一時帆上雨	暗淡たる一時　帆上の雨
光芒萬丈水中天	光芒萬丈水中の天
樓船金鼓臨風震	樓船金鼓風に臨みて震え
雲漢旌旗借日懸	雲漢旌旗日を借りて懸かる
獻雉簡書頻入覲	獻雉簡書　頻りに入覲し
重來知是舊張騫	重ねて來たるは知る是れ舊張騫

【詩型】七言律詩

【押韻】平水先韻

【通釈】

すべての江河は、ついに際限がない海に戻る。私はがっかりとして君を船に登るまで送る。突然、天が暗くなって雨が降り始めたが間もなくやんだ。光がきらきらとあたり一面に輝いて空の様子は海に映えている。楼船で金色の太鼓を敲いて、旗を揚げて出発の準備をする。琉球からの進貢船はしきり

に往来している。若し船が再び来たら、やって来た使者はきっと程君寵文だろう

【分析】

〈首聯〉

「衆流歸海望無邊、送爾登舟意惝然」

「衆流」は陸上のすべての江、河、渓を指す。この句は陸上のすべての川がついに海に戻らないといけないと言っている。言い換えれば程順則はついに海にある故郷に帰らないといけない。

「惝然」はがっかりしたさまである。この句は、陳元輔は程順則が船に乗ることを見てがっかりした心境を言っている。

〈頷聯〉

「黯淡一時帆上雨、光芒萬丈水中天」

「黯淡」は薄暗くて、はっきりしないさまである。この句は出発する時、雨がちょっと降っていたがしばらくした後、晴れて青空が川に影を映していることを言う。

〈頸聯〉

「樓船金鼓臨風震、雲漢旌旗借日懸」

「樓船」は二階建てのやぐらのある船である。「金鼓」はおそらく出発する前、琉球国の使者を見送るために、渡口で鼓を打っていた。この句で琉球の使者帰国の船に乗る前、岸で太鼓を打って簡単な儀式を行うことを言っている。

「雲漢旌旗」は船にかかっている旗が雲のように多いことを表す。「借日懸」は太陽に凭れて掛かることである。転じて旗が高くかかっているさまを言う。

〈尾聯〉

「獻雉簡書頻入覲、重來知是舊張騫」

「獻雉」は雉鶏を貢げることを言う。転じて、琉球国の朝貢を指す。「簡書」は命令などの公文書を指す。琉球国王は中国の皇帝の臣下であるから、ここでは琉球王から皇帝への表[1]を指す。「入覲」は皇帝に謁見することである。この句では琉球国が恭しく頻繁に進貢することを言う。

「張騫」は漢、漢中成固の人。武帝の時大月氏に派遣された。張騫の見聞は漢の西域經營に資する所大きく、彼自身も亦、漢のために活躍した。「舊張騫」は程順則を指す。この句は陳元輔が程順則が琉球国王の使者として改めて来ることを希望することを表す。

この十首中、たびたびの天気の変化、程順則らが出発前に柔遠駅から荷物を搬出していること、朝柔遠駅付近の物寂しい景色などが出てきている。当日の情況と合わせて詩を作っているとみられる。要するにこの十首の詩は一気に出来上がったものではなく、数日あるいは数十日かけてこの十首の詩を作ったものと思われる。陳元輔は詩の推敲を重視するので、詩が出来上がった後また細かく言葉遣いを磨いて最も適切な言葉を求める。それでこの十首の詩は程順則に送るまでさらに時間を費やして作ったと考えられる。十首の詩を作るのに陳元輔は真摯な友情を込めて長い時間をかけたのである。

[1]表、天子に奉る奏章。

次の五つの詩は康熙 30 年（1691）程順則が夏に琉球に帰った後、同年秋に陳元輔が柔遠駅で程寵文を追憶して作ったものである。この詩は『枕山楼文集』に収められている。林潭はこの五つの詩に詳しく注釈をつけている。康熙 17 年（1678）に陳元輔は林潭の『晩香園梅詩』に注釈をつけたことがあり、そのお返しとして林潭の注は陳元輔に報いるためのものであろう。

江樓秋日懐中山程寵文　　江楼の秋日中山の程寵文を懐う

其一	其の一
一自仙槎五月回	一に仙槎五月に回りて自り
青山聊復計重來	青山聊(いささ)か復た重來を計る
朝天有路終浮海	天に朝するに路有り終に海に浮ぶ
看菊何人共舉杯	菊を看て何人か共に杯を舉げん
水驛樓高雲氣散	水驛　樓高く雲氣散じ
西風潮落雁聲哀	西風　潮落ち雁聲哀し
舊年此地逢重九	舊年此の地重九に逢い
猶憶同君上釣臺	猶ほ同に君と釣臺に上るを憶う

【詩型】七言律詩
【押韻】平水灰韻

【通釈】
五月に程君は船に乗って帰った後、（私は）青山の中に程君がいつか戻ってくるかと推測しかできない。天子に謁見する任務を終えて終に帰国してしまう。その後、一緒に菊を見ながら酒を飲む人がもういない。水駅（柔遠駅）を囲む霧は徐々に吹き払われている。西風が吹いて潮が引き、雁が悲しく鳴いている。去年、ここで（柔遠駅）一緒に重陽節を過ごして、君と瓊河で釣りをしたことをまだはっきりと覚えている。
【分析】
〈首聯〉
「一自仙槎五月回、青山聊復計重來」
「仙槎」は程順則が乗った帰船が蓬萊仙島の方向に向って帰るから「仙槎」と呼ぶ。「五月回」は康熙三十年（1691）程順則が帰国することを言う。「聊復」はどうしょうもないため、こうするしかない気持ちである。「聊復計重來」は程順則がすでに帰ったため陳元輔ただ程順則にいつかに帰って来ることを計るしかできない。「聊復」の二文字は陳元輔の仕方ない心境を表している。
〈頷聯〉
「朝天有路終浮海、看菊何人共舉杯」
「朝天有路」は程順則が北京へ進貢に行くことを指す。「終浮海」は終に船に乗って琉球に帰ることを言っている。この句は程順則が進貢使節として福州に来て、使命を終えたら終に帰らざるを得ない、この秋にまた一緒に菊を鑑賞しながら酒を飲むことができないというような残念でたまらない心情を表している。「看菊」、「舉杯」より、おそらく詩を作っている時点は「重陽節」である。
〈頸聯〉
「水驛樓高雲氣散、西風潮落雁聲哀」
水驛は柔遠駅である。秋の風が柔遠駅の霧を拂って潮が落ちて雁の鳴き声が悲しい。陳元輔は程順則がいない柔遠駅で悲しくて見た景色がすべて蕭条である。
〈尾聯〉

「舊年此地逢重九、猶憶同君上釣臺」
「舊年」は去年である。「逢重九」は陳元輔が程順則と重陽節を過ごしていたことを言っている。「釣臺」は魚を釣るところであるつまり、陳元輔は去年（康熙 29 年）重陽節で、程順則と一緒に魚釣りをしている場面を追憶している。

其二	其の二
衰顔最畏動離憂	衰顔(すいがん)最も離憂を動かすを畏(おそ)る
不覺懷人復感秋	覚えず人を懐い復た秋を感ず
蛺蝶莫尋花下夢	蛺蝶花の下の夢を尋ぬること莫し
芙蓉偏向水邊愁	芙蓉偏に水邊に向いて愁う
詩題絶島深松寺	詩は絶島に題す深き松の寺
酒上平湖泛雨舟	酒を平湖に上げて雨に舟を泛ぶ
知爾故國行樂處	知らん爾故國の行樂の處
中原曾否憶同游	中原曾て同游を憶うや否や

【詩型】七言律詩
【押韻】平水尤韻

【通釈】
寂しくてやつれている人は最も離愁を引き起こすことを怖がっている。ここに来て友人への思いが起こり、また秋が来ることを感じた。蝶々は花蜜を取ることを辞めた。水辺のハスを私の目で見ればやつれてしょんぼりしているみたい。君（程順則）は琉球に居る時、松森の奥にある寺に詩を題したり、湖に船に乗って酒を飲み景色を鑑賞したりするだろう。今、君は故郷に戻ってきたから今は一家団欒を得て琉球の親友と楽しみ遊んでいるでしょう。しかし、中国でかつて一緒に遊んだ私をまだ覚えているか？
【分析】
〈首聯〉
「衰顔最畏動離憂、不覺懷人復感秋」
「衰顔」はやつれている顔である。陳元輔はこの年（康熙 31 年）約 37 歳で一生の半分を過ごして老いたと感じており、さらに友人と別れて寂しくて痩せた。それで、もう耐えられないからまた離愁を引き起こしたくない。しかし、もとより人を憶うことが悲しいことであり、さらに秋を悲しむ気持ちが湧いた。重ねていっそ悲しくなる。
〈頷聯〉
「蛺蝶莫尋花下夢、芙蓉偏向水邊愁」
蝶々が花蜜を取ることを辞めて、さらに水辺に一人ぼっちで咲いているハスを見してしまい、作者の秋の愁えを引き起こした。ハスの花期は 6 月―9 月なので 9 月のハスが寿命の末期である。飛ばない蝶々、衰えているハス、陳元輔の目で見た景色は凋落しており物寂しげである。陳元輔がいかいに悲しくなっているのかこの句から分かる。
〈頸聯〉
「詩題絶島深松寺、酒上平湖泛雨舟」
「絶島」は琉球を指す。この句において今琉球にいる程順則はどうやって重陽節の今日を過ごすか

陳元輔は想像している。程順則が琉球で松森の奥にある寺院に詩を題して、湖で国内の友人と一緒に船に乗って雨の景色を鑑賞しながら酒を飲んでいるだろうと述べている。

〈尾聯〉

「知爾故國行樂處、中原曾否憶同游」

頚聯では程順則が楽しく遊んでいる場面を描いて尾聯では陳元輔は程君が帰国して国の友と団楽しているなかで、中国にある友人をまだ覚えているのかと言っている。頚聯と尾聯を、鮮やかに対比させて、一層陳元輔の程順則への名残惜しさを感じさせている。

頚聯と尾聯は表面的に程順則が無情な人であり、私は君を思っているが君が逆に楽しみ遊んで中国にある私を忘れているでしょうと言っている。実はそうではない。陳元輔と程順則との友情から見たら、程順則も陳元輔と同じように離愁を引き起こすことを怖がってわざと楽しいそぶりにしている。陳元輔はこんなことを表したい。筆者はこう理解している。

其三	其の三
不緣別後起傷悲	別後悲傷を起るに縁らず
古道寥寥動我思	古道寥寥として我の思いを動かす
湖海一帆終日挂	湖海の一帆終日に挂け
風霜雙鬢幾人知	風霜の雙鬢を幾人か知らん
帶煙黃菊猶含蕊	煙を帶ぶ黄菊猶ほ蕊を含み
承露青松自長枝	露を承(う)く青松自ら枝を長ず
卻怪尋秋騎馬客	卻って怪しむ秋を尋ぬ騎馬の客
衡門未見問棲遲	衡門を未だ見えず棲遲を問うを

【詩型】七言律詩

【押韻】平水灰韻

【通釈】

君と別れたから悲しい心情を起こしたわけではない。柔遠駅に来て、道の両側に蕭条たる景色を見たからである。閩江と海に往来する船は常にある。私の頭が白髪だらけなのを誰が知っているか。霧に囲まれている菊は蕊（しべ）を含む。露を浴びる松はどんどん成長している。騎馬の人はみんな秋の景色ばかりを探すが、隠逸者を訪ねて来る人が少ない。

【分析】

〈首聯〉

「不緣別後起傷悲、古道廖廖動我思」

「古道寥寥」は柔遠駅にあたる道で極めて少ないという意味である。何が少ないかというと、植物や行人が少ないのである。しかし『琉館筆談』によると、実際に柔遠駅のあたりには賑やかな町があった。その「寥寥」はむしろ陳元輔が自身の心境を言っているであろう。別れたため悲しみを起こすわけではなく、柔遠駅の道でむなしく物寂しい景色が君への思いを起こした。陳元輔はずっとこんな退廃した状態でいたくない、しかし、柔遠駅に来て程順則と交流した光景が浮かび上がって悲しまざるを得ない。

〈頷聯〉

「湖海一帆終日挂、風霜雙鬢幾人知」

「湖海一帆終日挂」は閩江にいつも海外と往来する船が見えることを言っている。かえって考えれば、別れることは常にあることであるため、ほんとにそんなに悲しむ必要がない。しかし、私はいつの間にか鬢髪がもう白髪だらけになっている。歳月は止まらずに流れている。運命が私に与えた時間が少なくなった。程君とまた会えるか？これは頷聯で陳元輔はもっとも言いたいことである。

〈頸聯〉

「帶煙黃菊猶含蕊、承露青松自長枝」

　靄に囲まれている菊（帶煙黃菊）はまだ蕊を含んでいる。これは操守が固い喩えである。つまり、私は君に対する情誼が固くて移らない。露を受ける松（承露青松）はみずから成長している。これは厚く養われる喩えである。つまり、程順則は師匠の教育を受けてもう学問を出来上がって一人前になったことを言う。

　〈尾聯〉

「卻怪尋秋騎馬客、衡門未見問棲遲」

「衡門」「棲遲」は『詩経・陳風・衡門』の「衡門之下、可以棲遲[1]」から取ったものである。木材を積み重ねて建てた粗末な部屋にも住めることで隠逸者の住む処を指す。騎馬の人は秋の風景を訪ねて来て隠者部屋を問わない。なぜなのか、隠者（陳元輔）の知己（程順則）はいないから、隠者の家への道を訪れる人がいない。

其四	其の四
山壇隱隱杏花香	山壇隱隱たる杏花の香り
問字偏能過艸堂	字を問わば偏に能く艸堂を過る
紅映帳中霜弄影	紅　帳中に映え霜影を弄し
白添門外雪生光	白 門外に添え雪光生ず
臨行書卷還相質	行くに臨みて書卷を還た相い質(ただ)し
回首江樓更斷腸	江樓回首し更に斷腸す
記得依依分手後	記し得たり依依として手を分ちし後
至今明月照河梁	今に至るも明月河梁を照らす

【詩型】七言律詩

【押韻】平水唐韻

【通釈】

　山壇は杏花が満開している森にみえかくれしている。その場所で名師は壇を開いて講学している。しかし、君は僕の草堂を過って学問を聞いている。霜が降りる日赤い帷帳の中で君は恭しく私に学問を聞いており、その間に室外の雪が三尺積もっておりつやつやとしている。こういうような光景を私はまだ覚えている。君は出発前、また書巻の中の質問を聞いている。柔遠駅を振り返るとさらに悲しくなる。君と別れた後、月はいつも通りに君を見送った橋を照らしている。

【分析】

〈首聯〉

「山壇隱隱杏花香、問字偏能過草堂」

[1]清・方玉潤撰『詩経原始』、中華書局、1986 年 2 月、283 頁。

「山壇」は山に置かれた講壇である。かつて孔子は淄帷の森で遊んで休憩する時、杏壇に座って琴を弾いて、弟子が壇の下で書をよんでいたという[1]。杏壇は後に講学する場所を指す。なので「山壇」「杏花」は講学する場所を指す。しかし、壇を開いて講学するのは誰もできるわけではない。「問字」は学問を問う。「山壇」に対比すると「草堂」は粗末な部屋で陳元輔が一般的な師匠であることを表す。この聯は程順則が勉強するために有名な、本当に知識がある師匠に師事していないが、知識が薄い私にわざと学問を学んでいることを表す。一方、陳元輔は謙遜する意味を含む。

〈頷聯〉

「紅映帳中霜弄影、白添門外雪生光」

「紅映帳」「門外雪」は「馬融帳」と「程門立雪」の典故を指す。これらの典故を数回説明したためここで重複しない。つまり、頷聯で程順則が恭しく師匠に従って学んでおり、師匠もできる限り程順則を教えていることを言う。

〈頸聯〉

「臨行書卷還相質、回首江樓更斷腸」

「臨行」、「相質」は程順則が帰国の出発直前でも、また、陳元輔に知らない処を聞いており、程順則が勉強に励んでいることを言う。「斷腸」は程順則の陳元輔に対する情誼の厚さを体現している。

〈尾聯〉

「記得依依分手後、至今明月照河梁」

「依依」は木の枝がなよやかに風になびくさまである。まるで人が手を振って友人を留めるようであることを言っている。「河梁」は漢の人が著した「與蘇武三首」に「携手上河梁、游子暮何之[2]」との句からでたものである。後に「河梁」は送別の処を指す。秋の明月は「河梁」を照らしているが、しかし一緒に明月を見る人が帰ってしまい、いっそう悲しくなる思いを言っている。

其五	其の五
兩地星霜一曲琴	兩地の星霜一曲の琴
相攜對酒獨何心	相い攜え對酒し獨だ何れの心
共看天漢秋雲淡	共に天漢の秋雲淡きを看る
曾見笙歌夜月沉	曾て笙歌の夜に月の沉むを見る
岸葦瀟瀟飛白鷺	岸葦瀟瀟として飛ぶ白鷺
江楓漠漠起寒帖	江楓漠漠として寒帖を起こす
自從立雪堂前別	立雪堂前に別れてより
不敢開門直到今	敢えて門を開かずして直だ今に到る

【詩型】七言律詩

【押韻】平水侵韻

【通釈】

私と君は別々に違う処に居り、お互いに一曲を弾いて思いを託することと、二人で酒を対飲することに違いがあるのか。昔、我々は一緒に空の雲を見て、またずっと月が沈むまで楽器を奏でて歌って

[1] 『莊子・漁父』「孔子游于緇帷之林，休坐乎杏壇之上。弟子讀書，孔子弦歌鼓琴。」（清・王先謙撰『莊子集解』中、華書局出版社、1954 年、273 頁）

[2] 前掲蕭統譔、李善注『文選』、509 頁。

いた。石の隣に葦が風になびいて白鷺が飛んでいる。水邊の楓が一人ぼっちで私は手紙を書いて君に送ろうとする。君の雪堂の前に別れた後、今までも外に出たくない。いろいろな処でいままでの記憶を思い出させられるから外にでる勇気がない。

【分析】

〈首聯〉

「兩地星霜一曲琴、相攜對酒獨何心」

「兩地星霜」は琉球と福州の星霜で陳元輔は程順則と別れていることを言う。前半句では、陳元輔は程順則と別れて陳元輔が一人で琴を弾いて友情の思いを託していることを言う。「獨何心」は「兩地星霜」と「相攜對酒」は何か違いがあるのか、いえ区別がないとのことを表す。陳元輔はこういうふうに言っているけれども自らを慰めているだけである。

〈頷聯〉

「共看天漢秋雲淡、曾見笙歌夜月沉」

「天漢」は銀河である。「笙歌」は楽器を奏でて歌うことである。頷聯は陳元輔が程順則と共に夏の銀河と秋の雲を見て、また夜明けまで楽しく遊んでいたことを言う。「共看」「曾見」は二人の関係が親密であることをうかがえる。しかし以上の事は現在すべて過去の記憶になった。

〈頸聯〉

「岓葦蕭蕭飛白鷺、江楓漠漠起寒帖」

「岓葦」は石の隣の葦である。「蕭蕭」は風の「蕭蕭」とする音である。「漠漠」は雲や霧に覆われてぼうッとしているさまである。「寒帖」[1]は友人に送った手紙である。陳元輔は風になびく葦、白鷺、楓などことを見て程順則に手紙を書き始めた。

〈尾聯〉

「自從立雪堂前別、不敢開門直到今」

尾聯では陳元輔は程順則を見送った後、門を閉ざし、今までも他の人との交流を絶ったと言っている。最後の句では、陳元輔は程順則に対する情誼がその程度に至っていることを述べている。今世の知己は程順則を除いて他に誰がいるのか。また、外出する時、以前のいろいろなことを思い出せるために外に出る勇気がない。

第二項　『中山詩文集』中の作品を通して

『中山詩文集』の中に陳元輔、程順則のお互いに往来の詩は「雪堂贈言」、「留別陳昌其夫子」、「寄懐陳昌其夫子」、「都門秋日寄懐閩中竺天植陳昌其兩夫子」、「戊寅元夕陳昌其夫子設鐸雪堂紀喜」である。「雪堂贈言」以外、他の詩は程順則の作品である。要するに本段落において主に程順則の詩作を通して師匠陳元輔に対する敬愛と友情の実際を描いてみる。

雪堂贈言	**雪堂に言を贈る**
清時聲教邊八荒、	清時の聲教八荒に遍く
何以中山峰獨紫。	何を以て中山の峰獨り紫ならんや
挺生程子擅才華、	挺生の程子才華を擅にし
海外文風賴以起。	海外の文風賴り以て起こる
憶昔遊學抵閩中、	憶うに昔遊學して閩中に抵(いた)る

[1] 本論稿の 56 頁の「訂九日同林二恥登石鼓不果」を参照されたい。

繙盡典墳勤自矢。	典墳を翻(ひるがえ)し盡し勤を自らの矢とす
鵝湖鹿洞時探討、	鵝湖鹿洞に時に探討し
栗里草堂讀繼晷。	栗里の草堂に讀みて晷を繼ぐ
黄初大歴之風微、	黄初大歴の風微(すすか)に
江河日下何底止。	江河日に下り何れの底に止まらんや
尖新浮薄競爭雄、	尖新浮薄雄を競爭し
流入元人詞曲裏。	元人詞曲の裏に流入す
唯君一柱砥狂瀾、	唯だ君一柱狂瀾に砥たり
不失三百篇大旨。	三百篇の大旨失わず
春王正月義凜然、	春王正月の義凜然たりて
萬里浮槎來獻雉。	萬里より槎を浮かべ来たりて雉を獻ず
去年尺疏達楓宸、	去年　尺疏楓宸に達し
一路縱觀山水美。	一路　山水の美を縱觀す
風景收盡入奚囊、	風景を收め盡し奚囊に入る
客中遊草詩中史。	客中の遊草詩中の史なり
瓊河兩度開青氈、	瓊河兩度青氈を開き
鄴架曹倉吾與爾。	鄴架　曹倉　吾と爾
冬裘夏葛稱體裁、	冬裘　夏葛　體を稱して裁ち
春花秋月隨杖履。	春花　秋月　杖に隨って履く
古來壇坫重師生、	古來　壇坫　師生を重ん
詎意悠悠薄如紙。	詎んぞ意わん　悠悠として薄きこと紙の如しと
我彈中郎焦尾琴、	我中郎の焦尾琴を彈き
流水高山皆變徵。	流水高山　皆な徵　變わる
老夫雙眼閲人多、	老夫雙眼人を閲すこと多く
舍君何處尋知己。	君を舍つれば何の處にか知己を尋ねんや
風信無情客速行、	風信無情にして　客速く行く
又捧璽書歸去矣。	又璽書を捧げて歸り去る
幾點雲飛五虎門、	幾點の雲　五虎門に飛ぶ
數行淚落臺江水。	數行の淚臺江水に落つ
燕知別恨語無聲、	燕　別恨を知り語るも無聲なり
猿解離愁啼入耳。	猿　離愁を解き啼きて耳に入る
最恨舟師鐵作腸、	最も舟師の鐵を腸と作すを恨む
一帆高挂忙東指。	一帆高く挂け忙く東を指す
遙遙濱渤島煙深、	遙遙たる濱渤島の煙深く
所謂伊人在中沚。	所謂伊人中沚に在る
君返雪堂若有思、	君雪堂に返りて若し思い有らば
釣魚臺下浮雙鯉。	釣魚臺下に雙鯉浮かべよ

【詩型】七言排律

【押韻】平水紙韻

【通釈】

太平隆盛の世に天子の教えは八荒の果てまで届く。どうして中山国の峰だけ眼立つのか。優秀な程氏寵文は才能に優れる。海外の文風が彼を頼りにして起きる。昔、程子は遊学のために福州にきて、古い典籍を博覧し勤勉を自分の誓とした。鵝湖、鹿洞の学問を常に学者に問い、書斎でよく夜明けまで勉強し続けた。黄初、大歴というような詩が衰微しつつあり、川水のように毎日下っており、どこまで止まるのか。尖新、浮薄な詩は競争しており、元人の曲に繁栄していた。ただ、君は一人の力で「黄初、大歴」の詩風を継承して『詩経』の教えを失わなかった。正月に北京より帰って堂々としている姿が人を恭しくさせる。万里外の琉球から船に乗って進貢しに来る。去年、上奏文を捧げて紫禁城に入って陸程の中に十分に山水や名所旧跡を見た。今は見た風景を詩で記して詩集となった。旅の中で出来上がったものは詩史といえよう。柔遠駅で私（陳元輔）に二回師事していた。蔵書楼で、僕と君は典籍を探していた。夏、冬には、一緒に仕立て屋で体を測って服を作った。春、秋には美しい処に一緒に歩いて行く。古代から文壇では師匠関係を重視しているのに、君が風に飛ばされた一葉の薄い紙ように僕と別れるとは思わなかった。私は中郎の焦尾琴を弾いて「高山流水」の曲を悲しい調べで奏でる。私はたくさんの人とであったが君以外の知己はもうさがせない。無情の順風は君の出発を促し、君は聖旨を捧げて帰らないといけない。幾つかの雲が五虎門へ飛んでいき、私は台江の岸辺で涙を落とすしかない。燕も別離の情を理解するため鳴かない。猿は離別の怨みが分かるため悲しく鳴いている。最も恨んでいるのは無情の船夫は別離の気持ちを理解せず、急いで帆を懸けて出発を促すことである。遥かに遠い島は霧に隠れている。君はそこにいることを知っているのに会いに行けない。君もし琉球に帰っても私のことを思っていたら、閩江のほとりの釣魚台下に一人寂しくしている私に手紙を送ってくれ。

【分析】

「清時聲教遍八荒，何以中山峰獨紫」

「清時」は太平隆盛の世である。「聲教」は天子の教えである。「八荒」は八の方向の荒服である。荒服は王畿を中心に 500 里ごとに甸服、侯服、賓服、要服、荒服という地域を分けている。「荒服」は王畿より極めて遠いところである。琉球はまさに荒服にあたる地域にある。「中山峰」は中山の素晴らしい人物の喩えである。「紫」は紫で眼立つという意を取る。つまり、皇帝の教化は極めて遠いところに届けるが琉球が周辺の属国の中で抜群な存在であると言っている。

「挺生程子擅才華、海外文風賴以起」

「挺生」は抜群な人材を意味する。この句で程氏寵文が抜群な才能を持っているからこそ、海外の文風も中華のように繁栄し始めたと言っている。すごく、程寵文を褒め称えている。

「憶昔遊學抵閩中、繙盡典墳勤自矢」

「遊學抵閩中」は康熙 22 年に程順則が読書習礼のために福州に来たことを指す。「典墳」は「三墳五典」の略称で古い典籍を言う。中国の上古時期、伏羲、神農、皇帝の書を三墳といい、少昊、顓頊、高辛、唐、虞の書を五典と称している。つまり、古い典籍を言う。この句で程寵文は福州に来て勤勉を自分の誓として典籍をむさぼるように読んだことを言っている。

「鵝湖鹿洞時探討、栗里草堂讀繼晷」

「鵝湖」は中国が中国江西省にある鵝湖山書院である。そこで中国の歴史上の「鵝湖の会」[1]があった。「白鹿」は江西省の廬山にある「白鹿洞書院」である。「鵝湖鹿洞」は書院を言い、おそらく程寵文が福州にある書院の先生に学問を聞いたことがあったのだろう。「栗里」は廬山温泉の北から一里にある処で陶淵明がそこで隠遁した。詩の中で、程順則の書斎は環境がいい処にあることを言う。この句で程寵文が常に福州にある学問者にいろいろなことを問いて書斎で夜明けまで勉強していたことを言う。程寵文はもともと勤勉な人で、さらに落ち着いて勉強できる期間はただ二年間だけである。程寵文が徹夜で勉強したというのも大袈裟ではない。

「黄初大歴之風微、江河日下何底止」

「黄初大歴」は魏の「黄初」[2]、唐の「大歴[3]」年間の詩を指す。黄初は魏文帝曹丕の年号で前後七年間、続いている。黄初詩は建安詩の継続と思われているが悲凉、雄大な詩風を追求する。大暦年間は盛唐の詩が中唐の詩に変遷する時期である。この時の詩は盛唐の闊達、向上の風格から中唐の寂寞、淡泊高雅の趣旨を追求するようになっていく。「江河日下」は川の水が毎日下流に下ることで形勢や状況が日増しに悪化することを言っている。この句で「黄初大歴」のような詩風は衰微して日増しに悪化して、この風潮がどこで止まるのかと感嘆している。

「尖新浮薄競爭雄、流入元人詞曲里」

「尖新」は新芽が若々しいさまである。詩の内容が新鮮で実に幼いことを言う。「浮薄」は浮わついていてしっかりしない様である。詩の内容は空っぽ、実質がないことを言っている。つまり、「尖新浮薄」のような詩風が逆に世の中に流行っていて元曲にそのような詩文がたくさんあると言う。この句から陳元輔は元曲に対して高い評価を持っていないことが分かる。

「唯君一柱砥狂瀾、不失三百篇大旨」

「一柱砥狂瀾」は一人の力で困難に耐えて大局を支えることを言う。「三百篇」は孔子によってもともと三千首ある古い歌を刪削して三百篇を選んで『詩経』となったことを言う。この句で程寵文が一人で古風を守って「詩経」の神髄を受け継いで詩文で実践していることを言う。

「春王正月義凜然，萬里浮槎來獻雉」

「春王正月」は正月を指す。「凜然」は厳然としているさまである。康熙 37 年、程寵文は進貢任務を終えて福州に正月ぐらいに戻った時、光栄な使命を尽くして堂々とする様子を見て人々は尊敬せざるを得ない。「獻雉」は野雞を貢ぐことで進貢を言う。

「去年尺疏達楓宸、一路縱觀山水美」

「尺疏」は皇帝への上奏文書を言う。「楓宸」は紫禁城を言う。この句で康熙 36 年、程寵文が北京に進貢に行って、福建、浙江、江蘇、山東、河北を経て道程の風景を詩となって『雪堂燕遊草』ができたことを言っている。

「風景收盡入奚囊、客中遊草詩中史」

---

[1] 南宋淳熙二年（1175）六月、呂祖謙は朱熹と陸九淵の「心学」についての相違を調和するために陸舊淵、陸九齡兄弟を誘て「鵝湖書院」で弁論会を行った。この弁論会が三日間続いたが結局、両側の意見を統一できなかった。『宋史』巻 434 列傳第 193 を参照されたい

[2] 「以時而論，則有，建安體，黄初體（注）魏年號，與建安相接」 （厳羽著、郭紹虞校釋『滄浪詩話校釋』、人民文学出版社、1983 年 1 月、52 頁）

[3] 「以時而論則有（中略）大歴（注）大歴十才子之詩」 （厳羽著、郭紹虞校釋『滄浪詩話校釋』、人民文学出版社、1983 年 1 月、53 頁）

程寵文は北京への陸程を含み福州、北京での活動、風景を記した詩を集めて『雪堂燕游草』となったことを言う。程順則は進貢道程中の風景、名所旧跡、それぞれの見聞を記すだけでなく、道中の文人士大夫との交流を記録している。それらから史料的な価値が見えてくる。それで「客中遊草詩中史」と言っている。

瓊河兩度開青氈、鄴架曹倉吾與爾」

「兩度開青氈」は程寵文が二回、陳元輔に師事したことを言う。「鄴架」[1]は鄴侯李泌の家は書籍が多くて本棚の軸が三万本あると言われた。後に蔵書する処を言う。「曹倉」は曹曾[2]の家の蔵書する倉庫を言う。つまり、蔵書室で陳元輔と程順則に一緒に典籍を読んで資料を探していたことを言っている。

「冬裘夏葛稱體裁、春花秋月隨杖履」

「冬裘夏葛」は冬の皮衣、夏のくず布の衣服で美しい服装を指す。「稱體裁」は身長などを測って衣服を作ることである。「春花秋月」は春の花、秋の月で美しい風景を指す。この句で師弟二人は冬、夏の服を一緒に仕立て屋に衣服を作りに行ったり、のんびりして景色がいい処に行ったことを言っている。

「古來壇坫重師生、詎意悠悠薄如紙」

「壇坫」は文壇を指す。「重師生」は師弟間の情誼を重視することである。「悠悠」は漂い動く様子である。「古來壇坫重師生」は遥かの古代から文壇において師弟の情誼を大切にすることである。「詎意悠悠薄如紙」はこの師弟間の情誼が紙のように薄く、風の中に漂いているとは思ってもいなかったという意味である。なぜ、陳元輔はそう思うのか、陳、程二人は数十年かの友情がいくら深くても、ついに陳、程は別れないといけないからである。

「我弾中郎焦尾琴，流水高山皆變徵」

「中郎焦尾琴」[3]は蔡邕が焼け焦げた梧桐木を貰って作った琴のことで、よい琴を指す。「流水高山」は伯牙が琴で高山や流水の気分を奏でると、友人の鐘子期が聞いて、その曲に託した伯牙の思いを悟ったという故事に由来する。転じて、気心の知れた友人、知音を言う。「變徵」は悲憤の情に適した調べを奏でることである。この句で陳元輔が知己のために「高山流水」の曲を奏でた。しかし、知己である程順則とすぐに別れるから曲調が悲しくなったことを言っている。

「老夫雙眼閲人多、舍君何處尋知己」

「閲人多」は陳元輔がたくさんの人と出会ったことを言う。全句では陳元輔が一生の中それぞれの人と出会ったが程順則だけが一生の知己であると言っている。

「風信無情客速行、又捧璽書歸去矣」

「風信」は季節ごとの風である。琉球の進貢船は海を渡るから順風を利用して帰る。もし、順風を逸すれば、次の順風を待たないといけない。よって、「風信」が来ると急いで出発しなければならない。そして、陳元輔は「風信」が無情にも程順則が急いで帰ることを促すと言う。「璽書」は天子の

---

[1] 唐韓愈「送諸葛覺往隨州讀書」：鄴侯家多書，插架三萬軸」（曹寅編『全唐詩』巻 342、中華書局出版社、1979 年 8 月、3838 頁）

[2]「曹曾書垂萬餘卷、及世亂、家家焚廬、曾慮其先文湮沒、乃積石為倉以藏書、故謂曹氏為書倉。」（晉・王嘉撰 梁・蕭綺錄、齊治平校注『拾遺記』、中華書局出版社、1988 年 2 月、175 頁）

[3]「呉人有燒桐以爨者、邕聞火烈之聲、知其良木、因請而裁為琴、果有美音、而其尾猶焦、故時人名曰‘焦尾琴’焉。」唐・李賢注　（南朝宋・范曄撰『後漢書・蔡邕傳』巻 60、中華書局出版社、1986 年 10 月、2004 頁）

印章を押して封をした文書である。程順則は皇帝への進貢任務を終えて天子の聖旨を捧げて琉球に帰る。

「幾點雲飛五虎門、數行淚落臺江水」

雲が閩江の河口部の「五虎門」に飛んでおり、これは程順則が乗っている船が「五虎門」より琉球へ帰ることを象徴する。臺江は福州城南より 9 里のところの閩江の下流でまたは白竜江という[1]。閩江の福州城付近の流域において南台山という島は閩江を二部分に分けており、南台山の北岸はすなわち台江、南岸は烏龍江である。南台山の北岸と陸地の間は大萬寿橋で繋がれている。琉球からの使節も白竜江に入って大萬寿橋まで至ってもう進めない。小船に乗り換えて近くの支流である瓊河を遡って琉球館にまで行く。河口萬寿橋（小萬寿橋）で登岸して柔遠駅に入る。帰る時も同じ路線である。陳元輔はもし一緒に船に乗って送っても、瓊河を経由して台江に入ったら登岸しなければならない。要するに台江は陳元輔が最後に程順則を見送る場所である。

「燕知別恨語無聲，猿解離愁啼入耳」

「猿」の悲しい鳴き声はよく用いられて人の悲しい心境を表す。燕は別れの恨みを知って鳴くこともせず、猿は別れの悲しみを理解して悲しく泣いているように吠える。

「最恨舟師鐵作腸，一帆高挂忙東指」

「舟師」は船を操る船員である。「鐵作腸」は鉄の腸で無情であることを言っている。船員たちは陳、程二人の別れの悲しみにもかまわず、急いで船帆を懸けて東に向かって出航しようとする。この句では陳元輔がまもなく程順則と別れることに甘んじたくはないが、また仕方ない心情を表している。

「遙遙濱渤島煙深，所謂伊人在中沚」

「濱渤」は「渤海」を言い、つまり、遠い東にある琉球を指す。「所謂伊人在中沚」はあの人が、中州に居るという意味で、見えるが近づけないことを表す。陳元輔は程順則が琉球にいることを知っているけど会いにいけなく、仕方ない気持ちを表した。

「君返雪堂若有思，釣魚臺下浮雙鯉」

「雪堂」は程順則の号を言い、琉球にある程順則の「雪堂」という書斎のことである。「返雪堂」は琉球に帰ることを言う。「雙鯉」は古人が手紙を二枚の「鯉」の形の札で挟む、あるいは鯉形の函に入れることで、後に手紙を指す。「釣魚臺下浮雙鯉」は君閩江にある釣魚台、かつて二人で釣りをしたところに書いた手紙が化した鯉が泳いで来るよと言っている。要するに帰国したら手紙を忘れないでくれと言っている。実際の情況は別れても二人は那覇、福州に往来する進貢船を通してお互いに手紙を送れる。『琉球資料漢文編』のうち 23 点はすべて那覇―福州を往来した書簡である。23 点の書簡はほとんどが陳元輔、程順則間のものである。陳元輔は琉球人と三十年ぐらいの交わりから考えると、実際にやり取りした数はこれよりずっと多いと思われる。

以下の詩は、すべて程順則が作った陳元輔に関する詩である

留別陳昌其夫子　　陳昌其夫子に留別す

[1] 臺江、閩江の下流。「在城南九里、亦名白龍江即閩越王餘善釣白龍處。江中潭深不可測、舊傳有龍居之、禱雨多應、名龍潭。」（清・徐景熹『福州府志』巻 5、上海書店出版社世紀出版集團 、2000 年 9 月、91 頁）

楼船歸去疾　　楼船　帰去すること　疾く
回首草堂光　　回首す　草堂の光
孤掌扶星斗　　孤掌　星斗に扶り
雙眉老雪霜　　双眉　雪霜に老ゆ
空山無暦日　　空山に　暦日　無く
聖代有文章　　聖代に　文章　有り
吾道東來好　　吾　道う　東より来たるは好けれど
其如別恨長　　其れ　別恨の長きが如し
【詩型】五言律詩
【押韻】平水陽韻

【通釈】
題目：陳昌其先生と留別する
船が帰るのは速く、私（程順則）は草堂を振り返る。陳昌其夫子は、手を振って見送る。彼の眉は白くて雪のようである。静かで人が少ない山にいる時、時間が忘れるほど勉強していた。いい時代に恵まれて私はいい文章を読める。私は中国にやって来たのは良かったと思うけど、別れる悩みがこれほど深いと思わなかった。
【分析】
〈首聯〉
「樓船歸去疾、回首草堂光」
「楼船」とは程順則が帰国する際に乗っている船である。「楼船」は櫓がある船で、高さ十丈余りもあり、海を乗り越えられるように大きく作られている。琉球の使節や留学生の帰国には接貢制度に伴って派遣された接貢船が用いられた。接貢制度とは、進貢船が派遣された翌年に上京した進貢使節を迎えるために船を派遣する制度で、その船を接貢船と呼んでいる。接貢船の派遣は進貢使節の迎接と開館貿易が主要な目的であるが、存留官伴（ばん）の交替や勤学人を迎える任務も担っていた[1]。「草堂光」は柔遠駅の草堂の灯火を言う。程順則は、その時琉球に帰る船に乗って、昔に草堂で従事していた学習生活を回想している。
〈頷聯〉
「孤掌扶星斗、雙眉老雪霜」
この句では、眉が白くなった年配者が岸辺で手を星に届きそうなほど高く振って見送っている場面を描いている。「雙眉老雪霜」という表現から陳元輔はその時相当年をとっていたことがうかがえる。康熙 47 年に 53 歳の陳元輔は最後に程順則と福州で別れてわずかの二、三年後に逝去したと推測している。この句を作る時、今回の別れの後、再び会うことができないと程順則は何となく感じているだろう。
〈頸聯〉
「空山無歴日、聖代有文章」

[1] 陳碩炫「清代琉球使節進貢日程に関する研究」、琉球大学大学院人文社会科学研究科 2008 年博士論文、第三章第一節、194 頁。

「空山」は静かで人が少ない山林を言う。転じて、静かで勉強にいい場所を言う。「無歴日」は時間を知らないほどの日々である。程順則は、いい本を読み学問に没頭して人との遊びを絶って時間を忘れるほど学問を探究したことを表す。「聖代有文章」は隆盛の時代、読書人がいい文章を読め、安心に勉強できることを言う。

〈尾聯〉

「吾道東來好、其如別恨長」

「東來」は東より来ることで中国に来ることを言う。「其如」はなんともしようがないという意味である。最後の句で程順則は「中国に行くのは良いことであるが、どうしょうもない離別の悲しみが長く続く」と嘆いた。

寄懐陳昌其夫子　　懐いを陳昌其夫子に寄す

入閩兩度拜元龍　　閩に入ること　両度　元龍に拝す
但覚古高并古松　　但だ覚ゆ　古高　古松に並ぶを
揮瀝山川文曲折　　山川を揮瀝し　文　曲折にして
流連花月語從容　　花月に流連し　語　従容なり
荷香山水愁方別　　荷香の山水　愁い　方に別れ
梅信過江夢更逢　　梅信　過江　夢に　更(ま)た逢う
坐我春風仙帳里　　我が　春風仙帳の里に坐し
醒來祇有寺門鐘　　醒め来たる　祇だ寺門の鐘有り

【詩型】七言律詩
【押韻】平水冬韻

【通釈】

題目：懐いを陳昌其先生に寄せる

私は二度福建省に来て元龍陳先生に師事した。ただ先生は古松のような高潔な徳を持っていると思っている。先生の文章は言語が流暢で、内容も深く、読むと美しい景色を見ているようである。ハスの花が咲いている夏に先生と哀しくも別れた。梅が咲く春が来て、夢で先生と出会っている。先生が帷帳で私を教えている場面を夢見るが、目覚めると先生は消えて、この時、寺院の鐘音が伝わってくる。

【分析】

〈首聯〉

「入閩兩度拜元龍、但覺古高并古松」

「入閩兩度」とは程順則が二度福州を訪れたことをのべている。程順則は、康熙 22 年に勤学として初めて渡清し、四年間福州で勉学に励んでいた。また、康熙 28 年には、再び福州へやって来て、接貢存留通事として三年間滞在していた。この「入閩兩度」という言葉によって、この詩は程順則が二回目に渡清して帰国した後に琉球で作られたことが分かる。「拜元龍」は、程順則が福州で陳元輔に師事したことを言う。「元龍」とは陳登という人物の字で、中国の三国時代の魏国の人である。官は後漢の建安の時、広陵の太守であった。呂布を掎角(前後呼応して敵を制すること)して功績を得たことにより、伏波将軍に加えられることになった。「元龍」について『三国志』「魏書」には以下のよ

うにある。

先賢行狀曰：登忠亮高爽，沈深有大略，少有扶世濟民之志。博覽載籍，雅有文藝，舊典文章，莫不貫綜。[1](先賢行状に曰く、「登は忠亮高爽、沈深にして大略有り、少きより世を扶け済民の志有り。載籍を博覧し、雅びやかにして文芸有り、旧典の文章、貫綜せざること莫し。」と。)

『先賢行狀』によると「陳登」は忠信で、高く爽やかな人である。落ち着いており、戦略を練ることに優れていた。幼い頃から、世を助け、人民を救済する志を持っていた。典籍を博覧していたため、作文にも優れており、知識も豊富であった。古い典籍の文章で知らないことはなかったという。

ここでの「元龍」とは陳元輔を指しており。程順則は自分の先生である陳元輔を「陳登」のような素晴らしい人物になぞらえて表現している。

「古高」は古くて高いという意味である。「並古松」と陳元輔の徳ある人柄を古松に喩えている。つまり、陳元輔は古く高い徳を持ち「古松」のようである。唐の詩人である李白の詩に「愿学秋胡婦、貞心比古松。」[2]（秋の胡婦人を学ぶを願い、貞心古松に比す）という詩句あり。これは、人を古松に喩えている例である。

程順則は、先生の人柄が高潔であり、凡俗とは違うと感じていたのだろう。一句目と二句目は、程順則が陳元輔を評価する内容となっている。

〈頷聯〉

「揮瀝山川文曲折、流連話月語從容」

「揮灑山川」とは文章を書くことを意味している。「揮灑」は文章の流れが流暢だという意味で、「山川」は文章の気勢が盛んであるということを言う。「文曲折」は文章の内容が深刻で、複雑であるということである。全句をまとめると、陳元輔の文章は言語の運用が流暢であり、気勢が博大であり、内容が深いと述べている。

「流連花月」とは陳元輔の詩文を読んだ後に思い浮かぶ、美しい風景のことである。「花」と「月」は中国の古典文学によく使われ、美しい景色や環境などを表す。「花前月下」という成語は「景色が綺麗な場所」という意味である。「從容」は人の行為がゆったりと落ち着いたさまをいう。ここでは、陳元輔の文章の文脈が流暢であり、明らかであるということを表していると想われる。

〈頸聯〉

「荷香山水愁方別、梅信過江夢更逢」

「荷香」はハスの香りのことである。ハスの花期は 6 月から 9 月までで、つまり夏の初めから秋の頭に咲く花である。程順則は康熙 30 年 6 月に帰国する際は、ちょうどうハスの咲く時期である。

「梅信」は梅が咲いて春が来ることを表す。つまり、時間は去年別れた時の夏を過ぎて、翌年の春となっている。要するにこの詩は康熙 31 年の春に作られたことが分かる。全体を見ると「方」と「更」はあわせて使うと時間の流れの速さと、先生に対する思いの深さを強調している。

〈尾聯〉

「坐我春風仙帳里、醒來祗有寺門鐘」

「春風」は先生の指導をもらうことを指す。「仙帳」は漢の馬融が赤い帳を下して中で弟子を教え

[1] 晋・陳寿撰『三国誌』巻 7「魏書」(『萬有文庫』第二集収録、商務印書館、1929 年、193 頁)
[2] 李白「湖辺采蓮婦」(清・曹寅等撰『全唐詩』巻 184、中華書局出版社、1979 年 8 月、1881 頁)

ることを指す。つまり、この句は陳元輔が程順則の書斎に来て教えていることを夢見たと言っている。程順則は夢から醒め、先生は遠い中国にいるということに思い至り、この時、寺院の鐘音が伝わってきてしみじみとした気持ちになっていたのであろう。
尾聯の詩句から引き出されるイメージは、非常に悲しいものである。沈晦の詞に、「兩三峰。人不見、林外數聲鐘。」[1]という句がある。これは「望湖樓という所に登ると、二三峰まで見ることができた。しかし、人の姿が見えない。」という意味である。沈晦の宋詞と「醒来只有寺門鐘」の最後の一句の哀しく物寂しいイメージは、非常に似ている。

都門秋日寄懐閩中竺天植陳昌其兩夫子　都門の秋日懐いを閩中の竺天植陳昌其兩夫子に寄す

萬里京華客路長	万里の京華　客路長く
渚蓮落盡菊花香	渚蓮　落ち尽くし　菊花香る
關河遣興憑詩卷	関河に　興を遣るは　詩卷に憑り
鞍馬衝寒仗酒觴	鞍馬　寒を衝き酒觴に仗る
筆下龍蛇翻法帖	筆下の龍蛇（りゅうだ）　法帖に翻（ひるがえ）り
燈前楚漢戰文場	燈前　楚漢文場に戰う
先生此際應思我	先生　此の際　まさに我を思うべし
薊北瀟瀟一劍囊	薊北に瀟瀟たる一劍囊なり

【詩型】七言律詩
【押韻】平水陽韻

【通釈】
題目：北京の秋に福建の両先生、竺天植、陳昌其を想う
　福州から繁華な北京までの路途は長い。蓮の花びらはすでに落ち尽くし、北京城内の菊の花が満開に咲いている。北京の旅館にいる時、詩書を読んで時間を過ごす。出かける時、お酒を飲んで防寒する。私（程順則）は、先生の作品を読んでいるがその字はまるで龍蛇ように紙の上で翻ている。文章の気勢は博大で激しく、まるで楚漢両軍が戦っているかのようである。両先生は私のこと思っているだろう。私は空っぽな鞘みたいに寂しい心持ちである。
【分析】
　康熙 35 年（1696）2 月 1 日、程順則は中国に進貢する任務を受けて、11 月 21 日、進貢北京大通事として福建に赴き、翌年の 5 月 24 日、福建から北京へ出発して 8 月 24 日に北京に着いた。貢物を納め、表を上って、すべての公事が終わった後、9 月 23 日に北京を出発して、十二月に福州へ戻り、戊寅(1698)年 6 月 7 日帰国した[2]。今回の進貢任務を果たしながら『雪堂燕草』も出来上がった。この詩は『雪堂燕草』の第 26 首である。北京の館舎で福州の竺天植、陳元輔先生を思って詩を作っていた。
〈首聯〉
　「萬里京華客路長、渚蓮落盡菊花香」
京華は北京を指す。客路は程順則らの琉球使節が北京に向かう道程を指す。「渚蓮」はハスである。

[1] 沈晦「小重山」　（唐圭章『全宋詞』第 3 冊、中華書局、1980 年第二版、1312 頁）
[2]那覇市企画部市市史編集室『那覇市史・家譜資料二』資料編第 1 巻 6「久米系」、那覇市役所、1980 年 3 月、546 頁。

ハスの花期は夏の初めから秋の初めまでであり、程順則たちは福州から出発する際はハスの咲き始めの時期である。北京に到着した時にはすでに秋になって菊の花が咲く時期になった。程順則が渚蓮から菊の花に変化することを用いて時間の変化を表しているのは非常に巧妙だと思われる。当時、北京への旅は三か月を費やすことがわかる。一種類の花あるいは他の植物を用いてある季節を表すことは中国の古代詩人によく使われる表現である。たとえば、春を表す「桃の花」、夏を表す「ザクロの花」、秋を表す「菊の花」、冬を表す「梅」、ハスの花びらは落ち尽くすと花茎だけ残って独りぼっちで水中に立っている。そのさまはまるで先生と別れた程順則の姿のようである。しかし、その時の北京城で菊の花が盛んに咲いている。二つの花の様子を強烈に対比することによって詩人の心中の孤独さが感じられる。

〈頸聯〉

「關河遣興憑詩卷、鞍馬衝寒仗酒觴」

「関河」の「関」は城門で、「河」は護城河である。関河は程順則たち北京での住所を指している。明清時代外国から来た朝貢使節は会同館に泊まることになっているので、程順則たちの北京内の宿泊は会同館であるはずである。清は明の制度を継承して、清の順治初期に会同館を設立し、外国からの進貢使節を応接している[1]。『大清会典』の「会同館」康熙十二年（1673）年の条には[2]、「凡会同館夫役，分南北館、南館二十名、伺候貢人到京、抬運貢物。北館二十名、伺候外藩公主及賓客･･･」[3]とあり、明代と同様に南北館二館で南館は各国の進貢使節の宿泊として使用し、北館は回族やチベットの少数民族の使節及び上京してきた官員の宿泊施設として使用している。これによって程順則たちは会同南館に泊まっていることがわかる。『日下舊聞考』によれば、会同館は東江米巷玉河西街北に位置しており、会同北館とともに正統六年（1441）年に設立されたとされている[4]。会同南館の東を玉河（御河とも呼ばれる）という川が流れていたため、史料上で会同南館は玉河もしくは御河館とも記されている[5]。

一方、詩の内容と合わせて程順則たちが当時会同南館に泊まっていたことを証明することができる。首聯、頸聯に「渚蓮」「関河」という詞があるので、詩人の近くに川と城門があるはずである。「乾隆北京城の古地図」[6]によると会同南館は正陽門内に位置しており、会同南館の東には川が流れていた。会同北館はその条件を備えていない。要するに当時の程順則らは会同南館に泊まっているだろう。

「憑詩書」は程順則が北京にいる時は詩書を読んで時間を費やしていることを言っている。

「鞍馬」は馬に乗ることで、転じて外出することを言う。つまり皇帝に貢物を献上するために北京に来ているから頻繁に各衙門と交渉している。程順則は外出する時、酒を飲んで防寒するということから詩を作った時点は晩秋であろう。

〈頷聯〉

「筆下龍蛇翻法帖、燈前楚漢戰文場」

「筆下龍蛇」は紙に書かれている字が龍蛇ように紙の上で翻っていることを言う。「法帖」は書道の手本である。龍蛇を使用して書道を形容する詩句が多い。李白は「草書歌行」の中の「惶惶如聞神

---

[1] 編集代表、陳碩炫『＜人の移動と２１世紀のグローバル社会＞中国・台湾調査班調査報告書―中国北京における琉球関係史跡調査報告書』、2010 年 3 月、122 頁。

[2] 同上

[3] 『康熙朝大清会典』巻 73、『近代中国資料叢刊』第 72 輯、台湾文海出版社、1966 年 10 月、3768 頁。

[4] 編集代表、陳碩炫『＜人の移動と２１世紀のグローバル社会＞中国・台湾調査班調査報告書―中国北京における琉球関係史跡調査報告書』、2010 年 3 月、127 頁。

[5] 同上

[6] 侯仁之主編『北京歴史地図集』政区城市巻、文津出版社、2013 年 9 月、78 頁。

鬼驚、時時只見龍蛇走[1]」という句で草書体の奔放、洒脱を形容している。要するに「龍蛇」、「翻」を通してその法帖は草書の法帖であると考えられる。ちなみに現在みられる陳元輔の書道の作は殆ど草書である。

「燈前」はその時、夜であったことを示す。そして程順則が先生の作品を読む時間が夜であったことがわかる。「楚漢」は昔、楚の項羽と漢劉邦が天下の統治権を争ったため五年間の戦争が続いたという典故である。この詩句の意味は文章の気勢が博大であり、まるで昔の楚漢両軍が文場に戦うようであることである。しかし、「懐古詩」、「言志詩」に詩人自身の博大な志を述べるため「楚漢」を使用する場合が多いけど、「楚漢」を用いて文章を喩える詩は少ないとわれ、この句の表現と似ている例を探しきれなった。おそらくこの表現は詩人独特な創新である

〈尾聯〉

「先生此際應思我、薊北瀟瀟一劍囊」

「薊北」は北京を意味している。「瀟瀟」は物寂しい様子である意味である。最後の句で、詩人は「明喩」と「暗喩」という修辞手段を使用している。「劍囊」は詩人自身の喩えである。「劍囊」である程順則は北京にいる。「剣身」である先生たちは福州にいる。これは詩句に明らかに言ってないので私はこの部分が「暗喩」であろうと考える「劍囊」と「剣身」が別れているということは程順則と先生たちが別れることを象徴している。

戊寅元夕陳昌其夫子設鐸雪堂紀喜　戊寅の元夕陳昌其夫子雪堂に設鐸(たく)し喜びを記す

神京返棹喜相從	神京より返棹し喜び相い從い
依舊開氈得所宗	舊に依りて氈を開き宗る所を得たり
揮灑山川看倚馬	山川を揮灑し倚馬を看る
親承風采想猶龍	親ら風采を承け猶龍を想う
七年重立門前雪	七年重ねて立つ門前の雪
千樹惟瞻海上松	千樹惟だ瞻る海上の松
壇坫未更還問字	壇坫未だ更らず還字を問う
醒人時有數聲鐘	醒人時に有り數聲の鐘

【詩型】七言律詩

【押韻】平水冬韻

【通釈】

題目：戊寅年の正月十五日、陳昌其夫子は雪堂で教導をあげることを記す

北京から福州に戻った後喜んで陳昌其先生に従って学習することができた。以前のように毛氈を展開して紙を敷き文具を揃えて先生に帰服することができた。先生に書いてもらった素晴らしい文章を読むと騎馬の文才が感じられる。先生は猶龍の風采を受け継いで、文章の内容は深くて窺い知ることができない。七年後に再び先生にお目にかかることができる。千樹はただ海上松を瞻る。昔勉強していたところは変わらず、また先生に学問を伺う。先生の指導はまるで鐘の音ように人を目覚めさせる。

【分析】

[1]『御定全唐詩』巻 167（『景印文淵閣四庫全書』集部 1424 冊、台灣商務印書館、1976 年 7 月、516 頁）

〈首聯〉

「神京返棹喜相從、依舊開氈得所宗」

「神京」とは北京を指す。皇帝が北京に住んでいるため、北京を「神京」と呼ぶ。「棹」とは水底を突いて船を進ませる長い棒であり、常に船を代表する。「返棹」は帰る船ということで帰還を表す。「神京返棹」は、程順則が康熙三十六年（1697）北京への進貢任務を終えて 9 月 23 日に北京より福建に帰ったことを指している。「喜相從」は程順則が福州に着いた後康熙三十七年（1698）正月十五日（詩の題目に「戊寅元夕」があるので）に陳元輔と会ったことを指している。

「毡」は毛で織った敷物である。「開毡」は毛毡を開くという意味である。詩題にある設鐸はこの詩のテーマを示している。要するに陳元輔が程順則を教えているということである。「開氈」は具体的にはなんのことなのだろうか。教学に関わると考えられる。毛筆を墨で染めて字を書くので、墨はたまに紙を浸透して書案にかかる。それで紙の下に毛氈を敷く。「開氈」とはそのことを言っているではないか。「宗」は慕って従うという意味である。首聯では程順則は七年ぶりまた陳先生に教えてもらったことができて喜んでいる気持ちが溢れている。

〈頷聯〉

「揮灑山川看倚馬、親承風采想猶龍」

「揮灑」は書また畫をかく時に使い、揮は筆を揮う、灑は墨を注ぐという筆墨の拘束されない様である。「揮灑山川」は文章の内容が素晴らしく、気勢が博大であることを表す。「倚馬」とは晋の袁虎が馬の前七枚の紙に書くほど長い文章をたちどころに作った故事。(『世説新語』曰、桓宣武北征、袁虎時從、被則免官。会須布文、喚袁虎倚馬前令作。手不輟筆、俄得七紙、絶可觀。東亭在側、極嘆其才。）[1]。よく「倚馬の才」という。これは首聯の開氈とつながっている。

「猶龍」は孔子が老子の人物を評した言葉である（孔子去、謂弟子曰、「〈前略〉至於龍吾不能知、其乘風云而上天。吾今日見老子、其猶龍」[2]）龍の窺い知ることの出来ないように、人の智慧や学問が深博で其の心の底を窺い見ることの出来ない喩えである。「想猶龍」は陳元輔の文章を読むと文章の内容が深くて簡単に理解できないということである。文章を透して陳元輔の倚馬の文才を知ることができた。

〈頸聯〉

「七年重立門前雪、千樹惟瞻海上松」

「七年」とは程順則が二回目帰国した後（1631）と三回目渡清の康熙戊寅年（1698）の間の期間が、ちょうど七年間である。『宋史・道学伝二・楊時』の記載よると（「(時）一日見頤、頤偶冥坐、時興游酢侍立不去、頤既覚、則門外雪深一尺矣[3]」)宋代、楊時という人が程頤（てい）を伺う時に彼は憩っている。程頤先生の休憩を邪魔しないように、楊時（ようじ）は先生の部屋の外で先生が眼覚めるまで待っていた。そのとき、外の雪がすでに一尺ほど溜まった。これは「門前雪」が含んでいる故事である。「重立」は程順則が七年間後、陳元輔に再会したことを言う。

「千樹惟瞻海上松」は「千樹」はただ「海上の松」を見上げる。「千樹」の用例を調べると例は多くあるが、「海上松」の用例を探し切れなかった。「千樹惟瞻海上松」この詩句は、「擬人」の修辞格を使用している。「千樹」は人間のように海上の松を見上げる。海辺は松にとって生存環境が厳しいので海邊の松は普通の松ではないと考えている。私はこの海上の松は陳元輔の喩えだと考えている。

---

[1] 晋・劉義慶編『世説新語』巻 2（『萬有文庫』第 2 集収録、商務印書館、1929 年、66 頁）

[2] 漢・司馬遷『史紀』巻 63「老子韓非列伝」、中華書局出版、1998 年 9 月、2140 頁。

[3] 前掲元・脱脱等撰『宋史』巻 428、12738 頁。

「千樹」は陳元輔の生徒たちを象徴している。要するに陳元輔の文才が高いので生徒たちは先生を尊敬しているという意味を表したいのだと思われる。
〈尾聯〉
「壇坫未更還問字、醒人時有數聲鐘」
「壇坫」は文人たちが集まる所を指している。詩の中では程順則が昔、勉強している所を表すと考えている。「問字」は陳元輔先生に学問を聞くことを指している。昔勉強していたところは何も変わらず、先生に学問を聞くことができる。「数声鐘」は先生の教導は鐘の響きのように人を眼覚めさせるという意味でる。いわゆる、先生の教導はとても大切であり、人生の道を明示できる。

第三項　小結

林潭には陳、程二人の情誼について述べた、次のような文章がある。

> 客夏返棹中、昌其賦詩以送之、既又有詩以懷之。余與昌其交幾三十年、素知其不輕以肝膽許人。今且杜門謝客矣，而獨于程子倦倦者。（程君は夏に船に乗って帰国する。昌其は詩を賦して送る。また詩を作って程君を憶う。私は昌其と知り合ってほぼ三十年になった。昌其は簡単に人と深く付き合うことをしない。程君が帰った後、昌其は門を閉ざして客と面会することをやめた。昌其は程君のことだけ長く思っている）

この内容によると、康熙 30 年、程順則は琉球に帰った後、今後会えるかどうか知らない、さらに今日の別れが絶別であるかもしれない。こんな気持ちを込めて程順則が帰る前陳元輔は 10 首の詩を送った。同年の秋、また 5 首の詩を作って程順則を追憶している。林潭が言うには陳元輔は容易に他の人に自分の心を開かない。ただ程順則に対して陳元輔は康熙 11 年の科挙の失敗、三藩の乱を経て、軍幕に入ったことなどの経歴を悉く打ち明けている。こんな待遇を得たのはほかにはただ林潭だけである。陳元輔の程順則に対する態度には真心がこもっている。一方、程順則は陳元輔の大弟子として大きな成果を加えて、四年三か月の付き合いを通して生涯の知己となった。
程順則の側から見ると、師匠である陳元輔を心から尊敬して学問に努めた。陳元輔はその作品の中でよく「程門立雪」の典故を用いて程順則を褒める。程順則はかつて自分が着た服を陳元輔に送っており、これは「解衣之雅」と呼ばれる。福州にいる間に二人一緒に書倉で典籍を調べ、冬夏、一緒に服を作りに行って、春秋風景の綺麗処に鑑賞に行った。康熙 30 年、程順則が帰る前、出資して陳元輔の半生の心血である『枕山楼詩集』を出版した。彼の著作を出版した上さらに琉球、日本へ持ち帰った。帰国後も陳元輔の『枕山楼課児詩話』を日本で出版するなど、陳元輔の著作を琉球ばかりでなく、日本にも紹介している。中琉交流の歴史において、多くの勤学人の師匠が活躍していたが歴史の闇に消失してしまった。陳元輔は間違いなくその中で最も幸運な一人である。彼の著作は今も見られ、後人はその著作を味わうことができる。それは弟子であり、生涯の友であった程順則のおかげである。

第四節　程順則の福州及び貢路における交友関係

先行研究[1]においては、明代の文人、冊封使節の従客などが読んだ琉球漢詩も僅かだが発見されて

[1]方寶川、蘭英「明人別集散見中琉關係史料與史實鉤沉」（『第 15 回琉中歴史関係国際学術研討会論文集』所収、琉球

いる。『中山詩文集』は康熙年間に編集された琉球漢詩の金字塔的作品集だといっていいだろう。先行研究[1]によってこの詩集の最も早い版本は康熙 60 年（1721）に福州で刊行されたものであることが指摘されている。『中山詩文集』には、程順則・周新命・蔡鐸・曾益・程摶萬・蔡文溥といった 39 名の琉球人の作品が収録されており[2]、その中で程順則の漢詩が最も多い。『中山詩文集』には漢詩 256 首が収録されているが、内 114 首が程順則の作品である。程氏の『雪堂贈言』には 28 名の中国詩人の詩、主に福州の知識人が程順則に贈った贈別詩が収録されている。また、『雪堂燕遊草』にも 4 名の中国知識人の詩が紹介されている。『中山詩文集』の序文の作者も含めると、実に 42 名の中国知識人の作品を確認することができる。それらのほとんどの人物が福州と関わっている。この 42 名の中国知識人については、それぞれ出自も異なる。42 名については、その多くが程順則の詩に出てくる人物である。これらの人物について林麟焻が若干の検討[3]を試みているが、詳細な検討を加えた研究は、これまでに存在しない。こうした人物の経歴が把握できれば、琉球人と中国文人との交流の様子を具体的にかつ詳細に窺い知ることができよう。

これまでの研究では、資料的制約もあり、程順則についてもこうした人物等との交流の実態が明らかにされていない。最近、紺野達也氏の論考「蔡大鼎の尺牘について―福州の人士との交流を中心に―」によって、蔡大鼎の尺牘を利用し清代末期における琉球人と一部福州知識人の書簡往来の様相が検討されているが、交流の実態が具体的に解明されたわけではない。筆者も修士論文において陳元輔を中心に琉球人との漢詩交流について分析を試みたが、しかしその論考では陳元輔との交友関係のみを明らかにするに留まっている。

本節では、『雪堂燕遊草』『雪堂雑組詩』『雪堂贈言』を中心に、『那覇市史・琉球資料漢文編』を利用しながら、地方志や清代の史料筆記から発掘した関連資料をもとに検討をすすめ、程順則と交友をもった人物等についてもピックアップし、その人物像そして交友の実態を具体的に解明していきたい。

『雪堂燕遊草』、『雪堂雑組詩』、『雪堂贈言』は、康熙 35―37（1696―1698）年の間に作られたもので、程順則の三回目の渡唐の際の作品である。福州、北京を往復した際に漢詩で各地の名所旧跡を詠んだり、知識人と唱和したりしている。すべての作品は前掲の三つの詩集に収められている。『程氏家譜（六世）』[4]によると、程順則は康熙 35 年（1696）11 月 21 日に、進貢北京大通事として耳目官毛天相、正議大夫鄭弘良とともに福州へ赴き、翌年（1697）5 月 24 日に福州より北上して北京に向かい、8 月 24 日に北京に着いている。そして公務を終え 9 月 23 日に北京を出発し 12 月 26 日に福州に到着した程順則は、康熙 37 年（1698）6 月 7 日に乗船し帰国している。

程順則は一回目（1683―1687）の渡唐で勤学人として福州に四年間滞在し、二回目（1689―1691）、の渡唐では存留通事として三年滞在し、計七年間陳元輔に師事している。福州に滞在した七年間に程順則は多くの人脈を得、更に三回目の渡唐は進貢北京大通事として北京まで赴いたため、さらに多くの中国の文人との知遇を得ている。

大学国際沖縄研究所、2016 年 2 月）
胡新「明代嘉靖以前出使琉球之送行詩文述略」（陳碩炫、徐斌、謝必震主編『第十三届中琉歴史關係國際學術會議論文集』所収、海洋出版社、2013 年 11 月）

[1]高津孝「琉球出版文化與琉球漢詩集」「人文中国学報」第 22 期、上海古籍出版社、2016 年 7 月、296 頁。

[2]梁成楫、阮維新、王明佐、尚純、尚弘毅、毛泰永、翁自儀、毛自義、夏德宣、毛允麗、王世俊、章受祐、鄭宗善、鄭德宗、梁邦翰、鄭永安、陳初源、鄭弘梁、孫自昌、楊有晨、文克繼、毛知傳、栢茂、呉彬、金元遠、蔡焯、蔡應瑞、梁津、毛國珍、鄭明良、梁邦基、梁鏞、金溥。

[3]遊励『清代閩籍冊封使及其著作考』、福建師範大学図書館学修士論文、2010 年。

[4] 「程氏家譜（六世程泰祚）」（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料編第 1 巻 6 、那覇市役所、1980 年 10 月、546 頁）

『那覇市史・琉球資料漢文編』（以下『琉球資料』）は京都大学文学部博物館の所蔵の「琉球資料」全 173 巻のうち漢文史料を収録している。この資料編には進貢・漂着関係資料、科試関係資料、文学関係資料の三部として構成している。特に文学関係資料に程順則、陳元輔らの書簡、詩文が収録されている。全 23 点の書簡のうち、程順則が福州、進貢途中、北京で出会った文人や医者との書簡は 15 点が確認できる。また陳元輔の書簡 4 点、詩 1 点が確認できる。程順則と書簡の往来があった福建の人は林麟焻、宋潜川、李元章、蕭子貽、譚述、江奕鴻、林竹筠、戴翼、王子羲、王邦菴、竺天植の 11 名である。『雪堂燕遊草』『雪堂雑組詩』『雪堂贈言』においてもこの 11 名の文人の詩が収録されている。この 11 名人文への書簡はすべて康熙 37 年 6 月、程順則が琉球に戻った後に書かれ、次の進貢船を通して中国の友人に届けられたものである。これらの書簡は上記 11 名の人物及び交流の実態を知るために貴重な資料と思われる。本稿で『琉球資料』も用いて詩の内容と照らし合わせて分析する。

しかし、資料の制限で、本稿では程順則が接触した宋潜川、張丹徒、趙二尹、林麟焻、譚述、戴翼、林竹筠、林潭を中心に検討を試みる。

第一項　朝貢の道程における中国文人との接触

まず、程順則の作品を通してみてみよう。

１、宋潜川について

【『雪堂燕遊草』第 16】

淮角樓逢滇南正總裁宋灊川太史賜闈墨

鎖院初歸太史官、
新書攜贈使臣看。
秋風淮角樓前看、
六詔珠光照夜寒。

淮角樓に滇南正總裁宋潛川太史に逢って闈墨を賜る

鎖院より初めて歸る太史官
新書を攜え贈りて使臣に看せしむ
秋風 淮角樓前に看る
六詔の珠光夜寒を照らす

【七言絶句】

【通釈】

題目：淮角楼にて滇南の正総裁宋潜川太史に逢い「闈墨」を賜る

科挙の試験を司った後、帰ったばかりの太史官宋先生は新しく書いた「闈墨」を使節である私（程順則）に贈って読ませてくれた。さわやかな秋の風を浴びながら淮角楼の前で「闈墨」を読んでいると、雲南の受験生達の文才に感動し、夜の寒さなんて感じておられない。

【分析】

詩の題目の中に宋潜川という人物が現れている。『雪堂燕遊草』に宋潜川に関する詩は３首収録されている。『雪堂雑組』にも宋潜川に関わる詩が 1 首収録されている。また『中山詩文集』を見ると、程順則の師匠である陳元輔以外では、宋潜川という名が多出する。宋潜川はきっと程順則に深い印象を与えたのだろう。『盱眙県志』[1]によると清代において「淮角樓」は安徽省盱眙（くち）県の北斗山にある（現

[1] 清・王錫元『盱眙県志』光緒 17 年刊本巻 11（『中国地方志集成・江蘇府縣志集』58 号所收、上海書店出版社、2000 年 10 月、199 頁）

在の江蘇淮安市にあり)。『寶応県図経』[1]によると萬歴年間には、淮角楼は高さ 70 尺、四階の建物であった。程順則は福州を出発し、貢路に位置する盱眙県に着いている。程順則が随行した使節一行は、福州の伴送官に護送され盱眙県を経過する際に、上京に時間的余裕があったことから当地の名所である「淮角楼」を訪れている。そこを見学した際に「滇南の正総裁宋潛川太史」と出会い、宋潛川は程順則に「闈墨」を贈っている。「闈墨」とは明代以降、郷試、会試の後、主考官（科挙試験の総試験官）が、優秀な科挙受験生の文を選んでそれを手本とすべく刊刻した書籍である。清代においても康熙 9 年（1670）より郷試、会試の優秀な試巻を礼部が選出し編纂刊刻しているが、この「闈墨」は礼部によって編纂されたものではなく、宋潛川自身が編纂したもののように思える。闈墨は各省内に流通する版本（某省闈墨）と全国に流通する版本（直省郷墨）がある。闈墨には一般的に八股文、試帖詩を収録する場合が多く、優秀な「対策」[2]が入選される場合もある。

清代、中央編纂機構の主管、王朝史書の総編纂官、科挙の主考官は総裁と呼ばれている。程順則に「闈墨」を贈った宋潛川については滇南（雲南）郷試の総裁である可能性が高い。『雲南通志』には康熙版、乾隆版、民国版の 3 種がある。康熙版は康熙 30 年（1691）までと記載時期が限られており、また民国版も 1912 年以降と時代を経ていることから、乾隆版『雲南通志』を参照するのが、程順則が接触した人物については時期的に符合する。乾隆版『雲南通志』の「本朝歴科郷試主考」には以下の二人の宋姓の人物が掲載されている。

> 宋文運 直隷南宮人、辛丑進士、以吏部文選司主事充副主考[3]。（宋文運は直隷省南宮の人、辛丑年の進士、吏部文選司を以て副主考を担当する）
> 宋衡 江南廬江人，乙丑進士，康熙三十五年丙子科以翰林院編修充正主考[4]。（宋衡は江南盧江県の人、乙丑進士、康熙 35 年丙子科に翰林院主事を以て正主考を担当する）

二人とも郷試の主考である。どちらが宋潛川なのか判別しづらいが、「潛川」という名が手がかりとなる。姓名の「名」の部分については人名と地名の両方が考えられる。『廬江県志』には以下の記述がある。

> 潛在廬江縣西南故邑亦名潛川[5]。（潛江は廬江県の西南にあって廬江県また潛川という。）

これより潛川とは廬江県の地名であることがわかる。以上の資料をまとめると潛川は廬江県にあり、また宋衡は廬江県の出身である。宋潛川については宋衡であると推測して大過はないだろう。時期的に考慮すると、康熙 36 年（1697）に上京した程順則は康熙 35 年（1696）の雲南省郷試を司り終えて北京に戻る途中の宋衡と淮角楼で出会ったのであろう。以下、宋衡とはどういった人物であったのか、そして程順則がどのように宋衡と接触をもったのか、詩の分析と関連史料を通して検討してみること

---

[1] 清・劉寶南『宝応県図経』道光 28 年刊本巻 2（『中国方誌叢刊・華中地方』第 30 号所収、台湾成文出版社、1966 年、197 頁）
[2] 政治や実務についての設問に対する答え。
[3]清・靖道謨纂『雲南通志』巻 80（『景印文淵閣四庫全書』史部 237 地理類所收、台湾商務印書館、1975 年 6 月、569 頁。）
[4]同上『雲南通志』、620 頁。
[5]清・錢嶸、盧鈺、兪燮奎『廬江縣志』清光緒 21（1885）年刻本、巻首（『中国地方志集成・安徽府縣志集』第 9 号収録、上海書店出版社、5 頁）

とする。

詩中、「鎖院初歸太史官」の「鎖院」とは科挙試験終了後、受験生が入場した後に試験場を封鎖することである。宋衡が科郷試験を司り終えて帰途についていたことが分かる。「太史」は国の史官で、『清史稿』において宋衡の伝記はないが、『清実録・聖祖仁皇帝実録』（以下『聖祖録』）に以下の記述がある。

『聖祖録』巻 121
康熙二十四年乙丑五月庚申碩
上御保和殿選進士（中略）宋衡（中略）等為庶吉士[1]。（皇帝は保和殿で進士を選ぶ。宋衡などが庶吉士となる）

『聖祖録』巻 150
康熙三十年（庚午）
諭吏部庶吉士宋敏求等教習已久、今加考試應分別授職。（中略）宋衡（中略）俱授翰林院編修[2]。（皇帝は吏部庶吉士宋敏求などが長く教習し今、考査を加えて各々職を授けることとした。宋衡などは翰林院編修を授ける。）

『聖祖録』巻 172
康熙三十五年（己亥）
以翰林院編修宋衡為雲南郷試正考官、吏部員外郎董思凝為副考官[3]。（翰林院編修宋衡を雲南郷士の正考官とし、吏部員外郎董思凝を副考官とする）

『聖祖録』巻 223
康熙四十四年（戊午）
編修宋衡提督四川學政[4]。（編修宋衡は提督四川學政とする）

また、光緒版『廬江縣志』巻 8 には「及入史館（中略）纂修三朝國史撰顧憲成、張柔登傳俱實不誣[5]（宋衡は史館に入って明の三朝の歴史を編纂して顧成憲、張柔などの人物の伝がすべて事実に基づいて書かれた）」といった記載がある。

以上の史料から、宋衡は康熙 24 年（1685）に進士に合格し、康熙 30 年（1691）に翰林院編修に選ばれ、康熙 35 年（1696）まで翰林院編修を勤め、『明史』の編纂にも加わっていた。これにより、題目に「太史（国の史官）」と記された理由が判明する。康熙 35 年（1696）に宋衡は雲南の郷試の正考官に任じられている。その後、康熙 44 年（1705）に四川省提督学政（四川省の教育、文化、科挙を司る最高長官）を連任している。

「新書攜贈使臣看」

---

[1]『清実録・聖祖仁皇帝実録』、中華書局印影、1985 年 9 月、巻 121、270 頁。
[2]『清実録・聖祖仁皇帝実録』巻 150、中華書局印影、1985 年 9 月、664 頁。
[3]『清実録・聖祖仁皇帝実録』巻 172、中華書局印影、1985 年 9 月、861 頁。
[4]『清実録・聖祖仁皇帝実録』巻 223、中華書局印影、1985 年 9 月、247 頁。
[5] 清・錢嶸修、盧鈺、兪燮奎纂『廬江縣志』清光緒 21（1885）年刻本、巻 8（『中国地方志集成・安徽府縣志集』第 9 号収録、上海書店出版社、2000 年、276 頁。）

「新書」は雲南郷試が終わった後、宋衡が受験生の優秀な文章を集めて刊刻した「闈墨」のことである。宋衡は雲南の公務を終えて北京に戻る途中、盱眙県を通過している。程順則も上京の途中、同じく盱眙県を通っている。宋衡と程順則の二人とも思ってもなかったであろうが、淮角楼を訪れた際に偶然に出会い、程順則は宋衡から「闈墨」を贈られている。奇遇といっても過言ではない。淮角楼で出会った後、二人の交流はそれで途絶えたわけではない。北京でもまた出会い、さらに交友を深めている。

「秋風淮角樓前看」

「秋風」により秋に二人が出会ったことがわかる。二人は共に淮角楼でいろいろ話しただろう。『漕河備考』、『水路路程便覧』によると水路で北京に行く場合、淮角楼は必ず通る場所である。宋衡は雲南郷試を司り終えて礼部に報告するべく北京に向かっていた。ちょうど、二人は淮角楼に到着した。外国の進貢使節と常に出会うわけではないことから、きっと宋衡から好奇心を持ち自ら進貢団に接近したのであろう。宋衡が琉球の進貢使節と交流する時、都通事である程順則は必ず通訳として出る。こういうふうに程順則は宋衡と話をした。二人のやり取りから藩属小国の琉球出身の程順則は非凡な言葉遣いで宋衡と自然に話をし、宋衡も深く感心しただろう。宋衡が敬服の気持ちを持ち程順則と交流して闈墨を送ったとしてもおかしくはない。

「六詔珠光照夜寒」

「六詔」とは雲南省の別称である。「珠光」は真珠のツヤである。「六詔珠光」は雲南省受験生たちの文集を指している。夜になって灯火の下で、程順則は宋衡から贈られた「闈墨」を読んでいる。その中にある素晴らしい文章は暗くて寒い夜に、まるで明るい灯火のように寒さを追いはらわんばかりに温かみを与えたのであろう。

【『雪堂燕遊草』第 17】

潛川先生惠賜春山八詠和章賦謝

高漢星辰映翰林、
十年猶未改初心。
為憐歸徑詩人老、
不使居山墨跡沉。
殿上鳴珂螭火近、
禁中垂柳鳳池陰。
何當太史陽春曲、
偏許東封使者吟。

潛川先生より春山八詠を惠賜せられ、章に和し賦して謝す

高漢の星辰翰林に映え
十年猶ほ未だ初心を改めず
歸徑の詩人の老うを憐むを為し
居山の墨跡をして沉めしめず
殿上の鳴珂　螭火に近く
禁中の垂柳　鳳池の陰
何ぞ當に太史陽春曲を
偏に許すべし東封使者の吟

【七言律詩】

【平水侵韻】

【通釈】

題目：潛川先生が贈ってくれた「春山八詠」の境地に和し賦詩をして感謝の意を表す。

高い空にある星々のような宋先生は翰林院に照り映えている、十年の年月が過ぎても宋先生は初志を変えることはない。帰って来た宋先生は老いていくことを嘆いている。しかしその墨跡（詩、文章など）を埋没させてはならない。紫禁城の正殿の中に香炉の煙が漂い、高官が出入りしている。禁苑中の柳が鳳池に影を映している。どうして宋先生は作った「陽春曲」をひとえに東の封国の使者（程

順則)に贈り読ませるのか。(私〈程順則〉は身に余る厚遇を受けて驚き喜んでいる)。

【分析】

この詩は宋衡に関する第二首目の詩である。宋衡は程順則に「春山八詠」の詩を贈ったことから程順則はその詩に和するためにこの詩を作っている。「和章」は「和韻」と違う。「和章」はその詩の境地に和するもので韻に和する必要はない。

「高漢星辰映翰林、十年猶未改初心」

「高漢星辰」は高くて澄んでいる空に輝く星という意味で、宋衡を喩えている。「映翰林」は星のような宋衡が翰林に映えているということである。宋衡は、康熙 24 年に進士に挙げられてから康熙 34 年までにすでに 10 年が過ぎていた。「十年」とは、そのことを言っているのであろう。この 10 年の間、宋衡はずっと翰林院編修を勤めており、昇進することがなかった。しかし 10 年を経ても初心を変えることなく勤め上げ、康熙 35 年に雲南省に郷試の正考官として派遣されている。

「為憐歸徑詩人老、不使居山墨跡沉」で、程順則はおそらく宋衡との語り合いを想起しつつ、この句を書いたのであろう。宋衡は程順則におそらく長く昇進せず自分がだんだん老いていく情況を話したにちがいない。程順則も深く宋衡の気持ちを察し、宋衡に対して愛惜の念を禁じえなかった。居山とは山で居住する意味で隠遁者を指す。つまり、居山は宋衡を指す。「居山墨蹟」は宋衡の作品を指す。宋衡は長く朝廷で重用されていないが、その中で徐々に年を老いていく。程順則は宋衡の作品を埋没させてはならないと、感じ入っていたのであろう。

「殿上鳴珂螭火近、禁中垂柳鳳池陰」

「殿上」は皇帝に謁見する朝堂である。高官や貴族は玉の飾り物を付けているので歩くと音が出る。これを「鳴珂」といい、顕職にある人を指す。「螭火」は殿上にある「螭龍」の模様が飾っている香炉である。「禁中」は皇帝のプライベートな区間である。清代において紫禁城は乾清門を境界として南側は前朝で、北側は皇帝の生活空間の「内廷」としていた。「鳳池」は鳳凰池である。魏晋南北朝時代、中書門下省を内廷に設置していた。宋衡が働いている場所も皇帝に近い距離にある。詩句にはそうした環境にいる宋衡が埋没することなく、北京に帰ったら昇進することを願う気持ちが込められている。

「何當太史陽春曲、偏許東封使者吟」

「陽春曲」は宋衡が作った「春山八詠」のことである。「東封」は東にある封国で琉球のことを指す。尾聯において程順則は宋衡が作った「春山八詠」を自分に贈ってくれた厚意に驚き喜んでいる様子を詠んでいる。

【『雪堂燕遊草』第 31】

京邸荷太史宋潛川先生惠教瀛臺恭紀詩并墨畫賦謝

新詩子美畫元章、
簪筆翩翩擬鳳翔。
春暖花甎宮漏永、
夜燒蓮燭院門香。
露承仙掌瀛臺峻、
雲擁呉綾淡墨光。
珍重雙箋能照乘、

京邸に太史宋潛川先生瀛臺恭紀詩并び墨畫を惠教し、賦をして謝す

新詩子美にして畫は元章
簪筆翩翩として鳳翔に擬す
春花甎を暖め　宮漏　永く
夜蓮燭を焼き院門香る
露を承ける仙掌　瀛臺峻く
雲を擁く呉綾淡墨光く
珍重す雙箋能く照乘し

重装唯有錦為囊。　　重装するに唯だ錦有りて嚢と為すのみ

【七言律詩】

【平水陽韻】

【通釈】

題目：北京の宿舎でかたじけなくも太史宋潛川先生が「瀛台恭紀詩」及び、墨画を贈ってくれたことに詩を賦して謝する。

新しく作った詩はまるで杜甫の本人が作ったようで、書画はまるで米芾が描いたようである。宋潛川先生が絵を描く姿は鳳凰の動くようで実に優雅である。春が花柄のレンガを温め、宮殿中の漏刻が永遠に時を刻す。夜、蓮形の蝋燭を燃やし庭に蝋燭の香りが漂っている。高い瀛臺に露を受ける仙人の像が置かれている。白い紙は呉綾のような画が描かれている。宋先生が贈った詩と書画は極めて貴重で、私（程順則）の詩と絵画の手本になり得る。新たに表装する時、錦で作った袋に収めよう。

【分析】

題目中の「京邸」とは琉球の進貢使節が起居する北京の宿である。陳碩炫は「進貢日程に関する研究」[1]において、康熙・雍正年間の正式な宿泊施設は会同南館一ヶ所のみで二国以上の使節が北京に進貢する場合には会同南館だけでは対応できなくなるため、使節を衙門か寺に宿泊させていると指摘している。つまり琉球使節を毎回会同南館に宿泊させていたわけはないと考えている。筆者は修士論文で康熙 36 年の琉球使節の北京における宿泊施設は会同南館であったことを指摘した[2]。宋衡はその会同南館で程順則に「瀛臺恭紀詩」について教示すると同時に水墨画も贈っている。「惠教」からは宋衡が程順則が作った漢詩に評を加え訂正してあげたことがわかる。

「新詩子美畫元章、簪筆翩翩擬鳳翔」

「子美」は唐代の大詩人杜甫のことである。「元章」と称される画家は中国の歴史上二人いる。一人は宋代の米芾（べいふつ）で、一人は元代の王冕（おうべん）である。程順則のいう「元章」は誰を指すのであろうか。おそらく書画史においてもっとも著名な米芾のことをいっているのであろう。皇帝の近臣や士大夫は筆を冠しゃくにさす装束をしている。「簪筆」とは士大夫のたとえである。詩の中で「簪筆」は宋衡のことをさす。「翩翩」は振る舞いが垢抜（あか）けているさまである。「擬鳳翔」は宋衡が筆を握って絵画する姿は鳳凰が飛んでいるみたいに軽快で優雅であることを示している。この聯の前半では宋衡の詩と画を絶賛し、後半では宋衡の非凡な学識を褒め称えている。

「春暖花甎宮漏永、夜燒蓮燭院門香」

「花甎」は唐代、内閣北庁の階段前に花甎（花模様があるレンガ）で舗装された道があり、そのことを指している。「宮漏」とは宮殿中の水時計のことである。「蓮燭」は蓮の形の蝋燭で、「花甎」、「宮漏」、「蓮燭」、「院門」は四つの景物は中枢機関に設置されていたものである。つまり、皇帝に近い機構で宋衡が働いていることを表現している。『康熙朝実録』には相関記録がないが、『廬江縣志』の宋衡の伝記には宋衡に「侍読学士」の履歴があることが記されている[3]。具体的に宋衡がいつ「侍読学士」となったのかは分からないが、この句を通してみると、おそらく宋衡は雲南郷試を司った後、「侍

[1]陳碩炫「清代琉球使節の進貢日程に関する研究」、琉球大学大学院、人文社会科学研究科博士論文 2008 年、101 頁。
[2]季龍飛「陳元輔と琉球人の詩文交流について―『枕山楼詩集』と『柳軒詩草』を中心に―」琉球大学大学院人文社会修士論文 2017、71 頁。
[3] 前掲『廬江県志』、276 頁。

読学士」に昇進したと理解していいだろう。

「露承仙掌瀛臺峻、雲擁呉綾淡墨光」

「露承仙掌」は漢の武帝が建章宮・神明台に設置した銅の仙人像が銅の皿、玉の杯を捧げて天上の露を承けること表現している。「瀛台」は清代皇帝の行宮である。北京の中南海（湖）の南海にある島に建立した行宮で、前半句は「瀛臺恭紀詩」に対応して皇家の宮殿の豪華なことを述べ、後半の句は墨画に対応して宋衡が贈った墨画は、まるで呉綾ように美しいと述べている。「呉綾」は呉地で生産された織物で軽く薄いことを誇っている。

「珍重雙箋能照乗、重装唯有錦為嚢」

「雙箋」は宋衡の教示と贈ってくれた水墨画を指す。「照乗」は「照乗珠」のことで艶々した宝珠である。「重装」は新たに表装することである。宋衡から受けた教示や書画はとても貴重で程順則にとって、作詩にせよ絵画にせよどれも模範となる。新たに書画を表装する際に錦の袋に収納しようと言った表現からも、その貴重さを窺い知ることができる。

【『雪堂雑組』第 10】

寄懐太史宋潛川先生	太史宋潛川先生に懐を寄す
先生簪筆賦長楊、	先生簪筆　長揚を賦す
使者乗潮返故郷。	使者潮に乗りて故郷に返る
雪浪千層煙島迴、	雪浪千層　煙島迴し
天池萬里鳳凰翔。	天池萬里　鳳凰翔ぶ
秋風淮角樓前月、	秋風淮角　樓前の月
夜色盧溝水上霜。	夜色盧溝　水上の霜
兩地相逢成往事、	兩地相い逢いて往事と成り
幾回滄海望茫茫。	幾たびか蒼海を回るも望茫茫たり

【七言律詩】

【平水陽韻】

【通釈】

題目：太史宋潛川先生を想う

宋潛川先生は楊雄と同じように皇帝の近くで働いている。使者の私（程順則）は船に乗って故郷に帰る。沸き返る波や霧にかすんだ海の中にある島は中国と遠く離れている。海の万里の外は鳳凰が飛び回っている。秋風の中、淮角楼の前に一輪の明月が高くかかり、夜の盧溝橋の水面には霜が降りていることであろう。両地（盱眙県、北京）で出会ったことが昔の事になった。（私）は何回も大海をめぐっているが、茫々たる海が広がっているばかりである。

【分析】

この詩は程順則の『雪堂雑組』に収録されている。この詩集は琉球の代表的な八景を詠んだ詩と中国や琉球の友人を追憶する詩によって構成されている。程順則と宋衡との交友の深さを、この詩は体現している。

以下、宋衡に関する個人伝記[1]を用いて宋衡と程順則の各々の軌跡を比較しながら、これらの詩を理解していきたい。

[1]前掲　『盧江縣志』、276 頁 。

宋衡は順治 11 年（1654）に生まれで、字は伊平、号は嵩南である。「宋潛川先生」は程順則の宋衡に対する尊称である。年齢から比較すれば、宋衡は陳元輔とほぼ同じ年である。程順則とは 8、9 歳の年齢差がある。

康熙 17 年（1660）、宋衡は郷試で解元として挙人に挙げられている。同年程順則は 15 歳、すでに若秀才となっていた。康熙 24 年（1685）に宋衡は進士となって翰林院庶吉士（しょうきつし）に選ばれている。同年程順則は福州にて陳元輔に師事している。康熙 30 年（1691）に宋衡は翰林院編修に昇進しており、同年、程順則は資金を調達して陳元輔の詩集を出版し、帰国前、福州で十七史を購入して琉球に持ち帰っている。康熙 35 年（1696）宋衡は雲南郷試正主考として派遣され、同年、程順則は北京大通事として上京する途中、宋衡と出会っている。

「先生簪筆賦長揚，使者乘潮返故郷」の「長揚」は「長揚賦」のことである。前漢末期の文人、学者である楊雄は成帝の敕許を得て 3 年間修学のために休職すると、その成果を踏まえ「甘泉賦」「長揚賦」「羽獵賦」「逐貧賦」などを次々と発表し、辞賦家として名声をほしいままにした。「先生簪筆賦長揚」は宋衡を楊雄に擬えることで、宋衡は楊雄のように素晴らしく、皇帝に仕えているということをいう。「使者」はいうまでもなく程順則である。康熙 37 年 5 月 24 日、程順則は福州より琉球への帰途についた。師匠である陳元輔と別れただけでなく、この一年半余に出会った全ての人との別れであった。

「雪浪千層煙島迴，天池萬里鳳凰翔」の「雪浪千層」は重なる白い波である。「烟島」は霧にかすんだ海にある島で、琉球のことである。波や霧にかすんだ海に囲まれている琉球に程順則はいる。「天池」は海である。後半の句に海の万里の外の鳳凰が飛び回っていると言っているのは、皇帝がいる北京を指す。つまり、宋衡が北京で皇帝のそばに仕えている事を言う。

「秋風淮角樓前月，夜色盧溝水上霜」「秋風」は、安徽の盱眙県の淮角楼で程順則が宋衡と出会った季節を指している。「盧溝」は盧溝橋である。北京の広安門より 10ｋｍあたりの永定河に架けられている。「水上霜」は永定河の上に霜が降りていることをいい、程順則が北京より帰る時すでに深秋の 9 月 13 日であった。この句は程順則が淮角楼や北京で宋衡と交流した色々なことを追憶しながら作ったのだろう。

「兩地相逢成往事，幾回滄海望茫茫」の「兩地相逢」は二人が、一回目は盱眙県、二回目は北京で出会ったことを指す。淮角楼で出会った二人は、その後別々に上京していることがわかる。この点については次の『琉球資料』の宋衡への書簡からも証明できる。

> 續入都門、復親芝範、賜佳章妙墨、真少陵摩詰再來人[1]。（ついで都門にいり、復芝範を親しくし、荷けなくも佳章妙墨を賜り、真に少陵・摩詰の再來の人なり）

これより北京でまた宋衡から程順則に瀛台恭紀詩、水墨画を賜ったことがわかる。

淮角楼で偶然に会って初対面なのに古くからの知り合いように意氣投合している。上述したように、宋衡は程順則に「闈墨」を贈り、北京で詩の教示を行い、書画を贈っている。康熙 36 年に出会った奇遇は程順則にかなりの印象を留めていた。康熙 36 年以後、程順則は二回上京使節として北京を訪れているが、二人は二度と会うことはなかった。後に、宋衡は四川学政に昇進し 60 歳で離任して南京の鐘山書院にて教鞭をとり、76 歳で逝去している。

---

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・琉球資料漢文編』資料編第 1 巻 9、那覇市役所発行、1998 年、397 頁。

宋衡と程順則は二度と会うことができなかったが、帰国後も連絡は続いていた。北京に赴く進貢使節を通して手紙と『雪堂燕遊草』、『雪堂贈言』、『雪堂紀栄詩』、『執圭堂詩草』、『観光堂詩草』をともに送っている。

2. 張丹徒について

【『雪堂燕草』第 30】

張丹徒相公惠賜賀蘭山詩賦謝	**張丹徒相公に賀蘭山詩を惠賜せられ賦して謝す**
臺閣鴻文一代雄、	臺閣の鴻文　一代の雄
使臣何幸沐清風。	使臣何ぞ幸いに清風に沐す
黄扉元老山川秀、	黄扉の元老　山川秀で
紫府真仙翰墨工。	紫府の真仙　翰墨工みなり
萬里峯廻天塹險、	萬里峯廻りて天塹險しく
九邊雲散戍樓空。	九邊雲散じ戍樓空し
追陪帳殿成奇績、	帳殿を追陪して奇績を成し
將相如今屬魏公。	將相今の如く魏公に屬す

【七言律詩】

【平水東韻】

【通釈】

題目：張丹徒宰相より賀蘭山詩を賜り、詩を賦して謝する

張丹徒先生は国の重臣の中にあって、大著を編纂した一代の文豪だと言える。使者の私は幸いにも先生の高潔なお人柄の薫陶を受けている。張先生は朝廷において、権威ある古株の大臣で文章においても優れておられる。天界の仙人のように書画にも巧みである。塞外の峰が連なって回って天塹は険しい。辺境の雲が散らして要塞は空しい。張丹徒先生は皇帝の親征に従って、すでにすばらしい功績を残しておられる。今朝廷の文武大臣のなかで張先生が最も勲功を挙げている。

【分析】

この詩は『雪堂燕遊草』に第 29 題目の詩として現れる。程順則は都通事として北京滞在中に張丹徒と知遇を得ている。『雪堂燕遊草』を通して交流のあった名前がわかる文人（官員）は 3 名[1]いる。詩題の張丹徒もその 3 名の中の一人である。古人は直接に姓名を呼ばない場合が多く、その人物の「字」で称することがよくある。しかし歴史資料の中には本名のみ記され、「字」が記されていないケースもよくある。時には、作者は相手に敬意を表すために「字」さえも詩題に記さず、宋潜川の場合もそうであったが、姓と官職や出身地を用いることが多々ある。この詩もまさに、そうした詩である。

詩題の「相公」は宰相に対する敬称である。「張丹徒相公」は張丹徒が宰相（首相）であることを表す。彼は程順則と会った際に「賀蘭山詩」を贈っている。程順則はそれに謝意を示すために、この詩を作っている。題目を通して張丹徒は宰相レベルの高官であることがわかる。『清史稿』を調べると張丹徒という高官の記録はない。ただ『清史稿』巻 267 列伝 54 に、張玉書という人物の出身について江南丹徒人と記載されている。この張玉書が張丹徒であろう。『張文貞公年譜』[2]によると張玉書

[1]宋衡（淮角樓逢滇南正總裁宋灊川太史賜闈墨，灊川先生惠賜春山八詠和章賦謝，京邸荷太史宋灊川先生惠教瀛臺恭紀詩并墨畫賦謝。）張玉書（張丹徒相公惠賜賀蘭山詩賦謝）。李元章（都門留別鴻臚李元章先生）。

[2]丁傳靖『張文貞公年譜』（『近代中国史料叢刊二輯』所収、文海出版社、1966 年、5 頁、17 頁、83 頁）

は字は素存、明崇禎 15 年（1642）に丹徒県に生まれ康熙 50 年（1711）に死去している。順治 14 年（1657）16 歳の時、江南郷試で挙人に選ばれた。順治 18 年、会試第 5 位の好成績をとって庶吉士を授けられた。張玉書の父は順治 4 年（1647）進士に選ばれている。康熙年間、張玉裁は進士の一甲第二をとった。家族の中で同時代に 3 名の進士が現れており、名望のある家と言える。

「臺閣鴻文一代雄，使臣何幸沐清風」の「臺閣」とは中央政府機関の別称である。「鴻文」は大著を意味する。『池北偶談』の「談故二」には、以下の記述がある。

> 開局編修『明史』（中略）以原翰林院掌院學士徐元文為監修官、翰林院掌院學士葉方藹、右春庶子兼侍講張玉書為總裁官[1]。（編集局を開き、『明史』を編修する。もと翰林院掌院学士徐文元を監修官となし、翰林院学士葉方藹、待講を兼ねる右春庶張玉書を総裁官となす）

また、『清史稿』巻 484 列伝 271 には以下のような記載がある。

> 初、順治二年詔修明史、未幾罷。康熙四年、又詔修之、亦止。十八年、命徐元文為監修、取彭孫遹等五十人官翰林、與右庶子盧君琦等十六人同為纂修。（中略）至三十二年、再召王鴻緒于家。命偕陳廷敬、張玉書為總裁。陳任本紀、張任志、而鴻緒獨任列傳[2]。（最初、順治二年、帝は明史を修めようという詔を下さるが、程なくやめた。康熙 4 年また明史を修める詔を下さったがまたやめた。康熙 18 年、徐文元に命じて監修となし、彭孫遹など 50 名の翰林を授け、右庶子盧軍琦などの 16 人とともに編纂する。（中略）康熙 32 年に至り、再び王鴻緒を家に招いて陳廷敬、張玉書に命じて総裁となす。陳廷敬は本紀の部分を編纂し、張玉書は志の部分を編纂し、王鴻緒は列伝の部分を編纂した）

これによると張玉書は『明史』を編纂した人物であることが分かる。康熙 32 年には『明史』の総編纂官に任じられている。張玉書は「翰林院」で「鴻文」に値する『明史』を編修していた。「鴻文」とはこの『明史』を指すと考えていい。「清風」は高潔な品格をいう。張玉書の『清史稿』にある伝記の最後では以下のように評価している。

> 玉書謹慎廉潔、居政地二十年、遠避權勢、門無雜賓、從容密勿、為聖祖所親任。自奉儉約、飲食服御、略如寒素。雍正中、入賢良祠[3]。（張玉書は謹慎、廉潔で官位に居って 20 年経っても権勢を遠く避け、賓客との往来に遠慮して聖祖に信用された。倹約を守って飲食、服飾、馬車などに拘らず、すべて素朴である。雍正年間、賢良祠に祀られている。）

資料から、張玉書は廉潔、公正に公務に取り組んでいたことが分かる。それで張玉書は雍正年間、「賢良祠」に祀られている。「賢良祠」は雍正 8 年（1730）に設置され、国に大きな貢献がある人物の位牌が奉安されている。清代は、99 名の人物が祀られている。

「黄扉元老山川秀，紫府真仙翰墨工」の「黄扉」についてであるが、古代、丞相などの高級官員の役所の正門は黄色で塗られていた。「黄扉」は中央政府の行政機関を指す。「紫府」は仙人が住む場所で

---

[1]清・王士禎『池北偶談』、中華書局、1982 年 5 月、69 頁。
[2]趙爾巽等撰『清史稿』巻 484 列傳 271、中華書局、1985 年 5 月、10034 頁。
[3]趙爾巽等撰『清史稿』巻 267 列傳 45、中華書局、1985 年 5 月、9961 頁。

ある。「黄扉元老」は張玉書の位階をいう。張玉書は康熙 29 年（1690）に文華殿大学士（正一品）となって戸部尚書（従一品）を兼任している。清代、宰相という官職は設置されてないが、大学士まで昇進し、六部の尚書を兼任した人物を称える言葉として宰相という名称を使用したのであろう。「紫府真仙」は張玉書の風采を言う。張玉書の身のこなしが仙人のようであることをいう。また「山川秀」「翰墨工」は張玉書の優れた文才を褒めたたえる言葉である。

「萬里峯廻天塹險，九邊雲散戍樓空」の「九辺」は明代の北方における 9 つの辺境の軍事駐屯地をいい、後に辺境のことをいう。「萬里峯廻」、「天塹」、「雲散」、「戍樓」などは、辺境の厳しい状況が親征により平定されて平和が戻ったことを表現する言葉として用いられている。康熙 35 年（1696）、程順則が北京入りしたのは、ちょうど康熙帝が噶爾丹（ガルダンハン）の乱[1]を親征により制圧し勝利した年で、北方辺境での戦いが終わり、平和が戻った時期であった。

「追陪帳殿成奇績，如今將相屬魏公」の「帳殿」は皇帝の行幸の際にとばりで作った仮の行宮をいう。康熙帝は北方辺境の安定のために三回自ら軍を率いてガルダンを討伐しており、「帳殿」は康熙帝の親征した際の行宮を指す。「追陪帳殿」は張玉書が康熙帝に従ってガルダンに向かうことをいう。このことについて張玉書の伝記には以下のように述べられている。

> 三十五年、上親征噶爾丹、玉書扈行、預參帷幄。師次克魯倫河、噶爾丹北竄、大將軍費揚古截擊、斬殺幾盡、噶爾丹僅以身免、玉書率百官上賀。三十六年、充平定朔漠方略總裁官[2]。（康熙 35 年、皇帝が噶爾丹を親征する時、玉書は随行して参謀をする。王師は克魯倫川を攻略し、噶爾丹は北に逃走する。大将軍費楊古は攻撃して反軍がほとんど消滅したが噶爾丹だけ逃走した。玉書は百官を率いて皇帝にお祝いをする。康熙 36 年、玉書を平定朔漠方略総裁官となす）

康熙 35 年（1696）、張玉書が康熙帝の親征に参加したことは確かである。後に張玉書は康熙帝に重用されて平定ガルダン戦争史の総編修官となっている。以上の功績は確かに「奇績」とも言える。これ以外には、康熙 20 年（1681）に「經筵講官」に任用されてもいる。張玉書は刑部、兵部、礼部、戸部の尚書の経歴をもち、こうした多くの朝廷の文武大臣を経験した人物は清代において稀有だといっても過言ではない。

『琉球資料』には張玉書への書簡は収録されていない。おそらく、張玉書のような高官には容易に接触できなかったのだろう。ふりかえって考えてみると、程順則が張玉書と出会ってさらに詩を作ってもらったのは珍しいことであろう。これによって程順則は北京で文才を持っている者として名を揚げたのではないだろうか。

3. 趙二尹について

【『雪堂燕遊草』付録第 1 】

送海澄趙二尹歸署	海澄の趙二尹の署に帰るを送る
遙送星軺返海隅（公奉憲檄護貢京旋）、	遥かに星軺を送り海隅に返る（公は憲檄を奉じて貢を護り京より旋る）
河陽花里暫分符。	河陽花の裏暫く符を分く

[1]康熙 27―29 年（1688―1690）、康熙 33―36 年（1694―1697）のジュンガル貴族の反乱に対して康熙帝は親征を行った。

[2]趙爾巽撰『清史稿』巻 267 列傳 54、北京中華書局、1985 年 5 月、9961 頁。

一鞭柳色山雲亂、	一鞭の柳色山雲亂れ
百里琴聲夜月孤。	百里の琴聲夜月孤なり
水郭朱霞光古驛、	水郭　朱霞　古驛に光り
江橋瑤柱麗行廚。	江橋　瑤柱　行廚に麗し
看君皂蓋衝寒去、	君の皂蓋　寒に衝して去くを看
愁殺東封舊酒徒。	愁殺す東封の舊酒徒

【七言律詩】
【平水虞韻】

【通釈】
題目：海澄県の趙二尹の帰署（役所に戻ること）を送る
北京より使者を遠く福州まで護送して桃の花が咲いている時、私（程順則）と別れる。一本の柳枝を送ると、私の気分が山中の雲のように乱れる。百里の外にいる私は、夜一人で琴を弾き、月だけが琴曲を聴いている。近くにある河は朝霞の光を反射して古い柔遠駅を照らしている。見送る際に趙君の旅中の食として、私は干したホタテを贈った。まだ寒い内に趙君の姿が朝の霧に消えるのを見ている。趙君と一緒に酒を痛飲していた私は愁いをこらえる。
【分析】
この詩は北京から福州まで送ってくれた伴送官が帰署するにあたり、別れの切なさ、侘びしさを詠んだものである。万感の思いが込められている。帰署したのは海澄の趙二尹である。海澄は福建漳州府の海澄県である。「二尹」は県丞の別称である。県丞は副県長に相当する。『海澄県志』6 巻に以下の記述がある。

> 趙良玉、直隷山海衛人、監生康熙二十五年七月任、清勤自律[1]。（趙良玉　直隷山海衛の人、国子監生、康熙 25 年 7 月に任じられており、廉潔勤勉である）

「趙二尹」は康熙 36 年（1697）に程順則らを北京へ送り、また北京から福州へ送る護送任務を果たしていた。趙良玉の後任は康熙 43 年に赴任しているので、時間的経緯からして「趙二尹」は趙良玉と理解していいだろう。

「遙送星軺返海隅，河陽花里暫分符（公奉憲檄護貢京旋）」
「星軺」は使者が乗っている車である。「海隅」は海辺を指し、辺鄙な場所を意味する。琉球ともとれるが、「海隅」が琉球を指すのかは検討の必要がある。詩の自注に「公（趙二尹）上司の命令を奉じて進行使節を護送し（また共に）北京から帰る」とあるので、「海隅」は福建を指すと理解した方がいい。この注は北京への琉球使節に対する伴送制度を反映している。順治 8 年（1651）に「定凡外國貢使及定額從人來京、沿途口糧驛遞夫馬舟車、該督撫照例發給、差官伴送來京（外国の使節及び随行する人北京に来る際に途中で要る糧食、駅伝、人件、船、馬、車などは督撫が例の通りに発給して官伴を遣わせて北京まで伴送することを定める）」[2]と規定され、外国の使節及び随行人が上京する

[1]清・陳瑛等修、叶廷推等纂『乾隆海澄縣志』（『中国方志集成・福建府県志輯』30 号所收、上海書店出版社、2000 年 10 月、467 頁。
[2]『清会典事例』巻 510、中華書局出版社、1991 年 4 月、902 頁。

際には、通過する各省で督撫は例に照らして、使節が上京途中に必要な食糧・駅・馬・馬車を支給し、官吏や兵員を派遣して省境まで護送させるのが義務付けられていた。これに関して、先行研究の『清代琉球使節の進行日程に関する研究』（以下『進貢日程』）は体系的に論じている。『進行日程』によると[1]清代には、伴送官の職官の変遷については概ね三期に区分することができる。第一期は清代初期から乾隆 33 年(1768)、第二期は乾隆 35 年(1770)から嘉慶 15 年(1810)、第三期は嘉慶 17 年(1812)から同治 13 年（1874）である。趙二尹はまさに第一期の枠に入る。第一期に派遣されていた伴送官は一人で、官位の低い文官であった。巡検・照磨・経歴・検校・典史・県丞や試用知県などの官職を確認することができる。「趙良玉」は海澄の県丞である。康熙 37 年（1698）5 月 24 日に程順則らは福州を出発して、途中運河等も利用し 8 月 24 日に北京に入城するまでに約 3 か月間を費やしている。そして使節は進貢の公務を終えると、9 月 23 日に北京を出発し同年 12 月 26 日に福州に戻っている。趙良玉は程順則との交流があった約半年の内に、深い情誼を結んでいたことが、詩を通して伝わってくる。「河陽花」は「河陽一県花」に由来している。晉代、潘岳は河陽県令となり、県内遍く桃李樹を植えたことから、桃李は「河陽一県の花」と呼ばれた。「河陽花」は桃李の花を表している。趙良玉は程順則らを安全に福州琉球館に護送し終わった後、事後処理等もあってか、すぐに海澄県に戻らず、翌年桃李の花がさく頃に帰署している。「分符」の元の意は帝王が爵位を授けることである。無事に護送の職務をおえたことから、その褒賞として若干職階が上がったのかも知れない。

「一鞭柳色山雲亂，百里琴聲夜月孤」

「一鞭柳色」は一本の柳枝を指す。古人は別れる際に柳枝を折って相手に送り留別とした。「山雲亂」は雲が入り乱れる様相をいい、程順則の複雑な別れの心情を表している。「百里琴聲」は漳州府より百里外の福州琉球館にいる私（程順則）が侘びしく琴を弾く様子を詠んでいる。

「水郭朱霞光古驛，江橋瑤柱麗行廚」

「水郭」は河と隣りあわせの城郭である。清代、福州城の地図によれば福州城内に 2 つの河が流れている。柔遠駅は福州の水部門外にある。「朱霞」は霞が赤らんでいる情況をいい、趙良玉が海澄県に帰る日の朝陽のさした霞を指している。柔遠駅の近くには瓊河が流れて（河口）萬寿橋はその瓊河を跨いでいる。おそらく程順則は趙良玉を萬寿橋で見送ったのであろう。別れる前、程順則は帰途の食として「瑶柱」（干したホタテ）を趙良玉に贈っている。

「看君皂蓋衝寒去，愁殺東封舊酒徒」

「皂蓋」は古代、官員が使う黒い傘（蓬傘）の意である。「衝寒去」は趙良玉がまだ朝の寒いうちに急いで帰署したことを表す。「東封」は東の封国で琉球を指す。「舊酒徒」は程と趙二人が半年以上の付き合いの中で、酒を飲み交わす深い情誼を結んでいたことを示している。

趙良玉は海澄県で県丞に任じられているので程順則は進貢使節を通して書簡を届けるのが難しかったのであろう。または程順則は趙良玉には書簡を送らなかったのかもしれない。ちなみに『琉球資料』には趙良玉への書簡は収録されていない。

第二項　福州滞在中の中国文人との接触

この段落では程順則が福州滞在中に、交流があった人物の詩を分析する。

１．林麟焻について

『雪堂燕遊草』の始めには林麟焻の序文が載せられている。林麟焻の字は石来で、康熙 9 年(1670)

[1]陳碩炫「清代琉球使節の進貢日程に関する研究」琉球大学大学院、人文社会科学研究科博士論文 2008 年、86 頁、87 頁。

に進士に選ばれて中書舎人を授けられた。康熙 21 年（1682）に冊封琉球副使に任命されて琉球に至った。琉球に滞在中、日常の事を述べる絶句を 50 首余り作り、琉球の文人士大夫との吟詠作品を合わせて詩集として編集した。同年（康熙 21 年）程順則は二十歳であった。16 年後（康熙 37 年 1698）、程順則は自ら「冊封之時、順則亦在甄陶之内、佩德已深邀澤更切[1]（冊封の時、順則も亦甄陶の内に在り、徳を佩すること已に深く、澤を邀えること更に切なり）」と述べている。来琉した年（康熙 21 年）、程順則が林麟焻と面会したかどうかは確認できないが、程順則はどこかで林麟焻を見かけたと思われる。程順則は北京への進貢任務を終えて、福州で文人や士大夫を訪問し始めた。当時、林麟焻は貴州学政より退官したばかりで、故郷の莆田に戻って先祖の別荘を修繕して定年生活を過ごしている。程順則はできたばかりの『雪堂燕遊草』を林麟焻に進呈して詩を添削することを願いでた。このことに関しては『琉球資料』に収録されている林麟焻への書簡から分かる。程順則は自分の詩集を添削することを願うだけでなく、鴻臚寺の李元章からもらった「聖製耕織圖」をともに見せて跋文を要請した。しかし、莆田にいる林麟焻には福州にいる程順則は面会することができなかった。程順則は琉球人であり、唐突に莆田に行き、林麟焻と会うことは絶対にできなかった。二人は実は書簡の往来を通して交流したのである。書簡の中で程順則は「祗縁凜遵法紀、不敢逾越津關、所以翹企高門、如在天際。擬再遣人、代躬拜辞[2]（祗んで法紀を凜遵し敢えて津關を逾越せざるに縁り、所以に高門を翹企すること天際に在るが如く。再び人を遣わし、躬に代わりて拝辭せんことを擬す）」と言った。規則の制限によって程順則が林麟焻と会えなくて残念な気持ちがあらわれている。また『琉球資料』の林麟焻への書簡に「慨惠鼎序、并賜詩箑大刻（鼎序を慨惠し、并びに詩箑の大刻を賜る）[3]」という記述がある。程順則が帰る前に林麟焻は序文を書いただけでなく自分の詩集も程順則に送ったことがわかる。

程順則は遠い琉球からの若い知識人として、16 年前に琉球に至った林麟焻を忘れず、自ら訪れることはなくても人を派遣し、お土産を差し上げて挨拶を届けた。程順則は外国の使節として、人間関係の処し方に巧みであったことが伺える。

２．譚述について

【「雪堂贈言」第１】

譚述　古菴 内廷供奉現任侯官縣	譚述 古菴 内廷供奉侯官縣に現任す
帝京輸玉帛	帝京玉帛を輸る
萬里沐恩還	萬里恩に沐して還る
使節經年麗	使節年を經て麗しく
星槎泛月閑	星槎月に泛びて閑なり
詩情山色裏	詩情山色の裏
酒興與海濤	酒興と海濤と
間從此歸國	間し此れより歸國すれば
應知列上班	応に上班に列ぶるを知るべし

【五言律詩】

【平水刪韻】

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・琉球資料漢文編』資料編第 1 巻 9、那覇市役所、1998、393 頁。
[2]前掲『琉球資料・漢文編』、398 頁。
[3]前掲『琉球資料・漢文編』、398 頁。

【通釈】

北京にて貢物を献上して万里を経て（使節が）皇帝の恩恵を蒙り帰って来た。数年間を経て使者はますます麗しくなってきた。遠洋の船は月夜に港で静かに出発を待っている。山色も詩情を醸し出すような境地にある。酒興は波の音とともに楽しむ。これから帰国したらきっと（程順則は）国の重臣になるであろう。

【分析】

この詩は『雪堂贈言』の第１首である。題目から譚述という人物は内廷供奉という身分で侯官県知県に任じられていることが分かる。『閩侯県誌』によると、譚述は康熙 34 年（1695）に閩侯県の知県に就任している。また『臨城県誌』によると康熙 41 年（1702）に譚述は臨城県令に転任している。譚述は康熙 34（1695）年から康熙 40 年（1701）まで侯官県令を務めていたことが知れる。譚述は江南清河の「廩生」である。「廩生」は明、清代、生員（地方官立校の学生）のうち、歳試（三年に一回の地方試験）で好成績を取って国家から学資の支給を受けたものである。譚述は挙人ではないが侯官県の県令に任じられている。それは、譚述の特別な履歴と関わっている。譚述の身分は「内廷供奉」である。「内廷供奉」は正式な官職ではない。「内廷供奉」について、『續梅廬叢話』は以下のように記している。

> 康熙十六年、内廷始設南書房。凡供奉之員、不論官職崇卑統稱南書房翰林。内廷供奉、唯南書房翰林稱之。上書房行走者、不得同此稱也[1]。（康熙16年、内廷が初めて南書房を設立する。およそ供奉の人、官職の上下を論ぜず南書房翰林と称する。内廷供奉はただ南書房翰林としか称しない。上書房行走の者はこの称を同じくしてはならない）

康熙 16 年（1677）に、内廷に南書房が初めて設置され、そこに供奉する人員は「南書房翰林」、「内廷供奉」と呼ばれていたことが分かる。

また『臨城県誌』には、以下のような記述がある。

> 譚述、江南清河廩生<u>欽取</u>内官[2]。（譚述　江南清河の廩生で皇帝自らに選ばれて内官となる）

「内官」とは内朝官で内廷供奉を指す。「欽取」は皇帝自ら選ぶことを意味する。つまり、皇帝によって廩生である譚述が内廷供奉に選出されたことが分かる。康熙帝はかつて 6 回江南地域を巡視している。一回目は康熙 23 年（1684 ）、二回目は康熙 28 年（1689）である。康熙帝は江南を巡視する際に江南地域の挙人、生員を集めて自ら人才を選ぶこともあった。つまり、康熙 23 年（1684）か康熙 28 年（1689）のいずれかに、譚述は康熙帝に注目され内廷供奉を授けられたのであろう。内廷供奉は品級が高くないが皇帝に近づける極めて光栄な職であった。内廷供奉の譚述の詩は『雪堂贈言』の中では進士である周寅陽の前に配置されている。潭述が内廷供奉を授けられたことは潭述への書簡にも反映されている。

> 老先生閣下、當代斗山、清時麟鳳、筆奪萬壑千岩之秀、文名早著于天都（老先生閣下は當代の斗

[1]清・況周頤『續梅廬叢話』、中華書局出版社、1956 年 12 月、15 頁。

[2]清・楊寛、喬已百『康熙臨城縣志』（『中國地方志集・ 河北府縣志輯』71 号所收）上海書店出版社、 2006 年 10 月、46 頁。

山、清時の麟鳳なり。筆も萬壑千岩の秀を奪い、文名は早に天都に著わる）[1]

周知のごとく、県令に任じられる条件としては少なくとも科挙で挙人に挙げられなければならない。以上の資料を見ると潭述は非凡な文才を持ち、天子に買われていたことがわかる。そのため潭述は挙人でさえもないのに候官県令に任じられていたのであろう。

「帝京輸玉帛、萬里沐恩還」

「玉帛」は玉と絹織物のことで、祭礼、盟約や朝廷への参内などのときの礼物として用いる。ここでは、「玉帛」は皇帝への朝貢品である。「沐恩還」は、程順則をはじめとする琉球進貢使節一行が皇帝の恩沢を受けて帰って来たことをいう。

「使節經年麗、星槎泛月閒」

「經年麗」は、程順則の文才が時を経てってますます優れて来たことをいう。「星槎」は海と天河に往来する船である。ここでは琉球に帰る進貢船を指す。「泛月閒」は夜に船が静かに港で泊まって出発を待っているという意味である。

「詩情山色里、酒興與海濤」

「酒興」から譚述が程順則のために餞別宴を用意していたことが分かる。程順則が帰る前に当地の衙門に挨拶をしたことから、小宴が催されたのであろう。

「間從此歸國、應知列上班」

「列上班」は高級官位に昇進することである。最後の句は譚述の程順則に対する祝福の言葉である。

この詩は程順則らの帰国の直前に書いたものである。上京使節は帰国する際、諸衙門へ赴き別れの挨拶を告ぐ「辞官」という儀礼を行っている[2]。辞官の対象については、深澤秋人氏によって総督、巡府と布政司及び閩海関等であったことが指摘されている[3]。そうした侯官県令、閩県県丞の詩を通して、深澤氏が指摘した衙門以外に、福州にある侯官県、閩県にも辞官の儀礼を行ったことが分かる。

3. 戴翼について

【『雪堂贈言』第 3】

戴翼　叔子　現任郡司訓	戴翼　叔子　現任郡司訓
國書高捧入京華	国書高く捧げて京華に入る
策馬題詩去路賒	馬に策ち詩を題す去路の賒
漫説張騫稱漢使	漫りに張騫を説いて漢使を称し
還看杜甫出唐家	還た杜甫を看て唐家を出だす
兩年閩嶠瞻仙島	兩年閩嶠にて仙島を瞻る
雙淚蘇臺落野花（寵文燕遊草中有姑蘇省墓詩）	雙淚蘇臺野花に落つ（寵文の燕游草中に姑蘇省墓詩有り）
忠孝如君今返旆	忠孝君の如く今返旆すれば
南風愁絶廣文衙	南風愁絶す廣文衙

【七言律詩】

【平水麻韻】

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・琉球資料漢文編』資料編第 1 巻 9、那覇市役所、1998 年 、400 頁。
[2] 陳碩炫『清代琉球使節の進貢日程に関する研究』琉球大学人文社会科学研究科博士論文 2008 、200 頁。
[3] 深澤秋人「福州における渡唐使節の儀礼について―近世琉球の事例を中心に」（『第七届中琉歴史関係国際学術会議論文集』、中琉文化経済協会、1999 年。）

【通釈】

琉球国王からの国書（表文）を高く捧げて北京に行く。上京の遠路において馬上でも詩を詠む。漢の張騫のように漢使を称して程君は国王の使命を受けて貢路を北上するが、その中で杜甫の如く文才をもって、優れた詩を作っている。程君はこの二年間、福州で故郷に思いをはせ、貢路途中、蘇州の父親の墓の前で涙を流した。忠誠で孝順な程君は、もうすぐ帰国しようとしている。私は南の風に吹かれて寂しくてたまらない。

【分析】

詩の題を通して、作者である戴翼（字は叔子）は、当時福州府学の司訓であったことが分かる。戴翼は『中山詩文集』に登場するだけでなく、陳元輔の『枕山楼課児詩話』の序文も戴翼によって書かれている。『那覇市史・琉球資料漢文編』には、程順則から戴翼への書簡が収録されている。『福州府志』、『福建通志』によると、戴翼は康熙年間に福州府学（学校）の訓導に任じられた平海衛（莆田県に属す）の歳貢生であった。貢生は府、州、県学の生員（地方官立学校の学生）の中から優秀者を選抜して国子監に進学させた者を指す。また民国版『閩侯県志』の巻 44 によると、歳貢生とは廩生（政府から学資の支給を受けた者）の中から、在学期間に応じ府学が一年に 1 名、県学が二年に 1 名を選抜して国子監に進学させる者とある。歳貢生はキャリアの長さを顧慮して選抜されたことから「挨貢」とも呼ばれる。『福州府志』の 11 巻には、清代において府学、県学には教授、訓導各一名を置いたことが記されている。康熙年間に、福州府学の規模は廩生が 40 名、増広生が 40 名（生員は定員なし）で、康熙 21 年に、総督の姚系啓聖が府学に学田（学田の収入が学校の経費になる）57 畝 6 分を贈っている。戴翼に関しては、また『莆田県志』に「戴大槐の孫、平海衛学の生員で沙県の教諭（即ち教授）に任じられ、善事をよくし募金して新しい平海衛学を建てた」[1]と記されている。戴大槐は明万暦年間の進士で河間県令、刑部主事を歴任している。

『琉球資料』の戴翼への書簡には、戴翼に関する以下のような資料がある。

> 老先生以莆陽名宿、司訓榕城、崇道義、敦廉恥尚古雅、點淳華、藝林中、已蒸蒸向化矣。且捐俸彙梓從祀景行錄使配享之大典有光、補刻歐陽先生集（老先生は蒲陽の名宿、榕城に司訓たりて道義を崇め、廉恥を敦くし、古雅を尚び、淳華を點するを以て、藝林中、已に蒸蒸として化に向かえり。且つ捐俸彙梓し、景行録を從祀し、配享の大典をして光あらしめ、歐陽先生集を補刻す）

以上の資料から、戴翼は名望家の門弟から出て福州で司訓に任じられていることが分かる。これ以外にも、戴翼は自費で道徳教本の『景行録』、『歐陽先生集』を改めて刊刻した。戴翼が福州の文教を司ることによって、福州の読書人がみんな皇帝の教化に服従した。

「國書高捧入京華、策馬題詩去路」の「高捧」は琉球使者が恭しく国書を捧げる姿を描いている。「策馬題詩」は、程順則は進貢任務が重いにも関わらず馬の背中で作詩を止めないことを言う。その成果として『雪堂燕遊草』を刊行している。程順則が国の使命を果たし、かつ素晴らしい文学作品を残したことから、この句は戴翼の程順則に対する敬服の意を含んでいる。

「漫説張騫稱漢使、還看杜甫出唐家」では、使者の代表人物張騫と詩人の代表人物杜甫を挙げて程順則はその二人に適う素質と才能を備えていると称えている。

---

[1]「大槐孫、衛學沙縣教諭、好行善事、募建新平海衛學」清・汪大經修 廖必奇『福建省莆田縣志』(『中國方志叢書』[華東地方]所收、成文出版社、1968 年 12 月、 383 頁。

「兩年閩嶠觀仙島、雙淚蘇臺落野花」

「仙島」は仙人が住む島のことである。中国大陸と遠く離れる琉球国を指す。「蘇臺」は蘇州西南の姑蘇山にある。程順則の父親程泰祚[1]は都通事として康熙 14 年（1675）に上京し、帰途で病故し、蘇州に埋葬されている。程順則は康熙 36 年、北京からの帰途、蘇州を経過する際に父親の程泰祚の墓参をし、「姑蘇省墓二首」を作って『雪堂燕遊草』に収録している。

「忠孝如君今返旆、南風愁絶廣文衙」

「忠孝」の「忠」は皇帝に対する忠誠であり、「孝」は程泰祚に対する孝行を指し、忠孝の君子を意味する。「廣文衙」は唐代の学校であった広文館で、後に府県の学校を表す。

【『雪堂雑組』第 15】

寄懐郡司訓戴叔子先生　程順則	郡司訓戴叔子先生に懐を寄す　程順則
曾傳註禮舊家聲、	曾て傳う注禮　舊家の聲
此日春風泮水清。	此の日春風　泮水清らかなり
皋比十年存古道、	皋比　十年　古道存し
蠻箋五月寫離情。	蠻箋　五月　離情を寫く
東溟烟散扶桑曉、	東溟　烟散り　扶桑曉なり
南国雲開苜蓿晴。	南国　雲開き　苜蓿晴る
两地相思不相見、	兩地相い思うも相い見えず
祇餘明月上高城。	祇だ明月餘り　高城に上る

【七言律詩】

【平水庚韻】

【通釈】

嘗て（戴先生の）先祖は礼書に解釈を付けるほど優れていたと聞いている。春の風が吹き府学の池水が澄み切った場所で先生にお会いした。府学で古い時代からの文化を伝えるため十年間ずっと生徒に教授しておられた戴先生に、筆箋もって五月の離別の情を記していただいた。今、琉球は東海の烟が消えて夜が明けようとしている。中国の南に位置する福州も、今ウマゴヤシが茂る中、夜が明けようとしていることだろう。私と戴先生は別々の場所にいるために会うことが叶(かな)わない。明月がある夜に高楼に登って月にこの思いを託すことしかできない。

【分析】

「曾傳註禮舊家聲、此日春風泮水清」の「註禮」は礼書に解釈を付けることで、先祖が相当の有識者であったことを称えている意を含んでいる。「家聲」は一家の名誉や声望を指す。戴翼の一家は当地で隆盛しており、厚い声望があったことを言っている。上述したように、戴翼は進士であった戴大槐の孫である。戴氏一家の声望をたてたのは戴大槐である。「泮水」は府県学校にある池である。詩の中では福州府学を指す。

「皋比十年存古道、蠻箋五月寫離情」

[1]六世小宗都通事諱泰祚　古波藏親雲上童名思五良、號景陽行二、原姓虞崇禎七年甲戌六月初七日巳時生、康熙十四年乙卯九月二十六日丑時、蘇州府胥門外天妃宮享年四十二（『程氏家譜（六世　程泰祚）』那覇市企画部市史編集室『那覇市史』資料編第 1 巻 6「家譜資料二」（下）那覇市企画部市史編集室発行、1980 年 3 月、543 頁。

「皋比」は古人が虎皮に座って講学したことから教学を意味する。「古道」は古い時代から伝えて来た孔孟の学説を指す。前半の句は、戴翼が十年間にずっと福州府学で訓導を務めて生徒に儒学を教えていることを記している。「蛮箋」は唐の時代の高麗紙或いは西蜀産の彩色紙のことをいう。

「東溟烟散扶桑暁、南国雲开苜蓿晴」

「東溟」は東海である。「扶桑」は詩の中で琉球国を指す。「南国」は福州を指す。前半の句は程順則が福州で出会った戴翼のことを思いだし、一晩寝られず夜明けになった状況を詠んでいる。後半の句は程順則が、家で徐々に昇っている朝日を見ながら想像した福州の景色である。

「两地相思不相見、祗餘明月上高城」

最後の句「祗餘明月上高城」は中国の詩でよく用いられる「登楼望月」の境地を詠んでいる。遠方の友人を思い、高楼に登って月に友人に対する思いを託しているのである。

この詩は戴翼への書簡とともに進貢使節を通して福州に届けられている。戴翼は実際にこの書を読んだものと思われる。

4. 林皦について

【『雪堂贈言』第 6】

林皦　竹筠誥封翰林

奉使扶桑幾度來、
翩翩能賦大夫才。
捧將玉帛朝天去、
袖得珠璣鼓棹回。
青認龍淵山色杳、
翠浮鮫屋海雲開。
知君明到誇同學、
遙指閩南數舉杯。

林皦　竹筠誥封翰林

使を奉ず扶桑　幾度か來たる
翩翩として能く賦す大夫の才
捧げるに玉帛を将って天に朝して去き
袖は珠璣を得て棹を鼓ぎ回る
青龍淵を認じ山色杳にして
翠　鮫屋浮かび海雲開く
知る　君明到りて同學を誇め
遙かに閩南を指して數杯を舉げる

【七言律詩】

【平水灰韻】

【通釈】

程君寵文は国王の使命を受けて東海にある琉球から幾度も渡唐している。程君は振る舞いが優雅で大夫の才能を備えている。貢物と国書を携えて北京の皇城に向かっていった。そして厚い詩稿を袖に満たして帰国する。詩稿に描いた情景には龍が出没するという深い山がある。帰る際にまた鮫人の居が広い海に浮かんでいるのを見るだろう。程君は明日琉球に帰ったら、同学のことを国内の友人たちに紹介し褒め称え、閩南に向って杯を挙げ遠礼をするであろう。

【分析】

林皦は福州における知識人の間で声望のある人物で、彼もまた程順則に送別の詩を贈っている。『中山詩文集』に林皦に関する詩が 2 首収録されている。一首は『雪堂贈言』の第 6 首、もう一首は『雪堂雑組』の「寄懐太史林竹筠先生」である。林皦は「誥封翰林」という身分を有していた。「誥封」とは五品以上の官吏に対して皇帝がその官の父や妻に名誉職或いは名誉称号を授けることである。林皦の翰林の称号は、彼が五品以上の官職に就いた人物であることから皇帝から授けられたのであろう。皇帝の「誥命」を受けることは無上な光栄であることから、多くが地方志に記載されるが、乾隆『福

州府志』（以下『福志』）には林皦に関する記載がない。福建省の方志については、他にも清代福州の郭柏蒼が著している。郭柏蒼は清末期の福州の博物家である。彼は福州に関する著作を多く著し、方志の『烏石山志』（以下『烏志』）以外に、『竹間十日話』（以下『竹話』）や福建の海産物、福州の水利に関する著作がある。文学においても巨著『全閩明詩伝』[1]などがある。

『福志』、『閩侯県志』には記載されていない林皦に関する記述が、『烏志』と『竹話』に多く見られることから、以下に林皦に関する『烏志』と『竹話』の記載を紹介することにする。

林皦の父は林蕙（字孟采）である。清初の諸生（府県学の学生）で挙人には挙げられなかったが『福志』、『福建通志』に、その事績が残されている。林蕙は明末の諸生である韓錫と深い交わりがあった。二人は共に烏石山の「榕庵」（韓錫の私宅）で修学し、二十年もの間、町に出ることがなかったという。林蕙は一生韓錫の徳に敬服して師と仰いでいたが、韓錫は自分に師事している意識をもっていなかった。韓錫の逝去後、四十年間、林蕙は韓錫の詩文を収集整理し『讓竹亭詩』を刊行している。『福志』は韓錫の学識を「錫研究必始終、条理貫通、暢乎自得、前無古人[2]」と評し高い評価を与えている。林皦はこのような文人の家庭で生まれ育った。林皦は林蕙の次男である。康熙 29 年（1690）に林皦は、5 回持ち主が変わった榕庵を購入している。その後、榕庵は康熙年間福州において有名な知識人たちが集合し交流する重要な場所となる。詩人の「清初六家」の一人渣慎行、「南朱北王」の一人朱彝尊、康熙『浙江通志』の総編纂毛際可など清初の一流の知識人は福州にいる時、榕庵で林皦と詩を唱和したり酒を飲んだりし交友を深めている。後に林皦はそうした交流で得た詩を編集し『榕庵唱和編』として刊行している。『古今図書集成』の編纂者陳夢雷も林皦と数十年の友情を持っている。

林皦の次男林文英（字碧山）は康熙 26 年（郷試）に康熙帝の特別命令で挙人に挙げられた。康熙 27 年（1687）に林文英は進士に挙げられ翰林院庶吉士となっている。後に礼部郎中（正五品）、保定知府などを歴任している。林文英の孫の林守鹿もまた乾隆 17 年（1752）に進士に挙げられている。一族から進士を二人輩出することは極めて珍しいこである。林家そしてその子孫は「名門望族」（名望がある家柄）、「書香門第」（読書人の家柄）であった。こうした家柄を有するのは『中山詩文集』に出てくる福州知識人の中で林皦のみである。以下、そうした点に留意しながら詩の分析を行う。

「奉使扶桑幾度來、翩翩能賦大夫才」

「奉使」とは中国皇帝に朝貢する使命を受けることである。「扶桑」は東方の古い国で琉球を指す。「幾度」は康熙 35 年を含めて程順則がすでに三回福州に来たことを指す。「翩翩」は程順則の振る舞いが優雅であることを言う。「大夫才」は程順則が帝王を補佐する才能を備えていることを指す。

「捧將玉帛潮天去、袖得珠璣鼓棹回」

「玉帛」は玉と高級な織物で、転じて琉球国王が皇帝に献上する貢物を指す。「朝天去」は北京にいって皇帝に謁見することである。「珠璣」は美しく立派な詩文で、程順則の『雪堂燕遊草』を指す。程順則は康熙 35 年（1696）11 月に福州に至り、康熙 37 年（1698）6 月に北京に到着しているが、その往復道程で 79 題の詩を作り、『雪堂燕遊草』として刊行している。

「青認龍淵山色杳、翠浮鮫屋海雲開」

この句を理解する為に頚聯の意義が分からなければならない。律詩は第一・二句を首聯、第三・四句を頷聯、第五・六句を頚聯、第七・八句を尾聯として四つの部分に分けらる。四つの部分に応じて起（詩を起こす）、承（前句を受けて下を起こす）、転（変化）、合（詩の全体をまとめ）という作用

[1]明代全福建省詩人の詩集及び小伝。

[2] （清）徐景熹『乾隆福州府志』巻 63（『中国地方志集成・福建府縣志集』2 号所收、上海書店出版社、2000 年 10 月、207 頁。

がある。この詩は第五・六句から詩の内容が変わる。

第五句は第四句と繋がっている。第四句は程順則が朝貢を利用して『雪堂燕遊草』を成立させたことを記し、続けて第五句は『雪堂燕遊草』の中で描いた風景について記している。これは「虚景」である。第六句も第七句と繋いている。第七句は程順則が琉球に帰った後の行動を言っている。第六句は程順則が海を渡る時に見た景色である。これは「実景」である。第五句から第六句に移行して虚景より実景へ移行しているのが見られる。

「知君明到誇同學、遙指閩南數舉杯」

「明到」は福州を出帆した進貢船が明日には琉球に着くだろうと予想している。林皦の程順則が安全無事に早く琉球に戻れるようにといった願いも込められている。「誇同學」は、交流があった知識人を褒め称えるという意味である。「數舉杯」は程順則が琉球に帰っても福州にいる友人を忘れずに杯を挙げて礼を尽くすという意味である。

【『雪堂雑組』第 16】

寄懐太史林竹筠先生	**太史林竹筠先生に懐いを寄す**
水自龍門一泒通（先生與予業師陳昌其同研席）	水龍門より一泒に通ずる（先生予の業師陳昌其と研席を同にす）
餘波深喜借名公	餘波深く喜ぶ名公に借るを
花箋分葉書新句（予言旋時先生有詩贈別）	花箋葉を分け新句を書し（予言に旋らんとする時先生に詩の贈別あり）
畫舫乘潮趁好風	畫舫潮に乘りて好風に趁う
臨海橋晴看夜月	臨海橋晴れ夜月を看る
凌雲亭曠跨朝虹（臨海橋凌雲亭皆中山勝地）	凌雲亭曠く朝虹に跨がる（臨海橋・凌雲亭は皆な中山の勝地なり）
毎遊勝地頻翹首	勝地に游ぶ毎に頻りに首を翹げ
盡把離心寄塞鴻	盡く離心を把って塞鴻に寄す

【七言律詩】

【平水東韻】

【通釈】

題目：太史林竹筠先生に思いを託す

同じ支流を遡ると水の源が龍門である（林竹筠先生と私の師匠が同じ所で修学していた）とはいえ、我々のような末流の者が名望のある林竹筠先生の世話をいただき誠に喜ばしいことである。美しい詩箋で数頁の詩を作っていただいた。私は画舫に乗って順風に乗じて帰国した。清朗の夜に、琉球の臨海橋で月見をし、凌雲亭で朝の虹が空に跨る景色を見る。毎回、名勝地に来て福州と似てる景色を見かけたりすると、頻りに福州の方を望む。私は先生に対する離別の気持ちを塞外の雁に託すしかできない。

【分析】

「水自龍門一泒通、餘波深喜借公名（先生與予業師陳昌其同研席）」の「龍門」は名望の門弟である。「水自龍門」は、林皦が名望隆盛な門弟から生まれ育ったことを指す。「泒」は「派」の誤字で支流という意味であろう。程順則の自注で林先生は私の師匠と同じ所で修学していると記している。「一

泒通」はおそらくそのことを言っているのであろう。また自注の「與予業師陳昌其同研席」には留意が必要である。「研席」は修学の所、或いは講学の所を意味する。つまり、林皦と陳元輔は同じ所で修学或いは講学していたということである。程順則は陳元輔との関係でおそらく林皦と知遇を得たのであろう。「餘波」は河の末流で程順則の謙虚な喩えである。「名公」は名望や才能が素晴らしい人物で、林皦を指す。後半の句では福州の徳才兼備の先生の弟子になったことの喜びを伝えている。

「花箋分葉書新句、畫舫乗船趁好風」

「花箋」は美しい精美な紙のことである。「畫舫」は通常遊覧用の船を指すが、ここでは帰国の船、つまり進貢船を指す。

「臨海橋晴看夜月、凌云亭曠跨朝虹」は、頷聯の対句であるが、そこで琉球の名勝地もうまく描いている。臨海橋は明治初年の「那覇市街図」によると、臨海寺と三重城の間の橋であることが分かる。「凌雲亭」は即ち「望仙閣」で首里城の東にある「東苑」のことである。「臨海橋」と「凌雲亭」、「晴」と「曠」、「看」と「跨」、「夜月」と「朝虹」が対になっている。全体的に対応して夜の景色と朝の景色も照らし合わせて一つの景物から広い景色に展開していく動感がある。

「毎游勝地頻翹首、盡把離心寄塞鴻」

「翹首」は首を揚げることで切望しているさまである。「離心」は別離の情である。「塞鴻」は辺境の鴻である。鴻や雁は古典中国文学で消息や手紙の送達者とみなされている。程順則は毎回臨海橋や凌云亭にくるたびに、福州の光景を思い出す。福州と似た風景が程順則の離別の気持ちをさらに掻き立てる。その気持ちを鴻に託している。

『琉球資料』の中には林皦への書簡が収録されている。まず、書簡のタイトルに注目したい。タイトルは以下のように書かれている。

候誥封翰林竹筠師伯書稿

タイトルで程順則は林皦を「師伯」と呼んでいる。また、書簡の正文に「唯是弊業師陳先生與老先生同研席三十稔、文章生氣為仙郷所僅見」との文がある。この文から林皦は陳元輔と三十年間の友情を持ち、同学の関係もあるようである。この林竹筠に対する書簡は康熙 37 か 38 年（1698 や 1699）に書かれたと思われる。遡って康熙 7 年 8 年、つまり 13 歳 14 歳に陳元輔は林竹筠と知りあいとなって同じ塾或いは書院で勉強していた。康熙 37 年、進貢任務を終えて、福州から帰る前、程順則は自ら林皦を訪れて教えを受けた。

書簡にまた次のような文がある。

> 弊業師負才不偶、磊落風塵、弊國子弟、咸受教澤、而冰心鐵骨老而不渝、僕深愧官微祿薄、力無從心、尤冀老先生時加照拂以慰遠人之望、則拜領隆情、當不朽矣（弊業師は負才不偶、風塵に磊落たり。弊國の子弟は咸教澤を受けて冰心鐵骨にして。老いて渝わらず。僕は官微く祿薄く力の心に從うこと無きを深く愧じ、尤も老先生の時に照拂を加えて以て遠人の望みを慰められんこと冀う。則ち隆情を拜領して當に朽ちざるべし）。

以上の文を通して以下の 3 点がわかる。

1. 陳元輔は才能を持っているが不遇で、多くの琉球からの学生が陳元輔に教られえたことがある。2. 程順則の言葉を通して婉曲に陳元輔の経済状況がよくないと表している。3. 程順則は帰っても師匠に気を配って師伯の林皦に自分の代わりに陳元輔を面倒してくれるようにと依頼した。程順則は師匠

である陳元輔に対して情が厚いことが窺える。

5. 林潭について

【「雪堂贈言」の 10】

右調阮郎歸

林潭　二恥　文学

春江漠漠鷓鴣天	春江漠漠たり鷓鴣の天
離情芳草前	離情芳草の前
昔年曾製送君篇	昔年曾て製り君に篇を送る
依依南浦烟（予前有律詩贈別）。	依依たる南浦の烟（予前に律詩の贈別有り）
重過此，榻徒懸（寵文重來予未及接見）	重ねて此を過ぎり、榻徒だ縣けるのみ（寵文重ねて來たるも予未だ接見に及ばず）
何當對別筵	何んぞ当に別筵に對すべし
人生總是雲水緣	人生すべて是れ雲水の縁なり
從違豈謾然	從違豈に謾然たらんや

【通釈】

春の閩江は広くて静かに流れており、江岸で鷓鴣が鳴いている。草が揺ら揺らとする様子は離別の情を映し出しているようである。かつて程君に贈別の詩を作ったことあるが、確かあの時、まだ川辺には霧が漂っていたと覚えている。(前に律詩を贈った)。程寵文が再び来た際には私とは会えなかった。ようやく会えたのが今回の餞別の宴。人生の遭遇や出会いは雲や水のようなもので、また境遇が良いにせよ、悪いにせよ、運命に従うしか術はない。

【分析】

この詩は『中山詩文集』に収録されている唯一の詞である。一般的に詞を作ることは作詩より難しいといわれる。詞を創作する時厳格に各詞牌の格式に従って平仄を考慮するとともに韻脚に注意しなければならない。程順則はそういったことをこなしうる林潭の師事を受けており、これには林潭の文才の凄さも窺える。

林潭は、詞の中で自らを「文学」と記している。文学とは一般的に知識人（秀才レベルの身分）を指す。林潭の経歴はわずかに『長樂六里志』に言及されているのみである[1]。林潭について第一章第四節（ｐ50）参照されたい。

詞は一般的に上闕と下闕の二分部に分けられる。

上闕

「春江漠漠鷓鴣天，離情芳草前。」

「春江漠漠」は春の瓊河がひっそりと流れているさまを表している。「鷓鴣天」は詞牌名の一種である。鷓鴣が多く空に飛ぶという意味として理解していいだろう。古人は鷓鴣の鳴き声が言葉の「行不得也哥哥（離れないで兄さん)」と似ているとする。鷓鴣の擬人の鳴き声を介して林潭の程順則に

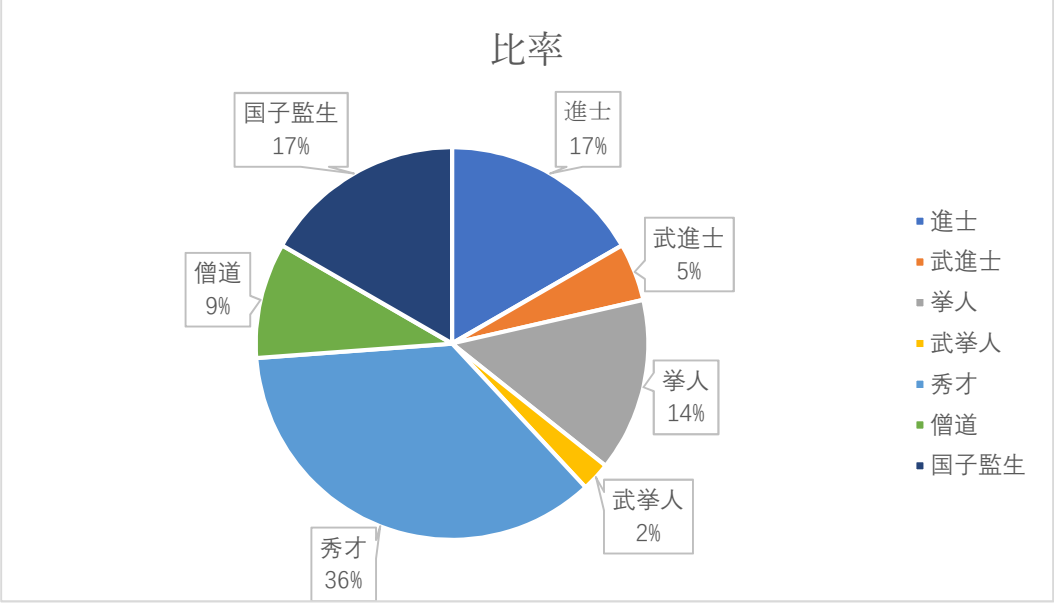
[1]林潭字二恥，高詳里黄石人。崇禎末諸生。明亡，棄舉子業，攜家隱大象山。草寇大疤掌作亂，盡室被擄。妻陳氏，有殊色，不受辱，罵賊寸磔死。潭誓不再娶，寄居文殊寺僧房，以終其身，自號二恥者，恥不忠不孝也。著二恥齋集。(李永選撰『長楽六里志』、福建省地図出版社、1989 年 3 月第一版、55 頁。)

思いを留めたい意を表している。
「昔年曾製送君篇，依依南浦烟（予前有律詩別）の「昔年曾製送君篇」でかつて林潭が程順則に一首の詩を贈ったことが分かる。「依依」は名残を惜しむさまである。「南浦」は河の南側で一般的に送別の場所を表す。

下闕
「重過此，榻徒懸（寵文重來予未及接見），何當對別筵。」
「重過此，榻徒懸」は林潭が福州に来た時、柔遠駅の椅子を壁にかけているといっている。会えなかったという意味である。自注でも程順則が再び（二回目）福州に来た時、林潭と会えなかったと記している。
「人生總是雲水緣，從違豈謾然。」
最後の句で、林潭は自分の一生の遭遇や経験を総括している。上述したように、明末の秀才である林潭は明清交替の動乱の時期を経て家族が土匪に殺され、清代初期の三藩の乱に巻き込まれても堅忍に生きている。大象山で隠遁生活を送っている林潭にとって、世の中の喜び、悲しみ、めぐり逢いなどは、出てはたち消える煙のようなものである。「雲水」は揺れて漂って安定せず、人生における物事そして人との出会いも雲や水ように揺れて漂い、会いたい時に会えない、会ったらまたすぐ別れるものなのだといった想いを綴っている。

第三項　小結

康熙 35 年から康熙 37 年、程順則は進貢の都通事として福州や進貢の道程中、北京で多くの中国の知識人と接触できた。『雪堂燕遊草』、『雪堂雑組詩』、『雪堂贈言』中の漢詩はほぼこの 2 年間で作られた。程順則は康熙 22 年、勤学のために初めて福州に来て陳元輔の下で儒学、文学を学習した。二回目は、存留通事として福州で前に引き続き陳元輔に従って勉強している。また三回目には、都通事として渡来しており、程順則の漢詩、漢文の能力はすでに成熟していた。中国に滞在した 2 年間は程順則にとって創作の収穫期と言える。この二年間には中国の一流の知識人との交流ができるようになって、程順則の文名や詩名は中国でも揚がったといえよう。
以下の図表は『中山詩文集』に現れる 42 名人物を身分よって分類し作成したものである



進士（文）	進士（武）	挙人（文）	挙人（武）	国子監生	秀才	僧道
鄭晃 任五倫 林麟焻 宋衡 張玉書 林竹筠（誥封） 周寅陽	江奕鴻（進士ヵ） 黄壯猷	李元章（挙人ヵ） 謝爾綏 蕭子貽（挙人ヵ） 譚述（内廷供奉） 蘇萬仲（挙人ヵ） 高国	趙澄	趙良玉 戴翼 呉国賢 薩宏 鄭祚昌 陳鏞 林成璉	王登瀛 陳元輔 竺天植 陳文雄 王孔錫 林潭 鄭瀛 李長策 張潭 卓琮 戴施 郭秉學 嚴英 楊澤裕 陳學海	江克榮 無弦上人 釋照乗 釋際立

以上の図表をみると、当時、中国の高官、一流の知識人、例えば、張玉書、宋衡、林竹筠、林麟焻などが程順則と交流している。『雪堂燕遊草』に宋衡に関する詩は 4 首ある。師匠の陳元輔以外、『中山詩文集』に最も多くあらわれる。康熙 36 年（1697）北京に赴く途中、安徽省の盱眙県の淮角樓で雲南郷試を司り終えて北京に戻っている宋衡と出会い、二人は初対面なのに古くからの知り合いのように交友を深めている。宋衡は程順則に郷試の受験生の文集「闈墨」を贈っている。上述したように、闈墨とは郷試、会試で合格した挙人、貢士の回答中から優秀な文を選んで編集刊行した書籍である。この書は読書人の参考書でまた「時文」とも呼ばれる。程順則が贈られた「闈墨」は宋衡が先に編集したもので、まだ礼部に進呈されてないものと思われる。また、程順則の北京滞在中にも二人は会っている。北京で宋衡は程順則の詩を評し、書画を贈っている。宋衡との出会いが程順則にかなり深い印象を与えたことはまちがいない。程順則と出会った時、宋衡は雲南省郷試の総試験官であった。程順則が福州で交流した知識人のほとんどが科挙受験の経験を有しているが、宋衡のように科挙制度についてよく知る総試験官を経験した人物は他にいない。科挙制度に関しても程順則はいろいろ話を聞いていたであろう。また、「闈墨」の中には八股文、試帖詩以外、実務処理の能力をテストする「対策」も収録されている。科挙の時代、郷試、会試の模範文集である「闈墨」は出版物として最も多く刊行されていた。勤学の師匠は科挙の経験者が多い。琉球勤学は、師匠と交流する時にも、本屋で書を買う際にも科挙に関する書籍に接する機会が多いと推測される。程順則は勉学に徹していた人で、例えば、21 歳の時、初めて『六論衍義』を読んでこの本は琉球に普及したら道徳を正しくさせられるし、久米村の弟子の中国語発音も直せると考えていた。科挙の裏（郷試の試験官と接触）と表（科挙の書籍や受験した人物と接触）どちらにも接触した程順則は琉球の科挙とも関わって様々な刺激を受けたのではないだろうか。

琉球の科試は程順則が逝去した 25 年後（1760）、久米村より実施され始められている。本稿で述べた程順則の経験が琉球の科試に影響を与えたかどうかは定かでなく、これからの研究課題となろう。

科挙時代、文科挙に対して武官を選抜する為の武科挙が設けられている。程順則と交流した人物に武進士と武挙人と詩文のやり取りもあった。『中山詩文集』に現れる武進士、武挙人は漢詩も作れる

し相当に文学の素養を備えている。

福建省内で程順則と交流した人物はほぼ国子監生、秀才である。進貢道程中、北京でわりると身分の高い官僚、知識人とは接触しやすい。福州の官僚や知識人は北方の知識人よりも琉球人が身近な存在で関心はそれほど高くないだろうと考えられるからである。一方、福州の国子監生、秀才などは官職に就いて生活する可能性はほぼない。福州の秀才たちは琉球勤学の師匠になるチャンスを待っていたという原因もあると考えられる。つまり、福州柔遠駅をめぐって活躍している地元知識人ネットワークが存在しているとみてもよい。

程順則の三回目の渡唐の旅で交流があった福州知識人については、挙人以下の身分が七割近くを占めていることが分かる。その内、53%が福州府学、県学の在学生を含めた秀才と国子監生である。この比率から当時福州府学の訓導に任じられていた戴翼が程順則に与えた影響の大きさが窺える。戴翼は程順則の師である陳元輔と親どうしが姻戚関係を持っていた人物である。師である陳元輔が福州における程順則の人脈に一番影響を与えていたとされているが、こうした福州府学の訓導であった戴翼の存在も見逃せない。さらに十数年もの間、福州府学の訓導に任じられている経験に注目するべきである。康熙 49 年（1710）久米村に程順則によって明倫堂が建てられた。福州では書院や塾や府学県学などが繁盛していて、戴翼との接触から学校の運営、教学などについて程順則もさまざまに見習していたのであろう。

陳元輔は康熙 37 年前のいずれかの年に候補県丞に選ばれて、林皦のような身分の非常に高い知識人とも交流関係があった。琉球人の師になって以後、同時に陳元輔自身の社会的地位も上がったと見られる。当時、陳元輔は一般的な塾師ではない。挙人に選ばれていないが福州で相当に地位があった知識人である。

程順則は康熙 35-37（1696-1698）までの進貢の旅で多くの中国知識人と知遇を得ている。『雪堂燕遊草』に宋衡に関する詩は 4 首あり、程順則は、その他にも北京で大学士まで昇進し、六部の尚書を兼任した張玉書とも交流している。程順則の中国における人物接触は文人のみならず、その他に僧侶や道士も含まれ、実にひろい人脈を有している。それらの交友については別稿で検討したい。

第五節　王登瀛の琉球人との交友関係について
『柳軒詩草』を中心に

勤学人の師匠の中で、現存する多くの資料が見られる人物として、陳元輔以外には、王登瀛を挙げなければならない。

『久米家譜資料』よると福州に留学していた琉球人は 300 名いる（実際の人数はこれ以上多いと考えられる）[1]。これらの勤学を教えた師匠は統計で 17 名いる[2]。勤学の師匠のほとんどは、名前だけが残っている。今、比較的資料が多く、略歴などが推測できるのは、康熙年間に生活していた竺天植、陳元輔、王登瀛である。この三人に関しては、拙論「福州における陳元輔の交友関係―竺天植、林潭、王登瀛を中心に」[3]を参照されたい。また、三名の中では陳元輔に関して最も詳しい略歴が分かっている。これに関しては、拙論「勤学の師陳元輔の生涯について」[4]を参照されたい。

---

[1] 賴正維『福州与琉球』、福建人民出版社、2018 年 12 月、228 頁。
[2] 同上　235 頁
[3]季龍飛「福州における陳元輔の交友関係―竺天植、林潭、王登瀛を中心に」『琉球アジア文化研究』第 22 号収録、琉球アジア社会文化研究会、2019 年 11 月
[4]季龍飛、「琉球人師匠陳元輔の生涯について」『第 16 回中国琉球歴史関係国際学術会議論文集』収録、福建師範大学閩台研究センター、2017 年 11 月。

王登瀛は陳元輔以外では、多く資料が残っている人物である。現在、見られる王登瀛が作成した文章や詩集、書画は以下の通りである。

① 『柔遠駅草』(『柔遠駅草』と『柳軒詩草』の合冊である。王登瀛の詩集。国立公文書館所蔵)
② 『四本堂詩文集』の王登瀛の序文(『四本堂詩文集』乾隆 20 年刊本。蔡文溥の作品集。沖縄県立図書館所蔵)
③ 『中山詩文集』の王登瀛の序と詩(上里賢一校訂、九州大学出版社 1998 年)
④ 『晩香園梅詩』の王登瀛の跋(林潭著、陳元輔注。東京図書館所蔵)
⑤ 王登瀛が蔡応瑞に贈った「菊図」(康熙 35 年に作成。筆者所蔵)
⑥ 相良玉山の『梅花百詠』の序(序文は康熙 52 年＜1713＞作成。『梅花百詠』の刊本は 1715 年。天理大学図書館、筑波大学所蔵)

王登瀛について本論稿第一章第四節に参照されたい(56 頁)。

本節で中心とする資料は『柳軒詩草』である。『柳軒詩草』から王登瀛と琉球人との交流の様子を見ていきたい。特に王登瀛と蔡氏(四本堂家)の関係を重点的に検討したい。

『柳軒詩草』について

現在見られる『柳軒詩草』は、王登瀛の『柔遠駅草』の一部分である。『柔遠駅草』は『柔遠駅草』と『柳軒詩草』の合冊である。『柔遠駅草』は福州柔遠駅の西にある十景、東にある十景を詠唱した詩作である。合計 20 首の詩は康熙 33 年(1694)に作られたものである。詩集の冒頭に王登瀛の自序、康熙 33 年の林潭の序が載っている。『柳軒詩草』は 32 題 44 首の詩が収録されている。詩集は時間の前後の順に沿って並べられている。詩集に登場している琉球人は 17 名いる。小さな詩集であるが多くの琉球人が登場しており、柔遠駅を舞台とする中琉文人交流の様子を窺うことのできる貴重な資料といえよう。詳細は『柳軒詩草』一覧表にまとめている。

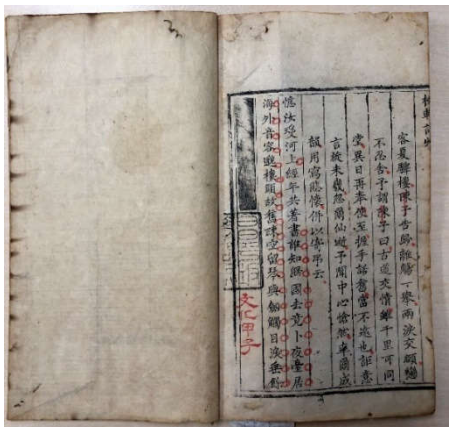
『柳軒詩草』一覧表

番号	詩名	関わる琉球人	創作年代
1	登剣津郡城楼		
2	遊九峰遇雨口占		
3	駅楼蚤秋		
4	留別祝有定		
5	過嚴子陵釣台(2 首)		
6	和汪西樵江楼秋詠		
7	婁東寄懐王孔錫		
8	送祝方儒帰海昌		
9	姑蘇花朝寄懐祝有定		
10	冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻二首(2 首)	梁鏞(得声)勤学	康熙 27 年(1688)
11	和林二恥詠梅(2 首)		
12	同竺天植陳元聲集飲驛樓陳魯水以紙屏索詩並書蕪讀陳元聲題屏詩句即席走筆附和	陳其洙(魯水)存留通事	康熙 33 年(1694)

13	同林二恥陳昌其張庶咸宴集仁山堂		
14	十五夜坐雨		
15	送鄭克敘歸中山	鄭士綸（克敘）都通事	康熙 33 年 5 月（1694）
16	送陳魯水（2 首）	陳其洙 存留通事	康熙 33 年 5 月（1694）
17	送楊仲立	楊仲立	
18	送陳昌其之温陵張元侯幕		康熙 33 年（1694）
19	寄汪西樵		
20	春暮集飲周熙臣翠雲樓	周新命（熙臣）勤学	康熙 33 年春末（1694）
21	立秋後二日集蔡天水山樓坐雨得青字	蔡文漢（天水）勤学	康熙 33 年秋（1694）
22	同程素文毛子翀鄭克文陳楚水紅爾吉驛樓分賦	程順性（素文）勤学、毛士豊（子翀）勤学、鄭克文、陳其湘（楚水）勤学、紅永祺（勤学）	康熙 33 年冬（1694）
23	春仲喜林二恥竺天植陳昌其集仁山堂話旧（7 首）		
24	送蔡祚菴入貢	蔡応瑞（祚菴）正議大夫	康熙 34 年初夏（1695）
25	送梁得剡入貢	梁成楫（得遠）都通事	康熙 34 年初夏（1695）
26	送程素文鄭克文入都	程順性（素文）勤学、鄭克文	康熙 34 年初夏（1695）
27	送金浩然歸中山（2 首）	金溥（浩然）存留通事	康熙 34 年 6 月（1695）
28	送周熙臣（2 首）	周新命（勤学）	康熙 34 年 6 月（1695）
29	送麻舜玉	麻舜玉	
30	懷梁得聲	梁鏞	康熙 34 年（1695）
31	寄程寵文	程順則	康熙 34 年（1695）
32	遙輓陳魯水	陳其洙	康熙 34 年末（1695）

『柳軒詩草』は康熙 20 年代と、康熙 33 年、34 年の詩作によって構成されている。筆者が一首ごとに詩を作った年代を推測してみると、『柳軒詩草』は年代順に沿って詩が並べられている傾向がある。詩集の最後の詩が康熙 34 年の年末に作られていることから、詩集は康熙 34 年末あるいは康熙 35 年初に成立したと推定される。現存の『柔遠駅草』は国立公文書館に所蔵されている。国立公文書館の所蔵以外では見つかっていない。下の図は『柔遠駅草』の表紙、1 頁目、36 頁目の写真である。

筆者撮 2019 年 4 月（東京国立公文書館）



第 1 頁目に「兼葭堂藏書印」「浅草文庫」、第 36 頁目に「文化甲子」（1804 年）という押印がある。

『柔遠駅草』に関する先行研究には上里賢一氏の「王登瀛『柔遠駅草』と琉球」[1]がある。この論文は柔遠駅における琉球人と中国人の実態について、特に詩文の方面に焦点を当てて分析している。しかし、王登瀛について及び詩集の中に現れる琉球人との具体的な交流の様子については述べられていない。そこで、筆者が見つけた新な資料を利用してさらに『柔遠駅草』中の『柳軒詩草』を分析していくことにする。

第一項　王登瀛と蔡氏（四本堂家）

王登瀛と蔡氏の関係を示す資料として、蔡文溥の『四本堂詩文集』の王登瀛の序文がある。ほかに蔡氏との交友関係を示す資料は、柔遠駅草の詩「送蔡祚菴入貢」、蔡祚菴に送った「菊図」がある。現存する資料を通してみると、王登瀛と最も深く、最も長く交流が続いている琉球人は蔡応瑞をはじめとする蔡氏（四本堂家）＜以下蔡氏＞といえよう。王登瀛と蔡氏との関係が最も深く、最も長く続いている様子について、本節で上記の三つの資料を利用して分析しながら説明していきたい。

『四本堂詩文集』の王登瀛の序文には、蔡氏と接触するきっかけ、蔡応瑞との交遊の経緯及び蔡応瑞の子孫との交流の経緯が詳しく述べられている。まず、王登瀛序文にある以下の資料を用いて蔡応瑞との交遊関係を見てみる。

① 甲戌歳中山祚菴蔡君諱應瑞、以正議大夫奉使入貢停駐驛樓得與交臂[2]。（甲戌の年、中山祚菴蔡君諱応瑞は正議大夫として進貢の使命を奉じて柔遠駅で駐在して、私との交遊ができた）

② 王事鞅掌之暇或看花亭畔或聽兩燈前杯酒談歡、雍容爾雅彬彬有中國儒者之風[3]。（王の使命を尽し

---

[1] 沖縄教育委員会『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム研究発表要旨』、沖縄教育委員会出版、1992 年 83 頁―102 頁。

[2] 蔡文溥、乾隆 20 年序刊本『四本堂詩文集』、榕樹書林、2003 年 9 月影印出版、10 頁。

[3] 同上　11 頁。

た後の暇に一緒に亭で花見をし、あるいは灯の下で酒を飲みながら心おきなく語り合った。祚菴は風雅の人物で中国儒者の様子が窺える）

③ 丙子春祚菴自都門旋 復得朝夕盤桓出五雲堂遊草示余、讀之清新俊逸音韻鏗鏘饒有開府參軍之筆。夫詩出於性情非涵養有素者曷能志此哉。祚菴可謂潛心斯道者矣。涘因事竣回國、豈今不覺又三十一年矣[1]。（丙子の春、祚菴は北京より帰って来た。また私と朝夕で交遊することを得て、祚菴は『五雲堂游草』を私に読ませた。読むとその詩は素晴らしくて庚信、鮑照が作った作品のようである）

資料①からすると、康熙甲戌年（康熙 33 年 1694）、蔡応瑞は進貢のために正議大夫として福州柔遠駅に渡来して王登瀛と交遊したようである。また資料①から『柳軒詩草』にある「送蔡祚菴入貢」詩の「蔡祚菴」はだれかという問題も解決できる[2]。蔡祚菴はすなわち蔡応瑞のことである。『蔡氏家譜（七世蔡朝用）』（以下『蔡譜』）の「十世諱応瑞高良親雲上」条によると、蔡応瑞の字は献臣、号は玉亭である。祚菴はおそらく蔡応瑞の別号である。蔡応瑞は康熙 33 年（1694）11 月、耳目官翁忠佑とともに福州に来て、翌年康熙 34 年（1695）に北京に進貢に行っている[3]。柔遠駅で滞留していた間に王登瀛と交流していたと考えてよい。

資料②では、蔡応瑞は公務の間、暇な時には王登瀛と一緒に花見をしたり、夜に酒を飲みながら心ゆくまで語りあったりしており、王登瀛は蔡応瑞に中国の儒者の風采があると言っている。王登瀛の評価を通じて、蔡応瑞は詩に優れて品格のある人物なので王登瀛が敬服している様子がみられる。順治 8 年（1651）に生まれた蔡応瑞と比べて、王登瀛が七、八歳ぐらい若い。

資料③では康熙 35 年の春、蔡応瑞は北京より帰ってきて、王登瀛に「五雲堂游草」を見せたことが分かる。そして王登瀛は読んだ後、高く評価していると言っている。『五雲堂詩集』は現存しない。詩人として、現在見られる蔡応瑞の漢詩作品は一首ある。それは「詠松菊」[4]という詩で、『中山詩文集』に収録されている。

王登瀛が蔡応瑞を高く評価しているのはお世辞ではなく心からのもので、蔡応瑞と虚心坦懐に付き合っている。康熙 34 年、蔡応瑞が北京に行く前、王登瀛は五言律詩を作って贈った。この詩は『柳軒詩草』に収録されている。そして康熙 35 年（1696）に蔡祚菴が帰国する前、送別のために、王登瀛は自ら描いた書画を送っている。この蔡応瑞と王登瀛の深い友情を示す書画の実物は、筆者が偶然のチャンスを得て入手したものである。続いて王登瀛の贈詩、贈画を通して、王、蔡二人の友情を見ていく。

送蔡祚菴入貢	**蔡祚菴の入貢を送る**
奉簡重浮海	簡を奉じて重ねて海に浮び
翩翩入帝州	翩翩として帝州に入る
使星明驛路	使星　驛路を明らにし
畫舫出江樓	畫舫　江樓より出づ
象闕天顔近	象闕　天顔に近く
龍墀寵錫優	龍墀　寵錫に優る
嶺梅初放日	嶺梅　初放の日
待爾話燕遊	爾を待ちて燕遊を話さん

[1] 同上　11 頁、12 頁。
[2] 上里賢一氏の「王登瀛『柔遠駅草』と琉球」において、蔡祚菴については不明となっている。
[3] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、301 頁。
[4] 上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版会、1998 年、80 頁。

【詩型】五言律詩
【押韻】平水尤韻
【通釈】
題目：蔡祚菴の入貢を送る
改めて国王の命令を奉じて海を渡ってきて、かつすばやく北京の皇帝に謁見する。使星は使者の駅道を明るく照らしている。船は江楼より出航した。紫禁城の外で天子の引見を待っている。謁見した後、天子は厚い恩恵を下賜してくださる。山の梅が咲き始まる日、私はあなたを待って北京への遊行を話すことを期待している。
〈分析〉
〈首聯〉
「奉簡重浮海、翩翩入帝州」
「奉簡」は蔡祚菴が琉球国王の奏章を携えることである。「重浮水」は蔡祚菴が再び海を渡って中国に来ることを指す。康熙 27 年、蔡祚菴は都通事として一度中国に来ていた。それで今回の福州に来るのは二回目である。「翩翩」は振る舞いがあか抜けているさまである。これは蔡祚菴が優雅で気質非凡な人物であると言っている。「入帝州」は蔡祚菴が康熙 34 年の春末、福州より北京に向かっていくことを指す。
〈頷聯〉
「使星明驛路、畫舫出江樓」
『晋書・天文志』のなかに「畢附耳南八星曰天節、主使臣之所持者[1]」という内容によって天上使節のことを管理する星天節はすなわち使星である。「畫舫出江楼」は琉球の使節が北上する時でも帰国する時でもまず柔遠駅の付近の渡口（萬壽橋）から小船を利用して台江に入って、また福州内港で帰国船に乗り換えるということを反映している。現在の瓊河は河道が狭くて以前の瓊河の規模を想像しにくい。
下の図 1 は 1937 年に撮影された瓊河である。康熙年間の瓊河の様子に最も近いと思われる。[2]

（筆者 2015 年 8 月福州で撮影）
当時琉球の使節たちもおそらく図の中にあるそのサイズの船を利用して瓊河を往来していたであろう。奥の橋は萬寿橋で、南台江の萬寿橋を区別するためにこの橋は河口萬寿橋と呼ばれている。河口萬壽橋に関して「河口萬寿橋記」という石碑が残っている。現在石碑は福州の山碑廊に移って保護されている。この碑文の内容は以下通りである

[1] 房玄齢等譔『晋書』第 2 冊巻 11、中華書局出版社、1974 年 11 月、306 頁。
[2] 『福州旧影』、人民美術出版社、2000 年 6 月、21 頁。

『河口萬壽橋記』―福州為八閩省會、人物殷盛、車馬駢闐。水部門外河口渡河狹舟小、競渡者眾、往往舟覆。鼓山比丘成源、惻然於中、乃受上堭善士請、募建石橋。始工於康熙七年五月庚戌、候潮汐退、以松石累址、結四墩、分水為三道、墩高二丈二尺、其空處駕以石樑、左右翼以扶欄、其長二百三十尺、廣八尺餘、往來紛如不俟舟楫、信步而趨人莫不利。既而複造小庵于橋左、中祀觀音大士、俾僧世守之；又造阿育王石塔於右、使主河神、瞻敬呵護；總額萬壽、取祝釐也。以明年臘月巳酉訖、共糜白金二千餘兩、求諸施者。是冬、余自富沙還石鼓、道由其中、會諸宰官善信、徘徊周覽、踴躍稱頌、以為難也。又明年冬、源具石請記、遂書其事勒于道左。康熙九年□念三日、石鼓住山道霈記、三山王逸書、葉元吉鐫。(『河口萬壽橋記』**(筆者 2015 年 8 月福州で撮影)**―福州は福建の首府であり、人口が多く、福州を出入する馬や車が連なっているほど多い。水部門外の河が狭くて急いで駕駛する船が多く、事故がよくあった。鼓山の僧侶成源は、それを慮れ上堭の善士の願いを受けて募金をして石橋を建てた。康熙 7 年 5 月庚戌日に建設が始まり、退潮の時、石を積み重ねて四つの橋台を作って、河を三道に分けている。橋台の高さは二丈二尺、橋台の間に石の梁を懸けて、橋の両側に欄干を設置し、橋の長さは二百三十尺、広さは八尺である。往来する船は滞りなく通り、河を渡る人にとっても便利である。また橋の左に小菴を建て観音菩薩を供えて僧侶を遣わして菴を守らせた。また阿育王石塔を右に建てて河神をまつり、加護を祈っている。橋の名を萬壽とつけて祝福の意を取っている。翌年の 12 月巳酉日まで橋を作るのに 2000 両の銀を費やしたが、善士らに捐金を募った。その冬、富沙から石鼓に戻り橋を通りすぎる時、官員、善士らは橋を隅々見て、みな賞賛して止まらない姿を見た。この橋を作るのに大変苦労している。また、翌年の冬、成源が石を供して、事績を石碑に刻んで橋の左に立てた。康熙 9 年□23 日、石鼓住山道霈、文を作り、三山王逸、文を書し、葉元吉、文を石碑に刻む。)

この橋は康熙 7 年 5 月から修造して康熙 8 年（1669）12 月に落成し、銀 2000 両を費やしたものである。注目すべき所は、この碑文を書したのは梁鏞（得声）の先生王逸である。これは現在みられる王逸の数少ない書の遺跡である。康熙年間、王逸は福州において書家として名を知られている。萬壽橋の左に小さい廟があってこの廟の中に観音菩薩を供えて僧侶を派遣してこの廟を守らせた。この廟は萬壽橋と共に建立されている。この廟はおそらく「萬壽菴」であろう。王登瀛、陳元輔らはよく柔遠駅を出入りして萬壽菴の僧侶と交遊している。蔡文溥の「喜恥光上人同陳昌其王邦菴兩先生過柔遠驛待月用恥上人原韻」という詩からみると萬壽菴の僧侶も柔遠駅の琉球人と接触して交流があったことが分かる。

〈頚聯〉

「象闕天顔近、龍墀寵錫優」

「象闕」は天子の宮殿の門外、皇帝命令を公示する高い建物である。「龍墀」は皇帝の宮殿前の階段である。「象闕」は蔡応瑞らの琉球使節が紫禁城外に皇帝の引見を待っていることの象徴である。「龍墀」は琉球の使節すでに紫禁城に入って皇帝に謁見しているという象徴である。

〈尾聯〉

「嶺梅初放日、待爾話燕遊」

「嶺梅」は山の上の梅花である。琉球の使節は 3 月ごろ北京に行って公務を順調に終えて福州に戻るが、それはだいたい冬末あるいは翌年の 1 月（旧暦）ぐらいである。この時は梅花が咲き始めている。「話燕遊」は王登瀛が蔡応瑞の上京を語りあうことを意味する。

つづいて王登瀛の蔡鐸に送った書画を見てみる。

この掛け軸（図 1）は、縦は 133cm、幅は 50cm である。中身の書画（図 2）は縦 29cm 、幅 38cm

である。蔡応瑞は康熙 35 年に進貢任務を終えて帰国する際にこの絵を王登瀛からもらっている。書画の作成年代は 1696 年である。図 1 は掛け軸の全体、図 2 は掛け軸の中身である。

図 1

図 2

この掛軸の中で絵の部分は菊である。書の部分に以下の内容が認められている。

㊞（寄言）

祚菴年臺與予舊交、相別七載復奉貢入閩、丙子夏事竣歸國。寫此以贈、異日展卷、犹有予在側、不識祚菴以為然否。（祚菴は私の旧友で、別れて 7 年、進貢のために閩に来て、丙子の夏、公務を終えて帰国する。私はこれを描いて贈る。もし他日、祚菴がこれを開いてみる時には、私が祚菴のそばにいるように思ってほしい。祚菴がそう思ってくれるかは知らないが）

㊞邦菴（陽文）　　閩中閩洲王登瀛

㊞一生學拙（陰文）　　㊞ 王氏登瀛（陰文）

㊞邦菴（陽文）

康熙 35 年（1696）、蔡応瑞の帰国前に、王登瀛はこの画を作って贈った。「祚菴年台與餘舊交敘別七載」から祚菴は王登瀛と昔からの友人で、二人が別れてから再会するまでに 7 年間が経過していることが分かる。康熙 33 年（蔡応瑞は康熙 33 年に福州に来た）から 7 年間を逆算すると、康熙 27 年（1688）に王登瀛は蔡応瑞と知り合っていたことになる。また『蔡氏家譜』を調べてみると、康熙 27 年に蔡応瑞は進貢都通事として福州に行っている。康熙 27 年ごろは、王登瀛が福州に暫く住んでいた時期である。しかし、蔡応瑞は康熙 28 年（1689）に 5 月に北京に行っている。それほど長くは付き合っていなかったと考えられる。「旧交遊」という言葉から短い間の交遊だったけれども、お互いに深い印象を留めたのであろう。贈言の言葉遣いから見ても王登瀛と蔡応瑞はとくに親密であると深く感じられる。最後の句は「異日展卷犹有予在側、不識祚菴以為然否」と書いている。この句は王登瀛が諧謔の語気で書いている。また反語の手法を使って、もともと重い別れの気風が緩和されて、気楽な雰囲気になっている。この書画が出来上がり、王登瀛が蔡応瑞に渡した際に、最後の句を読んで二人ともにっこりと笑ったことであろう。

書画作品に押す印鑑にはルールがあり、適当に押せばいいものではない。書の冒頭にある印鑑は引

首章と呼ばれ、書の右上のところに押す。この場所には四方の印鑑を使わず、楕円形、円形、あるいは自然の形の印鑑を使う。印鑑の中の文字は「寄言」と読み取れる。書の末の署名の後ろには、王登瀛の姓名章を押している。続いて王登瀛の字号章を押している。必ず、先に姓名章、後に字号章という順番で並べる。この二つの印鑑どちらも名前なので、必ず一つの印鑑は陰文で一つは陽文でなければならない。王登瀛はこういうふうに分けている。署名には「閩中閬洲」とあり、印鑑は「邦菴」とある。この二つの名はどちらが号で、どちらが字だろうか。字は本名と何らかの関連性を持たなければならない。この二つの名の意味から見ると、閬洲は本名と最も関わっている。瀛とは海や水池などの意味がある。洲とは川や海の中の島である。つまり、閬洲は王登瀛の字である。邦菴は王登瀛の号である。一番左の二つ印鑑は押角章といい、画面の右下はあるいは左下の位置に押す。押角章は書画の画面に大きな空白を避けるために押す。字号章は押角章として使えるが姓名章は使えない。邦菴の下にある印鑑は「一生学拙」と読みとれる。おそらくこれは王登瀛の座右の銘である。

右の絵図には八本の菊花が描かれている。画面の右上では菊を三本描き、中間において菊を二本描き、左下において菊を三本描いていて、合計八本ある。菊は徳が高潔な人君子の象徴である。言うまでもなく、この菊は蔡応瑞を指している。菊の右に「座石」と読み取れる印鑑がある。

この書画を贈った後、31 年間が経過して、雍正 3 年（1725）、王登瀛は再び蔡応瑞の『五雲堂詩集』を見た。蔡応瑞はすでに康熙 46 年（1707）において逝去していた。31 年の年月を隔てて、王登瀛は友人の詩集を再び見て、彼は以下のように当時の情況を述べている。

甲辰冬天章以乃尊五雲堂詩集、從海外郵來以授梓人、邦用請余為序。余有今昔之感[1]（甲辰の冬、天章はその父の『五雲堂詩集』を海外より送り出版しようとしている。邦用は私に序文を依頼した。私は今昔の感が湧いてきた）

蔡其棟は雍正元年（1723）12 月 9 日福州に着いている。翌年の雍正 2 年冬、蔡文溥は蔡応瑞の『五雲堂詩集』を進貢船に委託して琉球から福州に送った。蔡其棟は『五雲堂詩集』を受け取った後、これを携えて王登瀛に序文を依頼した。王登瀛は 31 年ぶりに再び親友の詩集を見て、深く今昔の感に堪えない様子である。康熙 27 年に蔡応瑞と王登瀛が知り合って七年後、康熙 33 年に再会した際、進貢の時には王登瀛は贈別の詩を作って送り、帰国する前にはまた非常に心を込めて「菊図」を作って贈った。「菊図」の実物は、なによりも二人の友情の重さを深く感じさせる。以前の蔡応瑞と付き合ったいろいろなことが、ありありと王登瀛の目に浮かんでいる。それを思いながら雍正 3 年、蔡応瑞の『五雲堂詩集』ために序文を作った。蔡応瑞と王登瀛とは、ほんとに腹の底を打ち明けてお互いに信頼しあっている知己だったといえよう。

王登瀛と蔡応瑞との友情は、蔡応瑞の子孫にも及んでいる。王登瀛と蔡応瑞の子孫との関係を示す資料は以下の通りである。

① 遣二子天水、天方從予遊。[2]（息子の天水、天方を遣わして私に従わせて勉強する）
② 夫予始與祚菴交善、繼復與天章交、其天水、天方、天津、天振及天章乃郎邦用皆從余遊。余與中山蔡氏可謂交之厚、知之深、情之篤。援筆書此以誌世好。[3]（私は初め祚菴と交流をもち、そして天章と交遊した。祚菴の息子、天水、天方、天津、天振及び天章の息子邦用はみんな私に従って勉強した。私は中山の蔡氏と交わりが厚く、お互いの理解そして友情が深く篤いことが知れよう。

[1]蔡文溥、乾隆 20 年序刊本『四本堂詩文集』、榕樹書林、2003 年 9 月影印出版、14 頁。
[2]蔡文溥、乾隆 20 年序刊本『四本堂詩文集』、榕樹書林、2003 年 9 月影印出版、11 頁。
[3]同上、14 頁 、15 頁。

この序文を記して私と蔡氏の代々の交友を記念する）

資料①から蔡王瑞は自分の息子の蔡天水、蔡天漢二人を遣わして王登瀛に師事させたことがわかる。蔡氏家譜資料には蔡天水に関する資料がない。蔡天水はすなわち蔡応瑞の次男の蔡文漢であろう。『蔡譜』によると蔡文湘の字が天方である。つまり、蔡天水は蔡文漢のことである。また、王序で蔡氏の名前を羅列する際には、長幼の順序に沿っているので、蔡天水は蔡応瑞の次男である蔡文漢を指すと考えられる。①は意味的に蔡天水と蔡天方を一緒に遣わして王登瀛に師事させると言っているようであるが、実は蔡天水は康熙 33 年（1694）の時点ですでに柔遠駅で王登瀛に従って勉強している。ただ、蔡天水がいつからいつまで福州で勉強していたのか不明である。蔡天方は康熙 34 年に勤学として蔡灼に従って福州に来た。そして康熙 36 年（1697）6 月、病気に罹ったので帰国した。つまり、蔡文湘は、3 年間王登瀛に師事して勉強していた。そして、帰国した二年後、康熙 38 年（1706）12 月 21 歳で病死している。

資料②では王登瀛が蔡応瑞と知り合ったことをはじめとして、蔡文溥、蔡文漢、蔡文湘、蔡文河、蔡文海及び蔡文溥の長男蔡其棟みんなが王登瀛と交遊があったと言っている。しかし王登瀛は蔡祚菴、蔡文溥に対して「與」「交」の字を用いている。これは蔡祚菴、蔡文溥との友情は平等であるとして扱っている。蔡天水、蔡天方、蔡天津、蔡天振、蔡邦用に対しては、「從余遊（余に従って遊ぶ）」を用いている。この三文字を通して王登瀛は蔡天水などの五名にとって目上の人であることがわかる。ここで王登瀛は自分を偉そうにして、そういっているわけではない。この細かい点から、蔡天水など五名はみんな王登瀛に師事したことがあると分かる。王登瀛は蔡氏との関係に対して「交之厚、知之深、情之篤（交わりは厚く、お互いの理解は深く、友情は篤く）」と評価している。『四本堂詩文集』には 5 篇の序文が載せられているが、王登瀛の序文にはお世辞のような言葉が感じられない。また、他の 4 篇の序文と比べるとあまり詩集の内容に関する評価がない。王登瀛は主に蔡応瑞との交友の始末を述べている。真摯な心を込めてこの序文を書いたものと思われる。

王登瀛が蔡応瑞の子孫との交流を反映する詩は『柳軒詩草』に一首収録されている蔡天水に関する詩と『四本堂詩文集』に一首収録されている蔡文溥に関する詩である。まずは蔡天水に関わる詩を分析してみて、そして蔡文溥に関わる詩を見てみる

立秋後二日集蔡天水山樓得青字	立秋の後の二日蔡天水の山樓に集い、青字を得
山舍嵐氣帶煙暝	山舍の嵐氣　煙暝を帶ぶ
蕩漾波光晚照檽	蕩漾の波光　晚檽を照らす
桐葉已曾飛井畔	桐葉已に曾て井畔に飛び
蒹葭還共溯江汀	蒹葭還た共に江汀に溯る
雁横天際雲迷影	雁天際に横たわりて雲影に迷い
雨過樓西酒半醒	雨樓西を過りて酒半ば醒む
相對莫嫌秋露冷	相い對するに秋露の冷を嫌う莫く
章臺柳色尚青青	章臺の柳色尚ほ青青たり

【詩型】七言律詩
【押韻】平水迴韻

【通釈】
題目：立秋の後の二日、蔡天水の山楼に集い青韻を得た。

山に寄り掛かかっている宿舎へ山風が霧靄を吹いてくる。夕日の光が起伏している波を被ってきらきらとして窓に照り映える。梧桐の葉はすでに井戸のそばに落ちている。江洲にある水草が波に従って揺れ舞う。雁が行列を組んで並んで空を飛びすぎ、雲の中に現れたり隠れたりする。秋雨が止んだ後、駅楼の西でみんなまだ酔っている。秋雨の後、秋露の冷たさを厭うことはしなくて、街の柳がまだ青々としている。

〈分析〉

康熙 33 年（1694）の立秋の日、王登瀛たちは柔遠駅の蔡天水の書斎で鬮韻作詩会を行った。王登瀛は青字韻があたって、青韻を用いてこの詩を作った。

〈首聯〉

「山舍嵐氣帶煙暝、蕩漾波光晚照檽」

「嵐氣帶煙暝」は夕方の山の風に吹かれて霧がゆらゆら絡みついて仙境みたいな景色である。これは少し遠いところの風景である。「蕩漾波光晚照檽」は夕日が瓊河を照らしてきらきらした光が窓に映っている景色で、これは近いところの風景である。王登瀛は駅楼に立って遠くを眺め、また近くを見てゆったりとする心境を持つと感じた。

〈頷聯〉

「桐葉已曾飛井畔、蒹葭還共溯江汀」

「桐已曾飛井畔」は梧桐の葉が井戸のそばに散らかっている。「蒹葭」はハスのことである。梧桐がすでに枯れて水中のハスがまだまだ咲いて河の中に揺れている。「桐葉」と「蒹葭」の対比は王登瀛が秋が来たといえども夏の影がまだ残っていると言っているのである。つまり、頷聯は初秋の特徴を言っている。

〈頸聯〉

「雁横天際雲迷影、雨過樓西酒半醒」

「雁横天際雲迷影」は王登瀛が酒を数杯飲んだ後、酔い気味になって空を飛びすぎる雁を望む時、目がぼんやりとしている状態を表している。そして読者に後半の句を読む時、王登瀛が飲みすぎたと想像する。王登瀛は飲めばのむほど意識がぼんやりとなって雨が降ってきてちょっとびっくりさせられたため、やっと半分酔いが覚めたのであろう。頸聯ではいかに酔っぱらったのかについてうまく表現できている。

〈尾聯〉

「相對莫嫌秋露冷、章臺柳色尚青青」

「秋露冷」は秋雨が降った後ちょっと冷えていると感じることである。おそらく雨後、天気が涼しくなった。かつ酔いを覚えていたことも加わり寒くなったと感じたのであろう。章台は漢代長安の街道である。詩の中では近くの街道を指す。急に寒くなって、みな今はどの季節かと疑う際に、町の未だ青々とする柳を見てまだ初秋だと思い出した。「章臺柳色尚青青」は唐代韓翃の『章台柳・寄柳氏』の「章台柳、章台柳、昔日青青今在否[1]」を参照して作られている。韓翃の句は昔の恋人に対する深い愛情を表しているが王登瀛は単なる句の形式を借りて作っただけである。

喜恥光上人同陳昌其王邦菴兩先生過柔遠驛待月用恥上人原韻

恥光上人陳昌其、王邦菴兩先生と同に柔遠驛を過りて月を待つを喜ぶ、恥上人の原韻を用う

江樓初入夜　　江樓初めて夜に入り

[1]『御定全唐詩』巻 245（『景印文淵閣四庫全書』集部第 1424 冊、台灣商務印書館、1976 年、121 頁）

新雁報清秋　　新雁清秋を報ぐ
月上沙皆白　　月上りて沙皆白く
風輕雲不留　　風輕くして雲留まらず
千山一老衲　　千山　一老衲
孤館數名流　　孤館　数名流
但得頻相對　　但だ得たり頻りに相い對するを
長消客裡愁　　長く消す客裏の愁い
【詩型】五言律詩
【押韻】平水尤韻

【通釈】
題目：恥光上人、陳昌其、王登瀛の両先生は一緒に柔遠駅に来て月を待つことに喜んで恥光上人の原韻を用いて詩を作る。

日が暮れたばかりで柔遠駅のあたりには今年初めての雁が飛んできて秋の訪れを知らせた。月が上れば上るほど川べりの砂がますます白く光り、秋風が吹いて雲はすべてない。この秋の自然を恥光上人が一人占めにするようで、ぽつんと立つこの館に陳、王先生らが訪れて下さった。もし、先生たちが頻繁に柔遠駅を訪ねてこれば、我々のような故郷と離れている旅人のすこし郷愁が減らされる。

〈分析〉

以上の詩は、蔡文溥が福州柔遠駅で存留通事として働いている期間に作られたものである。康熙38年（1706）11月、蔡文溥は都通事鄭士綸（鄭克叙）などとともに福州に来て、康熙40年（1701）6 月帰国した。詩の中の「新秋」「清秋」は詩の作成時期が初秋の八月ごろだと考えられる。そうすると、康熙38年11月―康熙40年6月の間に秋がある年は康熙39年しかない。この詩は康熙39年（1700）の秋に作られたものと推定していい。康熙39年の秋のある夜、僧の恥光上人、陳元輔、王登瀛は柔遠駅を訪ねてきて蔡文溥と月見をしながら詩のやり取りをしていた。蔡文溥は恥光上人韻を用いて詩を作った。用韻とは、蔡文溥は恥光上人の元詩にある「秋」、「留」、「流」「愁」の韻字をこの詩に使ったということである。恥光上人は僧名が釈照乗で、『中山詩文集』には彼が程順則に贈った詩が収録されている。『四本堂詩文集』のなかにまた「秋日遊道山過萬壽菴訪恥光上人」が収録されている。それを通して恥光上人は萬壽菴の僧侶であることがわかる。琉球の知識人は福州にいる時、広く福州の文人と交流しており、その中には詩僧、道士などもいる。『中山詩文集』に収録されている僧侶、道士の詩は4首ある。王登瀛の序文はもともと蔡応瑞の『五雲堂詩集』のために書かれたものである。しかし、蔡文溥はこの序文を『四本堂詩文集』の序文として収録している。王登瀛は四本堂蔡氏にとって特別な人物であるとみられる。蔡文溥の父の親友であるし、蔡文溥の兄弟、長男の師匠でもある。

〈首聯〉

「江樓初入夜、新雁報清秋」

江楼は柔遠駅中の楼である。陳元輔、王登瀛、周新命、蔡文溥など詩人の詩作に「江楼」「駅楼」が多く現れる。『榕城考古略』のなかに「柔遠驛明曰懷遠、以為琉球諸藩國館寓之所。内有控海樓、明正德間建、俗名琉球館[1]」と記されている。明代の柔遠駅に敷地内に控海楼があったが万暦年間に

[1]林芾庭輯『榕城考古略』、福州地方志委員會、2001年7月、76頁。

崩れた。後の柔遠駅は数回改修されているが楼のような建物を建てた可能性がある。彼らの詩文を通して康熙年間、柔遠駅の中に楼のような建物が確かに存在したことが分かる。この楼は眺めがいい場所なので陳元輔らの師匠は柔遠駅を訪れる時よく駅楼あるいは江楼と呼ばれるこの場所で交流している。この夜は恥光上人、陳元輔、王登瀛、蔡文溥らは月見をするのでなるべく高い場所がいいのでこの江楼で集まっている。

「初入夜」は陳元輔らが早々江楼に上がって月を待っていることを反映している。「新雁」は初めて来ている雁である。つまり、今は初秋の季節と示している。「清秋」は初秋であるが天気が熱くないと反映している。

〈頷聯〉

「月上沙皆白、風輕雲不留」

頷聯では月が上がった後作者が眺めた景色を描いている。月は上がるとともに砂がその月光を受けてどんどん明るくなっている。風はあまり吹いていないが雲が留まらず去っていく。この句を味わうと月光がいかに明るく、空がいかに晴朗であるか想像できる。しかし作者は直接に月光や空について描いておらず読者が感じていることである。いわゆる「不著一字、盡得風流（作詩、作画の時、景物に直接に描かなくて周囲の環境を描いて趣旨を表す）」である。

〈頚聯〉

「千山一老衲、孤館數名流」

「一老衲」は恥光上人を指す。「數名流」は数名の名士で陳元輔王登瀛らを指す。「千山一老衲」は恥光上人の徳行が高いということを表す

〈尾聯〉

「但得頻相對、長消客裡愁」

詩の中に陳元輔らが蔡文溥とどうやって交流しているか直接に述べていないが、最後の句を読むときっと今夜蔡文溥は楽しい夜を過ごしたと感じられる。さもなければ恥光上人、陳元輔、王登瀛に常に訪ねてきてとは懇願しない。詩の全体を見ると首聯の陳元輔らは早々に江楼で月を待って、頷聯では明るい月が登ってきて、頚聯では恥光上人らと楽しく交流して、尾聯では蔡文溥がよく訪ねてきてくれと懇願している。詩は全体の構造が緊密で、またきっと賑やかな集会であるが、詩では静かな境地を醸し出しており「禅」の境地に感じられる。やはり「中山第一才」の蔡文溥である。北京大学の教授錢志熙は蔡文溥の四本堂集から反映するその漢詩レベルは域外の漢詩の中でも「上等」で清代の中国人漢詩においても劣らない[1]と評価している。

1『四本堂詩文集』の序文作者について

ここでは、『四本堂詩文集』の王序を使って分析する。『四本堂詩文集』は、ほかに序文 4 篇を収録している。序文とは本の内容についての評判、創作の背景、作者との関係などが主なる内容である。そのため『四本堂詩文集』の序文を通して蔡文溥と序文作者の関係を探求できる。また『四本堂詩文集』が成立した背景なども明らかにすることができる。全面的に理解するために他の『四本堂詩文集』の序文を紹介し分析する必要がある。

『四本詩文集』についてのまとまった研究はいまだなされていないが、いくつかの先行研究がある。中国側では、銭志熙の「蔡文溥と『四本堂詩文集』」[2]があり、日本側には高橋康夫の「同楽苑とその

[1] 錢志熙「蔡文溥與『四本堂詩集』－一位古琉球国詩人漢詩文創作」（『中国文化与典籍』、教育部全国高等院校古籍整理研究工作委員会、2006 年第 2 期、31 頁）

[2] （中国）教育部中国高等院校古籍研究整理委員会『中国典籍与文化』2006 年第 2 号、31 頁―38 頁に掲載している。

八景」[1]において『四本堂詩文集』の出版の経緯が推測されている。残念なことに、両者ともに序文の作者や内容に関する詳しい紹介はない。
『四本堂詩文集』序文の作者及び序文執筆の要請者をまとめたのが以下の表である。

作者及び作成年	序文執筆の要請者
徐葆光 康熙 58 年（1719）	蔡文溥（天章）
謝道承 雍正 2 年（1724）	蔡其棟（邦用、蔡應瑞孫 蔡文溥子）
王登瀛序 雍正 3 年（1725）	蔡其棟（邦用、蔡應瑞孫 蔡文溥子）
葉紹芳 雍正 10 年（1732）	蔡其棟（邦用、蔡應瑞孫 蔡文溥子）
劉敬與序 乾隆 20 年（1755）	蔡功勛（法亮、蔡應瑞玄孫 蔡文溥孫）

『四本堂詩集』には五篇の序文がある。時間順に沿うと、康熙 58 年、雍正 2 年、雍正 3 年、雍正 10 年、乾隆 20 年となっている。

① 徐葆光の序

康熙 58 年の序は文章ではなく、絶句である。尚敬王を冊封するために琉球に来た徐葆光は、蔡文溥の家を訪問し、その際に『四本堂集』を見せられている。この時の『四本堂詩文集』は刊刻されていない抄本である。本論文と関わる資料があまりないので、ここでは詩の分析はしない。（また童宏民氏の博論において詳しい分析があるので参照されたい[2]）

② 謝道承の序文

以下、作者謝道承について紹介する。謝道承についての資料は比較的豊富である。主な資料として乾隆版『福建通志』、『閩県郷土志』、『烏石山志』などがある。ほかに『乾隆実録』、『雍正実録』『欽定国子監志』などの中にも散見できる。『烏石山志』が謝道承について一番詳しい資料なのでこれを引用する。以下は『烏石山志』[3]の記録に基づいてまとめている。

謝道承は字が古梅、閩県の人である。康熙 59 年（1720）に郷試解元（最上位）、康熙 60 年（1721）進士となって翰林院編修を授けられた。母親を養うために雍正 4 年(1726)に辞官して福州に帰った。家で 13 年間母親を養い、母親は 84 歳で逝去した。福州にいる 13 年間の間に『福建通志』編纂の総裁として招聘されている。乾隆 3 年、中允を授けられ、また侍読に昇進した。その後、国士監祭酒に転任して、すぐに内閣学士に昇進した。さらに乾隆帝の特命で、内閣学士のまま国士監祭酒を兼任する。乾隆 6 年（1741）7 月病気で在任のまま逝去した。謝道承は吏書に長けていたようである。また、漢詩や宋詞の方面でもかなりの名声を揚げており、当時の詩の大家の徐葆光、蔡世遠も謝道承を慕って彼を訪問したりしている。しかし、謝道承は名声なんか気にせず、このことを外に宣伝したりはしていない。当時の宰相趙国麟は、乾隆帝にしばしば謝道承を推薦している。謝道承の弟は雍正 7 年（1729）の挙人、息子の謝璈は乾隆 3 年（1738）の挙人で、乾隆 25 年（1760）に進士となっている。

王登瀛の序文、謝道承の序文はともに蔡其棟の存留期間（1723 年 11 月―1725 年 6 月）内に作成されている。王序は雍正 3 年（1725）3 月に作成された。謝序は雍正 2 年（1724）の 11 月に作成されている。両者の作成時間は、5 か月ずれている。また、謝序はほかの序文と違うところがある。ほか

[1] （東京）建築史学会『建築史学』、2004 年 3 月号、40 頁―51 頁に掲載している。
[2] 童宏民「冊封副使徐葆光の眼光―『奉使琉球詩』の分析を中心に」琉球大学人文社会科学研究科博士論文 2014 年、182 頁。
[3] 清・郭柏蒼『烏石山志』福州地方志編纂委員会整理、（福州）海風出版社出版、2001 年 7 月、220-221 頁。

の序文（徐葆光の序を除く）では、みな蔡邦用が『四本堂詩文集』を持って序文を求めてきたことを述べている。謝道承の序文では蔡邦用のことに全然言及していない。この二点が気になっている。

『烏石山志』の謝道承の記録によると、謝道承は雍正 4 年に辞官して福州に戻って母親に仕えており、したがって雍正 2 年にはまだ北京にいることが分かる。また、存留通事を務めている蔡邦用は福州に滞在している。謝序では蔡其棟について全く言及していない理由がわかる。謝道承は北京におり、蔡其棟は福州にいて、二人は直接会ってはいなかったのである。蔡邦用は『四本堂詩文集』を北京に行く同僚に任せて、北京にいる謝道承に序文を求めたはずである。これが、謝序が雍正 2 年 11 月に作成された経緯である。

『蔡氏家譜（七世蔡朝用）』蔡邦用の条[1]によると、蔡邦用は福州に着いた後、浙江省定海に琉球人が漂着した事件、台湾に漂着した事件を処理している。また、自身がもともと担当している公務があって多忙であったと考えられる。冬になって、蔡文溥は進貢船で蔡応瑞の『五雲堂詩集』を福州へ送って来た。雍正 2 年冬、新たな存留通事、蔡培が来たので蔡其棟の公務は減ったものと思われる。手間が空くようになった蔡其棟は、祖父の『五雲堂詩集』を携えて王登瀛に序文を求めた。これが、王序が雍正 3 年に作成された経緯である。それで王序と謝序の執筆が 5 か月ずれている理由もわかる。

③ 葉紹芳の序文

雍正 8 年 12 月―雍正 10 年 6 月（1730 年 12 月―1732 年 6 月）、蔡邦用は進貢都通事として働いていた。雍正 8 年に 38 歳の蔡邦用は都通事となって、王舅向克済、正義大夫蔡文河に従って福州へ向かった。12 月 2 日那覇より出発、途中馬歯山、久米山で風を待っている。12 月 22 日福州怡山院に至って、29 日についに柔遠駅に着いた。雍正 9 年（1731）7 月 12 日福州より北京に向かい、11 月 12 日に北京に到着し、公務を終えて雍正 10 年（1732）正月初 8 日北京より福建への帰途につき、5 月 19 日福州に到着している。そして雍正 10 年 6 月 28 日五虎門より出航し、7 月 13 日琉球に戻っている。進貢任務を終えた雍正 10 年の 4 月か 5 月、父の『四本堂詩文集』を携えて葉紹芳に序文を求めた。序文の最後の署名にある「大清雍正壬子季夏（大清雍正 10 年 6 月）」という記載によって、この序文は雍正 10 年 6 月に作られたことが分かる。

蔡其棟が序文を求めに来た時の情況は、序文に以下のように述べられている。

> 余因避暑借寓塔影樓獨坐無聊。日與古人晤對爾已。忽悠款門投刺者乃蔡君邦用也，捧其尊翁天章公四本堂詩集示教。莊頌竟日。見其出風入雅得宋元風味[2]。（私は避暑のため塔影楼で寄寓していた。一人で退屈しており、毎日古籍を読んで古人と語りあうしかなかった。突然、だれかが門を叩いて、蔡氏邦用君が来訪した。彼はその父の天章公の『四本堂詩文集』を携えて見せた。私は一日中恭しく読んで、風雅で宋元の風格が見えると思った。）

蔡其棟が来訪した時、葉紹芳は避暑のため福州の塔影楼[3]に寄寓していた。毎日、一人で古籍を読むしかないと述べている。この部分の原文を読むと、物寂しい雰囲気が読みとれる。

以下は葉紹芳の署名である。この署名を通して葉紹芳の個人情報が読み取れる

> 賜進士第文林郎、前知北直隸真定府隆平縣事、再知江南常州府江陰縣事、江南文武兩闈分考官松

---

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、310 頁。

[2] 蔡文溥、乾隆 20 年序刊本『四本堂詩文集』、榕樹書林、2003 年 9 月影印出版、1 頁。

[3] 「塔影楼在南営、鄭諭德開極居此樓、建於宋見陸遊『老學菴筆記』今尚存樓左板扉開一竅、日中則有影倒立亦神跡鬼工也近為陳氏業」（清・徐景熹『乾隆福州府志』『中国地方志集成・福建府縣志集』第 1 号所收、上海書店出版社、2000 年 10 月、256 頁）

山葉紹芳[1]。（進士第を賜って、文林郎にあがった。元北直隷真定府隆平縣令、元江南常州府江陰縣令、元江南文武郷試の分考官、松山の葉紹芳）

葉紹芳はまず進士で隆平県令、江陰県令に任じられていた。また江南の文、武郷試の試験官を担当したことがある。葉紹芳は松山（福州府羅源県）の人である。

『隆平縣志』を調べると葉紹芳の伝記はないが、ただ康熙 48 年―康熙 50（1709－1711）まで県令として在任していること[2]がわかる。『江陰県志』を調べると葉紹芳について以下の資料がある。

葉紹芳字藝三福建人、康熙庚辰進士、仕隆平以憂歸、服闕補江陰令。先是邑中收漕納米一石隻給八斗串、民病之、紹芳力請歲省民米數千。又定官收官兌通倉交納之法、不限區扇米至即收、俾無守候之苦。邑之南北角有巡船越境擾民、民與之訟、關吏餽紹芳千金、冀袒其獄、卻之。關吏由此稍戢、四年罷去[3]。（葉紹芳、字が芸三、福建の出身で、康熙庚辰年（1700 年）の進士。隆平県令に任じられていたが服喪するために帰った。後、補われて江陰令となる。江陰県では米を買い取る時、一石の米がただ八斗のお金で払われていることに百姓は不満を持っていた。紹芳は、努力して官收官兌交納の法を定めて、百姓の負担を減らした。県内の南北の境界で税関の船が江陰の百姓に迷惑をかけていた。百姓が県令に訴えでた。税関の吏は紹芳に千金の賄賂を送ったが紹芳は断った。税関の人は少しおとなしくなった。雍正 4 年（1726）に免職された）

葉紹芳は江陰令の在任中、業績を挙げているが、最後に免職されたと述べられている。（免職経緯については脚注を参照されたい。）[4]葉紹介芳は雍正 4 年（1726）に免職され、蔡邦用が序文を求めてきた時にはすでに 9 年間が経過していた。このような背景を知ると、序文の「余因避暑借寓塔影樓獨坐無聊、日與古人晤對爾已」に表わされている葉紹芳の寂しい心情が深く理解できる。

④ 劉敬与の序

乾隆 20 年（1755）に至って、蔡文溥の孫の蔡功勲が『四本堂詩文集』を携えて福州の劉敬与に序文を求めた。劉敬与という名前は『四本堂詩文集』に出ているだけでなく、『蔡氏家譜』にも出ている。以下はその記録である。

（乾隆 19 年正月）初九日到閩進貢請封照例辦明之外、冊封諸礼于閩不可不學、因此法司憲令牌與舊存留魏開業高嶺之子親雲上、傳譯通事鄭殿枚等、同請前翰林院行人司劉敬與為師、學習冊封諭祭並款待天使之禮及諸帖手本之式＜此時束脩裡銀以庫銀送師、本國冊封諸裡及帖手本俱從劉敬與

---

[1]同上、3 頁。

[2] 清・袁文郃、乾隆『隆平県志』（『中国地方志集成・河北府縣志集』第 68 号所收、上海書店出版社、2000 年 10 月 289 頁。

[3] 清・盧思誠、馮壽鏡等修纂、光緒『江陰県志』（『中国地方志集成・江蘇府縣志集』第 25 号所收、上海書店出版社　2000 年 10 月、441 頁）

[4] 雍正 4 年、雍正帝の諭旨に江蘇巡撫何天培の奏章の引用がある（「又聞江陰葉紹芳年老昏瞶聲命庸劣否如是據實奏聞 」（『世宗憲皇帝朱批諭旨』417－267）。「奏聞事竊照江陰令葉紹芳年紀老邁近更昏瞶，皇上訪聞極確，臣接到諭旨詳看實際，臣現在繕疏題參所有，臣失察遲參之罪分所難辭，理合具摺聲明，臣不慎惶悚慚愧之至瑾奏。」（『世宗憲皇帝朱批諭旨』417-267）。地方志に記載されている葉紹芳は廉潔で民を撫する官吏である。『朱批諭旨』では葉紹芳は老いぼれて愚昧の人とある。両資料の記載は全く異なっている。雍正帝が作った「密折制」では、あらゆる官員が直接に皇帝に「密折」でさまざまな情報を届けることが出来た。葉紹芳が免職されたことは税監と百姓の衝突を処理することに関係すると推測できる。

所定酌行＞[1]（乾隆 19 年（1754）正月初九日、福建に着いた。進貢、請封のことを例に従って遂行する。その他に、冊封に関する儀礼を福建で学ばなければならない。法司の命令を受けて存留魏開業高嶺之子親雲上、伝訳通事鄭殿枚などが元翰林院、行人司劉敬与に師事して冊封、諭祭及び天使を接待する儀礼、また往来公文の手本を作ることを学んだ。）

劉敬与は単なる『四本堂詩文集』序文の作者というだけでなく、冊封儀礼、諭祭、天使を款待する儀礼を学び、冊封に関わる文書の手本を定めた人物でもあった。つまり尚穆王を冊封する前に琉球側が準備するという一つ重要な環節の中において、重要な人物であった。それでは、劉敬与はどのような人物なのか。『永泰県志・芸文志』の中で黄任が著した「福清劉敬与伝」[2]に基づいて劉敬与の略歴を以下にまとめていきたい。

劉敬与、字は隣初（『福建通志』では字は右陸[3]）である。雍正元年（1723）、進士となり、庶吉士を授けられて、後に行人司行人に改められた。雍正二年、会試の内簾収掌官に任じられている。親を養うために辞官して、16 年間孝行を行っている。雍正 7 年、『福建省通志』の編纂が始まり、当時福州にいた謝道承、劉敬与は総裁として招聘された。『福建省通志』の編纂は 9 年間を経て乾隆 2 年に終了した。通志ができた後、劉敬与は鰲峰書院に招聘されて山長に任じられている。その後、「丁憂（服喪）」のために鰲峰書院の職を辞めた。それからは、専ら家で息子を教えている。乾隆 12 年（1747）、蔡温の『澹園文集』のために序文を書いた[4]。劉敬与は謝道承、黄任[5]と交友があり、詩の唱和をしている。

乾隆 19 年、蔡文溥の孫蔡功勛は、都通事として耳目官毛元翼、正議大夫蔡宏正に従って福州に渡り、乾隆の正月初九日に福州に着いている。閩に滞在している間、蔡功勛、魏開業、鄭殿枚らは劉敬与に師事して、冊封儀礼などを習っている。この序文は、劉敬与に師事している期間に作成された。序文を作った日は端午節である。

乾隆版『福州通志』は、康熙版『福州通志』、『福州府志』と比べて明らかに琉球に関する記録が多い。総編集と任じていた謝道承、劉敬与がもともと琉球人と接触していたことと関わっているのではないか。

第二項　王登瀛と他の琉球文人との交遊

1　梁鏞

---

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6　那覇市役所発行　1980 年 3 月　314 頁。

[2] 金章等修纂　民国『永泰県志』(『中国地方志集成・福建府縣志集』第 19 号所收) 上海書店出版社　2000 年 10 月　188 頁。

[3] 清・謝道承、劉敬与等修纂　乾隆『福建通志』(『中国地方志集成・省志集・福建』) 上海書店出版社　2000 年 10 月 300 頁。

[4] 劉敬与は序文の中で「余昔年序其族澹園公文集」と言っている。劉敬与は蔡文溥に「澹園集序」を書いたことがわかる。根据潘相的『琉球入学見聞』によって「澹園集」に関して以下の資料がある。

「澹園集，七卷，鐫於乾隆丁卯等年，有自跋，紫金大夫曾恂（候德）跋、閩人劉敬與序。（後略）」（早稲田大学蔵『琉球入学見聞録』巻二）

「鐫於乾隆丁卯等年」この乾隆乾隆丁卯等年は序文の作成年を指すはずである。「澹園集」の序文には蔡温の跋、曾恂の序、劉敬与の序がある。琉球人の序文は入手しやすいので、劉敬与の序文が最後に書かれたはずである。劉敬与の序文は乾隆丁卯年に作られたと考えられる。

[5] 字は莘田。永福の人。康熙 41 年挙人、四会知県に任じられていた。（清・謝道承、劉敬与等修纂、乾隆『福建通志』＜『中国地方志集成・省志集・福建』＞上海書店出版社、2000 年 10 月）。また『全閩詩話』に詳しい。

梁得声（1663－1702）は本名を梁鏞という。以下『呉江梁氏家譜（一世梁嵩）・十世都通事鏞』[1]によって梁得声の経歴をまとめる。梁得声は康熙 13 年若秀才、康熙 14 年秀才となり、康熙 24 年(1685)通事に昇任し、康熙 29 年（1690）黄冠を賜り、康熙 30 年存留通事、康熙 39 年（1700）都通事という職に就任している。梁得声は中国に四回渡った経験がある。

① 康熙 24 年、読書習礼のために存留通事梁邦基に従って閩に赴いて、6 年間滞在して康熙 29 年 6 月 10 に帰国した

② 康熙 30 年（1691）、存留通事として 11 月 2 日福州に赴いて、公務を終えて康熙 32 年（1693）6 月 27 日に帰国した。

③ 康熙 34 年（1695）、再び存留通事として 11 月 9 日福州に赴いて、公務を終えて康熙 36 年（1704）5 月 28 日に帰国した。在留期間、本職の公務以外、また学識博古の任務を負っていたため 30 両銀を拝領した。

④ 康熙 39 年（1707）、上京都通事として 11 月 10 日に福州に赴いた。翌年康熙 40 年（1701）6 月福州より北京に赴いて 8 月 28 日に到着して、康熙 41 年（1702）正月 24 に福州に戻った。康熙 41 年 6 月 12 日五虎門より帰国し途中暴風雨に遭遇したが、幸いことに浙江省象山県境に漂着した。後、閩に送還されて康熙 42 年（1703）帰国する途中台風に遭遇して遭難した。

梁得声は康熙 24 年―康熙 29 年（1685－1690）、福州で漢詩文を習う傍ら王逸と呼ばれる福州人に師事して書道を学んだ。書道を習った成果が認められて帰国した後、康熙 29 年―康熙 30 年（1690－1691）、梁得声は漢字筆者として働いた。また、康熙 33 年、法司の命令を奉じて、薩摩に行く時におそらく贈品として使われる「圍屏」2 件を書している[2]。また康熙 37 年、法司の命令を奉じて、福建布政使に送った「圍屏」に書をしたためた[3]。当時、梁得声は書道に優れていると認められていたことが窺える。康熙 36 年（1704）、梁得声が帰国する前、書道の師である王逸は「奉送得声梁君中山序」を送っている。この文で王逸は梁得声の書道について以下のように述べている。

> 與予相往來最密、每枉過、輙以筆法問予、雖不能追跡顔柳繼跡鐘王、然臨帖有年、備賞墨池中之艱苦、因書一卷以授。得聲乃不憚手腕之枯朝摹夕仿。曾幾何時已非復呉下阿蒙矣[4]（私との往来が最も頻繋であった。毎回福州に来た時、私のところに来て書道のことを聞いていた。私は書道において顔真卿、柳宗元、鐘繇、王羲之などに及ばないけれども、書道を数十年手掛けている。それで書道の難しさをよく知っている。一巻の手本を書して得声君に授けた。得声君は辛労を惜しまず昼夜で模倣して練習した。いつかの間にか、刮目すべきまでに腕を挙げた。）

以上の資料を通して梁得声は毎回、福州行く時、必ず王逸のところに行って書道の技法を聞いてお

---

[1] 梁得聲 國吉親雲上童名真德字得聲行一康熙二年癸卯三月四日生，康熙四十一年壬午六月五日卒，享年四十。
康熙二十四年乙丑十一月八日因有接貢之便請乞王命為讀書習禮事隨存留通事叔父邦基内間親雲上到閩，至於康熙二十九年庚午六月十日回國滯留六年。
康熙三十年辛未三月朔日，奉使為接貢存留通事同都通事鄭明良港川親雲上，本年十一月二日開洋到閩，公事已完，康熙三十二年癸酉六月二十日歸國。
康熙三十四年乙亥二月三日奉使為接貢存留通事同都通事蔡灼喜友名通事親雲上，本年十一月九日開洋到閩公事已竣。康熙三十六年丁丑五月二十八日歸國。奉使時奉命學識博古拜領銀三十兩。歸國時傳授之秘書三本進上國王。
康熙三十九年庚辰二月初三日為進貢事，奉使為上京都通事隨耳目官毛得範伊野波親雲上，盛忠正議大夫鄭職良池宮城親雲上，本年十一月十日那霸開洋，本月二十日到閩次年六月赴京八月二十八日到京（中略）公事已竣，康熙四十一年壬午正月二十四日回閩，本年六月十二日五虎門開船。（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所発行、1980 年 3 月、768 頁）

[2]那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、768 頁。

[3] 同上、768 頁。

[4]那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、769 頁。

り、王逸は自分の書道の手本一巻を送っていたことが分かる。梁得声は勤勉に王逸の手本を臨模し、書道に励んで王逸に褒められている。王逸の文の最後には、康熙丁丑端陽閩中七十六叟王逸拜書と書かれている。康熙丁丑年の時点で王逸は 76 歳で、逆算すると王逸は 1621 年（明　天啓元年）に誕生したことがわかる。

懐梁得聲	梁得聲を懐う
故人別後近何如	故人別れし後　近くは何如
知有梅花伴著書	梅花著書を伴うこと有るを知る
三載空懸儒子榻	三載空しく懸く儒子の榻
一尊遙想伯鸞居	一尊遙かに想う伯鸞の居
閩南鐵笛悲秋壯	閩南　鐵笛　秋壯を悲しみ
海外寒雲遶夢餘	海外　寒雲　夢餘を遶らす
彼此相思應不異	彼此の相い思うこと應に異ならざるべし
好從谷口訪雙魚	好く谷口より雙魚を訪ぬ

【七言律詩】

【平水魚韻】

【通釈】

別れた後、あなたは最近どうであろうか。あなたは、私が送った梅のそばで詩文を書いているだろう。別れてから三年の間に君のために用意している椅子がずっと寂しく掛けられている。ひとたび、杯を挙げたら「伯鸞隠居」の事情を思い出し、君も伯鸞のように生活を送っているだろう。閩南の鉄の笛の音が悲秋の気持ちを奏で、海外の雲がつねに夢に出てくる。私と君は同じく互いに思い合っている。私は隠遁している谷口で君の手紙を待っている。

【背景】

この詩は康熙 34 年に作られたと推定できる。康熙 34 年の前、梁得声は康熙 30 年 11 月から康熙 32 年 6 月まで福州柔遠駅で存留通事を務めていた。この詩が作られた時には、梁得声が帰ってから 3 年が経過していた。同年（康熙 34）梁得声は 11 月 9 日に接貢存留通事として福州にやってきた。

まず、この詩の作成年を確認してみる。詩の第三句目である「三載空懸孺子榻」の中の三載は時間を示している。王登瀛は康熙 32 年から琉球人師匠の身分を持って柔遠駅で教授している。梁得声は康熙 30 年 11 月から康熙 32 年 6 月まで福州柔遠駅で存留通事として働いていた。その康熙 32 年 6 月、琉球国に帰ってから康熙 34 年まではちょうど 3 年間である。「柳軒詩草」は時間の前後の順に沿って篇列しているという仮説によって「懐梁得声」は康熙 34 年に作られたと推定できる。

〈首聯〉

「故人別後近何如、知有梅花伴著書」

故人は梁得声のことを言う。句の前半において梁得声に最近どうですかと聞いている。非常に口語的な言葉で二人の親しい関係を示している。梅花は梅花使という説がある。歴史上、陸凱と範曄は友好があり、範曄は江南から梅花を郵送して長安の範曄に詩句の「折梅逢驛使、寄與隴頭人」ともに贈った。つまり、ここにある梅花は友だちからの手紙である。著書は書を書くことである。つまり、後半の句において梁得声は書案のそばで書を書いている。書案の上に王登瀛からの手紙が置いてあるという場面を描いている。

〈頷聯〉

「三載空懸儒子榻、一樽遙想伯鸞居」

儒子榻は後漢、豫章太守陳藩はあまり賓客を接待することをせず、徐稚[1]が来訪する際にだけ椅子を設置して、徐稚が帰ったらまた椅子を収めていたことを指す。転じて親密な関係を言う。「空懸孺子榻」は梁得声のために用意している椅子はずっと懸けられたままだと述べている。つまり梁得声が琉球に帰ったことを指す。三載とは梁得声が帰ってから三年を過ごしたことをいう。「柏鸞[2]居」は隠逸者の住まいを指す。伯鸞は後漢の梁鴻の字である。梁鴻は学問に優れているけど出世せず、妻とともに覇陵山で耕作と紡織をして暮らしている。また夫婦が和やかに付き合っている意味も含まれている。つまり、梁得声は超然の賢者で家庭も幸せであることを言っている。

〈頚聯〉

「閩南鐵笛悲秋壯、海外寒雲遶夢餘」

「閩南鐵笛」は福建の故事である。『八閩通志』によって宋代武夷山の中に隠者の劉衡は鉄制の笛を吹くのにたけている。彼の笛の音は雲に届き、石を裂く力があるとされる。[3]この典故を引用して王登瀛は自分がいかに悲しいのを表している。

〈尾聯〉

「彼此相思應不異、好從谷口訪雙魚」

「谷口」は古地名で、漢の鄭子真[4]は有名な人物で朝廷の招聘に答えず、谷口で農業して隠遁生活を送ったという。雙魚[5]は書簡のことを指す。「好從谷口訪雙魚」は王登瀛が琉球の梁得声からの手紙を待っていることを言う

『柳軒詩草』にはまた「冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻」という梁得声に関わる詩があるが、この詩は本論稿第三章、第三節において分析するので本節では分析しない。

2　陳其洙

陳魯水（1667－1694）は、本名は陳其洙という。『陳姓家譜（三世陳其洙）』によって以下のように陳其洙の経歴をまとめる。陳魯水は康熙 17 年（1678）若秀才、康熙 20 年（1681）秀才となり、康熙 28 年（1689）通事に昇任し、康熙 31 年（1699）黄冠を賜って同年存留通事に就任している。陳魯水は生涯、二回中国に渡った経験がある。

①康熙 23 年（1684）、読書習礼のために正議大夫鄭永安に従って福州に赴いて滞在 6 年間、康熙 28 年 5 月 20 日帰国した。

②康熙 31 年、存留通事として閩に赴いて、公務を終えて康熙 33 年（1701）5 月 29 日に帰国した。しかし、まもなく 6 月 17 に病気に罹って 9 月 14 日に逝去した。

送陳魯水	**陳魯水を送る**
湖海交游解佩纕	湖海の交游佩纕を解く
經年下榻寫心長	經年　榻を下して心長を寫す
詩成一字推敲細	詩　一字を成すに　推敲細かく
酒至千鐘戲謔狂	酒　千鐘に至りて　戲謔狂おし

[1] 後漢、南昌の人。字は孺子。徵辟に應せず、南州の高士と稱せらる。太守陳藩に重んぜらる。(『後漢書』巻 83「高士伝」、中華書局出版社、1965 年より要約した)

[2] 梁鴻、後漢、平陵の人。讓の子。字は伯鸞。博覧多通、章句の學を為さず。同縣の孟氏の女を娶り、共に霸陵の山中に入り、耕織を以て業とす。章帝之を求むるも遂に得ず、尋いで姓名を變へて齊、魯の間に居り、又、呉に適き、廡下に居る。書十余篇を著す。(『後漢書』巻 113「高士傳下」、中華書局出版社、1965 年より要約した)

[3] 明・黄仲昭『八閩通志』、福建省地方志編纂委委会主編、福建人民出版社出版、1991 年 6 月、750 頁。

[4]漢・班固『漢書』巻 72、中華書局出版社、1964 年 6 月、3056 頁。

[5] 古人が手紙を二枚の魚の形の札で挟んで或いは魚形の函に入れる。後に、雙魚あるいは雙鯉で手紙を指す。

正喜弦歌調雅韻	正に弦歌を喜び　雅韻を調え
忍聽驪唱動離腸	忍びて驪唱を聴き　離腸を動かす
匆匆別後如相憶	匆匆して別れし後　如し相い憶わば
莫厭雙魚遠寄將	雙魚遠く寄するを厭うこと莫からんや

【七言律詩】
【平水陽韻】
【通釈】
題目：陳魯水を送る
　陳元龍のような人物と交遊する時、身に着けている飾り物を送る。私とあなたは一年間親しく付き合ってもっと遊びたいが、あなたは帰らないといけない。詩を作る際に、私とあなたは細かく一字でも考慮する。酒を千杯飲んでお互いにわがままで冗談を言う。私とあなたと交遊し相互の感情が通じ合う中、別れの曲が奏でられ始め悲しくなった。あわただしく別れた後、もし相い憶うならば遠く手紙を厭わないでほしい
〈首聯〉
「湖海交游解佩纕、經年下榻寫心長」
　「湖海」は湖海元龍のことである。三国時期の陳登[1]は字が元龍である。陳登は豪胆な気概を持ち、小事にこだわらない人物である。「湖海交游」は陳登のような人物と交遊する意味である。ここの陳登のような人物とは陳魯水のことである。「解佩纕」という語は「離騒」より出ている。それは「解佩纕以為結言、吾令蹇修以為理」である。佩纕は身に着けている飾りものである。自分の身に着けているものをはずして相手に送ることは、二人がとても親密であることを言っている。「經年下榻」とは陳魯水が王登瀛と一年ぐらい付き合ったことを言っている。王登瀛は康熙 32 年に 8 月に行われる郷試を受験し終えて、柔遠駅で琉球人の師匠を務め始めていた。王登瀛は柔遠駅で泊まって陳魯水、金浩然、周新命などを教えている。実際には康熙 33 年 5 月まで王登瀛は陳魯水と付き合っており、その年数は一年未満である。ここの「經年」は大まかな言い方である。「心長」は心長気短のことである。これは心があるけれど力が及ばない意味である。つまり、陳魯水ともっと深い長く交流しようと思うが滞在期限に限られてできないことを表している。王登瀛はそれに対して非情に残念だと思っている。
〈頷聯〉
「詩成一字細推敲，酒至千鐘戲謔狂」
　「推敲」は詩の言葉遣いを細かく考量して最も適切な言葉を求めることである。これに関しては、賈島の一字推敲の典故を参照されたい。「戯謔」は、王登瀛と陳魯水は酒を飲みながらお互いに冗談を言ったり、またはからかったりしたことを指す。この句では二人が勉強の時には一生懸命に詩や文を討論し、遊ぶ時にはまた存分に遊んでいることを表している。
〈頚聯〉
「正喜弦歌調雅韻、忍聽驪歌動離腸」
　「正喜弦歌調雅韻」は二人の友情がますます厚くなってぴったり合う時を言っている。「驪歌」は別れる時の歌である。頚聯は音楽の調子の変化を用いて二人の別れを喩えている。
〈尾聯〉
「匆匆別後如相憶，莫厭雙魚遠將寄」
　「雙魚」は書簡のことを言う。「莫厭雙魚遠將寄」は王登瀛が陳魯水に手紙を送ることをくれぐれも忘れないようにと言っている。京都大学所蔵の『琉球資料』に中国文人、琉球の文人と往来する書

[1]131 頁第二章第三節に詳しい。参照されたい。

簡は 23 件がみられる。広い海に隔てられても、進貢船が郵便路となって中琉の文人が各自の国にいても連絡できる。

其二	其の二
習習薫風柳影疎	習習たる薫風　柳影疎なり
送君偏憶晤君初	君を送りて偏に憶う　君と晤う初
長亭把袂青山晩	長亭に袂を把る青山の晩
古驛留題午夢余	古駅　題を留む午夢の余
惜別且傾今夕酒	惜別　且に傾く　今夕の酒
離群預定隔年書	離群　預定す　隔年の書を
雖然一日堪千古	一日　千古に堪えると雖然も
難禁陽關涙滿裾	陽関　涙裾に満つるを禁じ難し

【七言律詩】

【平水魚韻】

【通釈】

清々しく温かい初夏の風が吹いて、柳の枝はまだ茂っていない。あなたを送る時、あなたと初めて会った時の情況を思わざるを得ない。長亭であなたと別れる時、太陽が青い山に傾いている。古い駅で詩を留める時、太陽が空の中間にある。別れを惜しんで今日の酒を思いきりに飲もう。あなたと、帰ってから来年、手紙を必ず送ってようと約束した。あなたがいない毎日を過ごすことが千年を過ごすようである。陽関の曲を奏でると涙が裾に満ちるのを禁じがたい。

【分析】

〈首聯〉

「習習熏風柳影疎，送君偏憶晤君初」

「習習」とは風・雨のかすかな音である。「熏風」は暖かい初夏の東南風である。「柳影疏」は柳の枝がまだ茂っていない様である。この二つの言葉は初夏の時期を示している。家譜の記載によると陳魯水は康熙 33 年の 5 月に帰国した。ちょうど詩の内容と一致している。それでこの詩は康熙 33 年の 5 月（陳魯水が帰国前）に作られたことがわかる。

〈頷聯〉

「長亭把袂青山晩，古驛留題午夢余」

「長亭」は城外の 10 里のところで旅人が休憩するために設置されている亭である。古代の人は送別する場合は長亭までで、そこでもう別れなければならない。「把袂」は相手の袖を挽いて恋しく放さない様である。長亭まで見送って別れないといけない時、まだ相手の袖を挽いている。この一連の言葉の表現は、王登瀛と陳魯水との厚い友情をことごとく表している。「古驛留題」はおそらく陳魯水への送別会が柔遠駅で行われて、その場で王登瀛は陳魯水に送る詩を作ったのであろう。「午梦餘」は詩の作成時間が午後であることを示している。前半の「青山晩」から送別会は夕方まで続いていたとみられる。

〈頚聯〉

「惜別且傾今夕酒，離群預定隔年書」

「隔年書」は、王登瀛は陳魯水と琉球に帰ってから翌年に書簡を届けるように約束したことを言う。琉球は中国に二年一回の朝貢制度があり、朝貢使節を迎える接貢もあり、ゆえに毎年福州と那覇間を船が往来している。琉球と中国の間は海に隔てられて、交通の不便が確かにあるのだが、往来する進貢や接貢の船を通して中琉の文人たちは書簡で連絡を取り続けている。進貢船の郵便路を通して、琉

球と中国の文人は書簡だけ送っているわけでなく、お金やお土産などもお互いに送りあっている。程順則、蔡文溥、梁得声、周新命らは、福州でできた友人と離れても、連絡が続いていたと想像できる。
〈尾聯〉
「雖然一日堪千古、難禁陽關淚滿裾」
「一日堪千古」は陳魯水が帰国して福州にいない日々、毎日を過ごすのが千年を過ごしたようであるということである。「陽關」は陽関曲で別れの歌である。「裾」は衣服の前身頃である。尾聯では王登瀛が陳魯水と離れたくないことを表している。

遥輓陳魯水[1]　　**遙かに陳魯水を輓(とむら)う**

客夏驛樓、陳子告歸。離殤一舉、兩淚交頤、戀不忍舍。予謂陳子曰古道交情離千里可同堂、異日再奉使至握手話舊當不遠也。詎意言旋未幾忽而仙逝、予聞中心愴然、率爾成韻用寫悲懐并寄弔云：
（客夏の驛樓、陳子告歸する。離殤一舉し、兩淚交頤し、戀して舍てるに忍びず。予陳子に謂いて曰く「古道の交情は千里を離るも同堂たるべし、異日再び使を奉じて至れば手を握ぎりて舊を話ること當に遠からざるべし。詎ぞ意わんや旋るを言うこと未だ幾ばくならずして忽(たちまち)仙逝することを。予聞いて中心愴然たりて、率爾にして韻を成し悲懐を寫すを用ってし並びに弔を寄せて云く

憶汝瓊河上、經年共著書。　　汝を憶う瓊河の上、經年著書を共にす
誰知歸國去、竟卜夜臺居。　　誰か知らん歸國して去り、竟に卜す夜臺に居するを
海外音容邈、樓頭故舊疎。　　海外　容音邈にして、樓頭　故舊疏なり
空留琴與劍、觸目淚垂余。　　空しく留む琴と劍、觸目すれば淚垂れ余る
【詩型】五言律詩
【押韻】平水魚韻
【通釈】
記憶の中に陳君は私と柔遠駅で一緒に書を読んだり、詩を作ったりしたことを、まだはっきりと覚えているのに。誰も思わなかった。陳君が帰国した後に逝去した消息が伝わってくることを。海外の陳君は彼の声と容貌がこれから遥かなところへ消えていく。柔遠駅の楼に立って琉球を眺めている私はやつれている。以前、陳君と遊んだところや、弾いた琴を見ると陳君を思い出して目が潤ってくる。
【分析】
陳氏家譜によると陳魯水は帰国した後、6 月 17 日に病気に罹って 9 月 14 日に病死した。享年 28 歳である。非常に若くして死去した。王登瀛は陳魯水が帰国した後、手紙が来ることを期待しているさなか、陳魯水が病死したという訃報が届いた。思いもかけず康熙 34 年の別れがなんと永別となった。王登瀛は悲痛な気分で陳魯水を弔う文と詩を書いた。陳魯水が康熙 33 年 9 月 14 日に病死したという訃報は、早ければ康熙 33 年の年末に福州に行く船に託されすでに王登瀛に届いたであろう。しかし、9 月に病死した後、陳魯水の家族は様々なことをしなければならないため、王登瀛にすぐに知らせる余裕はなかったと考えられる。康熙 34 年の福州への船に託して、王登瀛は陳魯水が病死した訃報を聞いたという方が適切であると思われる。つまり、この詩は康熙 34 年の年末ごろ作成された

[1] 陳魯水：童名真德字魯水號道丈，行二，康熙六年丁未九月初五日生，康熙三十三年甲戌六月十七日得病同九月十四日死葬于成久普之墓（享）年二十八。
康熙二十三年甲子請乞王命為讀書習禮事，隨正議大夫鄭永安東恩納親雲上十二月初七日那霸開船赴閩留六年，己巳年五月二十日歸國。
康熙三十一年壬申二月初一日奉命為存留通事，隨耳目官馬氏田場親雲山良象，正議大夫王可法國場親雲上赴閩，事竣甲戌年（康熙三十三）五月二十九日歸國。（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6 巻、那覇市役所、1980 年 3 月、460 頁。

と推定できる。また詩集は時間順に沿って篇列されているという仮設によると、この詩と文が詩集の最後におかれているのはおかしくない。
「憶汝瓊河上、經年共著書」
「瓊河上」は陳魯水が福州に滞在する期間を指す。「經年共著書」は陳魯水が存留通事として柔遠駅で王登瀛とともに詩を作ったり、書を読んだりしたことである。
「誰知歸國去、竟卜夜臺居」
「夜臺」は墓のことである。「夜臺居」は墓に住むことですなわち死亡のことである。「卜」は占いことである。陳魯水の死亡の消息は王登瀛が占いで知ったわけではなく、ここで「卜」を使うのは王登瀛がいままでも陳魯水の死亡に直面したくない心情を表している。
「海外音容邈、樓頭故舊疎」
「音容」は声と容貌である。また「音容宛在」は死者の声と容貌が目の前にあるようである。しかし、「海外音容」は琉球で死亡した陳魯水を指す。これから、王登瀛は陳魯水との間に海の阻隔だけでなく、さらに陰陽の阻隔を添えている。「樓頭故舊」は柔遠駅楼に琉球の方向に望んでいる作者である。「疎」は作者がやつれていることである。
「空留琴與劍、觸目淚垂余」
「琴與劍」は暫く前、陳魯水が一緒に弾いた琴、一緒に舞った剣である。この琴と剣は陳魯水と関わる一切の景物や実物の象徴である。「觸目淚垂余」は王登瀛が陳魯水と関わる物を見て亡き人を偲んで涙が垂れている様子である。
『柳軒詩草』で陳魯水に関わる詩は、琉球人の中でも最も多く、また詩の内容を解読すると陳魯水と王登瀛との真摯な友情を感じられる。ほかに「同竺天植陳元聲集飲驛樓陳魯水以紙屏索詩并書兼讀陳元聲題屏詩即席走筆附和」という陳魯水に関わる詩があるが、本論稿の第三章、第三節において検討するのでここでは分析しない。

3　鄭士綸

鄭克叙（1661－1702）は本名を鄭士綸という。『鄭姓家譜（大宗鄭肇祚）』によって以下ように鄭克叙[1]の経歴をまとめる。鄭克叙は康熙 8 年（1669）若秀才、康熙 14 年秀才となり、康熙 24 年（1685）通事に昇任し、康熙 25 年(1686)黄冠を賜って同年存留通事として中国に遣わされ、康熙 31 年(1692)都通事に昇り、康熙 33 年（1694）座敷に就任している。鄭克叙は生涯で四回中国に渡った経験がある。

① 康熙 21 年（1682）読書のために存留通事蔡鐸に従って 11 月 13 日福州に赴いて、滞在 4 年で康熙 24 年 7 月 10 日に帰国した

② 康熙 25 年（1686）、存留通事として 11 月 13 日那覇より出発して、途中荒れた天気によって麻姑山に流された。康熙 26 年、船を修繕して那覇に戻り同年 9 月 14 日出航して 10 月 1 日に福州に

[1] 鄭克敘：五世通事綸。宮城通事親雲上，童名滿及號克敘行一。順治十八年辛丑七月十四日生，康熙四十一年壬午六月十五日不祿享年四十三。
康熙二十一年壬戌請王命存留通事蔡鐸志多伯親雲上赴閩讀書四年，二十四年乙丑七月初十日歸國。
康熙二十五年丙寅二月初五日奉使為進貢存留通事，十一月十三日隨耳目官魏應伯越來親雲上朝盛正，議大夫曾益砂邊親雲上那霸開船（中略）（康熙二十六年）十月初一日到福建（中略）康熙二十八年五月二十日歸國。
康熙三十一年壬申二月初一日為進貢事奉使為都通事十一月二十日隨耳目官馬庭器田場親雲上良象，正議大夫王可法國場親雲上那霸開洋。在馬齒山候風十二月初三日自馬齒山開洋初十日到閩，兩船公事已竣次年六月初四日使兩舟歸國。赴京使初六日福州起身九月初一日到京（中略）初三日京師起身十二月二十四日回閩次年閏五月二十九日歸國。（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、671 頁）

到着した。康熙 28 年 5 月 20 日帰国した。

③ 康熙 31 年（1692）、進貢のために都通事として 11 月 20 日那覇より出航して馬歯山で風を待ち、12 月 3 日馬歯山より再出航して 12 月 10 日福州に到着した。翌年康熙 32 年 6 月 6 日、福州より出発して 9 月 1 日北京に到着した。公務を終えて 10 月 3 日北京より出発して 12 月 24 日に福州に着いた。

④ 康熙 38 年（1706）、接貢のために在船都通事として福州に赴いて、翌年康熙 39 年 5 月 27 日帰国している。

⑤ 康熙 40 年（1701）琉球に漂着した商船を護送するために在船通事として牧港より出航して 4 月 21 日に福州に着いた。翌年康熙 41 年 6 月 1 日に帰国するが途中台風に遭遇して蘇州に流された。福州に送還されて康熙 41 年（1702）6 月 12 日五虎門より出航するがまた台風に被害されて不運にも、遭難した。享年 43 歳。同船に一緒に遭難した人には程素文（順性）がいる。

送鄭克敘歸中山	鄭克敘の中山に歸るを送る
挾得幽燕壯士風	挾み得たり幽燕壯士の風
未幾又欲歸帆東	未だ幾ばくならずして又東のかたに帰帆せんと欲す
垂堤柳色依人媚	堤に垂る柳色人に依りて媚び
送客鶯聲帶露融	客を送る鶯聲　露を帶びて融る
島嶼微茫煙火外	島嶼微茫たり　煙火の外
家鄉縹緲海雲中	家鄉縹緲たり　海雲の中
從茲兩地同明月	茲れより兩地　明月を同にすれば
好把相思寄遠鴻	好く相思を把りて遠鴻に寄せん

【七言律詩】
【平水東韻】
【通釈】
題目：鄭克叙の中山に帰るのを送る
　北燕の壮士の気概を携えて帰ってきた鄭は、また帆を揚げて東の故郷に帰ろうとする。垂れている柳の枝が風に従って揺れて美しい。鶯は美しく鳴いて、まるで客を見送っているようである。島はおぼろで人煙のないところにある。海の雲の中のかすかではっきりみえないところはあなたの故郷である。これから私たちは各自の故郷で明月を共に見るしかない。雁にお願いしてお互いの思いを伝えよう。
【背景】
　この詩は王登瀛が勤学人の師匠になってから作られたものである。具体的には康熙 32 年（1693）、王登瀛は江西省での科挙試験から帰った後、柔遠駅の学生の要求と先輩師匠の推薦で勤学人の師匠となった。鄭克敘は康熙 31 年（1692）進貢の為に都通事としてまず福州に行った。すべての任務を終えて康熙 33 年（1693）五月二十九日に琉球に帰っている。
「挾得幽燕壯士風、未幾又欲歸帆東」
　「挾得幽燕壯士風」は鄭克叙が都通事として北京に行ったことを言っている。鄭克叙は康熙 32 年 6 月福州から出発して 9 月 1 日に北京に着いた。同年 10 月 3 日、北京から福州に戻っている。康熙 32 年は科挙の年なので、王登瀛は郷試の準備のためにおそらく琉球人との交流は少なかった。王登瀛と鄭克叙との交流は、康熙 32 年の 12 月 24 日、福州に戻ってから康熙 33 年 5 月帰国するまでの間

にあったと思われる。
「垂堤柳色依人媚、送客鶯聲帶露融」
「垂堤柳色」は柳の枝が茂って垂れている様である。「送客鶯聲」は鶯の鳴き声が琉球の客を送っているようである。「垂堤柳色」「送客鶯聲」はいずれにしても晩春三月の景色であるので、つまり詩を作った時期は康熙 33 年 3 月である。
「島嶼微茫煙火外、家郷縹緲海雲中」
「微茫」は遠くてぼんやりしているさまである。「煙火」はご飯を炊く煙を指す。転じて人家のことである。「煙火外」は人気がない遠いところこという意味である。「島嶼」「家郷」はどちらも鄭克叙の母国の琉球を指す。
「從茲兩地同明月、好把相思寄遠鴻」
「從茲兩地同明月」は、これから私たち二人はぞれぞれのところに遠く離れているが一緒に明月をみることができると言っている。これと似かよっている境地は、李白の「海上昇明月、天涯共此時」、蘇軾の「但願人長久千里共嬋娟」などがある。「遠鴻」は手紙や消息の使者の喩えである。

4　金溥

金浩然（1668－1708）は本名が金溥である。『金氏家譜（七世金應斗）・十世通事溥』[1]によって金浩然の経歴を以下の通りにまとめられる。

金浩然は康熙 16 年（1677）若秀才、康熙 21 年（1682）秀才となり、康熙 28 年（1689）に通事に昇任し、康熙 32 年（1693）黄冠を賜り、康熙 39 年（1700）都通事を授けられた。金浩然は生涯四回中国に渡った経験がある。

① 康熙 23 年（1684）、読書習礼のために存留通事蔡炳に付随して福州に赴いて、在留 6 年で康熙 28 年（1689）5 月 20 日に帰国した。留学期間中、康熙 27 年（1688）に都通事蔡応祥に従って北京に行った。
② 康熙 32 年（1693）、接貢のために存留通事として 11 月 1 日那覇より出航し、途中、風雨に遭遇した。幸いに 11 月 21 日広東省潮州府潮陽県海門に漂着した。船を修繕してから凌波より出航して翌年康熙 33(1694)年 2 月 15 日福州閩安鎮に至った。金浩然は柔遠駅に存留して康熙 34 年(1695) 6 月 11 日帰国した。福州に在留期間中、王世子の命令を奉じて閩人李爾燦に従って養鷹の法を学んだ。王世子から 7 両の銀を下賜されている。
③ 康熙 36 年（1697）、接貢のために存留通事として 11 月 17 日福州に着いた。公務を終えて康熙 38 年（1699）7 月 5 日帰国している。在留期間中、王世子の命令を奉じて見硯石の法を学び、閩人何彦開に師事していた。王世子から 5 両の銀を下賜されている。

---

[1] 金浩然：十世通事溥。手登根通事，童名真五郎，字浩然康熙七年戊申六月初八日申時生，大夫阮起龍天久親雲上三男也，親母那霸富氏宮平親雲上次女真那武樽，于康熙十四年乙卯守約因無子入繼宗祧。卒于康熙四十七年戊子六月二十二日享年四十一，葬于當間森後墓號養齋。
康熙二十三年甲子十月初九日請乞王命為讀書習禮事隨存留通事蔡炳喜友名親雲上赴閩，次二十七年戊辰隨朝京都通事蔡應祥高良通事親雲上赴京（中略）次二十八年己巳五月二十日歸國。
康熙三十二年癸酉二月初一日為接貢事奉使為存留通事同都通事毛文善我部親雲上十一月初一日那霸開船到馬齒山候風（中略）次年甲戌二月十五日幸到閩安鎮，進入内港安插驛館，公事全竣起船閏五月内回國，但溥存留在館次年（康熙三十四）乙亥六月十一日回國。
康熙三十六年丁丑九月二十六日為接貢事奉使為存留通事同都通事魏士哲渡具知親雲上將赴閩（中略）十一月初九日那霸開船到久米山候風至十二日見有順風開洋十七日到閩安鎮（中略）但溥存留在館次年（康熙三十八年）乙卯七月初五日回國
康熙四十二年癸未二月初一日為接貢事奉使為大通事同才府顧天休久志親雲上助辰等本年十一月十五日，那霸開船（中略）次年（康熙四十三年）甲申二月十三日自閩頭地方開船三月十七日到閩安鎮進入内港安插館驛。公事全竣七月十九日回國（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月　77 頁、78 頁）

④ 康熙 42 年（1703）、接貢のために大通事として 11 月 15 日那覇より出航して、強風にあおられて金門地方に漂流した。康熙 43 年(1704)2 月 13 日金門より出発して 3 月 17 日福州閩安鎮に至り、公務を終えて 7 月 19 日帰国した。

【背景】

詩題にある金浩然という人物は、本名が金溥である。王登瀛がこの詩を作った時、金浩然は接貢存留通事として三年間の勤務を終えて琉球へ帰る直前であった。つまり、康熙 34 年（1695）の 6 月ごろがこの詩が作られた時である。金浩然は康熙 23 年（1684）10 月に勤学として福州に来て康熙 28 年（1689）に帰国するまで、6 年間の留学生活を過ごした。勤学の期間中、康熙 27 年に北京への進貢団に入って一緒に北京に行った。金浩然は王登瀛にとって旧友といえる。勤学の時期の康熙 27 年（1688）に金浩然はすでに王登瀛と知り合っていた。康熙 34 年以降では、康熙 36 年（1697）、康熙 42 年と二回福州に来ている。王登瀛が旧友に送った漢詩を通して、旧友と知り合った時期は、大体康熙 27 年前後だということがわかる。康熙 32 年（1693）に琉球人の師匠となる前、康熙 27 年頃は王登瀛が頻繁に琉球人と交流していた時期である。

送金浩然歸中山

七載重逢意氣深、
異郷萍聚得知音。
燈前款我千鐘酒、
月下懷人一曲琴。
六六灣頭遲曉發、
三三山畔耐孤吟。（榕城有九山）
他時再泛張騫艇、
古驛論文愜素心。

金浩然の中山に歸るを送る

七載重ねて逢い意氣深く
異郷萍聚して知音を得たり
燈前我を款なす千鐘の酒
月下人を懷う一曲の琴
六六灣頭　曉發遲く
三三山畔　孤吟に耐う（榕城に九山有り）
他時再び泛かぶ張騫の艇
古驛文を論じ素心を愜（こころよ）くす

【七言律詩】

【平水侵韻】

【通釈】

題目：金浩然が中山に帰るのを送る

七年ぶりにまた会うことができ、私たち二人の友情はほんとに深い。異郷での偶然な出会いであるが知音を得た。夜にあなたは私に一千杯の酒を招待してくれた。明月の下で私はあなたのことを思い一曲を奏でる。朝早く出航したが曲がりくねっている瓊河は船を遅らせた。福州では九の山があって一人で詩を吟詠することに適合する。今後、再び使者として来ればまた柔遠駅で一緒に文を討論して品性を陶冶しよう。

〈首聯〉

「七載重逢意氣深、異郷萍聚得知音」

「七歳重逢」は重要な情報を示している。金浩然は康熙 28 年、勤学を終えて琉球に帰った。その後、接貢存留通事として康熙 33 年（1694）2 月 15 日に福州に来た。この時点では王登瀛はすでに柔遠駅で琉球人の師匠を務めていた。逆算すると 7 年前、康熙 27 年前後、金浩然と知り合ったことがわかる。「萍聚」は偶然に知り合うことである。「得知音」は康熙 27 年に初対面なのに二人は意気投合したということである。

〈頚聯〉

「燈前款我千鐘酒、月下懷人一曲琴」

この句の前半では二人夜に酒を飲みながら心おきなく話している場面を描いている。後半では王登

瀛がひとり琴を弾いて友人への思いを託す場面を描いている。頷聯の中に「燈前」と「月下」、「款我」と「懐人」、「千鐘酒」と「一曲琴」を通して、二人の付き合いの親密さ、別れた後の王登瀛の孤独な後ろ姿をうまく表現できている。

〈頷聯〉

「六六灣頭遲曉發、三三山畔耐孤吟」

「六六湾頭」は川が曲がりくねっている様子を言っている。琉球人は帰国するにしても北京に行くにしても、柔遠駅の傍に流れている瓊河の渡口で船に乗って閩江に入る。「三三山畔」とは詩の自注に説明している。榕城では九山があると説明している。榕城はすなわち福州のことである。福州では「三山藏三山現三山看不見」という諺がある。三山現とははっきり見えてわかる山すなわち越王山、于山、烏石山である。三山藏とは隠れている山、すなわち冶山、羅山、閩山である。三山看不見とは見えない山、すなわち芝山、鍾山、中山である。

〈尾聯〉

「他時再泛張騫艇、古驛論文愜素心」

「張騫」は漢武帝の時期、中国の西域に遣わされた使者である。中国歴史上、代表的な外交使節として光り輝いている。「張騫艇」は金浩然が使節として船に乗って中国に遣わされることを言っている。「他時再泛張騫艇」は金浩然がまた進貢使節として来ることを期待している。事実上、康熙 43 年（1704）に金浩然が福州に来て 3 か月短く滞在していた。「素心」は純朴な心である

其二

載酒離亭送爾行	載酒 離亭 爾を送りて行く
錦帆高掛曉風清	錦帆 高く掛け 曉風清らかなり
千尋浪靜連天碧	千尋の浪　靜かなり　連天の碧
萬里煙拖兩地情	萬里の煙　拖く　兩地の情
復命中山還舊使	中山に復命して　舊使を還し
捧書北闕待新旌	北闕に書を捧げ　新旌を待つ
寄言當日乘槎侶	言を寄す　當日　槎に乘る侶
莫惜雙魚一水盈	双魚の一水盈つるを惜しむこと莫し

【七言律詩】

【平水庚韻】

【通釈】

酒を載せて離亭まで君を見送る。錦の帆を高く揚げて朝の風は清々しい。続き連なる浪は静かで海は天の果てに広がっている。使者は中山王に復命するために琉球に帰る。今回、北京から皇帝の聖旨を捧げて帰って来るのを待っている。船に乗って帰るあなたに手紙を送る手間を惜しまないで、と伝えたい。

「載酒離亭送爾行、錦帆高掛曉風清」

この句では王登瀛は酒を載せて離亭で金浩然を見送っており、船の帆も張られて間もなく出発する様子を描いている。「載酒」は別れる際に王登瀛が酒を携えてくることを言っている。王登瀛が友人を重視していることを表している。

「千尋浪靜連天碧、萬里煙拖兩地情」

「千尋浪」は長く続いている浪である。「連天碧」は青い海は長く延びて空と一体となっている様子である。「万里煙」は長く連なる雲である。「両地情」は金浩然と王登瀛のお互いの思いである。

「復命中山還舊使、捧書北闕待新旌」

金浩然が康熙 32 年福州に来た時の任務は、進貢使節を迎えることである。「復命」は、この任務を終えた際に帰国して国王に報告することである。「捧書北闕」は、次回金浩然が北京に進貢するために来ることを言っている。「待新旌」は、王登瀛が金浩然が再び来ることを期待していることを指す。
「寄言當日乗槎侶、莫惜雙魚一水盈」
「乗槎侶」は帰国する金浩然たちを指す。最後の句で王登瀛は金浩然に帰国したら手紙を忘れないでと言っている。後半の句において、王登瀛は金浩然に遠くても手紙を送ることを惜しまないでくれと言っている。

5 程順性

送程素文鄭克文入都　　程素文鄭克文の入都を送る

并轡皇華客	轡を並ぶ　皇華の客
懐才上帝京	才を懐いて　帝京に上る
松關留舊跡	松關　舊跡を留め
荷葉泛新觥	荷葉　新觥に泛ぶ
隷祖稱書法	隷祖　書法を稱し
權名為夢成	權名　夢成為り
幾年同下榻	幾年　同じく榻を下し
今日悵離情	今日　離情を悵む

【五言律詩】
【平水庚韻】
【通釈】
題目：程素文、鄭克文の入都を送る
程素文と鄭克文は一緒に北京に向かう。二人は才能を持っているので北京に行く。陰山にある古い松関に二人の足跡を留めた。帰って来たら蓮を新たな杯に載せて酒をあげる。吏書は書道の初めと称している。権力や名声などすべて夢を実現させる道具である。数年私と交遊したが今日、別れに際して悲しみ恨めしい思いである。
【背景について】
鄭克文についての詳しい資料はない。蔡応瑞、梁得剡が北京に行く時、王登瀛は詩題に「入貢」という言葉を用いている。対して程素文、程克文に対しては「入都」という言葉を用いている。蔡応瑞、梁得剡は正式の進貢使節であり、程素文はただ勤学の身分として進貢団に付随して北京に行くからである。とすると鄭克文は当時勤学の身分であったと推測できる。勤学人を進貢団に付随させて北京に行く。これはおそらく、進貢の人材を育成するために、とても優秀な勤学しかこの待遇を得られないのであろう。程素文、鄭克文以外では、程順則と鄭克叙が勤学の身分を持ちながら進貢使節に随行して北京に行っている。
程素文（程順性）は程順則の弟で、康熙 31 年（1692）11 月 2 日勤学人として福州に来て、康熙 35 年（1696）6 月 17 日に琉球に帰っている。王登瀛が勤学の師匠となった時、程順性は柔遠駅で 1 年間を過ごしている。程素文は康熙 34 年に北京に行ったため、この詩は康熙 34 年に作られたのであろう。また、北京に進貢する時、一般的には春末に出発するから、この詩は康熙 34 年（1695）の春末ごろ作られたことがわかる。
「並轡皇華客、懐才上帝京」
「轡」は馬を制御する時にくつわに取り付けた網のことである。「並轡」は馬の手網を並べて程素

文と鄭克文が一緒に北京に行ったことを指す。「懐才」は才能を持っているという意味である。また、程素文、鄭克文は柔遠駅での数年間の勉強を通して、かなり知識を増やして素晴らしい人物となったという意味も含まれている。才能を抱いているからこそ北京に行かせたのである。

「松關留舊跡、荷葉泛新觥」

「松関」は古い関所で陰山にある。陰山山脈は中国北方にあって、内モンゴルから東西向きに河北省まで横たわっている。ここは程順性、鄭克文は北京に足跡を留めたことを言っている。「荷葉泛新觥」は初夏の五月に送別会を行って別れの杯を挙げたことを言っている。

「隷祖稱書法、權名為夢成」

「隷」とは隷書体のことである。「祖」は開始、始めの意味である。「隷祖稱書法」は何を言いたいがちょっと理解しにくい。字面の意味から判断すれば「隷祖稱書法」は漢字の書体はいろいろあるけれども隷書体が書道の鼻祖だと言えるという意味である。ここで王登瀛はわざわざ書道のことに言及しているが、おそらく程順性、鄭克文は勤学時に誰かに師事して書道を学んでいたのだろう。ちなみに、王逸という福州人は書道で琉球人に知られている。梁得声、程順則は王逸に書道を学んでいた可能性がある。

「幾年同下榻、今日悵離情」

「幾年同下榻」は王登瀛が程順性、鄭克文と数年交流していたことを言っている。鄭克文については資料がないため、福州でいつ、どれぐらい滞在していたのかわからない。しかし、鄭克文は当時福州での身分が勤学である可能性が高い。程順性は康熙 30 年 11 月―康熙 35 年 6 月まで勤学として福州に留学している。勤学時期、進貢グループに組み込まれて北京に行った琉球人勤学は程順則、程克叙である。程順則の弟である程順性も同じような待遇を得ている。鄭克叙という人物は、家譜資料に見当たらないが、彼の名前から誰かを推測できそうである。康熙年間、鄭氏門中で「鄭克Ｘ」という形の名前は『鄭姓家譜（大宗　鄭肇祚)』の資料にみられる。四世諱宗徳正議大夫与儀親雲上の条の記録によると、彼の息子の名前は「鄭克Ｘ」という形である。以下息子の名前である

「長男士綸（克叙）次男士経　三男士絢　四男士綬（克章）五男士紳（克書）六男士網（克理）七男士縄（克真）八男士綽」[1]

以上の中で鄭氏家譜に詳しく記されているのは鄭士綸、鄭士綬、鄭士紳、鄭士綱、鄭士縄である。四男鄭士綬は、康熙 36 年に初めて福州に行っているので時期的にふさわしくない。それで鄭士経、鄭士絢の中の一人は鄭克文である可能性がある。実名を呼ぶには親、師、君主に限られており、一般の人は字で呼ぶ。字は一般に実名と関連する言葉を使う。それで克文は士経である可能性が高い。しかし、鄭士経については家譜資料に詳しい資料がないので、この鄭克文が鄭士経であるかどうか推測できるだけである。また鄭士経は康熙 39 年（1700)、康熙 45 年（1706）在船通事として福州に行ったことがある。

『柳軒詩草』にはまた、王登瀛は程素文、毛子翀、鄭克文、陳楚水、紅爾吉などと柔遠駅で鬮韻作詩会を開催したことを反映している詩[2]が収録されている。この詩は本論稿の第三章、第二節、第三項において用いるためここでは分析しない。

6 梁成楫（得剡）

王登瀛は蔡応瑞が北京に行く前に詩を贈っただけではなく、同じく北京に行く梁得剡という人物に

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、668 頁。
[2] 同程素文毛子翀鄭克文陳楚水紅爾吉驛樓分賦　（王登瀛『柔遠駅草』内閣文庫 10895）

「送梁得剡入貢」詩を贈っている。梁得剡については、詳しい資料がない。しかし、詩の中に「東海風流士、曾遊璧水回」という句から興味深い情報が読み取れる。「璧水」とは璧雍をめぐる池、転じて国子監のことを指す。つまり、東海の風流士である梁得剡は、かつて国子監に留学していたことがあることが分かる。康熙年間に国子監に留学して、さらに進貢使節として上京した梁氏の人物は梁成楫しかないと、上里賢一氏は述べている[1]。また、梁成楫の字は得遠である。この梁得剡は梁氏家譜には載っていない。とすると、もう一人、国子監に留学してさら上京した梁氏の人物がいたのだろうか。その「字」を通して考えてみたい。字は本名を解釈するという意味合いが深い。例としては、梁鏞の字は得声である。鏞とは鐘のことである。得声は鐘と関連している。こういう側面から人物を判明することができる。剡は『易経・繫辞下』に「刳木為舟、剡木成楫」[2]という文に現れている。梁成楫と梁得剡は意味的に関係がある。したがって、梁得剡は梁成楫のことである可能性が高い。一方、梁姓家譜に記載されている梁得剡の字の得遠は、梁成楫が国子監に留学した時、国子監の博士陸得元が作ってあげたものである[3]。得剡は梁成楫の元々の字のであろう。続いて「送梁得剡入貢」を分析してみる

送梁得剡入貢	**梁得剡の入貢を送る**
東海風流士	東海の風流士
曾游璧水回	曾て璧水に遊びて回える
琴書光北斗	琴書北斗に光り
劍珮映三台	劍珮三台に映ず
人帶煙霞氣	帶には煙る霞人の氣
胸羅漢魏才	胸に羅る漢魏の才
送君重入觀	君の重ねて入觀するを送る
聲價重金臺	聲價金台に重ねん

【詩型】五言律詩
【押韻】平水灰韻

【通釈】
題目：梁得剡の北京への入貢を送る
　梁君は東海から来た風雅な男である。かつて国子監に留学して帰った。琴と書は北斗星の光に照らされて輝き、剣とおび玉は三台の星の光に照り映えている。梁君は古めかしく隠者の気質を備えて胸に漢魏の才子の風骨を抱いている。梁君が再び北京にいって皇帝に謁見されたら、梁君の名声は北京で高まるであろう。
【分析】
〈首聯〉
「東海風流士、曾遊璧水回」
　風流士は梁成楫を指しており、梁成楫は才能非凡の知識人だという意味である。「璧水」は周代の学校璧雍の周りを池で廻らすことで、転じて国子監を指す。「曾遊璧水回」は梁成楫が康熙 27 年―康熙 30 年まで北京国子監で留学していたことを指す。梁成楫と共に留学していたのはまた蔡文溥と阮維新である。康熙 33 年 11 月、梁成楫は進貢都通事として二回目に福州にやって来た。当時、柔遠駅で琉球勤学たちを教えている王登瀛と出会った。陳元輔からおそらく梁成楫の名を聞いていたが康熙

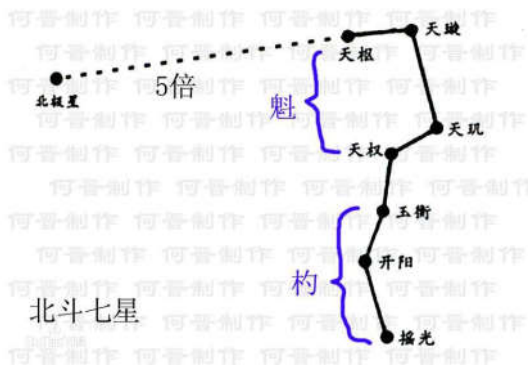
[1] 上里賢一『久米村と漢詩』、一般財団法人久米崇聖会、2018 年 3 月、139 頁。
[2] 呂祖謙編 『晦菴先生校正周易繫辭精義』、商務印書館出版、1935 年、 61 頁。
[3] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、791 頁。

33 年の出会いは二人の初対面であると考えられる。翌年、康熙 34 年春末、梁成楫らが出発しようとする際にこの贈別の詩を作った。

〈頷聯〉

「琴書光北斗、劍珮映三台」

「琴書」はすなわち琴と書籍で読書人のそばにいつも付き添っているものである。「劍珮」は身につける剣と帯玉である。剣、玉を身につけられのは一般な門弟ではないので、ここで梁成楫は名門の子弟であることを言っている。例えば、杜牧の詩で「我家公相家、劍佩嘗丁當」という詩がある。その意味は私の家は宰相の門弟で身につける剣佩が「丁當」との音が出る。おそらく王登瀛はこの詩句を参考にして作っただろう。「北斗」の第四つの星「天権」は科挙、文学を司る星でまた「文曲星」と呼ばれる。下の図を参照されたい。



[1]つまり、北斗の一つ性質は文運を主宰するということである。「三台」は三公を指し、すなわち太師、太傅、太保という中国古代最も地位が高い三つの官職のことである。まとめてみると琴書は文学の方面ものでそれに対するのは文曲星（北斗）で、「劍佩」は門弟が高い象徴でそれに対するのは「三台（三公）」である。要するに梁成楫は文曲星に恵まれて文才が高く、高い門弟から出た才子であると言いたいのである。「琴書」、「劍珮」はすべて梁成楫の持ちものである。持ちものから見ると梁成楫は非凡な人物である。

〈頸聯〉

「人帶煙霞氣、胸羅漢魏才」

「煙霞」は山水の美しい景色である。「煙霞氣」は山水の美しいところから来たので、その見た目は隠者の気質が見えると理解している。「人帯煙霞氣」は梁成楫は古めかしく高尚な隠者の気質があると言っている。「漢魏」は後漢献帝の建安年間（196－220）、後魏の曹丕黄初年間（220-226）との時代のことで、三曹、建安七子らの文学を建安風骨と称されている。その建安風骨は雄渾悲壮な格調を持ち、積極的に進取の精神を表している。「漢魏才」は梁成楫が建安才子のような人物であると言っている。

〈尾聯〉

「送君重入觀、聲價重金臺」

「入観」は天子を謁見することである。「聲價」は名声である。「金台」は燕昭王が天下の才子を呼び寄せるために台を築き上に千金を置いたという故事である。すなわち「黄金台」である。ここの「金台」は北京を指す。「聲價重金台」は梁成楫が才能に凭れて北京で名を揚げると期待している。

7 周新命

周熙臣の本名は周新命である。『周姓家譜（一世周文郁）・三世正議大夫新命』[2]によると康熙 27 年 11 月 17 日（周氏家譜の周新命の条には記録の欠あるので蔡氏家譜の蔡灼の条にもよる）に勤学人と

[1]https://baike.baidu.com/pic/%E6%96%87%E6%9B%B2%E6%98%9F/1750/0/0b07ec1ff9a58278f724e46d?fr=lemma&ct=single#aid=0&pic=0b07ec1ff9a58278f724e46d 2019 年 8 月 11 日 19:00

[2] 周新命 （三世正議大夫新命）目取真親雲上童名真牛字熙臣，康熙五年丙午九月十一日生，新命原是國俊之姐思戸男□□□親久米村宮城仁也，康熙五十五年丙申□月十四日卒享年五十一。
康熙二十七年戊辰十一月□□□讀書習禮事，請乞存留通事蔡灼喜友名通事□□赴閩三十四年乙亥□□□一日歸國（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、381 頁）

して福州に来る。康熙 34 年（1695）6 月 11 日（金氏家譜の金溥の条による）周新命は帰国した。周新命は帰国してから二度と使節として中国に来たことがない。最後には正義大夫の位階で逝去した。福州での留学中、竺天植に師事しており、陳元輔から教授を受けていたこともあるようである。著作は『翠雲楼詩箋』で『中山詩文集』に収録されている。『翠雲堂詩箋』は竺天植の序文、陳允溥の序文、任上喆の跋文、32 首の詩で構成されている。竺天植の序文よると、康熙 32 年春の時点で『翠雲楼詩箋』の草稿ができていたようである。周新命は勤学期間において竺天植、陳元輔に師事している。周新命は進貢使節として大きな役割を果たしてないが、琉球国内で久米村の講解師を務めた。また、王世孫尚益に買われて、尚益に詩書を講解している。そして、琉球王国時代の有数の漢詩人として、程順則、蔡文溥などと並び立っている。

送周熙臣	周熙臣を送る
汪倫千尺別離情	汪倫　千尺　離別の情
試計中山幾日程	試し計るに　中山　幾日の程
驛路雲迷帆泛泛	駅路　雲迷い　帆泛泛たりて
海門浪静水盈盈	海門　浪静かにして　水盈盈たり
忽驚疎雨催殘夜	忽ち驚く　疎雨　残夜を催すを
愁聽驪歌擁短檠	愁いて聴く　驪歌　短檠を擁くを
醉後不知君去未	醉いて後　君去ること未だしなるかを知らず
夢魂猶帶早潮生	夢魂　猶ほ早潮の生じるを帯びるがごとし

【七言律詩】

【平水庚韻】

【通釈】

題目：周熙臣を送る

昔汪倫と李白の友情の厚さは深さが千尺の桃花潭でも及ばない。琉球国に着くまで何日かかるか測ってみる。霧は柔遠駅前の道を霞ませ瓊河に泊まっている船は浮かび漂っている。五虎門では浪が静かで太陽の下できらきらと輝いている。突然、小雨が降って来てやっとまもなく夜明けだと気づいた。みんな一緒に別れの歌を歌って、短い灯の台はその歌の声の中で光っている。私は完全に酔っぱらって君が去ったかそれともまだなのかを知らなかった。寝ている間、耳に潮の音が伝って夢の中に海を見た。

「汪倫千尺別離情、試計中山幾日程」

「汪倫千尺」は李伯の千古名句の「桃花潭水深千尺、不及汪倫贈我情」のことである。王倫[1]は唐代涇川のお金持ちで李白を誘うために騙して、涇川には 10 里続く桃花があり、萬家の酒店があると言った。李白が至ったら実は「十里桃花」は桃花潭が 10 里の広さであり、「萬家酒店」は萬姓の人が開いているということであった。しかし李白は怒らず大笑いした。李白は汪倫のおもてなしに招待されたことに感謝して「贈汪倫」を作った。この典故を引用して自分と周新命に対する友情が桃花潭のように深いことを表している。「試計中山幾日程」とは別れる前、周新命に琉球に着くまで何日かかるのかと聞いている。

「驛路雲迷帆泛泛、海門浪静水盈盈」

「駅路」とは柔遠駅前の道である。柔遠駅の近くに瓊河が流れている。琉球の人は小萬寿橋で船に乗って閩江に入る。帰国するにしても北京に行くにしても、萬寿橋で船に登って出発する。「帆泛泛」は船が浪に従って浮かびただよう様子である。「海門」は閩江の入海口で、琉球の船はここから海に

[1]前掲清・袁枚著、郭紹虞、羅根澤主編『隨園詩話』補遺巻六、 715 頁。

向かっていく
「忽驚疎雨催殘夜、愁聽驪歌擁短檠」
　「残夜」は夜が尽きるところという意味で、つまり深夜あるいは夜明け前のことである。送別会で王登瀛は周新命などの琉球の友達と徹夜で語りあっている時に、突然、小雨が降り始めた。人々はやっと、まもなく夜明けだと気づいて、別れないといけないことを認識した。「短檠」は灯が燃え切れそうな様子を言っている。王登瀛と周新命らは最後、一緒に別れの歌を歌っていた。その声中で、灯の火はピカピカ輝いていた。
「醉後不知君去未、夢魂猶帶早潮生」
　王登瀛は酔っぱらって周新命たちは出発しているかどうかもわからない。王登瀛はこんこんと眠っており、波の音がさらさらと聞こえてきて、夢の中で周新命たちが乗っている船が徐々に遠くなっている場面を見ている。この句では、送別会で自分が酔っぱらって、何もわからない状態となっていたことを言っている。おそらく、王登瀛はちゃんと酔いを覚ました後、この詩を作って周新命に送ったと考えられる。

其二	其の二
片帆斜掛雨蕭蕭	片帆　斜めに掛け　雨蕭蕭たり
東海南閩水驛遙	東海　南閩　水驛遙かなり
雲樹漸隨鄉夢近	雲樹　漸く隨い　郷夢近づき
家山未到客愁消	家山　未だ到らず　客愁消ゆ
楓飄江上同聯轡	楓　江上に飄い　同に轡を聯ぎ
月落樓頭獨聽潮	月　樓頭に落ち　獨り潮を聽く
此去故人如問我	此より去る故人如し我を問わば
為言兩鬢欲霜凋	言を為す　兩鬢に霜凋ちんと欲すと

【七言律詩】
【平水蕭韻】
【通釈】
　其の二
　小さい帆を揚げており、さらさらと降る雨の中で船の出発を準備している。琉球から福州柔遠駅までは道程が遠い。あなたが故郷に帰る日がますます近づいてくるにつれて、私のあなたに対する友人としての思いが重くなる。あなたはまだ帰ってはいないけれど郷愁が消えた。楓の葉っぱが瓊河に散りしきる秋、私とあなたは一緒に散歩していた。明月が落ちる時でも私は眠れないでずっと一人で潮の音を聞いている。これから帰っていくあなたが私のことを問うたら、あなたに僕の鬢髪が白くなったと答える。
「片帆斜掛雨蕭蕭、東海南閩水驛遙」
　「雨蕭蕭」は雨がざあざあと降っている様である。天気を言っているというより、作者のじめじめとする心情を表している。「東海」は琉球のことを言う。「南閩」は福州のことを言う。「水駅」は琉球と柔遠駅間の海路である。
「雲樹漸隨鄉夢近、家山未到客愁消」
　雲樹は「雲樹之思」である。友人と遠く離れた後の思いである。唐・杜甫の「春日憶李白」の「渭北春天樹、江東日暮雲」という句から発祥する言葉である。前半の句では周新命が帰国するにつれて王登瀛の「雲樹の思い」が近づいてくる。「家山」は故郷である。「客」は周新命を指す。後半の句では周新命が出発に臨むにつれて、故郷に対する思いが徐々に解消していくことを言っている。

「楓飄江上同聯轡、月落樓頭獨聽潮」

「聯轡」は馬に乗っている二人が並行することである。句の前半では、王登瀛が周新命と一緒に瓊河の岸辺で散歩や歩くことを言っている。「獨聽潮」は王登瀛が一人柔遠駅で瓊河の流れる音を聞いていることである。「月落」「楼頭」「獨聽」はあわせて物寂しい雰囲気を述べている。

「此去故人如問我、為言兩鬢欲霜凋」

「故人」は周新命である。「鬢」は耳に近い側面の髪である。「霜凋」は鬢髪が白くなって髪の毛も落ちそうになるという意味である。「兩鬢欲霜凋」は王登瀛がやつれている様子を描いている。

『柳軒詩草』には、また「春幕集飲周熙臣山樓」という周新命に関わる詩があるが本論稿の第三章第三節にて検討するのでここで分析しない。

8 程順則

『柳軒詩草』は年代前後の順に従って篇列していることから、「寄程寵文」は康熙 34 年（1695）に作られたと推測できる。王登瀛が程順則と知り合った時期は、程順則の勤学時期（1683－1687）あるいは程順則の存留通事の時期（1689－1691）である。とすると、この詩を書く前、王登瀛が程順則と最後に会った時期は康熙 30 年（1691）である。二人は別れて 4 年あまりが経過している。または、程順則の勤学時期に王、程二人はお互いに面識があったかもしれない。しかし、二人が正式に深く交流し始めるのは、程順則の存留通事時期（1689－1691）が適切であると考えられる。王登瀛は若い頃全国のいろいろなところに遊歴していたため、康熙 32 年に琉球人師匠を務める前は福州に住んでいた時期と住んでいなかった時期がある。これに関しては、筆者の拙作「福州における陳元輔の交友関係」を参照されたい。王登瀛は程順則との詩文のやり取りはそんなに多くない。二人に関係する詩は『柳軒詩草』の「寄程寵文」と『中山詩文集』の「寄懐王閩洲」である。

寄程寵文	**程寵文に寄す**
思君望明月	君を思いて明月を望めば
煙樹影離離	煙樹　影離離たり
海外書難到	海外　書到り難く
雲中雁故遲	雲中　雁故より遲し
夢生殘雨夜	夢は生ず　殘雨の夜
愁滿落花時	愁は満つ　落花の時
念此滄溟隔	此に滄溟に隔てらるを念えば
論心未可期	心を論ずること未だ期するべからず

【詩型】五言律詩

【押韻】平水支韻

【通釈】

君を思いながら、明月を眺めている。靄にかすんでいる木の影が並び連なっている。手紙は簡単には海外に届かない。まして、雲中の雁は遠方に情報を伝えられるけどいつも遅れる。君と会う夢はいつも雨が降っている夜に見る。花が散らかって落ちる時、往々にして人の憂いを引き起こす。この広い海に隔てられることを思うと、いつ我々二人が親しく話しあえるかわからない。

【分析】

〈首聯〉
思君望明月、煙樹影離離
「明月」はいつも中国の古典詩歌の中に家族、友人、故郷を思う時、思念の情を託す景物である。人を思う代表の詩句は「但願人長久千里共嬋娟」があり、故郷を思う代表的な詩句は「舉頭望明月、低頭思故郷」がある。「煙樹」は煙にまつろわれる木や林である。「影離離」は月光が煙樹を照らしてぼんやりとして朦朧とした境地を営造していることを言う。前句の明月と後句の煙樹は明と暗の対比を通して詩人の名状しがたい心情を表している。
〈頷聯〉
海外書難到、雲中雁故遲
「海外書」 は海外に送る手紙である。しかし海外からの手紙と理解しても通じる。頷聯の読み方は「海外書」、「難到」、「雲中雁」、「故遲」という風に三、二、三、二となっている。これば詩の全体の二、三、二、三のリズムと一致してない。やはり、海外に送る手紙にと理解していいだろう。前句の「書」は王登瀛が琉球に郵送した手紙の象徴で、後句の「雁」は琉球からの返信を象徴している。要するに王登瀛は福州より程順則に消息を伝えることが困難であるが程順則は琉球から王登瀛に返信することも容易ではないことを言っている。
〈頚聯〉
「夢生殘雨夜、愁滿落花時」
「殘雨夜」「落花時」はどれも物寂しい情景である。友人に対する思念はいつもも物寂しい情景の下に現れる。「夢生」は夢の中に程順則と会っているということである。
〈尾聯〉
「念此滄溟隔、論心未可期」
「滄溟」は青海原である。「論心」は腹を割って語り合うことである。程順則の勤学期と存留期の約 7 年間を福州で過ごした。この 7 年間に程順則と王登瀛は知り合いとなったが、王登瀛は康熙 32 年前に広く全国に遊歴していたので二人は長く付き合っていなかった。康熙 32 年の秋、王登瀛はやっと落ち着いて柔遠駅に定着して琉球人と深く交流できるようになった。王登瀛と程順則との交流は、王登瀛が本格的に勤学の師匠となった時からである。康熙 32 年以降、王、程二人の接触に関する記録が多くなる。康熙 37 年には程順則が「寄懐王閩洲」を作って贈っている。康熙 52 年、程順則は琉球から薩摩詩人である相良玉山の『梅花百詠』を郵送してきて序文を求めた。康熙 60 年、程順則の懇願を受けて『中山詩文集』のために序文を記して、陳元輔の遺作といえる『晩香園梅詩』のために跋文を作った。竺天植、林潭、陳元輔が亡くなった後の十数年間、柔遠駅では王登瀛が続けて琉球人の師匠を務めていた。師匠の親友の中で王登瀛だけ生き残っており、程順則は王登瀛に対して特別な情誼を抱いていると考えられる

下の詩は程順則が王登瀛に送った詩である。『中山詩文集』の「雪堂雑組」に収録されている。

寄懐王閩洲	**懐を王閩洲に寄す**
送君作客去東甌	君客と作りて東甌に去くを送る
我亦旋登泛海舟	我亦た旋登して海舟に泛ぶ
燭漢天書光赤日	漢を燭らす天書　赤日より光り
摩空高鳥掠丹丘	空に摩する高鳥　丹丘を掠(かす)める

八年兩度離亭淚　　八年　兩度　離亭の涙
萬里三秋過雁愁　　萬里　三秋　過る雁の愁
獻雉帆開頻寄語　　雉を獻じ帆を開いて頻りに語を寄す
為傳消息到王猷　　為に消息を傳えて王猷に到らしめん
【七言律詩】
【平水尤韻】
【通釈】
題目：王閩洲を憶う
　あなたが温州に行くのを見送る。私もまたまもなく海を渡る船に乗って帰国する。天子の聖旨は輝いて空の太陽より明るく照っている。空に接近するほど高く飛んでいる鳥は神仙の住まいを掠める。八年間、別れの涙が二回出た。万里の距離は九月の雁にとっても困る。進貢船が帆を揚げて出航する前、王君に消息を伝えるためにしきりに船員にお願いして伝達させようとする。
「送君作客去東甌、我亦旋登泛海舟」
　「東瓯」は浙江省温州である。康熙 37 年に程順則が帰国する前、王登瀛は暫く温州に行ったようである。また、王孔錫という人物は『中山詩文集』、『柳軒詩草』、『枕山楼詩集』にあらわれる。王孔錫も温州に行ったことがあるようで、程順則は「送王孔錫之東甌」という詩を作っている。この王孔錫とは陳元輔、王登瀛と同時代で、琉球人と関係が深かった福州の人物であるかもしれない。
「燭漢天書光赤日、摩空高鳥掠丹丘」
　「燭漢」は光が強く輝いて天を明るく照らしだすという意味である。「光赤日」は太陽より明るいという意味である。「摩空」は天に接近するという意味である。「丹丘」は神仙の住まいである。
「八年兩度離亭淚、萬里三秋過雁愁」
　「八年両度離亭涙」は八年間の内、王登瀛と程順則が二回会ってまた別れることを言っている。程順則が存留期間（康熙 28－康熙 30）を終えて帰国する時期と、都通事期間（康熙 35－37）を終えて帰国する時期と、その間はちょうど八年間である。つまり、この八年間とは康熙 30－康熙 37 年の期間を指す。
「獻雉帆開頻寄語、為傳消息到王猷」
　「獻雉」は雉を献上すること、転じて進貢のことを指す。「獻雉帆」は中国に進貢する船である。「獻雉帆開頻寄語」は、進貢船が出航する前に程順則が王登瀛に伝えるメッセージを船員に言いつけることである。これは中国と琉球の文人は、たとえ広い海に隔てられても、進貢船を通して連絡を維持することができるという事実を反映している。「王猷」は王羲之の息子の王徽之である。王徽之は父と同じく偉い書道家である。王徽之に関して有名な「山陰半夜舟」の典故がある。王義之の第五子王徽之は、紹興に住んでいる時、ある雪の夜に友人である戴安道を思い出し、夜中にもかかわらず船に乗って何日間かかけてやっと戴安道の処に着いた。しかし、彼の家に入ることなく帰っていった。他の人が彼になぜ会わないのかと聞いたら、「私は興に乗ったので尋ねていったのだ。興が尽きたら帰る。戴安道と会わなくてもいいのだ。」と答えた。「山陰夜半舟」とはそうした、気ままにふるまう行為をいう。

第三項　小結

『柳軒詩草』に登場している琉球人は 17 名いる。その中で、現在のところ身分不明なのは 2 名[1]である。先行研究において身分不明となっていた蔡天水、蔡祚菴、梁得剡については、本稿で彼らの身分を解き明かした。また、先行研究において「王孔錫」という人物は琉球人だと考えられているが、

[1] 楊仲立と麻舜玉。本論考 166 頁の『柳軒詩草』一覧表を参照されたい。

筆者にはこの人物が琉球人であるか福州人であるか判断しにくい。したがって本稿では『柳軒詩草』に登場する琉球人は 16 名であると考えている。『柳軒詩草』に収録されている詩は、康熙二十年代と康熙 33 年、康熙 34 年につくられた詩である。『柳軒詩草』と『柔遠駅草』は、早ければ康熙 34 年の年末にすでに成立したと推測できる。しかし、いつ誰が福州で出版し、その後、日本に持っていったのかについては不明である。王登瀛と蔡応瑞及び彼の子孫たちの 36 年間続いている友情は、同時期では、おそらく程順則と陳元輔の交遊関係だけが並び立つものである。本稿で分析した詩の多くは、王登瀛が帰ろうとする琉球の友人に手紙を送ると言う内容がみられる。程順則が日本の詩人相良玉山の『梅花百詠』を琉球から託送したこと、蔡文溥が『五雲堂詩集』を琉球から託送したことなどを通して、中国の民間知識人と琉球の民間知識人及び日本民間の知識人は、朝貢ルートに頼って海に隔てられても交遊が続いていることが分かる。陳元輔を中心とする康熙年間に柔遠駅で活躍していた師匠のグループは康熙 50 年前後には王登瀛だけが残っており、後の十数年間、王登瀛は柔遠駅で師匠として働き続けている。康熙帝の 61 年間、柔遠駅で陳元輔、竺天植、王登瀛、林潭、陳元声などの福州人は中国の文学、儒学を琉球に伝播するのに巨大な貢献をした。

付録

王登瀛略歴表				
年号	干支	西暦	年齢	経歴
順治 17 年	庚子	1660	0	王登瀛誕生（？）
康熙 10 年	辛亥	1671	12	陳元輔、林潭と知り合う。
康熙 27 年	戊辰	1688	28	金溥、蔡応瑞と知り合う。
王登瀛は正式的に琉球人の師匠となる前、中国に広く遊歴していた（「余曩者浪迹天涯、泛三巴之江、入五羊之城、登黄鶴楼、渡白馬津、南馳北竄僕僕於風塵者幾二十年。」）				
康熙 32 年	癸酉	1693	33	江西省南昌府郷試に受験したが不合格であった。秋、福州に戻って柔遠駅で勤学師匠として働き始めた。同年、柔遠駅にいる琉球勤学は程順性、陳其湘、毛士礼、紅永琪、周新命などである
康熙 33 年	甲戌	1694	34	柔遠駅で泊まって金浩然、周新命、程順性、鄭克文などの勤学と交流。 楼東十景の十首、楼西十景の十首を作って『柔遠駅草』となった。 十月初一日、林潭は『柔遠駅草』序を寄せる 3 月の送別会で「送鄭克叙帰中山」「送陳魯水」を作って贈っている。 程素文、毛子狲、鄭克文、陳楚水、紅爾吉などと柔遠駅で鬮韻作詩会を行った。
康熙 34 年	乙亥	1695	35	2 月林潭、竺天植、陳元輔と仁山堂で集会して詩のやり取りをしている。 初夏、蔡応瑞、梁成楫、程順性、鄭克文が北京に行くために贈別詩を贈った。 6 月ごろ周新命、金浩然、麻舜玉が帰国のために贈別詩を贈った。 蔡応瑞の三男蔡文湘が勤学で福州に来て王登瀛に師事する。この前、蔡応瑞の次男、蔡文漢も王登瀛に師事し

				ている。 蔡応瑞が北京に行く前、王登瀛は「送蔡祚菴入貢」を作って贈った。
康熙 35 年	丙子	1696	36	蔡応瑞に「菊図」を贈った
康熙 37 年	戊寅	1698	38	夏、温州に行く
康熙 39 年	庚辰	1700	57	秋に恥光上人（釈照乗）、陳元輔、王登瀛らは柔遠駅の蔡文溥の室で集会をして月見をしながら詩の唱和をする。蔡文溥は「喜恥光上人同陳昌其王邦菴兩先生過柔遠驛待月用恥上人原韻」を作って恥光上人などと集会のことを記した。
康熙 45 年	丙戌	1706	46	蔡応瑞の四男蔡文河は勤学で福州に来て王登瀛に師事している。
康熙 52 年	癸巳	1713	53	程順則は日本人相良玉山の『梅花百詠』を王登瀛のところに届けている。
康熙 53 年	甲午	1714	54	王登瀛は『梅花百詠』に序文を寄せた。
康熙 56 年	丁酉	1717		正月、蔡応瑞の孫、蔡其棟は勤学として福州に来た。康熙 58 年 5 月 22 日に帰国する。勤学の二年半において王登瀛に師事しているようだ。
康熙 60 年	辛丑	1721	61	王登瀛は『中山詩文集』のために序文を寄せた。 王登瀛は『晩香園梅詩』のために跋文を寄せた。
雍正 2 年	甲辰	1724	64	冬、蔡其棟は父親から郵送してきた祖父の『五雲堂詩集』を携えて王登瀛に序文を求めた。
雍正 3 年	乙巳	1725	65	春、蔡応瑞の『五雲堂詩集』のために序文を作成した。この序文は『四本堂詩文集』に収録されている。

第三章 勤学師匠と琉球文人の学習・交流活動について

第一節　柔遠駅における学習に関して

勤学の福州における留学期間中の学習状況に関する先行研究の蓄積は少ない。徐斌は「從琉球官話看琉球人在閩的學習生活」で、琉球官話を通して勤学の福州における学習形態を以下の二つに分類している[1]。

一、師匠を柔遠駅へ招聘して教学する。
二、自ら師匠宅に赴き学習する。

以上の二つは、古代中国の私塾教育において普遍的な形態である。塾師が学生の家或いは他の指定された場所で教学を行うのを「坐館」という。学生が塾師の家或いは塾師に指定された場所で学習するのを「散館」という。私塾について、最も早い記録が中国の戦国時代に成立した『礼記』に見られる。

古之教者、家有塾、黨有庠、術有序、國有學。＜鄭注＞古之仕焉而已者歸教于閭里、朝夕坐于門、門側之堂謂之塾[2]（古の教えには、家に塾あり、党（500 家庭）に庠あり、術（12500 家庭）に序あり、国に学あり。＜鄭注＞古代の官員は退職した後、帰郷し教える。朝夕、閭門に座す。門の隣にある堂はいわゆる塾である。）

中国の戦国時代には、私塾がすでに形成され、官吏が退職した後、故郷に帰って塾を開いて近隣の人を教えていたことがわかる。明清時代に至ると、民間において「家塾」「族塾」「村塾」「義塾」「散館」などの異なる形式の私塾が形成されるようになる[3]。中国古代の知識人は出世できなかった場合、塾師や官員に従って幕僚を務めることがあった。科挙を経て官途に歩み入る人は限られており、塾師に職を見出す読書人の数は膨大であった。塾師の分類について、清代の理学家張履祥[4]は以下のように定義している。

世之讀書書而貧者、為教人子弟、資其直以給衣食。約有兩種。一曰：經學則治科舉之業也。一曰：蒙訓、教蒙童記誦者也。（世の中、読書し貧乏生活を送り、衣食に資する為に人の子弟を教えている者に概ね二種ある。一つは挙業師といい、即ち科挙のために教学する者。一つは蒙師といい学童に啓蒙教育を行う者である）。[5]

張履詳は、塾師について四書五経を教えて科挙対策を行う「挙業師」と学童を啓蒙する「蒙師」との二種に分類し、塾師を務めている読書人が貧乏な階層であったことを指摘している。琉球から福州に派遣された勤学については、中国語を学ぶためであれば、レベルがそれほど高くない蒙師でも教えられる。しかし、儒学、詩文の作成などを学ぶのであれば「挙業師」レベルの師匠に師事しなければ

---

[1] 辛德蘭主編『第十届中琉歴史関係学術会議論文集』、中琉文化経済学会、2007 年 5 月、36 頁、37 頁、38 頁。
[2]漢・鄭玄（注）、唐・孔穎達（正義）『礼記正義』巻 46・「学記第十八」、上海古籍出版社、2008 年 9 月、1426 頁。
[3] 申国昌「明清塾師の日常生活與教学活動」『教育研究』、中央教育研究所、2012 年第 6 号、123 頁。
[4] 字は考夫、浙江省桐郷の人、清代理学家 1611－1674。
[5] 清・張履祥『楊園先生全集』巻 18「処館説」、中華書局、2002 年 7 月、545 頁。

ならない。勤学の師匠であった陳元輔、竺天植、王登瀛等については、塾師群体において挙業師のグループに属すと考えられる。

清代、県には州学、県学があり、府には府学があり、中央政府には国子監が設置されていた。官立の県学及び府学、国子監は主に科挙人材を培い、官僚体系のために人材を蓄えるのを目標としていた。しかし、民間の私塾でも官立の学校同様に科挙のために人材を培っていた。しかし、塾師の中には一般の中国人を対象としない特別な群体が存在していた。それは琉球からの勤学人を教える塾師である。康熙年間、柔遠駅で活躍した竺天植、林潭、陳元輔、王登瀛などがの福州の文人らが、そうした塾師たちである。林潭は専ら勤学の塾師になってないが、康熙 15 年 16 年（1674、1675）の二年間、福州の書院で師匠を勤めていたようである。竺天植、陳元輔、王登瀛は、専ら琉球勤学の師匠を勤めている。康熙年間、竺天植ら以外にも、勤学に関わった福州の人物がいる。蔡肇功は康熙 17、18 年（1678, 1679）に福州で歴法を学んだ際、任伊と呼ばれる「福州先生」から漢詩を学んでいる。

『家譜資料』によると、勤学は、文学、儒学、書道、暦法、風水、法律、音楽、医学、生産技術など様々な分野の学習を福州で行っていたことが分かる。資料上の制約ですべての分野の学習状況の実態は把握しえないが、文学の学習の実態については比較的資料が揃っており、その実態を把握しうる。陳元輔の『枕山楼文集』、『枕山楼詩集』、王登瀛の『柳軒詩草』、程順則が編纂した『中山詩文集』の中に、程順則、梁得声、梁得済、陳魯水、金浩然、程順性、鄭克文、紅爾吉、毛子狲などと関わる作品があり、勤学の学習状況を知りうる手がかりとなる。

本節で、利用した資料は以下の通りである

1　「雪堂贈言」（『中山詩文集』の『雪堂贈言』の陳元輔の作品）
2　「曾子浴歸自長溪與予同過瓊河古驛訪梁得聲夜話并索其新詩讀之」（陳元輔の『枕山楼詩集』）
3　「上巳仝梁本寧、得聲、得濟、陳魯水、金浩然、游烏石山、觀朱夫子石室清隱石刻」（同上）
4　「喜同王孔錫盧若采夜集程寵文雪堂話月分得七陽」（同上）
5　『詩牌譜』（明・王良枢）
6　「雪堂韻林雑組詩序」（陳元輔の『枕山楼文集』）

陳元輔、王登瀛などの勤学師匠は学生を率いて勉強する際或いは集会の時に詩牌という道具を使っていることが反映されている漢詩が多くみられる[1]。

本稿では、康熙年間、陳元輔、王登瀛の事例を通して、柔遠駅における勤学の学習の実態を解明する。さらに、彼らが学習或いは交流の際に使用した詩牌についても検討する。特に、詩牌が程順則などの勤学の漢詩創作の中で、どういった役割を果たしていたのか、本節で具体的に明らかにしたい。

第一項　勤学の学習の像

1　蔵書楼における書籍の閲覧

『中山詩文集』に陳元輔の「雪堂贈言」という詩が収録されている。全詩は 42 句であるが、その中に師弟の学習する情景を描く句がある。それは「瓊河兩度開青氈、鄴架曹倉吾與爾」の句である。この句は、「（程順則）君は二度に私に師事し、書庫の中で私と君（程順則）は書を閲覧した」という意である。ここで句中の「鄴架」「曹倉」に注目したい。「鄴架」の出典は韓愈の詩「鄴侯家多書、插架三萬軸[2]」である。当時の鄴侯李泌の家に蔵書が多く、本棚に三万巻あったと言われている。「曹倉」の出典は王嘉の『拾遺記』の「曹曾書垂萬余卷，及亂世家家焚爐，曾慮其先文煙沒，乃積石以為倉以

[1]「冬夜王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話得溪字」、「夏杪同諸子雪堂夜飲得秋字」、「喜同王孔錫盧若采夜集程寵文雪堂話月得七陽」、「元夕宴集程寵文立雪堂分得歡字」（『枕山楼詩集』所収）、「同程素文毛子狲鄭克文陳楚水紅爾吉驛樓分賦」（『柳軒詩草』所収）

[2]「送諸葛覚往隋州讀書」（『韓昌黎集』第二冊、上海商務印書館、1937 年、85 頁）

藏書[1]」である。「鄴架」「曹倉」とは、相当、規模が大きい書庫を意味している。程順則、陳元輔が「鄴架」「曹倉」といった膨大な規模の書庫で書物を閲覧することがあったかどうか検討してみる。『中山詩文集』に、以下のことが記されている。

> 憶余與徐雪樵、林果公、盧蕡仲三先生、擲杯拍案耳熟言志時（中略）三先生聞而樂之[2]。（憶うに私が徐雪樵、林果公、盧蕡仲の三名の先生と杯を投げ捨て、卓を打ちながら志を語る時（中略）三先生は聞いて喜んでいた。）

文中から、陳元輔が若い時、徐雪樵、林果公、盧蕡仲に自分の志を語っていたことが分かる。「擲杯」、「拍案」、「耳熱」は、陳元輔がその三名と親しい関係にあることを意味している。「徐雪樵」「林果公[3]」「盧蕡仲[4]」の三人の中、特に徐雪樵に関しては興味深い以下の資料がある。

> 乾隆『福州府志』巻六十
> 徐㷉、字惟起、博学工文、與兄熥齊名（中略）性嗜古、聚書至萬卷。所居鰲峰麓、客從竹間入環睹蕭然、而牙籤四維、卿侯不能敵也。（中略）子延壽、字存永、詞賦激昂、有『尺木堂稿』。孫鐘震、字器之、有『雪樵集』[5]。（徐㷉、字は惟起、博学にして文に工み。其の兄熥と共に有名である。＜中略＞古籍を嗜み、家で数萬巻の書籍を集めている。鰲峰の山麓に住んで、訪客は竹林を通って家に入る。家の四囲に書籍以外何も見えず、その蔵書の量は士大夫王侯でさえも敵わない。＜中略＞息子の延寿、字は存永、詞賦は激高で『尺木堂稿』が有る。孫の鐘震、字は器之、『雪樵集』が有る）
> 『明史』巻二百八十六
> 閩中詩文自林鴻、高棅後、閲余百年、善夫繼之。迨至萬曆中年、曹學佺、徐㷉輩繼起、謝肇淛鄧原岳和之、風雅復振焉。（中略）㷉、字興公、閩縣人。兄熥、萬曆間舉人。㷉以布衣終。博聞多識、善草隸書。積書鰲峰書舍至數萬卷[6]。（閩中の詩文について林鴻，高棅後の約百年、善夫が後を継ぎ、萬歴の半ばごろ、曹學佺、徐㷉などがそれに続いた。謝肇淛、鄧原岳は彼らに交わり、風雅な文風を復興している。徐㷉、字は興公閩県の人。兄熥は萬歴の挙人。徐㷉は布衣として卒す。博学多識で草、隸書を能くする。鰲峰書舎に数萬巻の書籍を所蔵している。）

徐雪樵については、順治、康熙年間、徐鐘震の『雪樵集』の存在が知られている。徐鐘震は徐学樵であることがわかる。彼の祖父、徐㷉明万暦年間の人物で、明代における福建の代表的な文学家である。史書に彼の家に満目の蔵書以外何もなく、王侯も比べられないといったことが特筆されている。

---

[1] 「曹曾は萬巻の書籍を所蔵している。乱世に逢って多くの家が戦火に巻き込まれて曹曾は古代の典籍が消えてしまうと心配している。それで石で倉庫を建って書籍を保存した。」（王嘉著、孟慶祥、商微姝訳注『拾遺記』巻 8、黑龍江出版社、1989 年 191 頁）
[2] 上里賢一『校訂本　中山詩文集』、九州大学出版社、1998 年 4 月、143 頁。
[3] 「林榛、字果公。順治間諸生、著詩略」。（陳衍纂『閩候県志』、『中国地方志集成・福建府県志輯』第 2 号所収、上海書店出版社、2000 年）
[4] 「盧灼、字蕡仲。順治間、候官庠生。為人剛正、鄧撰學案下獄、事平、絶意仕進。結盧武夷、有『曜石堂草』」（郭柏蒼『竹間十日話』、福州地方志編纂委員會整理、（福州）海風出版社、 2001 年、26 頁）「鄧撰學案」に関して序章に詳しい、参照されたい。
[5] 清・徐景熹『乾隆福州府志』（『中国地方志集成・福建府縣志集』2 号所收、上海書店出版社、2000 年 10 月、201 頁）
[6] 清・張廷玉、万斯同等『明史』巻 286「文苑二」、中華書局、1985 年、7357 頁。

徐雪樵の父である徐延寿は詩名が残っている。『中国蔵書家辞典』によると、徐延寿はその父の遺志を継いで家の蔵書をさらに充実させている。徐雪樵の家にはかなりの蔵書があったことがわかる。陳元輔の交友のあった朋友の中には徐氏以以外にも、福州の蔵書家、曹学佺、何善述、陳夢雷、林佶らがいた。一般に蔵書家は所蔵品を自由に閲覧させることはない。しかし、『中国蔵書家辞典』の徐煒の条に彼が蔵書を貸し出しすることをしないが書楼で閲覧することができ、かつお茶も備えていると述べている。つまり、徐雪樵の家は外人に蔵書を閲覧させることを断らない状況だったのである。

陳元輔は豊富な蔵書を所有する徐雪樵先生と知りあっている。知識人にとってこの資源を利用しなければほんとに浪費である。また、陳元輔が師匠の責任を果たして、誠心誠意に程順則を教授しているので自分の人脈や社会的地位を利用して程順則にも閲覧できるようにするのが不可能わけはない。蔵書楼で大量の書籍を閲覧できることは、程順則にとって斬新な広い知識の天地を与えたことであろう。程順則は教育者として責任感が強い師匠の下で、膨大な書籍に触れることのできる環境に身を置くことができた数少くない勤学の一人であったことは間違いない。後に、程順則は琉球王国時代の第一級の儒学者として名を馳せることになるが、それは若い頃のそうした経験が大きく影響したのであろう。

2 地元の名士を連れ柔遠駅に赴く

【52】

曾子浴歸自長溪與予同過瓊河古驛訪梁得聲夜話并索其新詩讀之

曾子浴長溪より歸り予と同に瓊河古驛を過ぎり、梁得聲を訪ねて夜に話し並び其の新詩を索めて之を讀む

同過瓊河訪所知	同に瓊河を過ぎりて知る所を訪ぬ
江天明月照峨眉	江天明月峨眉を照らす
故人千里歸閩嶠	故人千里より閩嶠に歸り
獨客三年讀楚辭（得聲留閩三載未歸）獨り客となり	三年楚辭を讀む（得聲閩に留まること三載未だ歸らず）
草閣久懸徐穉榻	草閣に久くかかる徐穉の榻
花溪新賦杜陵詩	花溪に新たに付す杜陵詩
由來萍水相逢好	由来平水相い逢うを好み
且盡燈前酒一巵	且つ尽くす燈前一巵の酒

【七言律詩】

【平声支韻】

【通釈】

曾子浴は長溪（福寧府に属す）より帰って来て私と一緒に柔遠駅に行き、ついでに梁得聲を訪ねて夜に話し合って彼が新しく作った詩を求めて読んだ。

私と曽子浴はともに瓊河の柔遠駅に立ち寄り旧友を訪ねた。今夜の月は空に高くかかっており、閩江も峨眉山も照らしている。友人（曽子浴）は遠い所より閩に帰って来た。梁得声は異郷（福建）で三年間楚辞を学んでいる（学問を修めている）。梁得声の部屋に客を招待するのに用意する長椅子が久しく掛けてある。（陳元輔と梁得声が長らく会わなかったことを指す）。私が柔遠駅に来ない間に梁得声は新しい詩を作った。従来、偶然の機会をきっかけに友になるのは素晴らしいことである。灯前

でみんなともに一杯の酒を飲もう。

【背景】

まず、この詩の題目を見ると、陳元輔の友人である曽子浴が長溪の軍営から戻った後、陳元輔は曽子浴を誘い、柔遠駅を訪れたことが分かる。そこで陳元輔、曽子浴、梁得声は、久しぶりに出会っている。陳元輔と曽子浴は、梁得声の新詩を求めて読んだ。『枕山楼詩集』には曽子浴に関わる詩が四首[1]ある。『晩香園梅詩』にも曽子浴に関わる記述がみられる。曽子浴とは陳元輔の若いころから、すでに親交があったことがわかる。康熙 11 年（1672）陳元輔が郷試に失敗し意気消沈していた時期に、曽子浴はわざわざ訪ねてきて陳元輔と腹を割って話しあい、互いに抱き合って慟哭したことがあったという[2]。陳元輔と曽子浴との友情の深さを知ることができる。『竹間十日話』には、以下の記述がある

> 曾沂字子浴、士甲弟、候官布衣、少豁达、無心仕進、攜琴劍浮章江、泛彭蠡、洞庭、遨遊呉楚、著有潛園集[3]。（曾沂、字は子浴、士甲の弟で候官県の布衣である。闊達で若いころ、官途につかず、琴、剣を持って章江、澎湖、洞庭に船を浮かべ、呉楚で漫遊した。著作に『潛園集』が有る。）

> 康熙間、蔣衡、張鉉、曾孫瀾、陳潤、陳登禧、黃元竣、蕭楚、鐘元聲、曾沂、林侗、林鼎複、鄭秉宦十二人俱能詩、時稱十二生。[4]（康熙年間、蔣衡、張鉉、曾孫瀾、陳潤、陳登禧、黃元竣、蕭楚、鐘元聲、曾沂、林侗、林鼎複、鄭秉宦の 12 人はみんな詩をよくし、当時「十二生」と称されていた）

曽子浴は若い頃から、官途につかず、悠々自適な生活を送っていたことがわかる。『閩詩伝初伝』の作者曽士甲は曽子浴の兄である。曽子浴は康熙年間の福州の文壇で、すでに名を揚げている。『枕山楼詩集』の中の曽子浴に関わる漢詩はほんと陳元輔が曽子浴を憶う詩である。曽子浴は長い間、福州に定住することがなく長溪で軍営或いは軍事長官の下で働いていた。普段あまり会えない地元の名士の曽子浴が長溪より暫く戻ってきたことから、陳元輔は曽子浴を誘い、福州琉球館を訪れている。陳元輔は当時、梁得声[5]を教えていた。梁得声は 1685 年―1690 年福州滞在中、陳元輔に師事している。梁得声の弟梁得済は 1682－1688 年、同じく勤学として福州で留学し、兄弟二人とも 1685 年―1688 年の間、陳元輔に師事している。曽子浴が柔遠駅に訪れた際、梁得声だけが曽子浴と陳元輔に会っている。梁得済すでに帰国していたのかもしれない。勤学の師匠への要請について『学官話』では、以下のような会話が交わされている。

① 「那鄭老爺、周秀才差我來説、是擇了七月初一好日子、請先生出去設館、教他們讀書。不知先生得閒么？（鄭老爺、周秀才は私を遣わして、7 月 1 日の吉日を選び、先生のお教を請い

---

[1]「曾子浴歸自長溪與予同過瓊河古驛訪梁得聲夜話并索其新詩讀之」、「懷曾子浴參軍長溪」、「瓊川南樓夜坐有懷林二恥歸隱峽江曾子浴參軍長溪」「留別潛園主人」（陳元輔の『枕山楼詩集』に収録）

[2] 予憶試後無聊忽曾子子浴自潛園來、留之斎頭命童子焚香煮茗。予與促膝談心。或仰天浩嘆、或搔首長吁、甚至兩人互相泣下。（林潭著、陳元輔注『晩香園梅詩』の其五）

[3] 郭柏蒼『竹間十日話』、福州地方志編纂委員會整理、（福州）海風出版社 、2001 年、12 頁。

[4] 同上書、10 頁。

[5] 「呉江梁氏家譜（一世　梁嵩）」梁得聲、國吉親云上童名真德字得聲行一。康熙二年癸卯三月四日生、康熙四十一年壬午六月十五日卒、享年四十。康熙二十四年乙丑十一月八日、因接封之便請乞王命為讀書習禮事、隨存留通事叔父邦基内間親雲上到閩、至於康熙二十九年庚午六月十日回國滞留六年。（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、768 頁）

たいとのことですが、先生のご都合はいかがですか？）

我沒什麼事、煩勞你回去、對鄭老爺、周秀才説、我七月初一日早早就來。（私は特に用事がない。鄭老爺、周秀才に私は7月1日朝早く行くと伝えてください）」[1]

また、王登瀛『柔遠駅草』の序文には以下の記述がある。

有柔遠驛樓建焉益為琉球上貢頓貯方物停行使也。歲甲戌余別業其樓、風晨月夕得與金浩然、周熙臣、程素文、鄭克文諸子憑眺江山[2]。（柔遠駅は琉球の貢物の保管、使節の宿泊のために建てられた。私は甲戌年＜康熙33年＞柔遠駅に泊まって、長く金浩然、周熙臣、程素文、鄭克文などの諸君子と江山を眺めることができた）

勤学の師匠は学生の要請を受けて定期的に柔遠駅に赴き学生を指導していたことがわかる。また王登瀛によると、柔遠駅に泊まって勤学を指導していたようである。勤学の師匠は定期的に柔遠駅に赴き学生を教えるタイプと柔遠駅に長期的に泊まって学生を教えるタイプの二つのパターンがあった。陳元輔の場合は、定期的に柔遠駅に行って勤学を指導することが多い。陳元輔が梁得声の新詩を求めて読むことはまさに梁得声を指導することを意味する。

【詩の分析】

「同過瓊河訪所知、江天明月照峨眉」

「瓊河」とは柔遠駅の近くを流れている川である。瓊川ともいう。陳元輔と曽子浴は一緒に柔遠駅に向かい、梁得声を訪ねて行った。

「江天明月照峨眉」とは、明るい月は空に高くかかって閩江を照らし、峨眉山をも照らしているということである。この句は非常に広い空間を描いている。月は閩江或いは瓊川を照らしている。同時に、峨眉山をも照らしている。このことは恐らく陳元輔の想像であろう。これは陳元輔たちが柔遠駅に行く途中、見た風景だと思われる。つまり、陳元輔たちが柔遠駅に行く時、月光に照らされた夜の景色は清朗であった。

「故人千里歸閩嶠、獨客三年讀楚辭」

「故人」は曽子浴のことである。長溪は福建の建寧府に属する。建寧府から福州までの距離は約260キロである。千里というほどの距離はないが、古人にとって、決して近くはない距離である。陳元輔は友人と長い間別れていて、地理的にも長く離れていたことを意味している。

「獨客三年」とは梁得声がすでに福州で三年間を過ごしたことをいう。「讀楚辭」とは梁得声が楚辞を学んだということである。つまり、この詩は大体、康熙27年頃に作られたものである。

「草閣久懸徐穉榻、花溪新賦杜陵詩」

「徐穉榻」とは、後漢の陳蕃が特に一榻を懸け置いて周璆・徐穉を優待した故事である[3]。この「徐穉榻」は、陳元輔や友人などの為に用意している長椅子である。「徐穉榻」を久しく掛けているというのは、陳元輔が長い間梁得声を訪ねて来なかったことをいう。

「花溪」とは、杜甫が昔、成都の浣花溪（かんかけい）の傍に茅屋を結んだことを指す。ここで梁得声の住居を杜甫の草堂に準えている。梁得声の草堂と杜甫の草堂はどちらも水辺に建てられている。「杜陵詩」は杜甫の詩のような素晴らしい詩であるということで、関接的に梁得声を褒めている。つまりこの句は陳元輔がいない間に、梁得声がすばらしい新詩を作ったことを表す。

「由來萍水相逢好、且盡燈前酒一巵」

---

[1] 『学官話』（瀬戸口律子、『学官話全訳』所収、榕樹書林、2003年、18頁）

[2] 清・王登瀛『柔遠駅草』康熙33年（1693）序刊本、内閣文庫蔵、漢書類10895號。

[3] 本論稿の第二章、第二節、第一項に詳しく説明したので贅言しない。

「萍水」とは川水に流される浮草である。転じて旅の途中で偶然に人と逢うことの喩え。ここから、曽子浴は初めて柔遠駅に行き、梁得声と知り合いとなったことが分かる。「由來萍水相逢好」は曽子浴と梁得声が知り合いになったことを喜ぶべきであると言っている。「且盡燈前酒一巵」は詩の結句として詩の結びがてきぱきしている。

3 野外学習

上巳仝梁本寧、得聲、得濟、陳魯水、金浩然、游烏石山、觀朱夫子石室清隱石刻
（上巳に梁本寧、得聲、得濟、陳魯水、金浩然と仝に、烏石山に遊び、朱夫子の石室清隱の石刻を観る）

吾道如今喜在南　　吾が道　如今　南に在るを喜ぶ
横經子弟説新安　　経を横たう子弟　新安を説く
勝游囊滿蘭亭草　　勝游　囊に満つ　蘭亭の草
清隱風高石室寒　　清隱　風高く　石室寒し
苜蓿千秋香海國　　苜蓿千秋　海国に香り
杏花三月落山壇　　杏花三月　山壇に落つ
最憐有宋多逋客　　最も憐れむ宋に多く逋客有るを
墨跡猶留石上看　　墨跡猶お石上に留まりて看るがごとし

【七言律詩】
【平声寒韻】
【通釈】題目：上巳の日に梁本寧[1]、梁得声[2]、梁得済[3]、陳魯水[4]、金浩然[5]と共に烏寂石山[6]で遊び、朱夫子[7]の石室清隱石刻を見学する。

朱子の教えが、今現在、南の福州の地にあるのは喜ばしい。経書を横に持っている弟子も朱熹について語り合っている。景色の勝れた良い場所に遊び、多くの詩を作って袋は詩稿で満たされた（蘭亭の遊びに倣って多くの詩を詠んだ）。澄んだ秋の空に風が高く吹き、石室の中は秋気でひんやりとしている。苜蓿の香りは千年も続いており、三月の杏花は山壇に散らばっている。宋の時代、世を逃れ避けて勉学をしている人はとても多くてすばらしいことだ。これらの人の碑刻は後の世にも残っていて後世の人々は見ることができる。

【背景】
詩の題目に見える「上巳」とは、旧暦の三月三日である。上巳は中国伝統的な祭りである。三月三

[1]前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第一巻 6、780 頁。
[2]前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第一巻 6、813 頁。
[3]得濟：「名嘉地親雲上。童名虎千代。字得濟。康熙四年乙巳六月十一日生。康熙四十年辛巳十一月二十三日卒。享年三十七、葬于兼久墓傳家於琴也。康熙二十一年壬戌十一月初六日、因接封之便請乞王命、為讀書習禮事、隨正議大夫鄭永安東恩納親雲上赴閩、滞留七年。乃康熙二十七年戊辰五月二十八歸國。」（「呉江梁氏家譜」『那覇市史・家譜資料二』813 頁）。
[4]前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第一巻 6、460 頁。
[5]前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第一巻 6、77 頁。
[6] 烏石山：「隷候官県：在城西南隅。天寶八載、勅名閩山。宋熙寧中郡守程師孟改名道山。」と記されている。（『福州府志』巻 5「山川一」、上海書店出版社 、2000 年 10 月、79 頁）。
[7] 朱夫子：宋の人。字は元晦・仲晦・號晦菴・紫陽・云谷老人・晦翁・滄州病叟等。謚は文。紹興の進士。高・孝・光・寧の四朝に歴事し、轉運副使・煥章閣侍制・秘閣撰修となり、寶文閣侍制に終り、慶元中、致仕して卒す。寶慶中、太師を追贈、信國公・徽國公を追封される。淳祐中、孔廟に從祀し、清の康熙中、十哲の次に升位す。原籍は婺源。著に周易本義・易學啓蒙・儀禮經傳通解・孟子或問・大學中庸章句・論語孟子集注等がある。（元・脱脱撰『宋史』巻 429「道学・朱熹伝」、中華書局出版社、1986 年より要約した）。

日、川で身を清め、野外で酒宴を開き、郊外を遊覧する慣習がある。周代にさかのぼると、三月の上巳の日に人々は水辺に行って祭祀し、薬草の銭湯を浴びる。魏晋時代に至ると、上巳の日は徐々に皇室や公卿士大夫、文人雅士などは河に臨んで酒宴を開くようになった。それによって上巳の重要な慣習である「曲水流觴」[1]が形成された。この時代、中国文化史に著名な上巳の集会である「蘭亭の会」が行われた。

この詩の上巳は、康熙二十六年の三月三日である。梁得声、梁本寧、梁得済、陳魯水、金浩然たちが同時に福州いたのは康熙二十六年だけだからである。この年三月三日（旧暦)、陳元輔は琉球の梁本寧、梁得声、梁得済、陳魯水、金浩然を福州城内の烏石山に連れて行った。そして、烏石山を遊覧して朱子の遺跡の「石室清隠」の石刻を見学した。

このような歴史的事実において、陳元輔と琉球人が烏石山で遊んだことを、単なる春游とだけ見なして十分だろうか、いや、そう簡単ではないと思う。上述の琉球人たちは、梁本寧以外、全部勤学人である。また、詩の中の「道」、「朱子」、「蘭亭草」、「山壇」、「逋客」という言葉は歴史や儒学に関わるものである。景色を描いている句は六句目だけであるが、その六句目も孔子のことに触れている。また、一句目と二句目は子弟たちが朱子について討論する場面を描いている。もし、本当に春游に行きたかったのであれば、城外の景色の方がもっときれいではないか。また、遊びだとしたら書を持つ必要はないのではないか。筆者は 2015 年 7 月、福州市の烏石山公園を自ら見学しに行った。その経験からすると、烏石山では自然風景を見るよりむしろ石刻の方を見る。烏石山の石壁には、多くの歴代の文人士大夫の摩崖石刻がある。陳元輔は琉球人の師匠として、平日の書斎中での勉強をこの日はやめて、現地で儒学などの知識を教え、石刻そのものを見て教授しようと考えていたのではないだろうか。一方、多くの琉球人が、福州城内に入ることは、許可を得なければできないことである。野外学習を理由として、柔遠駅から出て福州城内に入る許可を申請していた可能性が高いと思われる。

【分析】

〈首聯〉

「吾道如今喜在南、横經子弟説新安」

「吾道」は、宇宙の根本原理、転じて朱子の教えである。朱子はかつて福建漳州知府に就任していた。朱子は儒学の「集大成者」と評されている人物である。彼の儒学理論、倫理観などは明清の統治階級に非常に推賞されている。それで朱子の教えは、この宇宙の根本原理として扱われている。「喜在南」は朱子がかつて福建の漳州知府に就任していたことを含めて、朱子の遺跡が福建に広がっていることを言っている。歴史上の偉人が福建の官に任じられていたことは、我々の光栄であるとし、それを喜んでいる。

「新安」とは、新安郡である。朱子の出身は、新安郡であるから彼はよく「新安朱熹」と自称していた。

一句と二句を合わせて読むと、陳元輔は琉球から来た梁本寧らに朱熹の遺跡を紹介する時、「朱子はかつて福建において官に就いていた時期があった」と言っている。隣で聞いていた梁本寧らは「そうですね、朱子は新安郡の人です」と言っている。そうした陳元輔と梁本寧らが「朱子」について語り合っている情景を詩の一句と二句で描いている。

〈頚聯〉

「勝游囊滿蘭亭草、清隠風高石室寒」

「蘭亭草」とは、中国歴史上有名な蘭亭の集会のことである。晋の永和九年（353 年)、山陰府城の西南二十五里にある蘭亭山で当時の名士、謝安、謝萬、孫綽、王凝之、王羲之など四十名が集会して詩を三十七首詠んでいる。王羲之はこの詩集の為に序を書き、それが「蘭亭集序」である。陳元輔

[1]曲水流觴：折れ曲がった小川に杯をうかべ、酒を飲み詩を作る集会。

たちは、遊覧するとともに多くの詩を作った。それを「囊滿」という言葉で表している。

「清隠」は「双関」[1]の修辞法を使っている。「清隠」は「石室清隠」の石刻を言っているのであるが、実際には「朱子」のことを指している。「風高」は確かに烏石山に吹く風が強くてすがすがしいことを詠んでいるのであるが、実は朱子の「高風亮節」[2]を言っている。陳元輔は「石室清隠」の石刻を見て朱子の教えを思い浮かべ、朱子の高尚な品格を感じていたであろう。

「苜蓿千秋香海國、杏花三月落山壇」

「苜蓿」とはウマゴヤシである。おそらく、当時、烏石山にはウマゴヤシが茂っていた。「海国」は福州のことである。「香海国」はウマゴヤシの香りが福州城に溢れていることをいう。

六句目の「杏花」はちょうど三月に咲き始める。「杏花」が「山壇」に散らばっていて、まるで、昔孔子が講学していた杏壇のようであるという。

「最憐有宋多逋客、墨跡猶留石上看」

「逋客」は俗世を逃れ避けている人のことである。宋代でよく知られているのは「梅妻鶴子」という典故である。林逋、北宋初めの隠者で、字は君復、杭州錢塘の人である。若くして父を失い苦学したが、栄誉や利益をもとめず、貧窮にも動じなかった。長江下流域を漫遊した後、故郷の杭州に戻って西湖の孤山庵を結び、二十年間、街に出ることはなかった。一生の間、仕官せず、また妻帯せず、梅を愛し、鶴を飼っていたため、「梅妻鶴子」と称された。[3]

「墨跡」は朱子の「石刻」である。この句で、陳元輔は歴史へ思いを馳せているところから現実に戻っている。聖人や隠者は歴史の塵埃になったが、彼らの品格、知識などはずっと後世に伝わっていると感嘆している。

4 交流の場を作る

喜同王孔錫盧若采夜集程寵文雪堂話月分得七陽

（王孔錫、盧若采と同に夜に程寵文の雪堂に集まり月を話すを喜ぶ　七陽を分得す）

愛客樓前江水涼　　客楼前江　水の涼を愛す
相逢不夜話清狂　　相い逢いて夜ならず　清狂を話る
風聲入夜松疑雨　　風聲夜に入り　松雨かと疑う
天氣將秋月似霜　　天氣將に秋にならんとし　月霜に似たり
好友向來推二仲　　好友向來　二仲を推め
新詩今復見三唐　　新詩今復た　三唐を見る
主人能繼河南後　　主人能く河南の後を繼ぎ
琴史蕭蕭酒滿觴　　琴史蕭蕭として　酒觴に満つ

【七言律詩】
【平声陽韻】
【通釈】

題目：喜んで王孔錫・盧若采と共に夜集まって程寵文の雪堂で月を巡って話すに、七陽韻を得た

程寵文の部屋の前に流れている川の水が涼しいことを愛する。みんなで集会して昔の放逸な賢人について話している。蝋燭は明るく燃えて室内がまるで白昼のようである（互いに逢って明るい夜に清狂について語る）。夜に風が吹き始めて松の葉はかさかさという音を出し、雨が降っているかと思わ

[1] 双関：かけことば。
[2] 高風亮節：高尚な品格と固い節操、品行がきわめて高潔である。
[3] 前掲元・脱脱等撰『宋史』第 38 冊、13432 頁。

れた。これから秋になろうとして、月色は霜のようである。いい友の手本はいつも「二仲」に言及する。今日、新しく作った詩を読んだら色々な風格が感じられる。主人（程順則）は河南の二程を継いでおり、琴の音色が響いて酒が杯を満たす。

【背景】

題目から見ると、ある夜に福州人の王孔錫、盧若采、陳元輔らは程順則の書斎に集い、月をテーマとして語り合って作詩も行なっている。詩牌を通して、陳元輔は「陽」という韻目に当たって、この詩を作った。王孔錫、盧若采については、詳しい資料がないため不明である。他に、「冬夜同王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字」を通して、陳元輔は別のある日、王孔錫、王邦菴を柔遠駅に連れて行って、梁得声と交流をもったことがわかる。陳元輔は一、二回、文人を柔遠駅に連れて行ったわけではないだろう。中国には「独学而無友即孤陋而寡聞（独学にして友無ければ、則ち孤陋にして寡聞なり）」という諺がある。学習はただ自分と師匠だけでは足りないので、他の先達と交流も必要である。陳元輔は自分の文人の朋友を柔遠駅に連れていくことで、海を渡って福州に来る琉球勤学人に知識を増やさせたり、漢詩文能力を鍛えたりするチャンスを提供していたにちがいない。竺天植、陳元輔、王登瀛などの師匠以外、他の福州知識人と接することを通して、勤学人は学んだ知識を試すことができ、視野を広げることができたからである。勤学らにとっては教養を深める重要な機会であったであろう。

【詩の分析】

「愛客樓前江水涼、相逢不夜話清狂」

「客楼」とは、程順則の住んでいる処を言っている。広く言えば、柔遠駅のことを指す。程順則は福州で客居しているから彼の住む処を「客楼」と呼ぶ。「客楼前江」とは柔遠駅前の川である。つまり、瓊河のことを言っている。

「不夜」とは、月或いは灯の光が輝いて昼のようであることをいう。「清狂」は世俗にとらわれず放逸な行ないをする者をいう。陶淵明のような人物の行ないを指す。陳元輔、王孔錫、盧若采たちはこの夜、蝋燭を点灯して歴史上の放逸者について語った。

「風聲入夜松疑雨、天氣將秋月似霜」

「風聲入夜松疑雨」は、風に吹かれる松がかさかさと音をたて、まるで雨が降っているかのように思われることをいう。

「天氣將秋」は、晩夏のことを言っている。「月似霜」は霜のような皎潔な月である

「好友向來推二仲、新詩今復見三唐」

「二仲」は、羊仲、仲裘という人物である。晋、趙岐の『三輔決録・逃名』に「蔣詡歸鄉里、荊棘塞門。舍中有三經、不出、唯羊仲、仲裘從之游。（蔣詡鄉里に帰りて荊棘（けいきょく）門を塞ぐ。舎中に三径有りて出でず。唯だ羊仲、仲裘之に従って遊ぶ。）[1]」とある。つまり、「二仲」とは仲の良い友人を指す。

「三唐」は盛唐、中唐、晩唐の詩である。『枕山楼課児詩話』から陳元輔は非常に唐詩を推称していることが分かる。陳元輔は幼い頃、唐詩を読んでなかったことを後悔していると言っている。そして、詩の初心者は唐詩を読まなければならないとし、作詩の方面でも唐詩に傾注し、学びまねることを重視している。

「主人能繼河南後、琴史蕭蕭酒滿觴」

「主人」は程順則を指す。「河南」という言葉は周新命の詩である「過黄石霞斎頭」の「瓊川積雪野梅香、仿佛河南舊講堂」という句にも出てくる。この「河南」と「河南舊講堂」はいったい何を指しているのであろうか。程順則の堂号の雪堂は「程門立雪」の典故から取ったものである。宋代の楊時は洛陽で程頤（い）を訪ねた時、程頤（い）は居眠りしているところであった。楊時と游酢は先生の邪魔をしな

[1] 李瀚注『蒙求集注』、商務印書館、1940 年 12 月、36 頁。

いで恭しく門外で立って待っていた。程頤先生が気付いた時には門外の積雪が一尺も積もっていたという。程頤と彼の兄程顥(こう)は「二程」と称されて、二人ともに「洛学」を開いた人物である。また、二人は、洛陽で長い間講学をしていた。「河南舊講堂」はおそらく「二程」が講学していた処である。周新命は積雪と野梅を見て程門立雪の典故を思い出したのであろう。この詩中の「繼河南後」は、程順則が儒学に精通して「二程」の後継ぎになるという意味である。

「琴史」は琴と史書のことである。この二つの素養は文人雅士にとってかかせないものである。「蕭蕭」は疎らで薄い様である。この詩にはもう一点注目すべきところがある。詩題の中の「分得七陽」とは王孔錫らと作詩する時、陳元輔が平水陽韻を得たという意味である。このことから、明らかにこの集会で詩牌を使用したことが分かる。これに関しては、詳しくは第二節で紹介する。

第二項　小結

陳元輔、王登瀛、程順則などに関わる事例を通して、勤学の福州柔遠駅における４つの学習の実態を検討した。①陳元輔は康熙年間の福州城ではトップの文人と言えないが、彼の広い人間関係で当時の蔵書の名家と知り合った。陳元輔は程順則を蔵書家の蔵書楼に連れていって書籍を閲覧させた可能性がある。②勤学はただ師匠と接触しただけでは知識面を広められないから、陳元輔は時々地元の名人を柔遠駅に連れて行って交流しつつ、勤学を指導していた。③陳元輔が勤学を館外に連れていき野外学習を行っていた。④常に陳元輔が勤学人のために交流の場を作っていた、ことである。もし陳元輔は琉球人が辺鄙な国から来て見識が浅いからといって琉球人をばかにして適当に勤学人を教えていたとするならば、以上のように工夫して琉球人を教えることはなかったであろう。陳元輔のような真摯な教師がいたからこそ、程順則、周新命、梁津、鄭士綸などの琉球勤学は留学生活を充実させることができたのであろう。そして彼らは、琉球に戻って各役職で能力を発揮している。

第二節　詩牌と勤学の漢詩創作

陳元輔の『枕山楼詩集』、王登瀛の『柳軒詩草』にある福州文人が琉球人と交流した際に詠まれた詩に、多く「分賦」「得某字」「得某韵」「鬮韻」などの言葉が現れている。これらの言葉は、「詩牌」と呼ばれる遊び道具を使用したことを意味している。

詩牌は機能によって二種がある。一種は漢詩が記されている木の板で飾りものとして壁に掛けるものである。この詩牌については、本稿では取り扱わない。二種目は文人たちが宴会中や文学の集会の時、使用される遊び道具である。この遊び道具である詩牌は、また遊びの規則よって二種に分けることができる。一つ目は「韻牌」と呼ばれる。二つ目は「演詩牌」と呼ばれる。福州の柔遠駅において、琉球文人と福州の文人がお互いに詩を詠唱する時、または冊封正使、副使らが琉球にいる時にこの詩牌で遊んでいたようである。本節では、この遊具の使用方法、勤学の漢詩学習におけるこの遊具の役割を詳しく検討する。

第一項．詩牌に関して

まずは韻牌に関しては『考槃餘事』に以下のような記述がある。

> 刻詩韻上下二平聲為紙牌式、毎韻一協、總三十協、山游分韻、人取一協、吟以用韻。[1]（紙牌に詩の上下の平声の韻を書いて全部で 30 集をつくる。遊覧する時に、詩韻を決めるために一人一集合を取り、その韻で詩を吟じる。）

[1] 明・屠隆『考槃餘事』「韻牌」（王雲五編『叢書集成』所収、上海商務印書館、1937 年、84 頁）

資料中の「上下二平聲」とは漢字の平声韻の 30 韻目[1]である。資料にある量詞の「一協」に注意するべきである。「協」は集まるという意味がある。つまり、この「一協」は一枚の意味ではない。「協」は同じ韻目に属す若干の詩牌を集めた集だと考えられる。したがって、「韻牌」は三十枚ではなく、牌数はもっと多いはずである。しかし、具体的にどういった漢字で「韻牌」を構成するかは、資料がないので不詳である。では、具体的にどうやって遊ぶのか。『紅楼夢』の第 37 回に「韻牌」を使って韻を決めて詩を作る場面が描かれている。この小説中の遊びの経緯は、「韻牌」を理解するのに参考になると思われる。以下、『紅楼夢』の第 37 回における遊びの経緯を要約する。

賈寶玉、林黛玉、薛宝釵、賈探春らは詩社を設立して海棠をテーマとして七言律詩を作るコンテストをする。この時に、「韻牌匣子」と呼ばれるものが出てくる。これは『考槃餘事』にある「韻牌」と似ている。彼女たちは「韻牌匣子」から盆、魂、痕、昏を抽選して韻とする。さらに一句目末に門を使い、盆、魂、痕、昏という順序に韻を使わないといけないとする。例えば、以下の林黛玉の詩を参照されたい。

半卷湘簾半掩門、
碾冰為土玉為**盆**。
偷來梨蕊三分白、
借得梅花一縷**魂**
月窟仙人縫縞袂、
秋閨怨女拭啼**痕**。
嬌羞默默同誰訴、
倦倚西風夜已**昏**。

格式として、すべての参加者は林黛玉詩のようにしなければならない。第二種の詩牌は「演詩牌」と呼ばれ、「韻牌」の遊び方よりさらに複雑である。「演詩牌」については、『清稗類鈔』と『詩牌譜』に詳しい。まず『清稗類鈔』に掲載されている詩牌に関する記述を見てみる。

> 詩牌創自盛唐張祜[2]、所謂集字者、以牌中平仄之字聯合成詩也。初以紙為之、後易竹木。[3]（詩牌は盛唐の張祜よって作られて、集字はいわゆる牌の中の平仄の字を並べ替えることを通して詩を作る。最初は紙で作り、後に竹や木に変更した）。其式用牙牌、廣六分厚一分、一面刻字、一面空白。聲之平仄以硃墨別之。中有椿牌一扇、曰詩伯。凡牌均為四分、每百扇。以一人為詩伯掣椿牌。内取一扇以字之筆畫數到某人、次第取用。以紙筆令詩伯掌之。餘由各人自取韻自製詩題。詩成、詩伯評優劣、定甲乙、頒贈彩焉。[4]（その様子は「牙牌」に似ており、幅が 6 分で厚さが 1 分、一面に字を刻んで、一面は空白にする。平声字は赤字にして仄声字は黒字にする。中に「椿牌」が一つあり、詩伯と呼ばれる。牌を四つに分け、一組ごとに 100 枚がある。一人が詩伯となり、「椿牌」を持つ。牌の中から一枚の牌をピックアップしてその牌の字の画数を用いて数える。画数に当たる人から順番通り牌を取る。紙と筆を詩伯が掌る。他の人は自ら韻、詩題を決める。詩が出来上がった後、詩伯によって詩の優劣を評定し賞品を配る）

以上の資料は、この種の詩牌の由来、詩牌の様子を紹介している。詩牌は、盛唐の張祜によって創

---

[1] 東、冬、江、支、微、魚、虞、齊、佳、灰、真、文、元、寒、刪、先、蕭、肴、豪、歌、麻、陽、庚、青、蒸、尤、侵、覃、鹽、咸。(『角川新字源』の韻目一覧表、角川書店出版社、2012 年)。
[2] 字は承吉（785－849？）唐代の詩人。
[3] 徐珂『清稗類鈔』第 45 冊「品物・鉱物」、商務印書館、1917 年、45 頁。
[4] 同上書。

作され、最初は紙で詩牌を作っていたが後に竹や木で作られるようになる。康熙年間、博學鴻詞の人の間で流行していた。その牌は、現代の長さに換算すると幅が約 2 センチで厚さが約 0.33 センチである。正方形の牌の一面に字を刻み一面は空白にして、平声の字を赤色に仄声の字を黒にする。上記の資料では、遊び方の説明が簡略化されているので、『詩牌譜』を参照して、さらに具体的にその遊びの内容を見てみる。

『詩牌譜』は、呉興の王良樞によって編輯されたものである。呉承学の研究[1]によると、現存している『詩牌譜』は 6 種[2]ある。本稿で使用しているのは、清人徐楷によって編輯された『観自得斎叢書』に収録されている『詩牌譜』である。『詩牌譜』に掲載されている詩牌は 600 枚ある。明萬歴版の『詩牌譜』と清光緒版『詩牌譜』は、どちらも実際に 591 字を収録している。また、同じ誤りが一か所ある。「稍」字（赤で表記）は仄声であるが、平声字の枠に入れられている。また、平声字の「欄」（赤で表記）字は仄声字の枠に入れられている。しかし、実際に遊ぶ時には、その二つの字を交替すれば問題は解決する。

その 591 枚の牌は以下の通りである。

（注：上の字は詩牌の字、下の字は所属する韻目である。□に囲まれた字は平声と仄声両方あるという意味。『詩牌譜』では韻の所属が明示されておらず、韻の所属は筆者が整理したものである。）

平聲字二百飾以朱

天 先	風 東	雲 文	煙 先	霞 麻	霄 蕭	霜 陽	晴 庚	陰 侵	明 庚	泉 先	山 刪	峰 冬	坡 歌	湖 虞	沙 麻	波 歌	川 霰	溪 齊	江 江
堤 齊	幾 微	汀 青	池 支	園 元	村 元	堦 佳	家 麻	洲 尤	巖 咸	涯 佳	巒 寒	濱 真	田 先	郊 肴	丘 尤	皋 豪	方 陽	塵 真	東 東
西 齊	南 覃	流 尤	春 真	秋 尤	寒 寒	涼 陽	時 支	光 陽	陽 陽	年 先	晴 庚	和 歌	淒 齊	宵 蕭	昏 元	花 麻	梅 灰	松 冬	桃 豪
梧 虞	桐 東	城 庚	蘋 真	枝 支	芳 陽	蘿 歌	枯 虞	漁 魚	情 庚	懷 佳	心 侵	神 真	頭 尤	思 支	襟 侵	愁 尤	亭 青	臺 灰	窗 江
橋 蕭	樓 尤	庭 青	斎 佳	居 魚	門 元	扉 微	扃 青	軒 元	盧 魚	闌 寒	堂 陽	鄰 真	菲 微	扶 虞	皆 佳	能 蒸	因 真	親 震	陳 真
安 寒	難 寒	觀 寒	玄 先	然 先	偏 先	何 歌	過 歌	藏 陽	長 陽	相 陽	忘 虞	空 東	沈 侵	生 庚	揚 陽	踈 魚	横 庚	開 灰	斜 麻
離 支	憂 尤	臨 侵	攜 齊	歸 微	眠 先	還 刪	題 齊	游 尤	當 陽	迎 庚	閒 刪	吟 侵	歌 歌	來 灰	尋 侵	堪 覃	悲 支	如 魚	侵 侵
黄 陽	清 庚	紅 東	聲 庚	浮 尤	輕 庚	茫 陽	殘 寒	成 庚	令 庚	深 侵	邊 先	平 庚	中 東	高 豪	低 齊	前 先	孤 虞	雙 江	飄 蕭
搖 蕭	多 歌	隨 支	痕 元	連 先	新 真	留 尤	傾 庚	凭 蒸	凝 蒸	分 文	窮 東	容 冬	重 冬	從 冬	微 微	揮 微	荷 歌	林 侵	苔 灰
蘆 虞	香 陽	蒼 陽	蓮 先	華 麻	葩 麻	蘭 寒	茅 肴	英 庚	筇 冬	茶 麻	笙 庚	人 真	君 文	仙 先	翁 東	僧 蒸	童 東	樵 蕭	賓 真

[1] 呉承学「文字遊戯與漢字詩学」（『学術研究』7 月刊所収、広東省社会科学連合会、2000 年）

[2] ①周履靖萬歴刊本『夷門广牘』中の“娯志牘”。②王良枢輯『游芸四種』中の『詩牌譜』一卷。③『説郛続』卷三十八に所収『詩牌譜』一卷。④清人徐士凱輯の光緒 14 年刊『観自得斎叢書』中の『詩牌譜』一卷。⑤1940 年商務印書館輯『景印元明善本叢書十種』中の『景印萬歴本《夷門广牘》』の『詩牌譜』。⑥『古今図書集成· 文学典』第一百八十九卷に王良枢『詩牌譜』（呉承学「文字遊戯與漢字詩学」、『学術研究』7 月刊所収、広東省社会科学連合会、2000 年　、103 頁）

續增平聲一百字

遲	餘	穿	移	回	叢	鳴	垂	收	聞	敲	翻	同	無	含	通	悠	休	求	飛
支	魚	先	支	灰	東	庚	支	尤	文	肴	元	東	虞	覃	東	尤	尤	尤	微
雞	啼	猿	鷗	魚	禽	鶯	蜂	鴻	舟	帆	簾	燈	琴	樽	棋	杯	屏	衣	妍
齊	齊	元	尤	魚	侵	庚	冬	冬	尤	咸	塩	蒸	侵	元	支	灰	青	微	先
懸	蓑	詩	鐘	壺	砧	觴	裳	弦	車	卮	書	文	巾	甌	醪	濃	輝	稀	芬
先	歌	支	冬	虞	侵	陽	陽	先	麻	支	魚	文	真	尤	豪	冬	微	微	文
頻	群	喧	繁	憐	投	驚	登	籠	層	柔	稠	舒	音	三	鮮	初	虛	萋	蕭
真	文	元	元	先	尤	庚	蒸	冬	蒸	尤	尤	魚	侵	覃	先	魚	魚	齊	蕭
嬌	遙	栖	佳	吹	寬	環	班	攀	間	干	歡	終	翩	稍	紛	狂	依	青	乘
蕭	蕭	齊	佳	支	寒	刪	刪	刪	刪	寒	寒	東	先	效	文	陽	微	青	蒸

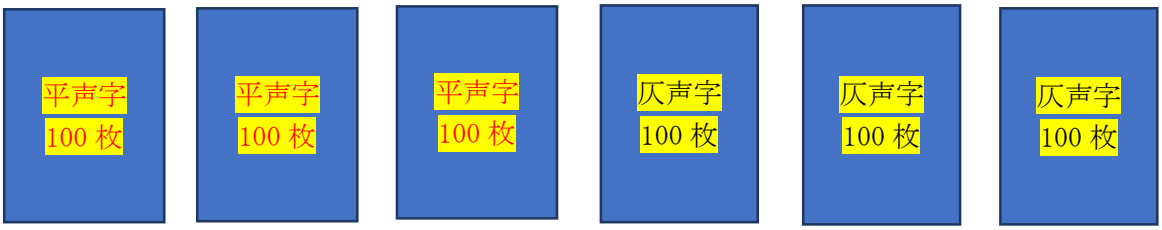
仄聲字二百飾以墨

有	對	興	畔	紫	鳳	久	喜	侶	渚	聚	戸	洒	友	海	採	蚤	坐	夏	響
有	隊	徑	翰	紙	送	有	紙	呉	語	遇	麌	馬	有	賄	賄	皓	箇	馬	養
此	境	嶺	杏	迥	萼	錦	漸	積	媚	未	曙	朗	北	桂	麗	劍	梟	愛	峻
紙	梗	梗	梗	迥	藥	寢	琰	陌	寘	未	御	養	職	霽	霽	艶	篠	隊	震
縱	萬	玩	面	宿	艶	逐	倏	玉	列	拂	發	忽	結	酌	薄	陌	隔	合	雜
宋	願	翰	霰	屋	艶	屋	屋	沃	屑	物	月	月	屑	樂	樂	陌	陌	合	合
舊	已	得	許	處	閣	是	倚	艤	耳	理	子	舉	五	解	每	載	待	引	淺
宥	紙	職	語	語	藥	紙	紙	紙	紙	紙	紙	語	麌	蟹	賄	隊	賄	軫	銑
遣	少	皓	雅	牽	把	寡	兩	仰	想	賞	往	久	九	首	後	覽	掩	送	鳳
銑	篠	皓	馬	霰	馬	馬	養	養	養	養	養	有	有	有	有	感	琰	送	送
弄	哢	寄	遂	事	味	遇	最	慨	礙	恨	嘆	戀	羨	嘯	義	口	屋	囀	向
送	送	寘	寘	寘	未	遇	泰	隊	隊	願	翰	霰	霰	質	寘	有	屋	霰	漾
悵	濯	逸	髪	渴	闊	絶	閲	説	寺	館	燕	棹	欄	枕	榻	酒	席	笛	帶
漾	覺	質	月	曷	曷	屑	屑	屑	寘	翰	霰	效	寒	寢	合	有	陌	錫	泰
釣	曲	艇	鷺	雁	鶴	鳥	蝶	雪	霧	日	露	水	月	院	洞	苑	澗	浪	路
嘯	沃	迥	遇	諫	藥	篠	葉	屑	遇	質	遇	紙	月	霰	送	願	諫	漾	遇
石	塢	壑	徑	野	谷	岸	地	沼	砌	小	一	賞	聽	奏	古	不	半	笑	飲
陌	麌	藥	徑	馬	屋	翰	寘	篠	霽	篠	質	養	徑	宥	麌	物	翰	嘯	寢
吐	臥	欲	杖	達	短	起	眺	老	遍	緑	乍	凈	盛	郭	岫	袖	覆	茂	蔭
麌	箇	沃	養	曷	旱	紙	嘯	皓	霰	沃	禡	敬	敬	藥	宥	宥	屋	宥	沁

續增仄聲字一百

映 敬	照 嘯	裹 哿	疊 葉	獨 屋	點 琰	數 遇	寂 錫	幾 尾	共 宋	趣 遇	片 霰	泛 陷	亂 翰	落 藥	訪 漾	影 梗	度 遇	蘇 銑	浸 沁
冷 梗	出 質	無 虞	斷 旱	上 漾	白 陌	淡 感	夢 宋	盡 軫	翠 寘	應 徑	放 漾	外 泰	滿 願	入 緝	望 漾	碧 陌	近 吻	遠 阮	擁 腫
下 馬	醉 寘	立 緝	詠 敬	傍 漾	去 御	爽 養	更 敬	色 職	樂 覺	靜 梗	渺 篠	韻 震	似 紙	遶 嘯	到 號	散 翰	墜 寘	若 藥	急 緝
在 隊	正 敬	好 皓	聳 腫	隱 問	見 霰	氣 未	動 董	暗 勘	勝 徑	接 葉	轉 霰	破 箇	秀 宥	捲 銑	唱 漾	謝 禡	細 霽	夕 陌	雨 麌
景 梗	暮 遇	夜 禡	午 麌	暖 旱	曉 篠	晝 陌	霽 霽	款 旱	聚 遇	晚 阮	9 つ欠								

詩牌は三人、四人、五人、六人でも遊ぶことができる。600 枚の詩牌を等しく六つに分けて、その六つの中に平声字三つ、仄声字三つというふうに並べる。並べ方は、下の図のようにする。



甲　乙　丙　丁　戊　己

参加者の中から一人が詩伯となる。詩伯ができた漢詩を評価することから、文学的才能が高い人が適任である。詩伯はこのゲームで審査員に相当する役割をしている。理解しやすくするために、仮に陳元輔、程順則、程順性、梁得声、竺天植、王登瀛らが今詩牌で遊んでいるとしよう。詩伯は陳元輔がやっている。まず、陳元輔は詩牌の中からランダムに一枚の詩牌を抽選し、例えば天字が当たったとする。天字は 4 画のため、程順則から数えて 4 番目の人物が竺天植である。すると、竺天植は先に詩牌を甲乙…の順番通りに一枚ずつ取る。他の参加者も同じように詩牌を取る。詩伯も詩牌を取る。すべての詩牌を配り終えてから、各自の手にある詩牌を見る。例えば、程順則の手に渓、江、嶺、峻、渚、堤、賞…などの字があるとする。とすると、程順則は山水をテーマとしたほうがいい。つまり、参加者が手元にある詩牌の字によって一番適切なテーマを判断する。すべての参加者がテーマと詩の体裁を確定した後、詩伯の陳元輔に報告する。途中で誰かがテーマを変えるのを防ぐために、詩伯の陳元輔はそれぞれのテーマと体裁を先にメモする。その後、参加者の各自の韻を確定する。詩の韻は詩伯によって各参加者の詩牌から平声字と仄声字を一つずつ抽選する。先に平声字の韻を使う。例えば、陳元輔は程順則の牌から「堤」を選んだとする。すると、程順則は「堤」の韻目である斉韻を使わなといけない。各参加者の韻を全部決めたら遊び（詩作）が始まる。時間を制限するために線香を燃やす。線香が燃え尽きたら、遊び（詩作）の時間が終わる。詩の質の優劣は詩伯によって評価される。

以上のように、決まった時間内で手元にある数十枚（多ければ 100 枚程度）の詩牌を並べ替え一首の詩を作るのである。現代の私たちでは、その難しさは想像もつかない。

以上、二種の詩牌にかかわる遊びの規則を紹介した。陳元輔が生きていた時代において詩牌がどれ

ぐらい流行っていたのかを次に紹介する。

① 『清稗類鈔』に以下のような記述がある。
(詩牌)盛行于康熙中鴻詞博學中人。[1](＜詩牌＞は康熙年間、鴻詞博学の人の間で流行っていた。)

② 『莆風清籟集』に以下のような記述がある。
(順治年間) 莆中詩社多尚拈詩牌。(中略) 人分百二十字集以成詩。2 (＜順治年間＞莆田の詩社では詩牌で遊ぶことが流行っていた。＜中略＞一人が 120 個の字を並べ替えて詩を作る。)

③ 『香祖筆記』巻五に以下のような記述がある。
詩集句起于宋 (中略) 近士大夫竟以詩牌集字、牽湊無理、或至刻之集中、尤可笑[3]。(詩の集句は宋代より発祥する。＜中略＞近来、士大夫たちはついに詩牌を通して集字をする。なんと無理やりにできた詩をある者は詩集に収録して出版する。甚だしく可笑しい。)

資料①からすると、詩牌は康熙年間、鴻詞博學の人の間で盛んであった。「鴻詞博學」とは 康熙帝が『明史』を編纂するために、正式科挙の外に「鴻詞博學」と呼ばれる試験を行なった。しかし、この文にある「鴻詞博學」は科挙を指すわけではなく、単に知識が該博で詩文に優れている人を指す。資料②からすると、順治年間、福建の莆田では詩社で詩牌 (演詩牌) を用いて遊ぶことが流行っていたようである。資料③からすると、民間の知識人が詩牌を好むだけでなく、士大夫も詩牌を好んでおり、ある者は無理やりに詩牌で作った詩を詩集に収録している。詩牌で無理やりに作った漢詩を詩集に収める現象に対して、王士禎は批判をしているが、逆に考えると詩牌がいかに流行していていたかが想像できる。

以上のことから、清代初期 (順治、康熙) において、文人士大夫の間で、詩牌で遊ぶことが流行っており、かつ、詩牌がよくできる人が文才の高さの象徴ともなっていたことが分かる。それは、『廈門志』、『莆風清籟集』の以下の記述で証明できる。

『廈門志』巻十三
張廷希 (康熙廈門人)、讀書過目成誦、為文搖筆立就。少時、常同諸名士宴會、生詩牌作集字詩、眾方攢眉嘔心、廷希參錯位置、其捷如響。詩既先成、詞亦斐宜、相與嘆賞。[4] (張廷希＜康熙年間厦門の人＞は、書籍を読めばすぐに覚え、筆を揮えばすぐに文章が出来上がる。若いころ、よく諸名士と宴会し、そこで詩牌を用いて詩を作った。他の人がまだ苦慮しているところに、廷希は軽く牌を並べ替えて程なく先に詩を完成した。できた詩は素晴らしくてみな讃嘆した。)

『莆風清籟集』巻三十九
常樹、字司牧、號雨時順治中諸生 (中略) 遺集散失、從社草中錄二律皆成于拈牌者亦一氣渾成無補綴之跡象。[5] (常樹、字は司牧、号は雨時、順治年間の諸生である。〈中略〉詩集は散逸して、詩社の詩集から収録した二首の律詩は詩牌を通して出きたものであるが、かき集めた感覚が全くない)

---

[1] 徐珂『清稗類鈔』第 45 冊「品物・鉱物」、商務印書館、1917 年、45 頁。
[2] 清・鄭王臣『莆風清籟集』巻 39 (『四庫全書存目叢刊』集部第 411 冊、齊魯書社、1997 年 7 月、624 頁)
[3] 清・王士禎『香祖筆記』、上海古籍出版社、1982 年、88 頁。
[4] 清・周凱修、凌翰纂『厦門志』巻 13 (『中国方志叢書』第 80 号所収、台湾成文出版社、1967 年、275 頁)
[5] 清・鄭王臣『莆風清籟集』巻 39 (『四庫全書存目叢刊』集部第 411 冊、齊魯書社、1997 年 7 月、624 頁)

なぜ、清代の初期、「詩牌」がそんなに流行っていたのだろうか。順治、康熙年間、文人が詩社を設立して詩作を切磋琢磨していた慣習に大きな関係があると考えられる。福州についてみると、当時、福州知府顧焯は福州の知識人に呼びかけて、福州にいる当時の知識人を集めて平遠詩社を設立している。また、林皦は当時の名士である毛際可、渣慎行、朱彝尊などと榕菴で集まって詩のやり取りをしている。当時、知識人が集会する時、詩牌で遊ぶというような高雅な催し（イベント）が行われていた。

第二項　勤学の詩牌の使用及び琉球への伝来

以上の歴史的背景の中で、康熙年間に福州にいる勤学人は郷にいれば郷に従えで、程順則、梁得声などの勤学人も詩牌で遊んでいた。康熙年間、陳元輔の『枕山楼文集』の「雪堂韻林雑組詩」に詩牌に関して以下のように述べている。

> 詩牌不知何昉也。而平仄錯落紅黑雜陳、攜二三知己於山窗水驛客邸仙舟中大展錦壇、高燒銀燭、列琥珀杯，傾桑落酒、然後各分一盤觸景命題拈字覓句、能使意與題合句隨字得。可不謂韻事與。較之雙陸骨牌馬弔諸枝相去何如也。吾門程子寵文、雅有吟詠癖讀書之暇手制詩牌一副。[1]（「詩牌」がいつ始まったのかは知らない。赤い字の平韻と黒い字の仄韻が混ざっている。友たち二、三人、柔遠駅や船で毛蓆を開く。蝋燭に火をつけて、琥珀杯を並べて、桑落酒を傾ける。その後一人ずつ一つ大皿をもらって風景に応じて題目を定める。韻の籤を抽籤してその韻を合わせて詩を作る。それは、風雅なことである。「雙陸骨牌」、「馬弔諸枝」と比べてどうだ。私の弟子程寵文は吟詠する癖があって勉学の暇に自ら詩牌を作った。）

上記の資料の中で「平仄落紅黑雜陳（赤の平声字と黒の仄声字が混ざって）」と詩牌の様子を描写している。この詩牌はまさに第二節に述べた「演詩牌」である。程順則は、「演詩牌」に参加したことがあり、しかも自分で詩牌を作って、勉学の暇に自分で詩牌を通して作詩を練習している。程順則が自ら詩牌を一つ作ったということは、それを琉球に持ち帰った可能性が高い。しかし、詩牌という文字ゲームが、どのように琉球に伝わったかについては、明確に示す資料がない。趙文楷の『槎上存稿』に「首里秀才向世德等晋謁館中分韻賦詩題其後」という詩がある。この詩は、詩牌が琉球に伝わった一つの根拠になるかもしれない。この詩を分析し、琉球での詩牌の使用について見てみる。

首里秀才向世德等晋謁館中分韻賦詩題其後

（首里の秀才向世德等晋しんで謁し、館中にて分韻し詩を賦しその後に題す）

繭紙分題擊鉢催、	繭紙　分題し　擊鉢催す
揮毫詩就亦奇才。	詩を揮毫し就すは　亦た奇才なり
從今不數韓陵石、	今より韓陵の石を数えず
網得珊瑚海上來。	網して珊瑚の海上より來たるを得たり

【七言絶句】

【通釈】

題目：首里の秀才向世德などがつつしんで拝謁し、天使館で韻を分けて詩を賦する。（私）はその後に題する。

銅鉢を打ってからみんなそれぞれ紙に詩を書き始める。みんな奇才を持ち、筆を振るうとほどなく

[1] 清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894。

詩ができあがった。これからは韓陵山寺碑文を数えあげたりしない。なぜなら、海上の国で珊瑚ように美しい人材を見つけたからである。

【背景】

題目を通して、「首里四公子」と呼ばれる四名の秀才は天使館で趙文楷に謁見する際に、それぞれ韻を決めて詩を賦したという状況が分かる。詩題にある「分韻」とは、文人が詩を作成する前に、各自の用いる韻字をもらうことである。問題はどうやって韻を決めるかということである。こういうような時には、韻牌を使って各々一韻を抽選して韻を決めるのが便利な方法である。したがって、筆者は天使館で趙文楷と首里の秀才たちは詩牌を使ったのではないかと推測する。

趙文楷、字は逸書、号は介山という。安徽省太湖県の出身の趙文楷は、嘉慶丙辰科の状元として翰林苑修撰を授けられた。嘉慶 4 年（1799）に使琉球冊封正使として嘉慶帝から一品の麒麟服を賜り、翌年、琉球に赴いた。1800 年 5 月琉球に着いてから 160 日あまりを琉球に滞在し、10 月に帰路に登った。琉球で得られた漢詩文を編纂したものが『槎上存稿』である。これは後に趙文楷の個人の総集である『石柏山房詩存』に収録されている。

【分析】

「繭紙分題撃鉢催」の中の「繭紙」とは、蚕繭で作った紙である。「繭紙」に関わる最も早いと見られる記録が唐代に成立した『書断列伝』にある。

> 晋穆帝永和九年、暮春三月三日、常游山阴与太原孫総承公、孫綽興公(中略)等、四十有一人修祓禊之礼。揮豪制序、興樂而書、用蚕繭紙、鼠笔、遒媚勁健、絶代更无。[1]（晋の穆帝の永和九年、晩春の 3 月 3 日、常に山阴与太原孫総承公，孫綽興公＜中略＞など、合計 41 名祓禊の礼を行った。筆を揮って序文を書き、その興を書した。鼠ひげの筆で蚕繭紙に書した字は極美かつ雄勁で空前絶後である）

しかし、晋代以降ずっと「繭紙」に関する記録はなく、明朝になってやっと「繭紙」を生産するという記録が新たに現れる。「繭紙」は、皇家で傘などの雨具を作るのに使用されている。雨具として使われているのであるとすると、実際に書写紙としては書きにくいものだったと思われる。『中山伝信録』にも「繭紙」を使用している記録がある[2]が、それは書写用ではなく、団扇を作るために使われている。したがって、趙文楷らは実は繭紙に詩を書いたわけではないと考えられる。「撃鉢催」とは銅鉢を打ってその響の消えない間に詩を作ったという故事。南朝梁の蕭文琰などの学士は、夜に集い蝋燭を一寸になるまで燃やし、先に詩を完成させた人が勝つといった遊びをしていた。蕭文琰は、それは難しくないと言って自ら銅鉢を打ってその響の消えない間に一首の詩を作り上げたという。ここの「繭紙」とは、ただ高級紙の喩えであろう。

「揮毫詩就亦奇才」の中の「揮毫」は、筆をすばやく揮う姿である。首里の秀才たちが筆を運ぶと、ほどなく詩が出来上がった。それで趙文楷は彼たちを「奇才」と称賛している。

「從今不數韓陵石」の中の「韓陵石」とは、韓陵山の定国寺にある石碑である。後魏の高歓は爾朱兆を敗って、韓陵山に定国寺を立てて功を表した。温子昇はそこで碑文を作った。梁の庾信がその碑文を読んで抄写した。南方の学者は庾信に「北方の文人は水準がどうか」と聞いた。庾信は「韓陵山の寺にある石碑文の作者が我々と並ぶものである」と言ったという[3]。ここでは首里秀才らの作品を韓陵山の碑文になぞらえている。

---

[1] 唐・張懐瓘『書断列伝』(『景印文淵閣四庫全書』子部 118 所収、台湾商務印書館、1982 年、56 頁)
[2] 清・徐葆光『中山伝信録』下、沖縄県立図書館、1975 年 3 月、190 頁。
[3] 唐・張鷟『朝野僉載』巻 6（王雲五編『叢書集成初編』収録、商務印書館、1937 年、80 頁）

「網得珊瑚海上來」の中の「珊瑚」は、琉球の才である首里四公子を指す。その「首里四公子」とは、官生騒動を経て最初に派遣された留学生である向世徳、向循師、向善荣、毛長芳である。向循師、向世徳が正規の官生であり、向善荣、毛長芳が伴送官生である。その四名と他の官生は一号船に乗って中国へ向かう途中、遭難して行方不明となった。

第三項　勤学人の漢詩創作における詩牌の役割

程順則は師匠などの福州文人と集会する際に詩牌をする以外、自ら詩牌を作って、普段から詩牌を使って作詩をしていた。さらに、詩牌で出来上がった漢詩を集めて詩集とした。陳元輔は、詩牌は暇つぶしをするもので、それを通してできた漢詩はたいしたものではなく、さらには詩集とするのに値しないと思っていたが、程順則は陳元輔と全く異なる考え方を持っていたにちがいない。留学生として中国に来た程順則は、詩牌を通して何らかの得るものがあると考えていたのであろう。程順則は詩牌に対して次のようなことを言っている。

> 程子曰：非也、文人偶雅推敲、無非心血安忍棄之。況手談之理可以編為譜、投壺之義亦可著于經、豈詩牌所拈之詩獨不可雜組而為佳集也[1]。（程子が言うには、いいえ違う。文人が推敲して得たものは、自己の心血で捨てるには忍びない。まして囲碁には棋譜があって投壺なども経典に記載さている。どうして詩牌で作った詩を集めて詩集とすることができないだろうか。）

程順則は、詩牌は暇つぶしのものだけれども、それを通して作った漢詩も精力を費やしてできたものであるから、無視して捨てるのは惜しいと考えている。ある意味では、程順則は詩牌を通して漢詩能力を鍛えたともいえよう。

次に程順則が詩牌の遊びを通して、何を得たのか考察してみる。

『詩牌譜』に掲載されている規則と技法には、分牌式、分韻式、立題式、用字式、借字式、較勝式、品第式、賡奇式、翻新式、和韻式、収残式、洗荒式、疊錦式、聯珠式、合壁式、換彩式がある。以上並べた技法の中で漢詩の作成に関わるのが、分韻式、立題式、用字式、借字式である。以下、これらの技法が漢詩を学習する勤学人に対してどうのように影響を与えたのか検討してみる。

【分韻式】

詩伯によって参加者が用いる韻を決めることの本意は､詩を作る時に韻を制限するということである。文人の間では、お互いに詩を唱和するのが普通である。唱和する際に作った漢詩は、また和韻詩と呼ばれる。和韻詩には四種ある。一つは和詩といい、相手の詩の義に唱和するが同じ韻を用いる必要はない。二つは「依韻」と言い、相手の詩の韻を用いるが同じ韻目に属す漢字を使う。三つは「用韻」と言い、相手の詩の原韻を使うが韻の順番に従わなくてもいい。四つは「次韻」と言い、相手の詩の韻及び韻の順番まで同様に使うものである。勤学人は、福州の文人たちと交流する際に、その内の二種の詩牌に接することがある。

また呉承学は「文字遊戯與漢字詩学―『詩牌譜』研究」（以下「詩牌譜研究」）で「詩牌譜所收的字韻，也是中國古典詩歌創作最常用的韻。（詩牌譜に収められている字韻は、中国古典詩歌の創作において最もよく使われている韻である。）」[2]と述べている。つまり、詩牌はすでに漢詩創作によく使われる韻をまとめているため、詩韻を暗記する必要がない。詩牌で遊ぶことを通して、詩韻を掌握する

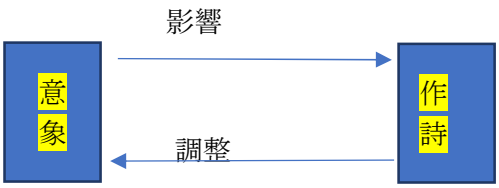
---

[1]清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本、国立公文書館内閣文庫所蔵、漢 10894。
[2] 呉承学「文字遊戯與漢字詩学」、『学術研究』7 月刊所収、2000 年、106 頁。

ことができたというのである。

【立題式】

詩牌の遊びに参加する人は、得た詩牌を見通して手元にある詩牌に一番適切なテーマを決める。例えば、手元に「江、蘋、湖、草、煙、浦、漁」などがあれば、テーマを漁村、水郷にした方が詩を作りやすい。周知のごとく、漢字は表意文字であり、その特徴からすれば、現実に存在する物事を高度に濃縮して抽象化したものである。それで漢字にはおのずから見た目で図像を感知できるという特質がある。遊びの参加者は手元にある詩牌を見て、漢字に対する直感的な感覚によって頭の中に意象（ムード）を創り上げる。意象とは、詩人の気分であり、経験を景物に託して形成した文学作品中の画面である。馬致遠の「秋思」の「枯藤老樹昏鴉、小橋流水人家、古道西風瘦馬」という句で、詩人は、一連の景物である「枯藤」「老樹」「昏鴉」「小橋」「流水」などの語句を並べており、それ以外には言葉の修辞もなにも使っていない。しかし、これらの景物のかもし出すイメージが合わさって、うまく物寂しく、悲しげな画像を構成している。この作者の心情、思想が含まれている文学作品中の景物や雰囲気が、意象である。そして、頭に形成した意象に従って詩牌を並べ替えて漢詩を作る。また、並べ替えながら頭にある意象を調整する。実は、これが詩を作る過程の二つ目のステップである。この過程を図像で表現すると以下のようである。



「意象」を上手に創り上げるかどうかが、この漢詩の良し悪しの一つ重要な基準である。「詩牌譜研究」では、「詩牌譜實際上集中了中國古代最為常見、最為典型的意象。（詩牌譜は中国古代に最もみられる、最もクラシックな意象を集めている）」[1]と述べている。これによると、詩牌譜は膨大な中国古典詩文から最も使われている「意象」と韻とを総括したものであり、漢詩の学習者とって詩牌は作詩の練習のための便利な遊具だったのである。

【用字式】

凡遇一字两音、其平仄可兼用者任意。如欲用重疊字者、但下一牌留一空、以下一字讀作二字或如古詩云休教枝上啼、啼時驚妾夢。又如：樹頭樹底覓殘紅、一片西飛一片東之義。[2]（およそ、一文字に平声と仄声両方ある時には、平声を使うか仄声を使うかは参加者しだいである。もし一文字を二回使おうとした時、重複する位置を空白にする。例えば、古詩にいう「休教枝上啼、啼時驚妾夢」、また「樹頭樹底覓殘紅、一片西飛一片東」などのようにする。）

漢字は大まかに分ければ平声字と仄声字がある。詩、詞、曲などの文学形式は、音楽の躍動感を求めるために平仄に非常にこだわっている。漢字の平仄が作詩にとっていかに重要なのか、陳元輔は『枕山楼課児詩話』で以下のように述べている。

[1]呉承学：「文字遊戯與漢字詩学」、『学術研究』7 月刊所収、2000 年、106 頁。
[2]明・ 王良樞輯『詩牌譜』光緒戊子觀自得斎藏板、（清・徐士凱輯『観自得斎叢書』、13 頁）

學詩要先知平仄此二字不辨、匪獨聲音不協、抑且規式有乖、因另列一定之法于前、俾初學曉知所步趨矣。[1]（詩を学ぶなら、まず、平仄を知るべきである。平仄を分けられなければ詩のリズムが乱れるだけでなく、詩の格式も怪しくなる。それで事前に平仄の格式を述べ、初心者に教えて見習わせる。）

陳元輔は、詩を作る時、平仄の格式に従わなければならないと強調している。さもなければ詩のリズムは乱れて、音楽のような美感が消える。さらに、詩の全体の格式も怪しくなる。つまり、平仄は作詩において基礎中の基礎である。「用字式」によると、もし平声と仄声が両方ある字に当たった場合、平声を使うか仄声を使うかは参加者しだいである。したがってこの技法を使う条件として、字の平仄に熟練しなければならない。つまり、参加者は用字式を通して字の平仄を熟知することができるのである。

【借字式】

借字可否俱聽詩伯、字有三借、一曰借音：如清作青半作泮畔之義音同形近者方許。二曰加減、如鋪作金、蓮作車、西作洒、水作冰止許用大加減小、不可用小加減大。三曰勻和：如花柳風月人皆好用、未鋪之前説過俱許通借某字一個或二三個留空寫補。[2]（借字ができるかどうかは詩伯しだいである。借字には三種ある。一つは「借音」という。例えば清字を青字に変換すること、半字を畔や泮に変換することなどがある。二つは「拆字」という。複雑な漢字から他の漢字を生み出す。例えば、輔字は部首の車字を使ってもいいし、右半分の甫字を使ってもいい。簡単な漢字と部首合わせてできたほかの漢字を使ってもいい。例えば、西と氵を合わせて洒とすること、亭と女を合わせて婷とすることなど。三つは「勻和」という。詩人たちによく使われる漢字「花」「柳」「風」「月」などの漢字を、遊びが始まる前に手元に余る漢字があれば、それに変換してもよいと約束する。）

詩牌譜に掲載されている漢字は600字であるが、参加者に分けると一人に多くても100字あまりしか配られない。限られた漢字では、きちんとした意味を伝える一つの聯句を作ることさえも難しい作業である。「借字」の技法を通して、形と発音が近い漢字に変換して使うことができる。この600字を基として、「借字式」を通してもっと多くの字を得られる。「借字式」を運用することは、実は「煉字」の過程である。「煉字」とは、用語について推敲することである。詩の趣旨に最も相応しい字を追及するのが、詩人がいつも努力している目標である。この字を詩に入れるか入れないか、詩の趣旨だけを考えるわけではなく、詩の全体の平仄の順序、詩の意象などの要素も考慮しなければならない。つまり、「借字式」は、最も難しくて詩人の総合能力を試す技法である。

詩牌を用いた遊びは中国の文人たちが集会する時、雅やかな催しとして行われていた。この遊びの難しさは、上述した通りである。古人の古典中国文学における造詣は深く、現代人が追いつくのは非常に困難なことである。この遊びに、漢詩創作の素養のない者が参加するのは無理であり、一定の中国古典文学の知識と能力を備えている人しか参加できない。初めてこの遊びに参加する勤学は、うまくできないかもしれないが、遊べば遊ぶほど漢詩の作詩能力は上がっていったことであろう。詩牌は、詩を作ることをゲーム化したものである。参加者は作詩の様々な方面で詩牌を使うことを試みている。

---

[1]清・陳元輔『枕山楼課児詩話』、皇都書鋪 英華堂出版、1739年 、12頁。
[2] 同上書『詩牌譜』14頁。

漢詩学習の途中である勤学も、同様に遊びながら漢詩創作の練習をしていたにちがいない。

次に王登瀛、程順性、毛子狲、鄭克文、陳楚水、紅爾吉などが柔遠駅で詩牌を用いてる場面を反映する漢詩を分析する。

同程素文毛子狲鄭克文陳楚水紅爾吉驛樓分賦
（程素文、毛子狲、鄭克文、陳楚水、紅爾吉と同に驛樓に分賦す）

裘馬翩翩快壯游　　裘馬翩翩たり　快(こころよ)き壯游
獸爐促膝共悠悠　　獸爐促膝(じゅうろうそくしつ)　共に悠悠たり
高談客詫陳驚座　　高談客を詫かす　陳驚座
麗句人傳趙倚樓　　麗句人に傳う　趙倚樓
帷下茅簷低北斗　　帷の下茅簷(ぼうえん)　北斗低く
夢廻竹榻在南州　　夢に廻る竹榻　南州に在り
鬮題刻燭逢今夕　　鬮題　刻燭　今夕逢う
遠勝山陰半夜舟　　遠く山陰の半夜舟に勝つ
【七言律詩】
【平水尤韻】

【通釈】
題目：程素文、毛子狲、鄭克文、陳楚水、紅爾吉と共に柔遠駅楼で詩を作る。
かわごろもを着て肥馬に乗る優雅な生活の中の楽しい遊び。獸の形の火炉に近づいて一緒にのんびりする。素晴らしい話を語り、客人を驚かせた「陳驚座」がいる。綺麗な詩句を作って人に伝える「趙倚樓」のような人物が席にいる。帷帳の中、茅屋のひさしは北斗より低い。夢を廻らせて、今南国の長椅子に座っていることに突然気づいた。「鬮韻作詩会」をこの夜に行ない、その楽しさは山陰の王徽之が夜中に友人に会いに行くことよりずいぶん大きい。
【分析】
詩の題目からして、王登瀛が琉球人の程素文[1]、毛子狲[2]、鄭克文、陳楚水[3]、紅爾吉らと柔遠駅で詩賦のやり取りをしたことが分かる。「分賦」とは、王登瀛が琉球人たちとテーマを定めて別々に詩を作ることを言う。
「裘馬翩翩快壯游、獸爐促膝共悠悠」
「裘馬(きゅうば)」は、「裘馬輕肥」の省略であり、着ているかわごろもが軽くて乗っている馬が肥えるという意味である。転じて、豊かな生活を言う。「翩翩」は行動が優雅なことを言う。「裘馬」と「翩翩」はこの集会で集まった人が富貴で優雅であることを指す。「裘馬翩翩」は、琉球からの程素文、毛子狲、鄭克文、陳楚水、紅爾吉を形容しており、彼らを褒め称えている。「壯游」は旅行の一つの形式で、距離も時間も長くて資金をたくさん費やす旅行を言う。有名なものには玄奘法師が天竺へ経書を

[1]程素文、「七世通事順性，康熙三十年辛未十一月初二日為勤學隨接貢都通事鄭明良港川親雲上那霸開船赴閩，乙亥年隨耳目官翁敬德佐久親雲上忠佑游京丙子年六月十七日歸國」「程氏家譜」（覇市史企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』1 巻 6 、那覇市役所、1980 年 3 月、559 頁）。
[2]毛子狲、「康熙三十一年壬申七月初九日，請乞王命為讀書習禮事，隨在船通事毛文哲奥間通事親雲上本年十一月二十日，那霸開船赴閩留在讀書。三十六年丁丑五月二十八歸國」、「毛世家譜」（那覇市史企画部市史編集室『那覇市史・家譜資料二』第 1 巻 6、那覇市役所、1980 年 3 月、711 頁）。
[3]陳楚水、「三世其湘 康熙三十一年壬申，請乞王命為讀書習禮事隨正議大夫王可法國塲親雲上，赴閩留六年丁丑五月二十八日歸國」（「陳姓家譜」『那覇市史・家譜資料二』巻六　470 頁 那覇市史企画部市史編集室 1980 年）。

取りに行く旅がある。杜甫の「壯游詩」に「東下姑蘇臺，已具浮海航。到今有遺恨，不得窮扶桑。」[1]という句がある。杜甫の「壯遊」は日本へ旅行にいくかのような遠く旅することを想定したものであった。程素文らが琉球より中国に来た旅は、まさしく「壯游」といえる。

「獸爐」は、野獣の形の火炉である。ここから、集会は冬に行なわれたことが分かる。「促膝」は対面にして座って膝が近いという意味で、親しい交流の様子を言う。「悠悠」はのんびりゆったりとしているさまである。この句では、程素文らと王登瀛らが火炉の傍で暖を取りながら、のんびりとして話しあう場面を描いている。

「高談客詫陳驚座、麗句人傳趙倚樓」

「高談」は、意気に盛んに議論する意味である。「陳驚座[2]」は漢の人物である陳遵を指す。陳遵は当時の名士であり、人を訪ねていって名前を言うと部屋に座っている人々がみんな驚いたという。後に、「陳驚座」の号が与えられている。「陳驚座」は、世に有名な人物を形容する。つまり、駅楼に座っている人はみんなエリートであることを言っている。

「趙倚樓」は、唐代の詩人、趙嘏[3]を指す。趙嘏の「長安秋望」詩に「殘星數點雁橫塞，長笛一聲人倚樓。」という句がある。当時の大詩人杜牧は、非常にこの句を褒め称えて「趙倚樓」との雅号を送った。この句は、みんなが作った詩が巧妙であることを言う。

「帷下茅簷低北斗、夢廻竹榻在南州」

「帷下」は、漢の馬融が赤い紗を下ろして中で弟子を教えることを言う。この言葉から、駅楼の集会が実は講座であったことが分かる。陳元輔の詩作には、琉球人を教えるという意味を含む詩句がない。代わりに「夜話」、「集飲」、「宴集」などの言葉を用いている。これを見ると、詩の内容は琉球人との宴会や雑談などの活動を言っっているかといえば、実はそうではない。先に挙げた「上巳日仝梁本寧得濟得聲陳魯水金浩然烏石山觀朱夫子石室清隱石刻」という詩では、陳元輔は福州城内に勤学を連れて行って、朱熹に関わる遺跡を見学しながら儒学の知識や文化を教えるという内容を反映している。「茅簷低北斗」は、北斗が徐々に登っていて草堂の軒が北斗より低いという場面を描いている。転じて時間が遅くなったことを言う。

「夢廻竹榻在南州」では、詩人はおそらく居眠りをしていて、夢から戻って現在福州にいることに気づいたのではないか。なぜ詩人はこんな感じを受けたのか。それは、王登瀛の隣にいる程素文、毛子狲、鄭克文、陳楚水、紅爾吉はみんな琉球人であり、琉球のことについて話し、まるで琉球にいるようであると感じさせたのだろう。一方、この集会では福州の知識人も異国の文化に触れることができたのであろう。

「鬮題刻燭逢今夕、遠勝山陰夜半舟」

「鬮題」は、テーマを定めて韻字が書かれてあるカードを抽選して、当たった韻を使って詩を作ることを言う。「刻燭」[4]は、蝋燭で時間を計って作詩することである。竟陵王子良は、夜に知識人を招いて蠟燭を一寸燃やすうちに詩を作り上げ、他の人にも同じことを要求した。後に、「刻燭」は文才に優れ筆が立つことを言うようになった。

「遠勝山陰夜半舟」の中の「山陰夜半舟」[5]については、以下のような故事がその由来となっている。王義之の第五子王徽之は、紹興に住んでいる時、ある雪の夜に友人である戴安道を思い出し、夜

---

[1]曹寅『全唐詩』巻 222、 中華書局出版社、1979 年 8 月、2358 頁。
[2]南朝宋・范曄『漢書』巻 92「游俠・陳遵傳」、中華書局、1965 年 5 月、3711 頁。
[3]元・辛文房著 、傅璇琮編『唐才子傳校箋』第 3 冊巻 7、中華書局、 2000 年、297 頁。
[4]唐・李壽撰『南史・王僧孺列傳』巻 59、中華書局、1975 年 6 月、1463 頁。
[5]「王子猷居山陰。夜大雪，眠覺，開室命酌酒，四望皎然，因起彷徨，詠左思招隱詩，忽憶戴安道。時戴在剡，即便夜乘小船就之，經宿方至，造門不前爾返。人問其故，王曰：吾本乘興爾行，行盡爾返，何必見戴。」（張万起、劉尚慈撰『世説新語譯注』「任誕第二十三」、中華書局 、2006 年 8 月、753 頁）

中にもかかわらず船に乗って何日間かかけてやっと戴安道の処に着いた。しかし、彼の家に入ることなく帰っていった。他の人が彼になぜ会わないのかと聞いたら、「私は興に乗ったので尋ねていったのだ。興が尽きたら帰る。戴安道と会わなくてもいいのだ。」と答えた。「山陰夜半舟」とはそうした気ままにふるまう行為をいう。

第四項　小結

本節では勤学と福州の文人との交流の際に使われる詩牌について、詩牌の遊び方、詩牌がどういうふうに勤学の漢詩学習に影響を与えたかについて検討した。詩牌で遊ぶことは、中国の知識人にとっては高雅な遊び（詩作の催し）に過ぎないが、琉球勤学にとっては漢詩創作の平仄、押韻、意象、煉字などの技法を鍛えるものとなっていたことを解明した。残念なことに、詩牌の遊びは参加者の漢詩能力を要求するので程順則らはたとえ琉球にもち帰っても普及するのは難しかったと思われる。中国でも清代初期に一時期流行していたがその以後詩牌に関する記録も少なくなってこのゲームも廃れた。

第三節　交流活動の諸相

文人交流はどんな形式の活動にもかかわらず詩を作ってその活動を記す特徴がある。『枕山楼詩集』『中山詩文集』『柔遠駅草』に収録されている中琉文人交流を反映している詩をまとめると三つの形式の交流活動がある。それは宴飲、贈答、作詩の会である。宴飲は福州文人と琉球文人が柔遠駅での宴席である。贈答は福州文人と琉球の文人は別れる時、詩を作って記念することである。作詩の会は福州文人と琉球の文人は柔遠駅で専ら漢詩の会を行うことである。また、第四項の交流の側面とは特定の形式がなく、福州文人と琉球文人は日常の交流にあった出来事である。そして、詩を分析してそれぞれ形式の交流活動と交流や生活の側面を見てみる。

第一項　宴飲

1、まずは宴飲に関する王登瀛の『柔遠駅草』の作品を見てみる。

春幕集飲周熙臣翠雲楼	**春幕周熙臣の翠雲楼に集飲す**
羣芳未盡暗東墻	羣芳未だ盡きず暗き東墻に
策杖相招集草堂	杖を策し相い招へ草堂に集う
飛燕已來尋舊壘	飛燕已に来たりて舊壘を尋ね
落花猶自帶餘香	落花猶ほ自から餘香を帯ぶ
座中白鬢寧知老	座中の白鬢寧んぞ老いを知らんや
夜半青樽不戢長	夜半の青樽長く戢めず
煙水幾回容易度	煙水を幾く回か容易に度る
不知何以謝春光	知らず何を以てか春光を謝せん

【詩型】七言律詩
【押韻】平水陽韻

【通釈】
題目：晩春周熙臣の駅楼で集い酒を飲む。

東にある花々がまだ咲いているが、初春のように盛んになる様子ではない。杖をついてお互いに誘って来て草堂で集まった。燕は以前に建てられた巣に戻って来た。落ちた花はまだ香りが残っている。

席に座っている年配者は年を取ることを知っているのだろうか。夜中でも杯を収めず飲んでいる。海を渡ってきて柔遠駅に居る琉球の友人と集会するチャンスがつねにあるわけではない。春光に恵まれていい集会を得てどうやって春に報いたほうがいいのか分らない。

【分析】

詩の題目から見ると、晩春に王登瀛や何人かの友人と共に柔遠駅で周新命[1]の部屋に集って飲んでいたことが分かる。王登瀛は康熙 32 年の秋、柔遠駅で琉球人の師として働き始まった。康熙 34 年まで周新命（熙臣）は福州に滞在していた。

〈首聯〉

「羣芳未盡暗東墻、策杖相招集草堂」

「群芳未盡暗東墻」は柔遠駅の東墻の隅にある野花が少し残っていることをいう。つまり、今は晩春であることを示している。「暗東墻」は東墻が暗いと言っているわけではなく、花がほぼ落ちていて春光のきらびやかに輝く光景が過ぎったと言いたいのである。「策杖相招」は周新命が杖をついて王登瀛らを誘いに行ったこと言う。「草堂」は周新命の書斎である。

〈頚聯〉

「飛燕已來尋舊壘、落花猶自帶餘香」

燕は以前に建てられた巣を探しに来る。つまり、晩春の時点を示す。落ちた花は生命が尽きたがまだ香りが残していることを言う。「飛燕」「舊壘」「落花」「余香」は晩春の特徴を示している。

〈頷礼〉

「座中白鬢寧知老、夜半青樽不戢長」

席に座っているお年寄りは自分が年取ったことを知っているのであろか。夜中でも長い時間飲んで杯を収めない。白鬢は自分のことを言っているかそれともほかの勤学人師匠を指すか。康熙 32 年、王登瀛はやく 33 歳なので白鬢はほかの一緒に周新命を尋ねてきた師匠をさすだろう。周新命が留学する時、竺天植は彼の師匠である。また康熙 32 年、竺天植は 56 歳でこの白鬢はおそらく竺天植を指すだろう。「夜半」はこの宴席がまた夜中まで続いていたとわかる。

〈尾聯〉

「煙水幾回容易度、不知如何謝春光」

「煙水」は霧靄が漂っている水面である。「煙水」は海のことを考えてもいいだろう。つまり、琉球から海を簡単に渡ることが難しくて、琉球の友人と柔遠駅で酒を飲んで楽しく交流するチャンスが容易ではないと言っている。「不知如何謝春光」はみんなこんな美しい春光に恵まれていい集会を得てどうすれば春光に報いるのか知らないと言っている。

詩の分析を通して春末に王登瀛、竺天植らは周新命の要請を受けて柔遠駅に集まって宴席を行ったことがわかる。

同竺天植陳元聲集飲驛樓陳魯水以紙屏索詩并書兼讀陳元聲題屏詩即席走筆附和

竺天植陳元聲と同に柔遠驛楼に集飲し陳魯水紙屏を以て詩を索め并びに書き兼ねて陳元聲題屏詩を讀み即席に筆を走らせ附和す

躡屐登臨倦　　屐を躡み登臨に倦む

[1] 前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、381 頁。

相攜集草堂　　相い攜え草堂に集(つど)う
紙屏開錦繡　　紙屏に錦繡を開き
彩筆煥文章　　彩筆文章に煥(て)らす
好友情難盡　　好友情を盡し難く
新詩句有香　　新詩句に香有る
元龍樓百尺　　元龍の樓百尺なり
高咏且飛觴　　高く詠じ且つ觴を飛ばす

【詩型】五言律詩
【押韻】平水陽韻
【通釈】

題目：竺天植、陳元声と共に柔遠駅で集いて酒を飲み、陳魯水は掛け軸を持って陳元声の題詩を求めて陳元声の詩を読んで即席に付和する。

山登りに倦んで互いに手を携えて草堂に行く。掛け軸を開くと、錦繡のような文章が書いてある。文章は詞藻に富んで巧妙である。仲良い友人に対する情誼は数行の詩で言いきれないが新詩は墨の香りがある。みなは元龍の百尺の楼で詩を多く詠んで酒を痛飲する。

【分析】

詩の題目から見ると、竺天植、陳元声及び作者王登瀛三人は柔遠駅で集い、陳魯水[1]は掛け軸を持って陳元声に題詩を求めた。王登瀛は陳元声の題詩を読んで即席でこの付和詩を作った。陳元輔はこの宴席に参加しなかったようである。陳元声は本名陳鏞といい、『中山詩文集』には陳鏞の詩が一首収録されている。福州の人物で陳元輔と親戚関係を持つようである。彼は琉球人と交流していた福州人の知識人で勤学の師匠として働いていたかどうか確かめられないが竺天植、陳元輔との関係を通して琉球勤学に師匠として推薦された可能性もあると考えられる。

〈首聯〉

「躡屐登臨倦，相攜集草堂」

「躡屐登山」は、東晋の詩人謝霊運が底に歯のついたゲタ状の履物を履いて山に登ることを言う。後に、登山して遊ぶことを言う。「攝履登臨倦」から竺天植、陳元声、王登瀛は柔遠駅に行く前山登りに行ったことがわかる。「草堂」は陳魯水の部屋を指す。この詩を作る時点では陳魯水は存留事として柔遠駅で働いている。

〈頷聯〉

「紙屏開錦繡、彩筆煥文章」

「錦繡」は「錦繡文章」を言う。転じて美しい絹織物のような文章を言う。「彩筆」は詞藻に富んだ筆遣いを言う。この句で掛け軸を開いて陳元声が書いた詩は絹織物ように美しい、筆遣いも巧妙であることを言う。つまり、陳元声の文才を褒め称えている。陳元輔、竺天植、王登瀛らの掛け軸はいまでも時々日本の骨董屋で見られる。これらの掛け軸は琉球勤学、あるいは柔遠駅で働いている役人が寄贈や購入などで入手して琉球に持ち帰ったものであろう。

〈頚聯〉

「好友情難盡、新詩句有香」

この句はまた、陳元声の詩が言い切れない友情を含んでおり、読んで清らかな香りを感じるという。

[1] 前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第1巻6、461頁。

つまり陳魯水に送った詩から陳元声の真摯な友情を感じられると言っている。
〈尾聯〉
「元龍樓百尺、高詠且飛觴」
「元龍百尺樓[1]」は高い志や豪気な感情を述べ表すために登った高い処を指す。つまり、駅楼では身分上下の区分を捨てみんな思いきりに詠唱することを言う。「高詠且飛觴」は王登瀛らが声高く詩を吟じて酒を痛飲する場面を描いている。

2、続いて宴飲に関する陳元輔の『枕山楼詩集』の作品を見てみる。
【67】

春日留飲周熙臣山樓	**春日周熙臣山樓に留飲す**
山樓結構絶塵埃	山樓構を結び塵埃を絶つ
春到堦前長綠苔	春堦前に到り綠苔長ず
竹葉堆門緣客掃	竹葉門に堆く　客に縁りりて掃い
桃花滿樹待人開	桃花樹に滿ち人を待ちて開く
潮平遠浦漁郎渡	潮平く　遠浦　漁郎渡る
簾捲東風燕子來	簾卷き　東風　燕子來る
不識濂溪携手後	濂溪手を攜る後を識らず
可能容我再啣杯	能く我を容し再び杯を啣(くわ)うべし

【詩型】七言律詩
【押韻】平聲灰韻

【通釈】
題目：春日、周熙臣の山楼に留まりて飲む。
山楼は俗世を断った所に立てられている。春が来て、楼前の階段に緑の苔がのびている。竹の葉が門に集められているのは客の為に掃いたからで、桃の花が木に満開になっているのは人を待って咲いたからである。波が穏やかになり、遠くの漁人が渡っている。東風が簾を吹いて燕が飛んでくる。瓊河で周君と逢った後いつ再び一緒に飲めるか知らない。
【分析】
詩の題目から見ると、春の日、陳元輔は周新命の山楼で留まって酒に招待された後、この詩を作った。周新命、字は熙臣であり、康熙 27 年 11 月、読書習礼の為に福州に赴いて七年間滞在した後康熙 34 年帰国した。その後、再び福州には来なかった。彼の作品である「秋日集飲程素文江樓遲業師陳昌其不至」からすると陳元輔が周新命の師匠だったことが分かる。また、周新命は竺天植に師事して三年間で勉強していた。周新命は留学していた七年間に『翠雲楼詩集』を著した。
〈首聯〉
「山樓結構絶塵埃、春到堦前長綠苔」
「山樓」は周新命の書斎である。ちなみに周新命の書斎号は翠雲楼である。陳元輔自身の書斎は枕山楼と名付けられている。陳元輔は琉球友人を訪ねる時作った詩には「山楼」、「江楼」との言葉を多く使っている。「江楼」や「山楼」などの言葉を」使うのは周新命、梁得声、梁得済たち文人雅士の

[1] 元龍百尺樓、「(劉備) 曰：君（許汜）求田問舍，言無可采，是元龍所諱也，何緣當與君語？如小人，欲臥百尺樓上，臥君於地，何但上下床之間邪？」（陳壽『三國志』卷 7「魏志・陳登伝」、中華書局、1964 年 10 月、230 頁）

身と符合するからである。「結構」とは建築の構造に沿って組み立てるということである。転じて部屋を建てることである。「絶塵埃」は周新名の住居が俗世を絶っていることをいう。

「春到堦前長緑苔（春が柔遠駅に来て緑の苔が楼の前に伸びた。）」は唐代劉禹錫[1]の「陋室銘」の「苔痕上堦緑、草色入帘青[2]」を踏まえて作ったのであろう。「陋室銘」は中国文学史上において千古の名篇である。この名篇は簡潔、純朴な言葉で君子の在り方を悉く述べている。つまり、この句では翠雲楼の中に君子が住んでいると言っている。

〈頷聯〉

「竹葉堆門緣客掃、桃花滿樹待人開」

「竹葉」は詩の中で竹の落ち葉である。「堆門」は門の前の庭園に竹の落ち葉が集められていることをいう。訪客が来るから門の前の落ち葉を掃いた。それは事前、陳元輔が約束の日に訪れて来て周新命がすでに部屋、庭を掃除して待っていることをいう。「桃花滿樹待人開」は擬人の手法を用いて陽春の三月、桃花が客を迎えるために咲くようであると言っている。

〈頸聯〉

「潮平遠浦漁郎渡、簾捲東風燕子來」

波が穏やかな川に漁民は魚を捕る画面を描いた。ここの景色は柔遠駅の付近に実際あったものであろう。他の詩にも漁火、漁港との言葉がある。柔遠駅の付近には、魚を捕る村落があったようである。「潮平遠浦漁郎渡」は陳元輔が江楼で眺めて見た風景である。

「燕子来」は春の時、燕がひさしの下に巣を築くことを指す。東風、燕を用いて春の季節を示すことは古典詩によくある手法である。「簾捲東風燕子來」は陳元輔のすぐ近くの景色である。

〈尾聯〉

「不識濂溪携手後、可能容我再啣杯」

「濂溪」は濂溪先生である。すなわち宋代理学思想の鼻祖である周敦頤を指す。周新命は周敦頤と同じく周という姓であるから、ここの「濂溪」は周新命のことを言っている。陳元輔が周新命を誉めていることが読者たちにも分かるけれども、少しほめすぎのような感がす。これはやはり、陳元輔が酒を酔っている際にこの詩を作ったためではないか。

「攜手」は一般的に言葉を寄せる或いは再び逢う時、相手の手を携えて親密を表す行為である。「可能容我再啣杯」の句は口語化の言葉で「いつかまた酒をごちそうしてくれるか」と言いている。筆者はこれを読んで詩人の酔った姿が頭に浮かび上がった。

【７９】

江樓雨夜集飲越日蔡文敏歸中山	**江樓に雨の夜に集飲し、越日蔡文敏（びん）中山に歸る**
江樓惜別雨蕭蕭	江樓に惜別し　雨瀟瀟たり
明日歸帆趂早潮	明日歸帆（きほ）　早潮に趂じる
蒲載琴書旋孤國	蒲に琴書を載せ　孤國に旋る
尚留魂夢寄中朝	尚お魂夢（こんめい）を留めて　中朝に寄る
離亭楊柳愁攀折	離亭　楊柳を攀折（はんせつ）するを愁（うれ）え
古驛芙蓉嘆寂寥	古驛　芙蓉寂寥（ふようせきりょう）を嘆く

[1] 劉禹錫：中唐の詩人、政治家で字は夢得。詩豪と呼ばれる。楽府体の寓言詩で政治を諷喩するのは彼の詩の特徴である

[2] 清・董誥等輯『欽定全唐文』巻 608（『續修四庫全書』1644 集部・總集類収録、上海古籍出版社、1995 年、73 頁）

祇恐雞鳴天欲曙　　祇だ　雞の鳴き天曙けるんと欲するを恐れ
高燒銀燭話通宵　　高く　銀燭を燒し通宵話す
【詩型】七言律詩
【押韻】平声蕭韻

【通釈】
題目：雨が降る夜に江楼で集まって蔡文敏が明日中山に戻るため酒宴を開く。
　江邊の楼に惜別して雨がざあざあ降っている。明日、帰船は朝の潮に乗って出航する。蒲車で書籍、琴を載せて孤島の国に帰る。まだ心は依然として中華に向いている。離亭で柳の枝を折って君を見送ることは忍びない。古駅の芙蓉が咲いているけど寂しく感じる。今、雄鶏が鳴いてと夜明けになろうとすることを恐れる。時間のある内に高い燭を燃やして徹夜して話そう。
【分析】
　題目からするとある雨が降る夜に陳元輔たちは、柔遠駅で明日、琉球に戻る蔡文敏のために送別会を開いたことが分かる。蔡文敏について詳しい資料がない。蔡文敏は勤学人として福州で留学していたか、あるいは柔遠駅で働いていた琉球役人であるかもしれない。『枕山楼詩集』に蔡文敏に関する詩はもう一首ある。[1]またこの詩は「蕭」という字の韻をふんでいる。「蕭」はひっそりとしたさまの意味である。この詩は韻まで自分の惜しい気持ちを表している。
【首聯】
「江樓惜別雨瀟瀟、明日歸帆趁早潮」
　「瀟瀟」とは風雨の激しい様子である。蔡文敏の帰国の前夜は、雨が激しかった。江楼の中で送別の宴会を開催しているが詩人の心に雨が降っているようにじめじめとしている。
　「歸帆」は帰国の船である。「趁早潮」は船が朝の満ち潮を利用して出港する意味である。一般的に琉球人は帰国や北京へ進貢するとき、まず柔遠駅の近くの瓊河の小寿橋で小船に乗って出発している。
〈頷聯〉
「蒲載琴書旋孤國、尚留魂夢寄中朝」
　「蒲」は蒲車のことである。古代、蒲草で馬車の輪をつつんでこのような馬車で賢者を載せる。この馬車を使える人は必ず賢才を持つ。とすると詩では蔡文敏は賢才の人だと言っている。「琴書」は琴と書物のことである。古代知識人は詩書五経を学習することが当たり前であるが、音楽を習得する必要もにあった。「中朝」は中華のことである。この句で蔡文敏は琉球に帰ったけど依然として中華に慕っていると言っている。
〈頸聯〉
「離亭楊柳愁攀折、古驛芙蓉嘆寂寥」
　「離亭」は古代、城外にちょっと離れた処の道のそばにある旅人が休憩する亭である。五里以上、短亭を設置して、十里以上は長亭を設置する。一般的に、古人は友人を送る時には、長亭までで、そこで別れなければならない。当然、陳元輔にとって「長亭」は瓊河にある小萬寿橋であろう。
　「芙蓉」はハスのことである。ハスの咲いている時期は五月、六月ごろである。つまり、蔡文敏は五月、六月ごろ帰国している。一般的に福州から琉球に帰る船は五月、六月ごろ出発する。「寂寥」

[1] 十二夜蔡文敏竹樓坐月遲竺天植不至

は静かでものさびしい様子である。「嘆寂寥」は蔡紹斎が琉球に帰ったからともに柔遠駅で蓮を見る人いなくて寂しいと嘆いたとことを言っている。

〈尾聯〉

「只恐雞鳴天欲曉、高燒銀燭話通宵」

「雞鳴」は雄鶏が鳴って夜明けを知らせることである。陳元輔は蔡文敏と一緒に交流する時間は今夜だけであるから非常に悩んでいる。そして今の時間を惜しんで蝋燭を点灯して徹夜して話そうと言っている（高燒銀燭話通宵）。

3　続いて宴飲に関する『中山詩文集』の中の作品を見てみる。

次の二首の詩は『中山詩文集』の中の曽夔、蔡鐸の作品である。「己巳元旦鴻臚禹慎齋先生招飲仙館時雨雪梅花盛開」「維楊舟次荷鴻臚禹慎齋先生惠詩越日分手次韻志感」という詩は同じく禹慎斎と呼ばれる人物と関わる。禹慎斎は中国絵画史において著名な絵師である。禹慎斎は琉球に確実に行っており、帰った後も琉球人との接触が続いている。それで中国琉球文人の交流の中で禹慎斎は中国絵画における一流の絵師として特殊な存在であると思われる。この二首の詩の分析及び禹慎斎についてそして詩との関連性を明らかにする。禹慎斎は本名が禹之鼎である。慎斎は禹之鼎の号で字は尚吉である。禹慎斎についての個人伝記は『重修興化県志』、『国朝画徴録』の記載が比較的に詳しい。『重修興化県志』と『国朝画徴録』の中の禹慎斎についての資料は以下の通りである。重なる内容は省略している。

> 禹之鼎字上吉、號慎齋、工人物兼山水花卉、初師藍瑛（中略）幼微賤落拓不遇。入都見賞于名公卿、康熙中授鴻臚寺序班。隨冊封史至琉球名播中外[1]。（禹之鼎の字は上吉、号は慎斎、人物、山水、花卉に巧み、最初は藍瑛に師事している。幼い頃、卑賤で不遇である。京城に来て名人士大夫に買われて、康熙年間に鴻臚寺序班に授けられた。冊封使に従って琉球に至って名を中外で揚げた。）
>
> 禹之鼎字上吉號慎齋江都人、（中略）嘗愛洞庭山色欲居之。出都朱竹垞作詩送之（中略）。<u>先是由戚畹策騎來召急甚、之鼎南人既不善騎加以奔促、固已委頓矣。至府拜謁未起即傳命寫小照、蒲伏連筆殊有煎茶博士之辱遂決歸計[2]。</u>（禹之鼎の字は上吉、号は慎斎、江都の人である。かつて洞庭の景色を愛して住もうと思っていた。京城から出た時に朱竹垞は詩を送った。貴族は馬で急いで禹之鼎を呼んでくることもある。禹之鼎は南方の人で馬に乗って速く走ることができない。やっと家に着いたが正式な要請をせずたちまち肖像を書けと命令された。禹之鼎は急いで絵を完成させることを余儀なくされる。禹之鼎はかなり屈辱と感じているので京城に離れたいと考えている）

以上の資料によると禹慎斎は肖像画に長けて山水、花鳥画にも優れている。独特な風格を持ち、一家をなす。絵画史の研究において禹慎斎は明末清初の環境において彼は肖像画を発展させて一種の以前では見られない、新しい絵画の形式である「行楽図」が誕生させた。[3]禹慎斎は卑しい家の出身で生涯貧困で不遇であった。北京に来てから名人、高官、王侯貴族に彼の絵画能力を買われて、康熙年

---

[1] 清・梁園棣修、鄭之僑、趙彦兪纂『重修興化縣志』（『中國地方志集成・江蘇府縣志輯』第 48 冊収録、江蘇古籍出版社、1991 年 6 月、253 頁、254 頁）

[2] 清・張庚『国朝画徴録』巻中（『續修四庫全書』1067 子部・藝術類収録、上海古籍出版社、1995 年、122 頁）

[3] 近藤秀実『波臣画派』吉林美術出版社 2003 年 1 月　110 頁

間、鴻臚寺序班を授けられた。実は彼は入京の前、揚州の江南地域で名を揚げていた。康熙 13 年、徐乾学、姜宸英、は汪懋麟の愛園に集会し、禹慎斎も誘われてこの集会に参加した。徐乾学、姜宸英、汪懋麟のために集会の場面を絵画で描いている。[1]徐乾学[2]、姜宸英、汪懋麟は康熙年間における一流の学者、書道家、詩人である。当然、彼たちも社会地位の高い高官である。康熙 13 年、禹慎斎は 27 歳にして徐乾学らのような名人士大夫と交遊もできており、絵画においていかに有名だったのかが窺える。康熙 18 年、19 年右左、高官友人の推薦で鴻臚寺の序班となって、康熙 20 年には暢春園で働いていた。[3]禹慎斎で北京に名を揚げた後、康熙 22 年、汪楫に選ばれて従客として琉球に行った。禹慎斎の名はさらに高まりて琉球でも知られた。帰国後、鴻臚寺司賓序班を授けられた。康熙 25 年、26 年に朝鮮、琉球、安南などの使節を招待する宴会で徐乾学（当時、礼部侍郎）は禹慎斎に各国の使節の肖像を描かせて「王会図」を作らせた。[4]康熙 27 年 10 月―康熙 28 年 2 月の間に琉球進貢使節の伴送官として曽夔、魏応伯らを福州へ護送している。これが「己巳元旦鴻臚禹慎齋先生招飲仙館時雨雪梅花盛開」という詩の背景である。禹慎斎の恩人といえる徐乾学は康熙 29 年春、辞官して、江南に戻り、同時に『大清一統志』の編纂工程も江南に移った。[5]『大清一統志』の中の大量の図を描く仕事に禹慎斎は最も適切な人手である。それで康熙 29 年、徐乾学の要請を受けて徐乾学について揚州に戻った。これが「維楊舟次荷鴻臚禹慎齋先生惠詩越日分手次韻志感」の背景である。揚州で福州に帰る進貢使節蔡鐸と出会うことができたのは、こうした背景があったからである。こういった背景を理解したうえで詩を分析して、禹慎斎と曽夔、蔡鐸との交流の一側面を見ることにしよう。

まず「己巳元旦鴻臚禹慎齋先生招飲仙館時雨雪梅花盛開」を分析してみる。

己巳元旦鴻臚禹慎齋先生招飲仙館時雨雪梅花盛開

己巳元旦鴻臚禹慎斎先生、仙館へ招飲し時雨雪梅花　盛開す

新開正朔拜熙朝　　新しく開く正朔　熙朝を拜す
猶喜名公折簡招　　猶ほ名公折簡し招を喜ぶごとし
草閣相逢慚下榻　　草閣に相い逢いて下榻に慚じ
仙樓携酒聽吹簫　　仙樓に酒を携えて吹蕭を聽く
寒梅堆徑香連屋　　寒梅徑に堆く　香り屋に連なり
飛雪漫天白過橋　　飛雪　天に漫ち　白　橋を過る
異地與君同是客　　異地　君と同じく是れ客なり
何妨潦倒共題蕉　　何ぞ潦倒して共に題蕉するを妨ぐ

【詩型】七言律詩
【押韻】平水簫韻

【通釈】
題目：己巳年の元旦、禹慎斎先生は仙館へ招かれてその時雨、雪が混ざって梅花が満開している

---

[1]原文：「徐原一翰林、與姜四溟文學集飲汪季角舍人愛園。原一之門人高生、亦與焉。適善畫者禹生在席、因受命作是圖。季角為記、屬余題其後。」（清・孫枝蔚『溉堂集』中、上海古籍出版社、1979 年 10 月、824 頁）
[2] 徐乾学（1631－1694）康熙 9 年進士探花、翰林院編修、日講起居注官、『明史』総裁官に歴して康熙 26 年刑部尚書に昇任された。退官後、『大清一統志』の編纂を司る。
[3] 胡芸「禹之鼎年譜」（『朶雲』第三集上海動画出版社、1982 年、208 頁）
[4] 清・呉暻『西齋集』巻 2（『清代詩文集彙編』第 209 冊収録、上海古籍出版社、2010 年、143 頁）
[5] 清・陳康祺『郎潛紀聞初筆二筆三筆』上冊巻 3、中華書局出版社、1984 年 3 月、58 頁。

太平隆盛の時代に頼って己巳新年を迎えることができる。もっと喜ばしいことは名公の禹慎斎先生が招待状を作って我々を招くことである。我々のこんなに粗末な処で禹氏斎先生と出会ってほんとに怠慢で恥ずかしい。禹氏斎先生が招いてくれたので私は琉球の美酒を携えて酒楼で吹簫を楽しみながら酒を飲もう。室外、道のそばに満開の梅花が堆くして、その香が部屋の中に満ちている。雪が空を覆うほうどう降り舞いて雪が橋に積もって河の対岸に蔓延している。異地で禹先生と同じく旅客だといえども一緒に酒を痛飲しながら詩を題することにぜんぜん影響にならない。

【分析】

曽夔は康熙 26 年 10 月―康熙康熙 28 年 5 月の間に進貢副使正議大夫として清に滞在していた。曽夔は康熙 26 年 10 月 1 日に福州に着いた。康熙 27 年 5 月 25 日に福州より北京に赴いて、康熙 28 年正月 25 日に福州に戻った。[1]帰国するまで曽益が進貢途中に見たこと、出会ったこと、それぞれの題材の詩を 14 首作り、それをまとめて『執圭堂詩草』となった。

題目の「己巳元旦」は康熙 28 年の正月一日である。曽夔はこの時、北京での公務を終えて福州に帰る途中である。福州に着くまで後 24 日間ある。曽夔は伴送官の禹慎齋と福州に行く途中に一緒に新年を迎えた。「招飲仙館」は「禹慎齋」が曽夔らを誘って酒楼あるいは旅館で酒宴を招待することである。

〈首聯〉

「新開正朔拜熙朝、猶喜名公折簡招」

「新開正朔」は新しい一年を迎えることである。「拜熙朝」は太平隆盛の時代に感謝するという意味である。「猶喜名公折簡招」は正月一日がもともとめでたいこと、さらに名望の高い禹慎斎より招待状を送ってもらって、より喜ばしい。一家団欒するべき正月に曽夔、魏応伯などの進貢使節はまだ帰る道に疲労して心ではがっかりしていると言わざるをえない。禹慎斎は彼らの気持ちを理解して熱意を込めて招待状を送って酒宴を開いた。たとえ曽夔、魏応伯らは酒楼に行く途中雨と雪が混ぜる天気でも欣然と約束に行く。康熙 21 年、禹慎斎は冊封正使汪楫に従客と選ばれて康熙 22 年 6 月一緒に琉球に赴いた。康熙 22 年 11 月 4 日、那覇港より出航して禹慎斎は三昼四夜の、猛烈な風、雨と遭遇して船が沈没するほうどうの危険情況を経験した。[2]禹慎斎は琉球の使節は一年一回の進貢の辛抱さを理解していたのであろう。

〈頷聯〉

「草閣相逢慚下榻、仙樓携酒聽吹簫」

「草閣」は帰る道での琉球使節の宿が粗末だと言っている。「慚下榻」は我々の宿がほんとに粗末で禹慎斎先生を招待することに堪えないと言いたい。ちょうどう禹慎斎先生は我らを要請したから琉球の美酒を携えて酒楼で楽器の演奏を聴きながら酒を楽しむ。「聽吹簫」から見るとこの酒楼は楽器の演奏も備えるのでかなりいい酒楼ではないか。高級な酒楼があって彼らはおそらく富裕な地域に到着した。かつこの時、曽夔らは福州まであと一か月の陸程があり、おそらく彼らは江南地域に着いたと思われる。

〈頸聯〉

「寒梅堆徑香連屋、飛雪漫天白過橋」

頸聯では作者が酒楼中に座って見た楼外の風景を描いている。「寒梅堆徑」は梅花が勢いよく咲いている様子を描いている。「堆徑」は梅花が道のそばに積もっている様子で梅花の旺盛な生命力を

---

[1] 那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、1980 年 3 月、392 頁。

[2] 曽煥棋『清代冊封使の研究』、榕樹書林、2005 年 3 月、94 頁。

表現している。「白過橋」は優れた言葉の表現である。雪が橋の上にどんどん積もって白い跡は徐々に対岸に蔓延している動態をうまく表現している。「堆徑」「白過橋」からすると曽夔の漢詩の能力は一般的ではない。

〈尾聯〉

「異地與君同是客、何妨潦倒共題蕉」

「異地與君同是客」は曽夔と禹慎斎が同じく異郷にいると言っている。禹慎斎は当時鴻臚寺司賓序班に任じられており、彼にとっての実家は北京にある。彼は伴奏官として琉球使節と一緒に福州に赴いている。「潦倒」は酔っぱらった様子である。「題蕉」は芭蕉の葉に詩を題するという意味で実は詩を作ることである。「何妨潦倒共題蕉」を通して曽夔、禹慎斎と酩酊の際に、詩を思う存分に詠唱する場面を想像できる。

維楊舟次荷鴻臚禹慎齋先生惠詩越日分手次韻志感　**維楊に舟を次めて鴻臚禹慎齋先生より詩を恵まれ、日を越して分手し次韻して感を志す**

勝地相逢握手宜　勝地相い逢いて手を握するに宜しい

何堪信宿便分離　何ぞ堪えん　信宿にして便ち分離す

異時古驛春深夜　異時　古驛　春深の夜

腸斷先生一紙詩　斷腸す先生の一紙詩

【詩型】七言絶句

【押韻】平水支韻

【通釈】

題目:船が揚州に泊まって鴻臚禹慎斎先生から詩をご寄贈賜て翌日別れるので贈詩の韻を次韻にして感想を記す。

景勝を誇る揚州で禹先生と出会うことはなんといいことであることか。しかし、僅か二、三日の停泊を経てまた出発して禹先生と別れる。後に福建に戻って春色が深い夜に柔遠駅の宿舎の中、禹先生の贈詩を開いて読むとまた先生の深く厚い情誼に感動させられる。

【分析】

題目の「維揚舟次」は蔡鐸らが揚州に着いたことをいう。禹慎斎は揚州で蔡鐸らの進貢の使節団と出会って二、三日の停泊を経って別れるまえに詩を送った。蔡鐸は禹慎斎の送った詩の韻を用いてこの詩を作った。「次韻」は詩を和する時、相手の詩の韻を使うだけではく、元の韻の順番もそのまま従う。例えば、禹慎斎が送った詩が二句目の末に「離」字、四句目の末に「詩」字を使っている。蔡鐸の和する詩も同じく二句目の末に「離」字を、四句目の末に「詩」字を使わないといけない。これは次韻である。この詩は康熙 28 年に禹慎斎が伴送官として揚州まで琉球の進貢使節を護送した時に作られた。一年前に、曽夔、魏応伯らを護送したこともある。禹慎斎は康熙年間、一流の絵師であるが従九品の「司賓序班」にしか任じられていない。かつ、貢生などの低い科挙の資格さえも得てないので歴史上の記録が簡略である。しかし彼の絵画の才能が早々に徐乾学に買われて徐乾学などの士大夫を通して当時一流の文人や高官と交流できている。

第一句目の「勝地相逢握手宜」において、「勝地」は揚州である。「勝地相逢」は揚州で蔡鐸らは進貢任務を終えて福州に戻る途中、揚州で禹慎斎と出会った。

第二句の「何堪信宿便分離」において、「信宿」は二、三日の事である。蔡鐸は揚州について二、

三日程度泊まってまた次の宿泊地に赴く。禹慎斎が揚州府興化県の人なので揚州で蔡鐸と出会ったことがおかしくない。しかし、どうして北京で司賓序班として働いている禹慎斎が揚州に現れるのか。上述したように、康熙 29 年、禹慎斎の恩人徐乾学は退官して蘇州に帰って『大清一統志』を編纂する工程を司っていた。禹慎斎の抜群の絵画才能がまさに使えるので禹慎斎を要請して『大清一統志』の図の部分を担当させた。それで揚州でちょうど福州に帰る蔡鐸と会えたのである。禹慎斎にとってもやっと解放されたようである。北京で生活していた時期、人物の肖像の方面は名を揚げて名士、貴族のうち禹慎斎に肖像を求める人が多く、さらに往々にして時間を制限して急いで肖像を完成させられることがあって、禹慎斎は鬱積して疲労がたまり北京より離れたかったのであろう[1]。徐乾学に従って江南に行くことでまさに禹慎斎は苦海から救われた。禹慎斎が揚州にいるのは故郷に帰省していたからである。

第三、四句の「異時古驛春深夜、斷腸先生一紙詩」において「斷腸」は蔡鐸が後柔遠駅に戻って禹慎斎先生の詩を読んでその詩の中に溢れる情誼に感動させられたことを言う。禹慎斎は蔡鐸より 2 歳若くて康熙 22 年琉球に来た時、漢語が優れる蔡鐸は冊封使を接待する役職を務めており、そのきかっけで禹慎斎と知り合ったのかもしれない。中国の一流の絵師、特に肖像画に優れていた人物が琉球を訪問しているのだから王侯貴族たちがこのチャンスを見逃すわけがない。禹慎斎は琉球に滞在している５ケ月の期間、琉球に関わる画を残していたと推測してもよいが、実物は確認できない。

康熙 34 年に徐乾学の逝去によって、禹慎斎は康熙 35 年北京に戻って亡くなるまで北京で名士の肖像を描くことで生活をしていた。

第二項　贈答

【４９】

送魏牧公入貢

簡書初捧謁天衢
喜有冰心映玉壺
夜月機絲逢織女
春風仙酒醉麻姑（中山有麻姑山）
京華國子新藜火（時送官生入成均）
滄海勞臣舊虎符
此去金臺瞻日近
燕山原是帝王都

魏牧公の入貢するを送る

簡書を初めて捧(ささ)げ天衢に謁す
冰心玉壺に映る有るを喜ぶ
夜月機絲織女に逢い
春風仙酒麻姑に醉う（中山に麻姑山有り）
京華國子新しき藜火（時に官生を送り成均に入る）
滄海勞臣舊き虎符
此より金臺に去きて日を瞻ること近く
燕山原より是れ帝王の都なり

【詩型】七言律詩
【音韻】平水虞韻

【通釈】

題目：魏牧公が入貢するのを送る。

初めて主君の割り符を携えて都に赴いて皇帝に謁見する。魏牧公は清らかな心を持ち、主君に対し

[1] 前掲清・張庚『国朝画徴録』巻中 122 頁。

て忠節で、こんな人物と出会って私は喜んでいる。天上の織女が作ったような美しい織物、春風の中に仙女を酔わせるような酒を持って来て皇帝に献上しようとする。今回の朝貢で北京の国子監に新しい勤勉な生徒を連れてきた。滄海を乗り越えて功労がある使臣たちは古い虎符を携えて来る。これから北京に行って皇帝を謁見する日がますます近づいてくる。北京は昔から中国の都である。

【分析】。

詩の題目から見るとこの詩は魏応伯[1]が北京に進貢する際に陳元輔が送ったものである。魏応伯は康熙 25 年（1686 年）2 月進貢正使となって 11 月に那覇を出航するが、大風に逢って、宮古島に漂着し、船を修理し終わった後、那覇に戻った。困難を克服して魏応伯たちは康熙 26 年 10 月 1 日にやっと福建に到着した。康熙 27 年 5 月 25 日、魏応伯は表を奉げて北京に赴く[2]。つまり、この詩は康熙 27 年 5 月 25 日前後に作ったものである。

〈首聯〉

「簡書初捧謁天衢、喜有冰心映玉壺」

「簡書」とは皇帝の命令などの書付である。詩の中には魏応伯が進貢正使となって中国の皇帝に朝貢することを言っている。「初捧」とは魏応伯が初めて入貢しに来たことを表す。「天衢」とは都への道を指す。

「冰心」とは氷のような清く澄んだ心である。唐の詩人、王昌齢の「芙蓉樓送辛漸」の中に「洛陽故人若問我、一片冰心在玉壺」という句ある。「冰心」「玉壺」は高潔な人柄、忠誠、忠節など道徳に譬えている。つまり魏応伯は主君に忠節にして、人柄が高潔であると言っている

〈頷聯〉

「夜月機絲逢織女、春風仙酒醉麻姑」

「織女」[3]と「麻姑」[4]は天上の仙女である。

夜、織女が作たった織物、麻姑を酔わせる春風仙酒。この句は琉球の貢物の素晴らしさを喩えている。陳元輔はこの句の後に中山には麻姑山あるという注をつけている。麻姑という言葉はかけことばとして使われている。陳元輔の自注で中山国には麻姑島（宮古島）がると書いてある。たぶん、この美酒が宮古島産と考えてもいいだろう。

〈頸聯〉

「京華國子新藜火、滄海勞臣舊虎符」

「京華国子」とは北京の国子監[5]のことを言っている。「藜火」という語は元もと張嘉の『拾遺記・後漢』によるものである。劉向（きょう）は成帝の末、天禄閣で書を校正して深く考え込む時、夜にある黄色

---

[1] 魏応伯、「向姓家譜（涌川家）」九世朝盛越來親方。童名真榮久佐、唐名應伯、號牧公行一。順治七年庚寅十二月一日生、原是向喬材越來里之子親雲上朝是之長男、其生母是向邦鼎豊見城按司朝行之女真鍋樽也。今因伯父朝誠無嗣、入承其統而為家督。於康熙三十七年戊寅九月初三日卒享年四十九。（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料三』資料篇第 1 巻 6、1980 年 3 月、179 頁）

[2] （康熙）二十五年丙寅二月初五日奉命為進貢正使耳目官與副使正議大夫曾夔砂邊親雲上北京大通事蔡應祥高良通事親雲上（北京大筆者武氏小灣親雲上喜治與力經氏渡真里筑登之親雲上兼寛）帶官生梁成楫國吉秀才阮維新天久秀才蔡文溥大田秀才鄭秉均大嶺秀才等於十一月十四日那霸開船到馬齒山十七日見風開洋。中略。。（康熙二十六年）十月初一日到閩。中略。（康熙二十七年）五月二十五日捧表赴京九月十七日到京。十月十三日捧敕出京於二十八年己巳正月二十二日回閩（中略）五月二十日歸國（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料三』資料篇第 1 巻 6、1980 年 3 月、179 頁、180 頁）

[3]天帝の娘という。織物に優れて、織た絹で天を飾るという。

[4] 麻姑、仙女の名。美貌で手のつめが長く鳥に似ていたという。

[5] 国子監、隋代以降、首都に置かれた教育機関を管轄する役所。明清代では教育そのものも行った。

の服を着ている老人が青い藜(あかざ)の杖(つえ)を持って閣に入った。劉向が暗い所で書を暗記するのを見て即ち藜の杖を燃やして灯とした。劉向に「洪范五行」の文を教えた。劉向がよく覚える為に服をつぶして教えた内容を記録した。夜明け、老人がさった[1]。この典故から転じて勉強に勉め励むことを意味する。「新藜火」は新しくやってきた官生を指す。

「勞臣」とは功労がある使臣である。「舊虎符」とは古い割り符である。「虎符」は銅で作った、虎の形をした割り符。徴兵と指揮の役を授けた証拠として、左半分を将軍に与え、右半分は朝廷で保管した。古い割り符は中国と琉球の蕃属関係が長く続いていることを示している。

〈尾聯〉

「此去金臺瞻日近、燕山原是帝王都」

「金臺」は北京のことである。中国の戦国時代（紀元前 474－紀元前 221）の燕国は現在の北京市の地域で国都を定めて、燕昭王の時、天下の賢才を公募するために黄金台を築き、千金をその台に置いた。それで金台は北京を指す。「瞻日」とは皇帝に謁見することの喩えである。

「燕山」とは北京あたりの山である。北京はまた燕京と呼ばれる。北京は後燕、遼、金、元、明、清という朝代の都をなっていた。それで六朝古都と呼ばれている。

この作品では頷聯（三、四句目）に注目したい。頷聯では、琉球の代表的な織物と酒を皇帝に貢ぐことを言っている。

【50】

送曽虞臣入貢　　曽虞臣の入貢を送る

曾聞三十六灣前（中山屬島有三十六）	曾て聞く三十六灣の前（中山屬島三十六有り）
一葉仙槎泛海天	一葉仙槎海天に泛ぶ
帳里授經傳禹貢	帳里經を授けて禹貢を傳え
漢邊奉使繼張騫	漢邊使を奉じて張騫を繼ぐ
金爐袖惹螭頭火	金爐　袖　惹く螭頭の火
錦纜風搖雉尾船	錦纜　風　揺らす雉尾船
寄語橋門新子弟　（時送官生入成均[2]）	寄語す橋門の新子弟に（時に官生を成均に入るを送る）
逢人好説大夫賢	人と逢わば　好く説け大夫の賢

【詩型】七言律詩

【押韻】平声先韻

【通釈】

嘗て三十六湾の前に、一隻の仙人の船は海と空の間に泛んでいたと聞いた。以前、曽は帷帳の中

[1] 原文、「劉向于成帝之末、校書天祿閣、專精覃思。夜有老人、著黄衣、執青藜杖、登閣而進。見暗中獨坐誦書。老父乃吹杖端、煙燃、因以見向、説開闢以前。向因授『洪范五行』之文、恐辭説繁廣忘之、乃裂裳及紳、以記其言。至曙而去、向問請姓名。雲：我是太一之精、天帝聞金卯之子有博學者、下而觀焉。乃出懐中竹牒、有天文地圖之書。“余略授子焉”。至向子歆、從向受其述、向亦不悟此人焉。」（晋・張嘉『拾遺記』巻六「後漢」＜『景印文文淵閣四庫全書』第 1042 册收録、台灣商務印書館、1976 年、1042-343 頁＞）

[2] 成均、国子監をいう。周の大學をいう。其の虧けたところを整成し、其の過不及を均平する意。一説に音樂の調子を整へる意に取って名づけるという。周代には五學を建て、中央を辟雍、南を成均、北を上庠、東を東序、西を瞽宗という。成均は大司樂が五學の教を總べ、樂德・樂語・樂舞を教へる所。因って又、五學の總稱となる。一説に五帝の學校という。

で書経の禹貢を学んでいた。曽益は漢の辺境に訪ねる張騫のように使節として朝貢に来た。きらびやかな袖は香炉の香りをまとっている。港で停泊している船は風の中で揺れて、錦の旗は風に向かって翻っている。（私は）国子監の新しい子弟に北京で人と会ったら常に曽大夫の賢才を薦めよと寄言した。

【分析】

題目から見るとこの詩は進貢副使曽益（夔）[1]が北京に朝貢する際に送ったものである。曽益は耳目官魏応伯（魏牧公）と共に副使の正議大夫として進貢した。北京へ出発日[2]は康熙 27 年 5 月 25 日である。

〈首聯〉

「曾聞三十六灣前、一葉仙槎泛海天」

「三十六湾」とは琉球の属島が三十六ありというものであり、琉球国のことを指す。「仙槎」とは神話の中に、海と天河の間に往来する渡船である。ここの仙槎は天朝である清国に行く琉球国の朝貢船を言っている。

この句は陳元輔が一隻の朝貢船は海にある琉球から天朝の中国にやって来ていると聞いいたと言っている。つまり、曽益たち来る前陳元輔はすでに彼らの来朝を知っていた。陳元輔は琉球人の師匠として、かなり自由に柔遠駅に出入りすることができる。彼は柔遠駅中の役人との日常の往来を通して様々な琉球に関する情報を得ることができる。いつ朝貢船が来るかとか、誰が来るとか事前に知ることができる環境にいたのである。

〈頚聯〉

「帳里授經傳禹貢、漢邊奉使繼張騫」

「授經」とは書経を授けることを言っている書経の中に「禹貢」[3]という篇がある。「禹貢」の内容は天下の地勢をまとめて述べているのみならず、中には治国の方略を含めている。例えば、「五服」の概念を述べている。天子の城を中心にして、まわりの五百里の地域は「甸服」と為って、千里の地域は「侯服」と為って、千五百里の地域は「綏服」と為って、二千里の地域は「要服」と為って、二千五百里の地域は「荒服」と為っている。北京から琉球国までは万里を超える。「五服」によれば琉球は「荒服」の以外の地域であり。きわめて遠いところである。でもこんなに遠くても中華皇帝の影響力は及んでいる。順調に海を乗り越えて北京に安全に到着する為に中国の山川形勢を知る必要がある。それで進貢する前に地理知識を学ばなければならない。当然進貢副使として曽夔は中国の状況を知る必要がある。恐らく曽夔との交流を通して陳元輔は曽益がよく中国の状況を知っていることを分かっていたのであろう。また、曽益は福州で留学した経験もあるので「帳里授經傳禹貢」は留学時の出来事でもあるだろう。「継張騫」は、曽益を使者の模範である張騫に準えている。張騫は前漢の人、武帝の時、中央アジアの大月氏に行き、十数年間にわたる旅行を通して、西域の情報を集めて中央政権と西域政権の連絡を親密にさせた。彼は東西交通の開拓者であった。

---

[1] 曾益、虞臣、六世紫金大夫（久米村の位階、従二品）。砂邊親方童名加路美初名永泰後改之為益又于康熙三十一年避王世孫御諱更之字子謙號禹臣行二順治二年乙酉十二月初六日午時生因志美無子嗣繼其家統康熙四十四年乙酉二月十七日午時卒享年六十一。（那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、1980 年 3 月、390 頁）

[2]前掲『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、392 頁。

[3] 禹貢、書經、夏書の篇名。真古文。禹、十年歳月を費して九州を巡視し疆界を正し、山澤を渡り、江河を疏し、水利、山川道里の遠近、地質の上下、物産の多寡を報告し、以て天下租税貢賦の法を定めたことを、史官が記録して此の篇を作った。いわゆる中國最古地理書

〈頷聯〉
「金爐袖惹螭頭火、錦纜風搖雉尾船」
「金爐」とは金色の「手炉」あるいはきらびやかな「手炉」である。「手炉」は手持ちの香炉である。中に香料を入れて衣服を燻(いぶ)す。「螭頭」は螭龍の属で黄色なもの、または龍の角の無いものである。よく、建築や工芸品の上に「螭」の形で飾る。それも「金爐」の精巧さを表す表現である。
「錦纜」とはきらびやかなロープである。「雉尾船」とは「雉尾扇」をたてた船のことである。「雉尾扇」は儀仗の一種で扇の周りを雉の羽で飾った大扇である。皇帝に進貢するからこの儀仗を使っている。進貢使節は北京へ赴く時、まず琉球館の近くの瓊河で船に乗って出発する。
〈尾聯〉
「寄語橋門新子弟、逢人好説大夫賢」
「橋門」とは太学の周辺は環水であり橋を架けて通過する。この「橋門」は国子監のことを言っている。「新子弟」とは康熙 27 年、琉球尚貞王時の官生である梁成楫、阮維新、蔡文溥らである。「大夫」とは曽夔のことを言っている。当時、曽夔は紫金大夫となっている。最後の句では陳元輔が新官生らに北京での留学期間に人々に会ったら曽大夫の賢才を薦めよと寄言している。

【５５】
題鄭克敘小影　　鄭克敘の小影に題す

海邦曾道使君賢　　海邦曽て言う使君の賢
風雅人誇是謫仙　　風雅にして人の誇る是れ謫仙と
落筆懶題鸚鵡賦　　落筆懶うく題す鸚鵡の賦
開函應續鷓鴣篇　　函を開けばまさに鷓鴣篇を續ぐべし
千秋嘯傲長松下　　千秋嘯傲す長松の下
三徑行吟蔓草邊　　三徑行吟す蔓草の邊
尺幅圖成秋末老　　尺幅の圖成り秋未だ老いず
東籬猶帶菊花煙　　東籬猶お菊花の煙を帯びるがごとし
【詩型】七言律詩
【押韻】平声先韻

【通釈】
題目：鄭克敘の肖像に題す。
昔から琉球国の友人は使君の賢能を私に言っている。詩人や雅かな人、みな鄭君が李白ような文才を持つと褒めている。適当に書いた文章も素晴らしくて鸚鵡賦に比肩する。筆箱を開けば鷓鴣篇に続くほどである。千年前の陶淵明は俗世を離れて気ままに暮らす、蔣詡(う)はつる草の傍に歩きながら詩を吟じる。秋の色は深くなってない季節に鄭君の小さい肖像にまみえた。東の籬にまだ菊が香っている。

【分析】
詩の題目から見ると、この詩は陳元輔が鄭克叙の「肖像」に題したものである。
〈首聯〉
「海邦曾道使君賢、風雅人誇是謫仙」

「海邦」は琉球のことである。「使君」は通常四方に派遣される天子の使者、勅使の尊称である。詩を贈る時、鄭克叙の身分は琉球の進貢役人であった。もし勤学人の身分であれば「使君」と呼ぶのはふさわしくない。「曾道」とあることから、鄭克叙が福州に来る前に陳元輔はすでに他の琉球人から彼について聞いていたと考えられる。「風雅」とは詩経の国風と大・小雅ことである。「風雅人」転じて詩人のことを指す。「謫仙」は唐代の詩人李白のことである。「風雅人誇是謫仙」の句では鄭克叙を李白に準えている。

〈頷聯〉

「落筆懶題鸚鵡賦、開函應續鷓鴣篇」

「懶」は無精の意味である。「懶題」とは適当に書くという意味である。「鸚鵡賦」は後漢末、禰衡(ねいこう)が書いた賦である。黄祖[1]の長男、黄射酒宴を行って賓客を招待した。宴会中、ある人「鸚鵡」をテーマとして禰衡[2]に賦を作るように願った。禰衡は筆を止めず一気に完成させた。この句では鄭克叙が禰衡のように短い時間内で素晴らしい詩を完成させられることを示している。「鸚鵡賦」の始めに鸚鵡の綺麗な外見を描いて禰衡は自分のことも鸚鵡に喩えている。禰衡は鸚鵡を借りて当時の社会で賢才が統治階級に控えられていることを批判している。

「開函」は筆箱を開くことである。転じて、作詩することでる。「鷓鴣篇」とは鷓鴣詩或いは鷓鴣詞のことである。鷓鴣詩は晩唐の詩人、鄭谷が作った作品である。彼が鷓鴣を描いた詩は有名なので鄭鷓鴣と称される。「鷓鴣詞」は唐教坊曲名である。鸚鵡賦と対になる鷓鴣篇は素晴らしい詩作ことを言っている。これも、鄭克叙の文才を褒めている。

〈頸聯〉

「千秋嘯傲長松下、三徑行吟蔓草邊」

「嘯傲」とはうそぶいてわがままな態度をとることである。陶淵明の「飲酒其七」に「嘯傲東軒下、聊複得此生」との句ある[3]。この句は、陳元輔が陶淵明を慕っていることを示す。

「三經」とは庭なかの道である。晉・陶淵明『歸去來兮辭』に「三徑就荒、松菊猶存」の句がある。『蒙求集注』によると蔣詡は嘗て舎前の竹下に三徑を開き隠遁して、仲羊・仲從だけと交遊している。[4]この典故から転じて三径は隠者の家を指す。詩の中の三径は隠逸者の家への道である。

〈尾聯〉

「尺幅圖成秋未老、東籬猶帶菊花煙」

「尺幅」は幾尺かの幅である。「秋未老」は秋の色が深くなっていない時期でつまり初秋のことである。鄭克叙[5]は康熙 21 年、勤学人として福建で 4 年間滞在していた。康熙 23 年の春、鄭克叙は程順則と共に北京に行った。其の年の冬に福州に戻り、ちょうど陳元輔も湖北省を遊歴し終えていた。康熙 23 年の冬、陳元輔は程順則、鄭克叙と出会えたはずである。鄭克叙は康熙 24 年 7 月に琉球に戻っていることから、陳元輔は鄭克叙と交遊を持てたのは一年にも満たなかった。この詩は鄭克叙の存留期間に作られたものと考えたほうがよい。鄭克叙は康熙 25 年 2 月ごろ存留通事と任命された。康

---

[1] 黄祖、後漢末の将軍、劉表は荊州牧を任じる時、黄祖は江夏太守と為る。

[2] 禰衡、後漢、般の人、字は正平。少くして才辨あり、性、剛傲、孔融・楊修と善く交った。曹操以て鼓吏としたが、其の狂傲を怒り、劉表に送り與う。表、又、其の侮慢を容れることができず、黄祖に與え、後卒に殺された。尤も文筆に長じ、筆を執れば千言立ちどころに成ったという。(『後漢書』巻 80、列伝第 70 下、中華書局出版、1965 年 5 月より要約した)

[3]「飲酒其七」、秋菊有佳色、裛露掇其英。汎此忘憂物、遠我遺世情。一觴雖獨進、杯盡壺自傾。日入群動息、歸鳥趨林鳴。嘯傲東軒下、聊複得此生。(禄欽立校注『陶淵明集』、中華書局出版社、1979 年 5 月、90 頁)

[4]前掲、李瀚注『蒙求集注』、36 頁。

[5] 前掲、『那覇市史・家譜資料二』資料篇第 1 巻 6、671 頁。

熙 26 年 10 月から康熙 28 年 5 月まで福州にいるが康熙 27 年 8 月 21 日、温州に漂着した琉球人を迎えるために出張していた。この期間において陳元輔はこの詩を作って鄭克叙に送ったはずである。康熙 27 年（1688）の 8 月からの温州への出張前に作られたと考えるのが適切であろう。
「東籬」とは家の東にある籬のことである。陶淵明の「飲酒・其五」[1]の「采菊東籬下，悠然見南山」という句がある。家の東にある籬の傍に菊が満開しいる。「菊花煙」は菊の影である。「東籬猶帯菊花煙」は陶淵明の菊花を嗜む典故を用いて詩を作る時、まだ初秋で菊の花が満開していることを表したのであろう。

【78】

吾兄詩酒繼陶君為中山程寵文賦	吾の兄詩酒陶君を繼ぎ中山程寵文の為に賦す
情如潭水氣如云	情潭水の如く氣雲の如し
栗里編年更有君	栗里に編年し更に君有り
常惜漢書供下酒	常に漢書を惜しみ下酒に供し
多因秦火細論文	多く秦火に因りて細やかに文を論ずる
一樽留客逢秋早	一樽客を留めて秋に早に逢い
五斗勞人説夜分	五斗人を勞(いたわ)り夜分に説う
他日武陵溪上過	他日武陵の溪上を過り
好看桃葉落繽紛	好く桃葉繽紛に落ちるを看る

【詩型】七言律詩
【押韻】平声文韵

【通釈】
題目、私の友（程順則）詩に優れ、酒を好み、陶淵明を受け継いで中山国の程寵文の為に詩を賦する
　私二人の友情は桃花潭水のように深くて気勢は雲のように博大である。栗里で程君はよく史書を翻す。常に漢書を酒のさかなにする蘇舜欽のために讃嘆している。秦の焚書令によって大量の典籍が失われてまた私と細かく文を論証していた。この早秋の時期、酒一杯を以て客を留めようとする。陶淵明の「五斗酒の為に腰を折らず」について、夜半まで話し込む。他日、武陵の渓谷を過る時に桃の葉がはらはら落ちるがよく見えるだろう。
【分析】
　詩の題目中の「吾兄詩酒繼陶君」は李白の「別中都明府兄」の「吾兄詩酒繼陶君、試宰中都天下聞」[2]の句をそのまま引用している。その意味は貴君が陶淵明の遺風を受け継いで詩酒で中都を治めることが世に知られるという意味である。そして、この「吾兄」は陳元輔が程順則に敬意を示している。程順則は詩に優れ酒を好むという陶淵明の遺風を受け継いだことを言う。それで陳元輔はわざわざ程順則のためにこの詩を作った。
　「情如潭水氣如云、栗里編年更有君」

[1]「飲酒詩」其五、結蘆在人境，而無車馬喧。問君何能爾，心遠地自偏。采菊東籬下，悠然見南山。山氣日夕佳，飛鳥相與還。此中有真意，欲辨已忘言。（禄欽立校注『陶淵明集』、中華書局出版社、1979 年 5 月、89 頁）
[2] 李白「別中都明府兄」「吾兄詩酒繼陶君，試宰中都天下聞。東樓喜奉連枝会，南陌愁為落葉分。城隅淥水明秋日，海上青山隔暮雲，取醉不辭留夜月。鴈行中斷惜離羣。」（曹寅撰『全唐詩』巻 174 、中華書局出版社、1979 年 8 月、1779 頁）

「情水潭水」は李白の「贈汪倫」中の「桃花潭水深千呎、不及汪倫贈我情」を引用したものである。『隨園詩話』の記述[1]によると、李白は涇県の桃花潭で遊ぶ時、付近の「賈村」の汪倫は常に自分で作った美酒で李白を招待した。二人は深い友誼を結んだ。李白が船で桃花潭を離れる時、岸から歌声が伝わって来る。汪倫と他人たちは歌いながら李白を送別していた。李白は非常に感動してこの詩を作った。後世では李白と汪倫のできごとがよい友情の手本とみなした。

「栗里」は陶淵明が退官した後の隠遁するところである。現在、中国江西省の廬山に在る。転じて、「栗里」は隠遁する処である。程順則にとって隠遁する場所は書斎であると言ってもよいだろう。「編年」は史書のことである。つまり程順則はよく書斎の中で隠して一途に史書を読んでいると言っている

「常惜漢書供下酒、多因秦火細論文」

この句は「漢書下酒」の典故を言っている。宋の蘇舜欽（字は子美）は酒を好むことがあって彼が岳父の家で泊まる時、毎晩、一斗の酒を飲みながら読書する。岳父はおかしいと感じて人を遣わして蘇舜欽を監視する。なるほど、蘇舜欽は『漢書』の「張良伝」を読んでいる。「張良與客狙擊秦皇帝，誤中副車(張良は刺客とともに秦皇帝を博浪沙中で狙撃したが、誤って副車＜鉄つち＞にあたった。)」の処を読むと手をたたきながら「惜哉，擊之不中（ああ残念、撃ち当たらなかった)」と言い、遂に満々一杯を飲み切った。また、「良曰：始臣起下邳，與上會於留，此天授陛下（張良は曰く臣が下邳で決起するから陛下と陳留で会盟した。これは天が陛下に授けたことだ)」の処を読むと「君臣相與，其難如此（君主と臣下の関係で難しいことはこれだ)」と言ってまた満々一杯を飲んだ。岳父は其のことを聞いて「有如此下酒物，一斗不足多也（こういうものを酒のさかなにして一斗の量は多くない)」と言った。この典故を使って程順則が蘇舜欽のように一途に史書を読んで勉強する姿を描いている。

「秦火」は秦の始皇帝が民間の書物を焼きはらうことである。秦は多くの書物を焼いたため後人は先人の文章を読むとき非常に難しく、細かく考証しなければならない。

頷聯において、程順則は常に史書を一途に読んで分からないところを細かく考証していることを言っている。

「一樽留客逢秋早、五斗勞人説夜分」

「一樽留客逢秋早」は一樽酒で客（陳元輔）が留まってもちょっと話し合おうと言っている。

「五斗勞人」とは『晉書・陶淵明伝』に「吾不能為五斗米折腰，拳拳事鄉里小人邪[2]（高々五斗ばかりの扶持のために腰を折って若僧にべこべこするのは嫌だ)」とある故事である。陶淵明は五斗の米の為に郷の小官に腰が折れてはいけないと言った。そして、いっそ官印を掛けて退官した。陳元輔と程順則は陶淵明の詩や歴史上の隠逸者をめぐって夜中まで話した。

「他日五陵溪上過、好看桃花落繽紛」

尾聯は陶淵明の「桃花源記」を言っている。「武陵溪」は「桃源郷」の近くにある河である。「桃花落繽紛」は「桃源郷」の入り口のあたりに桃花が乱れにふるまう場面を言う。最後の句は陳程二人は徹夜で陶淵明をめぐって討論したことをまとめている。

---

[1]「唐時汪倫者，涇川豪士也，聞李白將至，修書迎之，詭云：先生好游乎？此地有十里桃花。先生好飲乎？此地有萬家酒店。李欣然至。乃告云：桃花者，潭水名也，并無桃花。萬家者，店主人姓萬也，并無萬家酒店。李大笑。款留數日，贈名馬八匹，官錦十端，爾親送之。李白感其意，作「桃花潭」絶句一首。」（清・袁枚著、郭紹虞、羅根澤主編『隨園詩話』補遺卷六、人民文学出版社、1982 年 9 月、715 頁）

[2] 房玄齡『晋書』第 8 冊第 94 巻、中華書局出版社、1974 年 11 月、2460 頁。

第三項　作詩の会

【60】

冬夜王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字

冬夜王孔錫王邦菴と梁得聲の山楼に集まり夜話し溪字を分けるを得る

草閣霜深夜　草閣霜深き夜
愁聞旅雁啼　愁いに聞く旅雁の啼くを
潮來孤棹急　潮來りて孤棹急ぎ
烟鎖萬山低　烟を鎖(とざ)し萬山低る
平野蕭蕭竹　平野蕭蕭たる竹
寒蘆曲曲溪　寒蘆曲曲たる溪
談心知舌短　心を談りて舌短きを知り
不覺月沉西　月西に沉むを覺えず
古驛踈林晚　古驛踈(まば)らな林晚く
霜深鳥倦啼　霜深い鳥啼くを倦(あ)く
南天連野闊　南天　野に連なりて闊く
北斗落城低　北斗　城に落ちて低し
樓下三人榻　樓下三人の榻
潮平半夜溪　潮平たい半夜の溪
清鐘何處寺　清鐘何處の寺
疑在白雲西　疑う白雲西に在るを

【詩型】排律

【押韻】平水齊韻

【通釈】

題目：冬の夜、王孔錫、王邦菴梁得声の山楼に集(つど)い、夜に話し、溪韻を得て詩を作る。

粗末な楼閣で霜が深い夜にいる。旅の雁が鳴くのを悲しい気持ちで聞いている。潮が湧き起こったら船は急いで出航する。潮が満ちてきて、一隻の船が急いでいる。山が霧に囲まれて低く見えるようである。平野に蕭々と竹がなびいている。枯れた芦に曲がりくねった川が流れている。心中を打ち明けようとしたけど有る気持ちや感情が言葉で表現できない。月が西に沈むのを覚えず（気づかなかった）。古い柔遠駅、疎らな森は夜色が深い。霜が深くて鳥が鳴かなくなった。遠くのところを眺めて天と地が広くに接する。南天と広い原野が連なる。北斗星は城壁と同じ高さになったようである。楼の下に椅子が三つ並べている。潮が凪(な)いだ深夜の川。澄んだ鐘音はどこの寺のものか、たぶん雲の西にある寺からだろう。

【分析】

題目から、冬の夜、王孔錫、王邦菴、陳元輔などの人は梁得声の書斎に集って作詩したことが分かる。王登瀛もこの夜、「冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻」を作った。この詩は王登瀛の『柔遠駅草』に収録されている。その陳元輔、王登瀛らは梁得声の書斎に集まった夜、梁得済は参加していなかった。おそらく梁得済はすでに帰国したのであろう。梁得済は康熙 27 年 5 月帰国したが梁得

声はまだ康熙 29 年まで福州に残っていた。また、王登瀛が康熙 27 年ごろ暫く福州にいるのでこの詩は康熙 27 年の冬に作られたと考えてもよいであろう。

「草閣霜深夜、愁聞旅雁啼」

「霜深」は陳元輔、王登瀛らが梁得声の書斎に集会した夜が寒かったとのことを言っている。憂えた雁の鳴き声が聞こえる。雁は越冬するために、北より南に移す。南にある福州雁にとって異郷である。

「潮來孤棹急、烟鎖萬山低」

「潮来」は潮が満ちるとの意味である。題目からするとこの景色は夜の景色である。夜の満潮は「汐」という。昼の満潮は「潮」と言う。「潮來孤棹急」は夜になってもまだ満潮を利用して出航や帰港の船が急いで駕駛している場面を描いている。

「煙鎖」は霧や靄が山を囲んで、山頂が露出して、山が低くなったようであることをいう。

「平野蕭蕭竹、寒蘆曲曲溪」

「蕭蕭」疎らでうすいさまである。「寒蘆」は枯れた蘆である。平原の疎らな竹林、曲がりくねっている港、枯れた蘆は冬の蕭条な画面を構成している。

「談心知舌短、不覺月沉西」

「談心」は深く親しい交流することである。「舌短」は言い切れないとの意味である。陳元輔たちは深く親しく語り合っても話し切れないほどであることをいう。月は徐々に西に沈んでいることも知らない。陳元輔たちは深夜になってもまだ話し合い続いていたことが分かる。その、時、福州城の門もおそらく閉ざされたであろう。そうすると陳元輔、王登菴は柔遠駅に一晩泊まるしかない。

「古驛踈林晚、霜深鳥倦啼」

「古驛」は柔遠駅のことである。「疎林」は疎らな林である。「鳥倦啼」は鳥も鳴かなくなったことである。深夜になってさらに冷え込み鳥が鳴かない。この句は夜の深さと寒さを表す。

「南天連野闊、北斗落城低」

南の空は原野と連なり、北斗星が城壁と同じ高さになった。北斗星は柄杓に見える。北極星を巡って回っている。冬は柄杓の柄は北を指す。つまり、北斗星は永遠空での位置が変わらい。城壁と同じ高さになったのは、原野が非常にひろいから錯覚してしまった。この句では幅広い画面を描いている。

「樓下三人榻、潮平半夜溪」

「楼下三人」は王孔錫、陳元輔、王登瀛の三人である。「潮平」は波が穏やかなことである。先の「潮来」と現在の「潮平」この詩には時間の変化も含めている。瓊河の潮が満ちる時から、潮が穏やかになるまで陳元輔らの交流はずいぶん遅くまで続いている。

〈清鐘何處寺、疑在白雲西〉

「清鐘」は人を清める鐘の音である。寺院から伝わって来る鐘の音である。「白雲」は夜が明けたことを示す。詩は潮来、月沉西、潮平、白雲の言葉を通して夕暮れから夜明けまでの時間の変化を反映している。この夜、陳元輔、王登瀛、王孔錫、梁得声は徹夜にして詩を作って話し合いをしたものと思われる。

冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻

冬夜陳昌其王孔錫梁得聲の山樓に集まりて夜話して和韻す

其一　　其の一

寂寂寒霜夜　　寂寂たる寒霜の夜
蕭蕭鳥罷啼　　蕭蕭として鳥啼くを罷む
雲歸峰失翠　　雲歸りて峰翠を失い
煙抹樹全低　　煙抹して樹全べて低し
修竹開三徑　　修竹三徑に開き
沙鷗白半溪　　沙鷗半溪に白し
詩情與畫意　　詩情畫意と與にし
盡在驛樓西　　盡く驛樓の西に在り
【詩型】五言律詩
【押韻】平水斉韻

【通釈】
題目：冬の夜陳昌其、王孔錫と梁得声の山楼で話して韻を和する。
　静かな寒い夜、寂しくて鳥が鳴くことをやめた。雲は峰をめぐらして山の緑を隠してしまった。煙にかかっている木が低くなったようである。竹の枝を整えて三径を切り開いている。多くの白い水鳥が川に棲んでおり、河が半分白くなってきた。ここで詩情と画意はすべて駅楼西で展開している。
〈分析〉
　詩の題目から見ると、冬の夜、陳元輔、王孔錫、王登瀛らは柔遠駅で梁得声の書斎に集合して話ながら詩文をやり取りした。この冬夜の集会はある種の勉強会であろう。陳元輔の『枕山楼詩集』にある「冬夜王孔錫王邦菴集梁得聲山樓夜話分得溪字」の詩は同じ夜に作ったものである。つまり、この詩も康熙 27 年の冬に作ったと考えられる。
「寂寂寒霜夜、蕭蕭鳥罷啼」
「寂寂」はひっそりとして静かなさまである。「蕭蕭」は風のさびしく吹く音である。この句において、霜が降る夜に寒くて風また吹いており、鳥も鳴かない場面を描いている。
「雲歸峰失翠、煙抹樹全低」
　「雲歸」は雲が帰ることで夜になったことを表している。「峰失翠」は雲が山の緑を遮っていることを言っている。「煙抹樹全低」は木が靄にがかかって低く見えるという意味である
「修竹開三徑、沙鷗白半溪」
　「修竹」は高く成長した竹を指し、竹が茂っている様子を言う。「三徑」は隠者の庭園を指す（三徑について他の詩ですでに紹介した)。「沙鷗白半溪」は多く白いカモメが瓊河に棲んで一目見渡せば川が半分白になっている場面を描いている。
「詩情與畫意、盡在驛樓西」
　「詩情與畫意」は環境や風景に含まれる境地である。この句において、柔遠駅楼の西にある風景を見て詩や水墨画の境地を感じている。

其二　　其の二
古驛草萋萋　　古驛の草萋萋(せい)たり
嚴城鳥夜啼　　嚴城鳥夜に啼く
月憐山色淡　　月山色の淡きを憐れみ
風剪雁翎低　　風雁翎低きを剪る

短榻眠高士　　短き榻に高士眠り
疎鐘度遠溪　　疎(うと)き鐘遠溪を度る
喜留銀燭在　　銀燭を留める在るを喜び
相與話窗西　　相與(そうよ)して窗の西に話す
【詩型】七言律詩
【押韻】平水斉韻

【通釈】
題目：その二
　古駅の草木が枯れた。厳しく警備する城で夜に鳥が鳴いている。月が山の枯れた色を憐れんで風が強く吹いて雁が高く飛べない。短いベッドに高士が居眠りしており疎い鐘音が遠い川から伝わって来る。喜んでいるのは蝋燭をまだ残して窓口の西で相い語り会うことができることである。
【分析】
「古驛草萋萋、嚴城鳥夜啼」
　「萋萋」は草が枯れた様を言う。「嚴城」は厳しく警備している福州城を指す。この句で柔遠駅の草が枯れて夜の福州城は厳しく警備されて鳥の鳴き声だけ聞こえるという場面を描いている。
「月憐山色淡、風剪雁翎低」
　「月憐山色淡」は山の色が薄くて月でさえも憐れむという意味である。「風剪」は風の強さを表す。「風剪雁翎低」は風が強くて雁も高く飛べないということを表す。つまり、この夜に柔遠駅近くの景色は蕭条としていたようである。
「短榻眠高士、疎鐘度遠溪」
　「高士」は精神や行いの高潔な人。転じて、この集会に出ている人を指す。「疎鐘」はまばらな鐘音で深夜になることを言う。この句では深夜になってある「高士」が椅子に座ったまま居眠りして、遠くからまばらな鐘音が伝わってくると言う。つまり、この句は深夜になることを言う。
「喜留銀燭在、相與話窗西」
「喜留銀燭在」は蝋燭があるから交流が夜の何時まで続いても構わないことを表している。「相與話窗西」は陳元輔、王登瀛、王孔錫、梁得声が窓の西にて語り合っていることを言う。必ずしも四人は窓の西にて語りあっているわけではないが、「窗西」とは月が西に傾いていっていることを言い、転じて深夜になったことを表している。古典漢詩において「西窗」はよく用いられており、月が西に傾いている状況や深夜となったことなどの「意象（ムード)」を作る

【８０】
夏杪同諸子雪堂夜飲得秋字　　夏杪諸子と同に雪堂に夜飲し秋字を得たり

客裏忘為客　　客裏客と為るを忘れ
銜杯共倡酬　　杯を銜みて共に倡酬す
鐘聲潮落夜　　鐘聲潮落の夜
天氣晩來秋　　天氣晩來の秋
香水歸蓮渚　　香水蓮渚に歸り
閒雲上石樓　　閒雲石樓に上る

祇愁更漏促　　祇だ憂う更漏の促すを
秉燭好同遊　　燭(そく)を秉りて好く同に游ばん

【詩型】五言律詩
【押韻】平声尤韵

【通釈】
題目：晩夏の夜、諸君子と雪堂にて酒を飲んで秋を得て詩を作る。
　異郷に居るのに客居することを忘れる。酒を飲みながら諸君子と共に詩を詠唱する。鐘が鳴り潮が引いていく夜になって天気がやっと秋のように涼しくなった。香しい水は蓮池から漂い、のどかな雲は石楼にかかる。ただ時間が早く進むことに悩んでいるけれども明かりを点灯して大いに共に遊ぼう。
【分析】
　題目から、夏の末に夜に陳元輔は程順則の書斎で集会して酒を飲みながら作詩会を行ったことが分かる。詩題の諸君子からすると陳元輔、程順則以外にも、他の勤学人、福州文人も作詩会に参加していたであろう。この詩は尤韻を踏まえて作られている。普通では詩題を「夏杪同諸子雪堂夜飲得尤字」とするはずであるが、この詩題では「得秋字」となっている。しかし、秋字は尤韻に属すので間違っているとは言えない。
〈首聯〉
　「客里忘為客、銜杯共倡酬」
　「客里」は程順則たち琉球の友人が福州に仮住まいしていることを指す。「忘為客」は自分が異郷で生活していることを忘れるとの意味である。どうして程順則らは異郷にいるのに自分が他郷で生活すると感じられないのか。詩の二句目がその答えである。陳元輔をはじめとする福州文人と柔遠駅で集会して、酒をのみながら互いに詩をやり取りしている。非常に楽しいことであるからこそ、程順則はこの盛り上がる雰囲気に染められて郷愁を忘れているのである。
〈頷聯〉
「鐘聲潮落夜、天氣晩來秋」
「鐘聲潮落」は天が暗くなったばかりの時である。寺院の鐘は一日の中で、夜明けの時と夕方の時に鳴らされる。引き潮も夕方から始まる。太陽が西に沈んで徐々に暗くなった。そして、天気がやっと秋のように涼しくなった。この「天氣晩來秋」との句は王維[1]の「山居秋暝」の句[2]をそのまま引用している。そのまま引用しているが、詩の静かなゆったりとした基調とぴったりと合っている。
〈頸聯〉
「香水歸蓮渚、閒雲上石樓」
　なぜ河水は「香水」と呼ばれるのか。蓮の香りが河水に浸染したからである。「蓮渚」は蓮洲のことである。「香水」は川中の蓮洲に退いた。この句は潮が引くことを言っている。
「閒雲上石樓」において「閒雲」はゆったりとした雲のことである。雲はゆったりと西に漂って石楼の処に至った。夜が徐々に深くなることを言っている。

---

[1] 王維、唐の詩人。太原の人。字は摩詰。玄宗に仕えたが、安祿山の乱でとらわれ、のち肅宗に用いられて尚書右丞になった。その詩は多く山水の美を歌い脱俗のおもむきがあり、詩中に画ありと評される。また、山水画の名手で南画の祖とおかれる。
[2]「山居秋暝」空山新雨后、天氣晩來秋。明月松間照、清泉石上流。竹喧歸浣女、蓮動下漁舟。隨意春芳歇、王孫可自留（王友懐『王維詩選注』、陝西人民出版社、1988 年 9 月、65 頁）

〈尾聯〉
「只愁更漏促、秉燭好同遊」
「更漏」は水時計である。壺の底に穴を開いて水を入れ、中に漏箭（目盛りのついた矢）を立てもれ出た水の量を矢の目盛りで知って時刻をはかる。「只愁更漏促」はただ時間が速く進んでいることを悩んでいることを言っている。
「古詩十九首・其十五」には「晝短苦夜長、何不秉燭游[1]」の句がある。唐の李白の「春夜宴徒弟桃李園序」に「而浮生若夢、為歡幾何、古人秉燭夜游、良有以也[2]」の句がある。このことからすると「秉燭夜游」は古人にとって雅やかな活動である。時間が速く進むことに気にしないで、ともし火を灯してともに遊ぶ。
【112】
元夕宴集程寵文立雪堂分得歡字　元夕、程寵文の立雪堂に宴集し、分けて歡の字を得たり

火樹因人暖	火樹人に因りて暖かく
春星帶雪寒	春星雪を帶びて寒し
霞杯傾琥珀	霞杯琥珀を傾け
冰簟繡琅玕	冰簟琅玕を繡る
賓主東南美	賓主東南の美
江天上下看	江天上下を看る
良宵頻度曲	良宵頻りに度る曲
何處不稱歡	何れの處か歡を稱わさざらんや

【詩型】五言律詩
【押韻】平水歡韻

【通釈】
題目：元夕に宴で程寵文の立雪堂に集まり、それぞれが歓の韻の詩を作る。
ランタンの明かりに人が集まって温かい。しかし外は春の夜なのに、冬のような寒さを伴っている。酒杯に琥珀色の美酒を傾け、竹の容器に美玉を飾り付けている。賓客、主人、みんな東南地域の素晴らしい人である。美しい夜にみんな詩文をやり取りする。素晴らしい夜に、いくつも曲を作る。どして喜ばしい気持ちにならないことがあろうか。

【分析】
題目から、正月十五日の夜、陳元輔たちは程順則の書斎で宴会を開いたことが分かる。宴中、「鬮韻作詩」をともに行った。陳元輔は「歓」という韻が当たって詩を作った。「元夕」は旧暦の正月十五日の夜である。正月十五日は元宵節またランタン節と呼ばれる。この日、さまざまな様式のランタンが飾ってある。ランタンに「灯謎」と呼ばれる謎言葉が書いてある。
〈首聯〉
「火樹因人暖、春星帶雪寒　」

[1] 蕭統譔、李善注『文選』巻 29（『景印文淵閣四庫全書』第 1329 冊収録、台灣商務印書館、1976 年、508 頁）
[2] 唐・李白『李太白集』第 6 冊（王雲五編『萬有文庫』第一集収録、商務印書館、1929 年 10 月、97 頁）

「火樹」はランタンや或いは花火の光が木に映っている様子の喩である。「火樹は」唐、蘇味道の「正月十五夜」に「火樹銀花合、星橋鐵鎖開」[1]とある句に由来したものである。「因人暖」は人がいっぱい集まっているから心を暖かくするということである。
「春星帶雪寒」において、「春星」は春の星である。春節を過ごして春が近づいてくるものの、まだ冬の寒さが続いている。
〈頷聯〉
「霞杯傾琥珀、冰簟繡琅玕」
「霞杯」は美酒を入れている酒杯である。「琥珀」は琥珀色の美酒である。
「冰簟繡琅玕」において、「簟」は竹制の丸い容器である。「冰簟」は清らかな容器である。精工な容器を美しい玉で飾っている。
「頷聯」
「賓主東南美、江天上下看」
晉潘尼「贈陸機出為呉王郎中令詩」の「東南之美，曩唯延州。顯允陸生，於今鮮儔」から「東南美」は東南の素晴らしい人物である。この詩で集会に参加した人たちを褒めている。
「江天上下看」において、「看」は四声にすれば「歡」と韻を踏まないから韻を踏むようにこの「看」を一声で読む。「江天上下看」の句は集会で作った詩の内容を形容する。江天は詩の内容気勢は広大であることを表す。
〈尾聯〉
「良宵頻度曲、何處不稱歡」
「度曲」は作曲することである。詩の中に詩を作ることを指す。よい夜にみんな頻りに詩をやり取りにする。「何處不」はどこでもという意味である。つまり、よい日に友人と酒を飲んで詩を唱和すればどこ居ても楽しいということである。

第四項　交流の側面

【５９】

十二夜蔡文敏竹樓坐月遲竺天植不至	**十二夜蔡文敏の竹樓に坐すも月遲れ竺天植至らず**
疑是王家舊竹樓	疑うらくは是れ王家の舊竹樓
樓前風涌大江秋	樓前 風 涌く大江の秋
蘆花曲港藏漁火	蘆花曲港漁(りょう)火を藏し
楊柳空村繫釣舟	楊柳 空村 釣舟を繫(つな)ぐ
明月不隨流水去	明月流水の去くに隨わず
浮雲盡向海門收	浮雲盡(ことごと)く海門に向いて收まる
清光此夜人何處	清光此の夜人何(いず)れの處ぞ
寂寂南州一榻留	寂寂たる南州に一榻を留む

【詩型】七言律詩
【押韻】平声尤韻

【通釈】

[1] 曹寅撰『全唐詩』巻 65、中華書局出版社、1979 年 8 月、752 頁。

題目：十二日の夜蔡文敏の竹楼に座すも月上り遅く、竺天植は至らず。

目の前の建物は琅琊王氏の嘗ての竹楼であると疑っている。楼の前、風は大江に渡って強く吹いてくると秋を感じる。曲がっている漁港で繁茂しているアシに小さな漁船の火が見えつ隠れつしている。柳には寒村の釣り船が繋留している。明月は流れる川に随って去ることもなく。浮き雲は悉く海門（河口）に向かって集まる。明るい月光の今夜、友人がどこにいるのやら。うら寂しい南州（琉球館）に一つのこしかけが残っている。

【分析】

詩の題目から、十二日の夜、陳元輔が蔡文敏の竹楼で集会して竺天植を待っていたが、竺天植が来なかったことが分かる。蔡文敏については詳しい資料がない。

〈首聯〉

「疑是王家舊竹樓、樓前風涌大江秋」

「竹楼」は蔡文敏の住む所である。その「王家舊竹樓」は琅琊王氏の竹楼との意味である。瑯琊王氏とは王敦、王導を代表する東晋の門閥士族の王氏である。王導が司馬睿を推戴して皇帝の位に即することに功績があって、その兄弟王敦も軍権を握って当時「王と馬と天下を共にす」との言葉が流れていた。瑯琊王氏がいかに勢力を持っていたのかがうかがえる。瑯琊王氏は文化において人材、大家が輩出していた。それで、ここの王家の竹楼とは蔡文敏の竹楼が豪華であると言っているわけではなく、その竹楼に住んでいる蔡文敏は文才に優れていると言いたいのである。

「風湧」は風が強く吹いているとの意味である。「大江」は柔遠駅の近くの「瓊河」を指す。「大江秋」は陳元輔が蔡文敏に訪ねた時の季節を示している。

〈頷聯〉

「蘆花曲港藏漁火、楊柳空村繫釣舟」

「蘆花」はアシの花である。一般的に、八月、九月になるとアシにはふわふわとしている花が咲き始める。「曲港」は曲がりくねっている港のことである。秋の夕方、アシの花が咲いている漁港内に漁船が停泊している。夕方になったから、漁船は港に入って灯をつけてアシの中に見えつ隠れつしている。ここではこのような景色を描いている。この句から柔遠駅の近くに漁港があったことが分かる。「漁火」は漁船に住んでいる漁民が灯をつけることを指す。『竹間十日話』の中に、福州での「疍民」と呼ばれる賤民が閩江及びその支流で生漁獵をして活きていると記載されている。疍民は一生、船に住んで登岸をすることが禁止されており、平民と通婚できず、子孫が科挙を受験できないなどの制限がある。[1]

〈頸聯〉

「明月不隨流水去、浮雲盡向海門收」

明月は流水に従わず、もとの所で待っている。この句では陳元輔が柔遠駅でずっと竺天植を待っているのに来なかったため残念な気持ちを婉曲に表している意味もある。

「海門」とは川が海に入る所である。浮雲は河口部に移っている。前句の動かない明月と海門に去っていく浮き雲と対比して、清朗である夜空に浮き雲は明月のそばにすり寄って去っていく様を描いている。

〈尾聯〉

「清光此夜人何處、寂寂南州一榻留」

---

[1] 郭柏蒼『竹間十日話』、福州地方志編纂委員會整理、（福州）海風出版社 、2001 年 7 月、89 頁。

「清光」とは澄んだ月光である。清らか夜、友人がどこにいるのだろうかと言う。「清光此夜人何處（清らか夜、友人がどこにいる）」においてこの「人」は竺天植（鏡筠）を指す。
「寂寂」はもの寂しいさまである「南州」とは福州のことである。「一榻」は竺天植の来訪のために用意する椅子である。尾聯では非情に期待していた竺天植との会を遂げられなくて陳元輔は遺憾の心情を述べている。

【７６】

秋江雨泛同雪堂諸子	**秋江の雨雪堂諸君子と同に泛ぶ**
布帆遙挂荻蘆洲	布帆遙に挂く荻蘆の洲
草瘦桐孤嘆倦游	草瘦せ桐孤倦遊を嘆く
山霧四圍横小島	山霧四圍小島に横たわり
溪雲千丈鎖輕舟	溪雲千丈輕舟を鎖す
烟深石燕隨潮轉	烟深く石燕潮に随って轉じ
風急江豚趂水流	風急ぎ江豚水に趂いて流る
惆悵五湖尋范蠡	惆悵五湖范蠡を尋ね
不堪雨里更逢秋	雨里更に秋に逢うに堪えず

【詩型】七言律詩
【押韻】平声尤韵

【通釈】
題目:秋に雨が降る川で雪堂諸君子と共に画舫に乗り遊ぶ
　遠いとこの帆船は萩が茂った洲に泊まっている。落ち着いて枯れた草、孤高をたもつ梧桐を見て少し遊びの疲れを感じてしまった。雲や霧は山腰をめぐらして遠くから見れば峰は雲海の中に横たわっている小島のようである。靄は濃くて船の進路を遮っている。石燕は深い煙の中に行き交って水の流れに随って道を探す。風が強くて江豚は激流を利用して泳いでいる。私たちはこの河を以て昔の范蠡が遊んでいた五湖のふりをして遊びたいが、風雨に会ってさらに秋を感じさせてしまうなんて残念でたまらない。
【分析】
題目から、秋に陳元輔は程順則らと河で船遊びをしたことが分かる。
〈首聯〉
「布帆遙掛荻蘆洲、山霧四圍横小島」
　「布帆」は帆船をさす。「荻蘆」は荻と葦の水生植物で一般に川邊もしくは川中の洲で生える。
「草瘦桐孤嘆倦游、溪雲千丈鎖輕舟」において「草瘦」は秋の草が枯れているさまである。「桐孤」は岸に独りぼっちで立っている梧桐である。「嘆倦游」は陳元輔らが遊びに疲れ、さらに蕭条な景色を見て遊覧に飽きると感じたことを言う。ここの「小島」は川に横たわっている島ではなく、遠いところの山が霧に囲まれて峰はその雲海上に立ちあがってまるで雲海上の小島に見えることを言っている。
「烟深石燕隨潮轉」
　「溪雲千丈」は河の上に漂っている霧が雲みたいに千丈ほども深いことを言う。もちろんこれが誇張の修辞であるが河の上に漂っている霧は非常に濃いことを強調している。また「溪」字を用いるの

はこの河が江のレベルではないことを表す。おそらく柔遠駅の近くに流れている瓊河で船を漕いでいたであろうことが分かる。「鎖輕舟」は霧が濃くて前の物を見えないから泊まるしかないと言っている。また「軽舟」とあることから陳元輔らが乗っているのは小船である。

「烟深石燕隨潮轉、風急江豚趂水流」

この句で霧が濃くて石燕も前の道を見えなく、石燕は江水の流れに従って飛ぶしかないと言っている。石燕は蝙蝠に似っている鳥で洞窟や木の穴に巣を作る。この句から景色が一変する。江に急に風が吹き始め霧を追い散らした。それで江豚が前の道を見えるようになって波に乗って泳いでいる。

「惆悵五湖尋范蠡、不堪雨里更逢秋」

「五湖尋范蠡」は范蠡が五湖に隠遁する典故を言っている。他の詩の分析にてすでに説明済みであることから、ここで贅言しない。陳元輔らの閩江に船乗って遊ぶことを范蠡の五湖の遊びに喩える。ただ違うのは、范蠡は功成り名を遂げた後、美人とともに五湖で愉快に遊んでいたが、陳元輔らは蕭条な景色の影響を受けてがっかりとしている。五湖の遊びをしたい陳元輔らは雨の天気と遭ってすでに不運であってさらに秋の感慨が起こったのであろう。

【８２】

秋日驛樓寄懷成均諸子	**秋日驛樓に懐いを成均の諸子に寄す**
橋門草色上琴臺	橋門の草色琴臺に上る
藜火年年照眼開	藜火年年照らして眼を開く
泛海仙郎惟戀闕	海に泛ぶ仙郎惟だ闕を戀すれば
重文天子自憐才	文を重んず天子自(おのずか)ら才を憐(あわ)れむ
驛亭秋度哀鴻怨	驛亭秋を度り哀鴻怨(うら)み
宮殿晴看彩鳳來	宮殿晴れ看彩鳳來たる
我在閩南君冀北	我は閩南に在り君は冀北にあり
一天明月共徘徊	一天明月共に徘徊(はいかい)す

【詩型】七言律詩

【押韻】平声灰韻

【通釈】

題目：秋に柔遠駅で国子監に在る諸君子（梁成楫、阮維新、蔡文溥）に懐いを寄せる

今の北京、秋の色はきっと国子監の外から中の琴を弾く台まで蔓延ししているであろう。国子監の諸君子は夜を日に継いで勉強して知識の光が輝いてみな視野も開いたであろう。海を乗り越えて来た官生たちは皇帝に忠心を尽くせば、文化教育を重んじる天子はおのずから君たちを重視してくれる。秋は柔遠駅に来て雁の鳴き声は悲しく聞こえる。宮殿の晴れの時、鳳凰が飛んでくるのが見えそうである。私は閩南に在り君たちは北京に在る。それぞれ天の一方に在るけど夜に明月を共に鑑賞することができる

【分析】

〈首聯〉

「橋門草色上琴臺、藜火年年照眼開」

「橋門」は古代、辟雍[1]（中央の太学）に水を繞らし、四門を設け、門外に橋を架したものである。漢代、講筵あれば観るものは皆水外にあるから橋門をめぐるということがある[2]。「草色」は草の色である。秋なのでこの草色は黄色である。秋の色は橋門から琴台に伸びた。深秋になったことを表す。「藜火」は藜を燃やして灯として勉強する意味である。「藜火」は学習のことを指す。「送魏牧公入貢」[3]で詳しく説明したので参照されたい。「年年照眼開」は年々国子監で学習を通して視野を広げたことを言う。

〈頷聯〉

「泛海仙郎惟巍闕、重文天子自憐才」

「泛海仙郎」は国子監に行く琉球の官生である。康熙 25 年 11 月 14 日、阮維新、蔡文溥、鄭秉均、梁成楫は進貢正使魏応伯に従って出航した。（同年）11 月 18 日途中颶風と遭遇して久米山の南五、六里あたりに流され、船のマストが折れて官生鄭秉均はマストに当たって死亡している。11 月 19 日宮古島に漂着し、船を修理し終わって康熙 26 年 4 月 24 日、那覇に戻って同年 5 月 4 日福州へ再出航する。千辛万苦を経て最後、康熙 27 年に北京に行った官生は 3 名であった。官生の蔡文溥、梁成楫についての資料は『那覇市史家譜資料』に載っているが、阮維新、鄭秉均について詳しい資料がない。「闕」は雄大な宮殿で転じて皇帝の象徴である。

「重文」は文化教化を重んじるとの意味である。この句では康熙帝は文化教育を重視して藩属国の留学生を受け入れて国子監で勉強させることを言っている。

〈頸聯〉

「驛亭秋度悲鴻怨、宮殿晴看彩鳳來」

陳元輔は柔遠駅で越冬しに来た雁を見て友人に対する思いが出てくる。秋を悲しみ、友人を憶うのは中国古典詩文における永遠のテーマである。秋の季節に万物が蕭条になり、詩人の気持ちも季節の変化とともに消極的になる。それで、詩人は秋の雁をいつも怨み、雁は悲しみの気持ちを与える。

晴れの時、官生たちは宏大な宮殿の下で仰いで望むと鳳凰が飛んでくるのが見えそうだと言う。頷聯の二句のうち、前句は陳元輔が柔遠駅で見た風景であり、後句では官生たち北京にいる場面を想像している。

合わせて頸聯では陳元輔は閩南の柔遠駅で雁を見て、北京にいる官生たちの生活場面を想像している。

〈尾聯〉

「我在閩南君冀北、一天明月共徘徊」

「閩南」は福州を指す。「冀北」は北京を指す。「徘徊」はぶらぶら歩くさまで転じてゆったりと遊ぶことを指す。この句では官生たちと陳元輔は両地に別れているけれども明月を共に鑑賞することができる。この聯句は蘇軾の「但愿人長久千里共嬋娟」の詩句を借りて作ったのである。

秋日集飲程素文江樓遲業師昌其不至	**秋日程素文の江樓に集飲し業師昌其至らず**
乘興頻登百尺樓	興に乘じて頻りに百尺樓に登る
一江風雨未曾收	一江の風雨未だ曾て收まらず

[1] 周代には五學を建て、中央を辟雍、南を成均、北を上庠、東を東序、西を瞽宗という。成均は大司樂が五學の教を總べ、樂德・樂語・樂舞を教へる所。因って又、五學の總稱となる

[2]「饗射禮畢，帝正坐自講，諸儒執經問難于前。冠帶縉紳之人，圜橋而觀聽者蓋億萬計」（南朝宋・范曄『後漢書』卷79、列伝第69上、中華書局、2005、2546頁）

[3] 本論稿 248 頁。

意中有客難同醉　　意う中客有りて同に醉い難く
不覺思君又感秋　　覚えず君を思い又秋を感ず
【詩型】七言絶句
【押韻】平水尤韻

【通釈】
題目：秋日、程素文の江楼に集まり、陳昌其先生至らず。
興に乗じてよく百尺の江楼に登っている。江楼の外はまだまだ風雨が続いている。心中にもう一人友人が来るはずと思うが友人がこれなくて、一緒に酔っ払うまで酒を飲むことができない。友人のことを思い出せば秋がくると感じた。
第一句の「乗興頻登百尺樓」において「百尺楼」は柔遠駅中の楼である。福州の文人と琉球の文人たちが交流する主なる舞台である。宴会もしくは作詩の会などの交流活動はほぼこの場所で行われる。陳元輔、王登瀛、周新命の詩の中に「望中楼」と「江楼」が一緒に現れる。この楼は望中楼と呼ばれるものと思われる。瓊河に臨む望中楼は眺めがいいので交流する時よく使用される。
第二句の「一江風雨未曾收」において「一江風雨」は雨の激しさを反映する。「未曽收」は雨がずっと続いているということを表している。大雨が長く続いているのがおそらく陳元輔が約束に行けな原因であろう。
第三句の「意中有客難同醉」において「意中有客」とは周新命はもともと陳先生が来るはずと思っていたが、結局、陳先生がこれなかったということを表している。「難同醉」は周新命がもともと陳先生と酒を飲み酔いしれたかったが叶わなかったという、残念な心情を表している。
第四句の「不覺思君又感秋」において、「思君」「感秋」は陳先生がこれなかった残念な心境と悲愁の感情が重なっている。

秋日同程素文過陳渭生草堂看花不遇　　秋日程素文と同に陳渭生の草堂を過り花を看んとするも遇わず
瓊川深處訪幽居　　瓊川の深き處幽居を訪ぬ
楊柳逢秋兩岸疏　　楊柳　秋に逢いて兩岸に疏なり
晝靜只餘三徑菊　　晝靜かにして　ただ三徑の菊を餘すのみ
庭閒祗見一園蔬　　庭閒にして　ただ一園の蔬なるを見るのみ
石林有路通花鄔　　石林　路有りて花鄔に通じ
瓦竈無煙隱草盧　　瓦竈　煙無く草盧に隱す
不問主人唯看竹　　主人を問わず唯だ竹を看るのみ
歸途未免各躊躇　　歸る途に各々躊躇するを免れず
【詩型】七言律詩
【押韻】平水魚韻

【通釈】
題目：秋日、程素文とともに陳渭生の草堂を尋ね花を見ること叶わず。
瓊河の奥に静かな雅やかな陳渭生の住宅があり、そこに尋ねていった。秋になったので両岸の柳が疎らとなった。陳渭生の草堂の付近は、たとえ昼の時でも静かで、三径には菊のみを植えている。そ

とから見ると庭の中に飾り気がなくただ野菜をたくさん栽培している。陳渭生の書斎の付近に桃花鄔に向かう道がある。草盧の中に煙がなく瓦の竈が見える。陳は家にいなくて外の竹を見るしかない。帰る時私と程素文は各々残念な気持ちを抱いていた。

【分析】

〈首聯〉

「瓊川深處訪幽居、楊柳逢秋兩岸疏」

「瓊川深處訪幽居」は周新命、程順性が瓊河の奥にある陳渭生の宅を訪ねにいくことを言う。「幽居」は陳渭生の宅の周りの環境が静かで幽かであるということである。「楊柳逢秋兩岸疏」では秋が来て瓊河の両岸の柳が疎らとなっている様子を描いている。首聯では特に悲愁の雰囲気を営造するわけでなく、周新命、程順性はゆったりとした心情を持ちながら興に乗じて友人を訪ねている。

〈頷聯〉

「晝靜只餘三徑菊、庭閒祗見一園蔬」

〈頷聯〉

周新命、程順性らすでに陳渭生のお宅の外に着いた。「三徑」は隠者の家に向かっている道である。「三徑菊」は庭園の道のそばに菊が満々植えていることを言う。「庭閒祗見一園蔬菜」は陳渭生の家の庭園では野菜をたくさん栽培しているということである。「三徑菊」、「一園蔬」、陳渭生の宅の庭園の中と外の景物でどれも隠者の象徴である。陳渭生は隠者の生活をして、陳渭生本人は節操高尚の人物である。

〈頸聯〉

「石林有路通花鄔、瓦竈無煙隱草盧」

「石林」は石林精舎である。『癸辛雑識』の資料によると、南宋の詩人葉夢得の別荘で卞山の南に築いて数萬の石に囲まれると言われている。[1]「精舎」は書斎のことでる。それで「石林精舎」はまた静かな読書の処を指す。詩の中の石林は陳渭生の宅を指す。陳渭生の宅は読書するのにとてもいい場所である。頸聯の「石林」「瓦竈」「草盧」どれも隠逸に関わる言葉なので「花鄔」は桃花が咲く桃源郷を指すと考えられる。「瓦竈」、「草盧」は陳渭生の宅は飾り気なく、素朴であることを言う。頸聯では陳渭生は清貧の生活に満足して高い道徳を求めているという意を表している。

〈尾聯〉

「不問主人唯看竹、歸途未免各躊躇」

「不問主人」は主人の消息がないという意味で、つまり陳渭生は家にいないことを意味する。「唯看竹」は陳渭生が不在なので庭園に入れず、外の竹を見るしかないということを指す。「各躊躇」は興に乗って陳渭生を訪ねに来て結局、陳渭生と会えなくて目的を叶わず帰る時、周新命、程順性はちょっと失望した心情であることを言っている。

過黃石霞齋頭	**黃石霞の齋頭を過ぐ**
瓊川積雪野梅香	瓊川　積雪　野梅香る
仿佛河南舊講堂	仿佛たり河南の舊講堂
忽聽書聲松際過	忽ち書聲の松の際に過るを聽く
偏憐孤客滯他鄉	偏に孤客他鄉に滯るを憐む

[1]宋・周密『癸辛雑識前集』(『景印文淵閣是庫全書』第 1040 冊收錄、台灣商務印書館、1986 年、1040-8 頁)

【詩型】七言絶句
【押韻】平水陽韻

【通釈】
題目：黄石霞の書斎を過る
瓊河のあたりに雪が厚く積もって野梅が香る。この光景を見ると私はここがまさか河南先生の旧講堂であろうかと疑っていた。ところが突然、読書の声が松林のあたりに伝わって来て私の疑問が解けた。しかし、自分が一人で異郷に留学することを思い出してまた無限の郷愁に陥る。
【分析】
題目「黄石霞齋頭」の「齋頭」は書斎である。黄石霞は人名だと考えられる。周新命はある日に黄石霞の書斎を通りかかる時、急に感慨が起こってこの詩を吟詠したと思われる。周新命は柔遠駅の近くに住んでいる黄石霞の家を訪ねていく時、あるいは帰る時見た感想を詩の中に述べている。
まず、第一句「瓊川積雪野梅香」において、「瓊川積雪」は冬のある日瓊河のあたり雪が積もっており、周新命は出掛けていった。福州の緯度では雪がなかなか降らないが全く降らないわけではない。かつ「積雪」という言葉は雪が厚く積もっている状態を表している。その年の福州がかなり寒かったものと思われる。「野梅香」は天気は寒いが、梅花が咲き清らかな香りが漂っていることを表している。
第二句の「仿佛河南舊講堂」において「河南舊講堂」は河南先生と称されていた北宋の程頤の典故を指す。程頤は北宋の理学家で彼に関して有名な「程門立雪」の故事がある。程門立雪について本論稿ですでに詳しく説明したのでここでは贅言しない。周新命は雪の厚く積もって梅花が咲いている風景を見て、「程門立雪」の環境と似ていたことから、「仿佛河南舊講堂」の句を作った。
第三句の「忽聽書聲松際過」は前句の疑問に対する回答である。前句において周新命は付近の風景を見て、まさかここが昔の河南先生の講堂かと疑っている時、突然、読書の声が松のところから伝わってきた。それで周新命の疑問は解けた。この付近に確かに塾があると。
第四句の「偏憐孤客滯他鄉」において周新命が学生たちの読書の声を聞いて、自分も学生だが、ただ異なるのは異郷で留学する身であるということだと言っている。周新命は康熙 27 年—康熙 34 年まで福州で 7 年間の留学生活を過ごしていた。第四句で故郷を懐かしむ感想を表している。

第五項　小結

本節では、『枕山楼詩集』『柳軒詩草』『中山詩文集』の中に収録されている中国文人と琉球文人の交流活動に関わる詩を、三つの形式の交流活動と日常接触の側面といった四点に分類して分析を行った。
交流の形式は「宴飲」「贈答」「作詩の会」である。「宴飲」はすなわち酒席である。この酒席は柔遠駅の中の楼閣で開かれたり、時々開催者の部屋で開かれたりしていた。二人の酒席の時には、開催者の部屋の中で行い、二人以上の場合は江楼で行われている。柔遠駅の江楼は当時の福州の文人、勤学たちに「望中楼」と呼ばれていた。そうした詩を反映する酒席は夜を徹して行われることもあった。「宴飲」は学生が陳元輔ら福州人を招くケースと、陳元輔ら文人が授業後、学生に留められ参加する二つのケースがあった。伝統的な師弟関係は「程門立雪」のように弟子は師匠に恭しくひいては弟子は師匠を畏敬するいうような関係である。しかし、陳元輔ら福州文人は琉球の弟子と交遊するのに身

分の上下を気にせず、酒を酩酊するまで飲み「宴飲」は行われていた。

陳元輔らの文人は琉球の弟子、渡唐役人たちに多くの詩の「贈答」を行っている。詩の贈答は中琉文人の間においては友情を深める手段でもあった。「贈答」は琉球人が陳元輔らと別れる際に無事の帰りを祈りつつも、恋しく離れられない心情や、二人の深い友情などをテーマとしているものが多い。

望中楼は柔遠駅の中で福州文人、琉球の文人と交流する時に決まって使用された場所で、「作詩の会」も望中楼を会場として行われるケースが多かった。「作詩の会」では、陳元輔などの福州の文人や琉球の弟子らが集まり、詩のテーマを決めて詩を作っていた。作詩の会の開催日は適当に選ぶのではなく、月末、季節末、祝日と合わせて行われ、塾師の友人も誘われて詩のやり取りをするケースもあった。こうした文学集会は琉球文人と中国文人に特有な活動ではなく、従来中国文人同士において、友情を深めてお互いに切磋琢磨をする文学活動であったが、琉球の勤学らを中心に行われる「作詩の会」といった文学集会は師弟関係を深めるのみならず、平日の勤学人の学習成果を試す重要な手段ともなっていた。

「日常接触の側面」は陳元輔ら福州の文人、琉球の渡唐役人、勤学人らが日常接触する時に起きる様々な場面であるが、一括して分類するのは難しい。渡唐役人・勤学人が柔遠駅付近の友人を訪ねに行ったが会えなかったこと、師匠と約束したが師匠は来なかったケース、師匠と弟子が濃い霧の中、船を漕ぐというような生活の中の些事も含め実に多様である。

終章　終わりに―研究の総括

本章では以下の七項目をもって本論稿の研究を総括したい。

一、本論稿で用いた資料

管見の限り、陳元輔が何らかの形でかかわっている、あるいは彼の足跡の手がかりとなる資料、康熙年間、福建及び福建以外の文人と琉球の文人との交流を反映する資料は以下の六件である。

①『枕山楼文集』: 陳元輔の散文集

②『枕山楼詩集』: 陳元輔の詩集

③『枕山楼課児詩話』: 作詩入門書、陳元輔の詩学観がみられる

④林潭『晩香園梅詩』: 陳元輔が詳しく注を付けている

⑤王登瀛『柔遠駅草』: 王登瀛の漢詩集

⑥『中山詩文集』: 陳元輔などの福州文人に関わる詩と文章を含む琉球人漢詩総集

以上の資料はすべて文学資料であるが、その内容は陳元輔、王登瀛、竺天植らの福州文人と琉球からの勤学人、進貢使節との交流を反映しており、歴史文献には見られない中琉文人の民間交流の様子が窺い知れる。詩は中国で最も古い文学の体裁である。最初の『詩経』は、天子が民情を知るために採詩官を各地域に派遣して採集された民謡と民歌である。詩は誕生の最初から情報を伝えるという特質を備えている。

『枕山楼文集』は陳元輔の散文集で康熙 31 年（1692）に福州において自費で出版されている。全体は楊昌任、王化純、林潭による序文 3 篇と、陳元輔の散文 15 篇、詩 5 首を収録している。『枕山楼詩集』は陳元輔の詩集で、康熙 30 年（1691）に初めて程順則の出資により福州で出版されている。篇首に鄭宗圭、林潭の序文を掲載しており、陳元輔の漢詩 121 題、179 首を収録している。全体は康熙 12 年（1763）前後から康熙 30 年（1691）までの 18 年間の作品が収められている。18 年間の漢詩を時間で分類すると軍幕で働く時期（1676－1682）、湖北への遊歴の時期（1684）、勤学人の師匠として働く時期（1684－1691）に区別できる。特に、勤学人の師匠として働く時期に 37 首の漢詩がある。関係する琉球人は魏応伯、曽夔、梁津、梁鏞、梁邦基、陳其洙、鄭士綸、蔡鐸、蔡文敏、蔡禎菴、周新命、程順則、蔡肇功、方徳祖、鳳恭良などの 15 名である。この 37 首の漢詩は陳元輔と琉球の友人との交遊の様子を窺うのに貴重な資料である。一方、『枕山楼文集』、『枕山楼詩集』は陳元輔の履歴を考証するために重要な手がかりを提供している。『枕山楼詩集』の林潭の序文は陳元輔の生年を確認する根拠を提供し、「癖耽集序」[1]は陳元輔が科挙を受験したこと及び科挙後の動向や、程順則との出会いを確かめる手がかりを提供し、「與周太学書」[2]は陳元輔が寧海将軍の幕府で働いていたことを示し、「哭三叔文」[3]は陳元輔の門弟を窺う手がかりを提供した。陳元輔の没年に関しては『梅花百詠』の王登瀛の序文、『枕山楼課児詩話』の曽暦の序文によって推測した。

『枕山楼課児詩話』はもともと家で子息に詩を教えることを目的とするテキストであるが、康熙 37 年（1698）に、陳元輔が程順則に読ませたことをきっかけに程順則、楊丹岩、毛允和、鄭克文、陳楚水、蔡天水が共同出資して福州で出版された。その後、程順則が琉球に持ち帰って、1713 年の

[1]陳元輔の『枕山楼文集』の文章。

[2] 同上。

[3] 同上。

江戸立ちの時に薩摩、京都などで写本として流布した。1738 年、奥田三角が序文をつけて京都でも出版された。その後、大窪詩佛が校訂し重印した版本、横関剛校、亀谷行序の明治 14 年 12 月大阪墨香居北尾禹三郎の刊本もある。『枕山楼課児詩話』は彼の著作の中で、日本で最も広く伝播しているといえよう。一方、この著作は陳元輔の詩学観を知るのに非常に重要な資料である。そのため『枕山楼課児詩話』を通して本論稿の第一章第三節において陳元輔の詩学観を分析して「宗唐」「温柔敦厚」、「竟陵の影」としてまとめた。

『柔遠駅草』は康熙年間、柔遠駅で活躍していたもう一人の勤学の師匠王登瀛の詩集である。『柔遠駅草』は「柔遠駅草」と「柳軒詩草」の二部分で構成されている。篇首に、王登瀛の自序、林潭の序文を収録している。自序で王登瀛は勤学人の師匠になる経緯を示している。林潭の序文は王登瀛の生年の手がかりを提供している。「柳軒詩草」には琉球文人との交流を反映する詩は 16 題で全集の中に半分を占めている。関係する琉球人は梁鏞、陳其洙、鄭士綸、陳其湘、楊仲立、周新命、蔡文漢、程順則、毛士豊、鄭克文、紅永祺、蔡応瑞、梁成楫、程順性、金溥、麻舜玉である。『枕山楼詩集』以外のもう一つの中琉文人交流の様子を窺うのに貴重な詩集である。本論稿の第二章、第五節にて「柳軒詩草」を中心に王登瀛と琉球文人の交流を論述した。

『中山詩文集』は康熙年間の琉球人詩文の集大成である。康熙 60 年（1721）年、『中山詩文集』の初稿を王登瀛に届けて王登瀛は序文を作成した。これによると、康熙 60 年の時点で『中山詩文集』はすでに成立していたとみられる。後の校訂を経て正式的に福州で出版されたのは雍正 3 年（1725）になる。曽益の『執圭堂詩草』、蔡鐸の『観光堂詩草』、程順則の『雪堂燕遊草』、『雪堂雑組』、周新命の『翠雲楼詩箋』、程摶万『焚余稿』によって『中山詩文集』の主体は構成されている。他に、福州文人たちの贈言詩集である『雪堂贈言』、冊封使林麟焻の文章、琉球の国王、貴族、士大夫らの詩作を収録している。『中山詩文集』の一つの特色は琉球人の詩文だけでなく、42 名の福州、北京の文人の詩や序文も収録していることである。こうした人物の経歴が把握できれば、琉球人と中国文人との交流の様子を具体的にかつ詳細に窺い知ることができよう。本論稿の第二章、第二節にて程順則を中心に彼の福州及び貢路における交友関係を明らかにした。

以上の資料は本研究の分析の素材であり、中琉文人交流に関する手がかりを提供している。しかし、これだけでは研究を十分に展開できない。以上の資料に登場する中国における琉球文人と接触した中国人は身分の低い文人、位階の低い官員が多い。かつ、琉球文人と交流した中国文人は福建出身が多い。それでこうした人物は『万暦福州府志』、『乾隆福州府志』、『乾隆福建通志』、『民国閩侯県志』、『烏石山志』を基本として福建省の他の県志及び他の省の通志、府志、県志に広げて広く渉猟した。地方志以外の「詩話」という詩人の伝記を含む漢詩集、清代史料筆記を通して関連資料を探った。非常に役立つ資料は民国初年の陳衍の『民国閩侯県志』、清末の郭柏蒼『竹間十日話』、『烏石山志』である。これらには、清代の正志である『福建通志』、『福州府志』と比べて身分の低い文人の資料がより広く収録されている。特に『竹間十日話』、『烏石山志』は明末清初にあたる福州文人、福州の逸話などを広く網羅している。明末清初の福州文壇の情況を知るのに非常に役立った文献である。

二、陳元輔について

これまで、陳元輔は程順則の師匠として後の人に知られていた。ただ、彼はいったいどのような人物なのかその詳細は不明であった。本論文は上述した文学資料を用い、その文章や漢詩の分析を通して陳元輔の人物像を描いた。陳元輔は清の順治 12 年（1655）前後に生まれた福州人である。彼は読

書人の家で成長している。彼の祖先陳元珂は明代嘉靖乙未年（1535）の進士に合格して文官として所在地の文教を整え、治安を治め、武官として倭寇を鎮圧する功績をあげた。湖広参政に昇任したが免職された後、福州に戻ると軍中の声望によって反乱する軍人を勧誘して軍政を安定させた。文武両道の陳元珂はすでに陳元輔によい手本を示している。陳元輔は祖先の事跡を覚えており、詩文の中で先祖に倣うことを表している。胸中に非常に門第を再び栄えさせる理想を持っていた。年少の時、陳元輔は落ち着いた性格で文に優れていたので、まだ十歳ぐらい少年で二十七歳の竺天植の知遇を得て、十五歳の時林潭と知遇を得た。康熙 11 年（1672）、十七歳の時、科挙の郷試を受験し、残念ながら落第した。このことは、まだ若い陳元輔に非常に大きな衝撃を与え、一時期、意気消沈していた。康熙 12 年（1673）、呉三桂が乱を起こしてから康熙 15 年に至って三藩の乱が全面的に勃発した。そのため、福建の科挙が中断して康熙 19 年にやっと再開した。読書人として立身出世の道が絶たれたので康熙 15 年（1676）、陳元輔は祖先陳元珂のように軍功を建てる気持ちを持って、福州に駐屯する寧海将軍喇哈達の幕に入って従軍期が始まった。それ以降康熙 21 年（1682）、寧海将軍の満州軍団が撤収して北京に戻るまで陳元輔は寧海将軍の幕職を務めていたと考えられる。康熙 22 年（1683）の冬、陳元輔は湖北の遊歴に発った。康熙 23 年（1684）の冬、福州に戻り、ちょうど北京への進貢任務を終えて福州に戻った程順則と出会った。その年から、陳元輔は勤学人の師匠となって琉球人との交流が正式に始まった。程順則、周新命、梁得声、梁得済、程素文など琉球勤学人は陳元輔に師事していた。康熙 27 年から康熙 28 年の春ぐらいに陳元輔は泉州に行って当時の福建提督にやとわれた。しかし、長く働いていなかったようで、終に福州に帰っている。蔡鐸、梁邦基、蔡肇功などの琉球文人と福州で親しく交遊を得ており、彼らとは琉球に帰ってもお互いに書簡の往来が続いている。康熙 30 年、康熙 31 年に自分の著作である『枕山楼詩集』、『枕山楼文集』を出版した。康熙 37 年（1698）に『枕山楼課児詩話』は出版された。同年（康熙 37 年）、陳元輔は程順則、蔡鐸に琉球の漢詩を採集して「中山詩選」を編輯するよう提案した。程、蔡によって採集した琉球の漢詩は陳元輔が校訂をして福州で出版した。陳元輔が「中山詩選」の編輯を発起したことは、孫鋐が琉球漢詩を『皇清詩選』に収録したこと、ないしは程順則が『中山詩文集』を編纂したことに影響を与えていると考えられる。資料からは、陳元輔が康熙 48 年 6 月までまだ生きていたと確認できるが、陳元輔は康熙 50 年（1711）前後に逝去したと推定される。

三、陳元輔の福州友人

本論文の第一章、第四節おいて、竺天植、林潭、王登瀛の経歴を考証して陳元輔との交友関係を示す作品を分析した。この三人は、陳元輔の友人であるだけでなく、琉球人との関係も深かった。特に、竺天植、王登瀛は陳元輔と同じく柔遠駅で琉球人の師匠として活躍した人物である。竺天植（1637～？）は元もと揚州の出身であるが父親が福州で官に就いたため福州に定住した。彼はおよそ康熙 6 年に勤学人の師匠を務め始めている。程順則は最初に福州に来た時、竺天植に師事していた。程順則は勤学として福州に来て暫くの間北京への進貢グループの一員となって北京に赴いていた。福州に戻った後、おそらく、竺天植の紹介で程順則の師匠は陳元輔に代わった。竺天植に関わる資料は「六諭衍義序」、「癖耽集序」以外に、他に竺天植が程順則に送った書道作品[1]が見られる。資料からは、康

[1]『甦る琉球王国の輝き』沖縄県立博物館・美術館　2008 年 11 月　187 頁

熙 47 年（1708）まで生きていると確認できる。この年竺天植は 71 歳であった。

王登瀛（1660？～？）は康熙 32（1693）年に勤学人の師匠を務め始めた。この年の前に全国を広く遊歴して福州で長期的に定住することがなかった。康熙 27 年、28 年あたりに福州の柔遠駅で琉球人と頻繁に接触していたようである。つまり、王登瀛は勤学人の師匠になる前にすでに琉球人と接触していた。管見の限り、康熙 34 年に成立した『柔遠駅草』は現在見られる王登瀛の唯一の著作である。他に康熙 35 年（1696）に描かれた「菊図」という掛け軸が見られる。竺天植、林潭、陳元輔、王登瀛は柔遠駅で活躍していたが、康熙 50 年以後、王登瀛だけ残って勤学人を教え続けて琉球の文人と交流していた。資料上、王登瀛は雍正 3 年（1725）まで生きていたと確認できる。

竺天植、陳元輔、王登瀛の三人は勤学の師匠になる前にすでに関係の親密な友人である。本論稿では、陳元輔は竺天植の推薦を通して師匠となり、王登瀛は陳元輔たちの推薦を通して師匠となったと推測している。なお、陳元輔の周りには、柔遠駅に出入りしていた他の福州文人もいた。陳元輔との関係で柔遠駅に出入りしたこれらの人物は、勤学人と交流して勤学人の見聞を広めさせ、能力を鍛えるチャンスを与えた。例えば、曽子浴、王孔錫、陳元声、盧若采などの福州人は柔遠駅に出入りして勤学人と交流していたことがわかる。さらに竺天植、陳元輔、王登瀛をめぐって柔遠駅の周りで活躍している福州文人グループがあって琉球人と交流すると同時に、勤学人の師匠になる人的資源を提供していたと考えている。

もう一人の人物である林潭は竺天植とだいたい同じ世代の人である。彼は明末の秀才であるが、その一生はかなり不幸であった。明清交替の乱世の中で、家族が土匪に殺されても堅忍して生きている。林潭は乱世を避けて長楽県の大象山で隠遁生活を送っていた。陳元輔と非常に親しくしていた。林潭は陳元輔が非常に困惑した康熙 13 と 14 年に彼を諭し導いた。戦火を避けるために林潭は福州の陳元輔へ身を寄せたこともある。当時、隠遁生活を送っていたので林潭は数年程度に一回福州に来て友人と会っていた。詩文資料からは林潭が直接琉球人と交流した内容は見えないが、程順則は自ら陳元輔の詩集を持ってきて林潭に序文を寄せるように依頼した事実があった。かつ、陳元輔との関係から見て琉球人と接触することがないわけがないと思われる。彼の『晩香園梅詩』は程順則によって琉球へ持ち帰られ、日本で伝播している。現在日本で見られる『晩香園梅詩』は殆ど安政 2 年（1855）に玉池唫榭、盤古書院より共同出版された版本である。

四、陳元輔と琉球人の交遊

『枕山楼詩集』、『柳軒詩草』、『四本堂詩文集』、『枕山楼詩集』から陳元輔が程順則以外に、実際に交流が認められる琉球人物は以下の通りである。

曽夔、梁津、梁鏞、梁邦基、梁成楫、陳其洙、金溥、鄭士綸、蔡鐸、蔡文敏、

蔡幀菴、周新命、程順性、蔡肇功、方徳祖、鳳恭良、蔡文溥、曽歴、

陳元輔は約 27 年間、琉球人と接触しており、その歴史の中で交流があった人物はこれだけの人数ではないだろう。柔遠駅に駐在した琉球役人との交流は梁邦基、蔡鐸、蔡肇功らの事例がある。梁邦基は存留通事として福州で滞在していた時に陳元輔に師事していたようである。存留官の三年間で、梁邦基は詩集ができて陳元輔は彼の詩集を修正して序文を作っている。福州で出版されたようであるが原本は現在みられない。梁邦基の詩を作る熱意を陳元輔は褒めているが、梁邦基の詩がまだ進歩の最中であると評価している。

陳元輔と蔡鐸との交遊は康熙 27 年 11 月―29 年 5 月の期間にあった。かつ、蔡鐸は康熙 28 年 5 月―康熙 29 年 2 月の間は福州におらず、北京に進貢のため行っていた。陳元輔、蔡鐸が一緒に福州にいたのは約 9 か月であった。9 か月の間に二人の詩の往来は 3 首ある。詩の分析を通して見える付き合いは長くないが、二人は初対面の時から長く付き合っている古い友人のようであったことが分かる。

蔡肇功が陳元輔と初めて知り合った場所は、康熙 30 年（1691）正月 15 日、柔遠駅で開催された宴席である。康熙 29 年に蔡肇功は存留通事として福州に来て陳元輔と交遊する時、曽祖父蔡廛の事跡を陳元輔に述べた。陳元輔は、蔡肇功の陳述に基づいて蔡廛の伝記である「蔡述亭伝」を作った。那覇出身の蔡廛は久米村を強化する政策で久米村籍に編入されたということが知られているが、彼を知ることのできる資料として、この陳元輔の「蔡述亭伝」は重要である。

勤学との交遊の代表例に梁津（得済）の事例がある。梁津は勤学の時、陳元輔に師事していた。陳元輔の下で約 5 年間学習していた。帰国した後に、梁津は健康が原因で再び福州に訪れることはなかった。陳元輔はこれに対して深く残念だと思っていたようである。『枕山楼詩集』、『枕山楼文集』の中に梁得済に関わる内容が程順則以外では一番多く、詩が 3 首、文が一篇ある。陳元輔は梁得済との関係も親しいといえよう。康熙 36 年前後に陳元輔は父が逝去した消息を梁邦基、梁津、梁鏞、梁成楫など琉球の友人に報告した。梁邦基らは遠く琉球から香典を託送している。

陳元輔と琉球人との交友の中で、程順則との関係は最も重要な部分である。康熙 23 年（1684）の冬、陳元輔は程順則と師弟関係を結んでから、終生の友人ともなっている。本論稿の第二章、第三節において二人のやり取りした漢詩を分析して、陳、程の二人がどれほど親密な友情を持つか、どのようにして二人は知己関係になれたか、ということを探究した。『枕山楼詩集』、『枕山楼文集』には程順則に関わる詩が 20 首ある。『中山詩文集』には陳元輔に関わる程順則の詩が 4 首収録されている。これも他の福州知識人にはない特別なものである。これらの作品を通して二人はお互いの関係を大事にしていることが分かる。程順則は勤学人の時と存留通事の時、前後して合計 7 年間、陳元輔の下で学習していた。林潭によると程順則は尽く陳元輔の学問を習得した（師事余友昌其盡得其所學）という。陳元輔はできる限りの責任を果たして程順則を教えていた。程順則は師匠を尊敬して常に学問に励んだ。日常生活の中でも二人は非常に親密であった。程順則は自分の服を陳元輔に送ったことがある。夏冬に二人は一緒に衣服を買いに行って、秋春に一緒に景色が美しい処に行った。学習する時、二人は共に書庫で典籍を調べていた。夜、柔遠駅で陳元輔は一般的に他の人に言いたくない昔のつらいことを話した。二人は年齢差がだいたい九歳であるため、世代間の差が大きくない。昔、福州で活躍していた勤学人の師匠は多かったであろうが、陳元輔は間違いなくその中で最も幸運な人である。程順則のおかげで彼の著作が残され、後人に知られている。

五、程順則と中国文人の交遊

康熙 35 年から康熙 37 年、程順則は進貢の都通事として福州、進貢の道程中、そして北京で多くの中国の知識人と接触できた。『雪堂燕遊草』、『雪堂雑組詩』、『雪堂贈言』中の漢詩はほぼこの 2 年間で作られた。中国に滞在した 2 年間は程順則にとって創作の収穫期と言える。この二年間には中国の一流の知識人との交流ができるようになり、程順則の文名や詩名が中国で揚がった。

一流の知識人との交流は張玉書、宋衡、林皦、林麟焻などの事例がある。その中で程順則は宋衡との出会いは奇遇だと言っても過言ではない。程順則は、康熙 36 年（1697）北京に赴く途中、安徽省

の盱眙県の淮角樓で雲南郷試を司り終えて北京に戻る宋衡と出会い、二人は初対面なのに古くからの知り合いのように交友を深めている。出会った当日、宋衡は程順則に郷試の受験生の文集「闈墨」を贈っている。盱眙県で短い交流の後、二人は別れて別々に北京に赴いた。北京で宋衡は程順則の詩を評し、自分の詩作、書画を贈っている。宋衡との出会いは程順則にかなり深い印象を与えた。程順則は琉球に帰っても書簡で宋衡と連絡を保っている。『雪堂燕遊草』に宋衡に関する詩は 4 首ある。師匠の陳元輔以外では『中山詩文集』に最も多くあらわれる。

福建省で程順則と交流した人物は挙人以下の身分が七割近くを占めている。その内、53%が福州府学、県学の在学生を含めた秀才と国子監生である。福州の国子監生、秀才などは官職に就いて生活する可能性はほぼない。福州の秀才たちは琉球勤学の師匠になるチャンスを待つしかないという原因もあると考えられる。つまり、福州柔遠駅をめぐって活躍している地元知識人ネットワークが存在しているとみてもよい。

程順則と十数年間、福州府学の訓導に任じられた戴翼との交友にも注目するべきである。康熙 49 年（1710）久米村に程順則によって明倫堂が建てられた。福州では書院や塾や府学県学などが繁盛であって、戴翼との接触から学校の運営、教学などについて程順則がさまざまに見聞していたのであろう。程順則の中国における人物接触は文人のみならず、その他に僧侶や道士も含まれ、実に広い人脈を有している。

六、王登瀛と琉球人の交遊

康熙 6 年前後、竺天植は瓊河のあたりで、琉球の勤学人や役人たちに教え始める。その後、康熙 23 年から陳元輔は琉球人師匠のチームに入って康熙 50 年前後で亡くなるまで琉球人との接触が絶えなかった。康熙 32 年、王登瀛は陳元輔らの勤学師匠のグループに加入して、雍正 3 年まで彼が琉球人を教えていたことが確認できる。竺天植、陳元輔、王登瀛の三人の柔遠駅を舞台とする琉球人との接触が、康熙年間を貫いている。康熙 50 年以後、竺天植、林潭はかなり年を取っており、後の数年の間に逝去したと考えられる。康熙年間の最後の 10 年ぐらいは、柔遠駅で陳元輔のグループでは王登瀛だけが勤学人を教えていた。『柔遠駅草』は王登瀛が琉球人と交流していることを反映した資料である。前述したように『柔遠駅草』から梁鏞、陳其洙、鄭士綸、楊仲立、周新命、蔡文漢、程順性、程順則、毛士豊、鄭克文、陳其湘、紅永祺、金溥、麻舜玉と交流があったとみられる。その中で、陳其洙との詩のやり取りが最も多い。二人は一年程度の付き合いしかなかったが、王登瀛は陳魯水と非常に親しい友情を持っていた。陳魯水は康熙 33 年 9 月に病死したので二人が再び福州で深い交流を続けることはなかった。王登瀛は沈痛な心情を込めて陳魯水の悼辞と詩を作って『柔遠駅草』の最後に掲載している。これは親友の陳魯水を記念するための作品である。康熙 33 年、王登瀛は柔遠駅で宿泊して当時の勤学である周新命、程順性、鄭克文らを教えながら交流していた。王登瀛は多くの琉球人と接触したはずである。その中で、蔡応瑞及び彼の子孫たちとの 36 年間続いた友情は、同時期では、おそらく程順則と陳元輔の交遊関係と並び立つものであろう。康熙 27 年、王登瀛は初めて蔡応瑞と知り合った。康熙 34 年、蔡応瑞が正議大夫として北京に行く前に王登瀛は詩を進呈している。康熙 35 年、蔡応瑞は琉球に帰るまえに惜別の記念とする「菊図」（筆者所蔵）を贈られた。雍正 3 年、王登瀛は蔡応瑞の『五雲堂詩』のために序文を作っている。蔡応瑞の息子、孫では蔡文溥以外は、福州に来たら例外なく王登瀛に師事して学習している。

七、勤学師匠と琉球文人の学習・交流活動

勤学の学習としては第三章の第一節において、以下の４つの学習の実態を検討した。

① 陳元輔は康熙年間の福州ではトップの文人とは言えないが、彼の広い人間関係で当時の蔵書の名家と知り合った。陳元輔は程順則を蔵書家の蔵書楼に連れていって書籍を閲覧させた可能性がある。

② 勤学はただ師匠と接触しただけでは知識面を広げられないことから、陳元輔は時々地元の名士を柔遠駅に連れて行って交流しつつ、勤学を指導していた。

③ 陳元輔は勤学を琉球館外に連れていき野外学習を行っていた。

④ 常に陳元輔が勤学人のために交流の場を作っていた。

福州の師匠を含む文人らは、勤学や琉球文人と交流する際に詩牌という遊具を使った。詩牌は遊具と言えども遊びながら勉強になる効果が著しい。琉球勤学にとっては漢詩創作の平仄、押韻、意象（ムード）、煉字などの技法を鍛えるものとなっていたことを解明した。残念なことに、詩牌の遊びは参加者の漢詩能力を要求するので程順則らがたとえ琉球にもち帰っても、普及するのは難しかったと思われる。中国でも清代初期に一時期流行していたが、それ以後詩牌に関する記録も少なくなってこのゲームも廃れた。

『枕山楼詩集』、『柳軒詩草』、『中山詩文集』から琉球人と交流活動に関わる詩をピックアップして 20 首を得た。本論稿の第三章、第三節において、これらの詩を分析して陳元輔などの福州の師匠と琉球人との交流活動を見た。分析にあたって 20 首の詩を４つの項目に分けることにした。それは、「宴飲」「贈答」「作詩の会」の三つの交流形式と日常接触の側面という四点である。

「宴飲」は、多くの場合が福州文人と琉球文人が柔遠駅で開催する宴席である。誰かの送別をする際、春を餞別する際、弟子に留まる際、柔遠駅へ呼び集め、楽しく酒を飲みながら詩を詠唱する。特別な例として、進貢道程に偶然に中国の旧友と出会って一緒に酒楼で思い出を語りあったりすることもあった。中国絵画史において有名な絵師である禹慎斎は康熙 27 年度の進貢使節、魏応伯、曽夔の伴送官として北京から福州へ琉球使節を護送してきていた。禹慎斎は魏応伯、曽夔が福州に帰る路程の中の酒楼で一緒に（旧暦）新年を迎えた。また康熙 29 年、進貢副使蔡鐸が帰る途中の揚州で禹慎斎と偶然に出会って数日の付き合いをしている。

「贈答」は、福州文人と琉球の文人が別れる時、詩を作って唱和することである。琉球人が陳元輔らと別れる際に無事に帰ることを祈り、恋しく離れられない心情や双方の深い友情などをテーマとしている。陳元輔らの師匠は琉球の弟子、役人たちにお祝い、言付けなどの理由で詩を進呈したこともある。詩の贈答は中琉文人の間の友情を深める手段でもあった。

「作詩の会」は福州文人と琉球の文人が柔遠駅で専ら漢詩の会を行うことである。作詩の会は定期的に陳元輔などの福州の師匠が柔遠駅の望中楼に集って、琉球の弟子と詩のテーマを決めて詩を作ることである。師匠以外に、その友人も誘われて琉球人と詩のやり取りをすることもあった。この詩文の集会は琉球文人と中国文人の特有な活動ではなく、従来中国文人同士が友情を深めてお互いに切磋琢磨していた活動が琉球人との交流ににも拡大したものである。「作詩の会」の開催の時間から見ると、適当に選ぶわけでなく、月末、季節末、祝日と合わせて行われていたようである。このような詩文集会は師弟関係を深めるのみならず、平日の勤学人の学習成果を試す重要な手段でもあった。

第四項の交流の側面とは特定の形式がなく、福州文人と琉球文人の日常の交流であった出来事である。琉球人は柔遠駅付近の友人を訪ねに行ったが会えなかったこと、師匠と約束したが師匠は来なか

ったこと、師匠と弟子が濃い霧の中で船遊びをするというような生活中の些事などである。

本論文では陳元輔という福州の師匠を中心にして、彼と関係の深い竺天植、林潭、王登瀛について、その経歴を詳しく考証した。『枕山楼詩集』、『柳軒詩草』、『中山詩文集』に収録されている琉球人に関わる漢詩を通して中国地方志、清代史料筆記、正史文献を結び付けて、康熙年間における勤学人など琉球人の福州での勉強の様子や、生活の実体の一端を十分ではないが、明らかにし得たと考える。

付録 1

清康熙年間勤学人及び関連年表

清年號	西歴	琉球年號	人物	『那覇市史・家譜資料二』久米系の出典
康熙元年任寅	1662	尚質王 14 年		
康熙二年癸卯	1663	尚質王 15 年	蔡彬	康熙四年六月二日に帰国する。262 頁
			周国俊	康熙五年七月に帰国する。380 頁
			曽夔	康熙四年六月二日に歸國する。39 頁
康熙三年甲辰	1664	尚質王 16 年		
康熙四年乙巳	1665	尚質王 17 年		
康熙五年丙午	1666	尚質王 18 年	鄭職良	中国礼儀を学ぶ。康熙六年八月二十八日に帰国する。577 頁
康熙六年丁未	1667	尚質王 19 年		
康熙七年戊申	1668	尚質王 20 年		
康熙八年己酉	1669	尚貞王元年		
康熙九年庚戌	1670	尚貞王 2 年		
康熙十年辛亥	1671	尚貞王 3 年		
康熙十一年壬子	1672	尚貞王 4 年		
康熙十二年癸丑	1673	尚貞王 5 年		
康熙十三年甲寅	1674	尚貞王 6 年		
康熙十四年乙卯	1675	尚貞王 7 年		
康熙十五年丙辰	1676	尚貞王 8 年		
康熙十六年丁巳	1677	尚貞王 9 年		
康熙十七年戊午	1678	尚貞王 10 年	蔡灼	康熙二十一年六月三日に帰国する。277 頁
			蔡肇功	康熙二十一年六月に帰国する。932 頁
康熙十八年己未	1679	尚貞王 11 年	蔡応瑞	地理を学ぶ、康熙二十一年に帰国する。301 頁。
康熙十九年庚申	1680	尚貞王 12 年		
康熙二十年辛酉	1681	尚貞王 13 年		
康熙二十一年壬戌	1682	尚貞王 14 年	鄭士綸	康熙二十四年七月十日に帰国する。671 頁
			梁津	康熙二十七年五月二十八日に帰国する。814 頁
			林謙	康熙二十五年五月に帰国する。923 頁
康熙二十二年癸亥	1683	尚貞王 15 年	程順則	康熙二十六年五月十日に帰国する。546 頁
康熙二十三年甲子	1684	尚貞王 16 年	金浩然	康熙二十八年に帰国する。77 頁
			陳其洙	康熙二十八年五月二十日に帰国する。460 頁
康熙二十四年乙丑	1685	尚貞王 17 年	魏士哲	康熙二十六年に帰国する。25 頁
			梁鏞	康熙二十九六月十日に帰国する。768 頁
康熙二十五年丙寅	1686	尚貞王 18 年		
康熙二十六年丁卯	1687	尚貞王 19 年		

康熙二十七年戊辰	1688	尚貞王 20 年	周新命 魏士哲	康熙三十四年歸國 381 頁 補唇術を学ぶ。康熙二十八年五月二十日歸國 26 頁
康熙二十八年己巳	1689	尚貞王 21 年	阮璋	康熙三十一年六月三日に帰国する。158 頁
康熙二十九年庚午	1690	尚貞王 22 年	蔡耀	康熙三十一年に福州で病死。340 頁
康熙三十年辛未	1691	尚貞王 23 年	程順性	康熙三十四年六月十七日に帰国する。559 頁
康熙三十一年壬申	1692	尚貞王 24 年	陳其湘	康熙三十六年五月二十八日歸國する。470 頁
			毛士丰	康熙三十六年五月二十八日に帰国する。711 頁
康熙三十二年癸酉	1693	尚貞王 25 年	紅永琪	康熙三十八年七月五日に帰国する。205 頁
康熙三十三年甲戌	1694	尚貞王 26 年		
康熙三十四年乙亥	1695	尚貞王 27 年	蔡文湘	康熙三十六年六月二日に帰国する。309 頁
康熙三十五年丙子	1696	尚貞王 28 年		
康熙三十六年丁丑	1697	尚貞王 29 年	鄭士綬	康熙四十二年六月七日に帰国する。677 頁
康熙三十七年戊寅	1698	尚貞王 30 年	阮瓚	康熙四十三年七月十九日に帰国する。160 頁
康熙三十八年巳卯	1699	尚貞王 31 年	金簡	康熙四十一年六月十二日に帰国するが十五日に遭難した。104 頁
			毛士弘	康熙四十一年二月に病死する。711 頁
			林天材	康熙四十一年六月に帰国するが海難で遭難した。924 頁
康熙三十九年庚辰	1700	尚貞王 32 年	梁炯	康熙四十一年六月十二日に帰国するが海難で遭難した。803 頁
康熙四十年辛巳	1701	尚貞王 33 年		
康熙四十一年壬午	1702	尚貞王 34 年	鄭士紳	康熙四十六年七月十九日に帰国する。687 頁
康熙四十二年癸未	1703	尚貞王 35 年	紅永祚	康熙四十六年七月十九日に帰国する。206 頁
康熙四十三年甲申	1704	尚貞王 36 年		
康熙四十四年乙酉	1705	尚貞王 37 年		
康熙四十五年丙戌	1706	尚貞王 38 年	孫廷璽	康熙四十七年六月二日に帰国する。419 頁
			鄭國棟	康熙四十八年六月に帰国するが海難で遭難した。606 頁

康熙四十六年丁亥	1707	尚貞王 39 年	魏鸞	康熙四十九年に帰国する。30 頁
康熙四十七年戊子	1708	尚貞王 40 年	紅士顯	康熙五十一年八月五日歸國 207 頁
			陳得隆	康熙五十一年に帰国する。493 頁
			蔡溫	風水を学ぶ。康熙四十九年に帰国する。366 頁
康熙四十八年己丑	1709	尚貞王 41 年		
康熙四十九年庚寅	1710	尚益王元年	梁得志	康熙五十四年七月二十五日に帰国する。833 頁
			林宗璉	康熙五十一年八月五日に帰国する。861 頁
康熙五十年辛卯	1711	尚益王 2 年	鄭儀	學相法 579 頁
康熙五十一年壬辰	1712	尚敬王元年	蔡垣	康熙五十五年七月七日に帰国する。265 頁
康熙五十二年癸巳	1713	尚敬王 2 年		
康熙五十三年甲午	1714	尚敬王 3 年		
康熙五十四年乙未	1715	尚敬王 4 年	金蘭	康熙五十八年五月二十九日に帰国する。81 頁
			金振	康熙五十七年八月初九に帰国する。81 頁
康熙五十五年丙申	1716	尚敬王 5 年	蔡世培	康熙五十八年五月二十二日歸國 280 頁
			蔡墉	康熙五十八年に帰国する。341 頁
			孫有臨	康熙五十八年五月二十九日に帰国する。410 頁
			梁鼎	康熙五十八年に帰国する。782 頁
康熙五十六年丁酉	1717	尚敬王 6 年	王裕之	康熙五十八に帰国する。2 頁
康熙五十七年戊戌	1718	尚敬王 7 年	鄭士綱	康熙六十年六月十日に帰国する。680 頁
康熙五十八年己亥	1719	尚敬王 8 年		
康熙五十九年庚子	1720	尚敬王 9 年	金鏗	雍正元年六月に帰国する。116 頁
			鄭秉哲	康熙六十一年六月二十三に帰国する。619 頁
康熙六十年辛丑	1721	尚敬王 10 年		
康熙六十一年壬寅	1722	尚敬王 11 年		

付録 2

陳元輔年譜及び関連資料				
年號	干支	西歴	年齢	事跡
明崇禎十年	丁丑	1637 年		陳元輔の先輩、友人である竺天植（字鏡筠）がうまれる。祖籍は江蘇廣陵（揚州）である。竺天植の父は福建に官

				職につくために福州に定住する。(『枕山楼文集』の「癖耽集序」』より)。
陳元輔の友人林潭に関して以下の史料がある。 林潭字二恥，高詳里黄石人。崇禎末諸生。明亡，棄舉子業，攜家隱大象山。草寇大疤掌作亂，盡室被擄。妻陳氏，有殊色，不受辱，罵賊寸磔死。潭誓不再娶，寄居文殊寺僧房，以終其身，自號二恥者恥，恥不忠不孝也。著『二恥斎集』見『福建藝文志』『唐峰記略』。(『長楽六里志』巻七「人物上十一隠逸」)（李永選 撰『長楽六里志』福建省地図出版社　1989 年 3 月第一版　134 頁）				
清順治元年	甲申	1644 年		清軍が山海関に入り、北京を占領して清朝が建立する。
清順治二年	丙戌	1645 年		
清順治三年	丙戌	1646 年		
清順治四年	丁亥	1647 年		
清順治五年	戊子	1648 年		
清順治六年	乙丑	1649 年		
清順治七年	庚寅	1650 年		
清順治八年	辛卯	1651 年		
清順治九年	壬辰	1652 年		
清順治十年	癸己	1653 年		
清順治十一年	甲午	1654 年		宋衡（號灊川）誕生、後に程順則と出会った人物である。（注：宋衡、字は伊平、號は嵩南、康熙戊午郷試第一を取って、乙丑成進士となる。翰林院庶吉士に選ばれ、編修歴侍讀學士に補される。（光緒『廬江縣志』より）
清順治十二年	乙未	1655 年	0 歳	陳元輔誕生。？
清順治十三年	丙申	1656 年	1 歳	
清順治十四年	丁酉	1657 年	2 歳	
清順治十五年	戊戌	1658 年	3 歳	
清順治十六年	己亥	1659 年	4 歳	
清順治十七年	庚子	1660 年	5 歳	王登瀛誕生。？
清順治十八年	辛丑	1661 年	6 歳	
清康熙元年	壬寅	1662 年	7 歳	
清康熙二年	癸卯	1663 年	8 歳	程順則誕生。
清康熙三年	甲辰	1664 年	9 歳	陳元輔は竺天植と知り合う。その時、竺天植 27 歳、陳元輔 10 歳。
清康熙四年	乙巳	1665 年	10 歳	陳元輔は曾沂（字子浴）と知り合う。（注：(『竹間十日話』に「康熙間，蔣衡、張鉉、曾孫瀾、陳潤、陳登禧、黄元埈、蕭楚、鍾元聲、曾沂、林侗、林鼎復、鄭秉宦十二人具能詩，時稱十二生。曾沂，字子浴，士甲弟，侯官布衣，少豁達，無心仕進，攜琴劍浮章江，泛彭蠡、洞庭，遨遊呉楚，著有『潛園集』」と記す。）
清康熙五年	丙午	1666 年	11 歳	
清康熙六年	丁未	1667 年	12 歳	竺天植はこの年、30 歳で塾師を務め始める。
清康熙七年	戊申	1668 年	13 歳	
清康熙八年	巳酉	1669 年	14 歳	
清康熙九年	庚戌	1670 年	15 歳	陳元輔は林潭と知り合う。陳元輔 15 歳。

				林麟焻が進士に選ばれる。
清康熙十年	辛亥	1671 年	16 歳	陳元輔は王登瀛と知り合う。林潭は王登瀛と知り合う。王登瀛 12 歳か。
清康熙十一年	壬子	1672 年	17 歳	陳元輔は壬子科郷試に参加する。合格せず。
清康熙十二年	癸丑	1673 年	18 歳	10 月、呉三桂が雲南で造反する。
清康熙十三年	甲寅	1674 年	19 歳	3 月 24 日、靖南王耿精忠が福州で造反する。軍を遣わして浙江省を攻める。同年、康熙帝は康親王を奉命大將軍に命じ、さらに固山貝子傅拉塔を寧海將軍に命じ、満州軍を率いて耿精忠を討伐させる。 琉球の久米村で孔子廟を建てる。
清康熙十四年	乙卯	1675 年	20 歳	
清康熙十五年	丙辰	1676 年	21 歳	2 月、尚之信が奪父の兵權を奪い、廣東で造反する。 冬十月、耿精忠は清に投降する。奉命大將軍康親王傑書、寧海將軍固山貝子富喇塔が清軍を率いて福州城に入る。11 月台湾鄭経は福州を犯し、都統喇哈達は鄭経に敗れる。11 月寧海將軍富喇塔は軍中、病死。喇哈達は寧海將軍に昇任する。同年、陳元輔は喇哈達の軍幕に入る。

拉哈達（喇哈達）に関して以下の史料がある。

鈕祜錄氏滿洲鑲黃旗人車爾格（徹爾格）第五子。順治間，以侍衛襲其兄法固達三等阿達哈哈番（輕車都尉）世職。恩詔累進一等，授兵部督捕侍郎，擢工部尚書，議政大臣。康熙三年授鑲黃旗滿洲都統。康熙十三年呉三桂叛授鎮東將軍駐防兗州。甫至，而耿精忠叛，犯浙江；詔往署杭州將軍，與平南將軍賚塔、總督李之芳共籌防禦。賊窺金華，遣副都統沃申、副將陳世凱等擊卻之；複犯台州，寧波、紹興皆騒動。上命康親王傑書為大將軍、貝子傅喇塔為寧海將軍，統師援浙；拉哈達以都統參贊軍務。十四年，擊處州賊，連下松陽、宣平。

十五年，從康親王徇福建；精忠降，即導我師攻鄭錦。時漳州、泉州、興化三府為錦所據，遣其將許耀以三萬人逼福州；拉哈達率師擊之，破其壘十四。其冬，傅喇塔卒於軍，授拉哈達寧海將軍。十六年，與賚塔合軍攻興化，克之；其將郭維藩以仙游降。耀奔泉州，複據以堅守；拉哈達率鋭師宵加之。漏未盡，梯入，斬耀及諸偽官；入城，撫定軍民。是時，錦連敗，還廈門；泉州、漳州二府及海澄等十縣皆複，降將四百、兵四千有奇。移師略潮州，叛將劉進忠亦降；乃還守福州。

十七年，錦將劉國軒陷海澄，複犯泉州，斷萬安、江東二橋，扼長泰、同安諸隘，南北援絶，泉州幾不守；拉哈達駐漳州，詔責其不亟援海澄，趣戴罪赴泉州難。拉哈達議自長泰入，會江漲，軍阻水；侍讀學士李光地方居憂在籍，乃遣使導師出間道，自南靖道漳平、趨安溪，遂薄泉州，圍乃解。國軒築壘濱海東石，地當金門、廈門道；十八年，拉哈達遣沃申攻克之。

十九年，與巡撫呉興祚自同安至潯尾，分兵渡海；拉哈達居中，興祚自左、總兵王英自右，並趨廈門。賚塔與總督姚啓聖、提督萬正色、楊捷、總兵黄大來師來會，三面合擊，賊不能支，遂克廈門。複進攻金門，其將呉國俊等迎降；錦與國軒走歸台灣。詔召康親王還京，命拉哈達與副都統馬思文守福州。

二十一年，撤滿洲兵還京。追論失守海澄罪，部議降世職為三等，並罷官；上以拉哈達從康親王平福建有勞，留都統任。二十四年，致任。四十二年病卒，恤如制。

『清史稿列伝四十一』巻 254

清康熙十六年	丁巳	1677 年	22 歳	陳元輔は寧海將の軍幕に康熙 21 年まで務めていた。

清康熙十七年	戊午	1678 年	23 歳	3 月、呉三桂が衡州で帝を称す、8 月病死。 陳元輔は林潭の『晩香園梅詩』ために序文と注釈を付け加える。 宋衡は（廬江人）郷試第一をもって挙人となる。 蔡肇功は福州に来て暦法を学ぶ。
清康熙十八年	己未	1679 年	24 歳	
清康熙十九年	庚申	1680 年	25 歳	
清康熙二十年	辛酉	1681 年	26 歳	清軍が昆明を破り、呉世璠は自殺、三蕃の亂は終わる。 福州人任尹は蔡肇功『寒窗紀詩』のために序文を作る。
清康熙二十一年	壬戌	1682 年	27 歳	勤学鄭克敘が隨存留通事蔡鐸に随い赴閩読書する。 11 月 6 日勤学梁得濟が接貢正議大夫鄭永安に随い赴閩読書する。滞留七年。 寧海将軍喇哈達が滿洲軍を率いて北京に轍回する。
清康熙二十二年	癸亥	1683 年	28 歳	冬、陳元輔は寧海将軍幕の仕事を終えて遊歴をスタートする。江西の饒州府、南昌府、湖南の武漢、安陸府、荊門州を経て竟陵まで至る。竟陵で福州人林成璉の役所に寄宿。林成璉の詩は『中山詩文集』に一首収録。 11 月 24 日勤学程順則は謝恩紫金大夫王明佐に随い那覇より出航して 12 月 5 日福州に到着する。福州で在留四年。最初、竺天植に師事する。 6 月 23 日冊封正使王楫、副使林麟焻は五虎門より出航して 6 月 26 日那覇に到着する。11 月 24 日、那覇港より出航して帰国する。
清康熙二十三年	甲子	1684 年	29 歳	春、程順則は鄭克敘と共に進貢団に随行して北京に行く。 陳元輔が湖北への遊歴から福州に戻り竺天植を訪ね、竺天植の『癖耽集』のために序文を記する。 冬、程順則は北京より福州に戻り、竺天植の紹介を通して陳元輔に師事する。 10 月 9 日金浩然は読書習礼のために存留通事蔡炳に随行して赴閩、在留五年。 陳魯水は読書習礼のために正議大夫鄭永安に随い 12 月初七日に那霸より出航して赴閩、在留六年。
清康熙二十四年	乙丑	1685 年	30 歳	梁邦基は存留通事として使者向朝記などと共に 11 月 24 日那霸より出航し久米島で風に阻まれる。勤学梁得声が梁邦基に随い同船に乗る。 陳元輔は鄭克敘の肖像に「題鄭克敘小影」詩を題する。 7 月 10 日鄭克敘は琉球に帰る。 宋衡は進士に合格、庶吉士を授けられる。
清康熙二十五年	丙寅	1686 年	31 歳	2 月梁邦基らは順風を得て 3 月に福州に到着する。 11 月 14 日、進貢正使魏應伯、副使曽夔は官生の梁成楫、阮維新、蔡文溥、鄭秉均を連れて那覇より出航し、慶良間島で順風を得て 17 日出洋する。途中、悪天候に

				遭遇して 19 日宮古島に漂着する。 陳元輔を雇った張云翼は福建陸路提督に昇任する。康熙 27 年ごろ陳元輔は張雲翼の軍幕に入る。
張雲翼に関して以下の史料がある 張云翼　字又南，關中人。初為大理寺卿，以父抒西陲功，襲封侯爵。康熙二十五年授福建陸路提督。至則戢部伍，恤閭閻，謹斥堠，詰奸宄，萑苻屏息，兵民晏如。暇則与士大夫樽酒論文，敲棋賦詩。辛未夏旱，祈祷莫応，云翼乃命建壇于東岳祠，蔬食致斎，為文告之，復步祷于烈日中。于是雷作雲同，傾盆如注，益以霢霂数日，高下均沾，歳以丰稔。泉民争頌其功。又念岳山冢累累，貧民无埋葬之区，捐資購地以為義冢，民咸德之。所着有『式古堂詩文集』。 （『乾隆泉州府志』巻三十二 名宦志より）				
清康熙二十六年	丁卯	1687 年	32 歳	3 月 3 日、陳元輔、梁邦基、梁得聲、梁得濟、陳魯水、金浩然など烏石山を遊覧して朱熹の「石室清隠石刻」を見学する。陳元輔は「上巳仝梁本寧得聲得濟陳魯水金浩然游烏石山觀朱夫子清隠石刻」詩を作ってこの遊覧を記録する。 4 月 24 日、魏應伯らは宮古島より出航して 5 月 4 日那覇港に戻る。船を修繕して 9 月 14 日那覇から再出港して 10 月に福州に到着する。 5 月 10 日程順則は留学期を終えて琉球に帰る。 陳元輔は梁得済に「贈梁得濟」詩を送る。 9 月、張云翼は公務のために福州に出張する。これが陳元輔が張雲翼と知り合う契機か。
清康熙二十七年	戊辰	1688 年	33 歳	勤学金浩然は朝京都通事蔡應祥に従って北京に行く。 5 月 28 日、梁得濟は留学を終えて琉球に帰る 5 月 27 日、梁邦基は公事を終えて琉球に帰る。 5 月 25 日、魏応伯、曽夔ら福州より北京に赴く。陳元輔は魏応伯、曽夔に詩を作り贈別する。(「送魏牧公入貢」、「送曾益入貢」) 5 月以降、翌年の 3 月の間、陳元輔は泉州の張雲翼提督の下で幕職として働いていたか。 11 月蔡鐸は正議大夫として耳目官毛起龍とともに福州に赴く。都通事蔡応瑞も同船で福州に来る。勤学周新命も同船で福州に来て、閩に 7 年間滞在。
清康熙二十八年	己巳	1689 年	34 歳	3 月、陳元輔は曾益の『執圭堂詩草』のために跋文を作る。 5 月 20 に金浩然、陳魯水は留学を終えて琉球に帰る。魏応伯、曽夔らは進貢の任務を終え同船で琉球に帰る 5 月蔡鐸らは福州より北京に赴き、陳元輔は「送蔡聲亭入貢」を作り贈る。十月十五日に蔡鐸らは北京により福州に戻る。 11 月 2 日、程順則は接貢存留通事として福州に来る。在留 3 年間。
清康熙二十九年	庚午	1690 年	35 歳	2 月 1 日、蔡鐸らは北京より福州に戻り、5 月 20 日、五虎門より帰国する。陳元輔は蔡鐸の『觀光堂詩草』ために序文を作る。

				11 月、蔡肇功は以存留通事として福州に来る。陳元輔と初対面。
清康熙三十年	辛未	1691 年	36 歳	2 月、鄭宗圭（元烏程県令）（85 歳）は陳元輔の『枕山樓詩集』のために序文を作る。 林潭は陳元輔『枕山樓詩集』のために序文を作る。 程順則は福州で銀 25 両をもって 17 史全 1592 巻を購入して 6 月 17 日に琉球に帰る。17 史を琉球の孔子廟に寄贈する。陳元輔は程順則に「送程寵文歸中山」の十首の詩を贈る。 11 月 2 日、梁得聲は接貢存留通事として福州に赴く。勤学程順性は同船で接貢都通事に随い福州に来る。
清康斯三十一年	壬申	1692 年	37 歳	4 月、楊昌任は陳元輔『枕山樓文集』のために序文を作る。 4 月 15 日、王化純（貢生）は陳元輔『枕山樓文集』のために序文を作る。 11 月 20 陳魯水は存留通事として閩に赴く。同船に勤学毛士豊、陳其湘、都通事鄭克叙らが乗船。勤学陳魯水、毛士豊は康熙 36 年 5 月 28 日に学業を終えて琉球に帰る 林潭は陳元輔の「江樓秋日懐中山程寵文」の五首詩に注を付け加えて序文を作る。 宋衡は授翰林院編修を授けられた。
清康熙三十二年	癸酉	1693 年	38 歳	2 月、竺天植（55 歳）は周新命の『翠雲樓詩箋』のために序文を作る。 6 月 10 都通事鄭克敘は福州より北京に赴き、9 月 1 に到着する。 6 月 27 日存留通事梁得聲は歸國する。 秋、王登瀛（約 30 歳）は江西省の郷試を受験。福州柔遠駅で琉球人の師匠を務め始める。 11 月 1 日、勤学紅爾吉は都通事毛文善、存留通事金浩然に随い福州に赴く。
清康熙三十三年	甲戌	1694 年	39 歳	2 月 15 日存留通事金浩然、福州に到着する。 林潭は王登瀛の『柔遠駅草』のために序文を作る。王登瀛は柔遠駅で紅爾吉、程素文、毛士豊らを教える。楼西十景、楼東十景の 20 首詩を作り、『柔遠駅草』となる。 5 月 19 日に存留通事陳魯の帰国前、王登瀛が「送陳魯水」を送る。6 月 17 日、陳魯水は琉球で病死。後に王登瀛は陳魯水のために「遥挽陳魯水」を作り弔う。 閏 5 月 29 日、都通事鄭克敘は琉球に帰る。王登瀛は「送鄭克敘歸中山」を作り贈別する。 11 月、蔡応瑞は正議大夫として福州に来る。同船で息子である蔡天水も来る。 林麟焻は貴州學政に昇任する。
清康熙三十四	乙亥	1695 年	40 歳	蔡応瑞が北京に赴く前、王登瀛が「送蔡祚菴入貢」を

年				作る。程順性は耳目官翁敬德に従い北京に赴く。王登瀛が「送程素文鄭克文入都」を贈る。 6 月 11 日存留通事金浩然は帰国する。帰国前、王登瀛が「送金浩然歸中山」を贈る。勤学周新命は同船で帰国する。王登瀛が「送周新命」を贈る。立秋後の二日、王登瀛は蔡天水らを教授する際、「立秋後二日作蔡天山樓坐雨得青字」を作る。
清康熙三十五年	丙子	1696 年	41 歳	春、蔡応瑞は北京より福州に帰る。帰国前、王登瀛は菊図を描いて贈る。 6 月 17 日、勤学程順則は帰国する。 11 月 21 日程順則は都通事として耳目官毛天相、正議大夫鄭弘良と共に再度福州に赴く。同船で蔡肇功は在船通事として、梁得声が接貢存留通事として福州に来る。 宋衡は雲南郷試總裁官を授けられた。
清康熙三十六年	丁丑	1697 年	42 歳	5 月 24 日、程順則は福州より出発して 8 月 24 日北京に着く。淮安で程順則は雲南郷試を司り終えて北京に戻る途中の宋衡と出会う。 勤学毛士豊、陳其湘は歸國する。 陳元輔の父が亡くなり、陳元輔は訃報を琉球の梁邦基、梁津らに伝える。
清康熙三十七年	戊寅	1698 年	43 歳	正月 15 日夜に、陳元輔、程順則は柔遠駅で集い、程順則「戊寅元夕陳昌其夫子設鐸雪堂紀喜」を作る。 程順則・楊丹嚴・毛允和・鄭克文・陳楚水・蔡天水らが出資し、陳元輔の『枕山樓課兒詩話』を出版する。6 月 7 日、程順則は帰国する。陳元輔は排律一首を贈る。この時の陳元輔は候補縣丞に授けられたか。程順則の『雪堂燕遊草』が成立。 陳元輔は程順則に琉球の漢詩を採集して『中山詩選』を編纂することを提案する。
清康熙三十八年	乙卯	1699 年	44 歳	7 月 5 日、紅爾吉は歸國する。
清康熙三十九年	庚辰	1700 年	45 歳	秋のある夜に、恥光上人・陳元輔・蔡文溥と共に柔遠駅で月見をし、詩を詠唱する。蔡文溥「喜恥光上人同陳昌其王邦菴兩先生過柔遠驛待月用恥上人原韻」を作る。
清康熙四十年	辛巳	1701 年	46 歳	
清康熙四十一年	壬午	1702 年	47 歳	
清康熙四十二年	癸未	1703 年	48 歳	
清康熙四十三年	甲申	1704 年	49 歳	11 月 24 日、蔡肇功は正議大夫として福州に来る。

清康熙四十四年	乙酉	1705 年	50 歳	
清康熙四十五年	丙戌	1706 年	51 歳	11 月 23 日、正議大夫程順則は同耳目官馬元勳とともに閩に赴く
清康熙四十六年	丁亥	1707 年	52 歳	7 月 12 日、程順則は福州より出発して 10 月 26 日に北京に着く
清康熙四十七年	戊子	1708 年	53 歳	5 月、陳元輔は程搏萬の『焚余稿』、『指南廣義』のために序文を作る。 3 月 8 日程順則は北京より福州に戻る。5 月 22 日に琉球に帰る。 竺天植は程氏本『六諭衍義』のために序文を作る。 11 月 3 日に曾歴は小船通事として福州に来る。
清康熙四十八年	乙丑	1709 年	54 歳？	1709 年 6 月 30 日に曽暦が帰国する。 1711 年前後、陳元輔逝去。 1710 年に久米村に明倫堂を建てる。
清康熙四十九年	庚辰	1710 年	55 歳？	
康熙五十年	辛卯	1711	56 歳？	
康熙四十九年～康熙六十年	康熙 52 年、薩摩詩人相良玉山の『梅花百詠』を琉球から福州に託送。王登瀛は序文を作る。 康熙 60 年、王登瀛は『中山詩文集』のために序文を作る。この年に『中山詩文集』成立。			
雍正元年	癸卯	1723 年		
雍正二年	甲辰	1724 年		
雍正三年	乙巳	1725 年		王登瀛は蔡文溥『四本堂詩文集』のために序文を作る。 正議大夫曾歴は福州で『枕山樓課兒詩話』を再出版する。
雍正七年	巳酉	1729 年		宋衡逝去。
雍正十二年	乙卯	1735 年		程順則逝去。

参考文献（出版順）

【文学資料】

清・陳元輔『枕山楼課児詩話』雍正 3 年（1725）　国立公文書館内学文庫所蔵　漢書類 11516 號
清・陳元輔『枕山楼詩集』康熙 30 年（1691）刻本　国立公文書館内学文庫所蔵　漢 10894
清・陳元輔『枕山楼文集』康熙 31 年（1692）刻本　国立公文書館内学文庫所蔵　漢 10894
清・王登瀛『柔遠駅草』康熙 33 年（1694）序刊本　国立公文書館内学文庫所蔵　漢書類 10895 號
清・陳元輔『枕山楼課児詩話』　皇都書鋪、英華堂出版　1739 年
潘相『琉球入学見聞録』乾隆 29 年（1764）序刊本　汲古書院（早稲田大学所蔵請求記号ル 0404763）
清・林潭著陳元輔注『晩香園梅詩』1855 玉池唫榭・盤谷書院出版　東京図書館蔵、漢書門、詩賦類 160 函 10 架 7 號
唐・李白『李太白集』第 6 册（王雲五編『萬有文庫』第一集収録　商務印書館　1929 年）
晋・劉義慶編『世説新語』巻 2（『萬有文庫』第二集収録　商務印書館　1929 年）
呂留良、呉之振、呉自牧選、李宣龔校『宋詩鈔』第 14 册　商務印書館　1934 年）
仇兆鰲註『杜少陵集詳註』巻 2　商務印書館　1934 年
清・趙翼『甌北詩鈔』　商務印書館　1936 年
清・蘅塘退士選『唐詩三百首』　世界書局　1936 年
漢・劉向編『楚辭』巻 8（王雲五編　『叢書集成初編』収錄　商務印書館 1936 年）
唐・柳宗元『柳宗元全集』上册　上海中央書店　1936 年
韓愈『韓昌黎集』第 2 册　上海商務印書館　1937 年
唐・孟浩然『孟浩然詩』（王雲五、朱經農主編『學生國學叢書』）商務印書館　1948 年
范允何編『杜甫詩選』　經緯書局　1954 年
清・沈德潜『清詩別裁集』　中華書局　1975 年
唐・孟郊『孟東野詩集』巻 3（『景印文淵閣四庫全書』第 1078 冊収録 台灣商務印書館　1976 年
蕭統譔、李善注『文選』巻 13、巻 16、（『景印文淵閣四庫全書』第 1329 冊収録 台灣商務印書館 1976 年）
『御定全唐詩』巻 128、巻 143、巻 167、巻 245、巻 784、（『景印文淵閣四庫全書』集部　台灣商務印書館 1976 年）
清・曹寅編『全唐詩』巻 65、巻 156、巻 177、巻 184、巻 222、巻 342、巻 352 中華書局出版社 1979 年
禄欽立校注『陶淵明集』　中華書局出版社　1979 年
清・孫枝蔚『漑堂集』中　上海古籍出版社　1979 年
唐圭章編『全宋詞』第三冊　中華書局　1980 年
清・袁枚著 郭紹虞 羅根澤主編『隨園詩話』補遺巻六　人民文学出版社　1982 年
清・銭謙益『列朝詩集小伝』　上海古籍出版社　1983 年
厳羽著、郭紹虞校釋『滄浪詩話校釋』　人民文学出版社　1983 年
宋・周密『癸辛雑識前集』（『景印文淵閣是庫全書』第 1040 冊収録　台灣商務印書館　1986 年
清・方玉潤撰『詩経原始』中華書局 1986 年
王友懐『王維詩選注』陝西人民出版社 1988 年
晋・王嘉撰 梁・蕭綺錄　齊治平校注『拾遺記』 中華書局出版社 1988 年
清・董誥等輯『欽定全唐文』巻 608（『續修四庫全書』1644 集部・總集類収録　上海古籍出版社 1995

年)
清・鄭王臣『莆風清籟集』巻 39（『四庫全書存目叢刊』集部第 411 冊　齊魯書社　1997 年）
上里賢一校訂『中山詩文集』　九州大学出版会　1998 年
清・嚴可均輯『全上古三代秦漢三國六朝文』巻 22　商務印書館　1999 年
清・張履祥『楊園先生全集』巻 18　中華書局　2002 年
蔡文溥『四本堂詩文集』雍正 3 年版 榕樹書林　2003 年影印版刊行
趙文楷 『石柏山房詩存』巻 5（『國家圖書館藏琉球資料三編』＜下＞収録北京図書館出版社 2006 年）
清・玄燁『御選唐詩』（『景印文淵閣全書・集部』第 1446 冊収録　台湾商務印書館　2008 年
清・愛新覺羅・玄燁『御選唐詩』（『景印文淵閣全書・集部』第 1446 冊収録　台湾商務印書館　2008 年）
清・呉暻『西齋集』巻 2（『清代詩文集彙編』第 209 冊収録　上海古籍出版社　2010 年）
清・張雲翼『式古堂集』（『清代詩文集彙編』第 176 冊収録　上海古籍出版社　2010 年）
蔡肇功『寒窗紀事』（傳世漢文琉球文獻輯稿第一輯 第 23 冊收録　鷺江出版社 2012 年）

【正史・文献】
清・孔毓圻等撰『幸魯盛典』巻 31 第 7 冊　広雅書局 1899 年
漢・司馬遷『史記』巻 55、巻 63、中華書局 1963 年
漢・班固『漢書』巻 54、巻 72、巻 88、巻 92、中華書局出版社　1964 年
晋・陳壽『三国志』巻 7、巻 19、中華書局出版社　1964 年
南朝宋・范曄『後漢書』巻 53、巻 60、巻 66、巻 79、80 巻、巻 82、巻 83、巻 92、巻 113、中華書局出版社　1965 年
『康熙朝大清会典』巻 73、『近代中国資料叢刊』第七二輯　台湾文海出版社　1966 年
清・張廷玉等纂『明史』巻 120、巻 286、巻 309　中華書局出版社　1974 年
唐・房玄齡『晉書』巻 36、巻 92　中華書局出版社　1974 年
宋・欧阳修 宋祁譔『新唐書』巻 98 巻 319 中華書局　1975 年
唐・李延壽撰『南史』 巻 59 、中華書局 1975 年
趙爾巽撰『清史稿』巻 6、巻 254、巻 267、巻 484、中華書局出版社 1977 年
元・脱脱譔『宋史』巻 319、巻 429、巻 434、巻 457、巻 428 巻 492、中華書局出版社 1977 年
『清世祖章皇帝実録』巻 32 、中華書局出版社　1985 年
『清聖祖仁皇帝実録』巻 28、巻 32、巻 121、巻 150、巻 172、巻 223、中華書局　1985 年
『清会典事例』巻 510、中華書局出版社 1991 年
『皇朝通典』巻 48（『景印文淵閣四庫全書』史部 400 政書類第 642 冊収録 台灣商務印書館　2008 年）
愛新覺羅・胤禛『世宗憲皇帝朱批諭旨』巻 20（『欽定四庫全書薈要・史部』収録吉林出版社 2015 年）

【清代史料筆記】
徐珂『清稗類鈔』第 45 冊　商務印書館　1917 年
清・況周頤『續梅廬叢話』　中華書局出版社　1956 年
丁傳靖『張文貞公年譜』（『近代中国史料叢刊二輯』所収　文海出版社　1966 年）
清・王士禎『香祖筆記』　上海古籍出版社　1982 年
清・王士禎『池北偶談』　中華書局　1982 年

清・陳康祺『郎潛紀聞初筆二筆三筆』上冊、巻 3　中華書局出版社 1984 年
『寧海將軍固山貝子功績錄』(『欽定四庫全書・史部七』影印文淵閣四庫全書本台湾商務印書館 1986 年)
清・陳鴻、陳邦賢『清初莆変小乗』(中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録　中華書局出版　1980 年)
海外散人『榕城記聞』(中国社会科学院歴史研究所清史研究室編『清史資料第一輯』収録　中華書局出版　1980 年)
清・皋虞鄰『閩難記』(『叢書集成續編』第 280 冊收錄　新文丰出版公司 1989 年)
清・張庚『国朝画徵録』巻中 (『續修四庫全書』1067 子部・藝術類収録　上海古籍出版社 1995 年)
清・陳怡山『海濱外史』(四川大学図書館編『中国野史集成』第 49 冊　巴蜀書社　2000 年)
清・計六奇『明季北略』巻 14、中華書局　1984 年

【中国琉球関係史料】
謝傑『琉球録撮要補遺』(台湾文献叢刊第 287 種　台湾銀行経済研究室印刷　1972 年)
蔡鐸等編『中山世譜』巻 8 (伊波普猷編『琉球史料叢書』収録　東京美術出版　1972 年)
清・徐葆光『中山伝信録』下　沖縄県立図書館　1975 年
鄭秉哲、蔡宏謨『球陽』原文編　球陽研究会編　角川書店　1978 年
那覇市企画部市史編集室『那覇市史』資料篇第一巻 6「家譜資料二」久米系　那覇市役所　1980 年
那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料編第 1 巻 7「家譜資料三」首里系　那覇市役所　1980 年
那覇市経済文化部歴史資料室『那覇市史・近世那覇関係資料・琉球資料漢文編』資料篇第 1 巻 9 那覇市役所　1988 年
沖縄県立図書館史料編集室『校訂本歴代宝案』第一冊　那覇教育委員会、ひるぎ社　1992 年
『名護親方程順則資料集・1・人物・伝記編』名護市史叢書 11 2005 年 (第 3 版)
程順則輯『指南広義』(『伝世漢文琉球文献輯稿』第 1 輯第 22 冊　鷺江出版社　2012 年)

【中国地方志】
＜福建地方志＞
清・張懋建『乾隆長泰県志』 長泰県教育局　1932 年
清・周凱修、凌翰纂『厦門志』(『中国方志叢書』第 80 号　所収) 台湾成文出版社　1967 年
清・汪大經修、廖必奇『福建省莆田縣志』(『中國方志叢書』＜華東地方＞所收) 成文出版社　1968 年)
鄭光策『閩政領要』(清・孫爾修陳寿祺纂准道光『福建通志』巻 52 収録 華文書局　1969 年)
李永選 撰『長楽六里志』福建省地図出版社　1989 年第一版
佚名『萬曆福州府志』(『日本藏中國罕見地方志叢刊』収録　書目文獻出版社　1990 年)
明・黄仲昭『八閩通志』福建省地方志編纂委委会主編　福建人民出版社出版　1991 年
孟昭涵『民国長楽県志』(『中国地方志集成・福建府縣志集』第 21 冊収録上海書店出版社　2000 年)
清・胡啓植『乾隆仙遊県志』(『中国地方府県志集成・福建府県志輯』第 18 冊 巴蜀出版社 2000 年)
陳衍纂『民国閩候県志』1933 年本 (『中国地方志集成・福建府縣志集』第 2 冊収録　上海書店出版社 2000 年)

謝道承修纂『福建通志』乾隆 2 年刊（上海書店出版社編『中国地方府県志集成・湖北府県志輯』第冊収録　上海書店出版社　2000 年）
清・徐景熹『乾隆福州府志』(『中国地方志集成・福建府縣志集』上海書店出版社　2000 年)
金章等修纂『民国永泰県志』(『中国地方志集成・福建府縣志集』第 19 号所收）上海書店出版社　2000 年)
清・懷蔭布修 郭賡武・黄任纂『泉州府志』乾隆 28 年刊本（『中国地方府県志集成・福建府県志輯』第 22 冊上海書店出版社　2000 年）
清・陳瑛等修、叶廷推等纂『乾隆海澄縣志』(『中国方志集成・福建府県志輯』30 号所收　上海書店出版社　2000 年）
郭柏蒼『竹間十日話』福州地方志編纂委員會整理（福州）海風出版社 2001 年
郭柏蒼『烏石山志』福州地方志編纂委員會整理（福州）海風出版社 2001 年
林芾庭輯 『榕城考古略』福州地方志委員會 2001 年
清・顧祖禹『讀史方與紀要・福建』中華書局出版社 2005 年
＜江蘇地方志＞
清・劉寶南『宝応県図経』道光 28 年刊本（『中国方誌叢刊・華中地方』第 30 号所収　台湾成文出版社 1966 年）
羅愫、杭世駿修『乾隆烏程縣志』卷 4（台湾成文出版社編集『中國方志叢書』、華中地方、第 596 號収録　台湾成文出版社 1966 年）
清・梁園棣修、鄭之僑趙彦兪『重修興化縣志』(『中國地方志集成・江蘇府縣志輯』第 48 冊収録　江蘇古籍出版社 1991 年）
清・王錫元『盱眙県志』光緒 17 年刊本（『中国地方志集成・江蘇府縣志集』58 号所收）上海書店出版社 2000 年）
清・盧思誠、馮壽鏡等修纂『光緒江陰県志』(『中国地方志集成・江蘇府縣志集』第 25 号所收）上 30. 海書店出版社　2000 年）
＜湖北地方志＞
清・胡翼修、章鑣纂 乾隆三十年『天門縣志』 1922 年 石印本
清・靖道謨纂『雲南通志』(『景印文淵閣四庫全書』史部 237 地理類　所收）台湾商務印書館 1975 年）
清・楊鉅纂『光緒沔陽州志』(『中国地方志集成・湖北府県志集』上海書店出版社 2000 年）
清・程光第等纂『同治隕西縣志』(『中國地方志集成・湖北府縣志輯』第 62 冊　上海書店出版社 2006 年）
＜江西地方志＞
同治十二年刊本『玉山県志』(『中国方志叢書』華中地方第 274 號 成文出版社印行 2007 年）
＜安徽地方志＞
清・錢嶸、盧鈺、兪燮奎『廬江縣志』清光緒 21（1885）年刻本（『中国地方志集成・安徽府縣志集』第 9 号収録　上海書店出版社　2000 年）
＜河北地方志＞
清・袁文郃『乾隆隆平県志』(『中国地方志集成・河北府縣志集』第 68 号所收）上海書店出版社　2000 年）
陶宗奇纂『民國昌黎県志』(『中國地方志集成・河北府縣志輯』第 20 冊　上海書店出版社　2006 年）
清・楊寬、喬已百『康熙臨城縣志』(『中國地方志集・ 河北府縣志輯』71 号所收）上海書店出版社 2006

年)
＜広東地方志＞
清・阮元修 陳昌齊修『道光廣東通志』巻 256（『續修四庫全書』674 史部・地理類　上海古籍出版社 2002 年）

【学術著作・報告書】
伊波普猷『古琉球』　郷土研究社　1922 年第三版
朱維幹『福建史稿』　福建教育出版社　1986 年
田名真之「近世久米村の成立と展開」（『新琉球史・近世篇上』　琉球新報社　1989 年
銭鐘書『談芸録』（訂補本）中華書局　1993 年
池宮正治・小渡清孝・田名真之『久米村―歴史と人物』　ひるぎ社　1993 年
眞境名安興『沖縄教育史要』（『眞境名安興全集』第 2 巻収録　琉球新報社　1993 年）
眞境名安興『眞境名安興全集』第 4 巻　琉球新報社　1993 年
白新良『中国古代書院発展史』　天津大学出版社　1995 年
『日本文学史』第 15 巻「琉球・沖縄の文学」　1996 年
『学官話』（瀬戸口律子　『学官話全訳』所収）　榕樹書林 2003 年
近藤秀実『波臣画派』　吉林美術出版社　2003 年
劉海峰、李兵『中国科挙史』　上海東方出版センター　2004 年
蔣寅 撰『清詩話考』　中華書局出版　2005 年
曽煥棋『清代冊封使の研究』　榕樹書林　2005 年
編集代表　陳碩炫『＜人の移動と２１世紀のグローバル社会＞中国・台湾調査班調査報告書―中国北京における琉球関係史跡調査報告書』　2010 年
陳洪　張峰屹編『中国古代文学史』北京大学出版社　2011 年
賴正維 『清代中琉关系研究』　海洋出版社　2011 年
深澤秋人『近世琉球中国交流史の研究』　榕樹書林　2011 年 9 月
謝必振・朱徳蘭・赤嶺守編『中国と琉球人の移動を探る―明清時代を中心としたデータの構築と研究』彩流社　2013 年
夏敏『明清中国与琉球文学関係考』社会科学文献出版社　2017 年
賴正維 『福州與琉球』 福建人民出版社　2018 年
上里賢一『久米村と漢詩』　一般財団法人久米崇聖会　2018 年

【学術論文】
胡芸「禹之鼎年譜」（『朶雲』第三集収録 上海動画出版社、1982 年）
陳支平「清代前期福建的非正常米価」（『中国社会経済史研究』厦門大学歴史研究所　1988 年第 3 期）
沖縄教育委員会『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム研究発表要旨』 沖縄教育委員会出版　1992 年
上里賢一「陳元輔の漢詩と琉球―『枕山楼詩集』を中心に」『歴代宝案研究』第 10 号、沖縄県教育委員会、1999 年 3 月
蒋寅「東瀛讀書記」（『文献』文献雑誌社 1999 年第 01 号）
呉承学　「文字遊戯與漢字詩学」『学術研究』7 月刊所収　広東省社会科学連合会　2000 年

方寶川「福建師範大學圖書館藏中琉關係史料述略」（第八回中琉歴史關係國際學術會議論文集 2001 年 3 月）
上里賢一「王登瀛『柔遠驛草』と琉球」（『琉球・中国交渉に関するシンボジウム論文集』第六回　沖縄教育委員会　2002 年 10 月）
池田温「从『梅花百咏』看日中文学交流』（『浙江大学学報（人文社会科学版）』2003 年第 5 期に掲載）
林少駿「清代琉球來華留学生之研究」（福建師範大學碩士學位論文 2003 年 4 月）
上里賢一「程順則の父と子・程順則の情愛と苦悩」（日本東洋文化論集　琉球大学法文学部　2006 年 3 月）
蒋寅、「清初詩壇対明代詩学的反思」、『文学遺産』2006 年第 2 号
徐斌「從琉球官話看琉球人在閩的學習生活」（辛德蘭主編『第十届中琉歴史関係学術会議論文集』に所収）中琉文化経済学会　2007 年 5 月
呉瓊「明末清初的文学嬗變」上海師範大学古代文学専攻博士論文 2012 年 3 月
申国昌「明清塾師の日常生活與教学活動」『教育研究』に所収　中央教育研究所　2012 年第 6 号
王学深「凌辱斯文與清代生員群体反抗―以罷考為中心」（『清史研究』中国人民大学清史研究所 2016 年 2 月）
黄裔「琉球漢詩七探」（『第 17 回中琉歴史関係国際学術会議論文集』福建師範大学閩台研究センター 2017 年 11 月）。
呉可文「遺民詩与清初福建詩風的嬗変」（『丟草孬朶』2016 年第 2 期）
李杰玲「野湖山刊刻清詩的活動與閩人林潭的『晩香園梅詩』」（『西華大学学報（哲学社会科学版）』第 34 巻第 6 期　2015 年 11 月）
深澤秋人「清代における琉球使節の再検討―渡唐役人としての勤学人を中心に」（中国第一歴史档案館、中琉歴史関係学術研討会『第六回中琉球歴史関係研討会文集』2000 年 10 月）
高橋康夫「同楽苑とその八景」（東京）建築史学会『建築史学』2004 年 3 月号収録
錢志熙「蔡文溥與『四本堂詩集』－一位古琉球国詩人漢詩文創作」（『中国文化与典籍』教育部全国高等院校古籍整理研究工作委員会 2006 年第 2 期
胡新「明代嘉靖以前出使琉球之送行詩文述略」（陳碩炫、徐斌、謝必震主編『第十三屆中琉歴史關係國際學術會議論文集』所収　海洋出版社　2013 年 11 月）
方寶川、蘭英「明人別集散見中琉關係史料與史實鉤沉」（『第 15 回琉中歴史関係国際学術研討会論文集』所収　琉球大学国際沖縄研究所　2016 年 2 月）
黄裔「琉球漢詩七探」（『第 17 回中琉歴史関係国際学術会議論文集』福建師範大学閩台研究センター 2017 年 11 月）
季龍飛「勤学の師陳元輔の生涯について」『第 16 回中国琉球歴史関係国際学術会議論文集』福州師範大学閩台研究センター2017 年 11 月
季龍飛「福州における陳元輔の交友関係―竺天植、林潭、王登瀛を中心に」『琉球アジア文化研究』第 22 号　琉球アジア社会文化研究会　2019 年 11 月
＜学位論文＞
李艶華「歴史文化視野中的福建坊刻本」福建師範大学中国古典文献学修士論文　2005 年
陳炫碩「清代琉球使節進貢日程に関する研究」琉球大学大学院人文社会科学研究科 2008 年博士論文
遊励『清代閩籍冊封使及其著作考』福建師範大学図書館学修士論文　2010 年
呉瓊「明末清初的文学嬗變」、上海師範大学古代文学専攻博士論文　2012 年

童宏民「冊封副使徐葆光の眼光―『奉使琉球詩』の分析を中心に」　琉球大学人文社会科学研究科博士論文 2014 年
季龍飛「陳元輔と琉球人の詩文交流について―『枕山楼詩集』と『柳軒詩草』を中心に―」琉球大学大学院　人文社会科学研究科修士論文 2017
【一般書籍】
神木猶之助編『妙跡図録・漢画部』　林平次郎出版　明治 42 年（1909）
『逸話文庫』の『通俗教育志の巻』　大倉書店　明治 44 年（1911）
古典研究会『和刻本漢詩集成・補篇』第 18 輯　汲古書院　1977 年
古典研究会『和刻本漢籍隨筆集』第 20 輯　汲古書院　1978 年
李玉安等編『中藏書家辭典』湖北教育出版社 1989 年
季嘯風主編『中国書院辞典』浙江教育出版社 1996 年
『福州旧影』人民美術出版社　2000 年
侯仁之主編『北京歴史地図集』政区城市巻　文津出版社　2013 年

そのほか
明・ 王良樞輯『詩牌譜』（光緒戊子觀自得斎刊本）＜清・徐士凱輯『観自得斎叢書』＞
漢・劉向編『戦國策』商務印書館、1933 年
王先謙注『莊子集解』巻 5、巻 4、商務印書館　1933 年
呂祖謙編 『晦菴先生校正周易繫辭精義』　商務印書館出版　1935 年
逸名『三輔黄圖附補遺』巻 6（王雲五編 『叢書集成初編』收錄商、務印書館　1936 年）
明・屠隆『考槃餘事・韻牌』（王雲五編『叢書集成』所収）上海商務印書館 1937 年）
唐・張鷟『朝野僉載』巻 6（王雲五編『叢書集成初編』収録　商務印書館　1937 年）
李瀚注『蒙求集注』　商務印書館　1940 年
明・王良樞輯『詩牌譜』（萬歴刊本）（明・周履靖編『景明刻本夷門廣牘』、上海商務印書館、1940）
金开誠選註『楚辞選注』　北京出版社　1980 年
唐・張懐瓘 『書断列伝』（『景印文淵閣四庫全書』子部 118 所収　台湾商務印書館　1982 年）
清・紀昀『景印四庫全書總目』巻 194 集部第 47、台湾商務印書館　1983 年
朱権『臞仙神奇妙譜』中巻（『續修四庫全書』1092 子部・芸術類　上海古籍出版社 1995 年
元・辛文房著 、傅璇琮編『唐才子傳校箋』第 3 冊巻 3、巻 7　中華書局　2000 年
曹雪芹『紅楼梦』（中国古典名著普及文庫）　岳麓書社　2000 年
張万起、劉尚慈撰『世説新語譯注』　中華書局　2006 年
隋・顔之推『顔氏家訓』（『景印文淵閣全書・子部』第 848 冊収録、台湾商務印書館 2008 年）
漢・鄭玄（注）唐・孔穎達（正義）『礼記正義』巻 46「学記第十八」　上海古籍出版社　2008 年
清・顧炎武『日知録』巻 13（『景印文淵閣全書・子部』第 858 冊収録　台湾商務印書館 2008 年
『角川新字源』の韻目一覧表　角川書店出版社　2012 年

謝　　辞

私は琉球大学に入ってから6年目になった。多くの留日の中国学生と同じように当初、日本で何を勉強したいかでさえも分からなかった。とりあえず日本語を習得してから考えよう。私はそういう気持ちで琉球大学の科目等履修生に申し込んだ。琉球大学に入って何を勉強したいかということを考え始めた。歴史や文学がもともと好きで、これに関して勉強しようというのが最初に頭に浮かんだことだった。意識的に歴史方面の書籍を図書館の沖縄資料室で探して読んでいた。そして、沖縄は昔、琉球王国だったということを初めて知った。

私は研究計画書を書いて赤嶺守先生の研究室に行った。赤嶺先生は琉球漢詩という分野があると私に紹介し、論文集を3冊贈ってくれた。その中の『第八回琉中歴史関係国際学術会議論文集』に掲載されている方宝川先生の「福建師範大学図書館蔵中琉関係資料述略―明清文献之二」は、以降の私の研究方向を示した。清代康熙年間、福州柔遠駅で活躍していた勤学師匠陳元輔は彼の詩集が保存されており、詩集には琉球勤学と福州文人との交流の実態を反映する詩文が多い。中琉の文化交流にとって貴重な資料であると言える。しかし、陳元輔、及び関連人物について、歴史背景に関連する資料はまったくないと言えたが研究を進められるかどうか自分もわからなかった。

赤嶺先生の推薦で私は琉球漢詩を研究する平良妙子先生の下で 1 年間の研究生生活を経て琉球漢詩についての基礎を勉強した。平良先生を通して琉球漢詩の泰斗である上里賢一先生と知り合って上里先生の中国古典文学講義を聴講しながら日本の漢詩研究方法を学んだ。平良先生のゼミでレジュメの作り方、研究に対する真面目な態度などすべて基礎から勉強をスタートした。正式に、大学院に合格した後、赤嶺先生のゼミで中国琉球関係に関する知識を学んで先生のご指導で文学に歴史学的視点を加え、歴史学的手法でもって分析・考察を行うといった手法で自分の研究テーマを進めていった。修士の2年間、上里先生、赤嶺先生、平良先生のご指導をいただいて無事に修士論文を執筆し終えた。

博士課程の三年は私にとって言葉で語り尽くせない記憶である。修士の時には一人暮らしなので、自分が食えたなら一家全員飢えることがない（一人吃飽全家不餓）と言える。急に夫として、父としてさらに博士論文の研究もしなければならなかった。一時的に非常に困惑であった。この時、赤嶺先生はできるだけ私のために大学授業料の免除、文部省の奨学金をもらえるように尽力してくださった。ここで心より感謝の意を赤嶺先生に申しあげたい。すこし、経済的な負担が軽減したため、自分の研究に集中できるようになった。博士の3年目、米山記念奨学財団に採用されて月 140000 円の支援をいただいて私の経済負担は大幅に軽減された。琉球大学国際課、米山記念奨学財団に心から感謝申し上げたい。

論文の執筆段階では、豊見山和行先生から多くの示唆的なアドバイスと御指摘をいただいた。このことも、ここで謝意を表わしたい。ここに重ねて、赤嶺先生・上里先生・平良先生の格別なるご高配を賜ったことに対し、改めて心から御礼を申し上げたい。また、この3年間、私のために安定した研究環境を作ってくれた妻に感謝の意を申し上げたい。まもなく3歳になる娘が健康で順調に成長するようにと願っている。最後に7年間の歳月を過ごした沖縄と別れて上里先生、赤嶺先生の教示を心に刻み、中国に帰っても琉球漢詩の研究を中心に広く研究し続けたい。